
RAIF

kuxu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RAIF

【Nコード】

N8221Q

【作者名】

kuxu

【あらすじ】

不思議な左目を持つ主人公【長門ソラ】。

そして、謎の力【S I】。

すべてが謎に包まれながら、ソラとともに戦ってくれる仲間たち。時にはほのぼの、さらには恋の対決や、謎解き。

そして、謎の少女、【音無詩音】とソラの左目の秘密とは！！

超能力、ファンタジー小説。不定期更新ですが、どうぞ一度見てください！！

命と生活をかけた戦い。ソラの過去をしり、さらに戦いはクライマ

ツクス！！【大星集結戦争編】更新中です！！

第1章・openingーオープニングー（前書き）

はじめましてkuxuです。

初めて投稿しました。

なのでできるだけ温かい眼で読んでくれるのをせつに願います。

第1章・openingーオープニングー

・プロローグ・

ある1つの研究所で事件が起こった。その中にはある2人の血まみれの死体があった。

そして建物の入り口にはその光景をだまって見て泣いていた小学校3年生ぐらいの少年がい

た。それから7年後、その少年の物語がはじまった

第1章

ある少年は近くにある星^{せい}光^{こう}高校^{こうこう}の門を通ったその少年は髪は白光した水色で髪型は前髪の部分はもうちよつとで眼が隠れるほどで、後ろ髪は首の後ろを隠しているほどのながさであり頭上はの髪は3つぐらいにわけてハネている、背は168ぐらいで顔立ちは眼は少し細く彼が冷静だとゆうのがわかりやすいぐらいである。そして彼の眼は日本人ではありえないほど真っ赤に染まっていた。

彼の名は長^{なが}門^{かど}ソラ。

ソラが教室のに入ると、2人の男が彼を呼んでいた。

「おい長門！」

ソラの友でもある道長^{みちなが}政^{まさ}司^しが手を振っている

「おっはよ長門」

そしてもう1人の友、進藤しんとう薫。2人とも中学からの付き合いである

「2人ともおはようございます」

「聞いてくれよ長門！実はさっき可愛いこと下駄箱でぶつかっちま
つてよ！これはまるで新しい恋の予感がするぜ！」

道長の目はすごく輝いて見えたときである。

「またそんな話ですか」

ソラはあきれながら言った。

「もう朝からこんなかんじだぜ」

進藤も同じ気持ちだそうだ。

「そんなこと言ってもいいことまったくおきないからな！」

「そうですよ」

「ブー！なんだよ2人ひどいこと言っちなよな」

道長がすこし悔しそうな顔をしている。

「だっていつものことじゃないのですか」

「そうそう」

僕と進藤のダメダシは続いている。道長はクソーといいながら座つた。

「いいよなー進藤はともかく長門はモデルからいいよなー」

道長がうらやましそうにこっちを見てきた。

「ともかくとはなんだ、ともかくとは！」

進藤がツツコンでいる。

「そんなことないですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いきなり2人はだまりだした

「なんでいきなりだまるのですか？」

道長はハァーと言いながら

「やっぱりお前きずいていないのか」

――？

「ほら来たぞ。うわさをすればなんとかだ」

「うわさをすれば影ですよ、ん？」

道長が振り向いた方向を見ると。

「お、おはよう。長門君」

そこにいたのは同級生の女子の崎野秋がいた

「おはようございます」

そのまま崎野さんはダッシュで教室を出ていった。しかしそのあとすぐにチャイムがなり始め先生が教室へ入ってきた。

「よしHR始めるぞ」

ちなみに崎野さんはそのHRに遅刻した。

6時間目が終わり。放課後になった。

僕は携帯電話の画面を見た。メールが1通届いてた。

（仕事・・・ですか）

「長門。帰りどっか寄って行かないか？」

道長と進藤が話しかけてきた。

「ごめんなさいすこし用事があるので」

「あーわかったじゃあな」

「じゃあな長門」

「ええまた明日」

2人が教室を出て行った後、メールに書いてあった場所へ向かった。

約束の場所は学校から少しはなれた公園だった。そこにパトカーとある男が1人いた。

「おせえよ！」

「いや学校ですから・・・」

「あ、そうか」

・・・彼は熊田剛太^{くまだこうた}。一様刑事で僕の秘密を知る数少ない1人である。

「事件ですよ」

「ああ」

僕は熊田さんが用意したパトカーに乗りその事件がある場所へむかった。

あれから20分後とある一軒家についた。

「これが今回の事件現場だ」

パトカーから降りながら熊田 剛太は言った。

「僕をここまで連れてきたってことは必要な情報はそろっているわけですね」

ソラは少し、いいや、すごく奇妙な能力を持っている。そのため僕は時々警察の仕事を手伝っている。

「ああそつだ。だったらお前を呼ばない」

熊田はうなずきながら答えた。

「そうですよね。わかりました中へ入ってみましょうか。あ、でもその前

にこれを渡しておきますね」

「ああ、わかった」

ソラは鞆の中からスタンガンを取り出した。これは彼の能力を使うための必需品である。そしてそのスタンガンをそのまま熊田に渡し家の中へ入っていた。そのまま事件が起こったと思われる部屋に入った。

「今回も殺人事件だ」

熊田が説明を始めた。

「被害者の名前は木下^{きのした}はるか。こちらで調べた結果後頭部を強く打っている形跡があったそれ以外は傷はまったくなかった」

熊田は説明を続ける。

「日にちは5月11日火曜日。つまり昨日だな」

今日は5月12日水曜日だ。

「時刻は夜23時26分だと思われる」
「確信は？」

ソラは問いただした

「彼女は夜遅くまで仕事をしており、12時に帰ってきたと親が証言している」

「なるほどそのままお風呂や食事などをやっておけばこのぐらいの時間になりますね」

ソラが熊田の言葉をつなげた。

「これが今調べた結果だ。後この写真の人が木下はるかだ」

熊田が2枚の写真をソラに渡した。

「このも1枚の写真に写っている男性は誰ですか？」

ソラは1枚の写真を熊田に見せた。

「ああ、この人は彼女の元彼らしい」

「え？」

「名前と居場所どちらにしろ不明だ」

「はあ、わかりました。では始めましょう！」

「なあ」

熊田が不安顔で尋ねてきた

「今回もSⅠがらみなのか？」

「・・・わかりませんがそうじゃないように祈りましょう」

「ああ、そうだな」

熊田はフツといいながら笑った。

SⅠ・・・それは人間がもつ超脳力。いまだに謎の力ある。そして

僕にも同じような力がある。

「では、始めます！」

ソラは両目を閉じた。そのまま頭の中にさっきの情報を整理した。その時、熊田はさっきソラに渡されたスタンガンを最大出力にてソラにあてた。

ソラはその瞬間左目を力強く開けた。

―ターゲット・アイ目標ノ眼―発動！

キイイイイイイイイ

ソラの左目から機械のような輪かがでてきた。

―ターゲット・メモリLv0・目標ノ記憶―発動！！

キイイイイイイイイ

その時、ソラの左目は不思議な映像が映し出された。

そう、これがソラ有能力！

―ターゲット・アイ目標ノ眼およびLv0・目標ノ記憶！

―ターゲット・アイ目標ノ眼は彼の眼達人ノ眼の能力の1つであり、―ターゲット・メモリ目標ノ記憶はその技の1でもある。カンタンに言えば、目標ノ記憶は過去再生能力である

条件としては、まず過去をみるための場所に行くことと、その見るための日にちと時間とできるかぎりの情報を頭の中で整理することさらには強い電撃を当てることで初めてその力が発動するのだ。

ソラは見たいたある男が女性を襲っていた。そう、この女性が木下はるかだ。そしてこの男性はいつたい。

たしかに頭を強く木のバットと思われるもので殴られている。殴れた木下の頭から血が溢れている。

このあいだソラは何かを思い出していた。

なぜ両親ははるかさんが帰ってきた時間がわかるのになぜこの騒動にかんしてなぜ止めなかったのか。そしてさっきの証言男が入ってきたことは一言も言っていない。

ソラは自分の左目に映っている映像を見なおしてその男性を良く見てみた。

この男はある指名手配者だった。

「わかりました」

どうやら犯人がわかったようだ。ソラは熊田に告げた。

「犯人は木下 はるかさんのお母さん。いや、それに変装した服本^{ふくも}平次^{とへいじ}さんです」

「なに！服本平次で、あの連続変装殺人事件の容疑者の服本平次なのか！」

服本平次。変装が得意といわれる現在の氏名手配者だ。

「はい。さっきの証言を思い出せばおかしい所は沢山ありました親だったら自分の娘のピンチ駆けつけないのはおかしいです。はるかさんが殺される前にその両親が先に殺された。しかもその時顔はさ

つき言っていた本彼に変装していたと考えます。いや、彼がその本彼だたんですよ」

「な、なんだと！」

「多分分かれたこと知らない両親は彼を中へ入れたと考えます」

「ちよつとまた」

「なんですか？」

「なんでその両親はわざわざ家の中へ入れたんだ？」

「カンタンなことですよ彼は変装の達人と言つてもいい人ですよ。」

つまり変装しながらはるかさんと付き合つてたとおもいます」

「そうゆうことか。だからその両親は中へ入れやつたと。そしてそのスキを狙つて殺したというのか」

熊田がソラの言葉をつなげた。ソラの推理はつづいている。

「はい。多分はるかさんとは違う方法で殺したことでしょう。電気ショックとかで」

「そーゆうことか！」

「両親の叫び声をきてはるかさんは走つてそこ向かつたと思います。しかしその足音を聞いて犯人ははるかさんの元へ向かいました。そしてはるかさんの速さ＋服本の速さ＋服本の腕を振り下ろす力＆重力を考えたら1撃で疲れている女性を殺すのはたやすいことだと考えます」

そついいことか！！と言つて熊田はすぐはるか両親、もとい服本を探した。

「くそ、いない。逃げやがつたな！」

「熊田さん外にバイクが出る音が聞こえました車を出してください」
「よしわかつた」

ソラと熊田は急いで車に乗り込み、バイクを追いかけた。

「逃がしはしません!!」

といいながらソラはさっきまで袖に隠れていた赤いリストバンドを露出した。

これがソラの武器！名を「デジタル・バンド電子ノ腕輪」

デジタル・バンド
「電子ノ腕輪―帯―」ベルト

ソラのリストバンドから白い帯が相手に向かっ行った。

「捕まえた」

帯はそのまんま服本が乗っていたバイクの後ろを巻いた。ソレを確認したソラは思いっきり引っ張りながら車から出てダッシュした。

「ガン!!!」

ソラは服本の横っ腹に想いっきり蹴りを入れた福本はバイクといっしょに横になった。

「ゴホゴホ。ち、ちくしょう。俺がこんな餓鬼にやられただと」

福本はそうつぶやいているあいだ熊田が車から降りて福本に手錠を掛けた。

「福本 平次！連続殺人事件の容疑者として逮捕する」

「おつかれさま」

近くの公園。熊田はソラに1本のジュースを渡した。

「ありがとうございます」

「なあソラ。1つ聞きたいことがある」

「なんですか？」

「なぜ福本は木下　はるかを殺したんだ？」

ソラはジュースを飲みながら答えた。

「彼らが分かれた理由は木下さんが別の人が好きになりそれで木下さんは自ら別れようと言たんですよそれを福本は恨んでいたと思います」

「なんでそんなことがわかったんだ？」

「目標ノ記憶をつかつたとき福本がターゲット・メモリーへなんで俺と分かれてあんなやつと付き合った！」と、言っていました」

「なるほど。しかし今思えば福本はずいぶん逃るのが遅かったな」

「多分彼は灯台本暮らしを計画していたでしょう。しかし僕達の話聞いて逃げたのでしょう」

「あいつの計算ミス。いやお前をなめていたことでこつた結果か」
「そゆうことですね」

ソラは飲み終わった空き缶をゴミ箱へ入れた。

「それでは僕は帰りますね。ジュースご馳走様でした」
「おう。じゃあな」

夜7時、ソラは夕飯を食べ終わったあとだった家には彼以外だれもいない。

親は小3のとき殺され、祖母や祖父は中1の時他界した。ついでに幼馴染やいともいない。

つまり彼は天涯孤独。

夜12時、ソラは眠りについた。家の中では彼は一言もしゃべらなかった

第1章終わり・つづく

第1章・openingーオープニングー（後書き）

読んで下さいますありがとうございます。

これからも続編を書きますので応援してくださいと助かります。
では、また会いましょう。

第2章・能力系―アビリティー（前書き）

こんにちは。k u x uです。早くR A I F第2章を投稿してみました。

前回とは一変したようにしてみました。

前は主人公の能力を理解してもらったためにあんな話になってしまいました。今回はカンタンながらバトル要素をいれました。

てか、それがこの話真骨頂なのでは？

では、できるだけ読んでいってくださいね。

第2章・能力系―アビリティー―

第2話

あの事件から次の日。

「見たか長門ながと今日の新聞」

朝、進藤しんどうが話しかけてきた。

「連続殺人事件の犯人ついに捕まったてよ」

「連続殺人事件？」

道長みちながが話しに割り込んできて聞いてきた。

「あなたは新聞見ていないのですか？」

僕はびつくりしながらきいた

「見ているけどテレビ欄と四コマ漫画しかみていないぜ」

はゝあ。僕と進藤はハモリながらため息をついた。

「それでなんか高校生が事件を解いたとか噂になっているらしいぞ」

進藤は道長を無視して話をつづけた。

「噂とゆうか書いてますしね」

僕は進藤にツツコンだ。

実際解決したのは僕だ。とゆうわけにはいかない。警察には何回も顔を出しているため知られているが、秘密を知っているのは熊田さんだけだ。くまだ

「しかしすごいですね」

「だな！」

僕は知らないふりをして答えた

「あれ？俺無視されていない？」

今頃気づいた道長であつた。

昼休み。僕はあいかわらず自分で作った弁当を食べている。

「おまえ本当に料理上手だな」

道長がパンを食べながら僕の弁当を眺めたいた

「なあ崎野^{さきの}。そう思わないか？」

「は、はひ！」

いきなり話を振られた崎野さんの声は裏返っていた。

「なんでいきなり崎野さんに話を振っているのですか？」

「いやゝ。女子の意見も聞きたくてね」

道長はにやにやしながら答えた。

「まあ、中学からの知り合いである崎野さんに聞くのはわかりますが。いきなりはちょっとだめかと」

崎野秋。髪は黒でツインテールで結んでいる道長に聞けば今クラスで彼女にしたい人No.1らしい。まあ、僕には関係ないことですけど。

「そ、そんなことないよ長門君。わ、私は素敵だと思うよ」

と、返事をしたらまたどっかに走り去ってしまった。何なんでしょうか？

「崎野さんどうかしたんでしょっか？」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

道長と、進藤と、ほか崎野さんといっしょに食事をしていた人たち。いきなりの無言。

「な、
なんですか？」

「
「
いや別に」
」

と道長と進藤。

「かわいそうな秋ちゃん」

と、ほかの女子2名。

僕はさっぱり理由がわからなかった。

放課後。僕は今日の夕飯の買い物をするためスーパーへ向かった。
た。
そのとき。

ーシュツバー!!

と、僕の前を横切った。誰かが僕を狙っている
そのまんま僕は走った。
とりあえず人がいないところに行かなければ。
僕は近くの廃棄ビルへと入っていた。

ーシュツババー!!

3つほどのさっきの物体がこっちに向かってきた。

ー^{デジタル・バンド}電子ノ腕輪・^{ベルト}帯ー

僕はそのまま2つ弾いてのこったもう1つは手元に残した。そして
その物体はコインだった。

（このコイン。S I反応がする！多分、^{アビリティ}能力系のS Iですか。）

S Iにはさまざまな系統があり、^{アビリティ}能力系は特定の物質に能力をあた
える系統。

つまり相手はこのコインになにかの能力を与えた。

ーシュツバー!!

つぎは5発コインが飛んできた。

僕は次々に飛んでくるコインを避けながら考えていた。

（まずは相手のSIを知ることが先決ですね）

考えはまとまった。

マスター・アイ ターゲット・アイ
ー達人ノ眼・目標ノ眼ー発動！！

キイイイイイイイ

僕の左目に輪っかが出てきた。

ーLv1ノ多機能ノ眼・天眼ー発動！！
マルチ・アイ てんがん

・・・「みつけた！」

「クソ！どこに行った？」

さっきまでソラを狙っていた人物が怒鳴っていた。

そう。いきなり彼はソラを見失ったのだ。

ここは彼にとって有利な場所だと思っていたがこう、カンタンに見失うと逆に不利である。

「ほんとあいつはどこに行った！」

バキバキ、ドン！！

彼はいきなり後ろを蹴られた感覚がした。

「ガッシャーン

「て、てめえ！」

「追い詰めましたよ！」

さっきまで自分を狙っていた人物がしりもちをついていた。

「ここまでこればあなたのS Iは通用しません！観念してください
！」

「なんだと！」

「あなたのS Iは多分狙い方だと思いました。さっきからあなたは
僕を遠くから狙い撃ちを

するだけ。そう考えれば接近戦はニガテか、戦えるS Iじゃないの
2つに絞れます。なら

は接近で戦ったほうがいいと思っただけです」

「じゃあなぜ俺の居場所がわかった？」

僕は左目を指で指しながら答えた。

「僕の眼は空からでも見えるのですよ」

性格には目標ノ眼Lv1ノ多機能ノ眼・天眼の能力だ。空から見た
ように半径300まで見ることが可能だ。

「なぜあなたは僕を狙ってきたのですか？」

「それは・・・秘密だな！」

あいてはコインを指で弾くように構えた。

「それじゃあ、あとでゆっくり聞きます！」

僕は構えた手に蹴りを入れた。

「ふっ、遅い！」

あいては蹴られたのと同時にコインを上には飛ばした。

ーシュビンー！

音と同時にコインが思いっきり落下してきた。

「俺の能力はコインに音速の能力を加える力だ。さあ避けられるもんなら避けてみる！」

言い終わったのと同時にあいてはまたコインを構えた。

（僕が落下したのを避ければ今構えたのを撃つ作戦ですか。なら！）

ーデジタル・バンド
ー電子ノ腕輪ー発動！ー！ー帯ー

僕は帯で落下してきたコインを弾いた。

「ちっ！！」

あいてはさっき構えていたコインを撃ってきたが僕はそれも帯で弾いた。

「残念ながらあなたのSIは僕にはもう通じません」

くそ！といいながらあいては膝をついた。

「さっき言ったとおりなぜ僕を狙ったのですか？教えてください

彼はチツと舌打ちしながらしゃべりだした。

「依頼だよ。おまえを殺せと俺は依頼されたんだよ」

「その依頼人の名前はわかりますか？」

「しらねえな。依頼が終わったら教えてくれる約束だったからな」

「とゆうことはあなたは金でこの依頼を受け取ったと」

「簡単に言えばそうゆうことだ。」

「そうですか。じゃああとは警察の人とお話させましょうか」

「な、なに！！！」

かれが叫んだと同時にパトカーのサイレンの音が聞こえた。

「さっき僕が隠れたとき知り合いの警官にメールを送信しときました」

「てめえ」

「さあ、終わりです」

「さっさと入れ」

あれから3分後。熊田さんの怒鳴り声が回りに響いていた。

ドン！

パトカーのドアが閉められる音がした。

「ナイスタイミングです熊田さん」

僕は残った熊田さんに声をかけた。

「おうソラご苦労だったな」

熊田さんは笑いながら答えた。

「詳しいことがわかったらあとで伝えるじゃあな」

と、熊田さんもパトカーにのって行ってしまった。

（さて、僕も買い物済ませて家に帰ろう）

今日もこのまま1日が過ぎた。

次の日。

朝、僕は光星高校の校門をくぐろうとしたときだった。

「おはよう長門」

「おはようございます進藤」

「お、あそこにいるの崎野じゃねえの？」

「あ、本当ですね。おい崎野さん」

ビクとしながら崎野さんはこっちを向いた。

「え？長門君と進藤君？」

「おはよう崎野」

「おはようございます崎野さん」

「お、おはよう」

「あ、おれ先生に朝職員室にこいといわれていたんだっけ。それじゃあ先に行くな。」

「ええ、わかりました。それじゃああとで教室で」

「え、ちよつと進藤君？」

進藤は崎野さんの言葉を見無視したように校舎へ走っていった。
崎野さんは進藤がいなくなった瞬間にうろついてしまっている。

「だ、大丈夫ですか？崎野さん？」

「え、あ、う、うん」

（わーん。さつきから変な回答しかできてないよう。どうしよう）

いきなりの2人つきりで秋はてまどつていた。^{あき}しかし正確には2人つきりではなくほかの人も登校しているわけだが、そんなことはどうでもいいぐらいに秋は緊張していた

。なにせ憧れの長門と登校中に会うことも初めてなわけ。

（しっかりしなきゃ秋、ここでなんか話なきゃ。がんばれ私）

「あ、あのー長門君」

「ん？なんですか」

「長門君はいつもこの時間にとこつつしているの」
「え？」

「……………あ……………」。

（あゝまちがえちゃった。うゝどうしよう）

ただいま秋の頭の中は大きなサイレンが鳴り響いていた。

「ええいつもこのぐらいに登校していますよ」

（え）

ソラはさっきの質問に答えてくれたようだ

「い、いまのでわかったの？」

「ええ大体は」

ソレを聞いた瞬間に秋は顔を赤くした。ソレを見たそらは心配したように大丈夫ですか？

と、いつてたようだが彼女の耳には届いていなかった。

（うゝだめだめ。もっと話しかけなきゃ！！）

「あ、あのゝ長門く」

「おーい長門ーおっはようっ」

と、言い終わる前にある言葉で彼女の勇気の一言が相殺されてしまった。

「あれ？道長？」

「ようソラじつはな朝から可愛いこと目があったん」
「み〜ち〜な〜が〜くん」

ゴゴゴゴゴゴ！とゆう効果音と同時に道長は振り向いた。

「え！？あの〜崎野いたのか？とゆうかなぜそんなに怒っている？」

その言葉が最後の怒りのスイッチを押す音が聞こえた。
何かを感じ取った道長はダッシュで校舎に入っていた。
秋も同時に道長を追いかけるように走っていた。

「な、なんですか？」

ソラはなにがおこったのかわからないまま歩きながら校舎に向かった。

結局2人は朝のHRに遅刻した。

第2章終わり・つづく

第2章・能力系―アビリティー（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

次回は新キャラを出したいと思います。ついでに女性です。
では3章できるかぎりまっけていてくださいね。

長門ソラ（人物設定）（前書き）

こんにちは。作者のkuxuです。

今回はお話ではなく主人公、長門ソラの設定を公開します。

謎の多い主人公、長門ソラコレを見て少しは理解してくれると助かります。

長門ソラ（人物設定）

長門 ソラ （ながと）

髪の色は水色で眼は赤に染っているのが特徴的。

第1人称は「僕」。身長は168センチ、体重54キロ、男子。

基本的に冷静で、学校のと時の会話ではツツコミ担当。

達人ノ眼マスターアイの能力の1つ自己経験能力のおかげで勉強はできて運動神経はいい。

しかしカナヅチであり、さらには腕力は高校生男子の平均以下である。その逆に脚力はハンパにならないほど強い。両利きで手先は器用。そこは親の遺伝だと考える。

ほかにも恋愛には鈍感すぎるほどで、あからさまに好意をもっているのに自分だけが気づかないほどである。それが他人同士の恋愛も同じである。

性格は冷静だが優しくたまにしか怒らない。しかし怒ると怖い（笑いながら怒りマークを出したりする）その性格のためたくさんの女子から好意を持たれている。もちろん当の本人は気づいていない。

戦闘時は基本的には頭脳の役割を果たしている。理由は単純的に攻撃技がまったくないの自動的になっちゃう。しかしここぞとばかりのときは蹴り一発で逆転も多い

伝説の眼、マスター・アイ達人ノ眼を持ち、両腕にはデジタル・バンド電脳子ノ腕輪（赤いリストバンド）を付けている

ちなみにマスター・アイ達人ノ眼はS Iではない

能力・マスター・アイ達人ノ眼

+ 能力 ターゲット・アイ目標ノ眼 自己経験能力

- 能力 カナヅチ メモリー・シャッフル記憶の掻き回し

・目標ノ眼Ⅱ発動すると左目から輪っかがでてき、以下の能力が使える

L V 0 ・ ターゲット・メモリー目標ノ記憶

・過去を見るための能力条件は見るために場所にいること、いつの時間をきめ

少しの情報を頭で整理し電気ショックを与えることで発動する

L V 1 ・ マルチ・アイ多能ノ眼

さまざまな能力をもちほかの能力と同時に発動できる。
・天眼Ⅰ空からみたように自分から半径300メートルまで見れる

・スコープーできるかぎりまで画面をアップすることができる

・距眼Ⅰ距離を測れる能力

・シャッターアイーそのばを写真のように記憶する目標ノ眼の資料にもできる

技・デジタル・バンド電子ノ腕輪

ベルト
帯Ⅱ腕輪から電子型の帯を放つ技

ロープ
縄Ⅱ腕輪から電子型の縄を放つ技

スピア
針Ⅱ腕輪から電子型の針が出てきてソレを持って放つ技

長門ソラ（人物設定）（後書き）

一様今の長門ソラの設定です。しかしこれからも彼は進化していきます。

また設定が増えたときまた公開します。

さてさて、次の設定はだれになるのでしょうか。
では今日はこれでまたお会いしましょう。

第3章・呪いの少女（前書き）

こんにちはkuxuです。

今回はいままでとはちがう依頼人がついた話です。

そして、今回は新キャラ登場です。

どうか見てやってください。お願いします。

第3章・呪いの少女

ある日。星光高校の休み時間。

僕はただいま道長に強制連行中。向かった先は1年5組だ。ついでに僕達は1年1組の生徒です。

「ほら、あそこにいる娘だよ」

道長は一番後ろの席にいる女子に指をさした。その女性は髪の長さは肩にギリ届くぐらいの長さで色は薄い茶色で背は多分164センチぐらいだ。こうしてみているとたしかに美人さんだ

「たしかにかわいいけど、それで名前は？」

進藤は道長に質問した。

道長はこまつた顔をして答えた。

「まだ知らない」

「「はいい！？」」

「だってここからしか見たことないから」

「おまえなあ」

「なにやっているのですか」

「しょうがないだろ」

「開き直らないでください」

「お、あの子廊下に出るらしいぞ」

たしかに彼女は廊下にでてきた。そして道長は緊張する様子で彼女を呼び止めた。

「あ、あのすこしいかな？」

そのまま彼女は歩くのをやめてこちらをみてきた。そのとき彼女は僕達を見た瞬間びっくりしたように見えた気がした。そんなことお構い無しに道長は話を進めた。

「お、俺1組の道長政司だけでもしよかったらすこし話きいてくれるかな？」

道長が話しているのに彼女の目線は道長を見ていなかった。それに何だか僕を見ている気がする。僕が見ているようでは道長の話はまったく聞いていないように見えた。僕は確かめるつもりで話をかけてみた。

「あ、あの〜」

「ハッ、す、すみません」

と、言いながら彼女は走り去っていった。その姿を見た進藤は僕に話しかけてきた。

「いっちゃったな」

「・・・ですね」

「おい。道長〜」

「だめです。フリーズしています」

言葉どおりに道長はまるで岩のように固まっていた。

「どうしたんでしょうか。道長は」

「おまえ、ハア〜。まあいいか」

このまま休み時間が終了した。

その日の放課後。

僕達は教室でしゃべり合っていた。

「明日は休みだな」

「GWが終わったからこの休みは貴重だな」

「でも、もうすこしで中間講座ですよ」

・・・沈黙。

「お前ソレを言うか」

「成績優秀なおまえとちがってこっちはいつもギリギリなんだよ」

「道長。残念ながら俺は真ん中ぐらいだからギリギリじゃない」

「うそーん」

「長門こんど勉強おしえてくれ」

「ええいいですよ」

「おお、華麗にスルーされた」

こんなことで今週の学校が終わった。

夕方5時近く。僕は近くにある川。星光川の近くの草むらへやってきた。

じつは下駄箱で靴を履き替えようとしたとき手紙が入っていた。誰が書いたのか、誰が置いて行ったのかはわからない。手紙の内容は：
あなたに話があります今日夕方5時に星光川の近くにある草むらへ

ときてください：しか書いていなかった。

前回のこともあるから罠かもしれない確率が高い。しかし、自分が行かなかったことで関係ない人が襲われたりするののもつといやなのでこうしてやってきた。

そうそう、前回僕に襲い掛かってきたあの人の名前は岩尾^{いわおげん}禪。ちなみに依頼者のことは名前さえも分からず、いまは刑務所にお世話になっているらしい。

（もうすぐ5時ですか）

その瞬間だった。

僕が持っていた手紙がいきなり燃えだした。

「あつ！！」

僕は持っていた手紙を手から離れた。

同時に1人の女性がこっちに向かってきた。その女性は長い黒髪で背が高く着ているスーツがとても似合っていた。

「あなたは誰ですか？できれば名前も教えて下さい」

「そうね、といえろ岩尾とでも名乗っておきましょうか」

「え！？」

「ふふ、覚えていてくれたのね。そう私は禪の姉よ」

「つまり敵討ちとゆうわけですか」

「そうよあなたのせいで私たち姉弟の人生はめちゃくちゃになったの。だから変わりにわたしがあなたを殺しにきたのよ」

そう言い切った同時に岩尾は手に持っていた紙をいきなり投げ出した。そのあとその紙はいきなり燃えだした。

デジタル・ベルト
― 電脳子ノ帯― 発動！

僕は帯を体の回りに盾のように張り巡らした。そのままさっきの攻撃を防いだ。

「へえ、やるわね」

しかし現状は僕のほうが不利だ。場所は草むらそして相手は炎系の攻撃で攻めていくので避けたりしたら自分の戦闘範囲が少なくなる。たださえ僕には攻撃のレパトリーが少ない上遠距離武器は1つもない。接近戦で戦うには場所を広く使うほうがいい。しかも僕が避けることでここが火の海になってしまふ可能性もあるわけなので僕はこうして防ぐしか選択肢がない。

「ならば、これならどう？」

岩尾はいきなり紙を上空へ上げた。そのあと同時に違う紙を構えだした。

これはあの時と同じ戦法だとすれば対処方法は簡単だ。しかしそれは本当におなじ作戦なのか。しかし、考えている暇はなかった。

デジタル・ベルト オール・カーテン
― 電脳子ノ帯― 周りの布―

帯は僕の周りを取り巻く防御用の布が出来上がった。技名周りの布オール・カーテンこれで攻撃を防いだ瞬間、岩尾の口元が笑ったように見えた。のと同時に、僕の周りに4つの火柱が僕に襲い掛かってきた。僕は予想外の出来事に眼を閉じた。しかし痛みどころか攻撃が当たった感じがまったくなかった。僕は眼を開けた。そのとき、ある少女が眼に映った

彼女は確か朝に1年5組の近くで会ったあの少女だった。

「だれだ？貴様」

（いまだ！）

そう思った瞬間、僕はデジタル・ベルト電脳子ノ帯を岩尾に向かって放った。

「ちいい！！」

岩尾と帯の間に炎の壁が現れた。その炎が消えたときには岩尾の姿はなかった。

「助けてくれてありがとうございます」
「うん。どういたしまして」

彼女は微笑みながら返事してくれた。
しかし謎は深まるままだ。とりあえず僕は少しずつ質問をすることにした。

「名前を聞いていいですか」
「うん。私のなまえはおおきゆうな大木優菜」
「大木さんですか。僕は」
「長門ソラ君でしょ」
「え！？なんで僕の名前を？」

大木さんは微笑みながら続けた。

「だって入学テストで数学1位だったでしょうそれで表をみたこと

あるから。そして・・・」

「そして」

「君が左目の力を聞いたことあるから」

「え！？なんで？」

「警察署にきたとき偶然聞いちゃってそれで・・・」

なるほど。このまえ警察署で噂になっているぞで、熊田さん聞いたことあるからそれでですね。

「ねえ長門君、お願いがあるの」

「なんですか」

「助けてほしいの」

「・・・え！？」

場所変わって僕の家到大木さんを入れた。

「一人暮らしなんだね」

「ええ。いろいろありましてあんまり人には話したくないのですよ。そんなことよりも君のことですよ。お茶でも飲みながらでもいいので話してみてください」

「うん、実は最近私呪われたらしいの。その証拠にいま体中に変なあざができたの」

「呪いですか。そのあざできたらみせてくれますか？」

「うん」

大木さんは吹くの袖をめくってもうすぐでヒジまで届きそうなあざを見せてくれた。

「みたことありませんね」

「私の家の玄関に変な紙があつたのそれに触つたあと服を着替えていたらそのあざができていたの」

「紙に変な模様はが書いたりしてました」

「うん。最初は変な模様があつたけど。自分にあざがあることに気づいたあとにみたらこんなことが書いてあつたの。：汝のあざが全身に広がるまで我を倒して見せる：コレしか書いてなかったの」

「そうですか。とりあえず今日はもう遅いので明日から搜索しまし
よう」

「うん」

外に出た後彼女を家に送るため僕も同行している。

「そういえば。大木さんのSIはどんな力なんですか？」

「あ、そういえば言つてなかったね。私の力は自分で地面に書いた線から透明の盾を作り出す能力なの。さっきは運よくあなたが私が書い円のなかにいたから発動したの。ついでに発動は自分が好きなときにできるけど同じ書いた線は2回までしか発動できないの。2回発動したらその線は勝手にきえちゃうの」

ライン・シールド
「線ノ盾ですか」

「うん。そういえば君の能力ってなに？」

「ええ、説明しますよ」

僕は彼女に僕の能力のわかっているすべてを話した。

「それってあんまり戦いにはあんまり使えない力だね」

「ええでも、今回みたいな探しごとでは切り札みたいなものです」

「あ、もうここでもいいよ」

「そうですかそれではまた明日」

「え、あ、う、うん」

？。どうしたのか大木さんは体をモジモジしている。

「どうしましたか？」

「おねがいがあるのだけど。いいかな？」

「ええ、いいですよ」

「これから下のほうの名前で呼んでいいかな？」

「え！？いいですけど。いきなりどうしたんですか？」

「う、うん。これから戦うときそっちのほう呼びやすいとおもうけど」

「ああ、いいですよ。」

「じゃ、じゃあねソラ君」

大木さんもとい、優菜は笑いながらこっちに手を振っている。僕は笑い返した。

「それではまた明日です。優菜」

次の日、土曜日。

僕達は町のまわりをブラブラしていた。

「とりあえずここに手紙を置いた時間を知りたいですね」

「そうよね。置いた場所だけじゃ発動できないもんね」

ターゲット・アイ
目標ノ記憶を使いたくても情報が足りなすぎる。そのためまったく推理が進まない。

とりあえずなにか見つかるかも知れないと思ってこうして外で歩いていた。

「知っている情報が場所と手紙だけですか。そういえばその手紙今

もっていますか？」

「うん持っているよ」

優菜は鞆から一枚の手紙を僕に渡してくれた。
その手紙は不思議に温かった。

「優菜、この手紙どこかで温めましたか？」

「いやずっとこのままだよ」

ずっとこのままにしていた？どうゆうことですか？

「そうそう、この手紙を置いていた所に焦げ後が合ったよ」

焦げ後。炎を使った能力者なのか？

僕はすこしずつ答えが見えた気がした。

「優菜ついてきてください」

「え？う、うん」

僕は優菜を連れて人目がないところに来た。少し気になることあった。

「優菜、体のあざを見せてもらえませんか？」

「うんいいよ」

最近暖かくなったのか優菜は半袖の服と少し長いスカートを履いている。

僕はTシャツの上にパーカーをチャックを開けて、ヒジまで腕まくりをしていてジーンパンを履いている。

優菜は袖を肩まで腕まくりをしてくれた。僕は優菜に付いているア

ザをよく見た。そこで僕は確信した。

「これはアザではなく、火傷です。そして、これはアザに見せかけた火傷だったんですよ」

「そ、そうなの？」

火傷、手紙、それに手紙の温かさ。〃紙、炎。

このキーワードで浮かび上がる人物は一人しかない。
昨日戦った女性、岩尾とゆう人物しかない。

「犯人分かりましたよ！優菜」

「え！ほんと？」

「ええ！」

ソラと優菜は草むらに來た。そこにはあの女性がいた。

「やっぱりここにいたのですね。岩尾さん」

「あらわざわざ来てくれたの？」

「すこし話いいですか？」

ソラ達は岩尾のところに向かった。

「この手紙。知っていますよね」

「ええ知ってるわよ。あ！だからわたしを探していたのね」

「ええ、わかっているのだったら話は早いです。今すぐ彼女の火傷の呪いをとくか、ここで僕達の手によってここでやられるか。選んでください」

「へえー残念ながら私はどちらも選ばないわ。しかも彼女のことは

ただのお遊びだったわけだし。」

ギリツとゆう音とどうじにソラは強く鋭い眼で岩尾を見た。

「ふざけないでください」

デジタル・ヘルト
「電子ノ帯」発動！！

ソラは帯を岩尾にむけて放った！

岩尾はソレをカントンに避けた。

優菜は近くにあった長い木の枝を拾った。

岩尾はソラに向かって炎を放った。同時に優菜はソラの前に線を書いた。

ライン・シールド
「線ノ盾」発動！

優菜が攻撃を防いだ瞬間、ソラは横から岩尾にむかって帯を放った。岩尾は帯を地面からの火柱で防いだ。

「やっぱりそうですか」

突然ソラがしゃべりだした。

「あなたのS Iは紙を炎に変えたり、炎関連の能力を追加する能力ですね。そしてここにはあなたの紙があちこち置いているのですね。フレイムペーパー名は焰ノ紙ですね」

「へえ、わかつているのじゃないの」

「けどこの情報は前に分かったことです。僕が今分かったことは能力の条件です」

「能力の条件」

優菜が聞いてきた。

「ええ、君は自分が書いた線ではないと発動ができないですよね」
「うん」

「それと同じく、あの能力の条件がわかったのですよ。そう、あなたの能力は炎に変える前にだれかに発動する前の紙に触れてはいけないことです」

「ふん、そうよだからそれがどうしたよ」

そのときソラはまた少し鋭い目つきで答えた。

「わからないのですか？なんでさっきから当たりもしない帯を放ちつづけたのかと。ヒントはあなたの足元ですよ」

「ハッ！まさか貴様さっきまでその技で私を捕獲しようとしたわけではなくここに置いてある紙に触っていたのか」

「もう・・・遅いですよ！」

デジタル・バンド スピア
ー 電脳子ノ腕輪・針ー

ソラは高くジャンプをし、針をそこらへんに投げまくった。

「これでほとんどの紙が使い物になりませんね」

「くそっ」

そのとき好機だと思ったソラはいきなり大声を出した。

「いんです！優菜」

いままでさっきから岩尾の後ろに回りこんだ優菜が思いつきり木の枝を振りかぶった。

しかし、岩尾に「甘い！！」といわれた同時につき飛ばされてしま

った。しりもちをついた優菜に岩尾は接近した。
そのときだった。

岩尾はいきなり透明の壁に囲まれたかのように動きが変わった。
足元をみてみると優菜が書いたらしき円がかかれていた。

「掛かったわね」

「むちゃしますね。優菜は」

「き、貴様らなんだこれは！？」

岩尾の言葉にソラが説明した。

「これは優菜のS I線ノ盾です。ライン・シールドこの力は優菜が書けばほとんどが
優菜の指示で強弱を付けられるのですよ」

ソラの言葉通り、優菜の線ノ盾は発動すると同時に強弱もつけら
れる。ライン・シールド

今岩尾がいるのは優菜が書いた円の中にいる。これは外側の強度を
最大に低くして、逆に内側は強度を最大に強くしている。なのでち
よっとそつとの攻撃ではびくともしない。

ソラは動けない岩尾に向かって走った。そして盾ごと岩尾の腹に思
いつきり回し蹴りをくらわせた。

外側の強度は弱いため、外側の攻撃ならば簡単に破壊できる。

岩尾はガハツといいながら地面に倒れた。

「捕獲成功です」

その言葉と同時に優菜は肩の力を抜いた。

岩尾は警察署のパトカーに乗せられて行った。
パトカーが見えなくなったときソラは優菜に聞いた。

「火傷はどうですか？」

その言葉を聞いた後、優菜は自分の袖をまくってみた。

「大丈夫。もうないよ」

「よかったです。多分岩尾が気絶したため効果がなくなったようですね」

「そうなんだ」

ソラと優菜はしゃべりながら、歩いた。

「ねえソラ君」

「なんですか」

「ソラ君はいつもこんなことに巻きこんでいたの？」

「ええまあ、時々ですけどね」

「ねえ、これから私も手伝っちゃだめかな？」

「手伝ってくれるのですか！？それはうれしいですけど、これ以上危険なことに巻き込みたくはありません」

「大丈夫だから。お願い！」

はぁとソラはため息をしながら答えた。

「わかりました。じゃあお願いします」

「うん！」

もう時間は夕方になっていているしかし優菜のほつぺたは夕日に負けな
いぐらい赤かった。

まるで彼に恋をしたように。

「あ、そうそうもうひとつお願いあるのいいかな？」

「ん？いいですよ」

「勉強教えてくれる？」

「はい！？」

月曜日、進藤と道長は朝からソラにお願いしてきた。

「長門、あと1週間でテストだろ。勉強をおしえてください」

「そうそう、あ、どうせならほかのやつさそっていいかな？」

「いいですよ」

そう言ったあと道長は女子3人組に声をかけた。すぐ理解でたたか
のように3人組はこっちに来た。

右から崎野秋、佐藤真美、遠山瑠璃。

3人ともいつも一緒にいるらしい。

事情をしまった3人はいきなりくいついてきた。

左から、

「えゝほんと！ありがとう長門君」

「ほら、秋もお礼言っの」

「う、うん。ありがとう長門君」

「いいですよ別に、あ、そうそうもう一人いるので少し待ってくださいか？」

「「「「もうひとり？」」「」「」「」

その言葉と同時に1年1組の教室の後ろ側のドアがやさしく開いた。

来た人物は、大木優菜だった。それをみて一番に反応したのは道長だった。

「え！？何であの子がここに」

「もしかして、お前に会いに来たとか」

「ここに、こっちを見た」

優菜はこっちを向いたとたんうれしそうな顔でしゃべった。

「あ、ソラ君みつけた！約束道理に勉強教えてもらいに来たよ」

「お、来ましたね。優菜」

「「「「へ！？」「」「」」

ソラと優菜の会話で3人は驚いただけで、残りの2人は固まってしまった。

「な、長門どゆうことだ。説明してくれ」

バキバキと、殻が割れたような音お同時に泣きながら道長はソラの胸倉をつかんで叫んだ。

「な、なんですかいきなり？」

「そ、ソラ君どうしたの？」

「いやなんだかわからないですけど」

「なんでおまえばっかり！なんでおまえばっかり×5」

道長は叫び続けているし、秋はまだフリーズ状態、進藤は笑っており、ほか二人はため息をついていた。
結局今日はまったくこんな感じで勉強できなかった。

第3章おわり、つづく

第3章・呪いの少女（後書き）

と、ゆうわけで、優菜の話でした。

これから彼女には活躍してもらいます。

そして、秋と優菜のソラをめぐる戦いもご注目を。
今回はここまでです。では、また会いましょう。

第4章 魔獣―モンスター―（前書き）

どうもkuxuです。

なんかだんだん書き方が変わっていきませんがそこは無視してくれると助かります。

第4章 魔獣―モンスター―

5月26日 水曜日。

中間講座が終わり、たくさんの人が肩の力を抜いていた。

ーガラッ！

「ソラ君いる？」

「優菜？」

教室に入ってきたのは大木優菜だった。

ちなみに今は放課後なのでほとんどの生徒が帰っている。

「いつしよに帰ろうー！」

「いいで」

ソラが言い終わる前に一人の人物が大声で会話を邪魔した。

「ちょっとまったー」

とめた人物は道長政司だった。

「道長君？」

「どうかしましたか？道長」

「どうかしましたか？じゃあなーーい！なんでお前ばかり大木さんと仲がいいんよ！」

「ま、そんなことはどうでもいいとして」

ムギユ！進藤が道長の顔を押しつけた。

「どうでもよくな」

「今度の休み二人とも空いていないか？」

「別にありませんけど。優菜は？」

「うん。私も。」

その言葉を聞いた進藤はある一枚の紙を鞆から出した。

その紙を見たらハイキングのチラシだった。

「実はここでこんどから地域での交友会があつてその下見を俺の父さんがたのまれたんだ。

だったら俺たちが楽しんでいったほうがいいとゆことなんだ」

「そうでしたか。いいですよ。行きます」

「大木さんは？」

復活した道長が優菜に聞いてみた。

「う、うんソラ君が行くなら行く」

「じゃあ、決まりだな」

「ほかにはだれが来るのですか？」

ソラは進藤に聞いてみた。

「あゝほかは例の3人ぐらいだな。これで6人だけどほかにも誘いたいやつがいたら誘ってもいいぞ」

「わかりました」

今日はこのままこの面子で帰った。

次の日、優菜がいきなり1組の教室へソラを呼びに行っていた。

「ソラ君ちよつといい？」

いいですよ。とソラは言いながら教室を後にした。

そのことを良く思っていない恋する一人の女子がいた。

「あの二人本当になかがいいんだね」

バキッ！！！何かが折れた音が恋する乙女。崎野秋の手元から聞こえた。

ビクッ！！と、佐藤と、遠山はその音に盛大にびびっている。それ
もそのはず秋が折ったのはシャーペンであるからにして女の握力で
しかも片手で握りつぶして折っているのだから、しかも顔が黒い影
でさらにその怒りをあらわしているのも怖い以外言葉がでない。
言葉が出て来い2人をほつといて秋は1人悩んでいた。

（やっと、普通に話せるようになったのに、なんでこんなときにライバルが増えるの〜）

もちろん、秋が言うライバルは優菜以外誰もいないしかも、自分は苗字で呼ぶのにやっとなのに2人とも名前で呼び合っている。これが彼女にとって1番のダメージである。

見ているようでは、長門自体の好意は無いのはわかるが、大木優菜は好意があるのは明白である、そのため今週のハイキングは好都合だ、大木優菜の好意に、2人の関係を知るのはいいい機会だ。

「ふふ、ふふふふ。待ってなさいよ。ハイキング」

秋の不気味な声に事情を知っている分2人は不気味だった。

優菜に呼ばれて、ソラは1年5組の近くの廊下にいた。

優菜の隣には見知らぬ女子はいた。

「この子は相川あゆ。あいかわあゆ 同じ5組でクラスではよく話すの。それで話を聞いたことによるとどうやら例のことに関係があると思ってソラ君を呼んだの」

例のこととは、S I関係のことである。一般者はS Iの存在を知らないそのためこゆうキーワードで話している。ソラたちも能力も隠している。

「ど、どうもはじめまして。相川あゆです」

相川さんはペコリッとお辞儀をした。

「長門ソラです」

ソラも言い返した。

「それじゃあ本題にはいるね」

優菜と相川さんは話をした。

「実は私の祖母の家はとある近くにある小さな山の中に住んでいるのです」

「なんでそんなところに住んでいるのですか？」

「その山は先祖代々その山に住んでいたらしく、でもいまはその山はそんなに坂も少なく、自由に遊べるほどの平和で、こんどハイキングでも活用するとも聞きました」

「それって」

「そうこんどの日曜日に私たちが行くところよ」

「そこで僕にお願いとはなんですか？」

「はい、実はその山ではなんかところどころ木が折れたりしたりしてめちゃくちゃらしいのそこで、警察に行っただけですけどそこにいた刑事さんにきいたところあなたに相談したほうがいい。と聞きましたので」

ソラは細目で呆れながら聞いた。

「その刑事さんの名前はわかりますか？」

「はい。たしか熊田さんとか言っていました」

「やっぱり・・・」

はあ〜と言いながらソラはため息をした。

「お知り合いだったんですか？」

「ええ、まあ」

ソラはもう一度ため息をした後呆れながら。

「わかりました。協力します」

「ほんとですか！ありがとうございます」

「じゃあ、まずやるのが1つあります」

「「へ？」」

5月30日 日曜日。とあるバス停。

崎野秋と、道長政司は少しシヨックした顔をしている。

「こ、この子はだれ？」

秋の質問に相川さん自身が答えた。

「はじめまして相川あゆといいます。よろしくお願いします」

その言葉をソラがつけ答えた。

「僕達が行く山に住んでいる人の孫です」

はあゝとソラと優菜以外の人たちは納得した。
それからすぐバスが来てソラたちはソレに乗った。

40分ぐらいして目的地、低遊山^{ていゆうさん}についた。

「ここが低遊山。名前そのままですね」

「私もそれはわかりません」

「はあ。とにかく。優菜と相川さんはなるべく僕から離れないでくださいね」

「あゝ」

相川さんが手を上げてたずねた。

「それよりこのまえいつていたことは本当のことですか」
そう。実はソラたちはあらかじめSⅠのことを話していた。
「ええ」

「わかりました。それじゃあいまから私のことはあゆと呼んでください」

相川さんは顔を赤くして言った。

「それよりも今回はほかの一般人もいるわけで慎重に行動しますよ
優菜」

「うん。わかった」

3人は無言でうなずきあった。

今回のハイキングメンバーはソラ、優菜、あゆ、進藤と道長、そして秋と佐藤と遠山の8人で来ている。みんなは進藤の考えたルートで歩いていた。

「しかしここ、歩きやすいな」
「本当にそうね」

道長の言葉に佐藤さんが反応した。しかしそこに遠山さんが心配した言葉でしゃべった。

「でもちよつと奥見ていればけっこう荒れている気がするの」
「そうか、瑠璃は眼がいいからね」

その言葉に反応したソラが答えた。

「まあ、古い木かもしれませんが。すこし見にいつきていいですか？」
「う、うん」

「ありがとうございます。優菜ついて来てください」

うんと言いながら優菜はソラについていった。

「あの2人本当に仲がいいのね」

「くそ〜長門め〜うらやましい〜」

そのとき3人の後ろには不吉なオーラがただよってきた。

「ふふ、ふふふふふふふふふふふふふふ」

オーラの持ち主は秋だった。

うわあああああああああああと、3人の悲鳴が聞こえた。

ソラ達は倒れまくっている木々のある場所へ行っていた。

「この木には爪の痕跡があります」

ソラは木についていた爪跡を触った。

「獣のような爪跡ですね。多分犯人は魔獣でしょう。しかもけっこう大型の」

魔獣。それはSⅠを持った獣。ただし、魔獣はいろんな性格があり人に懐くものもいるらしい。SⅠの量で強さも変わる。

「優菜、一樣ここら辺に線を書いといってください」

「うん。わかった」

優菜は自分が持っていた2本の棒をボタンを押して長くさせてそれをくつつけて1本の長い棒にさせた。これはソラが作ったものであり、いつでも戦闘が始まってもすぐ準備ができるすぐれものだ。片方はコンクリート専用の白いチョークがついている。もう片方には逆にコンクリートじゃないほうに書くために丸くしてある実際ボタン1つで入れ替えもかのうだ。

ボタンを押したステッキを両方丸型のほうにして、あちこち線を書いた。

「書き終わったよ」

「じゃあ戻りましょうか」

優菜のうん。と言っ言葉とともにソラ達はそこから離れた。

昼。広いところにでたので、そこで昼ごはんにするところだ。

「はい。ソラ君私が作ってきたの食べてくれる」

優菜は自分が作ってきたかと思う弁当をソラに差し出した。

パカッ！ソラはその弁当箱を開けたがそこには大量のクッキーがあった。

「ゆ。優菜？」

「あ、あはははは。実は私お菓子ぐらいしか作ったことなくて、でもそれはそれで自信作よ」

「あ、はい。あとで食べさせていただきます。見た目も悪くないのでおいしくいただけそうです」

そこにいきなりある少女がソラに弁当を差し出してきた。

「長門君こ、これ食べて」

差し出した少女は秋だった。

「あ、ありがとうございます」

パカッ！蓋を開ければびっくり。なんとそこにはりっぱな暗黒物質が。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

絶句！！！！ソラと優菜はそれを食べ物どこかこの世にあっていいものなのかからなかった。

そこは質問のオンパレード。なぜご飯ごと黒こげなのか、どうやって味見をしたのか、なんでこれを差し出そうとしたのかわからなかった。

（これを渡して何をしろというのですか？とゆうかこれ食べたらずにますよね！！）

「お、これ崎野が作ったのか？」

ここで道長が話しに割り込んできた。

「うん。そうよ」

「み、道長君。ひ、一口どう？」

そこへ優菜が入ってきた。

「お、じゃあもらおうかな」

「ダ、ダメ」

秋の言葉は空しくそも暗黒物質は道長の口の中へ。

予想通り出来事は進んだ。多分HPゲージがあつたら確実に0だ。

「ぼ、僕自分で弁当作ったのですけど。みなさんもどうですか？」

「たべる！！！！！！！！！！」

みんなが大声を上げた。もちろん道長は見事な屍で喋れなかった。

「うん。おいしいよ」

と、優菜。

「すごいね。本当に料理上手なんだね」

「秋ちゃんも見習いなさいね」

「う、うるさい。瑠璃だってそんなに上手くないくせに。でもこれはおいしいよ長門君」

と、佐藤さん、遠山さん、崎野さん。

「すごいですね。とてもおいしいです」

と、あゆ。

「本当だな。道長さつさと起きないとなくなるぞ」
「え！？まじ？」

その言葉で反応したのか道長は速攻で起き上がった。
しかしみんなが喜んでくれて本当に良かった。

しかしやっぱりさっきの爪跡が気になります。ほかにあるのか後で調べる必要がありますね。

自分の弁当が食べ終わった僕はそう思いながら優菜の作ったクッキーを食べた。

そのクッキーは本当においしく、さらにバニラとチョコの二種類に分けられている。

「あれ？それもお前が作ったのか？」

道長が質問してきた。僕は平然と答えた。

「いいえ。これは優菜が作ってきてくれました」

それを聴いた瞬間、道長は眼を光らせて怒鳴った。

「ま、まじで！？ちょ、俺にも食わせろ」

「優菜に聞いてください」

「大木さんこのクッキー俺も食べていいかな？」

こつちを振り向きながら困った顔で答えた。

「う、うん本当はソラ君のために作ってきたけど・・・うん。いいよ」

「いただきます」

は、早！とゆうツツコミは間に合わずに道長はクッキーをほおばった。

「う、うまい」

「食べるか喋るかどっちかにしてください」

本当にこの人には呆れます。

昼ご飯がおわりソラたち御一行はまた歩き始めていた。

しかし、ソラにはさっきの爪跡のことばかり考えていた。そのときだった。

ソラは一本の倒れかけているに気づいた。その木はますつぐ先頭にいる進藤たちに倒れようとしている。

「進藤たちと待つてください」

ソラは大声でみんなを呼び止めた。

ドン！！

ソラの呼び止めの声は届いたらしく。だれもが無事にいた。ソラはホッと一息したあとすぐに行動した。

「あゆ！！後で連絡してください。僕たちは少し先行って来ます。優菜行きますよ！」

「うん！」

二人は同時に倒れた木を飛び越え前に進んだ。

なんにも知らない人たち。とゆうかあゆ以外はなにかなんやらわからない状態だ。

（気をつけて二人とも）

そのことは無視してあゆは二人の無事を願った。

マスター・アイ ターゲット・アイ
ー達人ノ眼・目標ノ眼ー発動！！

キイイイイン

ソラの左目に輪っかが出てきた。

「逃がしません」

ソラと優菜はおそらく魔獣が逃げている方向に追っていた。
ソラの左目には天空を発動したらしくひとつの面影を追っていた。
これがおそらく魔獣。

「ねえソラ君」

優菜は走りながら聞いてきた。

「どうかしましたかゆう」

言葉の途中何かを見つけたらしくソラは会話を中断した。
そこにあっただのはたくさんの木で作られた壁だった。

「しまった。これじゃあ通れません」

「あの〜ソラ君」

「ああ、スミマセン話の途中でしたね。それでどうしたのですか？
優菜」

「うん。実はさっきから気になっていたのだけでも、あそこにある
家って」

優菜はここからでも見える家に指を差した。

「ええ。僕も気になっていましたが多分あれがあゆが言っていた」
「祖母の家」

優菜がソラの言葉をつなげた。
そこにブーンと、ソラの携帯が鳴った。

「あ、あゆですか。ちょうど良かったです」

『そ、そうですか。よかったです』

「そっちのほうはどうですか？」

『う、うん。まだすこしみんなこんがらがっている』

「そ、そうですか。そうそう少し聞きたいことがあります」

「あ、あは。多分その家は私の祖母のものだと思います」

『そうですか。ありがとうございます。またあとで連絡しますね』

そういったソラは通信を切った。

「あれ？相川さん誰に電話かけていたの？」

ドキッと、ビクリしながら佐藤の問いかけに答えた。

「あ、は、はい。ソラさんにすこしちょっと」

「へえ」。相川さんて長門君の電話番号していたんだ」

「ええ。一樣。てあれ？崎野さん？」

その言葉を聞いた秋は木に拳を殴っている。

「あ、秋ちゃんやめて！我に返ってきて」

こっちのこんらんはまだつづきそうだ。

「そうですか。どうぞあがってきてください」

「「ありがとうございます」」

僕と優菜はあゆの祖母に交渉して家に上がらせてもらっていた。

「お茶入れていきますね」

「あ、お気遣いなく」

といい終わった後ベランダみたらしく優菜が話しかけてきた。

「ソラ君これ」

みたものはあちこち倒れている木ばっかだった。

「こ、これって」

「ああ、これはつい最近起こったことだから気にしないでいいよ」

あゆの祖母さんはお茶を持っていきながら言った。

「そんなことはできません。あなたの孫娘からのお願いなのですから。どうか話を聞かせてください」

「いいよ」

と言いながらあゆの祖母さんはお茶を机に置き、ゆくつりと腰をかけた。

「話は17日前にことだよ。いきなり一本の木を折られていてねそのときはビックリしたよ
それで1日ごとに一本ずつ折られていったね。12日後その後はまったく折られなくなっただよ」

「そうか！わかった！」

「じゃあいまは折られていないと」

「ええ、いまは不自然ながら普通にここで暮らしているよ」

「とてもタメになる話ありがとうございました。では僕達はそろそろいきますね」

「ええ、孫ともこれからよろしくね」

「わかりましたよ優菜。次に魔獣が出てくる場所を」

「え！？」

「場所さえわかればあとはやることは1つです」

ソラが来たところはさっき始めて爪跡を見たところだった。

「なんでここに来たの？」

「ええ、説明しますね。さっきの祖母さんの話をきいたことによると、木は12本切られていたのはわかりますね」

「うん」

「そしてさっき僕達のまえにあった木の壁の木のかずは実は12本だったんです。一樣さつき数えていましたのですぐにわかりました。話を戻します。祖母さんは17日前の話といいましたよね。ではこの折られた木の数は何本ですか？」

優菜は言われたとおりにおられた木の数を数えた。

「・・・5本」

「正解です。つまり魔獣は絶対ここを狙ってくる計算となります。さらに魔獣は僕達が入ってきた逆の場所から折って来ましたそうすればうまくつながってここにたどりつけます」

はあーと思いながら優菜は次の疑問が浮かび上がった。

「ねえじゃあどうやってみつけるの？まさか朝までまたないよね」

「そんなことしませんよ。明日は学校ですし。でも見つけ方もかんがえていますよ」

「本当！」

「ええ、ではここでターゲット・メモリー目標ノ記憶を使います」

「え！？でも時間のほうはどうするの？」

「大丈夫です。すでにわかっていますから」

ソラは優菜にスタンガンを渡し、ゆっくりと眼を閉じた。

時刻は5月30日 3時30分

そしてある程度の情報を頭の中に整理をし、優菜がとまどいながらスタンガンを撃った！

そのあと、ソラは左目を力強くあけた。

ターゲット・アイ
ー目標ノ眼・Lv0目標ノ記憶ー発動！

キイイイイイイイイイイイイイイイ

(・・・みつけた！)

さっきの近くに草に覆われている洞窟があった。その近くに行つた瞬間。魔獣が突撃してきた。

「こ、これがあの魔獣！」

「ええ！猫が本となったのだと思います。とくにあの爪には氣をつけてください」

突撃をかわした2人は一気に戦闘体勢にはいった。

「ギジャァー」

ライン・シールド
ー線ノ盾ー発動！！

優菜の線ノ盾はなんとか魔獣の攻撃を防いだ。

デジタル・スピア
ー電脳子ノ針ー

ソラはスキをとって高くジャンプし、針を食らわした。

ーいまだ！！

デジタル・ベルト
ー 電脳子ノ帯ー

帯は見事に魔獣の体に巻きつけた。
そのまま着地し魔獣に3発蹴りを当てた。

「グルルル」

「やっぱりでかいのでこのぐらいの攻撃では倒せませんね」
「そうみたい」

（どうする？ハンパな攻撃は逆にあいてを怒らせるだけだ。こうな
ったらこのほうほうで）

「グアアアア」

「ソラ君！！」

ライン・シールド
優菜は線ノ盾ですべてのこうげきを防いでいる。

（でもさすがに優菜にも限界があるそれまで準備を終わらせる）

ソラは折れた木を段差にして高く飛んだ。

デジタル・ロープ
ー 電脳子ノ縄ー

しかし縄が向かった先は魔獣ではなかった。
ソレを見た魔獣はソラにむかって全速力で突っ込んできた。

「いまです優菜！！」
「うん！！！！」

ライン・シールド
「線ノ盾」最大開放！！！！

魔獣のの周りには大きな盾の壁が出来上がった。

「準備完了よソラ君！！」

「はい！」

ソラは両腕を下側に思いっきりクロスさせた。

そうしたとたん魔獣の上から大量の木が落ちてきた。

「ソラさん！優菜ちゃん！」

ソラ達とはるあえず山の入り口合流して、あゆと再開した。

「ふう、ソラ君の作戦にはヒヤヒヤしたよ。まさかあらかじめ折れた木を残った木の上におくなんて」

「あらかじめ木を帯で束ねて、動きを止めたら帯の発動を解除して縄を使って重力＋腕力＋木の重さとう戦法で倒してきました」

「はあく。それよりもありがとうございました。このお礼はいつか返します」

「別にいりませんよお礼なんてそうでしょ優菜」

「うん」

「それよりもほかのひとたちは？」

「いまは疲れたらしくあつちで休んでいます」

「そうですか。そうだジューズ飲みませんか？奢りますよ」

「わーい」

こうして今日の休み。もとい、ハイキングは終わった。

第4章 終わり。 続く

第4章 魔獣―モンスター―（後書き）

どうもkuxuです。

次回はまた新キャラです。と、ゆづか毎回新キャラ出てきているような気がします。

そして、ソラ争奪戦、ただいま一歩リード（？）の優菜このあとの発展はあるのか？これももう一つの醍醐味です。

では、また会いましょう。

第5章 氷の少女・転校生（前書き）

どうもkuxuです。

今回の第5章は2話連続でお届けします。

第5章 氷の少女・転校生

6月1日月曜日。前回行ったテストが返された。

「ソラはどうだった」

「いつも通りです」

ソラの手からは数学が100点のテストが見えた。

「ああ、そうみたいだな」

「道長はどうでしたか？」

フツといいながら道長は答えた。

「今回もギリギリセーフだぜ！」

「そ、そうでしたか」

「長門。お前呆れてツツコメないんだな」

進藤が話に入ってきた。

「お前のほかの教科はどうだった？」

「ええ、すべて90点台でした」

「ガハッ」

どこかの誰かが何かを吐いたみたいだがソラと進藤は何も気にせず話を進めた。

「進藤はどうでしたか？」

「無視かよ!!!」

この叫びに対しても2人は話を進めた。

「ああ、今回は調子良かったからほとんどが75から85点までだったぞ」

「おまえかも!!!」

道長はまだ叫び直すが速攻無視される。

「よかったですね」

「ああ」

「俺を無視する」

「ガラッ!!」

教室のドアを開け、優菜が入ってきた。

「ソラ君。ありがとう。おかげで今までの中の最高点数を取れたよ」

優菜がものすごい笑顔でソラがいるところまで来た。

「それはよかったですね」

ソラがそう言って笑ったとたん優菜の顔が赤くなった。

「ね、ねえ今日もいっしょに帰ろう!」

「ええいいですよ」

そういつてソラは席を立った。

「それじゃあ先帰りますね進藤。また明日です」

「おう。また明日」

そう言っただけでソラは教室を出た。何かを忘れている気がするが、気にしないようにしよう

6月2日火曜日。つまり1日がたった。

今日は何やら教室が騒がしい。なんと机が1つ増えていた。これは転校生が来ますよの表しだ。つまりほとんどの会話がそのことなので1年1組はいつもより騒がしい。

ーガラッ！

教室の前のドアが開き、先生が教室に入ってきた。このクラスの担任の名前は藤谷学。ふじたにまなぶ教科は社会、馴染みやすく生徒にはけっこう人気のある先生だ。先生はそのまま教卓の後ろに立ち、いかにも先生ですと表す格好をした。

「今日はもう知っているようだがこのクラスに転校生が来る。みんな仲良くするように。では入ってきなさい」

ーガラッ！

教室に入ってきたのは女子で青く長い髪をしている。

男子どもは「おー！」か、「美人だ」という声が聞こえてくる。

彼女はニコツと笑い自己紹介を始めた。

「親の都合で転校してきました。冬野雪ふゆのゆきと言います。みなさんこれからどうぞよろしく願います」

彼女は再度またニコツと笑い、自己紹介の終わりを告げた。

「うおーーーーー」

と、男子の叫び声が教室中に響き渡った。

「パンパン！」

藤谷先生は手を叩きながら話をした。

「はいはい、何か質問タイムが始まりそうなので朝のHRはここまでにします。冬野の席は一番後ろの空いているところだ。それでは解散」

「ガラガラ、ピッシャ！」

先生が教室のドアが閉じたのとたんにとんどの生徒が雪のところへ行った。

「始めまして冬野さんあなたどこから来たの？」

「はじめまして、ねえねえ、質問があったらいつでも聞いてね」

「始めまして冬野さん俺の名前は道長といいます。良かったら友達になってくだ」

「ねえねえ冬野さんさっそくだけど、お友達になってくれるかな？」

なんか知っている声と、名前が聞こえたけど。ここでは触れないことにする。

雪は困りながらも自分の意見をはっきり言った。

「す、スミマセン。私ちょっと話したい相手がいるので」

そう言つて雪は立ち上がり、迷いのない歩き方であるところへ向かった。そのあいだほかの生徒たちは黙りながら道を開けた。なんと雪が向かったところはソラの席だった。

「な、なんですか？」

雪は笑顔のまま喋りかけた。

「長門ソラさんですよね」

「そうですけど」

「すこし話があります。すこし移動してもかまいませんか？」

「周りに聞かれたくない話ですか？」

「はい」

「わかりました」

そう言いながらソラと冬野は教室を後のした」

ちなみにほかの生徒はなにがおこったのかまったく見当がつかないようすで固まっていた。

ソラ達は人気のない屋上へ来ていた。

「話でなんですか」

「う、うん」

冬野は最初はなにが詰まっていたけど、決心がついたらしく話話し始めた。

「ねえ、お願い！助けて！！」

「え！？」

ソラはビックリした様子で聞き返した。

「それはどうゆうことですか？」

「う、うん。じつは私追われているの」

「追われている」

なぜこんな少女が？だとしたら今回の転校の件での理解が早い。普通1年の6月なんて転校生がくるのはおかしい。でもソレが本当なら納得がいく。

この雪の一言によってソラの頭はフル回転して動き始めた。

雪は話を続けた。

「私はアメリカかつい先日日本に帰ってきたの」

「帰国子女ですか」

「うん。でも日本に帰る前に変なことが起きたの」

「変なことですか？」

「うん。あなたたちで言うS Iで言うのを目覚めちゃったの」

「え！？」

S I・・・実はそれは必ず自分が望めば手に入るものではない。つまり、望まないものまでその力は目覚める。

「日本に帰ってきたとき、その力が無条件で発動してしまい多くの人に見られたの。それだけではなくその力を利用しようとしたくらんだ人たちを最近になって私を追ってきたの。実はその関係者の人たちとは何回か戦闘してきたからS Iのコントロールはできてきたの。」

でも何人も何人も倒しても追ってくるの。で、私は考えた結果その本部を解散させたほうがいいと思ったの。調べたところここが一番近いからここにきたのはいいけど、いくらなんでも私1人だけじゃ何人いるかわからない人たちを相手にするわけにはいかない。そう悩んでいたところにある」

「刑事さんがやってきたと言わないですよね」

「・・・正解」

「正解・・・ですか」

ソラはハア〜とため息をしながらすみません、続けてくださいと言った。

「それでこの星光高校にも変な力をもっているヤツがいるから相談してこい。きつと力になってくれる。と言われたの」

「それで僕の名前を知っていたのですか」

すべて納得がいったのかソラは笑いながら言った。

「わかりました。こんな話を聞いて手伝わないほうがどうかします。協力します」

それを聞いた雪は喜びながら。

「ホントに！ありがとう」

「あ、でも、もう一人協力してもらいましょうか」

場所変わって1年5組の教室。

「優菜いますか？」

ソラがそう呼ぶと優菜は驚いた顔でソラを見た。

「あれソラ君。そっちからくるのは初めてだね」

「ええ、すこし急用ができたので優菜にも協力してもらおうと思いついて。入ってきてください」

ソラに呼ばれて雪は教室に入ってきた。

「始めまして。今日転校してきた冬野雪といいます」

「大木優菜といます。こちらこそ始めまして」

「挨拶も終わったところで本題に入りますね」

2人にうん言われたあと、ソラはさっき話したことを優菜に伝えた。

「うん、わかった。協力する」

話したあと優菜はすぐに了解してくれた。

「じゃあ話は早いです。今日の放課後、冬野さんに町案内のついでにいろいろやることを決めましょう」

「うん」

放課後。ソラは例の友達にあれこれ言われながらも冬野と外に出ることができた。

「フウ。やっとあの質問攻めから開放できましたね」

「そ、そうだね」

「おつれさま」

冬野はソラと同じく少し疲れた顔で答え、優菜は何が起こったのかはだいたいの想像できるなと思っているかのような顔をしていた。ソラ達はいま駅前をぶらついていた。

「雪ちゃんはどこに家があるの？」

「うん。最近来たばかりだからあんまりうまく説明できないの。優菜ちゃんは？」

「私は結構学校の近くに家があるの」
「へえーそうなんだ」

優菜と雪はいつの間にか名前呼び合う仲になっていた。

「そういえば冬野さん。家族はちゃんといるのですか？」

ソラは思いついたように話かけた。

「うん。ちゃんと一緒に住んでいるよ。狙われているのは私だけだから」

「そうですか。それはよかったです」

ソラはホッとしたような顔で返事をした。

「?どうしたの」

なにかわからない雪は優菜に聞いてみた。

「ソラ君は家族を失う痛みは良くわかってる人だから、だからほかの人には家族を失わせたりしたくないと思っているの」

……少しの無言が続いた。

その時、優菜は突然2人を呼び止めた。

「ねえねえ2人ともここに入らない？」

優菜が指を指したのはきれいなカフェテリアだった。店の名前はCと書いてあった。

「ここ私のお気に入りのお店なの」

「そうなんですか。じゃあさっそくなので入りましょうか冬野さん」
「う、うん」

カランカランの音とともに3人はカフェテリアCにはいつて行った。

「お、やあ優菜ちゃん今日は友達をつれてきたのか。しかも2人も知らない顔で1人は男の子だし」

柄のいい店員。いや名札を見てみれば店長と書いてあった。

「はい！最近しりあった人たちです」

「そうなんだ。どうも始めまして。ここの店長をしています中岡操なかおかみさおと言います。こんごともよろしく願います」

店長の中岡が2人に向かって挨拶をした。

「ご丁寧にも。長門ソラといいます。こちらこそよろしく願います」

「冬野雪です。よろしく願います」

ソラに続いて雪も挨拶をした。
中岡はニコツと笑いながら、

「ではごゆっくり」

と、いいながらここから離れた。

「優菜はこの店長さんとはどうゆう関係なのですか」

中岡が離れたあと、ソラは優菜に質問した。

「うん。私のお父さんの学生のころの親友なの。私も小さいころから面倒を見てくれたの」

優菜の両親は共働きなので父の親友だった中岡にはとても信頼と尊敬を抱いていた。

ソラは以前このことを話してくれたためこのことの意味は良く理解していた。

そんな話をしていたら中岡が水を持ちながらこっちへ来て口を開いた。

「それで。優菜ちゃんは長門君と付き合っているのかい？」

その言葉を中岡が言ったとたん優菜はいきなり顔を赤くした。
中岡は確信したような顔でそのまま話を続けた

「それとも片思いかな？」

「ななななな、何を言っているのですか中岡さん。ち、違いますよ。ただの友達です」

「はははは！これはこれは。優菜ちゃん。凶星だねえ」

カアアアと赤くなる優菜とまったく意味がわからないでいるソラ。
この二人がなにを表しているのかを雪を中岡はしっかりとわかって
いた。

「そ、そんなことよりも。これから私たち大事な話をするので中岡
さんは席をはずしてください」

「おや？コイバナかなあ？」

「違いますから」

はいはいよお〜といいながら中岡はキッチンへ向かった。

「ソラ君作戦立てようか」

「あ、はい」

まだ顔が赤くなってしている優菜それはあからさまにソラに好意を向け
ている証拠。しかしソラのみそのことはわかっていない。

ソラは優菜に言われたどうり話を始めた。

「いろいろ問題はありますが一番大切なのはこの戦力で戦えるのか
とゆうことです。今ここにある力は僕の達人ノ眼と優菜の線ノ盾。^{マスター・アイ}

それに冬野さんの水十氷^{ウォーター・アイス}だけです。しかも攻撃となりそうなのは水
十氷^{ウォーター・アイス}だけです」

ソラがそう言い終わったあと雪は聞いてきた。

「でもソラ君。こんなこと相談しても敵のアジトがわからなきゃ意
味はないのじゃないの」

「だいじょうぶです。もうそのことは心配ありませんから」

「「え？」」

そう言ったとたん店の外からある人物の声が聞こえた。

「女子高生をストーキングするとはいいご趣味なことで」

この声の持ち主は熊田だった。

ソラは声を聞いたとたん2人をつれて店を出た。

警察署の取調べ室。そこにはさっきのメンバーとさっき熊田が捕まえた人物がいた。

「単刀直入に聞きます。あなたがいたアジとの場所を教えてください」

「……いやだね」

ーピキッ

変な音が聞こえた。

「熊田さん。この人をあぶり焼きをしてもかまいませんか？」

「いや。だめだろ」

ソラは口調は丁寧だろうが額には怒りマークが浮かび上がっていた。しかしソラが怒るのわかる。たった1人の女の子を何人もの大人が襲い掛かっている。そうソラの怒りはそこから出ていた。

「しょうがないですね。死なないでいどにいたぶりますか」

その言葉を聴いた熊田は女子2人をつれてこの部屋を出た。

ーギヤアアアアアアアアア

なにをされたのかわからないが女子2人は以心伝心したように同じことを思っていた。

（（ソラ君をなるべく怒らせないようにしよう）（

その後。犯人が全て話したことは言うまでもない。

第5章つづく

第5章 氷の少女・転校生（後書き）

今回は前半を投稿しました。またのちに後半も投稿します。
それでは感想もお待ちします。

第5章 氷の少女・水と氷（前書き）

前回の続きです。

暇なときでも読んでください。

第5章 氷の少女・水と氷

あれから次の日。朝学校の放課後。
ソラと優菜そして雪は校門の前にいた。

「教えた場所は歩いていける場所です。今日はそのまま行きましよう」

ソラは2人に呼びかける。

「うん。大丈夫ちゃんと準備はしてきたから」

そっついながら雪は自分が持っている2つの鞆を2人に見せた。

雪は1つは昨日見た学校用の鞆らしい。もう1つはリュックのような形をしていた鞆だ。多分こっちのほうはその準備してきたほうだ。

「私のほうは問題ないよ」

と、優菜はS I用の棒を見せた。

彼女の棒はS Iー線ノ盾ライン・シールドに使うためのもので土の地面に書くための先が丸くなっているのと。コンクリートの地面に書くためのチョークになっているところをボタン1つで入れ替えが可能の棒となっている。

ついでに長くするため使わないときは2本に分かれてコンパクトにしまえるようになっていいる（ソラ特製）

「それでは行きますか」

2人はうんとうなずきソラに付いて行つた。

ソラ達はまったく人気のないところに来た。

その道は細く3人でやつと横で並べるぐらいのところだ。

「あれあそこにドアがあるよ」

優菜はそこに指を差しながらソラたちを呼んだ。

そのドアは草むらの茂みに隠れていてパツと見ただけではわからないようにしていた。

「ええ。ここですね」

「でも鍵がかかっているよ」

雪はドアノブをつかみながら押したり引いたりしている。

ソラは雪にどいてくださいといいながらドアの前に立った。

「開かないのならば別の方法で開けるのみです」

そついいながらソラは思いっきりドアを蹴りだした。

ーバキッ

ドアが壊れたように変な音を出した。

そしてドアはくつついていた金具の部分が壊れて取れたらしくそのまま倒れた。

「さあ、行きますよ。もう後戻りはできませんよ」

「「うん」」

そしてソラ達御一行は名前のわからない敵と言えるアジトへ入っていった。

とある暗い場所。そこには2つの影があった。

「とうとう冬野雪がきおったか」

1つの影は年は二十歳ぐらいでいいがたいしている男だ。どうやらソラ達が入り込んだのはもうお分かりのようだ。

「大丈夫なの？何か仲間まで連れてきたみたいだけど」

もう1つの影は体は細く髪は長く年は10代位の女性だ。

男は女の疑問に笑いながら答えた。

「大丈夫だ。お前と俺がかかればどうたつこともない。なんにしてもあの冬野雪。ただしくはあのS.I.が手に入れば全てが終わる。それともおまえは俺が信用できないのか？」

男の疑問に女の同じく笑いながら答えた。

「心配はないわよなにせ私はあなたの彼女ですもの」

「フツ、言うもんになつたな。しかもこの中には何人が強そくなやつをやといていた」

「そっちのほうが大丈夫なの？」

彼女は苦笑いしながら言った。

「みてみればわかるわ」

このとき男は不適の笑みをこぼした。

所変わってソラ達は早速1人目の資格を。

ーバキッ

・・・倒したところだった。

「普通に優菜の盾で攻撃を防いだ後思いっきり蹴りをぶつけただけで倒れるとは思いませんでした」

「いや、ソラ君の蹴りは結構痛いよ。たぶん。食らったことないけどドアを一蹴りでこわせるぐらいだから」

優菜が呆れながら答えた。

「ねえねえ。あそこに鍵が掛かっているドアがあるけどどうする？」

雪がドアを見つけたらしく聞いてきた。

「もう一回ソラ君の蹴りで壊す？」

優菜がソラに聞いてみた。

「いや。さっきの人の首に鍵が架かっていたのでこれで開けましょ

うよ。なんでも壊すわけには行きませんか」

ソラはさっきの刺客らしき人からの首から鍵を取った。
その鍵でドアを開け、その中に入った瞬間。床が抜けた。

「おわあああああああああああ！！！！」

「きやあああああああああああ！！！！」

「ひやあああああああああああ！！！！」

ソラ達はその床のなくなつた場所へ落ちていった。

―デジタル・ベルト
電子ノ帯―

ソラはデジタル・ベルト
電子ノ帯を両腕から発動した。

片手の帯はドアをつかみ、もう片手は優菜と雪の腕に包まつた。
そうしたことによつて落下をとめた。

ソラはベルト
を短くしながら体を引き上げた。

3人とも引きあつがたらソラは口を開いた。

「落とし穴ですか。古典的なトラップに引っかかってしまいました
ね」

「本当にそうだね」

「いつの時代のトラップなんやら」

こんな会話をしていると優菜がいきなり大声を出した。

「あぶない」

―バキユン

その声と同時にピストルの射撃音が聞こえた。
ソラ達はぎりぎりそれを避けて障害物の裏に隠れた。
それでも射撃音は聞こえたままだった。

「思いつきり銃刀法違反ですね。雪いけますか？」

ソラは雪に何かを耳打ちした。

「わかったやってみる」

「よし。じゃあまずなんとかこの銃を撃つのを一回やめさせないと
いけませんね。優菜防御はたのみましたよ」
「うん」

優菜は静かに返事をした。

— 電子ノ帯デジタル・ベルト — 発動！！

ソラは帯ベルトを天井に向かって放った。
その帯は天井にあったパイプに包まり銃を売っていた人に向かって
いった。

相手はなにがなにやらわからずその帯ベルトに向かって弾を放った。
これで一瞬の間ができた。

これを見た雪はすかさず前にでて水鉄砲を相手に向けて水を放った。

— 水十氷ウォーターアイス — 発動！！

雪が撃った水は一瞬で氷に変化した。
これが雪のS I — 水十氷 — ウォーターアイス。
水を氷に変化させたり、氷を水に変化させる変化系のS Iだ。
でも残念ながら水を操ることはできない。

氷で出来た弾は相手が持っていた銃に突き刺さった。
これでもう銃は使えない。

ソラは後ろに回りこみ横腹に回し蹴りを当てた。
相手は何か言おうとしたのだが痛すぎてそのまま気絶してしまった。

「この人にも首に鍵が架かっていますね」

ソラは鍵を手にした。

その鍵で近くにあったドアを開けて次の部屋へ入っていった。
ちなみにこの人は銃のなかの空気を実弾にするS Iの持ち主だった
か誰も気づかなかった。

「ほほう。なかなかやるな餓鬼ども」

黒い部屋に監視カメラでみていた2つの影があった。

「そうね。でもこれじゃあ次の人もすぐにやられそうね」

女性が心配そうに言った。

「ねえ。次、私が行くわ」

女性が言った言葉を男性は別に驚きはしていなかった。

「ほう。随分自身があるようだな」

「へえ、心配はしてくれないんだ」

女性は残念そうに言った。

「ははははは。大丈夫だ。なにせお前は俺の彼女だからな」

男性は笑いながら答えた。

「それ理由になっていないわよ。まあいいわ準備してくるね」

あなたの出番なくしてあげるわ。を加えて彼女はこの部屋を出た。

ーバキッ

ソラの蹴りの音が部屋中響いていた。

地面には2人の男が気絶していた。

「いつか2人くるとは思っていたのはいました。でもこんなに早く来るなんて」

ソラは首に架かっていた鍵を取りながらいった。

「これじゃあなんかあとで3人とか4人とか来そうだね」

雪は水鉄砲に水筒の水を入れながら言った。

「ソラ君。ドア見つけたよ」

ドアを探していた優菜がソラに伝えてきた。

「わかりました。雪、準備はいいですか？」
「うん。もういいよ」

雪は水を入れるのが終わったらしく鞆を背負った。

「じゃあいけますか」

ソラは鍵を開け。ドアをあけた。

あけた先には見知らぬ女性が立っていた。

見た目はソラ達と年齢は近く見える。

髪は水色では左に髪留めをしていて長くすこしふわふわしている髪をしていた。

「今回は女性が相手ですか」

ソラは気が進まないような声でつぶやいた。

「あの人のため。ここであなたたちを倒す！」

そう言った瞬間彼女の隣にあったバケツから水がソラ達に襲い掛かってきた。

「水系のS I！？優菜！」

ソラが叫んだ瞬間。優菜は先頭に立ち前に線を引いた。

ライン・シールド
―線ノ盾―発動！！

間に合ったらしく水はソラ達には当たらなかった。

「間に合ったようね」

優菜は安心したようにしゃべった。

「ふーん。やっぱりそうくるのね」

女性はわかっていたように言った。
その言葉にソラは反応した。

「なるほど。どうやらあなたはさっきまでの僕達の戦いを見ていたようですね」

「へえゝわかっているじゃないの」

女性は感心したように言った。

「でもこれでわかりましたよ。あなたは今まで戦ったなかで一番黒幕に近い人だと。ここまで戦った人たちは特に3つ目の部屋の人たちは僕達の能力を知らないまま戦っていた用に見えました。現に2人目の人は僕の帯が^{ベルト}なんなのかわかっていなかったようです。なのにあなたは今、僕達は優菜の盾でくるのをわかっていたようですね」

「へえゝたったあのとき一言言っただけでそこまで推理されちゃうなんて。しかもすべてが本当のこと」

女性は感心したように拍手しながら言った。

「じゃあこれも教えてあげる。私の名前は窓辺^{まどべしずく}雫。よろしく」

窓辺はニコツと笑った。

「そしてS Iは水ノ達人よ」
アクアトロマスター

――！！

3人はそれを聞いたときはソラさえも驚きを隠せなかった。
アクアトロマスター
水ノ達人。それは達人系のS Iの1つである。

達人系は特定のを条件無く発動でき操ることが可能。
しかも達人系は覚える人は少ない。

これによって達人系は結構レアなS Iなのである。

しかしソラはこれ以外にもほかのことでも悩んでいた。

それは雪のS Iが通じないこと。

彼女のS Iは水を操る。つまり水を氷に替えても本は水。そのまま
アクアトロマスター
水に変えられ操ることが可能。結果、水ノ達人には雪の水十氷は効
ウォーターアイス
かない。

このことによって一気に勝率が下がってしまった。

そうソラが悩んでいるうちに窓辺は水ノ攻撃を仕掛けてきた。

それを3人は回避して優菜は地面に線を書き次にいつでも発動できる
ように準備をしていた。

ソラは両腕を窓辺に向けてデジタル・ベルト電脳子ノ帯を放った。

「甘いわね」

窓辺は水を玉のように形をさせ浮かせた。そのまま帯の先に思いつ
ベルト
きり落とした。

窓辺がいま操っている水は個体のように硬く液体の触感がなかった。
彼女は玉の水は周りだけをS Iを集中させた。このことにより周りの
水は器のようになりまるでダンベルと同じようなものになる。水
は使い方によっては軽くさせたり重くさせたりすることができる。

ソラは帯おびの発動を解除した。

「ほら、まだいくわよ」

窓辺は5個の水球を放った。

優菜は線ライン・シールドノ盾を発動した。

攻撃はギリギリ優菜は耐えてくれた。

しかしこれだけじゃ彼女の攻撃は終わらなかった。

ソラは何かを感じたらしく上を向いた。

「2人ともいますぐここから離れてください」

「「え!?!」」

なんとソラ達の真上には巨大な水球があった。

「遅い!?!」

窓辺は思いっきり水球を落としてきた。

—デジタル・ロープ電子ノ縄—発動!!

ソラは近くにあったパイプに縄ロープを巻き、さらに優菜と雪の腕にも巻いた。縄を縮ませると同時のその水球を回避することが出来た。

「へえ〜。あれを避けられるんだ。すごいね君」

窓辺は感心したように見ていた。

「それはどうも」

ソラは冷静に答えた。しかし現状はあいからわずこつちが不利なのは変わらない。

「質問してもいいですか」

ソラは真剣な眼で窓辺を見た。

「いいわよ」

「あなたはなんでこんなに強いのになんで今回たった1人の少女を狙う人に協力したのですか？」

「簡単よ。私には彼には恩があるの」

その質問に窓辺は真剣に答えた。

「恩・・・ですか」

「そう。私はね小学校6年生のとき迷子になったの。でもね親は見つからず彼に助けられたの。まあ親には捨てられたてこと」

「なんで捨てられたと思うのですか？」

ソラは質問を続ける。窓辺はそれにこたえてくれた。しかし2人の真剣な眼は変わらなかった。優菜と雪は黙って話を聞いていた。

「だってずっと探していたのにつからないの。しかもそんなに広くない場所で。こんなの捨てられたのと同じじゃないの」

窓辺はいきなり叫び始めた。

「そんなのただのいいがかりです」

「違うわ。だってあの人は言ってくれたのそれは捨てられたんだよ。そして現にあのときから私はS Iの力が目覚めていたの。そしてそれは両親ともそれを知っていたのよ」

「それが理由であなただけはその人に協力していると」

「そうよ」

窓辺は言い切ったようにハアハアと息を切らしている。

「やっぱり。あなたは利用されていますね」

「なに!？」

ソラが言った一言によって彼女は一気に怒りの表情になった。

「だってそうですよ。だって現に雪を使ってあなたの力を上げようとしている」

「え?どゆうこと」

今度は雪が聞き返してきた。

「雪のS Iは水を氷にする力。でもそれを水も操れるようになったらどうなります?」

「うん。さらに力の発展ができる。あ!!--そうゆうことね」

「やっぱり、あなたは気づいていたのね。探偵君。」

そう言ったあと窓辺はいきなり水を放ってきた。

「優菜!!--お願いします!!--」

「うん!」

優菜は線ノ盾ライン・シールドを使って攻撃を防いだ。

「ふんいくら防いだって攻撃できなきゃ意味がないわよ」

「いや、意味はあります」

そのときソラの腕はクロスしており片手にはスタンガンを持っていた。

「まさか、私の意識を攻撃に集中させる作戦!？」
「いまさら気づいても遅いですよ」

デジタル・ロープ
— 電子ノ縄 — 発動!!

ソラはクロスしていた両腕を思いっきり上げた。
ロープ
縄は天井のパイプにたどりながら窓辺に襲い掛かった。
本数は8本しかも先端には氷がついていた。

ウォーターアイス
— 氷十氷 — 解除!!

ロープ
雪は縄についていた氷を水に戻した。
しかもその水には電気が通っていた。
そう、これがさっきソラがスタンガンをもっていた理由である。
窓辺は瞬間的に眼をつぶった。

しかし、電撃は来ない。それもそのはずソラは彼女に電気を浴びせていなかった。

ソラは真剣な眼で。

「僕達の勝ちです。降参してください。話があります」

「いいのか？私に何も縛らなくて」
「いいんですよ。この話を聞いたらあなたには逃げる理由はなくなります。それに、これは僕も伝えたかったことです」

あれから3分ぐらいたった。いまは窓辺も今は落ちついている。

「では最後の確認です。いまあなたは何歳ですか？」

「何の確認かはわからないけど、まあいいわ。今は17歳よ。高校3年生と言えいいのかしら。私学校行ってないから」

ソラはそのことを聞いたとき確信がついたように笑った。

「わかりましたよ。やっぱりあなただったんですね」

「な、なにが？」

窓辺は驚きを隠せなかった。

「この前からずっと僕はよく警察署を通るんですけど、そのときいつも探し人のチラシが張っている看板を良く見るのです。そして、いつも変わらずにいつも見るチラシが1枚ありました」

「それって!？」

雪がまさかと思いながら言った。

「そうです。それはある少女を探してくれとゆうものでした。しかも6年前のものです」

「え!？」

窓辺はまさかと言って言葉をつなげた。

「さらにはそのとき迷子になった子供の写真までありました。名前は・・・」

ソラは一回息を吐いた。

「――窓辺雪」

――！！！！

「うそ」

「それって本当？」

「ええ、本当です。それでもあなたは親に捨てられたと思っているのですか？それは大きな勘違いです。話を聞いてみるとそのチラシの依頼人は毎日警察署にいつて見つかったかの確認をしてくるようです」

ソラの言葉に窓辺は固まったままだった。

「・・・私は捨てられていなかった」

窓辺の眼には涙がこぼれてきた。

「うううう。わあああああああん。私は、私はとんでもない間違いを起こした。」

私の両親はまだ探してくれていたなんて」

ソラはそつと彼女の肩を抱いた。

そのまま優しい声で彼女を慰めた。

「だからもうここに居なくっていいのですよ。あなたはこれから普通の高校生として暮らせるのですから」

窓辺は泣きながらソラの肩にうずくまり、小さい声で言った。

「ありがとう・・・ありがとう」

「どういたしまして・・・窓辺さん」

ソラは小さい声で答えた。

あれから5分後。

「さて、そろそろ黒幕を捕まえにいきましょうか」

頃相かなと思ったソラは2人に呼びかけた。

「すまないが・・・私も行ってもかまわないか？」

窓辺はもう落ち着いたらしくソラ達に聞いてきた。

「あなたたちの手伝いがしたい」

「いいですけど、大丈夫なですか？残念ながら戦いは避けられませんが」

うんと言いながら窓辺はうなずいた。

「わかりました。じゃあ行きましょうか」

「うん」「うん」

ソラ達がドアを開けたとき、イスに座っている一人の男がいた。

「よお。良くここまで来たな。侵入者の3人と、裏切り者の雫さんよ。褒めてやる」

男性は笑いながら言った。

「それはどうも」

ソラは睨みながら答えた。

「それじゃあ、始めよっか」

男性は一本の棒を手にした。その棒の先には大きい鉄製の玉が付いていた。

「なんですか。あの武器は！？」

ソラがそういつている間に男は大きく振りかぶってきた。

「冥土の土産に名前ぐらいは教えてやる。この佐門蒸男さもんむしおのな！！」

佐門は大きく武器をぶつけに来た。

ソラは横に転がりながら避けた。

その隙に窓辺は水ノ達人アクアトロマスターを発動し、3つつの大きな水球を佐門に襲わせた。

佐門は2つは棒で叩いて相殺した。だが、残りの一個はなぜか彼に当たる前に消滅してしまった。

「ふうゝ危ない危ない」

「なぜ最後の一個は消滅してしまったのでしょうか。多分SⅠだとは思うのでしょうか、しかし能力を使ったしぐさはありませんね」

ソラは驚きながら言った。

「うん。私も彼の能力は残念ながら知らないの」

窓辺も不思議そうにしていた。

「でもこれじゃあどうゆう戦法を使えばいいのかわからないね」
雪は困りながら言った。

「安心しろ俺のSIは大きく使ったらすぐにばれるからな」

「どうゆうことですか？」

「安心しろいますぐにつかってやるから」

佐門はニヤニヤしながら言った。

「発動——シルクロード砂漠ノ道——」

そのとき部屋中がものすごく暑く感じた。

「なんか暑いね」

「とゆうかなんでいきな暑くなったの？」

優菜の言葉に雪が続けた。

「さあ、なんでだろうな」

佐門はまだニヤ付いていた。

「やばいですね」

「そうね。何で暑くなったのかはわからないけど」

ソラの言葉に窓辺が反応した。

「ちがいます。わかったからやばいのですよ」

「えー？どうゆうこと？」

雪はソラの言葉に質問した。

「彼のS Iは世界系で効果は周りを砂漠のように暑くさせる力があります」

「へ！？世界系！！」

優菜が一番ソラの言葉に反応した。

「え！？世界系てなに？」

雪は質問した。

「世界系はある範囲内なら自分の能力の世界をつくり変えることができるの」

と、優菜。

「そのためあまりにも強すぎるために覚えられる人は達人系と同じく少ないです」

ソラはそのまま解説をした。

「つまり彼のS I砂漠^{シルクロード}ノ道は範囲内のすべてを砂漠と同じ気温することが可能です」

ソラの言葉に雪は理解した。

「じゃあこのまま長期戦になったらやばいじゃないの」

「ええ」

砂漠と同じ気温これはつまりここに居るほど不利になると言ってもいいだろう。

このままじゃあ体力勝負じゃあなくなってしまう。
しかも世界系のS Iは自分で自分をS Iに影響させるのを決められるのだ。

「この高気温の中いつまでもつかない？」

佐門が自分が持っている棒を振り回した。
その間ソラはずっと作戦を練っていた。

（これじゃあ時間を稼ぐ方法は命取りになりますね。しかも長く水系のS Iも長い時間は発動できない。これだったらやっぱり優菜を中心とした作戦のほうがいいですね）

ソラが考え込んでいるとき、佐門はなんかいいことを思い出したらしい。

「そういえばおまえらってさっきから見てみればこの男を中心に動いているみたいだな。まるで脳見たいにな」

「それがどうしたの？」

優菜が問い返した。

「つまりだ。この男さえいなければ全て済むって話だ！！」

いそう言いながら佐門はソラに向かって走り出し、そのまま棒を大きく振りかぶった。

——！！

ソラは佐門の攻撃を避け、低い大勢で足に回し蹴りを打った。
佐門はそれを飛び越えて交わし3歩ぐらい後ろに行った。

「ほう、よくやるのう」

「それはどうも」

ソラは暑さにたえながら言った。

（しかし、今の動きだけでもいつもよりしんどいですね。ここは慎重に動きたいですかこれじゃあ彼の思う壺ですね）

ソラがそう悩んでいると窓辺が――水ノ達人――アクアトロマスターを使って佐門に攻撃を仕掛けた。

「くらえ!!」

窓辺は水を針のような形にさせた。
しかし水はどんどん水蒸気と化してちいさくなっていった。

――まさか。

暑さで水が水蒸気になっていた。しかし不思議な点はあった。

――いくら砂漠と同じ温度でもこの水蒸気化は早すぎます。

そう。あくまでも気温が上がるだけで炎の中にいるわけではない。
ただなぜ水はこんなに早く水蒸気になったのか。

「じゃあこれならどう?」

雪が窓辺が操っている水を凍らせた。
しかしその氷も次々に溶けてしまっている。

「え！？」

「なぜ！？」

「うそ！？」

3人が驚くのは仕方が無いさつきいたとおりに気温だけでこんなに早く解ける筈が無い。

「ははははは。少年この意味がわかるかな！？」

佐門が笑いながらソラに問いかけた。

（たしかに、これは変です。・・・ん！？まだ彼は自分のSIを自分で公表していない。つまり僕達の予想を超えるSI。まさか彼のSIは気温を上げるだけではない！）

ソラが考え事をしている間窓辺と雪は佐門に攻撃を続けていた。しかしさつきから同じ結果になっている。

「なんですぐ溶けるの？あの人は何もしてないのに」

「そうよね。左近はただ棒を振り回しているだけなのに」

雪と窓辺が悪戦苦闘している声が聞こえる。

優菜はソラの隣で2人の戦闘を見守っている。彼女はソラの指示をすぐに実行できるように話している間いろんなところに線を書おいたそれで時々守備に回っている。

優菜は困った口調で一言言った。

「氷を溶かしたり水を水蒸気にできるのは炎ぐらいだと思うのだけ
ど」

——温度・炎・蒸気。

——わかった！！

「優菜。ちよつといいですか？」

「え！？」

「確かめたいことがあります」

「ほらほら、どうしたお嬢さんたちよ」

佐門は余裕がちに挑発した。

しかし2人とも息を切らしていた。それもそのはず佐門のS-I―砂シ
ルクロード漠ノ道―のせいである。

「それじゃあお二人さんそろそろご退散してもらいますか」

佐門は棒を2人のめがけて振り下ろした。

―ガキン！！

しかし当たったのは優菜のS-I―ライン・シールド線ノ盾―で発生された透明な壁だ
った。

「ちい」

「間に合った」

「「優菜ちゃん」」

優菜は2人のそばに立った。

「そついえばお前もいたな」

佐門は優菜を睨んだ。そのあと思いつきり優菜に飛び込み棒を振るった。

「させません」

隙だらけの佐門の横腹をソラはとび蹴りをした。

「貴様。まさかもう俺のS Iを理解したのか」

「ええお蔭様で」

佐門は地面から起き上がりながら質問した。

「あなたのS I―シルクロード砂漠ノ道―はたしかに世界系S Iです。でも能力はただ気温を上げるじゃあないのです」

「それってどゆうちこと」

雪がソラに問い返した。

「彼のS Iは炎の蒸気をだす。つまり範囲内のすべてに見えない炎の蒸気が舞っているのです。そのため気温が上がり、水がすぐ水蒸気になったり、氷がすぐ解けるのも理解が出来ます」

「正解だ」

佐門は眉一つも動かさず言った。

「しかし、それがわかったて貴様らに何が出来るというのかね」

たしかに。S Iがわかっただけで状況としてはこっちが不利なのは変わらない。

「じゃあそろそろ本気で潰すか」

佐門はそういいながら棒の先端つまり金属の玉をこっちの向けた。

—ドン

何かが飛んだ音がした。そのあとに。

—ガシャーン

後ろで変な音が聞こえた。

音が聞こえたほうに女性3人は振り向いた。

なんとさっき棒にくっついていていた玉があった。その近くに気力が失っているようにソラが座っていた。

— 絶句 —

「ソラ君!!!!」

「ソラ君!!!!!!」

「ソラさん!!!!!!」

3人はソラの近くによった。しかし彼は気絶してしまっていた。

「さあ、次はそこの3人だ」

佐門が不適に笑った。

——僕はいつたいたうしたんだ。

眼を開けたとたんそこはいかにも現実の世界ではなかった。

——夢世界みたいなところですかね。

確か僕は佐門さんとの戦いで不意に隙をつかれて気絶してしまった。そうだったそれだけ。

だったら僕はここで寝ているわけにはいけません。そう思ったときある女性が眼に入った。

「キミノ、モクテキハ、ナニ？」

——え？

「キミハ、ナンノタメニ、タタカツテイルノ？」

彼女の言葉を聴いたとたん僕は悩みだした。確かに僕は今まで頼まれたから戦ってきた、それ以外は理由はなかった。

「そんな理由でキミは彼を倒せない」

声が近くなりはっきり聞こえるようになった。

——別の理由ですか？

そんなことは考えたことは無かった。

「それが分かればキミはまた戦える」

——わかりました。

「だから、」

そのときその女性の姿が見えた。その女性は肌の色はものすごく白くきれいな桃色のロングの髪だった。そして僕は彼女を知っている。

「つぎは私の力もつかってね。ソラ君」

——ありがとう。詩音。しおん

あれから5分後

「ほう、よく粘るな」

佐門がいまだに不適に笑っていた。

「しかしもうタイムオーバーだ」

3人は息切れをしながら立っているのがやっとだった。やはりこの状況で戦うのは難しい。

「まあ、よくやったほうだぜ君たちよ！」

そのときだった佐門は横から不意打ちを受け吹っ飛んだ。

（この攻撃は覚えがあるぜ）

「ソ、ソラ君」
「ソラさん」

そこに立っていたのはソラだった。しかもさっきとは目が違く、あの決意を固めた男の眼だった。

「大丈夫ですか3人とも」
「うん」
「それはよかったです」

ソラは安心したかのように息を吐いた。

「あとは僕が戦います。3人は休むみながら作戦を行ってください。詳しくは優菜に聞いてください」

ソラはやさしく微笑んだ。

「貴様」

佐門は立ち上がった。

「僕はもう。決めました」

ソラは両目を閉じた。

ターゲット・アイ
——目標ノ眼——発動！！

ソラの左目に丸い輪っかが出てきた。
佐門、窓辺もちろん雪をこの眼を見て驚いている。

もしかし優菜にとって以前一回この眼を見たのにもかかわらず驚いていた。

それもそのはず、ソラに眼はまるで以前とは違う形になっていた。左目の瞳を中心に丸い輪っかがあるがその左上にさらに小さい輪っかがあった。

「貴様、何だその左目は？」

佐門が問いかけてきた。

しかしソラはその問いに冷静に答えた。

「残念ながら今のあなたに答えても時間の問題です」

「なあに」

「さあ、続けましょうか」

その言葉とともにソラは佐門に向かって走り出した。

佐門はそれを見て追いついて棒を横に振った。

しかし、ソラには当たらなかった。

ソラは途中、足でギリギリ棒が届く範囲外で止まっていた。

空振りした佐門は大きく隙が生まれてしまいそこにソラは腹に蹴りを入れた。

「——ガハッ」

そういいながら佐門は後ろに吹っ飛んだ。

「状況が状況なのでさっさと終わらせませす」

ソラはまた佐門に向かって走り出した。

しかし佐門も負けじとさっきソラを気絶させたときにつかっ た玉を

切り離れた。

そしてソラに向かって放ったが次は簡単に避けられてしまった。
しかし玉はまた空のところへ帰ってきた。

そうこれが佐門の狙いだった。いまはソラも前をしっかり見ている
そのため後ろには気づかないはず。そうおもっていたが、ソラはそ
れも避けた。

次は佐門はソラの蹴りを棒を使って防いだ。

その後佐門は3歩後ろに下がり、ソラに問いかけた。

「おまえあの技がブーメラン方式のものだと分かっていたのか？」

「いいえ。はつきり言って驚きました」

「ではなぜ？」

佐門はまた問い返した。

「僕の左目――マスター・アイ達人ノ眼――。いいえ、それが今必要になったために生

まれ変わった眼――スキル・アイ超能力ノ眼――の能力です」

「超能力ノ眼？」

優菜がソラに聞いてきた。

「と、言ってもいままでの能力は変わりませんけどすこし変化した
だけです」

「だからといってなぜ避けることができたのだ？」

「――スキル・アイ超能力ノ眼――マルチ・アイLevel――多機能ノ眼――の中の1つ能力

――天眼――です」

「天眼だと」

佐門が相づちをした。

「天眼は僕の周り半径300メートルなら空中での視点で見ることが可能です。でも壁とかのすり抜けとかは無理ですけど、どこに人がいるのかもわかります。でもあまり距離を広くさせると顔とかはわかりませんけど」

「だからさつきまでずっとその能力を使いながら戦い、そしてさつきの攻撃を見抜いたのか」

「そうゆうことです。でも、もう体力的のやばいのでそろそろ決着付けさせたいと思います」

「同感だ」

その言葉と同時に2人とも同時に構えた。

（ハアハア何とかここまで耐えましたけどやっぱりこれ以上は無理ですか。3人も無理しているように見えますし、やっぱりあの手でいきましょう）

ソラはスタンガンを手にした。

「行きますよ!!」

「おう!!!!」

その言葉と共に2人は走り出した。しかしここでハッキリしたソラの不利に佐門は心の中で笑った。

「くくく。残念ながらこのリーチ差でこの勝負は完全に俺の勝利となるだろ・・・」

そのとき佐門が目にしたのはソラの手にある溶けかけの氷があった。ソラはそれを佐門に投げつけた。

そのときいきなり溶けかけの氷はいきなり完全な水となりだし、佐

門の服にかかった。

——これはまさか——ウォーターアイス水十氷か!!

そのときソラにスタンガンの電気が槍のように伸びだした。

——しまっ・・・

しかし気付くのが遅かった。

佐門の棒を超える電気の槍が佐門にヒットした。

その時佐門の叫び声が聞こえたのは言うまでもない。

「なぜだ。なぜお前が氷を持っていた」

佐門が床で倒れながら聞いた。

「あゝあれはもともと僕が自分で作った特別の入れ物で水を入れていたのですよ」

——!!——

「そうゆうことが」

「はい。もうすぐ警察もきます。観念してくださいね」
「くそ」

それがソラ達が聞いた佐門の最後の言葉だった。

第5章終わり。つづく。

第5章 氷の少女・水と氷（後書き）

どうもkuxuです。

今回も読んでくださいますありがとうございます。

次回もぜひ読んでください。

感想もお待ちしております。（ペコッ）

第6章 2つの恋心（前書き）

どうもkuxuです。

すみません。前書き何も思いつかなくて。

第6章 2つの恋心

6月4日木曜日。あの戦いから次の日の朝。

ソラはいつもどおり道長と進藤とそして女子の秋と佐藤と遠山しゃべっていた。

「あれ今日は大木さんは来ないのか？」

道長がソラに聞いてきた。

「はい。なんかクラスで用事があるようです」

「ふん」

そのとき教室の後ろのドアが開き、雪が入ってきた。

雪はソラがいることがわかったら鞆を自分の席に置き、ソラ達のところへ来たのと同時に挨拶をした。

「おはようソン君」

「おはようございます雪。とゆうかその呼び名は決まりですか？」

「うん！呼びやすいし親しみやすいから決まりなの」

昨日の戦いがおわったあとソラ達3人は窓辺雫と別れた。

彼女が言うにはそのまま自分の家族がいる場所へ戻るらしい。

ついでにいうと雪がソン君とソラを呼んだときは夕方のときだった。彼女は初めてそう呼ぶとき顔を真っ赤に染まっていた。

優菜はその雪をみて好意を持ち始めたと思っているがこれはオオマジであった。

もちろんソラは気付いていない。

「おまえなんでこんなに早く美人転校生と仲良くしているんだよ。しかもなんかファーストネームで呼び合っているし」

道長がほえた。

そんな道長を無視して雪は話を進めた。

「今日お昼一緒に優菜ちゃんと食べない？私お弁当作ってきたの」「ええ。いいですよ是非知っておいてほしい情報が入りましたし」

そんな会話をしているときまたもや道長が割り込んできた。

「なあそれなら俺も入れてくれないか？」

「却下」

ソラと雪は同時に言った。

そんな言いながら道長は地面に倒れた。

「なあそれじゃあ俺もダメか？」

進藤が聞いてきた。

「ごめんなさい。今回は僕達3人でのお話がしたいので」

ソラは両手の掌を合わせながら謝った。

「じゃあしょうがないな」

どうやら進藤は分かってくれた。

そのとき学校のチャイムが鳴った。

どうやら朝のHRが始まる時間らしい。

教室の前のドアから先生が入ってきた。

「じゃあ後でねソン君」

そう言いながら雪は自分の席に着いた。

「とゆうわけでもうすぐ体育祭だ。もうそろそろ種目の選手決めをしたいので休み時間の内にでも男子と女子は別れて決めてもらうかな」

朝のHRはこんな話題だった。

優菜に聞いたことによるとほとんどのクラスは先生の独自で決められたらしい。

実際体育祭は来週なわけでその前に中間講座が入ってしまっているので効率が悪くそうなっているらしい。しかしさすがの藤谷先生こんなギリギリでも生徒に決めてくれる先生はなかないない。

そしてそのまま時間が経ち昼休みに入った。

ソラと優菜は食堂で雪が作ってきてくれたでっかい弁当を食べていた。

星光高校は敷地内は広くたくさんの設備がある。

聞いたことによるとなんか理事長の旦那さんが本総理大臣らしい。詳しいことはまだわからない。

「雪ちゃんこれすごくおいしいよ」

「え！？そう？」

「ええ。すごいですよ雪」

えへへへ」といいながら照れている顔をしながら雪は頭の後ろをかいた。

「私なんかお菓子ぐらいしか作れないからうらやましい」

ため息をしながら優菜は言った。

「ソン君は料理できるの」

「ええ、まあ」

一人暮らしなのでソラは家事全般は一樣できる。

「ソラ君の料理も絶品だよ」

「じゃあこんど食べさせてよ」

「じゃあこんど僕の家に来てくださいよ。もちろんみんなを誘って」
「うん」

そう会話をしている間に食事は終わった。

ソラ達は教室に戻るときにある話をした。

「熊田さんに聞いたことによるとまだ佐門さんはまだ尋問に掛かっているらしいですよ」

「ねばるねえ」

雪がお茶を飲みながらつぶやいた。

「熊田さんがさっさとしろってばやいていました」

「あはははは」

優菜が愛想笑いをした。

ちょうどキリのいいときに教室についた。
入ろうとしたとき藤谷先生に呼ばれた。

「長門、おまえに手紙が来ていたぞ」

なんで学校にソラ宛ての手紙が来たのか。その疑問は送り主ですぐに分かった。

ソラは自分の机に座り優菜と雪の前で手紙を開けた。

「やっぱり雫さんからです」

「なんて書いてあるの？」

「ソン君呼んで呼んで」

「え」と、『お元気ですか？ソラ君、優菜ちゃん、雪ちゃん。私は家族と再会し、今は普通の生活をしています。と言ってもまだ1日しか経っていないのに大げさですよ。今回の事件では本当にご迷惑をお掛けしました。これで御礼が出来ると思っていないのですがこれからはなにかあったとき私にも協力させてください必ずや力になってみせます。ではまた会いましょう』ですって」

ソラは手紙を呼んだ後優菜たちに渡した。

「やったね協力者一人追加だね」

優菜が笑顔で言った。

「お、長門たち帰ってきたか」

道長と進藤がこっちにやってきた。

「なにんでいるんだ」

進藤は手紙に気付いたらしく聞いてきた。

「秘密」

雪がそう答えた。

「ふん。そうそう長門男子のほうの選手全部決まったぞ」
「え!？」

さすがにそれはソラも驚いた。

「女子と仲良く食っているヤツなんかほっというさっさと決めてしまおうとゆうことで決めさせてもらった」

道長は恐怖のオーラを出しながら言った。

「と、こいつが提案した」

「やっぱり。大体は想像できました」

ソラはため息をついた。そのあと飲み物を飲みだした。

「ついでにおまえりレーのアンカーな」

「ブッ!!」

ソラから飲み物が吐き出したような音がした。

「うそ、ですね」
「ほんと」

ソラはまた再度ため息をついた。

——最悪です。

「ほかにも競技お前には出てもらうからな。足速いし」

——本当に最悪です。

しかしソラはそのことを言葉に出来なかった。

放課後帰り道。ソラは今だの凹んでいた。

——最悪です。

「ソ、ソン君て運動嫌いなの？」

雪の質問にソラは暗い声で答えた。

「いいえ。好き嫌いと言われたら好きですけど。でもリレーは最後の種目なのでプレッシャーがすごく感じるのです」

「そ、そうなんだ」

「ねえ2人ともあの人はまさか」

優菜が何かに気付いたように話しかけてきた。

「あれ？ソラ君たちじゃあないの偶然ね」

そこにいたのはつい昨日まで一緒にいた人物だった。

「窓辺雫さん。こんにちは手紙読みましたよ」

「あらそうなの？ありがとう」

雫はきれいに微笑んだ。

「でもなんで雫さんがここにいますか？」

「うん。私はここの近くの私立高校に通いだしたの」

雪の問いかけに雫はまた微笑みながら答えた。

「そつえば雫さんは高3でしたね」

優菜が思い出したように言った。

「うん、そうよ。ついでに今は親に頼まれて買出しに来たの」

「家族とも本当にうまくやっているみたいですね」

優菜は感心したように言った。

「で、ソラ君はどうしたの？なんか凹んでいるみたいだけど」

「ええすこし学校でありまして。そうだ雫さんは買出しの途中でしたね。僕も一緒にいいいですか？」

ソラはいやなことを振り切るように言った。

「ええいいけど。なんで？」

「僕1人暮らしなので買出しも自分で行かなきゃならないのです」
「そつゆうことね。ええ、いいわよ」

雫は微笑みながら答えた。

「ソラ君」

「ソン君」

「私も行つていい？」

優菜と雪が急に大声を出した。

この意味を知った雫はいいわよと言った。

「じゃあ行きましょうか」

4人は商店街のスーパーへ向かった。

「ソラ君このジャガイモどう？新鮮だよ！」

「ソン君このニンジンとてもいい色しているよ」

なぜか優菜と雪の勝負が始まっていた。

2人ともソラに好意を持っているのを知っているため、すこしでも自分がとってきた食材を使ってほしい気持ちは両者手に取るように分かる。ついでにそのことに気付いている雫は高見の見物中である。そしてもちろん当の本人ソラは意味が分かっていない様子。てか、まったくわかっていなかった。

「えーと、2人ともなんでこんなに急いでいるのですか？」

「ソン君今日のメニューはナニ？」

「聞いてませんね」

ソラは呆れながら言った。

「別に決まっています。じゃあ早速なので2人が決めてくれますか？そうしたら僕の家でご馳走しますよ」

「「本当！！」」

「え、ええ。なので2人ともそんなに急がなくても大丈夫ですよ・
・て、もういませんね」

ソラが言い終わる前に2人は食材を求めてまっすぐ走り去ってしまった。

「こ、これが脱兎とゆうものですか」

「ソラ君それちょっとちがうし、火に油を注いじゃっているし」

見ていた雫がソラにツツコンだ。

「ま、僕は別の日の食材も買っておきますか」

ソラは別に気にしないでつぶやいた。

「マイペースね」

そう雫が呆れながら言った瞬間ある人物がいきなり帰って来た。
その人物とは優菜のことだった。

「ソラ君これなんかどう？」

それを見たソラは呆れながら言った。

「優菜これはお菓子を作るための材料ですよね？」

そう優菜が持ってきたのはホイップクリームやら、小麦やらペイキングパウダーなのなの。

これは明らかに晩御飯で使う食材でない。

「私お菓子作りしか出来ないからこれぐらいしか思い出せなかったの」

——ハア

ソラはため息をこぼした。

「しかたありませんね今度僕もお菓子作りに挑戦してみますよ」
「うん！」

優菜はその言葉を聞いた後顔を笑顔にした。
そのあと次はちゃんとしたものもってくるねと言ってまたどっかに言った。

「あ、いたいた。ソンクーン♪」

次は雪がスーパーのドアから入ってきた。
もしもこれがテレビなら全員すっころんでいた。

「なぜに外から来ているのですか？」
「うん。スーパー以外にも八百屋さんとかお肉屋さんとかに行ってきたの」

雪は買ってきただろうと思われる袋を見せながら言った。

「わざわざありがとうございます。でもこれじゃあもう買ってしまう

っているのでその材料で料理しますか」

「おねがいしま〜す」

雪は敬礼しながら言った。

そのあとすぐに優菜が来た。

「ソラ君これはどう？」

優菜が持ってきたのはパンだった。しかもサンドできるタイプ。
ソラは雪が買ってきた袋の中を見た。

「よし決まりましたよ今日の晩御飯」

帰り道。優菜と雪はものすごく笑顔で歩いていた。

「で、ちゃんと決まったんだね」

雫がソラに聞いてきた。

「ええ。でも雫さん。あなた途中どこに行って来てたのですか？」

「うん。私の買い物はすぐに終わったからソラ君たちのことずっと黙って見ていたの」

「な、何ですかそれは」

でも実際雫は結構楽しんでいた。
そのときだった。

きやあああああああああ！！！！

という叫び声が聞こえた。

「ひ、引ったくりよ」

——なんかありそうなパターンきたー！！

4人は同時に同じことをツツコンだ。

「引ったくりって」

「この時代にまだ発生していたのね」

「てか今の叫び方も古典的ね」

「なんか最近古典的なもの良く見ているような気がします」

そんなことをいつている間に犯人はダッシュで逃走中であつた。結構早い

「しかたありませんね」

これ持っていてくださいと言ってソラは買い物袋を優菜に渡した。ソラは犯人を追いかけるように走り出した。

しかしソラも足は速いほうだがいくらなんでも距離が開きすぎた

——しかたありませんね。

デジタル・ベルト
——電子ノ帯——発動！！

ベルト
帯はまっすぐ犯人の足の巻きついた。

そしてそのまんま転んだ。こうしている間にソラは追いつき縄で犯人を拘束した。

事件はすぐに解決した。

そのあと3人とも追いついてきた。もちろん被害者を連れて。

「ソン君熊田さんに連絡しといたよ」

雪は携帯電話を片手で持ちながら言った。

被害者は普通に歳40代ぐらいの人だった。

「ありがとうございます。このお礼はいつか必ずします」

「いいですよお礼なんて。いらないです」

ソラは微笑みながら言った。

「ほ、本当にありがとうございます」

女性はきれいにお辞儀をしてくれた。

「じゃあ私も帰るわね」

雫が言ってきた。

「はい。ではまた会いましょう」

「ええ」

そういつて雫はソラ達とは違う方向へ行った。

「じゃあ僕達も行きますか」

「うん」

そしていろんなことがあったが何とかソラの家へ帰ってこれた。
玄関に入ってきたとたん優菜と雪は感激と嬉恥ずかしい気持ちでい
っぱいだった。初めて好きな人の家に来れた2人は言葉が出なかつ
た。

上がっていいですよ。ソラに言われたのでリビングに入った。

そこはまるで本当に男子の一人暮らしですか！と問いただしたいほ
どのきれいなリビングだった。テレビは結構でかくさらにはソファ
はくの字のようにきれいに並べておりテーブルの上には食事が必要
の無いものは一切無かった。

「すごいね。これ本当にソラ君一人で暮らしているの」

優菜はやつと声が出たように自分でもビックリしながら聞いた。

「ええ。まあ一人なので掃除が行き届いて異なところもありますけ
どそれは勘弁してくださいね」

ソラはさっき買ったものをキッチンの上で整理していた。

「逆に汚いところを探すほうが難しそうね」

雪は意識を取り戻したかのように会話に加わった。

「では今から調理しますのでテレビでも見ていてください」

「ソンく〜ん」

「なんですか？」

「ソン君の部屋見てみたいな」

好きな人の部屋を見てみたいそう思えるのは恋する乙女の特権だ。

「別にいいですよ。2階に上がって鍵が開いている部屋ですよ」

―サラッ

と、効果音が聞こえそうなくらいアサツリ言ってくれた。

2人は分かったと言って2階へ行った。

確かに部屋が開いているのはこの部屋だけらしい開けてみるとそこはさっきのリビングに衰えないぐらいのきれいな部屋があった。

ベットがあり、大きな本棚が2個ぐらいあり机には勉強セットとノートパソコンがあった。

普通にシンプルな部屋だが2人にとっては大きな感動であった。これも恋する乙女の特権だろう。

その後2人はソラに了解を得ているいる家を見物させてもらった。そうしている間にソラの料理が完成した。

そのメニューとは・・・ハンバーガーであった。普通にシンプルなハンバーガーであった。

「2人が選んでくれたものを合わせるところになってしまいました。一樣ハンバーグにはいろんな野菜をいれておいてすこし栄養間があるものに仕上げてみましたがどうですか？」

それを聞いた後優菜と雪はハンバーガーを口にした。

――う、うまい――！

「すごいよソラ君本当においしいよ」

「あ、ありがとうございます」

「なんか今日はこのために時間があつたように思えるね」

「ふふふ。そうね」

「ですね」

ソラは久しぶりにこんな楽しい夜を過ごしたそんな気分だった。
最近であった人たちの楽しい時間これがいつまでも続きますように。
そう願いながら。

第6章おわり。つづく。

第6章 2つの恋心（後書き）

どうもkuxuです。

どうでしたか？初めてS Iも事件もないお話でした。

今回は2人の恋心を中心に書いてみました。

次回もまた見てくださいね。感想もお待ちしております。

第7章 大聖堂（前書き）

今回はある企画があります。
詳細は後書きで・・・

第7章 大聖堂

6月7日日曜日。ソラは優菜の提案で雪をもつと遠くのところへ案内したいと言うから駅前まで来た。

「あ、ソラ君きたきた」

「結構早く来たねソン君」

もう優菜と雪が待ち合わせの場所まで来ていた。ついでに今は約束の時間の5分前である。

「2人とも早いですね。まだ5分前なのに」

「そういつているソン君だってその5分前にきているじゃん」

雪がソラに指を差した。

「まあ一様待たせないようにこの時簡にきたのですがもうちょっと早いほうが良かったですかね」

「え！それって」

今の言葉に優菜が反応した。そのときの顔は何かを予想したらしく赤かった。

「ほら。やっぱり人を待たせるのは失礼じゃないですか。そう思いまして」

ソラがそう言った瞬間に優菜の顔は元に戻り代わりにショックを受けた顔になった。

「鈍感」

ぼそと雪が言った。

しかしソラには聞こえなかったようだ。

「まあここで立ち話もなんですから早速電車に乗りましょうか」

「ねえ。一つ思ったのだけど」

「なんですか」

雪が質問してきた。

「私たちの制服って結構珍しいデザインだね」

「ええ。確かにそうですね」

星光高校の制服はブレザーで色は白と学年色を使っている。ソラ達1年は赤で2年生は黄色で3年生は青である。学年色は年が経つことにループするために3年間一緒の色になる。

Yシャツは普通に白で、ネクタイも学年色。ブレザーの襟は黒に学年色の線がある。

話は戻すがソラ達は本にいた最寄り駅、星大駅せいたいえきから電車に乗った。

ソラ達が暮らす星大は都会と言えば都会だが基本的には駅前の商店街ぐらいいしか学生が集まれる場所はない。理由はここは学校が有名なところなのである。高等学校は都立星光高校そして私立星道高校せいどうこうである。ついでに県はこの星道高校に通っている。

「で、これからどこに行くの？」

雪が聞くのもしたがないそのことはソラさえも知らない。今回はすべて優菜に任せてある。

「うん。今回行くところは大聖堂だいせいどう駅に行くの」

「ああ、じゃあまずあそこに行くのですね」

「あそこって？」

「ここら辺で一番有名なデパートです」

ソラ達が住んでいるところは東京の見られないところにありたくさんの町で作られている科学都市なのである。

その名は「星の集まる場所」通称「オールスター」と言われている。全ての最寄り駅は全て1つの町の名前で通っている。ほかの東京の土地に行くためには別の電車に乗るしかない。しかしそんなに広くないので電車で1時間ていどで一周できる広さである。しかし科学の発展はどこよりも高い。

一つ一つの町には一つの有名な場所がありその中心に町が作られている。

大聖堂は一番のショッピング広場と有名でそのデパートは知らないものはまずいない。

つまりさっき説明した星大は学校中心とゆうわけでもある。

電車に乗って10分後、大聖堂駅に着いた。

「ここが大聖堂が始めてきたよ」

雪がうれしそうにはなっていた。

「まだ転校してきて一週間も経っていませんもので」

「うん。だからここを一番紹介したほうがいいかなと思ったの」

「いいと思いますよ」

ソラは優菜の頭をそつと撫でた。優菜は照れくさそうに顔を赤くしていた。

「ねえ。速くデパートへ行こうよ」

「ええ。そうしましょうか。ん？優菜どうかしましたか？」

「う、うん。なんでもない。ないんでもない」

優菜は両手まっすぐに前にむけて大きく顔を横に振った。

「鈍感」

雪、本日2度目の言葉だった。

ソラ達は大聖堂のデパート前に来た。

「大きいね」

雪が驚きながら言った。

「ここで一番有名なのはうなずけますね」

「さあ中に入ろうか」

優菜が2人を先導した。

さすがはと言うべきか中はものすごく綺麗で広がった。開店からまだそんなに時間が経っていないのに結構人がいた。なのにその綺麗さは衰えていなかった。

「で、どこから見て行きますか？」

ソラは優菜に聞いてみた。

「うん。まず服を見ていこうかなと思っているの」

優菜は笑顔で言い切った。

——え！？なにこのお約束の荷物持ちパターン。
しかしソラにとってはいやな気がしかなかった。

「うん。いいね」

「じゃあ決まりだね」

しゅーりょう。

「ちょっとまってください。別に服を見たり買ったりするのは別で
すけど僕にすべてその荷物を預けるのはやめてくださいね。多分全
部持てませんから」

——ギクッ！！

2人から変な効果音が聞こえてきた。

——やっぱりですね。

「優菜は知ってますよね。僕がそんなに腕力が無いというのは」

そう。ソラの腕力と握力はなんと高校男子の平均以下である。その
ため力仕事は彼のニガテ分野なのだ。逆に脚力はハンパなく強い。

「うん。それもそうだね。それじゃあすこし遠慮はしますか」
「そうね。ソン君の頼みだしね」

どうやら2人ともそこぐらいは分かってくれた。

ソラも安心のため息をした。

本人もここまでできたら荷物持ちは免れないだろうと思っている。

「「だけど・・・」」

右は優菜、左には雪がいきなりソラに腕組みしてきた。

「な、なんですかいきなり」

「一度やってみたかったの」

「うんうん」

——あ、そうですか。

多分理由を聞いても意味は無いだろうと思ってソラは理由を聞かなかった。

しかし学校でも可愛いと評判の2人歩いているとちよくちよく男がチラ見してきた。

その男共から聞こえてくる言葉はほとんどが、うらやましい、きれいな娘だな、なんだあの男、とかをあちこち言っていた。

しかしソラにはまったく意味は通じてなかった。

しばらくして目的地の服売り場まできた。

「ねえソラ君これにあっているかなあ？」

「ソン君私にもあっている？」

「え、え」と

しかし服売り場にきてから10分後2人は自分が似合いそうな可愛い服をソラに見せてきた。しかしソラにとって似合っているのか似

合っていないのかの区別はまったく出来ていなかった。ソラにとってはオシャレは縁が無いことであり今ソラが着ているパーカーだつて動きやすいからこの服にしているだけのこと。つまり、ただいまソラは2人のほめ言葉を考え中。しかし出てきた言葉は。

「い、いいじゃないのですか2人とも。うん。とてもお似合いですよ」

「そ、そうかな」

「ありがとうソン君」

なんとかソラはこの危機を回避できたわけである。と、いうわけでもなく。

「じゃあこれはどうかな？」

——へ？

ソラは優菜の言葉に耳を疑った。

「まだまだ選んでもらうからね。ソン君」

——ええええええええええ！！

ソラは心の中で叫んだ。

昼頃。ソラ達はデパートのカフェで昼ごはんを済ませたところだった。

優菜と雪はソラに服を選んでもらったのか（正しくは似合うかと聞いてきただけ）ものすごい笑顔だった。

「このあとはどうしますか？優菜」

ソラはコーヒーを飲みながら聞いた。

「うん。あとはデパートだけじゃなくって大聖堂のほかのところも案内しようと思うの」

優菜はチョコレートパフェを食べながら言った。

「優菜ちゃんは大聖堂に詳しいのね」

雪はストロベリーパフェを食べながら聞いた。

「うん。昔良くお母さんにつれてもらってくれたの。ついでに言つと私の両親はここで働いているの」

「ああ、そうだったんですか」

「うん。じゃあもう少ししたらいこうか」

そう言いながら優菜はパフェをスプーンですくって口に含んだ。

「へえ〜。ここは本当に星大より本当に店が多いのね」

雪がはしゃぎながら言った。

「じゃあどこに行きたい？」

「じゃあ本屋にいききたいんですけど・・・」

しかしソラの言葉はある言葉で遮られてしまった。

「じゃあ、あそこのゲームセンター」

雪は指を差しながら言った。

――・・・あ。

「あれ？ソラ君なんか言ってた？」

「い、いいえ。なんでもありませんよ」

「だったらいいのだけど」

そついいながらゲームセンターに入った。

そこには見知れた2人の顔が見えた。道長と進藤だった。

「よお長門じゃないか奇遇だな」

進藤がソラだけを見つけて声をかけてきた。

「あれ！？2人ともきていたのですか」

「おうよ。長門は誰かと来ているのか？」

道長の質問にソラは少し手間取った。

「えーとそれはですね」

そう言ったとき優菜と雪がこっちに来た。

「どうしたの？ソラ君？」

「あー！道長君と進藤君だっ」

この瞬間道長の雰囲気が変わった。
そう思ったとき、ソラが道長の方に顔を向けると、いきなり道長に
両肩を捕まれた。すごい力だ。

「お、おまえ」

道長は泣きそうな声で言った。顔は下を向いて分からなかった。

「なんじえおまへだけ女の子といっじよにあぞんでいるんだよ」

いきなり道長は顔を上げた。その顔は涙と鼻水でわけ分からなくな
っていた。とゆうか汚いかった。

「えーい！泣くな！！わめくな！！うっとおしい！！！！」

進藤がツツコンツだ。ついでにソラもそのことは同感である。

「と、とりあえず鼻かんでください」

ソラはティッシュを道長に渡した。

「お、おう。サンキュー」

「で、話戻すけど、長門たちはどうしたんだ。ついでに俺達は暇つ
ぶしだ」

「ええ。雪がまだ転校してきてからまだろくに町を案内していませ
んでしたから、なので今日はその案内をしているわけです」

「なんでそんなことなら俺も呼んでくれよ」

いまだに泣いていた道長であった。

「そのことにたいしては優菜と雪が拒否したので。て、あれ？道長は？」

ソラは話の途中にいなくなった道長を探しながら言った。

「あそこで拗ねているぞ」

「あー！！」

道長は隅っこで体育座りをしながら泣いていた。

「やっぱり呼ばれなかったことにショックだったんですね」

「いや、理由はまだほかにあるからな」

進藤が呆れながら言った。

そのとき、優菜と雪がソラを呼んできた。

「ソラ君こっち来て」

「俺たちのことはいいからあっちいきなよ」

進藤がソラの背中を押した。

「そ、そうですか。じゃあ2人とも明日学校で」

「おう」

「速く行こうよソン君」

ソラたちは進藤達と別れたあと、連れて行かれた場所はクレープ屋だった。

「私、こんなクレープ屋さんなんて始めて♪」

雪は目を光らせて言った。その輝きは星のように見えた。

「雪はクレープは食べたことあるのですか？」

「クレープは食べたことあるけど、こんなふうに売っているところを見るのは初めてなの」

「じゃあ食べてみますか」

「うん」

こうして3人はクレープを買うことにした。優菜はクレープで、雪はチョコを選んだ。しかしソラはまだ買っていないかった。それもそのはずソラはあまりこうゆうふうの食べ物あまり買っていない。1人暮らしなのであまり外で食べないのもおかしいがソラは自分が食べたいと思ったものは自分で作ってしまう癖がある。そのため、とくに女の子が行きそうな店はまったく行ったことが無い。なので、ただいま何を買うか悩み中。

「2人はあそこベンチで先に注文して食べておいってください」

「だったら私たちが選んでもいいかな？」

雪が提案してきた。

「別にかまいませんよ。だったらみんな違うものを買って食べ比べはどうですか？」

ーピクッ

優菜と雪の耳が反応した。

「ソ、ソラ君それはどうゆう意味で言ったの？」

優菜が思いつきり睨みながら言った。

「えっと、意味とゆうかやっぱりさっそくなのでたくさん種類を食べられたら得じゃないですか」

「ソン君私それ賛成」

「わ、私もすこし考えていた意味とはちがうけど賛成だよ」

雪と優菜は手を上げながら大声で言った。

その大声が聞こえたのか分からないがまた知り合いにあった。今度は女子3人組みだった。

「な、長門君？ぐ、偶然だね」

秋が緊張しながら挨拶した。

「おや。いつもの2人も一緒なんだ」

遠山はアイスを食べながら言った。

「でもなんでここに3人で一緒に居るの？」

佐藤はカップアイスすくって食べながら言った。

「僕達は雪のために町案内をしています。崎野さん達は？」

「私たちはテストが終わったから久しぶりこっちにきたの」

混乱している秋はほつといて、佐藤は話を進めた。

「で、長門君達はクレープ食べる気だったの？」

「ええ。まあそうですね」

「ソラ君あっち行こう」

優菜がいきなりソラの右腕に腕組した。

「ねえソン君あっち見に行きたいな」

雪も左腕に腕組した。

「わかりました。じゃあ3人とともにまた学校で」

「美女2人と腕組しているなんてさぞかしいいご身分なんでしょうね」

遠山がくすくすと笑いながら言った。

「変なこと言わないでください」

「あれ長門君？どこにいくの？」

我に返った秋はソラを探した。しかしそこにはもうソラ達の姿は無かった。

「あれ長門君は？」

「秋ちゃん。もう行っちゃたよ」

「ええええええええええええええええ」

秋の大声が周りに響き渡った。

「いきなりなんですか2人とも」

腕を組みながらソラは優菜と雪に引っ張れていた。
そしたらいきなり2人は止まりだした。

（うゝさっそくソラ君と一緒にクレープ食べられていたのに）
（なんであんなときに邪魔が入っちゃうのかなあ）

優菜と雪はまるで以心伝心したかのように言葉をつなぎあった。

「あ、あのゝ2人とも、どうかしたのですか？」

ソラは不安そうに聞いてきた。

「「なんでもないよ」」

そう返した2人だが額にはクッキリ怒りマークが浮かび上がっていた。
た。

——あれ？なんか怒ってませんか？

その怒りマークはいくら鈍感なソラにも見えた。

困りながらソラは周りを見てそこに公園があつたのを見た。

「あそこですこし休憩しませんか？ジュース奢りますよ」

ソラは土壇場ででた言葉を言った。

「うん。もらっ」

「じゃあ私炭酸系の」

ご機嫌がよくなった2人はソラにそう言って公園の中のベンチに座った。

「何でこんなときに知り合いと良く出ちゃうのかな？」

優菜がため息をついた。

「ほんとよね。ソン君はなにも感じていなそうだけど」

雪もため息をついた。

「なにため息をついているのですか2人とも」

「「わあ！！！」」

急にジュースを買いに行っていたソラが現れた。早くも買って帰ってきたらしい。

はい。とジュースを2人に渡したあとソラはベンチの横で立った。

「ふう。やっぱりこうゆうのはいいですね」

「え」

優菜が聞いてきた。

「ほら最近、とくに優菜はS I関係の事件に遭遇しまくっていたじゃないませんか。だからこんな時間が作れなかったですね」

「そういえばそうだね」

「ソン君と優菜ちゃんはいつ出会ったの？」

雪が飲みながら聞いてきた。

「まだ1ヶ月も経っていませんよね」

「そうね。雪ちゃんと会おうまでソラ君とあってからの休みの日はすべて事件ごとだったもんね」

優菜が飲みながら説明した。

「そういえばソラ君の左目で何回使っても平気なの？」

次は優菜がソラに質問した。

「ああ。超能力スキル・アイノ眼ですか。そうですね、いまのところLv0ターゲット目標ト・メモリーノ記録以外はまったく負担がかかりませんね。しかもLv1多機能マルチノ眼は別に輪リングを出さなくてもいいのですけど、そっちのほうが見やすいですし、超能力スキル・アイノ眼になってからはSI反応もキャッチできることが出来ようになりました。こんなふうに」

そう言つてソラは超能力スキル・アイ・リングノ眼・輪リングを発動した。
ちなみにLv1は輪リング無しで右目でも見えるが出したほうが見やすいし、つかいやすいのだ。ついでに輪リングを出していてもLv1なら右目でも出していない状態で見える。

「あー!!」

発動した瞬間、ソラは何かを見つけた。

「空にSI反応があります」

「え!？」

「それってSI使い？」

状況が理解した2人はイスから離れた。
そしてソラは何かを見たらしく真剣な眼になった。

——これは。

「魔獣です。鳥型の」

「どうするの？ソラ君」

「雪そこらへんの水を氷に変えてください」

「なんで？」

「こちらがS Iを使えばそれを探知してこっちに来るはずです」

「わかった」

雪は公園の蛇口についている一滴の水を水十氷で氷ウォーターアイスに変えた。

鳥型の魔獣はそのS I反応をキャッチしたのかソラ達のもとへ行き
よい良く飛んできた。

「成功です。2人ともいまは人気の無いところへ行きましょう」

ソラはそう言いつつ走り出した。優菜と雪もソラに付いて行った。

「これからどうするのソラ君」

「いい作戦があります。2人とも良く聞いてくださいね」

その時ソラはまだ発動していた超能力スキル・アイノ眼の天眼を使っていた。

「いいですか。この作戦は早さが大切です。でもくれぐれも無駄は
しないでくださいね」

「うん」

そう言ったあと雪はソラ達と違う方向へ走り出した。

ソラ達はそのままビルとビルが挟まれている狭い道を通っていた。

「距離は約50メートルですか。何とか時間稼ぎができればいいのですけど、問題はあの破壊力がありそうな角ですね。周りに電気が発していますね」

ついでにソラたちは普通に見たらどんな鳥なのか見えはできない、なのに角が生えているのは少し遠くても見えるが電機が発しているのは見えない。まして、ソラが言った距離は本当に正確だった。

ソラの超能力^{スキル・アイ}ノ眼^{マルチ・アイ}Lv1多機能ノ眼の一つ、スコープと距眼である。スコープは輪が発動しているときでしか発動が出来ないが、自分で見たものを近くさせたり遠くさせることが出来るのだ。簡単に言えばカメラのズーム機能と同じだ。

距眼は自分が見た距離や測りたい距離を見れば測ることが可能である。それも天眼で見た距離も同じである。

ソラ達は思いつきり走っているがソラの足の速さに優菜はついていけない。

（このままじゃ優菜が危険ですね）

ソラでもこのままじゃ追いつかれる状況なのに優菜はソラよりも足は速くはないしかも体力が残らなきゃ^{ライン・シールド}線ノ盾が発動できなくなってしまう。

——もうこの方法しかありません。

ソラは急に止まりだし、優菜の後ろに立った。

「優菜。僕がああ魔獣と食い止めていますから体力の回復とS.Iの

準備お願いします」

「え！？でもそれじゃあソラ君が危険じゃないの？」

「僕のことは気にしないでください」

「で、でも」

優菜は疲れてもなおソラの心配をしてオドオドしている。

「優菜早くしてください」

「そ、ソラ君怪我しないでね」

優菜はそう言って走り去って行った。

「さあ、行きますよ」

— デジタル・バンド
電子ノ腕輪— 発動！！

ソラは魔獣の羽に向かって帯を放った。^{ベルト}

しかし魔獣は避けて、ソラに突っ込んできた。

ソラはそれを恐れずにさっき放った帯を思いっ^{ベルト}きり振りかぶって魔獣の目線の邪魔をした。その一瞬を見逃さず、ソラは魔獣の突進を避けた。

（やっぱり速さでは適いませぬ。動きを封じる前にこっちが倒れそうですね）

ソラはバックステップをしながら魔獣との距離をとった。

— デジタル・スピア
電子ノ針—

ソラは魔獣に向かって針を放った。^{スピア}

魔獣は回転して跳ね返した。その隙にソラは思いつきり後ろへ走った。

（準備は終わったようですね）

魔獣はソラを追って来た。魔獣はそのままソラに突進する気だ。

——ただの突進になら簡単に避けれます。

ソラは縄を使い上へ逃げた。魔獣はそのまま透明な壁へぶつかった。ぶつかった壁は優菜のS I線ライン・シールドノ盾だった。

ソラが地面へ着地したとき優菜がビルの隙間から出てきた。

「捕まえた」

魔獣の周りの透明な壁が現れた。そのせいで魔獣は上以外逃げられなくなった。

しかし、もう遅い。魔獣の上からたくさんの氷柱が降ってきた。もう魔獣には逃げる術は無かった。

この戦法はおなじみ高さ＋重力によるものあった。ソラが魔獣を挑発し、優菜が動きを止め、雪が高いところから氷柱を落とす作戦だった。正確には雪は水を水鉄砲で飛ばしそれを

ウォーターアイス
水十氷で氷化させたのだ。

魔獣は氷柱に当たった。ソラ達が姿を確認する前に魔獣の姿は無かった。

さっきの魔獣はS Iだけで作られた存在、それでも戦闘レベルは低いものだった。

「終わりましたね」

ソラ達はあとでまた公園で集合した。

次の日。ソラは歩きで学校を通学していた。

その時曲がり角で少女とぶつかりそうになった。

少女の髪はすこし茶色が混ざった黒髪とリボンを後ろで軽く結んでいた。

「う、ごめんなさい」

そういつてその少女は走り去ってしまった。

走っていった方向は私立星道高校だった。

しかしそんなことはソラにとってはどうでもいい。彼には違うことが気になっていた。

ソラの目は輪^{リング}を出していなくても正確な場所は分からないが少しだけSI反応を感じ取れる。つまりさっきまでSI反応は無かったのに彼女が現れたとたんに反応が出た。

——彼女はSIの使い手ですね。

第7章終わり。 つづく。

第7章 大聖堂（後書き）

こんにちはkuxuです。

突然ですが、今回からS Iの募集をします。

あなたが考えたS Iはもれなく小説に載せます！！

僕が気に入ったのがあればレギエラー化もあります。

感想と同時に待っています。

ではまた会いましょう。

第8章 放課戦争・出会い（前書き）

今回の話はなんだかサブタイトルが決めるのが難しかったです。
話とサブタイトルが合わなかったときはご勘弁してください。

第8章 放課戦争・出会い

6月8日 月曜日。

ソラは朝に会った少女のことを気にしていた。

——確かにあそこで感じたS I反応は彼女から来ているものだった。

彼女が今いる場所はわかる。制服と向かった場所は確かに私立星道高校だ。

しかし自分がそこに行つてどうする。何も出来ないじゃないか。しかしソラは彼女が自分がS Iを持っているのを知らない感じだった。

「おい長門ここを読んでみる」

先生に呼ばれた。そう今は授業中だった。しかしソラは普通どつりに言われたところを呼んだ。

「オイ、長門この写真こう落書きするとおもしろいぞ」

ソラの後ろの席の道長が話しかけてきた。しかしソラは思いっきり無視だった。

悩み事をしているのも確かだがそれとはべつに今はただ関わりたくない気持ちのほうが強かった。

「おいそこ！うるさいぞ」

古臭い先生のチョーク攻撃が道長のデコにヒットした。

「ねえなんであそこで無視していたの？」

放課後の帰る前ソラは道長の話し相手をしていた。

「べつにお前に対しての無視なんて日常茶飯事じゃねえか」

進藤が道長に言った。

「それよりもあの先生の授業で話しかけてくる人がいますか」

さっきの先生はチョーク投げが得意で怖いと言われている先生だ。

「うつつ」

「簡単に言えば自業自得だな」

「あ・・・そう」

進藤の言葉で道長は返す言葉も無くなったみたいだ。

「じゃあ僕は帰りますね」

ソラが鞆を持って席を立った。

「あれ？大木さんと冬野さんはどうした？」

進藤が聞いてきた。

「あの2人は用があるといって先に帰っていきましたよ」

「じゃあ今日は俺たちとゲーセンへ行かないか？」

道長が誘ってきた。

「遠慮します。今日は一人で帰りたいので」

そう言ってソラは教室を出た。

ソラは一人で歩いていた。

（そういえば一人で帰るのは随分久しぶりですね）

最近は出会った人は増えた。中学のころは話ぐらいしかクラスではいなかった。そう進藤、道長、秋以外は。

ソラはそう思っ一人の時間を満喫していた。
しかしあるときまた同じ曲がり角で人とぶつかり掛けた。いや、今回はぶつかった。

「いてて。あ、大丈夫でしたか？すみません少しボーとしていたもので」

ソラが手を捧げた相手は朝の少女だった。

「いえ、こちらも周りを見ていませんでしたからお気遣いありがとうございます」

その少女も朝会った少年だと分かったらしく随分驚きだした。

「え！？あの朝にもあなたとはお会いしましたよね」

女性は丁寧な言葉で聞いてきた。

「ええ」

「ほ、本当にごめんなさい」

「いいですよ。こっちの不注意でもありましたから」
「で、でも」

少女がしゃべっている間ソラは別のことを考えていた。

——やっぱりSI反応は彼女から来てますね。

「でもなんでこんなに急いでいるのですか？」

ソラは聞いてみた。

「ええ。何か最近変な人に追われているような気がするのです」

「追われる様な心当たりはありますか？」

「いえ。ぜんぜん有りません」

彼女は困ったなという顔をした。しかしソラも同じだった。

——彼女はまさかSIの存在を知らないのですか。

「あ、申し送れました。私、くらたあかり倉田朱里といます」

彼女はお辞儀をした。

「あ、長門ソラです。それで倉田さんあなたが追われているのは確か
なようですよ」

「え!？」

「少し待ってください」

そう言った後すぐにソラは―デジタル・ヘルト電子ノ帯―を近くの電柱に放った。

「グエツ」

ソラが捕まえた男は黒いスーツを着ていた。ついでにグラサンもしていた。

（すっげ〜怪しい人ですね）

ソラは呆れながらそう思った。

「あなたはなぜ倉田さんのことを追っていたのですか」

ソラは男に質問した。

「あら、うちで雇っているボディガードさんじゃありませんか」

ソラはまるでコントをしているかのように転んだ。

「ボディガード？」

ソラはいやな顔をしてツツコンだ。

「なんだねそのいやそうな顔は」

男は不機嫌になりながら言った。

「そんな怪しい格好をすればだれだった変だと思えますよ。とゆう

か、あなたが隠れながらついていけば誰だって怪しいと思います！」

「まったくお嬢様が逃げるから」

「ちなみに倉田さんはこのことは知っているのですか？」

「いいえ知りません」

倉田はキツパリと言った。

「まったくお嬢様勝手に逃げないでくださいよ」

男が口を尖がらせながら言った。

「なにも知らないのに追われていると思えば誰だって逃げますよ。普通に」

「しかしお嬢様。私が隠れているのを良く見破りましたね」

男が得意げに言った。

「まあ、あんな大荷物で隠れとけば子供でも見つけるのは簡単ですよ」

ソラが近くにあった電柱の隣にある大きなリュックを指差した。

「ああ、なるほど」

「あなた、バカですよね」

「ええ。バカですな」

「お嬢様そこは否定してください」

「それですけれどまさか倉田さんのお宅は大金持ちですか？」

ソラが話を変えた。

「まあ自分か言っても分からないですし、しかも私はボディガード

を頼むお金なんてあることも知りませんし。まあ心当たりはお父様が会社の社長をしているのは知ってます」

「ああ、だからですね」

2人は理解できたのかさっきの男を睨んだ。

「あなたにはすこし話をしましょうか」

「私は何も知らないなんていやよ。自分のことは自分でやるわ」

「倉田さんなんか変です」

「へ？」

「つまりなんか変なやつらが倉田さんを狙っている」と

「そうです」

ソラ達は男からたつぷりと話を聞いた。

「それはあなたじゃないのですか？」

倉田は男を指差した。

「いや、もうその話は結構ですから。でもそれが本当なら倉田さんの身に危険がありますね。最近変な事件が多いですし」

と、いつでもそれはソラの周りのことだけだが。

「どうしましょうか」

「僕が倉田さんの近くにいればいいのじゃありませんか？」

「え！？」「」

さすがにこの言葉はダレもが驚いた。

「僕、警察に知り合いがいますからそのことの調べは任せてもらいます。それにこの人よりは役に立てる気がします」

「で、でもいいのですか？」

「近くの人間の命が危ないのに見過ごしていられませんかよ」

——それにS Iのことも気になります。

「ありがとうございます。でもどうすればいいのですか」

「そうですね。まず情報収集から始めなきゃなりませんから僕はいろいろ聞き込みをしますけど、倉田さんはどうします？」

「私も一緒に来てもかまいませんか？」

「じゃあ、決まりですね」

ソラはケータイを出した。

次の日の放課後。ソラは公園で倉田と待ち合わせをした。

今回は優菜と雪は連れてきてはいない。まだS I関連のことではないので2人を巻き込むわけにはいかないからだ。

「お待たせしました」

倉田が来た。

「長門さんではどこに行くのでしょうか？」

「そうですね。警察のほうからも情報は来てませんからこっちは近くの人からいろいろ聞いてみましょうか。と言うわけで昨日のボデ

イガードさん。詳しいことをお話していただけませんか」

ソラは近くの電柱に話しかけた。いや正確には後ろに隠れている男に話しかけた。

「また見つかりましたか」

男は悔しそうに言った。

「そういえばあなたの名前はなんですか？」

倉田が聞いてみた。

「ええ。私はコードナンバー10085・・・」

「いえ、本名教えてくださいよ」

「はい。角田僧衣かくたそういといいます」

「では角田さんあなたがこのことを知ったのは5日前ですよね」

ソラが質問した。

「はい」

「では角田さんが知らされる前に倉田さんのお父さんに伝えたのは誰ですか？」

「それはもちろん私と同じ仕事仲間ですけど」

「その人とは連絡できますか？それでその人を知った時間と場所を教えてくださいとつたえてください」

「え！？」

角田は少し驚いた。確かにこの事件を解決するためには第一目撃者の質問は基本だけどなぜに彼は詳しいことは聞かないで時間と場所

だけをきいてきたのだろうか。

「おねがいできますか？」

「あ、はい」

角田は携帯電話を取り出して電話した。
どうやら通じたらしく話し込んだ。

「分かりました。どうやら6月4日の夕方4時50分ぐらいらしく、
場所はいつもお嬢様が通学していた道の一番人気の無い道らしいで
す」

「ああ、あそこですね」

倉田が思いついたのか声を上げた。

「では行ってみましょうか」

「ここがその場所ですか」

ソラ達は倉田が連れてきた道来た。

「一様目印をつけておいたと言っていました」

角田が歩道と車道の間にある草むらの中にいた。

「そうですか。でもなんでその目印は草むらの中にあるのですか！
？」

「見つかりました」

「随分早いですね」

ソラと倉田はそこへ行った。

「では、始めます。角田さんは誰もないか見張ってください」

「分かりました」

「倉田さんはこれをもってください」

ソラは倉田にスタンガンを渡した。

「僕が合図をしたらこのボタンを押して僕に当ててください」

「え！？でも大丈夫なのですか？」

「ええ。大丈夫です」

ソラはそう言ったあと、両目をゆっくり閉じた。

——スキル・アイ超能力ノ眼——発動！！

ソラの左目に輪リングが浮かび上がった。

——月日は6月4日、時刻は16時49分。情報は今までの会話。

ソラは目を閉じながら倉谷合図を送った。

倉田はスタンガンのボタンを押してソラに当てた。

——ターゲット・メモリーLv0・目標ノ記憶——発動！！

ソラはそのときの出来事を見出した。

たしかに倉田の近くに2人の男がいた。でも1人は角田と同じスーツを着ているため彼の仲間だと思う。だとしたらもう1人の男が倉田を狙っていることになる。

ターゲット・メモリー
ソラは――目標ノ記憶――を終了させ我に返った。

「倉田さん。とりあえずの情報は取れましたよ」

「そ、それはいいですけど」

倉田の声は何か怯えていた。

「どうかしました・・・あ!!」

ソラが気付いたときには遅かった。なんと倉田を狙っているらしい人物の仲間らしき人がたくさんいた。

「これはやばいですよ。一旦逃げましょう」

「は、はい」

あせった倉田は手に持っていたスタンガンのスイッチを間違えて押してしまった。

しかもそれが倉田の手に当たってしまった。

「痛ッ」

「大丈夫ですか？」

そのときだった。

電気を浴びたほうの倉田の手からいきなり銃が出てきた。

「え!?!なにこれ!?!」

しかしソラ達にとっついていまはここを切り抜けることが最優先だった。倉田は急いで銃の引き金を引いた。しかしこの引き金は軽くそんな

に力を使わなかった。
銃から電気を浴びた弾が発射された。
幸い人には当たらなかったが多くの人が驚。その隙にソラ達は逃
げることができた。

「どうやら巻いたようですね」

「ええ」

「なんですかあの人たちは」

角田が息を切らしながら聞いてきた。

「多分あの人たちが倉田さんを狙っている人たちですよ」

「でもなんで私が狙われているのでしょうか」

倉田も息を切らしていた。

「理由は多分、倉田さんの家族となんかトラブルなんかあってそれ
で腹いせに倉田さんを狙った。そしてもう一つあります。それはさ
つきあなたが今一番に疑問を感じているのと思いますが」

ソラが倉田の手を指差した。

「やっぱりあなたもS Iの使い手でしたか」

「S I？」

「一般には知らされていない人の特殊能力です。と言っても使える
人はごく少数ですが」

「私にこんな力があるなんて知りませんでした」

どうやら彼女は本当にS Iのことは知らないようだ。そしてたっ
いまこの力をはじめて使ったようだった。

「こんなところではゆっくり話も出来ません。どこかで休める場所
はありませんか？」

「ええ。それなら私の家にきませんか？ちょうど近くですので」

倉田が自分の家がある方向へ指差した。

「では言葉に甘えましょうか。ありがとうございます」
「いいえ」

「ここが倉田さんの家ですか」

目の前には少し大きな家が建っていた。ちなみに角田は違う用事で
どこかへ行った。

「大金持ちらしいですのもっと大きい家を想像していましたが、
この近くに豪邸なんて見たことありませんでしたのですこし驚きま
した」

「と、言っても住んでいるのは私と使用人の2人だけですけどね」

そう言つて倉田は家のドアを開けた。そこにはメイドが立っていた。

「お帰りなさいませ朱里様」

「ただいま左京さん」

「おじゃまします」

ソラはお辞儀をした。

「始めまして。ここで雇われせてもらっていますとじりきさきさき轟左京と申します」
「どうもご丁寧に長門ソラです」

ソラにとってはメイドなんて始めてみて少し驚いている。

「あ、始めましてとじりきさきさき轟右京です」

違うところから別の使い人が来た。しかし彼女はメイド服は着ていなく普通に私服だった。

「長門ソラといいます」

ソラは挨拶をした後倉田に聞いてみた。

「あの〜なんで左京さんはメイド服は着ているのになんで右京さんは私服なのですか？」

「ええ。左京さんはなんかメイド服が気に入っているようなのですよ。ここではそんな決まりは無いのですのに」

「そうなんでしたか」

なんか左京さんはすごそうだな。ソラはなぜかそう思った。

「それでこれからどうします？」

倉田に案内されソラは広い部屋に来た。倉田は入れたてのお茶を飲みながら聞いてきた。

ついでにここへ来る前にS Iのことは知っていることはほとんど教えた。でもいまだに倉田のS Iは分かっていない。

「そうですね。とりあえず僕はさっき知ったことは熊田さんにメールで知らせました。でも警察のほうは何もわかっていなそうでした」
なんかまたへんな組織が出てきそう。ソラは少しそう思った。

「しかしそれではこちらにも動きにくいですね」
「ええ」

そんな会話をしていたときソラの携帯から電話の着信音が鳴り響いた。熊田からだった。

「はい。長門です」

『おう。ソラすこし知らせたいことがあるのだからいいか』

「ええ」

『どうやら倉田と言うお嬢さんのお父さんは何かこの前会社で揉め事をしていたらしいぜ。でもその内容はあまりにも酷い物だったらしいから断ったらしい』

「そうですか」

ここまでは予想どおりだった。しかしこうなるとまた組織を相手に戦わなければならないらしい。そう思ったときソラの耳からありえない情報が飛び出してきた。

『ちなみにそのボスが角田というやつらしい』

——角田さん！？そうかそうゆうことでしたか。

『情報はそれぐらいだ。また何かあったら連絡する。じゃあな』
「ありがとうございました」

ソラは携帯を閉じた。

「倉田さん」

その後倉田を呼んだ。

「なんですか？」

「どうやら僕達は罠にかかってし合ったらしいですよ」
「え！？」

次の日の放課後。ソラと倉田は例の公園である男を待っていた。

「どうも遅れてすみません」

そう。呼んだ男は角田のことだった。

「さて、どうゆうことが説明してもらいましょうか」

「さて、なんのことでしょうか」

「安心してください。もうすでにばれていますよ。あなたが倉田さんを狙っている犯人どいうことは」

「な！？」

角田はわざとらしく驚いている。

「結果的に僕達には見方はここには1人もいなかったというわけですか」

ソラは説明を始めた。

「あなたは普通に連絡がつかないことを利用してわざと倉田さんに分かるように尾行していましたね。そうしてばれても見方といってもこの状況ならありえると思ひ込んでしまいましたが。でもこれなら一番ばれにくくしかも怪しまれないというわけですね。簡単に言えば灯台下暗しですね。ついでにあのときのたくさんの部下もあなたの部下でわざとスーツを変えて敵味方を分かりやすく判断させたのでしょう」

ソラが言い終わったとき角田の表情は変わっていた。

「そのとおりだ少年でもなぜそこまでわかった？」

角田が問い返してきた。

「どうやら警察に捕まったお宅の仲間が全て吐いてくれたらしいですよ」

「チッ」

そついい終わったとき角田はポケットに入っていたナイフを出して倉田の首を狙った。

しかしそのことを予想していたソラに手を蹴られて角田はナイフを落とした。

「あなたがなにをするなどお見通しです」

ソラはそついいながら構えた。

「クソ、撤退だ」

角田がそういった後ポケットにあった煙球を地面に投げ捨てた。周り一面が煙に被われた。ソラは倉田の腕をつかみ見失わないようにしていた。

——あの人は忍者ですか？

煙がなくなった後にはもう倉田の姿はなかった。変わりにこんな手紙があった。

『ここで決着を着けようではないか』

そう書いてあった紙と地図が入っていた。

「どうします長門さん」

「もちろん行きますよ」

ソラは手紙をポケットに入れた。

「じゃあ私も行きます」

「危険ですけどいいのですか？」

「かまいません」

「じゃあ行きますか」

第8章つづく。

第8章 放課戦争・出会い（後書き）

こんにちはk u x uです。

今回の話は次回に続けます。

そしてただいまS Iの募集もまだまだ受け付けています。

とゆうか期限は決まっていますませんかいつでもまっています。
ではまた会いましょう。

第8章 放課戦争・電撃ノ銃装備―サンダー・ウェポン―（前書き）

前回の続きです。

これで今回で一樣ヒロインは出し切りました。

またなにかあつたら新しいヒロインを出すかもしれませんけど。

第8章 放課戦争・電撃ノ銃装備―サンダー・ウェポン―

あれから次の日6月11日木曜日放課後。

ソラはある程度の準備を済ませ家を出た。そしてあるビルへ向かった。

そこで倉田と待ち合わせをしていた。

「あ、長門さん来ましたね」

「あのー倉田さんこれはいったいなんですか？」

「え？どうみたってヘリコプターですが」

倉田の後ろには少し小型のヘリコプターが置いてあった。

「朱里様準備はもうできています。いつでもいけますよ」

左京がヘリコプター操縦席から顔を出した。てゆうか操縦できるのか？

「じゃあ行きますか長門さん」

「え、ええ」

なんかややこしいことになりそうですね。ソラはそう思った。

でもたしかに移動がこれなら時間をかけずに行ける。問題は角田がこのヘリコプターを見てどうゆう行動をするのかをソラには予想も出来なかった。

ソラ達はヘリコプターに乗り、そのまま空へ向かった。

「倉田さん本当に大丈夫ですか？」

ソラは心配そうに言った。彼女のS.I.がどんなものかはこの2日間
で分かったが問題は彼女がこの能力を嫌っていることだ。それでも
始めての実戦なわけで不安要素はたくさんあった。しかし彼女は行
くと決めたらしくお人よしのソラには止めることは出来なかった。

「大丈夫です。あの力が無くとも長門さんのサポートはしっかりや
り遂げます」

こんなことを言うのだからもう後戻りは出来なかったわけである。

「無理だけはやめてくださいね。あなたの身になにがあつたらこの
戦いの意味はなくなりますので。これは倉田さん。あなたを救う戦
いなのでから」

「はい。分かっています」

倉田はうなずいた。

「着きました。着陸します」

こんな会話をしている間に着いたようだ。
ソラ達はヘリコプターを下りた。

「やっぱり私もついていきます」

左京が心配そうに言った。

「そうですか。ではまずそのマシンガンは置いていてってくださいね」

左京の両手にはマシンガンが握っていた。
メイド服の人にマシンガンをぶっ飛ばされる。ある意味怖い。

「僕達は殺し合いするわけではないのですよ。あくまで角田さんを捕まえる。それが第1目的です」

「はいわかりました。ではこの麻酔銃で行きます」

「え？あれ？いいのかなあ」

確かに人を殺すためのじゃないけどその銃を持つとゆうことはあきらめないらしい。

「じゃあ私はここにいますね」

右京はヘリコプターの近くに待機した。

「それでは行きましょうか」

ソラと倉田そしてなんか麻酔銃を2本両手で持っているメイド左京で角田のいるであろうビルに向かった。

「ここが角田さんのビルですか」

ソラ達は人目のないところで隠れていた。入り口には見張りが4人ほどいた。

「なぜ隠れるのですか？正面突破じゃないのか？」

左京が聞いてきた。

「考えてみてください。僕達3人があんな筋肉質の見張りを突破で

きるとおもいますか？

いや、左京さんなら何とかできそうですけど」

たしかにこっそり麻醉銃を撃てば簡単に侵入できるが。

「でも今回は騒ぎをあんまり起こしたくないのですよ。しかも騒ぎさえ起こさなければ侵入したあと人に見つかりにくいです。騒ぎを起こした後に人が増えるのは勘弁です」

いくら左京でもたくさんの人と相手するのは無理がある。

「わかりました。でもどうすればいいのですか？」

「そうですねじゃあまずあの窓ガラスにこのテープを貼ってください」

「はい」

倉田と左京はソラに言われたとおりに窓ガラスにテープを貼った。

「このテープはいつたいなんですか？」

倉田が聞いてきた。

「そのテープは特性の防音テープです。あ、貼り終わりましたね」

そういった後倉田と左京はその場から離れた。

ソラはテープを貼った窓ガラスに思いつき蹴りを入れた。窓ガラスは小さい音で割れた。

「よし。ここから侵入しましょうか」

そう言ったあとソラは周りに誰もいないのを確認した後音を立てずに入った。そのあと倉田と左京も入ってきた。

「それでこれからどうします？」

「まずコンピュータルームへ行きましょうか。そこならこのたくさんの情報がありますから」

「そしてなるべく人に見つかるわけにはいかないわけですよ」

倉田が納得したように言った。

「でも問題はそこまでどうやって行くのかですよ」

「そうですね。とりあえず上の階へ行きましょうか」

そういつてソラ達は歩き始めた。

まかり角に出たときソラが止まった。

「左京さん。あそこの2人に麻酔銃を撃ってください」

「わかりました」

左京は曲がり角の先にいる見張り2人に狙った。そして引き金を引いた。

その時。

―バキューン！バキューン！！

とおおきな銃声が響き渡った。

それを聞いたソラはあわてて小さな声でツツコンだ。

「なんでそんな音が出る麻酔銃を持っていたのですか？早速侵入したのにこれじゃあ見つかるのは時間の問題ですよ」

「ほほうさっきの銃声はお前たちからだったのか」

後ろから声が聞こえた。

「見つけたぞ侵入者め！！観念するのだな」

―ガン！！

そついい終わる前に男はソラに蹴られて気絶してしまった。しかし男の手にはなにやらボタンを持っていた。男はそれを押したらしくボタンからサイレンが鳴り響いた。

両方の道からたくさんの男たちが来てしまった。

「やばいですね」

「長門さん。ここは私にお任せください。はやく朱里様と一緒に先に進んでください」

左京さんの言葉に一番驚いたのは倉田だった。

「・・・でも」

「いいから速く行って下さい。さっき私は失敗をしてしまいました。ここは私が命に代えてもお守りするしか道はありません。長門さん朱里様を任せました」

「分かりました。でもここであなたは死んではダメですよ。かならずあとで助けに来ます」

「はい。任せました」

左京は銃を撃ちながら言った。

「さあ倉田さん行きますよ」

「は、はい」

「そうはさせるか」

しかし男たちが木刀を持って襲い掛かってきた。

「邪魔しないでください」

―デジタル・ロープ
電子ノ繩―発動!!

ソラは繩ロープを男たちの足元に引っ掛けた。

いきよいのせいで男たちは次々にしりもちをついた。それ以外の道をふさぐ男はソラが蹴りでなぎ払った。
その途中1人の男の襟を引っ張った。

「角田さんのいるところはどこですか？教えてください」

ソラの眼はものすごく鋭かった。その眼にびびったのか男は素直に言った。

「ご、5階のメインルームです」

「ありがとうございます」

ソラは男の襟を放し階段へと向かった。

倉田はソラに腕を引っ張られながらソラの事を見ていた。その時倉田はすこし変な気持ちになった。

（な、なんでしょうかこの気持ち。今までにはないものです）

ソラ達は何とか男たちをなぎ払いながら5階に着いた。そこには大きな自動ドアがありソラ達は入っていった。

「子供の癖に良くここまでこれたものだな」

入った瞬間目の前には角田と20人ぐらいの男たちがいた。部屋は回りは小石だらけで少し変な部屋だった。

「こんにちは角田さん」

普通の挨拶をしたソラだが頭の中はどうやってこのピンチを切り抜けるか考えていた。

現状こっちのほうが完全に不利であり、さらに角田はSIを持っているのかもしれない。

あの時角田が最後逃げたとき倉田とは違うSI反応を感じた。いままでも倉田と一緒にいたので

角田からもSI反応があるとは気付いてはいなかった。そしてこの部屋。いかにも自分が戦いやすそうなふうになっている。普段ならこんな小石ばかりのところでは戦うのは変すぎる。それが外なら分かるが部屋の中までというのは変すぎる。

「倉田さんどこか安全な所へ言ってください」

「は、はい」

倉田はその場から離れて壁の隅っこに立った。

「さあ相手は僕1人だけですよ」

「ハッ後から泣き出すなよ」

角田がそういった瞬間地面の小石と砂が浮かび上がった。

「やっぱりS I使いでしたか」

ソラは――スキル・アイ・リンク超能力ノ眼・輪――を発動した。

「そうだ。俺のS Iは――サンド・ストーム砂ノ嵐――。砂と小石を操るS Iだ」

そういつて砂をドリルみたいな形をさせソラへ襲い掛かってきた。

（やばいですね。これじゃあ僕の――デジタル・バンド電子ノ腕輪――の技が効きません。しかも操ると言ってましたので避けてもしだいに追いつかれてしまうのが時間の問題ですね。だったら！）

ソラは角田の方へ走っていった。

（術者本人を倒すしかありません）

ソラは1回砂のドリルを避け、思いつきり足を踏み込んだ。そのまま腹に蹴りをいれて倒れさせる気だ。

「なめるなよガキが」

そのときソラの後ろから人の気配がした。しかし気付いたときにはもう遅かった。

ソラは背中に重い一撃を浴びてしまった。

――しまった！ほかの人もいました。

ソラは倒れこんでしまった。

「長門さん!!」

倉田の叫び声が響いた。

「ふう。ちよろいもんだな」

だがそのとき空の背中を殴った男がいきなり倒れだした。

「まだ、負けていませんよ」

さっき倒れたはずのソラが起きていた。油断した男はそのままソラの蹴りを食らったのだろう。

「しぶといな」

そう言った後角田は右腕を上げた。それが合図だったのかほかの男19人は刃物を取り出した。

「やれ!」

10人ぐらいがソラに襲い掛かった。

デジタル・ベルト
— 電子ノ帯 — 発動!!

ソラは^{ベルト}帯を放ったがしかし人数が多く5人ぐらいしか当たらなかった。

そのせいもあって避けることもやらなくていけないので集中力が持たない。

囲まれたのかソラがどんなに避けてもかすりが増えていった。頬や腕にはたくさんのかすり傷がそこから血がでてきた。

そんなに大きい傷ではないのでソラの動きは鈍ってはいない。しかしやっぱり人数が多いせいか足技と帯ベルトを両方使わなくてはいけなかった。

スタンガンは今は倉田が持つておりつかえない。

ソラの体にどんどん傷がでてくる。それを倉田は見ることしか出来なかった。

自分は無力そう感じていた。いくらソラでもこんな人数を相手にするのは無理に近い。しかし自分が出てきてなにがある？むしろ邪魔になるだけではないか。そう倉田は思っていた。そんな倉田を見て角田はにやりと笑った。

「おい。残っているやつらはあの女を狙え」

——！！

「やめろ！！」

その言葉を聞いたソラは思いつき怒鳴った。

しかし角田は面白がつてまったく聞いてなかった。

男達は倉田のほうへ迫ってきた。そして同時に刃物を持っている腕を大きく上げた。

——あの女の叫び声が聞こえる。

そう角田は楽しんでいた。

男達は思いつき腕をたたきつけた。

——！！！！

しかし刃物が当たったのは倉田ではなくソラだった。
幸い^{ベルト}帯を発動していたため少しは防げた。しかし当たったところもあり、血が地面に垂れてきた。その後ソラは^{ベルト}帯を思いっきり振り上げて男達を振り払った。

「長門さん！！なんで！？」

倉田がソラに声をかけた。

「僕は決めましたから」

ソラの声は少し小さかったがものすごく倉田には重く感じた。

「僕は決めました。あのときから、大切な仲間を守るって決めましたから」

さっきより大きい声でソラはしゃべった。

「だから僕は倉田さんを守るのですよ」

「長門さん」

そのときだったソラは何者かの手によって吹き飛んでしまった。壁にぶつかったソラはそのまま倒れこんでしまった。

「・・・長門さん！！」

倉田の前に角田が立った。

「あゝうぜー。うぜーから吹き飛ばしてしまったぜ」

そうさつきソラを飛ばしたのは角田のSEE―砂ノ嵐〈サンド・スト
ム〉―のせいだった。

「めんどくさいからもう終わりにしよう」

角田は手を倉田の前にやった。

「もうやだ」

倉田はそういいながら腕を後ろに隠した。

「あ!？」

「もうやだ。もう見ているだけなんて」

そのときだった倉田の後ろから電気が出てきた。
それを見た角田は倉田から離れた。

「私も戦う!!」

そう言ったあと、倉田の後ろの電気が消え代わりに倉田の手には銃
が構えていた。

「なんだ!それは」

しかしもう遅い。倉田は銃の引き金を引いた。銃の先から電気の球
が出てきて角田の隣の男に当たった。男はそのまま倒れた。

「安心してください。ただの気絶ですから」

そう言つて倉田はまた銃を構えた。

「なんだそれは!？」

「これが私のS I―電撃ノ銃装備―」
サンダー・ウェポン

2日前。あれから私はS Iの訓練を始めた。

「やっぱりそうでしたか。倉田さんのS Iは電気を銃に変えるようですね」

長門さんが私のS Iの説明をしてくれた。

「どうやらこのS Iは銃に変換するとき電気の強さで銃の強さも変わります。そしてその銃の火力を取るか弾数を取るのかを決めなければいけません。あと使い終わったら電気ごと消えるみたいですね」

長門さんはさつきいろいろ試した中でわかったことを全て話してくれた。

「でもこれじゃあ私も電気を浴びなきゃいけないのでしょうか」

私は心配になつて聞いてみた。

「そうですね。でもゴム手袋とか、電気を通さないものを手につけるとけはいいのじゃないのですか？」

「はあ」

「あとはこのS Iになれるだけですな」

そういつた後長門さんは私の近くまで来てくれた。そのまま頭を撫でてくれた。

「大丈夫ですよ。後は自分を信じるだけです。自分を信じればきっとS Iは答えてくれますよでもいま自分を信じれないときはじっくり時間をかけるといいですよ。僕はそれまで待っていますから」

長門さんはゆっくり微笑んだ。実際私はあまり理解ができなかった。

「はい」

私は心配させないように笑った。でも逆に長門さんを心配させてしまったのかもしれない。

——だけどもいまは長門さんが言っていたことの理解ができたいま私はもう迷わない。だから私も戦う。

倉田は片手に持っていた銃を消した。そのあとソラに渡されたスタンガンのスイッチを押して電機を出した。倉田はその電気にゴム手袋をつけた手に当てた。

その電気は一瞬で銃に変わった。

「いきます」

倉田は銃の引き金を引いた。

銃口から出てきた電気を帯びた弾は角田の近くの男に当たった。

倉田は連射ができるタイプの銃にしたらしく銃口から次々に弾が発射された。

なれていないからなのかほとんどが外れているがそれでも球数は多

いので男共も当たっていった。

しかしスタンガンの電気じゃ物足りないのかすぐに銃は弾切れで消えてしまった。

それを見た角田は倉谷接近した。

「フツ。やつぱり土壇場の発動かそれじゃあ俺たちは倒せない」

角田はセリフを言い終わる前に側面をいきなり蹴られた。

角田は見事に壁にぶつかって鼻血が出た鼻を押さえた。

「き、きさまは」

角田を蹴ったのはソラだった。

「すみません。すこし気絶してしまいました」

ソラは倉谷そう言った。倉田はソラの言葉を聞いたとき少し泣きそうになった。

「ありえないだろ。あれを食らって短期間で目が覚めるなんて」

角田は鼻を押さえながら立ち上がった。

「仲間のピンチに寝てなんていられませんから」

ソラは一回深呼吸した。

「さあ次は僕が相手です。倉田さんのおかげで少し人数も減りましたし」

ソラは構えた。

「いいだろ。お前らあいつを殺せ」

男たちは一斉にソラの所へ走った。

「倉田さん。あれを用意してください」

「は、はい」

倉田はソラにそういわれたのかポケットからサングラスを出してかけた。

ソラはそれを確認した後腰のバックからある球を取り出して前に投げた。

その後周りが急に光りだした。あまりものまぶしさに目を開けられなかった。

10秒ぐらい経った後角田は目を開けた。

そこには全員の雇った男たちが倒れていた。

「さあ。後はあなた一人だけです」

ソラは角田の近くに寄った。

「なめるなよ餓鬼がS Iをもっていないお前には俺には勝てない」

そう言っサンド・ストームて角田は「砂ノ嵐」を発動した。

しかしもう遅かった。ソラの後ろにはバズーカを持った倉田がいた。倉田はさっきこの部屋の蛍光灯を持っていた石で割りその間スタンガンスタンガンをその中へ投げて充電した。スタンガンはソラが作ったお手製なのでこうゆう機能も付いているのだ。

落ちてきたスタンガンは充電ができており最大の上昇させた電気に

倉田はさわりこのバズーカを作った。

―電撃ノ銃装備―は電気を銃に変えるときハンドガンだけではなくこんなものまで作り変えることができる。

「いきますよ長門さん」

ソラはその場からはなれた。

「いいですよ倉田さん」

倉田は引き金を引いた。ものすごい音がビルに響いた。

しかし吹き飛んだのは部屋中の砂だけだった。

さすがに一瞬でスタンガンノ充電はできない。なので部屋の砂のみを吹き飛ばしたのだ。

しかし角田はものすごくビビッてきた。

その角田の前にソラは立った。

「さあもう決着は付きましたよ。もうあきらめてください」

「ふざけるな。俺はあきらめないぞ」

角田は強気に言った。

ソラは一回ため息をした。

「そういえばなぜあなたは倉田さんを狙ったのですか？」

「そんなのは簡単だ。あいつの親父が俺たちの要求を認めなかったからその腹いせだ」

「それだけですか？」

いまのソラの言葉には少し怒りが籠っていた。

「ああそれだけだ。なんか悪いか？」

角田はうざい口調で言った。

「ふざけないでください。あなたのその自分勝手に倉田さんがどんな思いをしたのか」

ソラは冷静だがその言葉にはハッキリ怒りが入っていた。

「そんなのは俺には関係ない」

「それも倉田さんも同じです。倉田さんはあなたたちには関係ありません。ただ巻き込まれただけ。それでもなくともたくさんの大人たちで1人の少女を狙うなんてサイテーの人間です。倉田さんはあなたの道具じゃないのですよ」

「うるせえー子供が大人のやることに口出しするな」

角田は銃をソラに向けた。

しかし向けた瞬間角田はソラに思いつきり顔面を蹴られた。

角田は鼻血を出しながら気絶した。

「人がやることに大人も子供もありませんよ。ただ、正しいかそうじゃないのかもわからない人間は大人でも子供でもありませんよ。最低な人間それだけです」

ソラは気絶している角田に言った。

ビルの前にはたくさんのパトカーで埋め尽くされていた。

「さっさと歩け」

目が覚めた角田はパトカーに乗せられそのまま警察署へ行った。
ソラ達はそれをずっと見ていた。

左京はどうも無事らしく合流したあと倉田と抱き合った。

「ようソラ今回もご苦労さん」

「熊田さん」

熊田がソラ達のところへ来た。隣には熊田の上司らしき人もいた。

「どうも始めまして長門君。私は警視庁の祖父江^{そふえこう}甲だよろしく。君の活躍は熊田から聞いている」

「始めまして。やっぱり熊田さんの上司の方だったんですね」

「ああ。実は最近君はS I関係の事件に遭遇しているらしいではないか」

「はい」

「そこでだ。よかったら私の息子もS Iをもっていてなこれからの事件の調査にできる限り協力させたいのだからいいかい？」

「なんかあやふやですね」

「ははは。まあ時と場合というわけだ」

「ええいいですよ」

「ありがとう。息子の名前は祖父江^{そふえんじ}蓮時とゆう大学2年だ」

祖父江はソラに握手を求めた。

「はい。これからよろしくお願いします」

ソラはその要求に答え握手をした。

「連絡のほうは熊田を使ってくれ。では私は仕事に戻る」

「俺は連絡係ですか」

熊田は今の言葉に疑問があつたらしくツツコンだ。

「ほらいくぞ」

はいはい。と熊田は言いながら祖父江についていった。

「ソラさんこれからどうします?」

「ええそうですね。って、いまなんて?」

「私はこれからソラさんといわせてもらいます。そのかわりにあなたも私のことをあっちゃんと呼んでくださいますか?」

「いや、それはさすがに抵抗があります」

「ふふ。冗談です」

倉田はにっこりと笑った。しかし顔は赤くなっておりソラへの好意が見えた。しかしソラはそれには気づいてはいなかった。

「それでは私のことは朱里と呼んでください」

「はい。いいですよ」

ソラもつられて微笑んだ。

「朱里様ヘリコプターの準備が終わりました」

向こうで右京が呼んできた。

「さあいきましょソラさん」

「ええ」

あたらしい仲間がまた増えた。

第8章終わり。続く。

第8章 放課戦争・電撃ノ銃装備―サンダー・ウェポン―（後書き）

こんにちはkuxuです。

次回は体育祭の話にするつもりです。

SIの募集もまだ行っています。

募集といってもSI名と能力だけで結構です。

ではまたお会いしましょう。

第9章 体育祭・前日（前書き）

書くことはありません。すみません。

第9章 体育祭・前日

6月12日金曜日。天気は雨。

ソラは雨の中学校へ登校していた。

「あ、ソン君発見♪」

後ろから雪が話しかけてきた。

「雪。あれ。雪の通学路はここでしたっけ？」

「うんそうだよ♪なんかソン君最近なんか忙しそうだった話しかけづらかったの。でもこの様子じゃもう解決したようね」

「心配させてしまいましたね。すみません」

ソラは素直に謝った。

「うーん心配よりも寂しいほうが強かったかな」

雪は小さい声で言った。

「ん？なんかいいましたか？」

ソラは今の一言は聞こえなかったらしい。

「なんでもない。なんでもない」

雪は首を振った。

「そうですか」

そういつた後道の曲がり角で聞きなれた声が聞こえた。

「ソラさん!!」

正体は倉田朱里だった。

「朱里。おはようございます」

「おはようございます」

「朱里はいつもここを通っているんですね」

「はい。最近をよくこの時間に来ますね」

「そうなんですか」

「ソラさんに会える時間はこれぐらいしかありませんから」

朱里は小さな声で言った。

「なんかいいましたか？」

「いいえ。なんでもありません。それじゃあ私いきますね」

そういいながら朱里は歩き始めた。傘をまわしているのゴキゲンですよのアピールをしていた。

「ソン君今の誰？」

逆にソラの横からゴキゲン斜めの声が聞こえた。

「ゆ、雪どうかしましたか？」

「ソン君。ごまかさない」

あれゝなんか僕が悪いように聞こえますよ。そういいたかったが火

に油を入れるみたいなことになりそうだからソラは言葉に出さなかった。

この後ソラは朱里のことで雪に質問攻めされた。

「おはようございます」

ソラと雪は1年1組の教室に入った。

「よう長門」

と、道長。

「なんかぼろぼろだなお前。どうした？」

と、進藤。

「いや、通学中いろいろありまして」

「そ、そうか」

「そっぴやもうすぐ体育祭か。ふふふ。もうすぐ俺の活躍の日が来る」

道長が話を変えた。

「そっぴやお前。勉強はあれだけど運動はできるのだったな」

そのとおり。道長は運動良くクラスでも今回の体育祭は結構期待させている。

「そのとおりさあ早く来週になれ」

元気な人ですね。ソラはそう思った。

——あ、制服の夏服出さなきゃ。

6月15日月曜日。今日も雨。

星光高校は衣替え期間が始まった。

ソラは今日は夏服を着て登校した。

「よう長門。お。お前は夏服で着たんだな」

「ソン君今日も雨なのに寒くないの？」

進藤と雪が聞いてきた。

「ええ。動きやすいのでさっそく着てきました」

教室を見渡すと夏服を着ている生徒はいない。雨なので寒いという理由でみんな着ていないそうだ。

「今週の土曜日に体育祭なのになんか最近雨続きだね」

雪が不安になってきた。

「週間予報なら晴れると言ってましたけど本当に大丈夫ですかね」

ソラも不安になってきた。

「おまえらそんなに俺の活躍の場を心配してくれているのか」

道長が話しに入ってきていきなりこんなことを言った。
それに対してソラは。

「いいえ違います。それにある意味君のほうは暴走しないかのほうが心配です。周りの人に迷惑になりますので」

「俺の心配は一切してないわけ」

そんな道長をほっという雪は話を続けた。

「そうそう。ソン君このまえ雫さんに会ったのだけど体育祭見に来るって」

そうなんですか。ソラはそのときあることを思い出した。

「そういえば朱里も見に来ると言っていましたよ」

「あ、あの子もくるの？」

雪は突然不機嫌になった。

「あれ？どうかしましたか？」

昨日の日曜日雪と優菜をつれてソラは朱里のところへ行った。

そのときは3人とも仲良くなっていたがどうやら雪と優菜の不機嫌はそこから来ているわけではないらしい。2人は勝手に知らない女の子と会っていた。そのことで2人は不機嫌なわけで、もちろんソラはそのことに気づいていない。

そのとき秋達がが会話に入ってきた。

「そついえばあんた達は学年必須種目以外はなんの競技に参加するの？」

佐藤が聞いてきた。

「俺は短距離走とリレーを出すぞ。ついでにリレーは長門も出るぞ」

道長は自慢げに言った。しかしこれはなんの自慢にもならない。

「こいつは第1走者で長門はアンカーだ」

進藤が付け加えた。

「え！？長門君アンカーなの？」

秋がびつくりしてソラに聞いてきた。

「と言っても勝手に決められましたけど」

ソラが呆れたように言った。

「私体育祭のときお弁当作って来ようかな」

秋がボソツと言った。

——え！？

「おまえまたあの凶器とゆうか暗黒物質を持つてくる気か！」

道長は言い終わる前に秋に顔を殴られて壁に激突した。

「誰が暗黒物質なんて作るのよ！！」

——それはあんだだ!!

全員そう思ったが道長みたいにはなりたくないので黙っていた。

「りよ、料理なら私が作ってこようか？」

雪がさりげなく言った。

「おお、冬野それはいいな」

鼻血を垂らしながら道長は言った。

「じゃあ僕も作りましょうか」

ソラがそう言ったが。

「ううん。いいよ私一人で朱里ちゃんも作ってきそうだから」

雪は珍しく断ってきた。

「雪正解ですよ。さっきメールで作ってくると書いていました」

「おい。その朱里というのは誰だ？」

進藤が聞いてきたがほかの4人も聞きたそうな目をしていた。

「体育祭の当日に紹介します。なのでそれまで秘密です」

ソラがそう言った。

「うん。秘密」

6月20日土曜日。体育祭当日。

星光高校の体育祭の会場は星大にある大きなスタジアムで行われる。星大は――星の集まる場所――の中でも一番の学校に専念しているため、体育祭はこんなでかい場所で行う。もちろん観客の数も相当多く――オールスター星の集まる場所――のお偉いさんも来ている。ちなみにこのときだけ同じく星大にある私立星道高校もこの日は休みとなっている。

スタジアムの中にある生徒控え室。ここは生徒が休める場所では会場はガラス越しかモニタリングで見える。飲み物は水と麦茶とスポーツドリンクが用意されて飲み放題だ。1クラス1部屋用意されており荷物は別部屋に保管されているためにここでの盗難は防いでいる。生徒はここでもいいし普通に観客席にもいてもよい。逆に一般人は生徒と先生の許可が下りない限り生徒控え室は入れない。だが星道高校の生徒はそのクラスの生徒がいるときのみ許可なく入れることが可能。

1年1組の生徒控え室。

「うう。緊張する」

「今頃なに言っているのですか」

道長はわかりやすく膝が笑っていた。

「まあとにかくここでは下手な失敗はできませんね」

しかしソラにはそんなことよりもさらに心配していることがある。それは最近増えたS I関連の事件である。今日事件が起こってもソ

ラと優菜と雪は動きにくい状態なので活動がしにくくなる。

（朱里と凜さんも来るとは言っていましたけど、万が一のことを考えると2人だけでは戦いにくいですし）

朱里に対してはSⅠが目覚めたばかりなので戦いには慣れていないし一番条件がきついので危険である。

（今回はなにもないことを祈ります）

しかしこの1週間なにもなかったので逆に今回は警戒したい。そうまるで嵐が来るまでの静けさみたいな感じである。もしも戦闘になったらほかの人がいないところでしか戦えない。しかも今回はその条件が厳しい。今回は祈るしかなかった。

『生徒入場です』

放送の先生のアナウンスが聞こえてきた。

第9章続く。

第9章 体育祭・前日（後書き）

どうもkuxuです。

今回は体育祭の話次回にも続きます。この話でレギュラー陣の運動能力を知ってくれたら幸いです。

ISの募集もまだ続けています。

では、また会いましょう

第9章 体育祭・当日

開会式が終わり生徒達は次々に生徒控え室に入っていた。

「お前大丈夫か？緊張しすぎだ」

進藤が道長を心配して言った。道長はいまだに足が笑っていた。

「1年の短距離走はもうすぐですよ。しっかりしてください」

ソラがあきれながら言った。

「ソラ君は短距離走は出るの？」

優菜が言った。

ちなみに在校生は自由に部屋を行ってもかまわない。

「いいえ。僕は出ませんよ。僕が出るのは学年必須種目と全クラス学年対抗競技と最後のリレーだけです」

ソラは思い出しながら言った。

「でも学年必須種目は綱引きだけど大丈夫？」

「それは言わないでください」

ソラは動揺しながら言った。

ソラの腕力は高校生男子の平均以下なわけであるからにして綱引きソラにとっては苦手分野である。ちなみに最近計った握力はクラスで最下位から2位という結果である。

「完全に僕は足手まといになりますけど皆さんがんばってください」

（（（完璧に動揺しているな）））

そんな会話をしているとき誰かが入ってきたらしい。

「おい長門君お客様よ」

クラスの女子が声をかけてきた。

「お客様？」

しかし誰かはすぐにわかった。

「やつほーソラ君」

「お久しぶりです。ソラさん」

「やっぱり雫さんに朱里でしたか」

入ってきたのは雫と朱里だった。

雫は動きやすいラフな格好で来ているが朱里は白のワンピースを着て来ている。

「あ、雫さんと朱里ちゃんだ」

「本当だ」

雪と優菜が顔を出した。

「やあ雪ちゃんに優菜ちゃん」

「こんにちは雪さん優菜さん」

「おまえ誰だよこの美人さんたちは!？」

道長が大声を出した。その声にほとんどの男子が反応した。

― 本当だ美人さんだ。

― え? 長門に会いに来たのか。

― くそなんで長門ばかり。

こんな声が聞こえてきたがソラは無視している。

そしてこんなことを聞いたなかでもう一人ショックを受けている少女がいた。

(ま、また新たなライバルが出てきた)

秋の顔はショックで変な顔になっている。

「秋ちゃん。顔顔」

「まあ仕方ないよね。またライバルが増えたのだもん」

佐藤と遠山が言った。

(ここはなんとかしても今日の体育祭でやるしかないわね)

その次に秋の背中に大きな炎が舞い上がっていた。
いそがしい人だな。周りの人はそう思っていた。

「ソラさん私お弁当持ってきたので後で一緒にお昼食べませんか?」

朱里はそういいながら手に持っていた手提げを見せた。

「じゃあ早速なのでみんなと一緒に食べましょっよ」

「ええ」

「じゃあ私たちはいくね」

「がんばってください」

「おう、がんばるぜ」

道長がなぜが答えた。

「じゃあねソラ君たち」

「それではソラさん」

しかし2人は完璧に無視した。

「なんで!？」

道長の顔は泣きそうになっていた。

「おまえそろそろ行くぞ」

進藤がそう言った。ついでに進藤と優菜も短距離走に出るらしい。

「がんばってくださいね。3人とも」

ソラが言った。

「おう」

「うん」

「やっぱり今回は注意しなきゃね」

ソラは雪にさっき思ったことを伝えた。

「雫さん達には伝えたの？」

「ええ」

「じゃあ私達が心配しても仕方がないじゃないの？まあ朱里ちゃん
は心配だけど」

雪が水を飲みながら言った。

「ははは。そうですね。そういえば雪は何の競技に出るのですか？」

ソラは気分展開に話題を変えた。

「うん。私はソラ君と同じのにでるよ」

そのとき短距離走が終わったらしく道長達が帰ってきた。

「おっす」

短距離走から帰ってきた道長が来た。

「道長１位と優菜１位なんてすごいじゃあないですか」

ソラがほめてきた。

「ははは。もっと褒めろ。もっと褒めろ」

腕を腰に当てて道長が威張った。

「うん。がんばったよ」

優菜はソラに褒められたのがうれしく笑顔になって言った。

「次の1年の競技は学年必須種目だな」

進藤がそう言った瞬間。ソラのテンションが下がった。

「みなさんががんばってくださいね」

（（（あゝこの人大丈夫かな）））

そんなことは本人が一番知っていた。

そして時間は経ち等々ソラが苦手な綱引きの出番であった。
1年生ながら簡単な競技である。

「お前らががんばるぞ」

オーーーーoooooooooooo。

みんながテンションあがっている中一人だけ無理やり上がらせよう
としている人がいた。

もちろんソラだ。

「ソン君本当に大丈夫？」

「あははは。もう何にもいえませんね」

「足だつたら簡単に引つ張れるのにね」

「それは反則ですよ雪」

そんなことを言っているまに始まった。

結果は3勝2敗とまずまずな結果だった。

「手が痛いです」

「あははは」

「大木さんのクラスは強かったな」

道長は優菜に言った。

「私は何も役に立っていないけどね」

「まあ何でも俺達の午前の部の出番はここで終わりだな」

「ねえ。全クラス学年対抗競技はなにやるの？」

優菜が聞いてきた。

「そうか道長と優菜は出ないのでしたね」

「逃走球入れといって、クラス1人が籠を背負って全クラス学年にやわらかいボールを投げられるから、それを避けて籠に入れさせないようにして時間いっぱいまで逃げる競技よ」

雪が説明した。

「最終的に球の数が一番少ないクラスが1番になる」

進藤が言った。

「ついでに1年1組は僕が逃げますよ」

ソラがそう言った。

「ソラ君が走るの？」

「ええ」

「でも球なんて痛くないの？」

優菜が心配しながら聞いた。

「大丈夫よ、球はやわらかいし上に投げなきゃいけないルールなの
まあ上に投げなきゃ籠には入らないしね」

雪が言った。

「そうなの」

優菜は一息ついた。

「今朱里から連絡がありましたけどいいところ見つけたらしくそこ
でお昼にしないかと聞いてきました」

「その話私達もいれてくれない？」

佐藤が聞いてきた。後ろには遠山と秋がいた。

「崎野さんたちのお昼一緒に食べるのですか？」

「ええ。いい？」

ソラの質問に佐藤が答えた。

「僕はいいですけど。みんなはどうですか」

ソラが聞いた。全員いいよと返答をした。

「じゃあ一緒に行きましょうか」

——イエス!!

秋は心の中で叫んだ。

ソラ達は雫達と合流した。

お弁当を作ってくれたのは朱里と雪だった。2人ともものすごく豪華だった。

「す、すげえ」

道長が驚いていた。

「すごいですね」

ソラが言った。

「みなさん遠慮しないで食べてくださいね」

朱里が言った。雪も同感らしくうなずいた。

「では早速」

進藤が思いっきり黒い物体に箸をつけて食べた。

——あれ？それってまさか。

ソラがとめようとしたがもう遅かった。道長が食べたのは例の暗黒

物質だった。

食べた道長じゃ気絶してしまった。

「な、何で崎野さんの料理があるのですか？」

「え！？何で私のだとわかったの？」

——誰だっ てわかります。

全員心でツツコンだ。

「ちなみに秋ちゃん。これはなんの料理？」

優菜が聞いてみた。

「それはから揚げなんだけど」

「じゃあこれはなに？」

次は雪が聞いてみた。

「それは普通のご飯」

——どうやったらご飯がこんなに黒くなったのですか？

「おまえこれなんか炒めたりしたか？」

進藤が聞いた。

「うつん。ふりかけで食べようと思っていたから」

全員声が出なかった。

でも朱里と雪の料理はおいしかったが道長はお昼中ずっと気絶していた。

男子3人はトイレに行っていた。

「なんか変な気分がする」

起きた道長が言った。

「それはあれを食べれば」

「でもどうやってご飯をあんな風にできるんだ？俺はそれを知りたい」

進藤が疑問に思いながら言った。

「さあ普通はできませんよあんなのは」

ソラが答えた。

「さっさといこうぜ。お前ら次の競技に出るんだろ」

道長が言った。

「そうですね。早く行きましょうか」

全クラス学年対抗競技、逃走球いれ。

1年1組からはソラ、雪、進藤に秋と佐藤、遠山、ほか数名が出場

した。

ソラは籠を背負いながら言った。

「皆さんがんばってくださいね」

「ソン君も気をつけてね」

「お前もな長門」

「がんばってね長門君」

『今から全クラス学年対抗競技、逃走球いれを始めます。逃走者は散らばってください』

アナウンスが聞こえた。

「じゃあ行ってきますね」

ソラはそういいながら走り出した。

『では始めてください』

——————！！

笛が鳴って試合が始まった。

ほとんどの生徒がソラを狙ってきた。

ソラはそれを避けてきた。ちなみに全員1年生の男子だ。

——くそ。いつもあんな美人と一緒にいやがって。

——なんでお前ばかり。

——ええい。くええ。

全員そういいながら投げた。

——投げるのはいいですけど理由がおかしいですよ！！

しかしいかにソラでもたくさん球が投げあつ中、避けきれるわけではない。

そのときソラは変なものを感じてしまった。

それはS I反応だった。

——優菜達のS Iじゃない。しかも空から来ている。

ソラは空を見上げた。そこには1羽の鳥がいた。

——あれは魔獣です。

「雪！」

雪はソラに呼ばれて見た。ソラは空を見るとゆうジエスチャーをした。雪はそれをみて言われたとおり空を見た。そのやり取りに秋は不愉快な表情を浮かべた。

（あれって魔獣！？こんなときに）

雪はポケットの中にある携帯についているボタンを押した。

そのとき優菜の携帯からメールの着信音が鳴った。

——まさか魔獣？

優菜は自分のクラスの生徒控え室をでた。そこには道長が歩いた。

「あ、大木さんねえ少し話でもしない？」

しかし優菜は聞いておらず道長の横を通り過ぎた。

（早く2人に伝えなきゃ）

優菜は携帯を取り出し雫に電話した。

「雫さん魔獣が出ました」

『分かっているわよ。ソラ君と雪ちゃんの行動を見ればすぐにわかったわ』

「で、どうしますか？」

『空にいるわけだから朱里ちゃんのS Iじゃないと倒せないわね。わたしのS Iじゃあなんにもできないし』

そう朱里のS Iのみ遠距離技を討てる。

「でもあまり騒動を起こせませんから」

『やるなら1撃必殺かそれともソラ君たちが戻るまで』

「でもあんまり時間はありません」

それもそのはずあんまり時間をかけたら魔獣が関係ない人に襲ってくるかもしれない。

「やっぱり朱里ちゃんのS Iで倒すしかありませんね」

『でもそれにはたくさんの電気が必要となるわね』

朱里のS I―サンダー・ウェポン電撃ノ銃装備―を発動するためには電気が必要。しかも一撃必殺ならそれ相応の電気が必要となる。

「やっぱりソラ君がいないと無理かも」

ソラの―電子ノ腕輪―ならあらゆる方法で敵を引き寄せることが可能だがいまはそれができない。それなら。

アクアトロマスター

「雫さん―水ノ達人で何とかできませんか？」

『うゝん引き寄せたとしても結構目立つちゃうから無理だと思うわ。うん？なに？』

「どうかしましたか？」

『ちよつと待っていていま朱里ちゃんに変わるわね』

「はい」

『一つ思ったんですけど水を使えばそんなに電気を使わずに倒せると思います』

電話に出た朱里から驚きの言葉が出た。

「え！？」

『私の電気をこめた水玉なら気づかれずに倒せると思います』

「それどうゆうこと」

「わ！？」

優菜は朱里達の前に現れた。

2人とも携帯を切り話を続けた。

「つまりです。まず水玉を私の銃先につけてそれと一緒に放つとゆうのはどうでしょうか」

「たしかにそれならすこし電気が減らせるしね」

この作戦に雫は賛成した。

「それはいいですけどその電機はどうするの？」

「それならもう準備できました」

「へ！？」

そのとき1台のパトカーが優菜達の近くに止まった。

「来てやったぜ」

下りて来た人物は熊田だった。

「熊田さんわざわざありがとうございます」

朱里は挨拶をした。

「なあに最近事件の手伝いをさせてもらっているからな」

「熊田さん朱里ちゃんに呼ばれたのですか？」

優菜が聞いた。

「おう。最初はソラじゃないからびっくりしたけどな」

「熊田さんお願いします」

「おう今準備するぞ」

そういつて熊田は車の中から電気自動車の専用の発電機を出した。

「あ、なるほど」

優菜にもやつと理解できた。

「はいこれとソラさん特性のこれを使って」

朱里はなにやら変な棒を取り出した。その後手袋をつけて熊田が発

電機をつけた。

発電機からみるみる電気が作り出してきた。

朱里はさっきの棒を電気が通るところに差しした。そのときその棒から目に見えるほどの電機が見えた。

「優菜ちゃん。線ノ盾お願いね」
ライン・シールド

雫は水玉を作りながら優菜に言った。

「はい」

優菜は自分達のところに線を引いた。

朱里はそれを確認した自分のS Iを発動した。

―サンダー・ウェポン電撃ノ銃装備―発動！！

朱里は大きな電気砲を作り出した。

それをみたあと熊田は後ろに下がり線の中に入った。

雫はできた水玉を電気砲の発射口につけた。これで準備はできたが魔獣はスタジアムの周りをうろついていた。そのため狙いがつけにくい。

しかしそのとき魔獣は何かに捕まったように動きが止まった。

良くみると魔獣が動かなくなったのはソラの―デジタル・ロープ電子ノ縄で動きが固定された。ソラは周りをうろつきながら縄を張り魔獣の動きを誰にも気づかれずに止めることができた。

「いまよ！！」

「はい！！！！」

雫の呼び声に朱里は答え、引き金を強く引いた。

「発射！！！！」

電気砲から放たれた水玉は見事に魔獣に当たった。感電した魔獣は落ちながら消えていった。

「終わりましたね」

「うん。おつかれさま」

「熊田さんもありがとうございました」

「おうよ」

熊田はパトカーに乗って帰っていった。

「おつかれさまでしたね。良くやってくれました」

あのあと優菜はさっきの戦闘をソラに報告した。

ちなみにさっきの逃走球入れは4組と同店1位だった。

「くそ、4組強いな」

ただいま1年の部の1位は4組2位は5組3位が1組だった。

「やっぱり。最後はリレーできるか」

リレーのルールは男女合同の6人で走る競技である。最初は女子が走りそれから交互に走り最後に男子がアンカーとなる。体育祭の中でもっとも点数がかくこれで逆転もできる。

「やっぱり短距離走で切り札を出すべきだったね」

1年1組女子体育委員の佐藤が言った。

「あの。切り札って何ですか？」

「あなたのことよ。さあアンカーがんばってね切り札」
「はあ」

「これから1年クラス対抗リレーを始めます。選手は集まってください」

アナウンスが聞こえた。

「じゃあいきますか」

1年1組のリレーの順番は第1走者に佐藤が走り、第2走者は道長が走り、第3走者は女子が走り第4走者はサッカー部の男子が走り第5走者は雪が走る。このとき優菜も同じ第5走者だ。最後の第6走者はソラが走る。

全ての用意はととのいこの緊張感の中ピストルの音が響いた。

とうとうリレーが始まった。

最初佐藤は快調な滑り出しだった。このまま1位で道長にバトンをつないだしかしこのとき事件が起こった。バトンを持った瞬間道長が大胆に転んだ。

———
 転んだ———
 ! ! !

1組全員心の中でツツコンだ。

しかし道長はすぐに立ち上がり走り出した。

しかしこれで1位から4位に下がってしまったがほかの2人の活躍のおかげで3位に上がった。差はそんなにない。バトンは雪につないだ。雪と優菜の勝負がはじまった。

ただいま1位は4組2位は優菜がいる5組3位は1組だ。

しかし以外に雪は足が速く優菜に近づいていた。しかし追いつくことはできずにバトンは2秒ぐらいの差でつながった。

「ソン君お願い」

「わかりました」

5組の生徒はたしか野球部の部長の人だった。

しかしそんなことはお構いなしさつさとソラは抜かしていった。いまは1学年全員応援のため外に出ていた。

「あれ長門君こんなに早かったの？」

秋がボソツと言った。

「まああいつ50メートル5秒45だったからな」

進藤が言った。

「それ早すぎでしょ」

遠山もこれには驚いていた。

いやほとんどの人がこの会話を聞いて驚いていた。

そんなことを言っている間にソラと4組のアンカーはもうゴール前だった。

（くそ。あいつなんて早いやつなんだ）

ついでに彼はサッカー部の部長だった。

ゴールするときぎりぎりのところで抜かされてしまった。
結果1組1位!!

「やったーーーー!!」

1組全員叫んだ。

「ナイス長門!!」

「さすがソン君」

「さすがだな長門」

「あんたは今度から転ばないようにね」

遠山がツツコンだ。

「うるせー」

最終結果。1組が1位となってこの体育祭は終了した。

第9章終わり。続く。

第9章 体育祭・当日（後書き）

こんにちはkuxuです。

体育祭の話も終わり、次回は長編に挑戦してみたいと思います。
みなさん応援よろしくお願いしますね。
では、また会いましょう。

第10章 暗闇の道人・謎の始まり（前書き）

今回から新しく―暗闇ダークネス・ロードスの道人―編のスタートです。

第10章 暗闇の道人・謎の始まり

6月23日。

学校の教室の中は体育祭ムードがぬけ、さらに全員夏服となっていた。

梅雨の季節というのに今日は暑いぐらいに晴れた。

「2日連続雨が降ったから今日はすこし暑いぐらいだね」

雪が窓を眺めながら言った。

「といっても梅雨の季節ですのでいつ雨が降るのか心配ですね。ちゃんと折りたたみ傘持ってこなくちゃ」

ソラが心配そうに言った。

「でも下校中に雨が降ったらソン君に傘入れてもらうの」

雪がそう言ったとき、男子の目がいきなり光った。

「そういえばなんかあいつ最近モテテないか？」

「俺もそう思う」

「この前の体育祭も星道高校の女の子と仲良く話していたぞ」

「くそ、なんてうらやましいやつだ」

男子がそつゆつ話題でひそひそ話しを始めた。

「くそ、なんでソラばかり」

道長が隣でつぶやいた。

「君はそればかりですね」

「ガラッ!!」

教室のドアが開き先生が入ってきた。

「帰りのHR始めるぞ」

放課後。

ソラの携帯からメールが来ていた。

「あれ？熊田さんからですね」

ソラは内容をチェックした。

——これは・・・

「優菜、雪付いて来てください」

ソラはそう言っで教室を出た。

学校の正門前。ソラ達は話を始めた。

「これから警察署へ行きますよ」

「え！？なんで!?!」

「熊田さんから連絡がありました、今から来てほしいとのことですよ」

そのあとソラ達は警察署へ向かった。

星大警察署。文字通り星大で一番でかい警察署だ。

「よう、よく来てくれたな」

中へ入ったとき熊田が出迎えてくれた。

今は全員学校帰りなので制服なのだが、途中合流した朱里は星道高校の制服を着ている。

星道高校の制服はブレザーは男子は紺＋学年色。女子はピンク＋学年色だ。学年色は星光高校と一緒になので朱里の学年色も赤だ。ブレザーにはところどころ学年色が付いている紐がかつこよく付けられている。

夏服は男子は白のYシャツ＋学年色。これは星光高校の男女共通のと似ているが星道高校のは黒の線がところどころ付いている。女子は薄いピンクのYシャツ＋学年色。こちらもところどころ黒の腺が付いている。ネクタイは外している。ズボンは黒でスカートは濃いピンクになっている。

朱里はいま夏服を着ている。

星光高校の夏服は男女共通で白のYシャツ＋学年色の線がところどころ付いている。ネクタイは外している。

ソラは熊田に尋ねた。

「熊田さん。何のお話でしょうか」

熊田は腕組をしながら答えた。

「おう実はS I関係の話でな、ここでは話がしにくいだろう。別の部屋にでも移ろう」

会議室。

ソラ達が席に着いたとき熊田はいきなり話し出した。

「お前らを呼んだのはほかにもない。あるS I使いを捕まえてほしい」

「質問です。なんでそれを警察が知っているのですか？」

「ああ。実は最近そいつらのせいでこっちは大忙しでな。お前らには教えていないが最近またもや不思議な事件が増えた」

熊田はソラにある書類を渡した。

「詳しいことはわからんが、このまえ祖父江さんは以前事件が起こる前に彼らと接触した」

朱里は手を上げた。

「それはつまりこの事件は複数の人達で起こっているわけなのですね」

「ああ。そうだ」

「それでその祖父江さんはどうしたのですか？」

優菜は聞いた。

「そのことなのだが。祖父江さんはこのまえソラと朱里ちゃんに話した息子の蓮蒔^{れんじ}とともに戦ったが」

「戦ったが」

優菜は相槌をした。

「残念ながら怪我をつてしまい、いまは病院にいる。そして話を聞いたけどどうやら戦ったのは1人だけだった」

「ほかの人達は逃げたとゆうわけですね」

ソラは熊田の言葉を繋げた。

「しかもそいつは世界系のS I使いとってきた」

――！！

「え！！それってやばいのじゃ」

雪が完璧に動揺していた。

それもそのはず以前ソラと優菜それと雪は世界系のS Iで大苦戦をしてしまった。あのときは補助型のS Iだったおかげで勝ったがこれが攻撃型だったらそうとうやばい。

「それで今回はS I使いが相手ならばこっちもS I使いで対抗するしかないかなと思ったわれわれはお前達を呼んだ。これは警察署内でも極秘のこととなる。そしてわれわれもできるだけ君達の援助をする」

熊田が腕組をしながら言った。

「僕はS I使いではないですけど。みんなはどうします？」

ソラは聞いてみた。

「私はソラ君に協力するまで」

「すべてソン君にまかせる」

「ソラさん私は大丈夫です」

3人とも了解してくれた。

「決まりです。熊田さん」

ソラは熊田に了解の合図をした。

「おっし」

「でわ熊田さん。まず祖父江さんが接触した時間帯を教えてください。また時間もお願いします」

「そうゆうと思っただぜ」

ソラ達は出かける準備をした。

「ねえソン君」

「なんですか雪？」

「祖父江さんて前に私達も会っただけ？」

「いいえ。会ったことがあるのは僕と朱里だけです。でも蓮蒔さんとは会ったことはありません」

「ふーん」

「で、ソラさんこれからどうします？」

朱里が話題を変えてきた。

「ええ。これからさつき教えてもらった場所へ行き、ターゲット・メモリー目標ノ記録を使いたいと思います」

ソラは携帯で地図を確認しながら言った。

ソラはまずとにかく情報を取ろうと考えているらしい。

（でもなぜかいやな気がします）

「急ぎましょう」

ソラ達は急ぎ足であるところに向かった。

——スキル・アイ超能力ノ眼Lv0ターゲット・メモリー目標ノ記録——発動！！

ソラ達はさつき熊田が教えてくれた場所に来ていた。場所はあるビルの後ろで一本道の狭いところだった。ソラは早速追跡を始めた。

——人数は5人。あ、この男が祖父江さん達を倒した人か。

しかし追跡中ソラは横腹にある衝撃を受けた。

——ターゲット・メモリー目標ノ記録——がとけてソラは壁にぶつかった後意識を取り戻した。そこにはある男が2人居た。

「ほらやっぱり戻ったほうがいいじゃねーか」

「そうだな。いい獲物が見つかった」

男はそんな会話をしていた。しかも完璧に戦う気満々だった。

「しかも女が3人。男はさっさとぶっ殺してあいつらと遊びに行かねえか？」

「いいな。それ」

2人があほな会話をしているときソラはどうするか考えていた。

（どうする。まさかこんなに早く接触してしまうなんて。作戦は3人には少ししか伝えていません。どうする）

こうして長い戦いが始まった。

第10章つづく。

第10章 暗闇の道人・謎の始まり（後書き）

どうもkuxuです。

さて始まりました新編「暗闇の道人編」。

今まではソラとその仲間達との出会い（主に女性）との出会いを書きました。いまはここで仲間になる人の予定はありません。（1人を除く）。

しかし、新たなるS.Iの募集でいいのがあつたらレギエラー化にはさせます。

ではまた会いましょう。

第10章 暗闇の道人・戦い

——最悪です。

ソラは今この状況をどうするか考えていた。

（さてどうしましょうか）

現状はハッキリ言ってこっちが不利だ。理由は簡単相手のSⅠがどんなものなのか。さっきソラは彼達のSⅠであろう力に当たった感じがした。そして彼らはそう近くにはいなかった。そして今こちらにはSⅠが使えるのは優菜と雪のみ。朱里はこのなかでゆうついの攻撃型のSⅠ使いでも条件が一番限られている。

「優菜。なるべく相手から眼を離さないでください」
「うん」

優菜は返事をした。

「ほおカツコいいなでも残念」

——！！

ソラは腹に何かを打たれた感覚がした。そのまま彼は後ろに吹っ飛んだ。

「ソン君！！」

「僕は大丈夫です。でも一体何が起こったのでしょうか」

ソラは腹を押さえながら立ち上がった。

「あなた達は一体なんですか？」

朱里が男達に聞いてみた。

「お、かわいいお嬢ちゃん。いいだろ教えてやろう」

そう言った後、男は間を空けた。

「俺らは――暗闇の道人――と言ってな、簡単にいえばあるところの反逆者チームさ。そして俺の名は小野寺勇だ」

「同じく齋京大海」

「ではその男。さようなら」

小野寺がそう言った瞬間。ソラ達の周りの壁に眼が出てきた。

――これは一体！？

しかしソラには考える時間は無かった。またいきなり横腹に衝撃が当たった。

ソラは壁にぶつかった。

――またです。さつきからこの攻撃は一体。そしてこの目は。

ソラはなれたように立ち上がった。

「へえなんかなれた感じだな。じゃあこれはどうだ！」

「優菜！！」

「うん！！」

ソラはさっき話していたとき優菜が書いていた線の中にいた。

ライン・シールド
―線ノ盾―発動!!

ソラの周りに透明の盾が現れた。盾の一部に何かの衝撃の後が付いた。それをみた小野寺は悔しそうに舌打ちをした。逆にソラは何かが分かったような顔をした。

「やっぱりこのS Iは世界系ですね。そしてこの眼から何かを飛ばしていますね」

ソラは小野寺に言い張った。しかし小野寺はさっきの顔とは違い笑っていた。

「残念。たしかに俺のS Iは世界系でこの目は俺が出している。でも残念ながら衝撃のほうは俺じゃなくこいつのS Iだ」

小野寺は齋京に指を差した。それが合図だったように齋京が説明を始めた。

「そうだ。俺のS Iは瞬きの空気砲だ。ウイंकした眼から見えない空気砲を出すことが可能。それが他人の眼でもできる」

――そうゆうことか！さっきまで空気砲を僕に放ってたわけですね。

ソラはさっきから起こっていることを理解した。

ウォール・アイ
「とゆうことで壁ノ眼発動!!」

小野寺が叫んだ。それと同時にソラは超能力ノ眼を発動し、優菜も

さっきの線を使って線ノ盾を発動した。しかし、壁ノ眼は優菜の盾ごと発動された。ソラはに避けようとしたがもう遅い。目の前の眼がウインクをしてきた。ソラは腹に思いつきり撃たれ後ろに倒れた。それでもソラはすぐに立ち上がり3人に指示を出した。

「みんな逃げてください。今じゃ彼らには勝てません」

それを聞いた3人は驚いたがこれは正しい指示だと思いソラを信じて雪と朱里は小野寺達がない方向に走って行った。ソラと優菜はソラのデジタル・ベルトの電子ノ帯を使い上へ逃げて行った。そんなソラ達を見て小野寺はうれしそうに叫んだ。

「いいだろ今日中にお前らをとっ捕まえてやる!!」

ソラはその言葉をしっかりと聴いていた。

状況は完全にこつちが不利。

ソラはそう思い人氣が無い路地で優菜と一緒に身を潜めていた。雪と朱里には違う指示を出した。

「こつちはこれからどうするの?」

優菜が心配そうに聞いた。

「たぶんあの人達は僕狙いなのでしょう。ですので雪達がさっき行った事をやり遂げてくれるまで僕は彼らに対抗するしかありません。そして彼らの不利の状況へ追い込まなければなりません」

「難しい課題だね」

「すみません優菜巻き込んでしまつて。やっぱりここは僕1人でやるべきことなんですけどいまは君の力が必要です」

「うん。わかつてるだから心配しないで」

優菜はやさしく微笑んだ。ソラも微笑み返した。

そのときソラはあるS I反応に気づいた。しかし、もう遅い。ソラ達の周りには沢山の眼が壁に付いていた。

「みつけた」

小野寺と齋京がソラ達に近づいてきた。

——思ったより早い！！

ソラは急ぎながら^{デジタル・ヘルト}電脳子ノ帯を小野寺に向かって放った。

（これなら彼のS Iで防ぐことが出来ないます）

しかし小野寺は壁^{ウォール・アイ}ノ眼を発動したまま齋京は瞬きの^{ウイנק・ショット}空気砲を発動した。しかし発動したのは小野寺の近くの壁^{ヘルト}。帯は横にそれてしまった。

しかしその間優菜は道に沢山の線を書いた。

「やっぱりそう簡単にいきませんね」

そついいながらソラは小野寺に向かって思いっきりダッシュした。

ソラは接近戦で小野寺と戦う気だ。

ソラはギリギリ届く場所で足に向かって低く蹴りを入れた。だが避けられた。しかしソラは逆の足で顔狙いで回し蹴りをしたがこれまた避けられた。

「ほらほら、どうした？」

小野寺は余裕を見せながら舌をだし顔をソラに近づけた。ソラは頭突きをしたがまた避けられた。ソラは2歩ぐらい後ろに下がった。

——あれ？すこしおかしいですね。

ソラはそう思ったのか後ろにまた走り出した。もちろん優菜の腕をつかみながら。

「どうしたのソラ君」

「気になることがありましたので一回離脱します」

ソラは走りながら言った。

「また鬼ごっこか。いいだろう付き合ってやる」

「小野寺。あまり時間をかけるなよ」

斎京は小野寺に言った。小野寺はわかってるよ。いいソラ達のあとを追った。

ソラ達は人気の無いところを走っていた。

「ねえ気になることって何？」

優菜が聞いてきた。

「まだ、ハッキリしたことではないので説明できないので一様作戦だけ伝えておきますね」

「う、うん」

ソラは止まり、優菜の耳の近くで作戦を伝えた。

「お、見つけた」

5分もしないうちに小野寺はソラ達を見つけた。

「さあそろそろ鬼ごっこは終わりにしようぜ」

「ええ。いいですよ。終わらせましょうか」

ソラと小野寺は共に構えた。

デジタル・スピア
―電子ノ針―発動!!

ソラは壁に針スピアを放った。

「どこに撃っているのかな」

そういいながら小野寺は壁ノ眼ウォール・アイを発動した。
ソラ達の周りの壁に目が沢山出てきた。

「さあ終わりにしようぜ。 齋京!!」

「おうよ!!!」

小野寺の叫びに齋京は答えた。

「残念ながら今すぐには終わらせませんよ。 優菜、お願いします」

「うん!!」

優菜もソラの掛け声に答えた。

ウイंक・ショット
瞬きの空気砲発動前なんと優菜の線ノ盾を^{ライン・シールド}発動した。その場所はなんと周りの壁の1mmぐらいの前に透明の盾が発動した。

これで何とか今の攻撃を防ぐことが出来た。しかし、ソラの作戦はここまでではなかった。

「さて、あなた達のS Iの秘密教えてもらいますよ」

ソラはそう言いながら手に持っていた針を^{スピア}1つの目を切った。そうしたら後ろに大砲の絵が張ってあった。

「やっぱりそうゆうことでしたか」

「き、貴様」

ソラは説明を始めた。

「さっきあなたの顔が近くなったときなぜか齋京さんのS Iを使わなかった。そのS Iは普通人間の目で使うものなのでおかしいと思ったのです。したらもしかして齋京さんは偽りのS Iを僕らに教えていたと考えました。そして今、見せたようにまったく違うS Iのようでしたね。これは現実^{モダン・アートティスト}ノ美術家ですね。絵を現実にするS I」

「正解だ」

齋京は言い張った。

「でもそれがどうした。それがばれてもお前達の敗北は変わりはない」

「いいえ。変わりますよ」

ソラは思いつきり小野寺に向かってまたもやダッシュした。

「また同じ先方が!!」

「いいえ違いますよ。でもあなたのS Iは接近戦では使えない。しかも斎京さんのほうはすこし違う人の相手をしてもらいますね」
「なに!？」

小野寺は後ろにいる斎京を見た。斎京は前には優菜に棒で首を狙われて、後ろにはさつき来たばかりの雪に水鉄砲を構えられていた。

「おまたせソン君。全ての準備は済ませたよ」

雪はソラに言った。

「ありがとうございます雪」

ソラはそう言いながら^{デジタル・ロープ}電子ノ繩を小野寺の体に巻きつけ、さつき壁に刺さった針に固定した。

「いまでも!朱里!!」

ソラは上に向かって叫んだ。すぐに優菜と雪は斎京から離れた。そのあと一瞬で上から電気の弾が降って来た。これは朱里のS I、^{サンダー・ウェポン}電気ノ銃装備の弾だ。

——ド————ン!!!!!!

すごい音がした。周りには煙が出て何も見えない。煙が消えた頃には周りが電気が発生しているかのようにバチバチ言っていた。そこには倒れている小野寺が居た。だが残念ながら斎京の姿はしなかった。

「逃げられましたか」

「ねえこの人はどうする？」

優菜が聞いてきた。

「朱里が戻ってきたら警察に身柄を預けましょうか」

しかしこのとき斎京を逃がしたことはソラ達にとって大きなピンチを招くことは誰も知らなかった。

第10章終わり。 続く

第10章 暗闇の道人・戦い（後書き）

ソ「どうも、長門ソラです。次回からはこの後書きはS Iの紹介のコーナーとして使わせてもらいます。紹介する人は次々に変わります。このコーナーでS Iのいろんなことを知ってもらえると幸いです。ん？」

ボケて（カンペ）

ソ「あのカンペはほつといて、また次回会いましょう。S Iの募集もまだまだ続けます」

第11章 チーム結成!!

—キイイイイイイイイイイン!!

ソラは—ターゲット・メモリー目標ノ記憶—を発動していた。
時間はちょうど5分前に戻る。

あの事件の後、ソラ達は熊田とその場で合流した。

「すみません。1人逃してしまつて」

「いいつてことよ。お前らよく無事だつたな」

「ねえソラ君今ならターゲット・メモリー目標ノ記憶使えるのじゃあないの」

優菜がソラに聞いてきた。ついでに小野寺はいまパトカーに乗せられた。今回のことはS.I.のことを知っている人たちのみ来てくれたので言い訳をすることは無かった。しかしソラの左眼の秘密は警察の中では熊田のみが知っている。

「そうですね。いまなら発動できますね」

それで今につながる。

ソラは何かを知ったかのように発動を解いて熊田達に話を始めた。

「最悪です」

「どうかしたのですかソラさん」

「ええ。祖父江さんを倒した人は斎京さんです」

――！！

全員絶句した。いやしかし考えられないことではなかった。斎京の
モダン・アーティスト
S I 現実の芸術家。このS I は結構知られている上級S I である。

「彼がボスだといいいのですけど」

「どうゆうことソン君」

「彼がボスではなかったら彼以外の強敵が彼を従わせられていると思っ
てもいいでしょう」

「あれ以上の人と戦うことになってしまふのですね」

一つの疑問が分かったが逆にもう一つ疑問が増えてしまった。

「とりあえず。熊田さんお願いがあります」

「何だソラ」

「祖父江蓮蒔さんに協力をお願いを出来ませんか？」

「え！？」

今までには聞かない言葉に雪は少し驚いた。

「今回は今までのように自分達だけで解決は出来ません。なるべく
協力してもらえる人たちに協力をお願いしましょう」

「わかった。今回はお前もそれぐらいやばい状況だということなん
だな」

ソラは黙ってうなずいた。

「よし分かった。祖父江さんの息子のことは任せられた。お前達は
さっさと自分家へ帰れ」

「はい。お願いします」

ソラ達はひとまずその場から離れた。

次の日。ソラは朱里と休み時間中に電話をしていた。

『一樣左京さん達にも協力をお願いしときました』

「ありがとうございます朱里。左京さんの行動力は結構必要になると思います」

左京は朱里の家のメイドで前回ソラ達を助けてくれた。

『そっちはどうですか？』

「今のところ熊田さんの連絡はありません。ただ、雫さんの協力をしてくれるのはお助かりです」

『そうですか。じゃあ今日も警察署にでも集まりますか？』

「ええ。おねがいします。雫さんもよければ」

『ええ。伝えておきますね。それではまた後ほど』

朱里はそう言って電話を切った。

ソラは携帯を締まって教室に入った。

「どうだった朱里ちゃん？」

雪が聞いてきた。

「ええ。大丈夫です」

ソラがそう言った後、道長が声をかけてきた。

「お、長門。今日一緒にカラオケでも行かないか？」
「すみません。今日は用事があるので」

ソラは両手を合わせて謝った。

「そうか。それじゃあ冬野さんはどうだ？」
「ゴメン。私も今日は用事があるの」
「そ、そうか」

雪も道長の誘いを断った。そのあとチャイムが鳴り全員席に着いた。

警察署。そこにはいつものメンバーと雫が入って行った。
会議室。

「よう今日も良く来てくれたな」
「お久しぶりです熊田さん」

雫が熊田にお辞儀をし、挨拶をした。

「よう。たしか窓辺さんだったよな。おねがいするぜ」
「はい」

「熊田さん。例の方はどうでしたか？」

ソラが話題を変えて聞いてきた。

「ああ。その件だが。あいつのほうは協力できるらしい」
「本当ですか」

ソラの言葉は安心感が感じられた言葉だった。

「今、ここまで連れて来ている。オイ！入っていいぞ」

熊田の言葉に男性1人が会議室に入ってきた。背は高く黒髪の男性だった。なんか筋肉もすごそうな感じもした。

「お前が長門ソラか。俺のことはレンジでいい。よろしくたのむ」

レンジが握手を求めてきたのでソラは握手をした。このときソラは確かに腕の少しだが筋肉が強い感じがした。

「ありがとうございます。これからよろしくお願いします」

「ああ。それでこいつらがお前の仲間だな」

レンジは女子達の方へ振り向いた。

「大木優菜といます」

「冬野雪といます。レンさんよろしくね」

「倉田朱里です。よろしくお願いします」

「窓辺雫です」

4人ともお辞儀をした。

そのとき、レンジはある瞬間雷に打たれた感じをした。

「す．．．」

「す？」

ソラは聞きなおした。

「ストライクー!!」

「れ、レンジさん!?!どうかしましたか?」

しかしソラが聞くまでも無くレンジは光の速さで雫の近くに寄った。

「こんにちは。あなたのためならいつでも死ねる祖父江蓮時です。よかったらレンジと呼んで下さい」

レンジは改めて雫に自己紹介をした。

——なんかさっきと雰囲気がちがう!!

「は、はあ」

雫も何が起こったのかわからなく手間取っていた。

「これだったらバラの花でも一束持ってこればよかったです」

「はあ」

「レンジさん!!ストップ!!」

ソラはこのままでは話が進まないのを止めようとした。

しかし、レンジは雫に一目ぼれしてしまっただけでこうなったらもう誰も恋する青年を止められない。

「少し黙っている!!」

そう言って熊田がレンジの頭に拳骨を落とした。

レンジはうずくまりながら頭を抱えた。相当痛かったらしい。

「一樣、私の使えているものも協力してくださるといつてました」

朱里が言った。その言葉に疑問を感じた雪はソラに聞いてきた。

「ねえソソ君。あーちゃんてまさかお金持ち？」

雪と優菜には朱里の家のことはいまだに伝えてはいなかった。

ついでに雪はこれから朱里のことを「あーちゃん」、優菜のことは「ゆうちゃん」と呼ぶらしい。なんだか親密度がだんだん上がってきているようでソラもうれしく思っている。

「それでこれからどうするの？」

雪がたずねていた。

「そうだな。いろいろこつちも搜索しているがいい情報はまったく入っていない」

「だったら僕達で外にでて搜索するしかありませんね。前みたいに突然会ってしまうこともありますし」

そういつてソラは鞆からプラスチックの箱を取り出した。その箱からあるものが出てきた。

「これはなにソラ君」

「これは通信機です。ついでにこれは携帯と伝道できるものを用意しました」

そういつてソラは熊田以外の全員に通信機を渡した。これは携帯に登録すれば携帯を耳に当てなくとも通信でき、一掃連絡が出来やすくなっている代物だ。作ったのはソラだが、設計や未完成のパーツ

とかは父親のものからなのでソラはただ組み合わせただけである。
だがこの技術は相当すごい。

「そしてこれから僕はこれを使います。朱里持ってきてくれましたか？」

「はい。これですね。頼まれたことは全て終わりましたよ」

「ありがとうございます」

「ねえそれはなに？」

優菜が聞いてきた。

「これは最先端の携帯と言ってもいいでしょうか」

「どうゆうこと？」

「これはお父さんが残してくれたものの中の一つで、まあ操作は携帯と同じです」

そういつてソラは電源をつけた。画面は携帯と同じだが操作ボタンは携帯とまったく違うものだった。電源をつけた後、なんと画面がデジタル式に飛び出してきた。まるで画面が空に向かって映しているみたいだった。

「こ、これはすごいな」

熊田が感心した。

「さらにこれはパソコンみたいにキーボードまでこんな風に出すことが可能です」

ソラはそう言った後、操作ボタンのところからデジタルのキーボードがでてきた。さらにデジタルの画面も広がり大きくなっている。

「よし、正常に動いていますね。これでひとまず準備は完了ですね」
「そ、そうだな」

「それじゃあ僕達は外にでも出て搜索でも始めます」

ソラはそう言った後。いきなりレンジが呼びかけた。

「まだだ。まだ俺のS Iの説明をしていない」

「そうでしたね。それではおねがいできますか？」

「ああ」

（ソラ君は結構人使いが上手いかも）

全員心の中で思った。

「俺のS Iの名は鉄ノ変化だ。イロン・コンパーカー鉄を自由自在に変化させることが出来る。残念ながら接着とかは出来ないがな」

レンジは説明した。

「わかりました。またこのことに対して新たに作戦を考えておきます」

「そういえば。ソラお前にS Iはなんだ？」

レンジが質問したがその質問には優菜が答えた。

「ソラ君にS Iを持っていませんよレンジさん」

「何！？でもいままでS I使いを倒してきたんだろっ」

「それは今まで環境が良かったですし、それに今は仲間もいます。なのでいままで僕一人で倒したことはあまりありません。いままで

いろんな人に助けてもらってきました」

「でもその代わりに私達も助けてくれたよね。ソラ君は」

雫はそう言った。

「うん」

「そうだよね」

「はい」

他の3人も同じ意見だ。

「なるほど。やっぱり俺はおまえに協力するのは一番いい考えだそうだな」

「ありがとうございます」

ソラとレンジはもう一回握手をした。そこには男の友情みたいなものがあつた。

そしていまここに謎のS.I.使いの軍団――ダークネス・ロードス暗闇の道人――に対抗するもののチームができた。

第11章終わり。続く。

第11章 チーム結成！！（後書き）

織「どうもこのS I 紹介のコーナーの担当を勤めさせてもらっにじ錦
乃織きのしきといいまッス」

ソラ「あれ？本編では出ていない人ですよね」

織「ついでに作者がいうには俺が出るにはまだ先と言われましたッ
ス」

ソラ「完璧にこのコーナー専用のキャラですね」

織「それでも俺はやりとげまッスよ」

ソラ「が、がんばってくださいね（汗）」

織「今回はここまでッス。次回からはS I 紹介やれるといいッス」

ソラ「つまり、予定があやふやという意味ですね」

織「S I の募集の詳しくは「k u x u の活動報告」にあるッス」

第12章 戦闘の火蓋・搜索（前書き）

SIの募集まだまだ続けています。

詳しくはkuxuの活動報告のところをみてください

ッス
ソラ「これ、いつから織が言ってたのですか!？」

第12章 戦闘の火蓋・搜索

ソラ達は一旦警察署を出た。

1日でも早く1人でも倒すためにさっそく行動にでたのである。

「それでどうするのですかソラさん」

「そうですね」

朱里の言葉にソラは少し考えた。

「一回2手に分かれて行動するのはどうですか？」

「ああ。1人でも見つけるためにはそのほうがいいだろう」

ソラの提案にレンジが賛成した。ほかの4人も賛成したようだ。

そしてソラが平等に2チームに分かれさせた。まず、ソラを中心にした優菜、朱里チームは学校近辺を搜索することにした。

もう1つのチームは雫を中心にした雪、レンジチームだ。本当はレンジのほうが年上なのだが実戦経験によりそって雫が中心となった。そして彼らは商店街の近辺を搜索することにした。ある程度時間が経ったら連絡をし、違つところを搜索するように計画を立てた。

ただいまAチームは学校の近辺を搜索中。基本的に目の搜索は朱里と優菜に任せており、ソラは携帯を使って雫にいろいろな作戦をメールで伝えているところだ。万が一相手の姿が見えなくともソラのSIを今は少しだけだが感じることは出来る。

「あゝ朱里」

「なんですかソラさん」

ソラは疑問に思いながら聞いてきた。

「その棒はなんですか？もしかしてダウジングですか？」

「うん」

そう、朱里の手には金色に輝いている折曲がった棒を持ちながら探していた。

「朱里。それは人探しには使えませんよ。ダウジングは水脈や鉱脈を探り当てる占いですので必ず当たるわけではありません。まして占いなんです」

「そ、そうなんですか」

ソラが訂正の解説をしたら朱里は驚いていた。

「そうなんだ」

「優菜も信じていたのですね」

ソラはいつもどおりに呆れながらツツコンだ。
しかしS Iの気配はまったく見当たらない。

「朱里は星道高校に通っているのにことうゆう知識は無かったのですね」

ソラは意外そうに聞いてきた。

「え、ええ。なんか面白そうなので一様やってみました」

朱里はあははは。と言った。

「朱里ちゃんこゆう可笑しな部分もあるんだね。私はてつきりごく真面目な人だと思ったよ。冗談嫌いの」

「いいえ。そう思われるのは度々ありますけど。やっぱり仲のいい友達にはそう言われます本当にそうゆう印象なんですか私は」

朱里は首をかしげながら聞いてきた。どうやらあまり自分のことは知らないタイプのようなのだ。

「どちらかといわれたらそうよね。ソラ君は」

「僕は会ったところから結構冗談を言っていましたよ」

「へえ」

優菜はそう言いながら朱里を見た。

「でも最近いろいろな事件が多いのでそう思われてもしょうがないですよ」

「そういったらそうよね」

「はあ」

その後すぐにソラの携帯から着信音が鳴った。

―テレッテレッテラー!!

「何ですかこの着信音は？」

ソラが呆れながら朱里に聞いてみた。

「たぶん。このまえ右京さんが変えていたのでしょうね」

「なんで変える必要があつたのでしょうか」

「面白そうだったからじゃないの」

「多分それであっているような気がします」

朱里もため息をついた。

ソラは雫からメールが来たらしく返信し始めた。

その間2人は違う話題で話し始めた。

「しかしあっちのほうは心配だね」

「そうですね。レンジさん絶対雫さんに一目惚れしていましたよね」

優菜と朱里はレンジのことで話していた。しかしこの会話はまったくレンジのことは心配しておらずしずくのことを心配していた。もちろんソラは何のことがまったくわかんないので話には参加していない。

「雪ちゃんがなんとかしてくれるといいのだけでも」

「雪さんもこのことには気づいていると思いますから信じましょう」

2人の話はどんどんエスカレートしてきた。こんな話になると前が見えなくなってしまうのはさすが十代の乙女である。

「ソラさんはこのことに気づいていないみたいですけど」

「うん。絶対にソラ君は気づいていないよ」

優菜がソラがいたと思う場所に振り向いた。しかしそこにはソラの姿は無かった。

「あの2人とも」

「は、はい」

違うところでいきなり話しかけられて2人ともビックリした。

「話すのはいいんですけど、こっちいきますよ」

「「・・・あ」「」

話に夢中で道の前すら見ていなかった2人はあわててソラを追った。

場面が変わりBチーム。

彼らは商店街の人氣が無いところでこっさり確認していた。実際戦闘になったら人を巻き込んでしまうことがあるかもしれないと思いここにいる。

「あの〜レンさん」

「ん？なんだ」

雪がレンジに聞いてみた。

「その格好はなんですか？」

そう今レンジはの格好は片手にアンパンもう片手に牛乳を持ち、いまだきありえない厚そうなコートを着ており、電柱の後ろに隠れている（実際隠れてはいない）

「ふふふ。見張りならこの格好がお決まりだろう」

レンジは得意げに言った。しかし、今ここにいるのは人に見つかりにくくするためにここにいるのにこんな格好しているためにいろん

な人に見られている。

「見張りというよりもただ単に私たちは人を探しているので意味はないですよ」

「な、なに！」

「むしろ目立っているような気が」

「まあ実際いろんな人に見られていますけど」

雪と雫は静かにため息をついた。

「たつく。脱げばいいのだろ」

そういつてレンジはしぶしぶコートを脱ぎだした。

それよりも彼がなぜこんなものを持っているのかは誰も言わなかった。

「そういえばレンさんのS.Iって鉄を変化させるものですよね」

「おう。形によって防御にも攻撃もできるぞ」

「そうか。だからソラ君はレンジさんをこっちに取り入れたわけね」

雫が何かをわかったように言った。

「どうゆうことだ？」

「つまりこのチームはレンジさんが中心となり私達が援護する形になっっているですよ」

「そうか。レンさんは1人で攻撃も防御ができるために援護系の私達がチームなんですね」

雫の説明でこのチームの意味を知った。

「と、言っても私達のS Iはほとんどが援護系だけだね」

「そうですね。攻撃系はあーちゃんぐらいですし」

「おい。それよりも俺たちはこれからどうする気だ」

レンジが脱線した話を戻した。

「俺達はどうやってS I使いを見つける気だ？」

そういえば。たしかにこのなかでS Iの気配を感じ取れるものはない。気配を感じ取られるのはソラのみだ。

「そうですね。じゃあどうします？しずさん」

「大丈夫、手はあるわ」

そう言つて雫は眼を閉じた。それからそのあと雫が何かをしたいのかが雪もレンジも分かった。

いや性格には気づかされたのだ。

雫は自分のS Iの力を電波みたいに気配を出しているのだ。

人は普段、知らない間にS Iの気配を出してしまう。この気配は人間の気配とは違い自分で消すことはできない。なにかしら特別なことをしない限り消すことは出来ないのだ、しかし、気配を増加させることはできる。だがこれは結構高レベルのS I使いしかできないことであり、これを使えるのはソラ達の中でも雫ぐらいだ。

つまり、強い気配を感じることはS I使いなら当たり前のことである。それを利用して雫は気配を強くして相手を逆に誘き寄せることにしたのだ。

S Iの気配を強くすることは自分のS Iを強くさせることでもある。つまり、気配を強くさせる＝強い技を撃つに等しいのだ。人はオートとマニュアルの2つのあり、オートは自分の好きなときに出来るために集中力がとても必要となる。マニュアルは自分の意思とはま

まったく関係なく発動される。だがオートとはちがい集中力はほとんど必要ない。

「しずさん。こんなことも出来たんだ」

雪が感心しながら言った。

「こんなことが出来るやつが身近に居たなんてな」

レンジも感心している。

そのあとだった。雫は何かを感じたらしく、喋りだした。

「気づかれました。近くに居る」

「「え!!」」

作戦が成功したのか雫は言い張った。

「準備はいい？」

「はい」

「おう」

雫の呼びかけに2人とも答えた。

その瞬間、いきなりバスケットボールぐらいの大きさの球が空から降ってきた。

「避けて!!」

瞬間の出来事だったがみんな避けることはできた。
球はそのまま地面にめり込んでいる。

「こんなの食らったらひとたまりも無いぜ」

「おいしいな。さすが俺を誘き寄せることが出来るやつらだ」

一人の白のタンクトップを着ている青年が呼びかけてきた。

「精々頼ませてくれるらろつな!!」

男は強い眼差しで睨んでいた。

「俺の名は豪鉄楊汰^{うてつようた}!! いまから――暗闇^{ダークネス・ロードス}の道人――の一員として」

豪鉄は一瞬間を空けた。

「こいつらを殺す!!」

豪鉄は大声で叫んだ。

「そんなすぐには殺されないわよ」

「てか、殺されないわよ」

「俺達をなめるなよ」

3人も豪鉄に負けずと言い張った。

その頃、ソラ達も1りのS.I.使いと遭遇した。そいつは男でソラ達と年齢が近そうな少年だった。しかし、パークアのフードを深くかぶりなんか暗い感じを出していた。

「なんですかあなたは」

ソラは男に聞いてみた。

「僕の名前は闇影透―やみかげとおる暗闇の道人―の一人だよ」

闇影は静かに名乗った。

「ソラさんなんか不気味なひとですね」

朱里が怖がりながら言った。

「でも彼も暗闇の道人の一人だから戦わないといけないのよね」
「ええ。まずは様子を見ましょう」

ソラ達の周りに緊張の風が吹いた。

場所戻ってBチーム。

「きゃあ!!!」

雫は悲鳴をあげた。肩には不意で付けられた大きな傷ができ、血が出てきていた。

「大丈夫? しーさん」

「ええ」

「しかし、なんだんだ。あいつのSIは」

豪鉄の前には3つのナイフが宙に浮いていた。

「さあ死ね!!」

3本のナイフが雫達を襲った。

第12章続く。

第12章 戦闘の火蓋・搜索（後書き）

織「どうも、毎度おなじみS.I.の紹介のコーナッス」

優菜「そんなこと言っているけどまだ一個も紹介してないね」

織「それはそうッス。準備がまだ終わっていませんッス」

優菜「次はちゃんと紹介してくれるのよね」

織「そうッス」

優菜「次回はソラ君が来るからちゃんとしないと何されるか分からないよ」

織「じゃあ、次回からは前置きなしで行きたいッス」

優菜「考えてみれば毎回前置きで時間なくなっているからね」

織「それではまた次回ッス」

第12章 戦闘の火蓋・謎の力

豪鉄楊汰は空中に浮かんでいる3本のナイフを雫達に向かって放った。

しかし、ナイフは誰にも当たらなかった。

雫が眼を開けると、そこには大きな壁があった。ナイフは地面に落ちていた。

レンジは息を一息ついた。

「どうやら間に合ったようだな」

「これ、君のSⅠ？」

「ああ、そうだ」

レンジはSⅠ―イロン・コンバーカー鉄ノ変化―を使い、周りにあった鉄を壁を作った。優菜みたいに瞬間的に出来ることは難しいが何とか間に合ったようだ。

レンジはすぐに壁を解除して、長い棒を作った。イロン・コンバーカー同じ鉄をいつでも変化させることが出来ることが鉄ノ変化の有効点だ。

「いくぜ」

そう言ってレンジは豪鉄に向かって走り出した。

レンジは叫びと同時に鉄の棒を振り上げた。

「無駄だ！」

レンジが振り下げようとしたとき、レンジが上に何かをぶつけられたかのように吹っ飛んだ。

レンジは怯むことなく、上手く地面に着地した。

（なんだ。今のは）

そう思いながらレンジは雫達の方に振り向いた。

雫の肩の傷はそれほど深くは無い。しかし、S Iの機動力は低下することは間違いなかった。

（クソツ。完璧に油断した）

レンジは雫達に声をかけた。

「おい。雪。お前はちゃんと戦えるな」

「は、はい」

「それじゃあ、雫。お前が俺達に作戦を伝えてくれ。その傷じゃ戦いにくだろう」

「は、はい」

そう言った後、レンジは豪鉄を見た。

「いくぞ！！」

そう言って、レンジはまた豪鉄のほうへ走って行った。

後ろには雪がS Iを使う準備をしていた。

「はああああ！！」

レンジは横から鉄の棒を振りかぶった。さっきとは違う方向で攻撃することにより敵のS Iの情報がつかめるかもしれないかもしれないからだ。

「無駄だといってるだろ！」

次はレンジの体ごと横に吹っ飛んで行った。

(な、なんだんだこいつは)

「油断しないでね」

そう言って雪は水鉄砲から水を放ち、
水十氷で凍らせた。

しかしその氷もいきなり地面に叩きつけられた。しかも豪鉄は手足も出していないのにいきなりだ。

「噓！」

「残念！！」

そう言つて豪鉄はまた4本のナイフを取り出して投げつけた。そのナイフは異常なほど早く、レンジの鉄ノ変化^{イロン・コンバーカー}じゃ間に合わないほどだ。

「死ねええええええ」

豪鉄は叫んだ。ナイフは思いつきり雪を狙っていた。

だが、ナイフは雪には刺さらなかった。ナイフは空中に浮かんでい
る水の中に入って身動きが取れなくなっている。これは雫のS I 水^{アク}
アトロマスターノ達人で作りに上げられた水だ。

「なんとか間に合ったようね」

雫はあらかじめこうなることを予想していたらしく、そのためこん

なに早く反応できたのである。

「無駄だ」

しかし、水はまた何もしていないのにいきなり地面に叩きつけられた。

そのまた後ろから2本のナイフが飛んできた。

だが、刺さったのは雪ではなく、雪をかばった雫に当たった。

1本は腕にかすっただけだが、もう1本は足に刺さってしまった。

「きゃああああ」

雪は叫んだ。

雫の足からどんどん血が流れって行った。

「ち、おいしい。このぐらいじゃ死なないな」

豪鉄が言い終わる前に何かに殴られた感じがした。

そう、後ろからレンジが豪鉄に向かって鉄の棒で殴ったのだ。

レンジの眼は愛するものの傷を負わせた怒りと憎しみの眼をしていた。

「貴様、ゆるさん」

レンジは躊躇なしに鉄棒を振りかぶったが手に持ってい棒は豪鉄の手刀ではじかれた。

SIのことはいまだに良くわからないがそれが無くとも豪鉄の力はすごいものだった。

「くそっ!!」

レンジは一步下がりに近くにあった手すりに触り変化させた。

「これならどうだ!!」

レンジは振りかぶると同時に大きな釜を作り出した。

「バカが!!」

豪鉄は一秒たりとももびびらなかった。

レンジが持っていた釜はいきなり地面へ落ちていった。

その瞬間、豪鉄はレンジの顔面にパンチを入れた。

レンジは鼻血を出しながら倒れた。

「お前の力じゃ俺はやらねえ」

そう言いながら豪鉄はレンジのほうへ向かった。

「勝てなくともやれることはある」

「なに？ハツまさか」

豪鉄は後ろを向いた。そこに雪と雫の姿は無かった。

「貴様。まあいい。ここでお前だけは殺す」

「ヘッ。やってみるよ」

両者一斉に構えた。

同時刻。ソラ達もあるSⅠ使いと遭遇していた。
そいつの名は闇影透。パーカーのフードを深くかぶり暗い雰囲気を出している。

（何ですかこの人はこんな感じ初めてです）

ソラは闇影を見ながらすこし不気味がっていた。

——まるで感情が無いみたいに周りの空気が冷たい。

「任務、だから、速攻で、倒す」

闇影はそう言いながら消えていった。しかも瞬間的に。

ソラは超能力^{スキル・アイ・リング}ノ眼・輪を発動したが闇影とそのSⅠの気配が無い。

（なんですかこれは）

ソラがそう思った瞬間優菜が叫んできた。

「ソラ君。後ろー!!」

「へ!？」

しかしもう遅い。ソラが振り向いた瞬間バットがソラの肩に直撃した。

「ガッハ」

ソラは一步下がりを前を見た。
そこにはいきなり消えて行った闇影がバットを持ちながら立っていた。

「へえ、あれを、耐えられる、なんて」

闇影は感心しながら言った。実際、闇影はソラの頭を狙っていたのだろう。しかし優菜が伝えてくれたためにソラは頭の直撃は免れた。ソラは頭の中で今起きたことを分析していた。

（どうゆうことですか？これが彼のS I！？）

ソラは今は考えても今は何も出来ないと自分で悟り構えた。

優菜も棒を出して構えた。

朱里はスタンガンを出して、サンダー・ウェポン電撃ノ銃装備を発動して銃を作り出した。

「行きますよ」

ソラは闇影に向かってダッシュした。

―バキッ！！

鈍い音が聞こえた。

そこにはボロボロのレンジと余裕の笑みをこぼしている豪鉄がにらみ合っていた。

レンジのS Iはいまだに主体不明のS Iのせいだ無効化している。

「もうボロボロだな。もう飽きたし終わりにしようか」

そう言って豪鉄は6本のナイフを取り出した。

（こいつ何本ナイフを隠し持っている気だ）

「死ねええええ！！」

豪鉄はナイフを一斉に投げ出した。

このときレンジは走馬灯を見た気がした。

しかし、ナイフはまたレンジには当たってなかった。

レンジは眼を開けるとそこには倒れこんでいる自分の目線とレンジを抱え、倒れこんでいる雫の姿があった。足の傷は治っておらず、むしろさっきのまんまの状態だった。

ナイフに当たる瞬間、彼女がレンジを自分ごと押し倒したのだ。その証拠に何箇所かナイフがかすった傷か雫には何個もあった。

「お前、なぜ助けに来た！！さっさと病院に行け！！」

レンジは雫に怒鳴りつけた。

しかし雫は笑い今の質問の答えを言った。

「だって、仲間なのに置いていく人が居るものですか。あなただってボロボロなのに無理しちゃって」

「それはしずさん。あなたにも言えることですよ」

後ろには雪の姿があった。雪は呆れながら言い通した。

「2人ともボロボロなんですから無理はしないでください。ここは私が戦います」

雪が決心ように言った。

「いや、ここは私が戦うわ」

雪の提案を拒否し、雫が言った。

「あなたのS Iじゃ彼とは戦いにくいわ。そして私にも作戦がある。もちろん、2人には手伝ってもらうわね」

そう言ったあと雫は口元を隠して、2人にか聞こえない要して耳の通信機で作戦を伝えた。

「分かりました。それじゃあ頼みます。しずさん」

「ああ」

「わかってる」

そう言つて雫は豪鉄に目線を合わせた。

「それじゃあ、作戦開始！」

雫は水ノ達人で水の槍を作った。それを雪のS I、ウォーターアイス水十氷で凍らせた。アクアトロムスター

「何かと思えば今までとなにもかわらないな」

豪鉄がそう言った瞬間、氷の槍は地面に叩きつけられ割れていった。その隙を突いた雫は豪鉄に向かってダッシュして行った。そして手の中で作った水玉をなるべく豪鉄の近くで投げた。もちろんこれも凍りつけた。

「無駄だ」

そう豪鉄が言った後、氷玉は地面に叩きつけられそうになった。しかし、近くの氷玉は当たらなかったが、代わりに違う氷球が豪鉄の腹に当たった。

これ氷玉はさっきの氷玉と一緒に作られた。だが発動した場所は雫の後ろに居たレンジの元で作り上げられたもので、レンジはタイミングよくこの氷玉を打ったのだ。

「な!？」

豪鉄は倒れこんだ。

しかし、雫達の逆襲はまだ始まったばかりだった。

次は倒れこんだ豪鉄の目の前に大量の氷柱が落ちてきた。

雪はレンジが作成した鉄の台の上で大量の水を落としたのだ。

「クソッ!！」

豪鉄は転がりながら避け、勢いで立ち上がった。

その後、いきなり雪が乗っていた台からいきなり出てきた鉄の棒に押し込まれた。

レンジS Iは触っていればいつでも鉄を変化させらるのだ。

鉄の台には長く延びていた棒がありレンジはそれを触っていた。

豪鉄が押し込まれた場所には雫が立っていた。

雫は両手の掌をパンのいう音を出すほどいきよい良くくつき合わせた。

アクア・タイフーン
―水の竜巻―

雫の周りに大量の水が渦巻き雫を守るように回転している。

豪鉄はいきよい良くはじき飛ばされた。
空高く豪鉄は吹き飛んだ。
そのまんま地面に叩きつけられた。

「貴様ら」

豪鉄は起き上がり怒り出した。
今の攻撃で雫の体力は結構減らされた。やっぱり足の傷がずいぶんダメージになっていた。
しかし豪鉄はそんなこと関係なかった。

「全員平伏せ！！」

豪鉄は叫びだした。
その瞬間、3人とも何かに引っ張られるみたいに地面に叩きつけられた。

（な、なんだんだこれは）
（これが、あの人のSIE！？）
（やっぱり。予想どうりね）

豪鉄は地面に叩きつけられている間、レンジが持っていた棒を持った。
そして雫のほうへ歩き出した。

「貴様が司令塔か」

そう言った後。豪鉄は鉄の棒で雫の体を殴りだした。

「きゃあああああ！！」

雫の叫び声が響き渡った。

しかし、豪鉄はお構いなくまた殴りだした。

そして3発目を殴ろうとしたしたこと、謎の声が聞こえた。

「おまえ。何をしている」

地面に叩きくけられている3人は良く顔を見れなかったが声で男だと分かった。しかも聞いたことの無い声だ。

「き、貴様はまさか」

「これ以上殴り続けるなら俺が相手をしよう」

「く、仕方が無い」

そういつて豪鉄は走り出した。

もちろん。3人ともSⅠが解けて立ち上がった。

しかし、雫はすぐに倒れてしまった。

「し、しずさん!!」

2人は急いで雫の元へ駆けつけた。

「これ以上はやばいだろう。早く病院へ行こう」

「は、はい」

そう言つて2人はお礼を言おうとしてあの男を捜したがしかし、彼の姿は無かった。

「あの男の子はなんだったんでしょうか」

「さあな。こんどまた会えるといいな」

そういつてレンジは雲を抱えた。

「れんさん。お尻触っちゃだめですよ」

「バツ、そ、そんなことしねえよ」

「だといいですけど」

2人は病院に向かって走り出した。

このとき3人は暗闇の道人の強さを知った。

第12章続く。

第12章 戦闘の火蓋・謎の力（後書き）

織「どうも、今回紹介するの「水^{ウォーター}氷」ツス」

ソラ「雪のS Iですね」

織「能力は水を凍らせたり、氷を水に変える基本的にノーマルなS Iツス」

ソラ「こう聞いてみると結構単純なS Iなのですね」

織「でも意外と作戦には使いやすいほうなのではないツスカ」

ソラ「まあ、単純なほど使いやすいS Iはありませんからね」

織「いろんな意味でと、言う意味ですツスね」

ソラ「ノーコメントでお願いします」

織「それではまた次回ツス」

第12章 戦闘の火蓋・影

ソラは闇影に向かって蹴りを入れようとした。しかし闇影はまた突然消えてしまった。

「また消えましたね」

朱里が考えながら言った。

そう。さっきからソラ達は攻撃しようとするがいつもいきなり消えて避けられてしまっている

（どうゆうことですか？消えるS Iなんてありますか？）

ソラも闇影のS Iを見つけようとしていた。しかし闇影は消えるだけで攻撃は普通の物理攻撃でしてくる。

「ソラ君後ろ」

「クッ！！」

ソラは後ろを見ずに闇影の攻撃を避けた。

ソラはいま天眼を使っているがそれでもいきなり消える秘密は分かっていなかった。

「おしい」

ソラはまた蹴ろうとしたがもう遅い。闇影はすぐに消えて行った。もうこれで何回目かの繰り返しだ。

S Iの反応も消えているうちは反応が無い。

分かることは彼のS Iは攻撃系ではないことぐらいだ。

攻撃はワンパターンなので簡単に避けられるが攻撃が当たらなければ意味は無い。

（一か八かこの方法でいきましょうか）

ソラは構えた。

しかし闇影はやっぱり後ろからバットを持って振りかぶってきた。

———今だ！！

———デジタル・ロープ
———電子ノ繩———発動！！

ソラは繩ロープを使って闇影を捕まえた。

これなら消えることは出来ないはずだ。しかしソラの考えは甘かった。

捕まえたが一瞬でまた消えてしまった。

「やっぱり。これはだめでしたか」

「捕まえてもすぐに逃げられてしまいますね」

「これじゃあ攻撃も出来やしないね」

（どうする。優菜のS.Iは今は使えないし、朱里のS.Iは弾が限られているから無駄に撃つわけにがいけません）

このチームでは一番相性が悪い相手と当たってしまった。
しかしそれは雫達のBチームにも言えることだ。

まるでソラ達がここに居るのを知っているみたいだった。

「余所見にちゃだめだよ」

後ろから闇影がソラに向かって殴ってきた。
ソラは避けながら考え事をしていた。

さてどうしますか。

僕はいまだに闇影さんのS Iを判明することが出来ていない。
このままじゃ消耗戦になってしまいます。一体どうすればのでしょうか。

落ち着いてもう一回考えれ見ましょう。

まず消えるためには何かを万端な場所で無ければならない。
だがここは普通の狭い道路になっている。

天気は晴れ。だが夕日はまだ沈みそうにも無い。
彼が持っているものはバットののみ。

待てよ。もしかしたら消えるのじゃなくて溶け込んでいる？
それなら状況は簡単になっていく。

「くらって」

——何回やっても当たりません。

僕は闇影さんの攻撃を避けつつ考えていた。

「くそ、すばやい、な。時間が、ないのに」

時間が無い！？

つまり闇影のS Iはもしかしたら時間制限もしくはS Iが使える状況の意地が出来なくなってしまうのか。

僕は確認のためにもうさつきと一回同じ方法をやってみようと思った。

いいタイミングに闇影さんは出てきてくれた。

デジタル・ロープ
— 電子ノ縄 — 発動!!

僕はまた闇影さんを捕まえた。

— さあ、脱出してください。

「無駄な、ことは、するな」

そう言つて闇影さんはまた消えていった。

無駄なことはありません。

僕は見ました。あの時、闇影さんは下のほうへ吸い込まれるように消えたことを。

地面、時間、消える、そして天気。

そしてさつき闇影さんの足元にあったもの。

— 全てつながりました。

反撃開始です。

ソラは何かが分かったように笑った。

2人ともソラが何かが分かったのかは分からないが多分こっちに有利なことは確かだと信じていた。

ソラは言った。

「分かりましたよ。あなたのS Iが」
「え!？」

闇影は突然現れた。

「そうか、じゃあ、聞かせて」
「いいですよ」

ソラは鋭い眼差しで闇影を見た。

「あなたのS i。それは影の中に入ることです」

——!!

「ソラ君。それ本当？」

優菜が聞いてきた。

「ええ本当です。今の状況でこれが一番合っていました」
「さつき時間が無いと無いと言っていたのは影が映る時間がなくなるという意味ですね。ソラさん」

朱里もソラが言っていることが分かった。

「そうだ。よく、分かったね。確かに、僕の、S Iは、スネークシャド潜影と、言
う。でも、それでも、負けは、しない」

闇影は影の中に入り込んだ。

たしかにこれじゃあいくら分かったと言えども対象の仕様が無い。
しかし、ソラは抜かりは無かった。

影とは光が反射して水や鏡などの表面に映ったことを言う。
つまり、光が無くなったら影は出てこない。

「優菜。例の技の準備をしてください」
「わかったわ」

ソラは優菜に伝えた。

（あの人は理由は分からないが必ず）

——僕のほうへ来る。

ソラの読みどおりに闇影はソラの後ろに現れた。
ソラは闇影を縄で捕獲し、ジャンプをした。

「今です。優菜！！」
「うん」

ソラと闇影の足元に黒い床が表れた。同時に三角形を作るように壁
がソラ達を囲んだ。

これが優菜が新たに手に入れたS Iの能力。ライン・シールドしき
線ノ盾・色！！
そしてそれを利用した技。

ブラック・フォース
——黒ノ三角形——！！

これなら影は現れない。

ブラック・フォース
黒ノ三角形の中にはソラと闇影しか居なかった。

「これは、いつたい!？」

ブラック・フォース
「優菜の技、黒ノ三角形ですよ」

ソラは平然と言った。

「ここならあなたのSIは使えませんか」
「くそっ」

闇影は壁をバットで叩いた。
しかし壊れる気配はない。

「残念です。もうあなたの負けです」

「な、に」

「さあ、降参して暗闇ダークネス・ロードスの道人の情報を教えてください」
「いや、だ」

闇影の答えは意外にもノーだった。

「そうですか。理由は聞かせてもらえないでしょうか」
「むりだ」

何回言っても闇影は断り続ける気だ。

「じゃああとでゆっくり聞かせてもらいます」

「・・・」

「朱里やってください」

ソラは通信機で朱里に呼びかけた。

2秒後、ソラと闇影の横に電気の光線が壁を突き破って襲ってきた。

「闇影さん」

「ん？」

「困ったことがあれば、ちゃんと聞きますよ」

ソラはそう言いながら光線に当たっている闇影を見送った。

優菜の盾は破壊したが闇影はただ気絶していただけだった。

「ナイス手加減です。朱里」

ソラは体をはたきながら言った。

「この人はどうする？」

「とりあえず警察署に連絡しようか」

ソラは熊田に連絡を始めた。

警察署の会議室。中にはソラ達と縛られている闇影が居た。

「闇影さん。なぜあなたは暗闇の道人に協力しているのですか？ダークネス・ロードス教えてください」

しかし、闇影は黙ったままだった。

「大丈夫ですよ。もう戦いませんから」

しかし闇影は黙ったままだった。

ソラは何か感じたらしく後ろを向いた。

「熊田さん。タバコやめてください。彼、息を止めていますよ」

「なんだよそれは!!」

そう言いながら熊田はタバコの火を消して捨てた。

「さあ、話を聞きましょうか」

「実は、僕の、妹が、人質に、取られている」

「人質？」

優菜が驚いたのか聞き返してきた。

ソラはそのことを聞いた瞬間下を向いてしまった。

「それで、脅されて、戦って、きた」

「そんな、それしか解決方法は無かったのですか？」

「はい、でも、もう、終わった。お前達を、倒す、任務を、果たすことが、出来なかった」

「だったら、僕達があなたの妹さんを助けます」

「え!？」

ソラは決心したのかさっきとは違う怒りの眼差しをしていた。しかし本人も誰に向けているのかは分からなかった。

「それでいいですか？」

「そ、そんなことできるの？」

「ええ。やってみますよ。熊田さん少し僕達はすこし行かなければならないことが出来ましたのでこれで。優菜、朱里。行きますよ」

ソラが席を立った。

「ああ。例の件か」

熊田は事情は知っていたらしい。優菜と朱里はソラを追った。

「どこに行くのソラ君」

優菜が聞いてきた。

「病院へ行きますよ」

第12章終わり。続く。

第12章 戦闘の火蓋・影（後書き）

織「今日紹介するのは「線ノ盾」^{ライン・シールド}ッス」

雪「今回はゆーちゃん新技も覚えたみたいね」

織「そうッスね。このS Iは自分の書いた線から壁を出すことが可能ッス」

雪「さらに裏表の強弱も自分で付けられるのね」

織「書いた線は2回まで同じのが使用できるッス」

雪「私達の優秀な防御ね」

織「さらに今回は「色」という能力まで覚えたッス」

雪「これは自分の出した盾に好きに色を付け替えることができるのね」

織「この能力のおかげでさまざまな技ができそうッスね」

雪「それではまた次回〜」

今回のS I「潜影」はライおさんが提供してくれました。ありがとうございます！！
つづきます！！

第13章 鉄の怒り

ソラ達は病院へとやってきた。

ここ星大病院は学生が多く学校関連の怪我ならすべて病院が負担してくれるらしい。

中は広く学生のほとんどの人が個室となっていることもある。

「ソラ君。何で病院へ来たの？」

優菜はいまだに理由を知らせていない。ついでに朱里も。

ソラは深刻そうな顔で言った。

「雫さんが怪我をしてここにいます」

「え！？」

そついった後ソラ達はエレベータに乗り個室専用の会へ来た。しばらく歩くとひとつの部屋を空けた。

そこには雪とベット乗りながら座っている雫の姿があった。

今回は警察の計らいにより個室を取ることができた。

雫の姿は服を着ていてもものすごい怪我だとわかるほど包帯を巻いていた。

「雫さん起きていて大丈夫なのですか？」

ソラは聞いてみた。

「大丈夫よ。別に病気じゃないんだし」

「でも、傷に障りますよ」

平気よ。と雫は笑った。

「ごめんなさい。私何もできなくて」

雪が申し分けそうな顔で言った。

ソラはそんな雪を見をみて頭をなでだした。
そして雪の目に顔が写るようにして言った。

「大丈夫ですよ。これは君のせいでもありませんし雫のせいでもありません」

ソラは微笑んだ。そんなソラを見て悩んでいる自分をバカだと思い
微笑み返した。

「さて、雫さんはしばらくここで安静にしてくださいね」

雫は無言でうなずいた。雫は自分がもう役に立たないと思うと悲しくなってきた。

「でも気をつけて。たぶんあの豪鉄という人は多分重力を扱うSIを使うと思うの」

「そうですか。そうだとしたらこっちは結構不利ですね」

ソラは考え出した。

「なに、悩むことはない」

後ろから声が聞こえた。振り向くとそこには包帯を巻いたレンジがいた。

「レンジさん」

「あいつは俺が倒す。拒否なんかさせないぜ」

レンジが指を差した。

「だめです」

ソラがきっぱりと言い張った。

「なんでだよ」

「聞かなくともわかりますでしょ。雫さんが傷ついて敵を討ちたい
と思ってるのはみんな同じです」

「まだ死んでいないけどね」

雫は疑問に感じながら言った。

「そんなのはわかってるがだけどそれだけでは無いんだよ。ここ
は俺のプライドに変えても一人でも行く」

「だめです」

2人とも引かない言い争い。

「じゃあ、このままほっとけというのか」

「倒すならみんな一緒です。みんなの力を借りなければいけないと
いうことがわからないんですか？」

ソラが言っていることは正しいかもしれない。

たしかに雫、雪、レンジの3人がかりでも倒せなかった相手なのに
1人でやるなんて無理がある過ぎる。

しかしソラの考えはそれだけではなかった。

「それに、彼が本当に重力を操るのなら、いい作戦がありますよ。それにはレンジさん。あなたの力が必要です」

そう言った後、ソラはみんなに作戦を伝えた。

6月25日木曜日。

ソラ達は放課後にあるところへ向かった。

そこは、そう昨日雫達が戦いあった場所だった。

昨日の夜、ソラは一人で警察署へ向かった。目的は闇影に話を聞くことだった。

闇影が言うには。

『なぜか、ある人に、言われた、場所に、行ったら、君達が、いた。理由は、僕にも、分らない』

それが本当なら彼は僕達がいる場所に必ず来るはずだ。

ソラはそう思いここに来た。

今回は雫は参戦しない。そして、今ソラの隣に居るのはレンジのみだった。

ほかの3人は別行動にしている。

しばらく待っていると例の男がこっちに来た。

「来ましたね。豪鉄さん」

「お、お前ら本当に居やがった」

ソラは今の豪鉄の言葉で一つ確信があった。
それはもちろん。ソラ達がここに居ると疑っていたように見えた。
つまり、彼の仲間に誰か一人場所を特定できるSIを持っていると
考えられる。

（本当にそうだったらけっこう面倒ですね）

しかし今はこんなことを考えている暇は無かった。

「おい、今日はお前にリベンジしてきたぜ。昨日はよくも俺を軽く
扱ってくれたな」

レンジは鉄の棒を構えた。

「そして、僕らの仲間を傷つけた御礼に来ましたよ」

ソラも構えた。

「覚悟しろ」「覚悟してください」

そう言ったとき豪鉄は笑っていた。

「なに言っているんだ。俺はお前達にはやられねえよ」

豪鉄は迫ってきた。

ソラは超能力ノ眼・輪を発動した。
スキル・アイ・リング

そしてソラも豪鉄に向かってダッシュした。

豪鉄はソラに思いつきり拳を振ったが、ソラは避けた。そのあと、
ソラは隙が出来た豪鉄に思いつきり蹴りを入れた。
不意をつかれた豪鉄は見事に当たってしまった。

豪鉄は後ろに下がった。

「その餓鬼はやれるようだな」

「それはどうも」

2人はまた睨みあった。

「俺のことを忘れるなよ。筋肉野郎」

レンジが後ろから鉄の棒を振り落としてきた。

「邪魔だ」

しかし、レンジは豪鉄のS Iであろう力で地面にたたきつけられた。

「ハッ」

ソラは一瞬目線がそれたと思ったのと同時に蹴りだしてきた。

豪鉄は腕でソラの蹴りを防いだ。

「この！」

豪鉄は鉄のグローブを作り自分の手につけて豪鉄を殴ろうとしたがまた腕で防がれた。

「めんどくせーな」

そう言った後、ソラとレンジは地面に叩きつけられた。

「貴様が大将か？」

豪鉄はソラに向かって言った。

「そうだとすればどうするきですか？」

「こつするんだよ」

豪鉄はソラの腹をけた。

「ガッ!!」

その後、胸倉をつかまれて体を無理やり起こされた。
そしたら一回頭突きをされ、腹に一発殴られた。

「ソラ!!」

しかしレンジの声は聞こえなかったようにソラは力なく壁に叩きつけられた。

「終わりだ」

「やめろ」

そう言つて豪鉄はソラに向かって手のひらを向けた。

「やめろつて言ってるだろうが!!」

レンジがそういった後に持っていた鉄が思いっきり延びてさらには先の部分がでかくなった。豪鉄の背中に当たり、ソラの隣に叩きつけられた。

「貴様」

「隙あります」

豪鉄はレンジに目を合わせたたん、ソラが肘を顔面に当てた。その後、腹を思いつき蹴った。

「さっきのお返しです」

ソラは一步下がり、体勢を立て直した。

「助かりました。レンジさん」

「なにお安い御用だ」

2人とも豪鉄に向かって構えなおした。

しかし、さっきのダメージはそれなりの代償は追ってしまった。ソラの頭から血が出てきた。

「貴様ら、許さん」

「その台詞は」

「のしつけて返してやる」

次は豪鉄が前線に出た。

ソラは壁を利用して高く飛んだ。

ソラはそのまんま電脳子^{デジタル・スピア}ノ針を放った。

しかし地面に叩きつけられた。同時にレンジも叩きつけられた。

「同じ手を何回も食らうかよ」

レンジは思いつき鉄の棒を伸ばし、豪鉄に当てた。

その後、高く飛んでいたソラは豪鉄の頭にかかと落しをした。

「なめんなよ」

豪鉄はソラの足をつかみ叩き付けた。

そのあとソラの後ろからレンジが大きくした鉄で豪鉄を殴った。
衝撃で豪鉄はソラの足を離れた。

ソラはすぐに体制を立て直してまわし蹴りをした。

しかし、その後豪鉄は自らのなぞのS Iで2人を弾き飛ばした。

ソラは吹っ飛ばされながらなんか疑問に思った。

——おかしいですね。

ソラが思ったこと、それは豪鉄が本当に重力を操るS Iなのか。

（重力を使うならなぜ使い方が極端過ぎるのですかね。まさか！）

ソラはまた豪鉄に向かってダッシュをした。

（僕の予想が当たってれば）

——勝算はあります。

ソラは豪鉄の頭を狙ってまわし蹴りをした。

豪鉄は避けた後、追撃しようとしたが。それは無理だった。

「追撃はさせませんよ」

ソラが^{デジタル・ロープ}電子ノ縄で豪鉄の腕を封じた。

ソラはそのまま逆の足で蹴りを入れようとした。

「糞餓鬼が」

ソラはその瞬間。地面に叩きつけられた。
しかしソラはすぐに立ち上がり後ろに下がった。

「おい、なにやっているんだ」

レンジがソラの行動に疑問を感じていた。

「すみません。でもおかけで豪鉄さんのS Iの正体が分かりましたよ」

「なに!？」

ソラは豪鉄のほうに視線を向けた。
そして自信気に言い張った。

「豪鉄さんあなたのS Iは鉄に磁力を加える能力ですね」
「な、なぜ分かった」

「それでこんなものを巻きながら戦っていたのですね」

ソラは座りあるものを取った。それは砂に見せた小さな鉄だった。

「あなたが本当に重力を操るなら普通追撃が出来る上の方へ飛ばさなかったのですね」

「そうゆうことか」

レンジはソラが言ったことが理解できたみたいだ。

「貴様いつから分かった」

豪鉄が聞いてきた。

「分かったのは今ですけど、でも鉄の砂はずっと悩んでいましたよ。ずっと地面に叩きつけられたのでわかってしまえますよ」

その最終確認のためにソラはさつき無謀な攻撃に出たのである。

「せて、あなたのS Iさえ分かれば解決策はすぐにできますよ」

「ほう、やるのか」

「そうですね、でもあなたを倒すのは僕ではありません。レンジさんです」

ソラは言い張った。逆にレンジは驚いていた。だが、ソラが言っていることがすぐに分かり自信に満ちた顔にすぐになった。

「あれをやるんだな」

「ええそうです。みんな作戦C - 3です」

ソラは通信機に作戦を伝えた。

「ごちゃごちゃうるせえええええ!!」

豪鉄は襲い掛かってきた。

ソラは横に避けた。ここはレンジに本当に任せる気だ。

レンジは鉄のグローブをつけて抵抗した。

マグネット・イロン

「残念だな俺には――磁力ノ鉄がある」

「そんなには関係ねえ」

「そうかじゃあ死ね!!」

豪鉄はそう言ったがなにも起こらない。

「な、なぜだ、なぜ発動しない」

「残念ながらもうあなたのS Iは僕達には効きませんよ」

ソラが言った。

「俺の拳をよく見ろ」

豪鉄はレンジの拳を見た。

なんとレンジの鉄のグローブには氷が付いていた。これは十中八九雪のS Iの水十氷だ。
ウォーターアイス

あの会話の中にいつの間にかレンジは水をかけたのだ。これならもう磁力ノ鉄は効かない。
マグネッツ・イロン

「反撃開始だな」

レンジは思いっきり豪鉄の顔面を殴った。

豪鉄の鼻から鼻血が出た。

「もう一発!!」

次は腹を殴った。

豪鉄はよろよろになりながら後ろに下がった。

「なるほど。もうお前らには効かないようだが、
マグネッツ・イロン磁力ノ鉄はこんな
使い方も出来るんだぜ」

そう言った瞬間。

豪鉄は急にその場から居なくなり、レンジが吹っ飛ばされた。
見るとさっきレンジが居たところに豪鉄がいた。

「磁力を利用した高速移動ですか」

「その通りだ。じゃあお前も食らえ」

豪鉄は次はソラにターゲットに絞った。

次の瞬間。ダメージを負ったのはソラではなく豪鉄本人だった。ソラの前には透明の壁があった。そして横には優菜の姿が。

「残念ながら、それも予想していましたよ」

ソラはにやつと笑った。

「糞餓鬼が」

「それよりも後ろ見たほうがいいですよ」

豪鉄の後ろにはレンジが立っていた。

「さあ、次で終わりだ糞野郎」

レンジが怒った顔で言った。

それはまるで一頭のいのししのようなだった。

「歯を食いしばれええええ！」

—バキッ！！！！

レンジは思いっきり豪鉄にアップパーを食らわせた。

豪鉄は空中に飛んだ。

そのまま地面に倒れて動かなくなった。

「終わりだな」

「ですね。雪も優菜も朱里もおつかれさまです」

道角から雪と朱里が姿を現せた。

「やったね。ソン君れんさん」

「ごめんなさい。私役に立てなくて」

「いいですよ朱里。今回はレンジさんに止めを刺させてあげたかったのですよ」

「そ、そうですね」

「じゃあ、みなさん。雫さんのところに行きましょうか」

そう言つてソラ達御一行は病院へ向かった。

しかし、ソラとレンジはこのあと病院のお世話になったのは言つまでも無かった。

第13章 終わり。

第13章 鉄の怒り（後書き）

織「今回紹介するのは水ノ達人ツス」
アクアトロマスター

朱里「このシリーズの一つ目の達人系のSⅠで、雫さんが使い手で
すね」

織「その名の通り、水を操るツス」

朱里「さらに自分の水分を利用して周りの水を操ることも可能です。
さらには、雪さんとのSⅠコンボも出来ます」

織「今回俺の出番のほうが少ないような気がするツス」

朱里「そう？」

第14章 learn start

6月26日金曜日。

ソラは学校に登校するために歩いていた。

ソラは学校は近いし、人が少ないところに通るために有意義な朝を迎えていた。

学校を通る前に小さな坂がある。行きは下りで帰りは上りになる坂だ。短く、低いために誰もが自転車に乗りながらも上ることができる。

しかし、そこで事件が起こった。

「きゃああああ」

けして大きくない叫び声がソラの耳に届いた。

振り向いてみると1人の少女の自転車が坂で止まらなくなっている。おそらくブレーキの故障。

「ど、退いて下さい」

少女はまたそんなに大きくない声で言った。

しかしこのままじゃ危険だとソラは思い、彼女を助けることにした。

ソラは自転車の向かう先に立ち、デジタル・ヘルト電子ノ帯で電柱をくぐり、彼女の自転車をつかんだ。

そして、車輪のところにはさみ、さらには倒れないように保護した。自転車は無事止まった。

ソラは彼女のところへ寄ってきた。

「大丈夫ですか？」

ソラは声をかけた。

「私は大丈夫です」

その少女は髪は桃色のショートカットで、赤いカチューシャをしていた。

ソラは彼女を見たことがあった。

理由は簡単。彼女はクラスメイトだ。

名前はたしか、「蒼希^{あおき}香奈」。

クラスではおとなしい少女だ。

「と、止めていただいてありがとうございます」

香奈はお礼を言ってきた。

「どういたしまして。少し、自転車拝見しますね」

「は、はい」

ソラは自転車のブレーキを見た。

そのあと、ソラは自転車をいじり始めた。

5分もしないうちにソラは手を止めた。

「これでなんとか大丈夫でしょう。でもちゃんとあとで修理したほうがいいですよ」

「はい」

「じゃあ、僕は行きますね」

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして」

ソラは少し笑い、歩き始めた。

香奈はソラの姿をずっと見ていた。

ソラは学校に着き、1年1組の教室に入った。

「お、おはよう。長門」

進藤が声をかけてきた。

「おはようございます。進藤」

「長門、なんかお前疲れていないか？」

「いいえ。そんなことはありませんよ」

ソラは笑って誤魔化した。

疲れは半端無く残っている。犯人はS I使いとの連続の戦闘。それも皆、強敵だった。

「おはよう。ソン君」

雪がこっちに來た。

「あれ？なんか冬野も疲れていない？」

「そんなことないよ」

もちろん。雪にも疲れが出てきていた。
理由は・・・以下同文。

「おっはよう長門」

ソラと雪とは裏腹に道長が元気良く教室に入ってきた。

「おはようございます」

「なんかお前つかれていないか」

「やっぱりお前もそう思うか」

どうやら今回の疲れは半端ないようだ。

ソラはため息をついた。

昼休み。

いつものメンバーで机をくつつけて昼ご飯を食べようとしていた。

「なんか、今日の授業は疲れるな」

道長はソラに聞いてきた。

「なんで僕にきくのですか？」

「いや、今のお前なら共感できると思って」

「ついでに、君はいつも授業で疲れているでしょう」

「長門の言つとおりだな」

「ひでえ」

長門が言うことに進藤も賛成した。

「ソラ君。今日は珍しく購買なんだね」

優菜はいつも弁当を作ってきているソラは今日のみ購買だったので聞いてみた。

「なんか今日疲れていて」

「あゝ私もそう」

ソラは購買で買ったパンの袋をあさりながらあることに気づいた。

「あ、飲み物買うの忘れていました。少し買ってきますね」

そう言って立ち上がろうとしたとき、後ろから声が聞こえた。

「あ、あの〜」

ソラが後ろを向いたらそこには蒼希香奈がいた。

「蒼希さん？どうかしましたか？」

「の、飲み物なら私のをあげます」

そう言っただけで香奈は飲み物を机の上に置いた。

ソラはそのことに疑問を抱いた。

「いいですよ。これあなたのですよね」

ソラがそう言っただけで彼女には理由があった。

「朝のお礼ですので」

「あ、ああ。あれですか。気使いしてしまいましたか？」

ソラは何のことが理解が付いた。

ついでにソラの周りの優菜と雪はものすごい目で見ている。

「じゃ、じゃあこれで」

「あ、ありがとうございます」

そう言っただけで香奈はその場から離れた。

ソラは元の場所に視線をやった。

しかし、そこにはすごいオーラを出した優菜と雪がいた。

「な、なんですか？」

ソラは理由が分からず聞いてみた。

「ソラ君いまのどうゆうこと？」

「話をしてくれるかなソラ君」

「は、はい」

ソラはびびりながら答えた。

優菜と雪は笑っていたが確実に怒っていると鈍感なソラでもわかった。

このあと、彼は恐怖の質問攻めにあった。

放課後。

ソラは商店街へやってきた。理由は買出しである。

もう冷蔵庫の中は何も入っていない有様である。最近忙しかったので買出しすらも行っていなかった。

ソラはスーパーに入った。

そこにはある少女がいた。

「あれ？朱里？」

「あ、ソラさん。奇遇ですね」

朱里だ。隣には女友達がいた。

「あれ？朱里の知り合い？」

「うん」

友達の問いに朱里は答えた。

「どうも。長門ソラです」

ソラは彼女に挨拶をした。

「どうも、おにはいじいぎ鬼原飛沫とびです。で、実は朱里の彼氏だったりして」

飛沫は朱里をおちよくるように言った。

「そ、そんなんじゃないよ」

朱里は顔を赤くして否定した。

しかし、顔を赤くしているために説得力がない。

ソラは何のことなのか分からなかった。

「そ、ソラさんはどうしましたか？」

明かに同様しながら朱里はソラに聞いた。

ソラはなにも気にしないで答えた。

「僕は買出しですよ。冷蔵庫の中何にも入ってませんでしたので。朱里は？」

「私は飛沫の付き添いです」

「鬼原さんも買出しですか？」

ソラは飛沫に聞いた。

「まあそんなところです。お母さんに頼まりましたから。あと、僕のことは飛沫でいいですよ。苗字あんまり好きではないので」

「そうですか。わかりました。でも、飛沫って中学生ですか？」

良く見たら飛沫の格好は高校の制服ではなかった。

「はい。僕は中3ですよ」

「飛沫は小さい頃の私の幼馴染なんですよ」

「そうなのですか」

そうソラは言っているが、彼は幼馴染がどうゆうものなのか分からなかった。

彼には幼馴染と言える存在がない。

「はい。今は星光高校へ向けて受験勉強中です」

飛沫は敬礼しながら言った。

「じゃあ、僕の後輩になるわけですね」

「ソラさんも星光高校ですからね」

「あ、そういえば制服がそうですね」

飛沫はソラの制服をじろじろ見ていた。

「あ、僕さっさと買い物しなきゃ」

飛沫はとっさに思いついたようだ。てか、忘れるなよ。
ソラは会話をしながらでも近くにあったものを買い物籠に入れていた。

「僕も行きますか」

ソラ達はスーパーを出た。
途中まで一緒なので3人とも並んで歩いていた。

「そういえば、ソラさん。優菜さんと雪さんは今日はいないのですか？」

「さあ、2人とも用事があるからと言ってましたので」

ソラは思い出しながら言った。

「先輩は女友達が多いのですか？」

飛沫は聞いてきた。

「まあ、数でいうのならそうなりますね」

「モテるのですね先輩は」

「そんなことは無いと思いますが」

ソラはあいからわず鈍感である。

それには飛沫も気づいたようのため息を漏らした。
ついでに飛沫は朱里がソラに恋をしていることに気づいている。

「がんばってね。朱里」

「な、なにいきなり」

いきなり話を振られて困る朱里だった。

夜。

ソラは部屋の中でパソコンをいじっていた。

これからの戦いの作戦を文章にして考えていたのだ。

（やっぱり、攻撃系のS.Iが朱里とレンジさんだけというのはやっぱり致命的というべきなのでしょう。とくに朱里は条件が厳しい）

そうソラが悩んでいると電話が鳴った。

「はい」

『ソラ君相談があるのだけど』

声の持ち主は優菜だった。

「なんですか？」

『私ね、棒術で戦ってみようと思うの』

優菜の言葉から意外なことが聞こえた。

たしかに棒を利用するなら棒術は必要かもしれない。

「でも優菜、棒術って優菜はやったことがあるのですか」
『それが、かじったことすらない』

そんなことを聞いてソラはため息をついた。

「たしかにそれは有効ですが時間と技術が足りませんよ。しかも教えられる人もいませんし」

『ソラ君教えてよ』

「はい？」

ソラはつい聞きなおしてしまった。

『時間と技術なら本戦でも稼げるし、それにソラ君やったことありそうだから』

確かにソラはみんなと出会うまで、さまざまな事件と遭遇した。そのため、棒術は少しだがやったことがある。

「わかりました。これ以上言ってもなんかもっと無茶なことをし兼ねませんから」

『ありがとうソラ君』

「でも、時間は本当にありませんからね」
『うんわかっている』

そう言って優菜は電話を切った。

そのあとソラは棒術のことを調べた。

第14章 終わり

第14章 learn start（後書き）

織「今回紹介するのは「電撃ノ銃装備ツス」サンダー・ウェポン」

優菜「朱里ちゃんのSIね」

織「電気を銃に変えるSIで電気の大きさと銃の種類も変えられるツス」

優菜「私達の中でゆうつ攻撃系のものね」

織「上手くいけば人だって殺せるらしいツスよ」

優菜「狙われないようにね」

織「俺ねらわれるの確定ツスカ!？」

第15章 battle・back&go(前書き)

感想とS Iの募集お待ちしております。

第15章 battle・back&go

6月27日土曜日。

優菜達はソラの家に来た。

ちなみに朱里は私立なので登校していた。

「それで、ゆーちゃんはソン君に棒術を教えてもらうの？」

「うん。そうなの」

「いきなりですけど、でもまあ優菜も自分に力をつけようと思っていたのじゃない？」

ソラはお盆の上のお茶を運びながら来た。

「うん。やっぱり自分だけ見ているなんていやだから」

優菜はソラからお茶を受け取り飲んだ。

「でも、これからはどうするの？やっぱりしーさん抜きで戦うの？」

雪が聞いてきた。

「けが人を無理させるわけには行きませんか。仕方ありません」

ソラは冷静に答えた。

しかし、そうなる結構な戦力ダウンしてしまう。

しかも、雪のSIは雫のSIとの相性は抜群なのだが、雫は怪我のためにただいま病院の中に居る。

レンジは怪我はそんなに悪くなかったので戦いには参加できるらしい。

「でも、大切な情報はまったく入りませんね」

「そうね。未だに何人いるかもわからないからね」

雪が言ったとおり、敵の情報がまったくこっちは持っていない状況である。

ついでに闇影が言うには、ダイクネス・ロードス暗闇の道人のメンバーは孤立しており、齋京を通して情報のやり取りをしているらしく、個人情報はずっと聞き出せないのである。

「じゃあ、齋京さんを見つければいいのじゃないの？」

優菜が聞いてきた。

「ダメです。齋京さんのS Iは上級レベルのS Iです」

「いまの私達じゃ倒せないことね」

ソラはうなずいた。

「やっぱり独自に特訓をしたほうがいいですね。もしかしたら優菜ライン・シールドの線ノ盾みたいに新しい能力も追加されるかもしれませんよ」

優菜のS I線ノ盾はこの前新しい力、色しきを手に入れた。なぜこの能力が加わったのかは誰も知らない。もしかしたらS Iとは使い者本人が強くなるとS Iも強くなるのか、よくわからない。

だが、今回の例みたいに違う人のS Iも能力が加わるかもしれない。そうソラは思ったのだ。

「で、僕は自分の戦闘の特訓をしたいので、優菜の棒術と一緒にやることにしました。いいですか優菜」

「うん。私は大丈夫よ。雪ちゃんはどうするの?」

優菜は雪に問いかけた。

雪はうーんと言って悩んでいた。

「まあ、私は今日、2人の特訓でも見ているわ。ソン君手伝ってほしいことは遠慮なくいつてね」

「はい」

それから、ソラは優菜達を家の庭に連れてきた。

「結構庭広いのね」

「ここなら戦闘訓練も十分に出来ます。あるものは洗濯物だけです」

——洗濯物!?

優菜と雪は庭に干してある洗濯物に目が入った。

干してあるのはソラが昨日着ていたあろうものが干してあった。男子1人分なので干しているものの量は本当に少ない。

しかし、優菜と雪はそんな説明など意味は無い。

2人が見ていたのは昨日履いていたのだろう下着だった。

「コラッ!」

——ペシッ!

ソラが2人の頭に優しくチョップをした。

「な、なにソラ君」

「なんか言ったソン君」

「2人とも、何を見ていたのですか？」

ソラがそう言った瞬間2人の顔が赤くなった。

ソラには赤くなっていることすら気づいてはいない。

しかし、明かに2人とも様子が変だ。

「あの2人とも」

「「はにや!？」」

――・・・

「はい？」

――カアア!!

2人の顔がさらに赤くなった。

こんなことをしていたうちに少し時間がつぶれてしまったが、改めてソラは説明を始めた。

「いいですか。棒術と言うのは、棒を用いて身を守り、敵を攻撃する術で、昔は長さ約180センチの間棒または長さ3尺の半棒とよばれる丸木の棒が用いられているのですよ。ついでに杖術じょうじゆつもこの一種ですよ。まあ簡単にいうと武芸ですね」

2人は黙って聞いていたが優菜にはさっぱり頭に入らなかった。

「なんか難しいね」

「言葉ではそう思うものですよ。実際やれば簡単なものです」

そう言っソラは一本棒を手を取った。

「とりあえず棒を回すところからやってみましょうか」

「回すって？」

「こうするのです」

ソラは手に持っていた棒を片手で回した。しかも、一回どころではなく何回も回し続けた。

「どうですか」

「それはソソ君だからできるのじゃないの？」

「私もそう思う」

「まあ、今みたいにやらなくともいいのですよ。棒術は勢いを利用したほうが戦いやすいですし、女性の力だとこっちのほうが効率がいいです。別に、片手でやれと言ってませんし」

ソラは補足説明をした。

今言っている事は優菜にもわかったようだ。

「じゃあ、とりあえずやってみましょうか」

ソラがそう言っ後、優菜は練習を始めた。

しかし、やっぱり両手で一回転しかできていない。

ソラはそれを見ながら雪と話していた。

「雪はやっぱり水鉄砲を利用するしかありませんね」

「そうだね。私の力は泡は氷にすることは出来ないから、結構戦術的には厄介なのね」

「そうですね。水を沢山持っていくわけにはいきませんからね。あ、優菜おいしいですよ」

優菜はテレながらもがんばって練習をしている。

しかし、雪はこれから自分は何をしたらいいのか分からなかった。

雪のS I、ウォーターアイス水十氷水が無ければ戦術も糞もなくなってしまう。

それだけ、雪のS Iの利用点は低い。いままで良く戦ってこれたと思うほどだ。

自分で操作できない。これが一番の弱点かもしれない。

「じゃあ、昔みたいに、あらかじめ氷にっていて、使うときになったら水に戻すのはどうかな？」

雪が思いついたことを提案してきた。

「でも、前はそうゆう状況だったのでやれましたけど、実際、持ち運びはしにくいのは変わりはありませんよね」

液体を固体にする。

たしかにこれはいい方法かもしれないが、あくまでも液体を固体にただけ、重さは変わらない上に持ち運びも氷だとしても大変なのは代わりはまったくくない。

「ゼリー状にすれば何とかできるかもしれませんが、これは相当難しいですよ」

ソラがボソツと言った。

「ゼリー状ね、そんなことできるの？」

「もしかしたらですよ。しかも今からじゃ相当時間がかかりますし、難しいです」

たしかに、ゼリー状にすれば、水よりも運びやすいし、氷みたいには溶けたりはしない。だがそれと反面、やりにくいのもたしかだ。

「今思ったんですけど、雪のでこんなに悩んでいたら、朱里のは相当難しいですよね」

この中で、一番S Iの条件が厳しいのは朱里のS I、電撃ノ銃装備サントー・ウェポンである。今は、ソラのスタンガンを利用しているので、手ごろな銃を出すことはできる。

しかし、一発が強い弾を出したらこれ以上撃てなくなるほど消費がでかい。

今までは、当たりやすい状況を作ってきたのだが、そろそろ限界もある。

「やっぱりもつと作戦を考えなければいけませんね。このままじゃやばいです」

「ソラ君。私の棒術を取り入れた作戦もよろしくね」

「は、はあ」

ソラは優菜の言葉にあやふやに答えた。

ソラ達は一旦、雫のいる病院へとやってきた。

「どうも、雫さん」

「元気かなあしーさん」

「雪ちゃんそれは聞いているの？」

雪のわけ分らない言葉に雫はツツコンだ。

ソラはお土産を雫に渡した。

「体の調子はどうですか？」

「うん。いい調子よ。ごめんね心配かけてしまつて」

「いいですよ。仲間を心配するのはあたりまえです」

ソラはそう言つて微笑んだ。

後ろの2人は少しやきもちを妬いていた。

「退院もすぐにできるからそうしたらきつと役に立つからね」

「そのときはあまり無理をしないでくださいね」

「そつえばレンジさんはきたのですか？」

優菜が雫に聞いた。

「レンジさんなら午前中に来てくれたよ。お花も貰つたし」

「むう、レンさんも意外とやりますね」

「レンジさんもちゃんと心配してくれているのですね」

鈍感王のソラのみ、レンジが見舞いをしてきた別の意味は分かつていなかった。

しかし、そのことは雫も同じだった。

「そうね。やっぱりレンジさんはいい人なのね」

「2人とも気づいていないのね」

優菜が呆れながら言った。

この後、少し話した後、ソラ達は病院を出た。

ソラ達が病院を出た後、ある少女達と出会っていた。

「な、長門君？き、奇遇だね」

そこには秋を中心にした女3人組がいた。
今日も仲良しみたいである。

「どうも、崎野さん」

「こ、こんにちは」

秋はそう言った後、優菜たちを見た。
優菜と雪は自信気に目で笑っていた。

「今日も3人一緒なのね」

遠山がソラに言った。

「ええ、まあ2人とも家に来たのですけど、気分転換に外に出ているんですよ」

ソラが説明した。それを聞いた遠山と佐藤はふーんと返事をした。
しかし、秋はものすごくうらやましがっていた。

（いいな、私なんて中学一緒なのにまだ家すら見たこと無いよ）

そう思っていたのが佐藤達は分かったらしくソラに聞いてきた。

「ねえ、私達もお邪魔してもいいかしら？」

「ごめんなさい。今日は遠慮してほしいですね。また今度でいいですか？」

これからまた、S Iの特訓やら会議やらするので、関係ない人は今は家に入れたくは無いのである。

「じゃあしょうがないのね」

「また今度お願いするね」

「ええ。じゃあ2人とも行きましょうか」

そう言つてソラ達は歩き出した。

ついに秋は家に入れるか楽しみにしていたのに一瞬で断られたのでショックを受けていた。

「大丈夫よ秋ちゃん。また今度、お願いすればいいのだから」

しかし、自分でお願いするほどの気力は秋は持ち合わせてはいなかった。

場所戻つて長門家。

優菜は庭で棒術の練習をしていた。

そして、学校が終わった朱里もこっちに来ていた。

「すごいですね優菜さん。自分でやることを決めれるなんて」

「意外と決断力はあるみたいだね」

朱里と雪は優菜の練習を見ながら話していた。
ソラは2階の自分の部屋でなにか作っていた。外に出たとき何かを
思いついたらしい。

そのため、2人が優菜の練習を見ていた。

「私なんてどうすればいいのか未だに決まっていないます」
「私もそう」

2人はため息をついた。

「ここら、ちゃんと優菜の練習を見張っててもらわなくてはいけませんね」

後ろからソラが2人に声をかけた。

「ソラさん」

「どうしたの？ ソン君」

「とりあえず2人ともこれを見てください」

ソラは2人にある機械を渡した。

「これは？」

「急いで作った箱ですけど」

雪と朱里はそれぞれ渡された箱を見た。

2人のはこの形はそれぞれ違った。

「分かりますけど、これは一体」

「朱里のは電気が充電できて出し入れできる構造にしてみました」

「私のは」

雪はソラに問いかけた。

「雪のは水が漏れなく、さらに腐らないようにしたものです。これなら、簡単に持ち運びが出来ると思いました。発想は電池パックや水筒からですけど」

ソラが照れくさそうに言った。

しかし、これなら今までとは違い、2人がS Iが使えるパターンも増えるだろう。

「ありがとうございます」

「ありがとう。ソン君」

「どういたしまして」

そう言ってソラは微笑んだ。

第15章終わり

第15章 battle・back&go（後書き）

織「今回紹介するのは「鉄^{イロノ}ノ変化^{コンバート}」ッス」

ソラ「レンジさんのSIですね」

織「鉄を変化させたり、大きさを変えられるSIッス」

ソラ「これからの成長が楽しみになSIですね」

織「まあ、考えてみれば一番単純なSIッスね」

ソラ「それ、本人に言ったらどうなるか分かりませんよ」

織「大体は予想できたッス」

第16章 朱里の考え

時間は6月27日土曜日の夕方に戻る。

星道高校の生徒の朱里はソラの家へと向かっていた。

今日は土曜日だが、星道高校は私立校のために、土曜日も学校がある。

全ての学校の用事を済ませ、ソラの家へ向かおうとしていた。だが、そのときだった。

「おまえか」

「え!？」

いきなり声が聞こえて朱里は立ち止まった。

（なに、いまのは）

朱里は周りを見渡した。

だが、誰も見えなかった。一人もいない。

朱里は普段、人が少ないところを通っているため今人がいないのも普通のことだが、声が聞こえるのはおかしいと思っている。

「弱そうな女だな」

また声が聞こえて振り向いたが誰もいない。

（どうゆうことですか？）

朱里は訳分からなかった。

（だけど、私のことを知っている）

「あなた、私を狙っているSⅠ使いですか？」

「お、あたりだ」

朱里は声が聞こえた方向に振り向いた。

そこにはコートをきた、男が立っていた。

「あなたは一体」

「大丈夫だ、今回は俺を見つけたから命は助けてやる。だがな、これ以上俺達にかかわるないいな」

そう言つて男は歩き出した。

（俺達、つまり、ダイクネス・ロードス暗闇の道人の一員ですね）

朱里は気を取り直してソラの家へ向かった。

改めて次に日。

朱里は昨日の出来事が気になつて外に出ていた。

ソラ達には昨日の出来事は話してはいない。

これ以上、ソラ達に心配させるわけにも行かないからだ。

朱里は昨日の男にあつた道に來た。

（やっぱり居ませんね）

朱里はため息をついた。

そのまま朱里は近くの喫茶店に入った。

（やっぱり今日はこのままソラさんのお宅へ向かうかしら）

朱里は紅茶を飲んで一息ついた。

とりあえず、ソラの家に行くことを決めた。

喫茶店を出た後、ソラに家に行くことを伝え、歩き出した。

（このこと、やっぱりソラさんに伝えたほうがいいかしら）

そう、朱里は悩んでいた。

その頃ソラは、優菜達といた。

「ハッ！！」

ソラと優菜は棒術の練習を兼ねて戦っていた。

ソラは連続攻撃をしているために優菜は防御に廻ってしまっている。

これは優菜の練習のためなのでS Iの使用は許可している。

S Iとの連携した、攻撃と防御。これが優菜が目指している戦い方だ。

しかし、優菜は上手く、防げるタイミングを見抜けないでいた。

「ハアア！！」

ソラは容赦なく棒で優菜に向かって振った。

優菜は再び耐え続けている。

ソラは後ろに下がり、棒を回しながら優菜に突っ込んだ。

巧みな技で優菜を翻弄させつつ、ソラは優菜の足を刈り取り、後ろ

に倒れさせた。

この勝負はソラの勝ちだった。

「休憩にしましょうか優菜」

「うん」

「それよりも私思っただけどさ」

さっきからずっと見ていた雪が聞いてきた。

「やっぱりソン君は腕力が無いのね。なんか腕力は五分五分に見えるんだけど」

「多分五分五分だと思いますよ。僕の力じゃ、優菜の手に持っている棒を弾き飛ばせませんでした」

「意外とゆーちゃん力あるのね」

「そ、そんなことないよ」

優菜は両手を振って否定した。

だが、優菜の力は確かに強く、女子の中でも十分にトップレベルだ。うまくいけばソラより強い。

それとは違い、ソラの腕力はいろいろ筋トレをしているのにこの力である。

「しかし、朱里は遅いですね。少し、外に出てみますね」

「はい」

そう言ってソラは外に出た。

朱里は走っていた。

しかもソラの家にはどうやら向かってはいないようだ。
まるで、何者かを巻くように逃げていた。

（まさか、本当に出くわしてしまうなんて）

朱里は普通にソラの家へと向かっていたが、何者かに付けられたと
感じて走って逃げた。

そのカンは当たり、たった今巻いているところだ。

「見つけた」

「きゃああ」

しかし、朱里が行くところをその男は先回りしてしまう。
もうこれで何回目なんだろうか。

「さっさと俺にやられてくれや、それだったら速く帰れるんだよ」

「お、お断りです」

朱里はキツパリと断った。まあ、それはそうだ。

「じゃあ、力ずくでも終わらされてやる」

男が朱里に突っ込もうとしたとき、朱里は瞬時に電撃ノ銃装備を発
動。手に持っていたスタンガンノ電気を銃に変えた。
サンダー・ウェポン

「それはこちらもです」

朱里は躊躇無く銃の引き金を引いた。

弾は男に見事に命中した、だが男は平然と立っている。

「ビックリしたな〜もう」
「え!？」

朱里の銃の弾は人を殺さないように殺虫能力は低めにしているが、それでも、電気の弾なので体はしびれるはずなのに彼にはそれすらも感じ取れない。

だが、それだけじゃ今は驚くことではない。朱里を捕らえに来たⅡなにかしらのSⅠを持っている。それしか考えられない。

しかし、今驚いているのは朱里は気づかれないように銃を撃った。そのとき、男は撃った瞬間を驚いていた。これはつまり、彼はSⅠを使ってないように見える。いや、いつのまにSⅠを使ってきたのかそれに驚いている。

（撃たれて無事ってことは肉体に関係するSⅠかも知れませんね）

少ない時間だが今までソラの戦闘を見てきた朱里はその経験を生かして冷静に分析し始めた。

朱里はもう一個銃を取り出して撃った。

しかし、やっぱり男には通じてないようだ。

「なんか、抵抗するところはかわいいじゃん」

「きゃあ!！」

男は変な顔でこっちに来た。朱里は驚いてすぐに逃げた。

（きもい、きもい、きもい、きもい、きもいです）

朱里は思いつきり嫌っている。

（さっさと終われせます）

さっさとソラの家に行きたい。

そんな一身上で朱里は2本の銃を消して、新たな銃を作った。さつきよりはでかく、威力もありそうな銃だった。

朱里は標準を合わせて、引き金を引いた。

弾は見事に男に当たった。

煙が男の周りを包み込んだ。だが、煙の中からその男が無傷で出てきた。

さすがに朱里もこれには本気で驚いていた。

「ふふ、貴様じゃ、俺には傷すらも付けられな」

―ゲシッ！！

その言葉を言い終わる前に男の顔がいきなり上から現れたソラに蹴られた。

男はそのまま倒れた。

「大丈夫ですか朱里。心配しましたよ」

「そ、ソラさん？どうしてここに」

「なんか心配になりました、探しに来ました」

「ソラさん」

朱里の顔はいきなり赤くなった。

好意を向けている男性に心配されて、さらには探して助けてくれた。もうこれは顔が赤くなってしまう。

もちろんソラはそのことを気づいてはいない。

こんな会話をしていたが、男はすぐに立ち上がった。

「てめえ、なにをする。さっそくカッコいい台詞を言おうとしたの

に」

「朱里、耳を貸してください。あの人を倒す作戦考えましたので」

「うん」

「聞けやあああ!!」

だが、やっぱりソラは無視して朱里に作戦を伝えた。

伝え終わったらソラ達はすぐに実行し始めた。

朱里は銃を作り出して男に撃った。

だがやっぱり男には聞いていなかった。

その間ソラは後ろに回りこみ男の背中を蹴った。

「!!」

ソラは蹴ったあと、すぐに後ろに下がった。

どうやら何か気づいたらしい。

「なるほど、そういうことですか。分かりましたよ朱里。作戦このまま実行してください」

「はい」

ソラは男に向かってダッシュした。朱里は銃を撃つのをやめてそのまま待機した。

「ほお、一人で来るとはたいした度胸だな」

「それはどうも」

男の拳とソラの蹴りがぶつかった。

勝ったのはソラの蹴りだった。

男は拳を支えながら痛みに耐えた。その隙にソラはコートを強制に脱がした。

「今です朱里！！」

「はい！」

朱里はソラの言葉を聞いた後、残ったスタンガンノ電気を使い銃を作った。

その銃はいつもと違い先が連続で弾が出る形になっていた。つまりガトリング式の銃となっているのだ。

男はそれを見て、さっきの余裕とは違いあせっていた。

「今頃気づいても遅いですよ。あなたのS Iはそのコートを鎧にかえるS Iですよ。さっき蹴った感触で分かりました」
「う、うそだろ」

この男が驚いているのはS Iを知られたことではない。蹴っただけで全て分かってしまうのに驚いているのだ。しかし、感触で分かるソラも相当すごい。

「標準セツト！！発射！！」

朱里の銃が火を噴いた。

弾は容赦なく男に当たりまくっている。

弾が切れた頃には男は見事に気絶していた。

朱里の銃はさっき言ったように殺虫能力は低めになっているが弾には電気の性能があり、それに当たると体が麻痺してしまうほどだ。もちろん加減も朱里が調整できるので今は気絶程度ですんでいる。

「さあ、この男のことは警察に連絡しときましたので、僕らは家に向かいましょうか」

「はい」

朱里はとっさにソラの腕にしがみついた。

「な、何ですか朱里？」

「なんでもありません」

「じゃあ、なぜ僕に腕組をしているのですか？」

「鈍感なソラさんには分かりませんよ」

――？

朱里はソラに腕組をしながら微笑んだ。

第16章 終わり

第16章 朱里の考え（後書き）

織「とりあえずはレギエラーのS Iの紹介はひとまず終わりましたッス」

ソラ「では、これからは今まで出たS Iを紹介するわけですね」

優菜「でも情報によれば今知っても意味がないものもあるのじゃないの？」

ソラ「確かにそうですね」

織「まあ、貴会があつたらまた再開するッス」

優菜「これってつまり、しばらくは織の出番はないわけね」

ソラ「まあ。簡単に言えばそうですね」

織「そうなのぉ」

ソラ（普通に喋った）

第17章 VS 斎京・来訪者

次の日。

ソラ達は学校に来ていた。

「長門君。ちょっと来てくれ」

ソラは先生に呼ばれた。

「なんですか？」

「君にお客さんみたいなんだ」

「お客さん？」

ソラは誰なのかは見当すら見当たらなかった。

とりあえずソラは先生に言われたとおりに学校の会議室に来た。

「どうも長門君」

「あ、あなたは」

ソラに喋りかけてきたのは黒のスーツに黒髪の男だった。

「じゃあ、私はこれで」

「ええ、ありがとうございます」

先生は会議室をでて行つた。

先生が完全にいなくなったことを確認した後、男に話しかけた。

「僕になんのようですか？」

「君なら俺がどうゆう人か分かるのではないのでしょうか」

男は冷静に言った。

彼のゆうとおり、ソラはある程度彼が何者なのかが分かっていた。

「S I使いぐらいしか分かりませんがあつてますか？」

「正解です」

「あなたは敵ですか？それとも見方ですか？」

「それはご自分で調べてください」

「すみません。でも、本人に聞くのが一番手っ取り早いのですけどね」

2人はにらみ合った。

まるでその瞬間。時間が止まったかのように見えた。時間が動いたかの感じたかの同時に男が口を開いた。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私の名は事理宗太郎じりそうたろうと申します。それで、こちらにも聞きたいことがある」

「なんですか」

「君の力はなんですか？特にその左目は」

——！！僕僕の左目のことを知っている。

ソラはこのとき、驚きを隠せなかった。

この左目のことを知っている人物は6人程度だ。それなのにソラとの面識も初めてで名前を知っており、さらには左目のことまでも知っている。

「あなた本当に何者でしょうか」

ソラは再度聞いてみた。

しかし、宗太郎は答えなかった。
時間が少し経ったあと、宗太郎は立った。

「それでは私はそろそろ時間なので帰りますね」

「結局何がしたかったのですか？」

「それもご自分で考えてみてくださいくださいそうそう後一つ言いたいことがあります」

「なんですか？あなたにはもう一つ大切なものが出来、それを壊されます。ご注意を」

そう行った後、宗太郎は会議室を出た。

ソラはその後、先生に伝えた。

先生とクラスの人には何とかテキトーな話でごまかした。

「雪、後で僕の家へ来てください。朱里は僕が伝えておきますので優菜のことをお願いできますか？」

ついでにこのときはもう放課後近くだった。

長門家。

ソラはみんなを集めてさっきの話をした。

ソラも話しているときは改めて考えると謎のことばかりだった。

そう感じているのは彼のみではなかったようだ。

「やっぱり、結果としては謎ばかりですね」

「うん。ソン君が何も出来なかった理由がはつきりと分かるよ」

「ソラ君の左目ってそんなに分かりやすいものではないよね。発動していなければまあ、赤眼だけとあんな力があるとは思えないよね」

朱里、雪、優菜が聞いたときの感想である。

「そして、事理さんが言った最後の一言」

もう謎だらけであつた。

「とりあえず、外に出ましようか。話したいことはしましたし、気分展開てら、SI使いを見つければしようか。さつさとこの戦いを終わらせてこの謎も説明しましょう」

「うん！」

「うん」

「はい！」

少し時間が経ったあと。ソラ達は公園で一休みをしていた。

ソラは自動販売機でジュースを買っていた。

それを3人に渡した。

「そ、ソラさん。私のは良かったのに」

「まあ、さつそく買ったので飲んでください」

「あ、ありがとうございます」

そのあと両者微笑んだ。

「ねええソラ君」

「何ですか優菜」

ソラは優菜の方へ振り向いた。

「思ったのだけどソラ君の左目の情報。警察から漏れていたのじゃないの」

優菜がさっきの話の中で思ったことを言った。

「それはありませんね」

ソラはキツパリと違うと言い張った。

「なんで？」

「警察でも僕の左目のことを知っている人は熊田さんだけですし、さっき熊田さんに連絡したところそんな男は見たこと無いといっていました」

教室に戻ったときソラは熊田にも電話をしてこのことを伝えた。結果。熊田にも分からなかった。

しかし熊田はこのことは内密に調査してくれるらしい。

ソラの左目を知る。それは結構危機的なことだ。

そう、それは目標ノ記録ターゲット・メモリーを知らされて結果的には利用されてしまうかもしれない危険がある。

このことは大いに警戒したほうがいい。

「とりあえず、僕らは一番怪しいと思った人を見つけなければなりません」

「怪しい人？」

優菜が聞き返してきた。

「はい。それは斎京さんです」

「そうか。あの人は一回目標ノ記憶ターゲット・メモリーを使われたところを見られたね」

雪が理解したように言った。

「それもありますけど、その情報が彼から流れていたとしたら」
「「「！」「」」」

「わかりましたか」

そう。つまりソラが言いたいのは、斎京から情報が漏れ出している
「その情報を聞いたやつは敵」事理宗太郎は敵。となる。これはあくまで予想だがまったく外れそうにもない予想である。

「じゃあ、やっぱり事理さんは敵の確立は」
「高いですね」

ソラが朱里の言葉を繋げた。

「だとしたらこれは結構厄介よね」

雪は考えながら言った。

「そうですね。でもそうだとしたら即刻に手を打たねばなりませんね」

「なんかこっちに不利な状況ばかりくるね」

優菜がため息をつきながら言った。

「仕方ありませんよ。そもそも最初から僕らは不利な立場で挑んでいるのですから」

「そ、それもそうね」

優菜は肩を落とした。

その会話の後、ソラ達は歩き出した。

「やつぱりこつちから探すしかなさそうね」

「ええ。それ以外はなんともいえませんね」

「それは違うな」

――！！

前のほうから声が聞こえた。

見てみるとそこには男が一人立っていた。

「だ、だれ！！」

雪があせりながら言った。

「お前らが今まで探し当てたんじゃない」

「どうゆうことですかそれは」

朱里が珍しく男に聞いてきた。

「おお。朱里ちゃん冷静」

優菜が感心したように言った。

「つまり、僕らがいたところに刺客を送り込んでやった。と言う風に聞こえますが」

ソラもあいからわず冷静だった。

「そうですね。 齋京さん」

ソラがそう言った瞬間。 男はコートを脱ぎ、顔を出した。 その顔はまぎれもなく齋京本人だった。

「よくわかったな」

「声で分かります」

ソラはキツパリと言った。

齋京はそれを聞いた後大笑いをした。

「ハッハッハッハ。 面白いやつだな」

「今の僕は面白さなんて関係ありません」

2人ともそう言った瞬間。 両者ダツシユした。

「はあああああああ」

「はあああああああ」

齋京はいきなりキューブレーキをかけ、止まり言い放った。

「お前はもう知っているだろうから積極的に使わせてもらう。 いくぞ！！モダン・アートティスト現実ノ芸術家！！」

床から大砲の絵が立体になり、弾を発射してきた。

デジタル・ベルト
―電子ノ帯―発動！！

ソラは帯ベルトを使い弾を包み込ませた。

「お返しです」

そのまま斎京に放り投げ返した。

斎京はそれを予想していたかのように次は立体にした絵の壁でその弾を防いだ。

弾が爆発して煙が2人を包み込んだ。

煙が目線を邪魔しようと、彼らの集中力は衰えなかった。

ソラは左目の超能力スキル・アイ・リングノ眼・輪を発動した。

その眼には迷いなど一切無かった。

煙が消えた後、2人はすぐに行動した。

斎京は立体の絵を現実にしたガトリング砲を地面から出した。そのまま容赦ない連射が空を襲った。

対してソラは後ろに下がりながら片手は帯ベルトで防ぎ、針スピアでガトリング砲を奇襲した。

ソラは弾を全て防ぎ、斎京のガトリング砲は壊された。だが、本人にはまったくソラの攻撃は届いていなかった。

両者一步も下がらぬ攻防戦に優菜、雪、朱里はただ見ていただけであつた。

ソラからの通信は「まだ、作戦は実行しません」だった。なので今の3人はただ見守るだけであつた。

「やるな少年。さすが俺を探していただけの自信はあつたようだね」
「それはどうも」

ソラは斎京に向かって蹴りだした。
だが、斎京は手から絵に描いたような棒を取り出して応戦した。

「こんなこともできるのですか」

蹴りを跳ね返させてしまったソラは空中一回転をして地面に着いた。

（地面や壁ではなく自分の手にまで発動できる。こんなことが出来るSⅠの系統はあれぐらいいしか見当たりませんね）

ソラは考えながら斎京にツツコンだ。

また斎京に蹴りをお見舞いしようかとするがさっきと同じ方法で防がれてしまった。

だが、ソラは少し戦い方変えてきた。

空中で一回転するとき、あらかじめ用意していた。デジタル・スピア 電子ノ針を回転と同時に投げつけた。

斎京は棒を振り回しながら防いだ。

だが、隙は出来てしまった。

ソラは速攻で後ろに廻った。そのまま蹴りをお見舞いしようかとしたが次の瞬間、ソラは何者かに蹴られた感じがした。

いや、感じではなく確かに蹴られた。

しかもそれは斎京にだ。

良く見たら斎京の下半身に絵で描いたような馬の足が生えてあった。

「モダン・アートティストこんなことも現実ノ芸術家はなんでもありですか」

ソラがそう言っていたが状態は座り込んでいるのと同じ状態。斎京がそれを見逃すことは無かった。

「はあああああ」

斎京の力いっぱい振るった棒をソラは目を閉じないでその棒を見て

いた。

そして、ソラの目は今、誰もが絶望するときに彼の眼は期待の眼をしていた。

―ガキイイーン！！

音は人が殴られる音ではなかった。

その音は棒と棒がぶつかった音だった。

ソラの目の前には斎京の棒を防いだ優菜がいた。

「もう、無茶しないでねソラ君」

「ナイスタイミングです優菜」

ソラはそう言った後、その場から離れて戦闘体制を整いた。

「次は私達も参戦します」

ソラの横にはそれぞれ専用の銃をもった雪と朱里がいた。

「これからが僕達の本気です」

第17章続く

第17章 VS 齋京・過去の記憶

優菜は最近磨かれた棒術の腕前で齋京と対戦していた。
ソラも蹴り技で対抗していた。

「はああああ」

齋京は棒を振り回して2人をばらした。

ソラはその後の一瞬の隙を見逃さなかった。
そのまま「デジタル・ロープ電子ノ縄」で齋京を捕らえた。

「貴様!!」

「はああああ!!」

ソラは廻ったときの行き良いに任せて齋京を投げようとした。
しかし、ソラの腕力では持ち上がらなかった。

「驚かせやがって、ハッ!!そういうことか」

齋京は何かに気づいた。

「残念もう遅いですよ」

遠くから朱里が銃を構えていた。
標準が合わさったの同時に引き金を引いた。

「させるかよ!!」

齋京はまた壁の絵を出した。

その壁を使い、朱里の弾を防いだ。

「残念ながら本命はこっちですよ」

ソラは意識が朱里に向けていたのと同時に齋京の背中を思いっきり蹴った。

齋京は痛みながらも倒れはしなかった。

そのあと、ガトリング砲の絵を4体にさせた。

その4体ともソラ達に向かって連射した。

「優菜!!」

「まかせて」

優菜はソラの前に行き「ライン・シールド線ノ盾」を発動した。

銃声が鳴り止んだと思ったら齋京は次は大きな鞭を持っていた。当たるとものすごく痛そうだ。

「あんなのもありなんですよね」

その鞭の威力はすごく、一振りですぐに優菜の盾を破壊してしまった。

「そんな!!」

「なんていう破壊力ですか」

2人は当たらないように後方へ下がった。

「これじゃあ、うかつに近づけませんね」

「どうしますソラさん」

朱里が通信機を通して聞いてきた。

ソラもあんなことが出来るかは考えてはいなかったので指示に手間取っていた。

（近づけないのなら後方で攻撃するしかありません。でもそれならあの人もそう考えてくるはずですから多分射撃に対しての守備は出来ていると考えます。だったらこうしましょうか）

ソラは口に手を当てて斎京に見られないように3人に指示を出した。3人は聞いた後、同時にうなずいた。

今は使われていない塔の上にあの男が頂上で立っていた。
その男の名は事理宗太郎。

「始まったか。俺は正式にお前達の闘い方を見たい」

宗太郎の眼は戦っているソラ達の姿があった。

「この結果で俺がどうするかはお前しだいだ。長門ソラ」

そのまま宗太郎はそこに座った。

「まあ、ひとまず観戦と行きましょうか」

宗太郎は不敵な笑みをこぼした。

「はあああああ」

斎京はソラ達を見かけたら躊躇なく鞭を振るってきた。
ソラ達はそれを避けるだけでも精一杯だった。

「どうするのソン君。これじゃあ作戦も糞も無いわよ」

「それを今考えていますが、やっぱりあの鞭の動きを止めなければ
いけませんね」

「ひえゝすごい難関だね」

雪は怯えながら言った。

だが、やはりあの鞭は厄介だった。大きい上に優菜の盾を一撃で破壊し、さらにはものすごく頑丈である。

さらにさっき試しに朱里の銃で応戦したものの、鞭を使われてガードされてしまった。

しかし、これで分かったことは一つあった。

——斎京さんがあの鞭を使っている間、あの人は別の絵を使おうとしない。

つまりかれのS Iも限界があるようだ。

だが、それなのにあの鞭だけで相当苦戦してしまっている。

（やっぱり、あのS Iの特徴をよく知る必要がありますね）

ソラは動き始めた。

しかし、ソラが向かったのは斎京ではなくそのまま横に走って言った。

「斎京さん。僕はここにいますよ」

「逃がさん!!」

斎京はその場で鞭を縦に振るった。

「どわああああああ！！」

ソラは間一髪横にジャンプして避けた。

そのまま、ヘッドスライリングして物陰に隠れた。

「どうやらあの場から離れたくはないようですね」

「そうみたいだね」

「考えてみればさつきから一步もあの場所から動いてませんね」

「やっぱりそうですか」

ソラは確信した。

「斎京さんのS I「モダン・アーティスト現実ノ芸術家」は「ワールド世界系」のS Iです」

ソラは言った。

地面でも壁でも使え、さらには行動範囲がある。

つまり、これにはS Iを使える範囲があること。

「ワールド世界系」のS Iは使用する際の範囲を作られる。つまり、この範囲は自分のS Iの世界になるのだ。

範囲と言っても丸型の範囲だけではなく、独特な形もある。

「これはつまり、斎京さんは自分の周りと、鞭ある場所のみをS Iの範囲としているわけですね。でかい鞭に対してこれが多分限界なのでしょう」

ソラは「スキル・アイ超能力ノ眼」で改めて確認した。

「やっぱりさっき僕が言った場所にしかS I反応がありません」
「それでは私達はどうすればいいのですか？」

朱里にいわれてソラは少し黙って考えた。

相手のS Iが分かったといってもそう簡単に作戦が思いつくわけではない。

だが、ソラはすぐにいい作戦を思い出した。

「これならやってみる価値はありそうですね」

ソラは再度みんなに作戦を言い渡した。

これから、彼らの逆襲が始まるうとしていた。

星光高校から少し近くの場所に彼らはいた。

道長と進藤だ。それに途中ばったり会った秋と佐藤、遠山もいた。

「おまえら、奇遇だな。崎野、残念ながら今は長門はいねえよ」

「そ、そんな関係ないわよ」

秋はぶっきらぼうに言った。

「でも最近長門君忙しそうね」

佐藤が思い出しながら言った。

「それは大木さんたちも同じことよね」

遠山が言った。

「なんかあの3人だけ俺達と違う世界にいるみたいに最近思えたな」
進藤がしみじみと言った。

だが、それも当たり前だ。ソラ達と彼らにはすこし見ている風景が違うのだから。

「ついでに、さっきから長門に電話しても通じねーぞ」

道長が携帯を見ながら言った。

「・・・・・・・・」

ソラに中学から好意を持っている秋にとってはものすごく心配だった。

昔、彼に出会った頃、中学の最初のことだったので長門君は誰とも仲良く話してはいなかった。

ある2年生の頃、先生に指名されて私と長門君はは大工を任されていた。

「あゝも〜。なんで私達がこんなことをしなければならいよの」

私は嫌気がさして大声で叫んだ。今は見つとも無いところを見せてしまったと思つて後悔しているけど。

それを聞いた長門君はこう答えた。

「じゃあ、さっさと終わらせましようよ。愚痴を言うよりも現実的

だと思いがすが」

そう言つて彼は黙々と作業を続けていた。
あんな風に言つていたが、彼のほうが私より何倍も作業が進んでいた。

「だあー！うるさいわね。やればいいでしょう」

そう言つて私も作業を再開した。

それから何分経つたのだろうか。

私と長門君は何の会話もなくただ時が進んでいくだけだった。
今となつてなつては何で自分はバ力だったのか。それが今になつて分かつている。

（たつく、私は何でこんなことをしているのかな）

このとき、自分はイライラしていた。それは多分長門君に向けていたのかもしれない。

「崎野さん。僕のほうは終わりました」

長門君が終わらせたことを知らせに来た。

「そう、それは良かったじゃないの」

私はぶっきらぼうに言った。確実にこれは長門君にあたっていた。

「もし良かったら手伝いましょうか？」

このとき、私は意外な言葉を聴いたのかもしれない。

だけど、それは長門君にとっては普通のことだったのかもしれない。

「い、いいの？」

「そっちのほうが早く終われますよ」

「それもそうね」

私は納得して長門君に手伝ってもらった。

そのとき事件は起こった。

私は疲れていたのかよろけてしまい、木の棒が沢山置いてある場所にぶつかってしまった。

縦においてあったので、まっすぐこっちに落ちてきた。

「きゃあああああ！！！！」

私は無心で叫んだ。

そのときは目をつぶっていたので何が起こったのは知らないが、長門君の声で起こされたことははっきりと覚えていた。

「大丈夫ですか崎野さん」

「え、あ、う、うん大丈夫よ」

私は笑顔で言った。

彼はよかった。と言ってくれた。

「あなたが助けてくれたの？」

「え、まあ、一樣。叫んでいましたし。助けないと思ったので」
「そ、そう」

長門君は優しく微笑んでくれた。
このときだった。胸が熱く感じたのは。

このとき初めて分かった。

——これが恋だと。

「まあ。あいつのことだから心配は無いだろう。そう思うよな崎野」
「え、あ、う、うん」

いきなり話を振られて秋は手間取っていた。

「きっと、大丈夫よね」

秋はやさしく微笑んだ。まるであのときのソラのように。

「はあああああ」

その頃ソラ達は逆転の仕込をしていた。

（もうちょっと、もうちょっとです）

ソラは気合を入れなおして斎京に向かってダッシュした。

第17章続く

第17章 VS 斎京・逆転への一撃

ソラは斎京の鞭攻撃をギリギリながらもかわしながら様子をつかっていた。

（どうやら、意識はちゃんとあるようですね）

ソラはそう確認した後、物陰に隠れた。
そのあと近くにいた雪が聞いてきた。

「どうだった？」

「意識はあるようなので暴走とは違いますね。雪のほうは準備はできましたか？」

「うん。バッチリ♪」

雪は小さくガッツポーズをした。

ソラは小さくうなずいた。

「優菜。そっちはどうですか？」

『うん。何とかできたよ』

通信機でソラは優菜に連絡を取った。

ちなみに朱里は優菜の近くにいて同じ作業を今のところやってもらっている。

「それでは雪、優菜。始めてください！！」

『了解！！』『』

雪と優菜は同時に返事をした。

その瞬間。

斎京の足元に水が流れてきた。

この水は近くにある水道に優菜のS I、ライン・シールド「線ノ盾」を利用した箱を作り、その中に水を溜めたのだ。

そしてもちろんその水は雪のS Iを使って利用する。

「いくわよ。アイス・カーベット「氷ノ敷物」!!」

水は一瞬に氷と化した。

そのとき、その場所が氷の道と化した。

「今よ!! ソン君!!」

「ええ!!」

ソラは斎京に突っ込んだ。

「だが、こんなことしても俺には意味は無い」

斎京は鞭を縦に振るってきた。

「それが僕には関係あるのですよ」

ソラは余裕でその鞭を避けた。

「早い!!」

ソラは一瞬にして斎京の背後を取った。

そう、ソラは氷の地面を利用して、スケートのように移動したのだ。スケートをかじった事があるソラにはこんなことはお安い御用だ。

ソラは「デジタル・ロープ電子ノ縄」を使い、斎京の動きを止めた。

「今です！！朱里！！」

ソラは朱里に合図を送った。

「なめるなよ餓鬼が」

そのときの斎京の顔にソラは少し怯えてしまった。
その瞬間だった、

ソラは腹になにか行きよいが強いものを腹に当たった感触がした。
いや、それは斎京の鞭の突きだった。

ソラはそれに気づいた。

「え！？なんで？」

良く見てみると鞭は異様な形でソラに向かって突きを出していた。
その形は鞭の中心部分が3本に分かれていて、先の近い部分でまた、
合流して再生された。

しかし、それは一瞬の出来事で、ソラは反応できずに当たってしまった。

しかし、その威力は絶大で、ソラはものすごい速さで壁にぶつかった。

ソラは見事に気絶されており、右側の額から血が流れていた。

「ソラ君！！」

「ソン君！！」

「ソラさん！！」

あまりにも一瞬の出来事で3人ともうろたえていた。
しかも、それがあのソラなので3人は驚きを隠せなかった。

「よくもソラさんを！！」

朱里は銃の引き金を引いた。
弾は見事に防がれてしまった。

「はあああああ」

優菜は棒術で接近戦に持ち込もうとした。
だが、斎京は鞭横に振るった。

「危ないゆーちゃん」

雪は水鉄砲を発射し、斎京の攻撃の邪魔をした。
その隙に、朱里は優菜に近づいた。

「大丈夫ですか優菜さん」

「私は大丈夫。でもソラ君が」

優菜は悲しみの眼で朱里に言った。

「分かっています。でも、いまはなんとも出来ません」

朱里も同じ気持ちだった。

この状況でソラがいないのはきつい、気絶なのでいつかは起きてくるだろうがそれがいつなのかは誰も知らない。
作戦は、ソラ抜きで実行するしかない。

「どうします雪さん」

朱里は雪に聞いた。

「やっぱりあの鞭の動きを止めないといけないわけよね」

雪は隠れながら言った。

「だとしたら、やっぱり私が攻撃するしかないよね」

朱里が悩みながら言った。

「まず、接近戦は無理っぽいしね」

優菜が諦めながら言った。

「接近も遠距離もだめ、もうお手上げかもね」

雪がため息をつきながら言った。

「でもそれでは意味はありません」

「やっぱり、動きを止める。これがまず第一条件ね」

3人は決断したのか同時にうなずいた。

「でも、私達に動きを止めることなんて出来るのかしら」

優菜が言った。

「優菜さん。ちょっと思ったことがありましたけど」
「なに？」

朱里が提案してきた。

「優菜さんの「線ノ盾」^{ライン・シールド}の技、「色」で何とかでき無いのでしょうか」

「つまり、動きはソン君みたいに縄とか使っんじゃなくて、騙して動きを止めようとすることね」

「はい」

朱里は雪の解説にうなずいた。

「でも、どうすればいいの」

「そうだね。たとえば」

「たとえば、相手にゲームをさせればいいのですよ」

朱里の言葉に2人とも無言になった。

「あーちゃん。ふざけている？」

「違いますから。いいですか」

朱里は2人に作戦を伝えた。

「これならどうですか？」

「やってみる価値はありそうね」

「とにかくあーちゃんの作戦で行こう」

こうして、3人はばらばらに散らばった。

斎京のところに来たのは優菜ただ一人だった。

「あなたの相手は私よ」

ちなみに氷の地面はもうやめているため、普通の地面となっている。

「行くわよ!!」

優菜は棒を持って横にダッシュした。

斎京は優菜に向かって鞭を振るった。

だが、遠くにいた朱里の弾に反応して、斎京は優菜から視線を離れた。

「時間稼ぎか小娘ども」

「そうかもしれないね」

朱里はそう言っただけで横に逃げた。

そのまま、走りながら朱里は銃を放った。

斎京は余裕で弾を防いでいる。

「俺には攻撃は当たらない!!」

「そうですよね」

朱里はそう言っただけで、いきなり姿が消えた。

「き、消えただと!! いや、冷静に考えろ、きっと誰かのトリックと考えてもいいだろう」

斎京は冷静に考えながら周りを見渡した。
だが、周りには誰もいなかった。

「どうゆう真似だこれは」

そう言っても返事は無い。

（時間稼ぎか、いや、あいつらに時間を稼ごうとしても何も出来まい）

そう思った後、斎京は一つを選択をした。

斎京は突然廻りだした。

そうこれは遠心力を使った、鞭の最大限の活用法である。

この技ならばたいいていのものは破壊できる。

そのとき、ガラスが割れた音が聞こえた。

いや、正確にはガラスではなく優菜のシールドであった。

「背景と同じ色で騙しやがったか」

しかし、気づくのはもう遅かった。

後ろから、優菜と雪が後ろから飛びついてきた。

優菜は棒を持ち、雪もそこらへんで拾った棒を持っていた。

違うのは雪のS.Iで棒に氷がついていたことだった。

さっきより突然のことだったので、斎京は急いで、鞭の発動をやめて、別の絵を利用した。

その絵はものすごく硬そうな棒の絵だった。

斎京はその棒で2人の攻撃を防いだ。

「残念だな。これなら、俺は阿多の攻撃でも簡単に避けられる」

しかし、斎京の読みははずした。

優菜は着陸したときと同時に叫んだ。

「残念。狙いはこつちなだよ。」「ブラック・フォース黒ノ三角形」！！」

そう叫んだ後、3人の周りに黒い壁が出てきて三角形の形で閉じ込めた。

中は真っ暗だった。

「チッしまった。なんていうかよ」

そう言った後、齋京は別の絵を利用した。

「これは使いたくなかったがしょうがない」

なんと齋京が出したのは中ではなく、外からのだした。

それは3個のビーム兵器だ。

3個の兵器から同時に発射した。外からの強度は強くしていなかったために簡単に壊れてしまった。

「しまった」

それはさすがに計算外であったようだ。

そう、「ワールド世界系」のSⅠは壁など関係なかったのだ。

「いや、3人は良くやってくれましたよ」

その言葉と同時に、齋京は謎の帯に確保されてしまった。

「貴様、もう起きたのか」

「おかげさまで」

それは気絶から起きたソラだった。

「2人とも上出来でしたよ」

帯はすっかりソラの足を通して斎京を縛っていた。

足の力が強いソラは今までのように力負けはしなかった。

遠くから、ソラのこと気づいた朱里はガトリング式の銃の準備をしていた。

さらに、優菜と雪は、最後の攻撃が防がれたとき、同時に棒に付いていた氷を水に戻していた。

「このがきいい」

斎京は叫んだがもう遅い。

「朱里！撃ってください！！」

朱里は引き金を引いた。

朱里の銃が火を噴いた。

「ソラ君大丈夫？」

「血はもう止まっている？」

斎京が気絶したのを確認した後、優菜と雪はソラに近づいた。

「ええ、大丈夫です」

「でも、治療はしないといけませんよ。ソラさん」

「わかっています」

その後、斎京は警察に引きわたった。

とあるビルの屋上からさっきの戦いを見ていた男がいた。
事理宗太郎だ。

「あゝあ。第1次群のリーダーがやられちゃったな。これは、俺達
第2次群の出番かな」

宗太郎は立ち上がった。

「俺達、ダークネス・ロードス「暗闇の道人」の戦いはこれからだ長門ソラ」

そう言ったあと、男の姿は消えた。

第17章。終わり

第18章 ヒューヒロイン

6月30日。火曜日。今日で6月は最後だ。
朝、6時半にソラはベットから起きた。

「6時半。早起きすぎますね」

しかし、今は眠くないのでソラはベットから下り、着替えに入った。
今日は雨。

時間は午前7時40分。

ソラは家事を全て終わられてから家を出た。
だが、今日は雨なので洗濯は家の中で済ませたので早く終わり、珍しくこんな時間に行くことになった。

いつもはすべての家事を終わらすのにいつもは8時10分に終わる。
7時に起きれば全て終わらすことが出来る。

だが、少年の1人暮らしだ。家事のみではすぐに終わる。
後は、予習に時間を使う。

実際、学校までは15分程度で学校に着く。
なのでいつも余裕を持って家を出る。

ソラは空を見上げた。

自分の名前と同じ。それなのに意味はまったく分からない。
聞く前に親は他界してしまった。

学校には余裕で着き、教室には誰もいなかった。
ソラは窓を開けた。

誰もいないのを確認したと、ひそかに「超能力ノ眼・輪」スキル・アイ・リングを使用した。

外を見てみると誰もSⅠ反応は無かった。

だが、それは当たり前だ。

最近は多くのSⅠ使いと出会っている。

本当にこれは珍しいことだ。

ソラは窓を閉めて本を読もうとした。

そのとき、教室のドアが開いた。

「あ・・・」

「・・・あ」

蒼希香奈だ。

教室の中は暗く、彼女の色白な肌が良く目立っている。

「な、長門君。おはよう」

「おはようございます。蒼希さんも早いですね」

「うん。なんか早起きしてたから」

そう言っただけで香奈は自分の席に座った。

ソラは彼女と似ている少女とあったことがある。小学4年生の頃だ。だが、ほとんどそのことは憶えていない。いや、憶えているのはそのこと一緒に居たときだけのこと。それ以外の時間は忘れている。

その少女も肌は色白で、紺が混ざった黒の髪に赤色の力チューシャ。有一違うのは髪の長さで色。香奈はショートカットだが、その少女はロングだった。そして色は桃色だった。

そして名前ももちろん違う。

彼女の名前は確か・・・そう。

——音無詩音。おとむしおん

ソラ自分の左目を抑えた。

そつ、彼女とあった瞬間。彼の運命は変わったと言えるだろう。

「どうしたの長門君。左目、痛いのか？」

「いえ、大丈夫です」

ソラは笑い、大丈夫だとアピールした。

（おぼろげですけど、声もなんか似てますね）

ソラはそう思い読書にしようと思ったが。

「あれ、蒼希さん。同じ本を読んでいますね」

「え！？」

読書をしていた香奈の本を見てみると、偶然にもソラと同じ本だった。

「ほんとだ。偶然だね」

「そうですね。テキストに持ってきたのに」

「え！？じゃあ、もう読んじやったのか？」

「ええ。続編も読みました」

その本は探偵小説で上下巻と分かれていた。今2人が持っているのは上巻だった。

「もしよかったら下巻貸しましょうか」

「え！？いいの」

「ええ」

香奈はものすごくうれしそうな顔になった。ものすごくかわいらしい。

「ありがとう。長門君」

「はい。これです」

「なるべく早く読み終わるね」

香奈は笑顔で言った。

ソラの席に近寄り本を受け取った。

「本当にありがとう長門君」

ソラは微笑みで答えた。

香奈は自分の席に戻り、読書に入った。

数分経ってから、どんどん生徒が登校してきた。
進藤も登校してきた。

「あれ、早いな長門。いつもは家事してから来るのに」

「家事はしてきました。早く起きたので」

「へー長門君。家事出来るんだ」

登校してきた佐藤が話しかけてきた。

「ええ。まああくまで一人暮らしなので」

「しかも4年近く経つか」

「ええ。それぐらいです」

ソラがそう言ったあと、雪が教室に入ってきた。隣には秋の姿もあった。

「あ、おはようソン君」

「おはよう長門君」

「おはようございます2人とも」

「ソン君。額の怪我もう大丈夫なの？」

雪が言っているのは昨日の戦いで右の額の怪我のことだった。

あの時、病院に行つてなく、包帯だけで済ましていた。

実際、怪我也そんなに深くなく、むしろ浅かったので、ソラの治療能力をプラスしたら一晩で直った。

「もう大丈夫ですよ。怪我的治りは意外と早いのですから」

ソラは心配させないように言った。

そうしたら雪もほっとした表情になった。

一方、何のことが分からない秋は手間取っていた。

その日の放課後。

ソラ達は普通に下校していた。

隣には優菜と雪もいた。

「そういえば、齋京さんで結局「ダークネス・ロードス暗闇の道人」のリーダーだったのかな」

優菜が心配そうに言ってきた。

「それならば、この戦いも終わったと考えたいですね。もう誰も傷つけたくはありませんし」

「そうだねソン君」

雪がソラの言葉を笑顔で返した。
そのときだった。

ソラの携帯のアラームがなった。

「あれ、雫さんからだ」

「なんて書いてあるの」

「えーと、助けて。と、書いていますね」

それだけだった。

「え、それって」

優菜が感づいたように言った。

「雫さんがいる場所は病院以外ありません。急いでいきましょう」

「うん」

ソラ達は雨の中を走って行った。

一方その頃病院では大騒動が起きていた。

ナースさんが患者さんを非常口まで誘導していた。

その中には雫の姿があった。

「何でこんなことになったの？」

近くにはレンジの姿もあった。

「しらねえ。でも、こんなことが出来るのはS I使いしかいねえ」

そう、なんと病院では針があそこちものを破壊していた。

「一樣、ソラ君たちに連絡したけど」

「いつ来るかわからねえ。だったら俺達だけで行きぬけるしかねえか」

「でもできる？」

「やってみるしかわからねえ」

レンジが窓ガラスを割って外に出た。

「お前が犯人だな」

無数の針を操っていたのは1人の少女だった。

「女だろうが、人様に迷惑をかけるのはゆるさねえ」

レンジはその少女を殴ろうとした。

だが、その拳は違う人物に止められた。

「感心しないな。レディーに手を上げるやつは」

その男はスーツ姿で出てきた。

しかし、その姿には似合わず、ものすごい筋肉質だった。

「感心しないのはこっちも同じだ」

レンジはそう言いながら力づくでつかまれた拳を解いた。

「けが人を襲うなんて人間じゃないぜ」

「けが人？ そんなものは存在しない。それだったらこの世の人間は全員けが人だ」

男が言った。

「はん。頭おかしいのか」

そういつてレンジは男に向かってダッシュした。

しかし、レンジは逆にその男に殴られてしまった。

しかもレンジには殴られた瞬間、何にも感じなかった。

レンジは雨の中の地面に倒れた。

「俺、いつ殴られた」

——パンチが見えなかった。いや、やつは手すらも動いていない。

「お前もS.I.使いか」

「それならどうした」

「いいだろう相手してやる。この俺祖父江蓮蒔がな！！」

レンジは大声で言い放った。

「いいだろう。私の名は「ダークネス・ロードス暗闇の道人」の一員、きんじょうかなめ金城要だ。怪我す

る前に憶えておけ」

「なめるなよ！！」

こうして、病院を舞台にした戦いが始まった。

第18章。終わり

第19章 水と鉄・雨の日の戦い

ソラ達は雨の中走っていた。

雫から連絡があり、さらにはレンジも来ていると聞いた。

詳しいことは分からないが多分S I関連のことだろうと思いこつて走っている。

「まさか、斎京さんがリーダーでは無かったのね」

「そういつ考えもありますね」

ソラは近くに見たことがある顔を見た。

「朱里！！」

「ソラさん。私のほうにさっき雫さんから連絡がありました」

「僕らのほうにも来ました。やっぱり朱里も病院へ向かうのですか」

朱里はうなずいた。

「では、急ぎましょう」

ソラ達はまた走り出した。

場所変わって病院。

金城とレンジは見合っていた。

（単純にぶつかってもさっきのようになってしまつかもしれねえ。

そうだったら)

——戦っているときに確かめるしかねえ。

レンジは近くにあった鉄をもった。

そして、自らのS I「鉄^{イロン・コンバート}ノ変化」使って棒に変化させた。

「これがお前のS Iか」

「ああ、そうだ。おまえのS Iも確かめさせてもらっぜ」

そう言っでレンジは金城に向かってダッシュした。

金城の腕が伸びないところで、レンジは棒を振った。

これならばパンチ系のもだったら何もできるはずが無い。
レンジはそう考えたのだ。

だが、その考えは甘かった。

金城は自分の掌をレンジに向けた。

そしたら、レンジはさっきと同じように吹っ飛んだ。

レンジは水溜りに入った。

「なるほど、遠距離でも使えるわけか」

「そうだったらどうする気だ」

レンジはにやけた。

「戦い方を変えるのみだ」

そう言っで持っていた鉄の棒の形を変えた。

新たに出来たのは鎌だった。
レンジはその鎌を振り回した。

「うし、いい調子だ」

そう言っでレンジは鎌を振り回すのをやめた。

「さらにこれならどうか？」

そう言っでレンジは自分のポケットから小さな鉄を出した。

イロン・コンバート
―鉄ノ変化―発動！！

その鉄は鎖と化した。

その鎖はさっき作った鎌と連結した。

「さあ、行くぜ！！」

そう言っでレンジは鎌を投げた。

片手にはしっかり鎖を握っていた。

これが、彼なりの中距離の戦い方だった。

「なるほど、考えたな」

金城はそれを軽々避けた。

「だが、簡単に避けられる！！」

「残念ながら、これだけじゃねえぜ」

レンジは鎖を引っ張った。

鎌がレンジの近くに来たとき、レンジは一回転して鎌をよけた。鎌はそのまま上空にいる金城の落下地点に向かった。

「最初からこれが狙いだよ」

だが、この鎌は防がれた。

しかも防いだのは金城ではない。

防いだのは、さっき針を操っていたと思える少女だった。

彼女の周りには無数の針が浮いていた。

鎌を防いだには、沢山の針を集めて、一つの壁を作ったのだ。

「あなたの相手は金城だけではない。『暗闇の同人』^{ダイクネス・ロードス}の一員。『針』^{スビ}ア・マスター^{なかがわ}ノ達人」の中川ミズイロも相手をする」

——2人か！！

「いいぜ、かかって来い」

レンジは相手をあおった。

「じゃあ、お構いなく」

中川は針に命令を下すように手を前にやった。そのまま針はレンジに向かった。

「針じゃあ、俺には勝てねえ」

レンジは鎖を少し取り、壁を作った。

「なめないで」

針は壁を避けた。

「っな!!」

レンジは反射で針を鎌でなぎ払った。

「クソッ!!」

——盾の防御は期待できねえなこれは。

「私を忘れるな!!」

後ろから声が聞こえた。

振り向いたときにはもう遅かった。

金城はレンジの顔を殴った。

レンジは倒れずに何とか踏ん張った。

「いてゝな」

レンジはつばを吐いた。

だが、このままでは完璧にレンジが不利になっている。

（だが、今は俺一人で耐えるしかねえ）

レンジは鎌を一回転させ、気合を入れなおした。

「さあ、かかって来い」

「それじゃあ、容赦なく行くわね」

中川はまた同じように針をレンジに向けてはなった。
しかも、さっきより量が多い。

「さて、全部避けられるかしら」

「クソッ」

一回レンジは避けたがそれだけでは終わらなかった。
針は容赦なくレンジを追ってきている。

避けようとしたら、そのまま金城に殴られそうになった。

「やば!!!」

反射的に拳は避けたが、針のほうは避けられなかった。

針は容赦なくレンジを襲った。

針のほとんどは掠ったか、刺さったりした。

だが、それでもレンジは倒れなかった。

傷から血が出てきた。

「ほお、まだ倒れないか」

金城が感心しながら言った。

「でも、もう終わりね」

中川は針を準備した。
金城も構えた。

（ちくしょう。俺の力じゃ一回避けるのに精一杯かよ）

中川は針を放ち、近状は殴りかかってきた。

（なんとか、あの針だけでもなんとも出来ねえ）

レンジのS Iは、鉄を変化させたり、大きさを変えることは出来るだけ、操ることは出来ない。

なので、今は自分が扱える武器しか作ることしか出来なかった
レンジはパンチは何とか避けたがそのあとの針攻撃は避けられそうにもなかった。

（クソッ）

しかし、針はレンジを襲わなかった。
良く見たら、針は水の中に閉じ込められていた。

「「「!」「」」」

相手も含めて3人とも驚いていた。
さらに、レンジの場合。これが誰の仕業なのかをハッキリわかって
いた。

「大丈夫？レンジさん」

雫が現れた。

格好は私服で雨でもう濡れている。

「し、雫さん」

レンジは呼びかけた。

「はあ、間に合ってよかった。私も参戦しますよ」

「でも、怪我は？」

「もう、大丈夫!!」

雫は微笑んだ。

レンジはその顔を見て顔を赤くした。

「しかたねえな。だったらお譲ちゃんのほうを頼む」

「ええ。その女の子。私が相手よ」

雫が中川を挑発した。

そのまま雫は相手が見える位置まで移動した。

「いいから、言って来い中川」

「ああ」

許可を取ったらしく中川は雫を追いかけた。

それが分かった雫はまた、走り出した。

「さあて、続きしようぜ」

「いいだろう」

レンジは鎌を構えなおした。

金城も同時に構えた。

「はあああああ！！！」

両者、同時にダッシュした。

一方雫と中川は。

「やるようね。あんた」

「それはどうも。病み上がりなもんだからお手やらかに」

「出来ると思う？」

「無理みたいわねそれじゃあ」

中川は雫に向かって針を放った。

「水玉！！」

雫は水玉を作り出して針を包み込んだ。

そのおかげで針の速さは遅くなっている。

「やるじゃない。ならこれなら」

中川はいきなり止まり始めた。

そしてなにやら言い出した。

「新たな手よ復元せよ。全てを握り刺し殺せ。！！」

SIが少し感じられる雫にとって物凄いエネルギーを感じ取ってしまっていた。

スピア・ハンド
「針ノ手！！」

中川の横に巨大な針で作られた手が現れた。

「な、なにこれ!？」

「あら、詠唱術も知らないのね。可哀想に」

——詠唱術!？」

雫は初めて聴いた言葉に驚いた。

「ほら、隙あり!！」

手は、雫を襲ってきた。

「な、なにこれ!！」

(やばい!!--こんなのに勝てるの?)

雫は逃げながら考えていた。

しかし、今は何も思いつかなかった。

「クッ」アクアトロ・マスター「水ノ達人」!！」

雫は勢いを利用した水柱が手を襲ったが、手ごたえはまったくなかった。

「これじゃだめなの?」

雫は完璧にピンチになってしまった。

そしてレンジも同じくピンチが近くなっていた。

レンジはまた金城に吹っ飛ばされてしまった。

「クソッなんだあんたの力は」

「なら教えて進ぜよう。私の力は「跳ね返しの手」カウンターハンドだ。この手ならある程度の物理攻撃は跳ね返すことが出来る」

「な、なんだそりゃ」

（俺と相性が悪すぎるだろう）

レンジは驚愕の事実を知ったような気がした。

「これで終わりだ」

——本当にここで終わりかよ。

レンジは目をつぶった。

だが、何秒経っても殴られた感じがしない。

「いつまで目をつぶっているのですか？レンジさんらしくありませんよ」

——！！

聞いたことのある声を聞いてレンジは目を開けた。

そこにはソラがいた。隣には優菜もいた。

そして、栗のほうには。

「な、何だ。お前は!!」

手は一瞬で何者かに壊された。
壊された針には電気が伝わっていた。

「雫さん」

「しーさん」

朱里と雪が雫に近づいた。

「き、来てくれたのね」

「やっと来たな」

レンジと雫は言った。

「「遅れてすみません」」

ソラと朱里は同時に言った。
空には雨が止み始めた。

第19章。 続く

第19章 水と鉄・雨の日の戦い（後書き）

おわび

前回の話のタイトル間違えてしまつて申し訳ございませんでした。
この話の前には変えておきました。

第19章 水と鉄・術と拳

レンジはほっとした顔でソラを見た。

「助かったぜソラ。だがよ、あいつは相当強い。大丈夫か」

ソラは言った。

「勝算はありますよ。少しだけ、あなた達の戦い見させてもらいました」

「そうか、それなら問題ねーな」

レンジは鎌を持った。

ソラと優菜も構えた。

「仲間が増えたって私にはかありません。なぜなら、あなた達は私より弱い」

「人をなんでも知っているような口ぶりですね」

ソラは金城の言葉に疑問があつたらしい。

「それはそうですよ。だって、今現にそうでしょう」

「じゃあ、そんな弱い人はけが人でも攻撃するのですか？」

「けが人？そんなこと言ったらみんなけが人ですよ」

金城は前に言った言葉を言った。

「そうかもしれません。人は誰だってどこかに怪我を負っているはずです。体も、心も」

ソラは一回間を空けた。

「だけど、だからって人を病院や人を襲う理由ではありません!!」

ソラは真剣な眼差しで金城に言った。

その目は物凄い怒りがこめられていた。

「でも、弱いのは確かだ」

金城はソラに向かってきた。

「ソラ、やつの手に気をつけろ!!」

レンジはソラに忠告した。

だが、その心配いは無かった。

ソラは「デジタル・ベルト 電子ノ帯」で金城の手を巻きつけた。

そして、急接近してきたときに、ソラは金城の顔面を思いっきり蹴った。

金城は鼻血を出しながら倒れた。

「人に迷惑をかけていい理由などありません。あなたも病院送りになっただけ分かりますよ。多分」

ソラは金城に言った。

レンジと優菜は啞然としていた。

それは、ソラが金城のS Iの発動を止めたからだ。

金城のS Iは素手のみに発動することができる。と、言うことは素手にしなければ、金城はS Iを発動できないことをソラは知っていたのだ。

しかし、金城はまだ気絶をしていなかった。

「き、貴様」

金城は立ち上がった。

「優菜。ここはレンジさんと僕だけでやります。優菜は栗さんのところへ行つて下さい」

ソラは優菜に言った。

「ここからは男同士の戦いだ。女子は離れたほうがいい」

レンジもソラに同感らしい。

「うん。分かった」

そう言つて優菜は走り出した。

「さあ、続きを始めようか。似非紳士」

「今度こそ、息の根を止めてやる」

金城は構えた。

そのとき、金城は自分が不利な立場だと分かった。

さつきソラに巻かれた「デジタル・ベルト電子ノ帯」がまだ腕に残っていた。

「残念ながら、ここからはS Iなしの1対1の殴り合いだぜ。ソラ手は出すなよ」

「分かっています」

ソラは了承した。

「いいだろう。お前を殴ってからこの餓鬼を殺そうとしよう」
「残念だが、俺はやられねえよ」

レンジと金城。お互いの拳が交差した。

そのころ、雫のほうに援助してきた朱里と雪は雫と共に戦っていた。形成は雪のおかげで逆転していた。

雫のS I、「アクアトロマスター水ノ達人」で水を操り、雪のS I、「ウォーターアイス水十氷」の連携で中川のS I、「スピア・マスター針ノ達人」を上回っていた。

自分がやばくなったと気づいた中川は一旦攻撃をやめた。

「へえ、良くやるじゃない。でもこれはどうかしら」

中川は地面に手をつけた。

そしたら地面から雫たちを狙って針がいきなり生えてきた。

「危ない」

雫たちは走りながら避けた。

だが、中川にとってはただの時間稼ぎにしかならなかった。

「針よ集え、今こそ森の王者の怒りを復元せよ!!」

中川は詠唱術を唱えた。

スピア・ベア
「針ノ熊!!」

針が集まり、一体の熊を出した。

「な、なにこれ」

雪は驚きながら言った。

「また詠唱術を使ったのねあの子」

「詠唱術ですか!？」

朱里は雫に聞いた。

「詠唱術はその力に必要な言葉を言うのその言葉に応じて技が出るの。でも、強力な詠唱術ほど体力と集中力と精神力が必要なの」

「そ、それってありますか」

雪は言った。

「まあ、術を使うときはそれなりの条件もありやつもあって、それに応じて必要な体力と精神力、集中力も応じて減るの。でも、逆だったり、強力な術ほど応じて増えるの」

雫は逃げながら説明した。

熊は思いつきりパンチを繰り出してきた。

「は、早い!!」

「任せて!!」

その間に優菜が入ってきて線を引き、「ライン・シールド線ノ盾」を使った。

「な、なんて力なの」

盾にひびが割れてきた。

「優菜ちゃん!!」

「ゆーちゃん!!」

雫はその盾に水をかけ、雪が凍らせた。そのおかげで強度が上がった。

これで時間が稼げ、割れる前に4人とも回避することが出来た。

「どうしたのゆーちゃん」

「ソラ君の指示できたの。あっちのほうは何とかできるみたいだから」

優菜は説明した後、逆に聞いてきた。

「それよりも雫さん。あれは何ですか」

優菜は熊に指を差した。

「相手の詠唱術で呼び出されたのよ」

「詠唱術!？」

雫はさつきと同じ説明をした。
それは中川も聞いていたらしい。

「おまえ、詠唱術のこと知っていたんだな」
「ええ。まあいろいろと調べました」

雫は言った。

「でも、もう隠すことは出来無そうね。3人とも援護お願いね」
「「はい!」「」」

そう言つて雫は手中始めた

「な、まさかやつも詠唱術を」
「邪魔はさせません!!」

朱里は中川に向かつて銃を撃つた。
優菜も雫の周りに線を引いた。
雫は本唱を唱え始めた。

「流れる川のように、形とる蛇よ、今こそ復元せよ!!」
「ふ、復元術!!」

中川は言った。

「いでよ!!」
アクア・スネーク
「水ノ蛇」!!」

雫の周りに大きな水のように透き通っている蛇があらわれた。

「いきなさい！！ルル！！」

ルルといわれるその水蛇は熊に噛み付いた。

針は容赦なく刺さっていたが、体は水なのでなんのも支障は無かった。

「な、なにこれ！！」

「雪ちゃん。ルルの歯だけを凍らせて！！」

雫は雪に指示した。

「は、はい」

雪は言われたとおりにルルの歯だけを凍らせた。

「ルル。食いちぎっていいわよ！！」

ルルは雫に言われたとおりに熊の体を食いちぎった。
熊は吠えた後、そのまま消えて行った。

「あ！！」

地面に落ちた中川は優菜の円形の盾で閉じ込めた。

「これで、終わったわね」

ルルは消えて行った。

女子同士の戦いは雫達の勝利で終わった。

一方男児のほうは、レンジと金城の強烈な殴り合いはクライマックスを迎えていた。

もう2人ともボロボロのよれよれだった。

ソラは一切手を出しておらず、2人の戦いを見ていた。

彼の目はもう金城対する怒りは無かった。

今はもう、このいい戦いを黙ってみていた。

「もう、この1発でラストに使用じゃないか」

「いいだろう。俺はまだ倒れんがな」

「それは私も同じだ」

また2人は思いつきり足を踏み込んだ。

2人の拳は交差した。

両者、交わすことなく殴りあった。

拳が離れたとき2人はもう立つのもやっとなかった。
そこで一番早く倒れたのは。

・・・金城だった。

レンジは確認した後、膝を着いた。

「レンジさん」

ソラはレンジに近づいた。

「ソラ君!!」

雫がソラを呼んだ。

「ソン君れんさんは？」

雪は聞いた。

「大丈夫です。気絶はしましたが2人とも致命所は追ってませんよ」
「良かった」

朱里は一息ついた。

「とりあえずレンジさんを病院に運びましょう。その後今回の戦いの情報のやり取りしましょうか」

全員返事をし、病院内へと入って行った。

そして空はもう雨が止んでいた。

第19章 終わり

第20章 詠唱術

病院内。

レンジをベットに寝かせ、ソラたちは話し合っていた。

「先生に聞いたところ、打撲がやっぱり多いですが、骨には支障はないらしいですよ」

ソラは伝えられたことを女子たちに伝えた。

「そう。よかった」

「ご苦労様でした。3人とも、そして雫さんのおかげで最悪の事態までは乗り切れました。レンジさんとあなたのおかげで恐れていたことは免れました」

ソラは頭を下げた。

「いいのよ、ソラ君・私たちも何もできないのはいやだし」

雫は首を振りながら言った。

「それで、今回の戦いだけど」

「はい」

雫は話題を変えた。

「やっぱり、詠唱術のことですか」
「うん」

雫はうなずいた。

「やっぱり、今までよりも強くなってきたいると考えるもいいのでしょうか」

「でもなんでしーさんは詠唱術のこと知っているの？」

明里と雪が言った。

「うん。私はソラ君たちに会うまでこのことは知っていたけど、技のほうま未完成だったの」

雫は残念そうに言った。

「そして、いまだにS Iを未熟に扱っている人では危険なのよ。だから今まで教えられなかった」

「まあ、そのことは優菜たちのことを思ってくれていたとわかっていますよ」

「ありがとう。私のルルだって今は低レベルの詠唱術なの。雪ちゃんがいなかったら勝てなかったわ」

雪は頭をかきながら照れていた。

詠唱術は低レベルのS I使いが扱うと、S Iが暴走してしまう可能性があり、下手すればその使い者が死んでしまうこともあるらしい。低レベルな術でも使い者がS Iを感じ取れなくてはとても危険である。

「優菜ちゃんはS Iも進化しているところだけど、まだS Iは感じ取れない？」

「ええ。残念ながら」

優菜は首を横に振った。

SIの進化は使い者がどんどんSIを扱えて着ている証であるが、感じ取れることは進化とは少し違う。これは使い者が何とかするしかない。

「じゃあ、どうやってSIを感じ取れるようになるの？」

「やっぱりここは己を知り、SIを知るといったほうがいいのかしら」

雫は助言を言った。

「どういことですか」

「そいことですか」

優菜たちはわかっていながったがソラのみわかったように言った。

「つまり、自分のSIのことをよく知ったほうがいいわけですよ。

SIは人間と一緒にですから」

「だからソソ君ちゃんと教えてよ」

「いえ、ここは優菜ちゃんたちが自分で知らなくてはいけないわ」

雫が雪の言葉を否定した。

「それに、ソラ君が言ったことも正しいわよ」

「さらにヒントです。雪たちは自分のSIをまだわかっていないことがあります」

どういことなのか。

優菜達はもう、自分のSIの力を知っているつもりだった。

「そろそろ夜になります。雨も上がっていますからそろそろ帰りましょうか」

そう言つてソラと雫は立ち上がった。

「僕はできることがあれば手伝いますよ。気づけるヒントは出すつもりです。これは僕たちが言っても意味はありませんから」

優菜達もソラを追った。

7月1日水曜日。

ソラたちはソラの家に来ていた。

「はああああ!!」

あいからわず優菜は棒術の練習をしていた。
ソラは相手をしていた。

「まだまだですよ!!」

ソラは自分の棒を利用し、優菜の攻撃をかわした。
そのまま、優菜の棒を弾き飛ばした。

「もう、ちょっとは手加減してよソラ君」
「それでは特訓の意味はないのでは」

ソラは呆れながら言った。
家の中には明里がお茶の準備をしていた。

雪は今日はいない。理由は家の用事らしい。

多分、自分ひとりで練習しているとみんな思っていた。

そのとき、家のチャイムがなった。

ソラは庭から、誰がいるのかを見た。

そこには長身の男と少女がいた。

男は多分40歳ぐらいで少女は中学生ぐらいだった。

「すみません。ここは長門さんのお宅でしょうか」

ソラはいやな予感がした。

いや、性格には2人に微量なS I反応があつた。

輪リングを使わずとも、ソラは近くにいる人だったら微量のS I反応が感じられる。

「違います。人違いです」

そう言つてソラはお引取りを願つた。

「いや、違いますよね。ご本人ですよ。長門ソラさん」

「違います」

ソラはバツサリ言つた。

「意外と強情ですね。写真にはあなたの姿があるのですよ」

——写真！？

少し驚いたがソラは顔には出さず、平然と答えた。

「確かに僕は長門ソラです」

「やっぱり」

「でも、その写真は僕は撮った覚えがありません。盗撮は犯罪ですよ。とういか警察を呼びますよ」

ソラはサラッと言った。

しかし、男も動じなかった。

「私の名は伊吹江比いびきえひと言います。彼女は私の娘のあさみと言います。以後お見知りおきを」

「で、何しに來たのですか？」

ソラは江比に聞いた。

「それはもちろんあなたを殺しに來ました」

そう言つて江比はソラの首に手刀を向けた。

ソラは即座に反応して避けた。

そして、隙を突いて家から出た。

「やっぱりそうでしたか」

そう言つてソラは走り出した。

とりあえずこの場から離れて人がいないところに行く気だ。

「追いますよあさみ」

そう言つて2人はソラを負った。

庭から見ていた優菜はソラが逃げるのを見たのでそのまま朱里に伝えた。

「朱里ちゃん。敵らしいよ」

「はい。準備はできています」

そう言つて2人は家を出た。

朱里はちゃっかり鍵を閉めた。

「この戦いで何とか詠唱術を手に入れたいわね」

優菜は朱里に言つた。

「でも、まだソラさんと雫さんが言っていたことがわかりません」

朱里は正直に言つた。

「でも、ただ単に戦わないで手に入るものだとも思っていないわけよ」

「それはそうですね」

朱里は優菜に賛成した。

2人はソラと謎のS I使いを追つた。

第20章 終わり

第21章 メカニック・スカイ・一人の戦い

ソラは走っていた。

理由は2人のSⅠ使いに追われていたからだ。

優菜には分かるように走ってきたため気づいてくれたと信じていた。

ソラはなるべく人数が少なそうなところへ行こうと走っていた。

特に狭い場所は人が来ないし自分達が戦うには慣れている場所だ。

ソラは人が通りそうにもない路地裏に入って行った。

（ここならいけそうですね）

ソラは走るのをやめた。

しかし、止まった瞬間、ソラは自分の目を疑った。

目の前に江比が立っていたのだ。

（なるほど、これがこの人のSⅠですかね）

「鬼ごっこは終わりです。やっちゃいなさいあさみちゃん」

そう言った後、上からの気配がした。

向いたら、なんとあの女の子が大きな棒を持ちながら落ちてきた。

「だああああ!!」

ソラは得意のスピードで交わすことが出来た。

「な、なんですかいまのは!!」

「君なら分かるだろう。それよりも大丈夫かな君の仲間が私達を追ってくるみたいだったが」

——！！

そうたしかに、優菜たちが外に出たときはソラの姿は確認できなかった。そのため、彼女達は彼らを追ってくるしかない。

しかし、江比はすでにソラの目の前にいた。

（しまった。これじゃあ優菜たちが来るには相当時間がかかります。あの人も携帯は使わせてもらえそうにもありませんから）

——ここは僕一人で戦うしかありません！！

ソラは決心をして構えた。

「ほお、一人で、未だにどんな力が分からない人が、しかもSIを持つていない人が戦えると思っているのですか？」

——そんなことはわかりまん。

「だけど、ここで諦めることはしたくありませんから」

ソラがそう行つた瞬間、目が反応したのか、自動的に「超能力ノ^{スキル・アイ・リ}眼」が発動した。

「やれ、あさみちゃん」

あさみは無言でうなずき、ソラに向かってきた。いまだにでかい棒は持っている。

しかも、こんなものを持っているのに意外と早かった。

あさみは容赦なくソラに向かって棒を振り回した。

ソラはそれを避け続けた。

（早くつてしかも一撃を食らうと怪我どころでは済みそうにもありませんね。だけれど！！）

ソラは「デジタル・ベルト電子ノ帯」で棒を包み込み、そのままあさみが持っている近くのところを思いっきり蹴って棒を奪った。

「動きは単純すぎますね」

ソラは棒を捨てて言った。

「なかなかやりますね。だが、これはどうでしょう」

江比がそういうと、あさみは次はピコピコハンマーらしきものを出してきた。

そしていきなりでかくなった。

（彼女はもしか、質量が何かを倍増する力？）

そう思いながらソラはあさみの攻撃を避け続けた。

（さっきより動きがよくなっている。この武器は使い慣れているようです）

——だったらさっきの方法はやめましょうか。

ソラはあさみの腕を引つ張った。

そのとき同時にそのハンマーを奪った。

そのとき、ソラは彼女に触れたとき、何かを感じた。

手は冷たく、まるで、意識がなく、ロボットみたいだった。

しかし、ソラは考える時間はなかった。

あさみは即座に蹴りを入れてきた。

ソラは両手の「デジタル・バンド電脳子ノ腕輪」で防いだ。

衝撃は来たか、怪我は一切しなかった。

ソラがつけている「デジタル・バンド電脳子ノ腕輪」はなぜか、チェンソー切ろうとしても切れないというほどの強度を誇っている。なぜかは本人も分かってはいない。

ソラは一回あさみから手を離して後ろに下がった。

だが、あさみは容赦なく襲ってきた。

ソラは避け続けた。

「本当になかなかやりますね。これならどうですか」

江比の言葉にソラは何をする気だと思いき意識をそらしてしまった。

そのときだった。

ソラは顔に痛みを感じた。

ソラが意識がそれている間あさみが殴ってきた。

さらにもう一発腹を殴ってきた。

ソラは反射的に後ろに下がった。
口から血が出てきた。

（唇が切れましたか）

ソラはつばを吐いた。
腹へのダメージも相当のものだ。さすがにあれを何発も食らうことはやばい。

（長期戦はこっちが不利になりそうですね。だったら）

——短期戦のスピード勝負です！！

ソラはあさみに向かってダッシュした。

そのまま足に向かって蹴りを入れうとした。
少女を殴ることは出来ないが、フェイントぐらいは出来るだろうと
ソラは思った。

だが、その作戦は外れた。

なんと瞬間的にあさみが消えたのだ。

——早い！！

あさみは後ろに現れてソラが振り向く前に背中に裏拳を放った。

ソラは前に倒れた。

あさみはソラを踏もうとしたがそれには反応はでき、即座に逃げて体制を整えた。

その後すぐに立ち上がり、何かを思いついたようだった。

（もしかして、これが本当なら彼女は）

ソラがそう思っているにも、あさみは容赦なく攻撃をしてきた。ソラはバックステップをしながら攻撃をよけていた。

——この男、戦っていく中、だんだん戦い方に慣れてきている！！

江比はソラの戦いを見ながら思った。

（だが、長期戦はこっちが有利！！）

「体力を消費させる戦い方をさせないさ！！」

あさみはうなずきもせず戦い方を変えた。

体ごと、足を狙いながら蹴り回った。

ソラはジャンプしてよけた。

しかし、これがあさみの狙いであり、ソラの狙いでもあった。

あさみはすぐに上空にいるソラに殴りかかった。

ソラはその手を手に取った。

「やっぱり、冷たいです。普通ならこんなに動いたら体はあつたままです。でも、この子の体はものすごく冷たい、まるで、心のないロボット」

あさみはそんな話は聞いていないように違う手で殴りかかった。

ソラはその手を踏み台にして、さらに高くジャンプした。

「どうやら、痛みも感じていないみたいですね」

ソラは「デジタル・ベルト電子ノ帯」を電柱に巻いて、そこに足を置いた。

これが、ソラの新しい戦い方。それは物を利用した空中戦だった。

「いきますよ。心がないものにはあるものには勝てませんから」

「なに!?!」

以外にも、この言葉は江比が反応した。

しかし、その言葉がソラの本当の狙いだった。

「やっぱりそうですか。ほとんどわかりましたよ」

ソラはあさみの攻撃を避けつつ江比に言った。

「彼女がこうなってしまったのは、あなたのS.I.の仕業ですね」

「・・・な!?!」

どうやらそのとおりだったそうだ。

「なぜわかったという言葉は意味ありませんよ。今まであなたが指示をしなければこの子は動かなかった。つまり、あなた以外にここにはいません」

デジタル・ベルト
ソラは「電子ノ帯」の準備をした。

空中で一回転したあと、^{ベルト}帯をあさみの腕と電柱に縛りつけた。
しかし、このとき大きな隙が出てきてしまい、芽衣はソラの頭を蹴
った。

血が出てきたものの、ソラはひるまずに電柱に縛り付けて固定した。

「ま、まて、自分の子をどう使おうか親の勝手じゃないか!!」

江比は自分の危険を察知したのか、言い訳してきた。

「そんな理屈はありません!!」

ソラは大声を出した。

その顔は怒りで満ちていた。

「彼女はただ、あなたの子供、それだけで道具ではありません!!
人には誰だった人権と言うものがあります!!それを親だからって
ないといえることはありません」

ソラは電柱を踏み台にした。

「そんな理屈は」

そのまま、江比に向かって飛び込んだ。

「僕が破壊します!!」

ソラのとび蹴りは江比の腹に当たった。

そのあと、すぐにソラは回転蹴りを江比の顔面を狙った。

江比は吹っ飛びながら壁にぶつかり、気絶した。

ソラは一息はいたあと、あさみを電柱から開放した。

そのあと、からが破けたように彼女の体からはがれていった。

その中からは茶色の髪の毛で、長い髪をした女の子だった。
あさみはすやすやと寝ていた。体の温度も普通の人間のものだ
体には沢山の傷があった。

そしてこれは今付けられたものではない。

「どうやら、SⅠが解けて、普通の人間に戻ったようですね」

ソラはその後、警察と優菜たちに連絡をした。

（そういえば、この子はこれからどうなるのでしょうか）

ソラはいやな予感しか感じられなかった。

第21章続く

第21章 メカニック・スカイ・妹

時間はもう、8時を廻っていた。

場所は警察署の医療室。

そのベットには伊吹あさみが寝ていた。

「どうだ、少女のお目覚めはまだか？」

「いえ、まだです」

熊田の問いかけに朱里が答えた。

ソラはずっと少女のことを見守っていた。

あさみのことは全て話し、父親の江比は別室連れて行かれていた。

「う・・・」

そのときだった、あさみが目覚めだした。

「ここは、どこ？」

「ここは警察署の医療室ですよ」

あさみの問いかけにソラが答えた。

「あなたは、だれ？」

そのとき、あさみがいきなり頭を抱えだした。

「う、うつつつつ」

そして。なにかに耐えているような声を出し始めた。

優菜が止めようとしたが、ソラがそのことをやめると言い出した。

「何でソラ君」

「彼女はいま、自分がやってきたこと、せめてさっきのことは思い出そうとしているのです。自ら進んで」

僕も同じことがありましたから。と、付け加えて少女を見守った。

10分後、あさみはうなり声をやめて、ソラに目を向けた。

「おにいちゃん。お父さんはどこ？」

あさみは全て知ったあと、ソラに問いかけてきた。

なんかいやな予感がする。そんな風に思わせる表情だった。

「大変です！！」

「どうした！！」

一人の警察官が入ってきた。

「伊吹江比さんが舌を噛み、自殺しました！！」

「なに！！」

それは、本当に最悪なことが起こった。

——自殺！？

ソラは啞然しており、あさみは泣きそうな顔をしていた。ただ、我

慢していた。

それを見たソラはそっと彼女を抱いた。

その体はものすごく小さく、少しでも力を入れると、精神ごと壊されそうな体だった。

それでもソラはやさしく声をかけた。

「大丈夫ですよ。大丈夫。だから、泣いていいのですよ。君はまだ子供ですか」

ソラはそれしか言わなかった。

あさみは大声で泣き出した。

ソラは、少女の鳴き声を聞きながら、熊田に言った。

「熊田さん」

「なんだ」

ソラの声はなにかを決心したような声だった。

「あさみちゃんは・・・僕が引き取り、妹として向かいいます。異論は認めません」

それは驚きの言葉だった。

「そ、ソラ君？」

「ソラさん」

「おまえ、バカを言うな！！」

熊田はディスクを叩いた。

それをこのことを伝えに来た警察官が止めた。

「く、熊田警部！―そのことで伊吹からの伝言がありました！―！」
「な、なんだ」

「娘のことはたのむ、長門ソラ。」と

――！！

「わかっています。この子は必ず守ります」

ソラはその言葉の返事をした。

「いいのかソラ」

熊田はソラに言った。

「二言はありません」

「でもソラ君、お金のほうは大丈夫なの？」

優菜が聞いてきた。

「大丈夫ですよ。いままで僕一人暮らしてだし、警察に協力したときの給料はまったく手をつけていませんから」

「まあ、今のお前なら何千万貯金があってもおかしくはないな」

「ソラさん。何年前から警察に協力しているのですか？」

ははは、と言ってソラはごまかした。

しては、ソラはあさみに顔を見た。

あさみはこの会話を聞いていたらしく、もう泣き止んでいた。

「いいですかあさみ、今日から君に新たな名をささげます」

あさみは無言でうなずいた。

「今日からは長門あさみ、僕の妹となるのですよ」

「長門、あさみ」

あさみはつぶやいた。

こうして、結局江比は死んでしまった。

本人は機械になったみたいにボロボロと皮膚とか、腕とか外れていったらしい。

どうやら、自分に無理やりS Iを発動しての副作用だろうとソラは言った。

結局、江比のS Iをともに受けられるのはあさみのみだったらしい。

時間は9時半、長門家。

ソラはあさみに家の中を紹介しようとしたが、もう夜中なので今は明日に必要なことは伝えていた。

「あさみちゃん。部屋はどうします？僕の部屋を中心に隣、迎え、迎えの隣があります」

「お兄ちゃんの隣」

分かりました。

ソラはその部屋を開け、鞆を置いた。

あさみの荷物はあらかじめ警察が引き取っていてくれた。場所もそんなに遠くないので過ぎにもってこれた。

荷物をあさみの部屋になったところに置いた後、リビングに来た。食事はもう取ってある。

ソラは風呂の説明をした後、あさみを風呂に入れた。

その間ソラは電話をし、学校の手続きをした。

話に聞いたところ、彼女は中学１年生。

しかし、中学入学した後、一度も学校に行っていないらしい。

ソラが一番近くにある中学校に電話をしたが、どうやらもうすでに転校の手続きは警察の人がしてくれたいらしい。おかげで一週間後の転校出来ることになった。

夏休みが近いが、少しでも友達を作ってほしいとソラは思っていた。

風呂からあさみが上がってきた後、あさみはすぐに眠りに着いた。

7月2日。木曜日。

学校に来たとたん雪にいろいろと質問されたソラだった。

「で、それで義理とはいえ妹が出来たわね」

雪は納得してくれたらしい。

「私達にとつても妹みたいなもんだよね」

「いいですねそれは、みんな、仲良くしてくださいよ」

優菜が言ったことをソラは同感だった。

「まあ、ソラ君はロリコンでもないから安心感はあるわよね」
「ろ、ロリコン??」

ソラには言っている意味は分かっているらしいがあいからわずの鈍感差だった。

「とりあえず、私達は今日はソラ君の家に行くからね」
「ええ。分かりました」

「早くどんな子がみたいな」

雪は楽しみでしようがないらしい。

「でも、なんでいきなり引き取るうと思ったの?」

優菜が聞いてきた。

「それは、僕と同じに見えたからですよ」
「同じ?」

「そうです。天涯孤独の身です」
「あ、そうか。ごめん」

気づいた優菜は謝ってきた。

「いいですよ。僕は慣れっこですから」

ソラのこの言葉には重さが架かっていた。

そう、そういうことはこの言葉で何度もいじられてた。

それもそれは悪いほうで使われていた。

「まあ、彼女と僕が違ふところもありますが、それでも、今は大切な妹となりましたから、僕は守り続けます」

ソラは言った。

その言葉は重みは感じられなかった。

第21章 終わり

第22章 2人の妹

授業が終わり、優菜たちはソラについてきて長門家へやってきた。家の中に入るとかわいらしい少女が向かい出てくれた。

「あ、お兄ちゃんお帰りなさい。優菜おねえちゃんたちもいらっしやいです」

あさみは以外にも長門家に慣れていた様子だった。

こんにちはとみんな言った。

そしたらあさみは笑顔で返してくれた。

「あさみちゃん。すみませんね勝手に学校言ってしまった。あさみちゃんも来週には学校へ行けるようになりますよ。こんど見学に行きましょうか」

うん。といいながら、あさみは2階へと上がって行った。

「あさちゃん。元気そうだね」

雪が言った。あさちゃんとはもちろんあさみのことだ。

「ええ。元気だなによりです」

そう言いながらソラはお茶の準備を始めた。

「ついでにこのことは雫さんとレンジさんにも伝えました」
「ええ。雫さんも驚いていました」

朱里が言った。

ソラは、2階に顔を向けて言った。

「あさみちゃん。さっきコンビニでお菓子買ってきたので一緒に食べましょう」

そのあと、はぐいと声が聞こえた。

あさみは一階に下りてきた。

「・・・」

しかし、そんなあさみを見て、ソラは別のことを考えていた。

優菜たちが帰ったあと、ソラは2階に入るあさみを呼んだ。

「なに？おにいちゃん」

あさみは聞いてきた。

「あさみちゃん。君はまだ、僕たちの距離を離していますよね」

「・・・!!」

「気づいていないと思いましたか？」

あさみは無言でうなずいた。

そのあと、ソラはあさみの頭を撫でた。

「わかりますよ。自分の知らない世界に連れて行かれる気持ちは僕にも分かります」

ソラは笑いながら言った。

あさみはソラの話を真剣に聞いていた。

「でもですね。君はそんなことを気にしなくていいですよ」

あさみは意外なことを聞いたような顔になっている。

「君はもう僕の妹です。半端な気持ちで長門の姓を渡していません」

ソラは笑顔で言った。

「だから、あさみはここで普通に暮らしていいのですよ。僕に遠慮はいりません」

あさみはうなずいた。

「うん」

「わかったらよし！さあ、ご飯の準備をしましょうか」

「お兄ちゃん。私も手伝う」

ソラは笑顔で答え、一緒に食事の準備を始めた。

次の日。

7月3日金曜日。

ソラの新携帯、「ギア」から、熊田のメールが届いた。

内容は闇影の妹の居場所が見つかったらしい。

放課後になると、ソラと優菜、雪は急いで教室を出た。
だが、そのときだった。

「ちょっと待った!!」

道長が進路をふさいだ。が、

「邪魔です。どいてください」

ソラは一瞬で道長を強制にどけた。
そのあと、優菜、雪も通った。

「おい、まてえええええ!!」

しかし、3人は聞く耳を持たなかった。

近くにいた、香奈が何か感じたらしく心配そうにソラ達を見ていた。

ソラはギアと電動式のヘッドホン型のイヤホン「ヘッドギア」を付けて、熊田と連絡していた。

「で、結局闇影さんの妹さんはどこにいるのですか?」

「ああ、そのことは今から送り出すやつに教えてもらえ」

「分かりました」

投げやりな熊田に呆れてソラは通信を切った。

どうやら、これ以上のことは聞くのは難しいかもしれない。
そう思っている間に、待ち合わせ場所に着いた。

そこには闇影がいた。

「や、闇影さん？」

「長門君。僕もこの作戦に参加させてもらいたい」

本当に闇影？ソラ達はそう思った。

「や、闇影さん。喋り方」

「うん。もう大丈夫だから」

（あの喋り方は精神的ショックであんなったのですかね？）

精神的ショックの痛みや体の反応は尋常ではない。

精神的ショックで髪が白くなった人がいるケースも聞いたことがある。

（でも、喋り方が変わるのはいったことがありませんね）

ソラは悩みながらも、闇影の動向を許した。

そして、その闇影の妹が捕まっていると思われるところに着いた。

「ここですか？」

「うん。確かにそうだよ」

ソラ達は草むらの中から様子を見ていた。

「特攻する前に作戦を確認しましょうか」

「うん。まず雪ちゃんが水鉄砲であのガラスを割る」

優菜が言い出した。

「そして、その騒動に駆けつけた人を私とゆーちゃんが迎え撃つ」

雪もつられて言った。

「そうしている間に私とソラさんが中に突入する」

「さらにその間に僕が別のところから入り、妹の、一冬架「ふゆか」を連れ出す」

朱里と闇影も言った。

どうやら妹の名前は冬架と言っらしい。

「いいですね。みんな無事にここに戻りましょう。冬架ちゃん。奪還作戦実行です!!」

みんながオーと言う声を上げた。

ここは蒼希家。

香奈がいま帰ってきたところだった。

「ただいまお母さん」

「おかえり香奈ちゃん」

香奈の母親は出かける格好をしていた。

「お母さん。出かけるの？」

「う、うん。ちょっとね」

歯切れの悪い答えが返ってきて香奈は少し心配になった。

「買い物だったら私に言えばいいのに、帰り道によれるから」
「いいの。では行ってきたーす」

そう言つて蒼希母は家を出た。

母の顔は最近少し細くなつてしまっている。
香奈は心配になつてきた。

（お母さん。最近どうしたんだろう）

香奈はずっと考えていた。

第22章 終わり

第22章 2人の妹（後書き）

感想お待ちしています

第23章 闇影妹奪還作戦

小屋の中ではある人たちが話していた。

「おいおい、もう何日この子をここに置いとく気だ？」

1人の太っている男が言った。

「知るか！俺らは金がほしただけだ。それでこの女を面倒が見れるだけで金がもらえるんだぜ」

もう一人は意外と痩せていた。

「おい、交代だ。ちゃんと話し相手をしてやれ」

もう一人の男が部屋から出てきた。

「ああ、わかったよ」

痩せている男が部屋を出て行った。

部屋を入ったそこには一人の中学生ぐらいの少女が縄に縛られていた。

少女は力を絞って喋った。

もう何日ここに監禁されているか分からない。

飲み物は水しか飲んでおらず、食べ物はいくらも与えられていない。

「なんで、こんなことを」

「うるせよ、いいから黙っとけ」

男は少女につばをかけた。

その頃、もう一方の男2人は

「なあ、いつまであの子をここに置いとく気だ」

太っている男が本日2回目の質問をした。

「なに、時期に開放される。死という最高の作品としてな」

「お前のその考えはある意味最高だな」

そのときだった、何かが割れた音が聞こえた。

「な、なんだ？」

「チッもう少しで最高の作品が完成するのに」

そして、ここの部屋のガラスも割れた。
大量の氷柱が襲ってきた。

「な、なんだこれは!？」

「おい、河豚田は見に行つてこい」

「お、おう」

河豚田といわれる男は外に出た。

「第1作戦完了」

「なっ!!」

河豚田はさっきの氷柱を撃った正体が分かり息を呑んだ。

「餓鬼だと」

そこには雪と優菜がいた。

「おじさん。すみません。少し相手してくれませんか？」

雪はにこやかに言った。

——クソッなんだ今の騒ぎは。

細い体をしている男はさっきの騒ぎが気になって部屋を出た。
そして、そこにいたある人物に目をやった。

「お前は誰だ？」

「お前に答える気はねえ。いますぐ妹を、冬架を返せ」

そう、闇影がいた。

「おいおい、あの子のお兄ちゃんか、それじゃあ」

2人とも構えた。

「楽しませてくれるのだよな」

男は不適に笑った。

さっきまでリビングにいた男は冬架がいると思える場所に行こうと
していた。が、そこに例の人物が割れたガラスから飛び出てきた。

「貴様は」

ソラと朱里ペアも作戦に移った。

「どうも」

ソラは挨拶をした。

「闇影冬架さんを返してもらいますよ」

「長門ソラか」

その人物はソラのことを知っているらしい。

外では、河豚田と雪、優菜ペアが戦っていた。

河豚田は体術で雪たちを追い込もうとした。

だが、今手合わせをしているのは優菜だ。

鍛え上げられた棒術で河豚田の体術をもろともしなかった。

「なんだこの女!!」

「女の子をなめちゃいけませんよ」

優菜はまったく力勝負はしていない。

逆に力勝負では負けるので、相手の攻撃を全て受け流していた。

優菜の棒術は攻撃するための動きはしてはいない。
相手が体術で攻めたときは棒術は囷に使っていた。

・・・そして本命は。

「・・・!？」

河豚田は地面に殴られた感じに後ろに飛んで行った。

「こ、この尼もSI使いか」

河豚田は始めて知ったようだ。

そして、優菜は河豚田を飛ばしたかというところ、彼女は棒出を使用しているさい。ちよくちよく地面に線を書いていたのだ。

優菜のSIの「線ノ盾」ライン・シールドは発動するとき、地面から生えるように出てくる。この間の速さは0.1秒も満たない。

しかも書くとき円形にしながら書けば発動のときに、筒状のものとなり、相手にダメージが与えられる。

この方法は力がなくとも簡単に相手を吹っ飛ばされるのだが、相手の目線が自分に向かっていてさらに接近しているときでしか使えない。

しかし、河豚田は簡単に引つかかってくれた。

「いいだろう。お前らに俺のSIを見せてやる」

そう言いながら河豚田は叫んだ。

「くらえ！！」「^{ミートボール}肉弾丸」！！」

河豚田はいきなりさらに太りだした。

そのまま転がり優菜を襲った。

「な、なにこれ！？」

優菜は叫びながら避けた。

河豚田はそのまま木にぶつかった。

木は折れて行った。

「チツ逃げやがったか」

折れている木とは反面、河豚田はまったく痛くもないように見えた。

「俺のS I、「^{ミートボール}肉弾丸」は自分の体を弾丸のように硬くするS Iだ
！！」

河豚田は親切に解説までしてくれた。

「肉体強化のS Iね。どうする雪ちゃん」

「そうね、あの転がり結構厄介ね」

優菜は雪と相談した。

「あの破壊力じゃあ私の盾も耐えられないかも」

「やっぱり私が動きを止めるのかなさそうね」

優菜は雪とバトンタッチした。

どうやら雪には作戦があるようだ。

「きてくださいお肉さん」

雪は河豚田を挑発した。

「な、貴様は行っちゃ行けないことを言っただよな」

どうやらこのことは彼にとってタブーだったようだ。

河豚田は上手く挑発に乗ってしまった。

「死ねええええええ！！」

雪は不敵に笑った。

「上手に乗ってくれたわね」

!?

「もう遅い」

雪は持っていた水を全て地面に流した。

「飛んで!!」「水十氷!!」
ウォーターアイス

雪がそう行つた瞬間。

河豚田がちょうど通った道の下から大きなでっぱりが現れた。

この出っ張りは優菜の「線ノ盾」の盾だった。そこに氷が張っていて強化されていた。

河豚田は上空へ行った。

「な、なんだ。ただ打ち上げているだけじゃねえか」

しかし、なぜか廻っているせいか、河豚田は空中で身動きが取れなかった。

いくらS Iが解けようと、体の動きは止められなかった。

河豚田はそのまんま下に落ちて行った。

真下にはさっき打ち上げた氷の柱が立っていた。

「こ、この屁ああああ！！」

河豚田は柱の上に落下した。

落ちてくるとき、下に凸系の物があつたらいくらデブでもひとたりもなかった。

河豚田は気絶した。

雪はその場で座った。

「これで、私達の仕事は終わりね」

「うん。いくら怪我をしてなくても、もう体力と水が余っていないものね」

雪はうなずいた。

「後はソン君たちに任せましょうか」

優菜と雪は願いながら見守りだした。

第23章続く

第23章 闇影妹奪還作戦・分身

小屋の中、そこではソラ達が戦っていた。

ソラは相手の腹に思いつき蹴りを入れた。
だが、そいつはダメージが無いように消えて行った。

「またはずれですか」

周りには男の分身が沢山いた。

「これがあなたのS Iですか」

「そうだ。お前に本物が見破れるかな」

男達は不適に笑った。

数が多いので気持ち悪い。

「S Iを持たないお前では俺は倒せない」

「思ったんですけど、何で僕の名前を知っているのですか？」

「それは営業秘密だ。だが、俺の名は教えてやろう。流川^{ながれかわ}だ。死ぬ
前の覚えている」

流川はまた不適に笑った。

「どうするソラ君」

「参りましたね。これでは僕たちの体力が先に無くなってしまいま
すね」

ソラは考え込んだ。

ソラの「超能力ノ眼」^{スキル・アイ}では、本物は見抜けない。

こうゆうときの本物を見破るのは影はあるないとかがあるがこの分身は全てに影があつた。

つまり、この分身どもを戦っているといずれは本物にたどり着けるかもしれない。

ただ、相手が相手なのでそんなに簡単には行かない。

人数が増えている＝囲まれやすいということであらうには戦えない。

さっき戦つて分かつたのだが、こいつらは実態がありある程度のダメージを食らつたら消える。

と、いうことはあちらからも攻撃が可能と言うわけである。

（なんとか見分ける方法を見つけなければいけませんね）

そう考えていたとき、流川の分身が迫ってきた。

「朱里、僕の後ろで援護お願いします」

「うん」

ソラの言葉に朱里は反応した。

ソラは足技で流川の分身を倒して行つた。

このぐらいの分身ならソラの蹴りで一撃で消えるが、さすがに人数が多い。

朱里も射撃で援護するがこちらも弾に制限があるためむやみには撃

てない。

ソラは倒しながら考えていた。

（普通の分身ならこうむやみに攻撃するのは正当な戦力ですけどなにかおかしいですね）

——まるで、僕らを前に進ませないようにしているような。

「そうか！！」

ソラは何かを思いついたらしい。

「朱里、あのドアに向かって大きな一撃を放ってください。時間は僕が稼ぎます！！」

「は、はい！！！」

朱里は電気を出して新たな銃を作り出した。

ソラは準備の邪魔させないように分身をなぎ倒していった。

「ソラさん！！どいてください！！！」

準備ができた朱里はソラに指示した。

ソラは無言でうなずき道を開けた。

朱里は銃の引き金を引いた。

「はあああああ！！！」

でっかい電気のビーム光線がドアのところまで届いていた。
分身たちも物凄いいきよいで消えて行った。

一瞬誰もいない道が出来、その間にソラはすぐに駆け抜けた。

部屋を抜けると下りの階段があつた。

「流川さん!!」

「き、貴様!!」

下には流川がいた。

ソラは飛び降りてとび蹴りを食らわせた。

「!!」

だが、それも分身だった。

「え!!世界系のS Iではないのですか!？」

そう、ソラはこのS Iを世界系のものだと思っていた。

さっきの部屋ではS Iの反応が物凄くしたのに、いまここはまったくしてはいない。

「どうゆうことですかこれは」

「残念。読みは外れたようだな!!」

階段の上には流川がいた。

もちろん本物が分身かは分からない。

「おまえの仲間はずくにこの有様だ!!」

流川は気絶している朱里をソラの前に出した。

——!!

「朱里に何をしたのですか!!」

「すこし寝させてもらった」

2人はにらみ合った。

「いけ!! 我が分身どもよ!! 俺に最高のアートを見せてくれ!!」

流川は分身に指示を出した。

「いいですよ。すべて破壊します!!」

ソラは階段に乗り出した。

「デジタル・ベルト電子ノ帯」を発動し、階段にまきつけた。

そして、ソラはまるで飛んでいるかのように上の階段へ飛び移った。それだけではなく、壁を利用してジャンプをし、「デジタル・スピア電子ノ針」を分身どもにありつけたけ放った。

着地したあとも集中はきれず、襲い掛かってきた分身に蹴りを入れてなぎ倒して行った。

（やっぱり人数が多いですね）

この調子ではやっぱり体力切れをしてしまう。
この人数相手に、一回でも怯んだら終わりと考えてもおかしくはない。

（これははつきり言ってやばいですね）

しかし、ソラの集中はまったく切れていなかった。

——私は弱い。

私は自分の心の中でそうつぶやいていた。

——今だって何の役にも立っていないのに気絶しちゃって。

私も力がほしい。もう足手まといはいやだ！！

私はゆういつの攻撃系のS Iを持っているのにここで迷惑はかけたくはない！！

——お願い！！答えて私のS I！！

そのときだった。私はソラさんのあの時言っていた意味が分かった。そう、それは自分のS Iを知ること。それはただ単に扱うだけではなく自分のS Iを信じることも大切。私はそのことをわかっていなかった。

——お願い！！私と一緒に戦って「サンダー・ウェポン電撃ノ銃装備」！！

そのとき、私はなんだか暖かい気持ちになった。

朱里はいきなり立ち上がった。
そばには誰もいなかった。

目の前には戦っているソラの姿があった。

それを見た後、朱里は何か言い出した。

「恐れる電撃、はじける閃光」

これは、詠唱だった。

「その名の通り、弾き飛ばして!!」

朱里の手に大きな筒型の銃が現れた。

朱里はソラに向かって叫んだ。

「どいてソラさん」

そう言われたソラはビックリしていた顔になっていたが朱里の銃を持っているのを見たらすぐに階段を下りた。

サンダーズ・フラワー
「電撃ノ花火!!」

朱里は叫びながら引き金を引いた。

銃からは大きな光玉が出てきた。

速さはまあまあなほうで分身どもに向かった。

一体の分身に当たる前にその弾に変化が起きた。

弾ははじけて、そのまま電撃の針が沢山の分身にあたった。

その数はさっきのソラの「デジタル・スピア電脳子ノ針」よりも多い。

その名の通りの電気の火花だ！！

これが朱里の詠唱術。

詠唱したことにより前よりも個性的な武器を作り出せる。

「見つけましたよ！！」

ソラは一人の男を見つけた。

「あなたが本物ですね」

ソラは確信があったように言った。

「な、何だと！！」

「驚くことではないでしょう。あなたの分身は攻めると命令していた。なのに、あなただけが逃げていた。これであなたが本物だと分かりました」

ソラはダッシュで流川に向かった。

流川は怯んで動けなかった。

「お、俺のアートが、芸術が」

「自分の欲望に人を巻き込むな!!」

「うるさい!! お前に何が分かる」

「何も分かりませんよ。でもこれはいえる」

ソラは流川の顔面に向かって思いっきりまわし蹴りを入れた。

「迷惑です」

流川は気絶した。

ソラは額を拭いた。

「朱里、大丈夫ですか!？」

「はい。でも、もう電気が無いのもう私は戦えませんね」

「わかりました。僕は闇影さんのところへ行きます」

そう言ってソラは走り去った。

第23章終わり

第24章 空と影

闇影は妹の前で苦戦していた。
理由は明白だ。

闇影のS Iを使用すれば妹が狙われてしまう。
闇影はそれを恐れていた。

そのせいで今はS Iを使っていない。
妹は彼にS Iがあることを知っている。

「なんだこいつ、物凄く弱えええ」

体が細い男の名は道谷^{みちたに}という。

逆に道谷は思う増分にS Iを使っていた。

「しつけない!!」

道谷は柔らかくなっている腕を振って闇影の顔面に当てた。
闇影の顔から血が出てきた。

「これが、お前のS Iか」

「そうだ!! 俺のS Iは「腕^{アーム・ウィップ}ノ鞭」だ!!」

道谷は自慢げに言った。

「そういうお前はS I使いなのに使わねえのはなんでだ」

「あんたらと違い、僕は家族を守らなければならない。それだけだ」

闇影はふらふらになりながらも立ち上がった。
体はもう悲鳴を上げてもいいだろう。

「さあ、これで終わりだ」

道谷は腕を上げた。

そのときだった。

いきなり部屋の壁が壊れた。

道谷は敵にこの部屋を侵入させないように鍵を閉めていたのだ。

穴が開いたところからソラが出てきた。

その怒りの眼差しは道谷に向けていた。

「な、長門君」

「大丈夫ですか闇影さん」

ソラは闇影のそばに来た。

「お前も侵入者か」

道谷は聞いてきた。

「ええ。この人と同じ目的で仲間です」

ソラは道谷の問いに答えた。

「じゃあ、話は早い。さっさと帰ってもらおうか」

「なに言っているのですか。彼女を救いますよ僕は」

道谷は構えた。

ソラも同時に構えた。

「なら、死んでもらおうか！！」アーム・ウィップ「腕ノ鞭」！！」

道谷はソラに向かって腕を振るった。
腕は柔らかくなり鞭のようになっていった。

ソラは体制を低くして避けた。
その後、道谷の足に向かって蹴った。

道谷はバランスを崩していった。
ソラはそのときの隙を見逃さなかった。

道谷の両腕に「デジタル・ベルト電脳子ノ帯」を巻いた。
そのまま引き寄せて道谷の腹を利用して高く飛んだ。

「よくもやりやがったな」

道谷は腹を支えながら言った。

そのとき、闇影の気配が消えた。

「なっ！！」

闇影はソラが生んだ隙を利用して、スネークシャド「浸影」を使用し、影にもぐりこんだのだ。

「あいつ、どこに行った」

「残念ですね。気づいたのはもう遅いですよ」

ソラは天井を利用して壁ジャンプした。

空中で一回転をして、上空回し蹴りの体制に入った。

道谷は避けようとしたが、いきなり出てきた闇影に捕まり、身動きが出来なくなった。

「貴様、どこから湧いてきた」

道谷は叫んだがもう遅い。

ソラは力いっぱい足を振り落とした。

「にがさねえ!!」

と、闇影。

「・・・破壊します!!」

ソラは静かに言った。

「うがああああ!!」

道谷は悲鳴を上げた。

ソラの足は道谷の頭に当たり、気絶して行った。

「これで、終わりましたね」

「冬架!!大丈夫か？」

闇影は冬架のそばに行った。

ソラもその声を聞いて冬架のところへ行った。

「大丈夫です。気絶しているだけです」

「そ、それは良かった」

闇影は安心したのか息を吐いた。
ソラはその場で微笑んでいた。

——本当に良かったです。

病院の入り口、闇影とソラ達は話し合っていた。

冬架ちゃん目は覚ましてはいなく、入院になっている。
でも、月末には眼が覚めるはずだと、お医者さんが言っていた。

「今回は本当にありがとう。長門君、大木さん、冬野さん、倉田さん」

「いいですよ。僕らも助けられて良かったです」

女子3人もうなずいていた。

「でもどうやら、あの3人は「ダイクネス・ロードス暗闇の道人」の一員らしいですよ」

この情報は熊田から聞いたソラだった。

「やっぱり、僕らの名は彼らには知らせられているようですね」

ソラはあごに手を当てて言った。

「だったら速く親玉を見つけなくちゃね」

「そうですね。このままだと、僕らが不利な状況になる一方です」

雪の言葉にソラが反応した。

——こんなこと、速く終わらせないと。

「でも、私達には情報が無さ過ぎます」

朱里が言った。

「まあ、とりあえずです。これから僕らで何とかします。あなたは妹さんの下へ着いていてください」

「ああ、本当にありがとう」

「こちらこそ」

闇影とソラは握手した。

長門家。

ソラはあさみに怪我を見てもらった。

「よかったね。その人を救えて」

あさみが言ってきた。

「ええ。本当ですよ」

「でも、壁を蹴り破るなんて無茶すぎです」

ソラの左足にはシップが張っていた。
どうやらこの足で壁を破ったらしい。

「はは、鍵が閉まっていたので直感的にやっていました」

ソラは申し訳なく言った。

「でも、明日には直っていると思いますよ」

「すごいよね。お兄ちゃんの回復速度って速すぎない？」

「まあ、そのことは僕にも良く分からないのですけどね」

「やっぱり、その「達人ノ眼」マスター・アイの能力じゃないの？」

「さあ、よくわからないですよ」

あさみが言っているのは左目のことではなく、ソラの目は特別のものとなっている。

その目は、自分の・点を付け加えることで、+能力を付けられることとなっている。

そして、「超能力ノ眼」スキル・アイの進化前の「目標ノ眼」ターゲット・アイもその能力の一つとなっている。

詳しいことはまたいずれ貴会があったら。

「まあ、今日はもう風呂に入って寝ましようか。あさみは先に入っているですよ」

「うんわかったよ」

そう言ってあさみは風呂場へ向かった。

ソラはソファーによかった。

ソラは思わなかった。

次に日から、大事件にあってしまふことを。

第24章 終わり

第25章 暗闇の最後の日

7月4日。土曜日。

足の怪我は治った。

ソラは外をぶらついてきた。

時間は2時。

さつきまではあさみと一緒にだったが、家に帰って来た後、ソラは一人でまた外に出たわけである。

あさみと出かけたのはあさみが通う中学校の見学だった。どうやらあさみは気に入ってくれた。

ソラは歩きながら思った。

——これがS Iが無かったときの自分。

そう思えばソラは一人で入ることは少なくなった。

昔はずっと一人だった。

特に休みの日は誘いが無い限り知人には出会わなかった。むしろ今は家にも人がいる。

もう、寂しくはない。

そんな気持ちでソラにはあった。

——これは少しこの世のS Iに感謝ですかね。

だが、決してソラは自分から他人へとの接触は控えていた。

今までだって、言われるまで自分から積極的に話すことはまったく無い。

今のソラにとって、守るべき存在が出来たのはうれしいことかもしれない。

そう思いソラは道を歩いていたが、そこに知れた顔があった。

「あ、長門君」

蒼希香奈だ。

香奈はソラに気づき話をかけてきた。

「どうも、蒼希さん。どうかしましたか？」

「ううん。見かけたから話しかけてみたの。だめかな？」

「別にいいですよ。こちらも用事はありませんから」

「じゃあ、同じかな」

すっかり意気投合したソラと香奈は一緒に歩き出した。

「長門君は今日はどうしたの？」

香奈がきいてきた。

「ええ。たまに外に出たいと思いましたので」

ソラは思ったことをそのまま口にした。

「蒼希さんは？」

「私は、家に居たくないの。家には親が一生懸命働いているから邪魔したくないから」

ソラはこのことを聞いたとき、この子はいい子だと思った。

「蒼希さんの親は家の中でのお仕事をしているのですか？」

香奈は首を横に振った。

「ううん。最近は何にか忙しいみたいなの。なんかS Iが大きくなったとか、へんなことを言っていたの」

——S I!!

ソラはそのことを聞いたとたん、目つきが変わった。

（まさか、蒼希さんの親はS I関連の人！？）

普通S Iは一般的に公開されていない。

たしか、親の資料を見たところ初めて知ったのはソラの親だった。

（まっってくださいよ。蒼希？）

ソラは何かを思い出そうとした。

漢字が珍しいのですぐに思い出した。

——たしか、お父さん達の助手の名簿に載っていたはず。

親が残したもの、それはいろいろな歴史と資料の山が残されていた。暇なときにソラはそれと呼んでいた。

「蒼希さん。あなたの親に合わせてもらえませんか？」
「え！？」

いきなり言われて香奈は手間取った。

そのあと急に黙り込んだが、すぐに答えを出してくれた。

「うん。いいよ」

そう言っソラ達は蒼希家に向かった。

場所は蒼希家。

香奈が家のドアをあけた。

「ただいま」

香奈はそう言ったが、声は聞こえなかった。
だが、靴があるので中にはいるらしい。

「おじゃまします」

ソラはそう言っ家の中へと入った。

「おかあさん」

香奈はリビングにいる母親を見つけて言った。

「あ、香奈ちゃん。あら？その人は」

蒼希母は香奈を見つけてそう言った。

「お母さん。私のクラスの友達がお母さんに会いたいからって連れて来た」

「お久しぶりです。長門ソラです」

ソラは丁寧にあいさつをした。

その言葉は前にあったような口ぶりだった。

蒼希母は思い出したのか、驚いた顔になった。

「あ、あのソラ君？長門さんの息子さんの」
「ええ」

ソラは冷静に言った。

「そうだったの。まさか本人だったなんて」

ソラの名前はクラス名簿で知っているはずだ。
多分、本人だと思って無かったんだろう。

「・・・香奈ちゃん。あなたはすこし席をはずしてもらえないかしら」

「う、うん」

「すみません。蒼希さん」

ううん、いいよ。と言った後、香奈は2階に上がって行った。

そのあと、蒼希母は真剣な目でソラを見た。

「その様子だと、香奈ちゃんの彼氏ではないようね」
「冗談はいいですから、僕が来たのは理由があります」
「お父さんのこと？」

蒼希母は分かったように言った。
しかし、ソラは首を横に振った。

「父のことではありません。いま起きている事件のことです。あなたもこのことを知っているはずではないでしょうか。元長門研究所の作業員さん」

「・・・良く憶えていたのね」

蒼希母が感心したように言った。

「正確には思い出されたですけど」

ソラは眉一つ動かさずに言った。

「で、今回の事件は私達も絡んでいることははっきり言ってそうよ。でも私は警察に調べたことを伝えているだけ。あなたが関わっていたなんて知らなかったわ」

蒼希母が言っていることは本当のことだ。

金を引き換えに命を張って香奈は親は調べていた。

「それでね。この面白い情報が手に入ったわよ」

「いいのですか？それを僕に教えて」

「いいのよ。なぜなら、あなたにはS Iを持っていないから敵になりようにも無いもの」

蒼希母が行っている事はごもつともだ。

「ありがとうございます」

「いいのよ。で、そのことだけど、親玉の名前が分かったわ」

深刻な空気になって行った。

「名は。事理宗太郎！。だけどその名は仮の名。本名は時亘浩二ときわたらこうじよ」

——時亘浩二——！

「その人の力は知らないけど、危険な人物だとは思っわ」

「ありがとうございます。でもいいのですか？これを知られたらあなたにも危険が」

ソラは心配になって聞いた。

しかし、蒼希母は笑って言った。

「いいのよ。こんなこと覚悟の上よ」

「そう、ですか」

「でも、もしのときは」

蒼希母は深刻そうに言った。

「香奈ちゃんのことをよろしくね」

「分かりました。そうならないことを願っています」

ソラはそう言っただけで席を立った。

「それでは失礼しますね」

その後、香奈は2階から出てきて見送ってくれた。

まだ時間は夕方にもなっていない。
ソラはまだ外をうろつく気だった。

第26章 暗闇の道人の最後の戦いへ

ソラはさつき蒼希母から聞いた情報を歩きながら整理していた。

——時亘浩二——！

彼は事理宗太郎の名を名乗りソラに接触してきたのも少しはわかった。

（なんであの人はあんなことをしてきたのでしょうか）

「おしえてやろうか」

——！！

ソラは前を向いた。

そこには時亘浩二がいた。

——さつきまで人の気配なんてありませんでしたのに。

ソラは少し後ろに下がった。

「何しに来たのですか？」

そのまま聞いてきた。

「簡単だよ。お前が俺の正体を分かってしまったから挨拶にきたんだよ」

「挨拶、ですか」

しかし、ソラは気を抜いてはいなかった。
いつでも戦闘が出来るような構え方をしている。

「いままでの戦い。全部見させてもらった」
「どうゆうことですか」

ソラは問いかけた。

「俺のS Iに決まっているだろうそんなもの」

「やっぱりS I使いですか」

「それはお前が一番知っているのじゃないか」

時亘は悪ふざけで言った。

しかし、やっぱりこの男はソラの左目のことを知っていた。

「あなたは一体なにものですか？」

「安心しろ。お前も見たいな化け物みたいな能力は持っていない。
ただのS I使いさ」

あっさりソラの問いかけを答えていく時亘。

しかし、ハッキリしたところはまったく話していないのはバレバレだ。

2人はにらみ合った。

「だったら試してみるか？」
「え！？」

突然の言葉でソラは意味が分からなかった。

「どういう意味ですか？」
「戦いだよ」

そう言った瞬間、時亘はいきなり目の前から消えて行った。

——！！

「こつちだ」

後ろから声が聞こえた方向にソラは向いたがそこにも居なかった。
再び前を向いたらそこには時亘が居た。

「どうした長門ソラ」

時亘は余裕の表情で言った。
ソラは頭の中で整理をした。

（瞬間的に消えましたよね。まさか「瞬間移動者テレポーターですか！！）

——だけど、ずっとそばに居た気配がしました。まるで、普通に移動したみたいな。

ソラが考えているとき、時亘が話しかけてきた。

「ついに「暗闇ダークネス・ロードスの道人」も俺一人だからな、本気ださせてもらっぞ」

そのときだった。

ソラは時亘の腕に「デジタル・ヘルト電脳子ノ帯」を伸ばした。
これで、彼の能力の秘密が分かると踏んだらしい。

「残念だな」

しかし、また時亘は消えた。

「またですか」

「ああ、まただ」

時亘は次は殴ってきたがソラは予想して避けた。

「どこに来るか計算すれば避けることはできます」

ソラは冷静に言った。

こんなときに、彼の冷静さは頼もしいものである。

「次はこちらから行きますよ！！」「デジタル・ロープ電子ノ縄」！！」

ソラは「縄」を周りに放った。

そのままソラは体後とまわりだした。

「そんなことが俺に通じるとでも」

時亘はまたソラの視線から消えた。

「残念ですね」

時亘がソラの後ろにまわったとき、ソラは言った。

「あなたのS I分かりました！！」

「なっ！！」

「あなたは自分が移動しているわけではありませんね。あなたは自

分の周りの時間を止めていますね」

ソラは根気良く言い放った。

そのあと、時亘は不適に笑った。

「正解だ。長門ソラ。俺のS Iはたしかに時間を止める世界系のS I、タイムズ・ストップバー「時間が止まる世界」だ!!」

——!!

確かに時間を止めると予想したソラだが世界系のS Iだとは思って
いなかったようだ。

ただ、これでなぜに自分たちのことを知っていたのかこれで整理が
ついたようだ。

「いままでのことはほとんどあなたが仕組んでいたというわけですか」

「ああ。その通りさ」

ただ、分かったのはいいが、この能力が厄介なことはソラも分かっていた。

「ただ、もう時間切れだ。俺はほかの用事がある」

「あ、まだ話は終わっていませんよ!!」

ソラが言い終わる前に時亘は消えてしまった。

しかし、ソラはやつが言っていた用事のこと気がになっていた。

そのとき、何かが思い出した。

『でもいいのですか？これを知られたらあなたにも危険が
いいのよ。こんなこと覚悟の上よ』

——まさか！！

ソラは全てのことがつながつたとき最悪のことを予想してしまった。

ソラは走り出した。

目的地はただ一つ。

蒼希香奈の自宅。

ソラは走りながら願った。

どうか、誰もかが無事でいられますようにと。

（もう、誰も苦しめたくは無い。誰も、僕のようにはさせたくは無い）

そんな気持ちを胸にソラは走った。

蒼希香奈は親に言われたので外に出ていた。

親に言われたとおり必需品や全貯金を持っていた。

このときの香奈の親は何かが真剣だった。

まるで、なにか大きな事件が起こりそうな。

（お母さん、お父さん。どうか無事で）

何か分からないが香奈は願った。

「あ、蒼希さん」

ソラが香奈を見つけて声をかけた。

「な、長門君」

「君の親は家に居ますか？」

ソラは単刀直入に言った。

「う、うん。多分」

「ありがとうございます」

「まって」

走り去ろうとしたソラを香奈は声をかけて止めた。

「私も一緒に行く」

香奈の目は真剣でソラには断れなかった。

「分かりました。では、急ぎましょう」

「うん」

ソラには分かっていた。

彼女はなにも知らない。

そのときソラ達是最悪な光景を目にした。

――・・・

ソラはなにも言葉に出来なかった。
隣で香奈が泣いていた。

蒼希家が豪快に燃えていた。

周りの人が非難しつつ消防隊が火を消していた。

「あ、香奈ちゃん。君は大丈夫なのかね」
「と、隣のおじさん」

香奈は話しかけられた。ソラは軽くお辞儀をした。

「おじさん。お母さんは、お父さんは？」
「実は中には誰も居なかったらしい」

——え！？

これはつまり彼らは逃げ切れたと思っていたらしい。

「でも、これは一体」
「すみません。この家が燃える前に誰が通りませんでしたか？」

ソラがおじさんに聞いた。

「ああ、たしか1人の男が通っていたよ」
「分かりました」

ソラは人目がつかないところで香奈を連れて行った。
そして、スタンガンを渡した。

「これを合図した後に最大出力で僕に当ててください」
「え!？」

ソラは無言わずに準備をした。

スキル・アイ・リング
―超能力ノ眼・輪―発動!!

ターゲット・メモリー
L V O ―目標ノ記憶―!!

「な、長門君!？」

香奈はこの眼を見て驚いていた。

ソラは発動した後、指で合図をした。

香奈は最初は手間取っていたがソラは強制に「^{ベルト}帯」を使って撃たせた。

ソラは記憶の世界には言った。

そして1分もせずに帰ってきて叫んだ。

「と、時亘イイイ!！」

ソラは本気で怒った。

第26章終わり

第27章 優菜と炎の紙、再び

優菜と雪、朱里は火事が起きたと聞き、その場所に向かっていった。

「そ、ソラさん」

着いたとき、そこにはソラと香奈がいた。

「朱里に優菜と雪。来たのですね」

「蒼希さんと一緒なのソラ君」

優菜が嫉妬したかの言い方をした。

「燃えたの、私の家なのです」

香奈本人が事情を説明した。

「そんな」

「ソン君。これはやっぱり」

雪がソラに聞いてきた。

「ええ。この火事の主犯は事理宗太郎。いや、時亘浩二です」

ソラはさっき起こったすべてのことを話した。

「そうだったの。やっぱりこの火事はS Iなのね」

「そして、この家を燃やしたのは私さ!!」

上から声が聞こえた。

ソラ達は振り向いた。

そこにはソラと優菜には懐かしい人物がいた。

「お久しぶりね。長門ソラと大木優菜」

「岩尾さん。ですか」

ソラが彼女の名前を言った。そのことで優菜も思い出したみたいだ。

「岩尾ってあのときの」

「知っているのですか？」

朱里が聞いてきた。

「ええ。前に戦ったことがあります。最初は僕を狙っていましたが
そのあと優菜のことも同時に狙っていました」

ソラは岩尾のことを説明した。

「憶えてくれたのね。だったらこのことも憶えているかしら！！」
フレイム・ペーパー
「炎ノ紙」！！」

岩尾は仕込ませていた周りの紙を燃やした。

ソラ達の周りに煙が舞い上がった。

「あなたも忘れていませんか」

ソラの声が煙から聞こえた。

「デジタル・ベルト 電子ノ帯・周りの布」！！」

ソラ達は煙の中から現れた。

「あら、そういえばそんなものあったわね」

岩尾がとぼけた不利を言った。

そんなことは聞いていないソラ達は作戦を考え合っていた。

「ソラ君。ここは私に任せて」

優菜が名乗り出た。

「優菜。危険です。僕も残ります」

「ダメ！！ソラ君は時亘さんを探して！！ここは私一人で」

「でも・・・」

「そうよ無理があるわ」

聞いたことがある声がまた聞こえた。

「雫さん」

ソラが雫を見て言った。

「ソラ君。ここは私と優菜ちゃんに任せて。あなたがあの人を捕まえなきゃだめ」

「雫さん」

「ソラ君行つて」

「優菜・・・分かりました。雪、朱里。行きますよ。蒼希さんも一緒に来てください」

ソラが3人に言った。

「うん!!」

「はい!!」

「う、うん!」

ソラ達はここは優菜たちに任せて走り出した。

「いいの2人だけで」

「いいのよ。前はソラ君に頼ってばかりだったから。いい恩返しだわ」

優菜は岩尾を見た。

「あなたは私達が倒すわ」

雫が言った。

「いいだろう。来い!!」

ソラ達は走り回っていた。

しかし、探そうとは思っていなかった。

「どこに行くのソン君」

「あの人があの目的である場所に行ったのなら次の目的地は一つしかありません」

ソラの言葉は確信があった。

場所はさっきソラと時亘が戦った場所だった。

「来たか、長門ソラとその仲間たちよ」

ソラの予想どおりに時亘がそこにいた。

「時亘さん。何でこんなことを」

「簡単だ。俺の情報を知ったやつだからだ。まあ、結局逃げられてしまったがな」

「でも、いつでも追えると言いたいみたいです」

ソラが分かっているような口ぶりで言った。

「なんで、僕を倒せば終わりなのではありませんか。なのになぜに
関係ない人を巻き込む」

「関係なくは無いです。あいつは警察と組んでいたそれだけ」

「そうだとすると、それは人間が許されることではありません」

ソラが怒鳴った。

「そんな考え、僕が破壊します！！」

「いいだろう。勝負だ長門ソラ！！」

2人とも、共にダッシュした。

「まっってください」

しかし、2人を朱里が止めた。

「ソラさん。ここは私達がやります」

朱里は銃を構えながら言った。

「その通り、ソン君は作戦をそこで考えていて」

雪も水鉄砲を構えていた。

「ちょっと待ってください2人とも!!」

ソラの言葉を聴かずに2人は時亘に向かった。

「残念だ。人も忠告は聞くもんだぜ。お譲ちゃんたち」

時亘は片手を前に掲げた。

——やばい!!

「タイム・ストパー
時が止まる世界」

優菜は岩尾の攻撃を次々に防いでいた。

「貴様ら、なんだ一体」

「余所見はいけないわよ」

雫は岩尾の後ろに回り、水の鞭を当てた。

「クッ!!」

岩尾はギリギリに避けた。

「なんだ。特にあの女はまえとぜんぜん違う」

岩尾は優菜を見た。

さつきも体術で負けを見てしまった。

「棒術なんて覚えていなかっただろう」

「憶えるわよ。強くなりたいから」

優菜は冷静に言った。

「そろそろ終わらせるわよ。優菜ちゃん守備はお願いね」
「はい!!」

優菜が線を引いた後ろに雫がまわった。

「流れる川のように、形とる蛇よ、今こそ復元せよ!!」

雫は詠唱術を唱えた。

「いでよ!!」
水ノ蛇アクア・スネーク「!!」

水蛇のルルが現れた。

「さあ、食っていいわよルル」

ルルは無言で岩尾に向かった。

岩尾はやばいと思い、逃げ出した。

「逃がさないわよ」

岩尾が上手く優菜が書いた円の中に入った。

優菜はそのまま「線ノ盾を発動した。
ライン・シールド

岩尾は身動きが取れなくなった。

「これで終わりよ。ルル!!」

ルルが思いつき岩尾に突っ込んだ。

その後、もちろん岩尾は気絶した。

「警察にこの人を引き渡したらソラ君たちを探しましょうか」

「でも、雫さんはもう体力が」

「そうね。すまないけど優菜ちゃん一人でいってくれるかしら。私は少し休んだら行くわ」

詠唱術は普通にSIを使うよりも体力が消耗する。

「はい!!」

優菜はそう言って走り出した。

「お前が行っても意味が無い。あの人は強い」

岩尾が最後の力を振り絞って言ってきた。

「そんなのやってみなきゃわかりませんよ」

雫は思いつきり腹に蹴りを入れた。

「なんだか、あの子達ならやれそつな気がするから」

雫は見守ろうと思っていた。

第27章 終わり

第27章 優菜と炎の紙、再び（後書き）

キャラ紹介

蒼希香奈

星光高校1年1組 女性 誕生日2月7日

黒髪で紺色が混ざっている髪のショートヘア。カチューシャをしている。

身長156センチ 胸ランクC

普段おとなしく友達もそんなにもいなかった。秋と競えるほどの美人であるがこの性格のため話してくる男子は少ない。

親はソラの親の助手で香奈が不在のとき家を奇襲された。（両親はそのままだこかへ逃げた）居場所がなくなった香奈をソラが引き取り一緒に暮らすことになった。

家事と勉強は得意だが運動苦手である。

生きる道を作ってくれたソラに好意を持っている。

ソラが昔あった少女「詩音」と要旨が似ている。（髪の色や顔に骨格や性格）

ソラと出会ってから少しフレンドリーになり優奈達とも仲がよい。

好きなものは、本、甘いもの（だが甘党ではない）

嫌いなものは、お化けや、不良。

第28章 ソラvs時亘

雪と朱里は地面に倒れていた。

ソラにはなにが起きたのかが分からない。

ただ、一つ思うところがある。

彼は時間を止めるS.I、「タイム・ストッパー時が止まる世界」を使ったのだ。

「雪、朱里！！」

ソラは2人に向かって叫んだ。
だが、返事は無かった。

「さて、後は大将一人だけだな」

時亘はソラに向かって手を向けた。

「そんなことはさせない」

雪が立ち上がり、時亘に氷柱を放った。

「もう遅い」

時は止まった。

ここで動けるのは名前の通り、時亘のみ。

「弱いな。所詮。俺に勝てるやつなどいない」

時亘は用意って雪の体を殴った。

雪には反応が無かった。

「こいつらしい体しているけど、今は関係ない。今はただ目的を果たすのみ」

時亘が雪にとどめの一発を食らわせようとしたとき、誰かに手をつかまれた。

時亘は驚いてそいつを見た。

「間に合いましたね」

そこにはソラがいた。

「き、貴様、何で動ける」

時亘は離れながら聞いた。

「僕も正直良く分かりません。ただ、誰かが僕にこの力をくれたのは分かります」

ソラはそつと左目を触った。

——ありがとう。詩音。

ソラは分かっていたいなかったがたしかにこれは詩音がくれたものだ。しかも、ソラはもともと、時を渡る力がある。

ターゲット・メモリー
・・・目標ノ記憶だ。

彼はこの力で時を渡ることにはなれていた。

そして、この力があれば時亘のS Iなの無効化できる。
ただし、時間は5分のみ。

この間にソラは時亘に勝たなければならない。

「時間がありませんので早めに破壊します」

そう言つてソラは時亘に向かって蹴りだした。

時亘は腕で上手く防御した。

「チッなんでこいつは動けるのだ」

時亘にはなにがなんだか分からなかった。

「分からなくっていいですよ」

ソラは連続に蹴りだした。

「逃がしはしません!!」

ソラの目は仲間がやられた怒りと、自分は何も出来なかった怒りがあつた。

（こいつ、なんて足の力だ）

時亘は苦戦しつつ、避けていた。

ガードしては自分の腕が耐えられない。

ソラはジャンプをし、縦にまわし蹴りを当てようとした。

「逃げないでくださいよ」

しかし、時亘はやばいと思い、回避した。そうしたら、代わりに蹴られた壁が思いっきり壊れた。した。

「人間相手なら手加減できますのに」

ソラは冷静に言っているが目は怒りで満ちていた。

（こいつ、脚力だけならS I使いと対等に戦える力を持っているな）

彼はいままでこの力で戦いぬけてきたと時亘は始めて実感した。見ているより、この力を感じてみるほうが実感というのは沸いてくるものだ。

「さっさと行きますよ」

ソラの攻撃は休むことなく続いている。

彼も戦える時間が少ないことを知っているようだ。

「落ち着けよ」

時亘は一瞬の隙をついて、ソラの足を取った。

——しまった!!

ソラは「デジタル・スピア電子ノ針」を放ち、時亘から逃げようとした。しかし、彼は知らなかった。針は空中で止まってしまった。

「そういうことですか」

ソラは分かったように言った。

「そうだ。この中では俺が王だ。この針ぐらいは止められる」

（飛び道具は、いや。「デジタル・バンド 電子ノ腕輪」の攻撃は全て使えなくなり
ましたか）

ソラは早くもこの状況を把握した。

「て、ことは僕の戦闘法は1択にしか無いというわけですか」
「さすがに把握がはやいな」

どうやらそのとうりらしい。

（1択しかない戦い方で3分も戦えるのは至難ですね）

しかし、やるしかなかった。

「こい、長門ソラ」

言われたソラは時亘の足を狙って回し蹴りをしたが避けられた。

「体術は俺も少しはたしなんでいるんだよ」

時亘もそのまま蹴りだしてきた。

ソラもそれを避けたが、そこで経験の差が出たのか、相手は一回転をし、そのまま裏拳を食らわせた。

首の後ろを殴られたのソラはバランスを崩した。

その隙に時亘はソラの腹に何発かパンチを入れた。

「がっ!!」

ソラはつばを吐いた。

「まだだ」

時亘はとどめに思いっきり膝蹴りを腹に入れた。

「・・・あ」

ソラはその場で倒れた。

「残り、1分半というところか。残念だったな」

「そんなことはないですよ」

ソラは時亘の足をつかみ起きだしてきた。

「だが、そこまでだ」

時亘は容赦なく蹴りだした。

ソラの口から血が出てきた。

「終わりだ、長門ソラ」

時亘は大きく足を上げた。

「こんなところでは・・・負けません!!」

ソラは地面を転がり攻撃を避けた。

「すばしっこいやつだな」

「それはどうも」

ソラはそう言って体制を整えた。

「僕はまだ、負けたくはありません」

「そんなこと、いつまでも言えると思うなよ!!」

時亘は殴りかかってきた。

ソラは足で時亘の腕を止めた。

「はああああ!!」

そのまま、顔面に思いっきり蹴りを入れた。

「まだまだ行きますよ」

ソラはバランスを崩した瞬間を見逃さず、蹴りを入れた。

「なっ!!」

後ろに下がった時亘だが、ソラはそれを読み、一瞬で近づき、腕を取った。

そのまま零距离の膝蹴りを腹に入れた。

「さっきのお返しです」

ソラはさわやかに言った。

しかし、このときとうとう時間切れしてしまった。
ソラは足が動かなくなったことに気づいた。

「はあはあ、どうやらチェックメイトのようだな」

ソラの体はどんどん止まりだした。

第28章 終わり

第28章 ソラvs時亘（後書き）

おおきゆうな
大木優菜

星光高校1年5組 女 誕生日は10月23日

髪はソラより少し長い髪の少女。

身長158体重 胸ランクB

性格はすこしお気楽な感じ。最初ソラと出会ったときは冷静な態度は事件のことで悩んでいたため。

SIの持ち主であるためソラの秘密を知っている。

ソラにある事件から救ってくれたため好意を持っている

頭はそれほど良くなくテストがちがくとソラに勉強を教えてもらっている

お菓子作りは得意でそれなりに器用。絵は上手い。

しかしお菓子作りしか作っていないため普通の料理はできない。

好きなことや物、お菓子作り、ケーキ、嫌いなもの、虫

ライン・シールド
SII線ノ盾

第29章 世界破壊（ワールドブレイク）

僕は心の中で意識が戻った。

「また、来てしまいました」

「こんにちはソラ君」

長い髪の白いワンピースを着た少女が寄ってきた。
そう、この人が詩音。

「詩音。お願いがあります」

「力がほしいのだよね」

「ええ」

「でも、それならもうあげている」

え！？どうゆうことですか！？

「後は自分で知ってね」

そう言って詩音は僕の前から姿を消した。

どうゆうことですか。

僕にはもう手は残ってないはずですよ。

そのとき、僕はあることを思い出した。

——もしかして、さっきの状態がその力の前振りだとしたら。

僕は手を握った。

——やってみる価値はありそうですね。

僕はそのまんま拳を振りかぶった。

「おわった。これで俺の世界に一步前進だ!!」

ソラは完璧に止まってしまっていた。
それを見たとたんに時亘は吠えた。

「長門ソラ、所詮はお前も俺の世界に要らない人物。いや、この世の人間が俺の世界では必要ない!!」

時亘は笑い出した。
そのときだった。

「なんで、そんなことが言えるのですか」

どこからか、ソラの声が聞こえた。
いや、完璧に本人から聞こえた。

「そんな世界は破壊します!!」

そのとき、一瞬にして「タイム・ストップ世界」が解除された。
いや、性格にはその世界が破壊された。

その世界が破壊されたということは、すべての時間は動き出す。

「どうも、時亘さん」

ソラは冷静に挨拶をした。

「貴様、何をした」

時亘は怖い顔で聞いてきた。

「それはご自分で試されたらどうですか」

ソラはにこつと微笑んだ。

「いいだろう！！止める！！」タイム・ストッパー「時間が止まる世界」！！」

時亘が叫び、回りの時間が止まりだした。

「スキル・アイ超能力ノ眼、L V 2・」

ソラは拳を握った。

同時に左目の輪リングの部分が大きくなってソラの目の前に現れた。

「ワールド・ブレイク世界破壊」

ソラは輪リングに向かって殴った。

同時に中心部分がガラスのように割れだした。

それと連動したかのように、周りの時間も動き出した。

いや、世界が破壊された。

「なんだ、その能力は」

「名の通りの技ですよ」

ソラは一回自分の左目を触った。

「スキル・アイ超能力ノ眼・Lv2・ワールド・ブレイク世界破壊」！！。相手の世界系のSIを破壊する能力です！！」

「破壊だと」

「ええ。これでああなたの能力はもう通じません」

しかし、時亘は不適に笑い出した。

「そうか、だとしたらそのガラス見たいのを割る前に止めればいい話だ」

そう言つて時亘はSIを使い出した。

しかも範囲はソラの足元だった。

「甘いですよ」

ソラは拳を握った。

「発動！！」ワールド・ブレイク「Lv2・世界破壊」！！」

前に出てきた輪リングを殴った。

また、中からガラスみたいに割れた。

——バリーン！！

音と一緒に時亘のSIは破壊された。

「な、なんでだ。なぜに俺のSIが発動しているのに動ける」

時亘が動揺しながら言った。

「僕の左眼は次元系の能力を持っているのですよ」

「じ、次元？」

時亘は聞き返した。

「あなたの能力が効かなかったのは理由はただひとつ」

ソラはいったん間を空けた。

「1秒前に力と同時に戻るのですよ。これは4次元の力です」

たしかに、1秒あれば割るだけなら十分ある。

そして、ソラの左眼の次元の力はLv0から使われていた。

そう、過去を知る。それは4次元といってもいいだろう。

「これで、振り出しですね」

ソラは構えた。

「こ、この餓鬼が」

時亘がソラに迫って来た。

「あなたの世界は僕が破壊します！！」

ソラは電柱に「デジタル・ベルト電脳子ノ帯」を電柱に巻いた。

そして、電柱を踏み台にしてソラは空中戦へと持ち込みだした。

「これで、終わらせます」

ソラはとび蹴りの体制に入った。

「そんなの食らうか」

時亘はソラの蹴りをよけた。

その瞬間「時が止まる世界」ワールド・ストップを発動した。

ソラは冷静に対処し始めた。

「Lv2・世界破壊」ワールド・ブレイク

——バリン——！！

ソラは裏拳で輪を割った。

「はあああああ——！！」

時亘はあきらめずにこっちに向かってきた。

「時亘さん。その負けん気は買います。だけど——！！」

ソラは向かい打つように蹴りの体制に入った。

「長門ソラアアアアア——！！」

時亘はほえた。拳を力強く握っていた。

「そんな世界は知らない。時間は動かなくては意味はないのですから」

ソラは時亘の拳を避けた。

「それは、わかってくださいね」

時亘の腹に思いっきり蹴りを入れた。
そのまま倒れていった。

「次は、ちゃんとした野望を持つことを願っています」

ソラはやさしく微笑んだ。

「そ、ソラ君!？」

「優菜。無事だったんですね」

優菜がソラを見つけていつてきた。

「ソラ君。時亘さんは？」

優菜は聞いてきた。

「このとおりです。この人には目的がありました。でもそれはとても残酷的なものでした」

「ソラ君」

「だから、言いました。次は素敵な目的を作ってほしいと」
「本当にそれだといいわね」

優菜とソラは微笑み会った。

「さて、朱里たちを運びましょうか」

「え？朱里ちゃんたちって」

「そこに気絶しているのですが」

ソラは指を刺した。

「あ」

「さて、病院がいいですかね。時亘さんはどうしますかね」

「それは俺が運ばせてくれ」

そこにはレンジがいた。

「レンジさん」

「有無はいわせねえ。俺は結局何も出なかったからな。これぐらいはさせてくれ」

「それではお願いします」

「ああ」

レンジは時亘を担いだ。

「みんな早く起きてくれるといいですね」

2人ともうなずいた。

第29章終わり

第29章 世界破壊（ワールドブレイク）（後書き）

ふゆの
冬野 雪 ゆき

星光高校1年1組 女 誕生日は12月13日

身長161 胸ランクC

6月2日に転入してきた女の子。SIを持っている。髪は青色のストリートロング。

ソラに好意を持っている。彼女のみソラのことをソン君と呼んでいる。彼女が言うにはこっちのほうが呼びやすいし親しみやすいとのこと。

学力はよく料理もできるが絵はへたくそで美術のセンスは0で結構不器用

好きなことや物、動物、お菓子 嫌いなもの、お化けや幽霊

第30章 new family(前書き)

感想お待ちしています。

作者やキャラクターへの応援メッセージや、自分が考えたSIとかもまだまだ募集しています。

第30章 new family

雪と朱里は目を覚ました。

「ここは？」

「一体どこですか？」

「ここは警察署の医療室です。僕らが運んできました」

ソラが2人の顔を覗き込んで言った。

ソラも額に包帯やら、顔に絆創膏とか貼っていた。

「あ、ソン君」

「て、ことは戦いはどうなりました？」

2人は聞いてきた。

「大丈夫。ソラ君が勝ってくれたわよ」

優菜が微笑みながら言った。

「ほ、本当ですかソラさん」

「ソン君さすがだね」

2人はソラに抱きついてきた。

「こ、こら2人とも。やめてください」

いきなりのことだったのでソラは驚いていた。

「まだ、やることは終わっていませんよ。2人とももう体が大丈夫ならついてきてください。優菜もですよ」

そう言ってソラ達は警察署を出た。

「そういえば、あの人はどうなりました？」

朱里が聞いてきた。

あの人とは時亘のことを示しているようだ。

「ええ。あの人はいま警察署の中にいます。多分尋問でもやらされているみたいだと思います」

「でも、まだSⅠは消えないのね」

雪が心配になりながら言った。

「それがですね。なぜか、彼のSⅠは消えていました。正確にいますと「超能力ノ眼・輪」でも、SⅠの反応がまったくありませんでした。まるで消えたように」

ソラが説明した。

「そ、それって一体!？」

優菜も聞いて驚いていた。

「僕にも分かりません。だぶん、やれたときに代償かと思っています。良く分かりませんが」

そう言っているうちに目的地に着いた。

「蒼希さん」

場所は蒼希家の燃え後だった。

香奈が泣きながらその場所にいた。

「な、長門君に、みなさん」

香奈もみんなに気づいたようだ。

ソラは香奈の隣に並んだ。

しかし、ソラは何も言葉が出なかった。

どうやって慰めよう。もしかしたら傷ついてしまつかもしれない。ソラはそんな気持ちだったが、口を開いたのは香奈のほうだった。

「私は、これからどうやって生きればいいのかな」

その言葉は物凄く重かった。

「蒼希さん」

「私、この家もお母さんもお父さんもみんな好きだったのに何で全部消えてしまっているの」

香奈の親は確かに生きているが、身近にいないのは確かだ。

こんなことを15歳の女の子が耐えられるはずが無い。

ソラも、このことを体験したことがある。しかもそれは小3のときだった。

だが、このときは身内が引き取ってくれたために今まで生きてこれたが、彼女にはその身内はいないらしい。

つまり、彼女はいま居場所を失ってしまったのだ。

ソラはそのことを胸が締められるように思うほど良く分かっていた。

「お母さんとお父さんは無事かな」

そして、親の居場所が分からない彼女は更なる重みを感じているはずだった。

「蒼希さん。僕も同じことがありました」

ソラがやつと口を開いた。

「僕も小3のとき両親が亡くなりました。このときは僕は子供だったもので完全に一人だと思っていました」

ソラは香奈のほうに顔を向けた。

「でも、僕は一人ではありませんでした。このあと、祖母が引き取ってくれましたが、中学に上がる頃には他界してしまいましたかが、それでも、あの人は僕に生きるすべを教えてくださいました。僕はそのことに感謝しています」

ソラは続けた。

「そして、祖母が最後に言った言葉は人を助けるでした」

ソラの瞳には涙が出なかった。

「そして、僕はこれから、そしてそのときの代わりとして君に言い

ます」

ソラは微笑みだした。

「蒼希さん。僕の家に来ますか？」

ソラは香奈に手を差し伸べた。

香奈の目から涙が出てきていたが、さらに出てきた。

「い、いいの？」

香奈は聞いてきた。

「ええ。問題ありません」

ソラは微笑み続けた。

「いいですよね皆さん」

ソラは3人に聞いた。

「しょうがないわね。賛成よ」

「変なことしたらだめだからね」

「私も賛成です」

3人は了承してくれた。

「蒼希さんはどうですか？」

ソラは再び香奈に聞いた。

「お、お願いします」

香奈はソラの手を取った。

「だったら今すぐ準備しましょうか。あなたの荷物は警察署にあります」

「え!？」

香奈はソラの言葉に驚いた。

「どうやら蒼希さんの親はSⅠの持ち主みたいです。荷物が蒼希さんの分だけ届いています」

そう言ってソラは香奈の手を引いて歩き出した。

場所戻って警察署。

ソラは熊田に話があるといつてここにはいない。
4人はソラに言われた場所に着いた。

「あなたが香奈ちゃんね。荷物はすべて預かっていますよ」

そこには警官の格好をした女性が居た。

「あなたは？」

香奈が聞いた。

「私はあなたの母親の親友よ。それだからここにあなたの荷物を送ってきたかもしれないわね。それで、香奈ちゃんはこれからどうするの？」

「な、長門君に引き取ってもらいました」

香奈は恥ずかしそうに言った。

「あの子、また引き取ったのね。しかも女の子を2人も」

「ソラさんはそんな人です。困っていたらほっといていられないのでしょう」

朱里が言った。

「それに2人とも頼まれたみだからね」

「え!？」

雪の言葉に香奈は驚いていた。

「蒼希さんのお母さんがソラ君に頼まれたんだって。でも、一緒に住ませてほしいとは言っていないけどね」

優菜はさっきソラが言っていたことを伝えた。

「そこは、ソソ君の個人の決断というわけね」

「長門君」

「みなさん。することは全部しましたので、今日はもう遅いので解散しましょうか」

ソラがこっちに來ながら言ってきた。

「蒼希さんは僕についてきてくださいね」

ソラが微笑みながら言った。

「はい、蒼希さん。着きましたよ」

ソラと香奈は長門家に着いた。

「よ、よろしくお願いします」

「はい！！ようこそ長門家へ」

ダークネス・ロードス
暗闇のの道人編・終了

第30章終わり。続く

第30章 new family(後書き)

くらたあかり

倉田朱里

星道高校1年3組 女性 誕生日11月11日

身長158 胸ランクD

落ち着いていて礼儀のある少女。

頭がよく運動もできるが天然ボケであり、さらにはPCも扱えない。
ある事件を解決した後ソラに好意を持っている。

実は彼女自身も鈍感なところある。

第31章 同棲の始まり

7月5日、日曜日。

朝、ソラは起きた。

昨日の戦いで少し体が痛かった。

頭の傷は少し治っていない。

ソラは着替えて下に下りて行つた。

時間は7時。朝ご飯を作る気でいた。

ドアを開けたとき、ある少女とであつた。

「・・・あ」

「あ、おはようございます香奈」

「お、おはようございますソラ君」

ちなみに香奈の姿は思いつきりパジャマだった。

香奈はあわてて部屋に入った。

（そういえば、香奈と一緒に暮らすことになったでしたっけ）

時間は昨日の夜に戻る。

「ただいま」

「し、失礼します」

なんだか香奈は緊張しているみたいだった。
そこへあさみが玄関までやってきた。

「おかえりおにいちゃん。あれ？そこのお姉ちゃんはだれ？」

「長門君この子が」

香奈はソラに説明を求めた。

「ええ。さっき言っていたあさみちゃんですよ。あさみちゃん。彼女は蒼希香奈。ある事情でこれから一緒に住むことになりました」

あさみはそれを聞いて香奈にお辞儀をした。

香奈も同時にお辞儀をした。

ちなみにソラはここに来る前にあさみのことは香奈に伝えていた。

「さて、まずはこの家の中を紹介する前に、部屋を決めなければなりませんね」

「おねえちゃん！上がって上がって」

香奈はいまだに靴を脱がないでそこに居た。

だが、あさみに言われて靴を脱いで家の中に入った。

そのままソラに着いて行って2階まで上がってきた。

「さて、蒼希さん。部屋はどこにしますか？僕の部屋を中心に、まん前と隣前の部屋がありますよ。ついでに隣はあさみちゃんの部屋です」

ソラは説明した。

香奈はうなずいて早めに伝えた。

「じゃあ、ここです」

香奈がさしたのはソラの部屋の前の部屋だった。

「分かりました」

そう言つてソラはその部屋を開けた。

中は何にも無い部屋だった。

もともと、誰も住む予定は無いように見える。

「そこで少し休んでください。晩御飯と同時にこの家のことを説明しますから、呼んだらリビングへ来てください」

そう言つてソラは部屋を出た。

20分後、ソラは香奈を呼んだ。

香奈はそのままリビングへ行つた。

「これ、長門君が作ったの？」

「ええ。そうですよ」

「お兄ちゃん料理が上手で私も教えてもらっているの」

香奈は感心したように言った。

あさみはもう席についていた。

「それで、この家ではそんなに決まりごとはありません。お風呂も自由に使つてもかまいません」

ソラは席に着きながら説明した。

「明日、荷物が来ますのでそこで部屋とか整理しましょうか」
「うん。分かったよ長門君」

「それでは今日から香奈おねえちゃんはこの家の住人なんだね」

あさみは喜びながら言った。

「うん。あさみちゃんと違って私は居候だけだね」

「それでも、一緒に住むことは変わりはありませんよ。僕たちはほんの少し似ているのですから」

そう。家族がいなくなったこと。

「ありがとう長門君」

香奈は微笑んだ。

「じゃあ、お兄ちゃんも、お姉ちゃんも下の名前で呼んだほうがいいよね」

あさみが提案してきた。

「そうですね。なんかよそよそしいですから」

ソラも賛成した。

しかし、香奈はすこし手間取っていた。

「これからよろしくです香奈」

「う、うんソラ君」

香奈は恥ずかしそうに言った。

そして、時間は元に戻り、昼となった。

「さて、香奈の荷物を整理しますか」

玄関には香奈の荷物が届いていた。

「あ、ありがとうソラ君」

香奈はお礼を言った。どうやらソラも手伝うらしい。

香奈の荷物はそれほど無かった。

普通の女子高生が使う日用品ぐらいだった。

終わったのは2時ぐらいだった。

「お兄ちゃん達おつかれさま」

「あ、あさみちゃんお茶入れてくれたんですね」

あさみはえへへといいながら笑っていた。

新鮮でかわいかった。

そのときだった、ソラに電話がかかってきた。

『あ、ソラ君ちょっといい?』

声の持ち主は優菜だった。

「どうかしましたか?」

『うん。明日からテストだからそれで、ちょっと教えてほしいから』

すっかり忘れていた。

明日から期末テストだった。

「いいですよ」

『うん。じゃあそっちに行くね』

そう言っつて優菜は電話を切った。

「明日テストということで優菜がこっちに来ますがいいですか？」

ソラは2人に言った。

「うん。私は別にかまわないよ」

「優菜おねえちゃんがいるのですか」

どうやら2人は賛成してくれた。

しかし、テストのことはすっかり忘れていたソラだった。

「だけど、テストが終わったらもう夏休みなのね」

香奈が言った。

「そうですね。今度みんなデパートでも行きますか」

「うん」

どうやらこの生活はすぐに慣れそう。

そうソラは思った。

「そつえば私も明日から学校行けるんだよね」

「そうですね、制服来ましたか？」

ソラはあさみに言った。

「うん。大丈夫だったよ」

「そうですか」

ソラは安心した。

「ソラくん！！きたよー」

優菜が言ってきた。

かれこれ、大きな戦いが終わってソラ達は夏休みに入ろうとしていた。

第31章 終わり。

第32章 夏休みまでの日々の始まり

7月6日月曜日。朝。

ソラは起きて着替えた後にリビングへ行った。
そこにはもう先客が居た。

「あ、ソラ君。おはよう」

「あ、おはようございます」

先客は香奈だった。

格好は制服の上にエプロンを着ていた。
どうやら朝ご飯を作ってくれているらしい。

「朝ご飯ですか。わざわざありがとうございます」
「そ、そんなのいいですよ。私が居候させてもらっている身ですから」

ソラはお礼を言った。

それに香奈はテレながら言った。

「それでは僕はあさみでも起こしに行きますか」

そう言っソラはまた二階に上がった。

「あさみ、朝ですよ」

「ふ、フニャ」

ソラはあさみの部屋に入り、起こしていた。
あさみはかわいらしい声で起きてきた。

「今日は香奈が朝ご飯を作ってくれますから、そして今日から学校へ通うのですから起きてください」

「ふ、フニャ」。了解zzzzzz

「二度寝しないでください!!」

結局。あさみはソラに言われるままに起きてきた。

「あ、ソラ君、あさみちゃん。朝ご飯できたよ」

下に下りたらご飯の準備ができていた。

「あ、いい匂い」

あさみがご飯の匂いで眠気が覚めた。

「さあ、食べましょう」

「ええ」

香奈が両手を合わせていった。

「あれ？自転車で行かないのですか？」

登校する時間。

今日はあさみを中学校まで送るために早めに出た。

香奈は前の家では自転車を乗っていたのだがこれからは歩きで行くと言ってきた。

「うん。一緒に行きたいから」

この言葉を言うときの香奈の顔は少し赤かった。

「・・・？」

「早く、お兄ちゃんたち早く行こうよ」

あさみが言ってきた。

中学校について職員室に来ていた。

「では、これでいいですね」

「はい。それではお願いします」

ソラはあさみの担任の先生に話をしていた。

「それでもご立派ですね。そんなに若いのに一人で面倒を見るなんて」

「そうですね。まあ、また一緒に住む人がいますけど」

「そうみたいんですね。でもそれはあなたの担任の先生に説明が大変でしょう」

「・・・あ。」

ソラはそのことを忘れていた。

そう。担任の先生にこのことを説明しなければならない。

「大丈夫ですよ。警察が了承しているから」

職員室から出てソラはさっきのことを伝えた。
香奈は大丈夫だといってくれている。

「そうですよね」

そして星光高校の職員室に来た。
中学校とは正反対のために時間ぎりぎりに着いたので職員室には先生はいなかった。
しょうがなく教室にきたら先生はいた。

「おお、長門。聞いたぞ、蒼希と一緒に住むことになったと、警察から聞いたぞ」

どうやら、警察の人は先生に伝えてくれたらしい。
だが、言った場所は教室の一番前。そんなところで言ったらみんなに聞こえてしまっている。

「な、長門！！貴様どうゆうことだ！」

「な、長門君どうゆうこと」

道長と秋は質問してきた。

事情を知っている雪は啞然としていた。

「蒼希の両親が失踪したから長門が預かることになったと聞いているぞ」

先生が正しいことを言ってくれた。

「あと、中学生の女の子も妹として引きとった事も聞いたぞ」

そして、いらないことも言ってきた。

「長門！！」

クラスの男子全員がソラに押し寄せてきた。

「な、何ですか？」

「お前うらやましいぞ。なんで同年齢のかわいい女子と年下の女の子と同棲なんて！！」

道長が襟をつかんで泣きながら言った。

「泣かないでください」

「冬野もこのことを知っていると聞いたぞ」

「ええ」

いきなり話を振られて雪は驚いていた。

「これは本当ですし、警察には詳しいことは言わないようにと言われてますし、それに」

雪は間を空けた。

「うらやましい」

雪は小さい声で言った。

この声は長門以外の男子全員に聞こえた。

「長門おおおお！！」

全員ほえた。

秋はショックで何も言えなかった。

香奈は顔を赤くしていた。

今日のテストは終わった。

「だめだ。もう終わった」

道長は伏せていた。

「いや、一目めもう絶望しているのかよ」

「まだ、テストは終わっていませんよ。明日もあるわけですから」

「なんだんだよ。お前らのその余裕は！！長門に関してはお前は帰ってからも蒼希と楽しく勉強するのだろ！！」

道長は完全にうらやましがっていた。

「いや、正確には雪も優菜さらには朱里も一緒ですよ」

しかし、ソラの言葉はただ単に火に油を注いだだけだった。

「何でお前ばかりなんだこのハーレム野郎」

「な、なんのことですか？」

「だめだ。長門にはこんなこと言っても通じねえぞ」

進藤はあきれながら言った。

7月7、8日の火水はテストで道長と優菜が奮闘していた。
そして、7月9日木曜日。

「ソラ君。今日は赤点なかったよ」
「それはよかったですね」

放課後、優菜が報告してきた。

「ソラ君なでてなでて!!」
「はいはい」

ソラは優菜の頭をなでた。
もちろん男子生徒はうらやましそうに見ていた。
ちなみに道長はほとんどが赤点だったという。
こうして夏休み前の一番の難関は終わった。

第32章 終わり

第33章 ショッピングと魔獣

7月10日金曜日。

昼休み。

「とうとう、あと少しで夏休みか」

道長が言ってきた。

「そうですね。僕は別に出かける予定はありません」

「じゃあ、いつかみんなで海行くか」

「お、いいな。長門ハーレムも一緒にな」

進藤と道長が言った瞬間、ソラの姿は無かった。

ソラは教室を出てごまかそうとした。

「長門、チョイ待て」

進藤が止めた。

「すみません。ちょっと優菜に話がありまして」

ソラはごまかそうとした。

「お前、泳げないのは知っているんだからごまかせないぞ」

うつと言いながらソラは戻ってきた。

——最悪です。

放課後、長門家。

「ソラ君。そういえばS Iのことだけど、私にもあるの?」

リビングでお茶を作っていた香奈がいきなり家計の計算をしていたソラに聞いてきた。

「そうですね。多分持っているでしょう」

ソラはそう言った。

「香奈の両親はS Iを持っていると言っていました。それなら、遺伝で持っている確率もありますし、なにせ、香奈からは小さなS I反応が見えます」

ソラは説明した。

「それって、いつかは使いこなせることって出来るかな?」

「どうでしょう。僕にはS Iを習得しているわけではないので分かりません」

ソラは香奈の質問にペンを回しながら答えた。

「じゃあ、ソラ君もS I、持っているの?」

香奈が驚きながら言った。

「ええまあ。目標ノ眼が超能力ノ眼になったのはS Iの影響を受けたと思います。それはつまり、自分もそれと同じく影響を受けていると考えてみました」

ソラは思い出しながら説明した。

「結構複雑なものなのねS Iも。はい、お茶」

香奈はソラにお茶を渡した。

ソラは微笑みながら受け取った。

「そういえば、さっきからなに計算しているの」

香奈は疑問に思い聞いてみた。

「ええ。これは明日みんなでデパートに行こうと思っていて、そのときに使えるお金を数えていました」

ソラは言った。

「そ、そんなのいいのに」

香奈は両手を振って断ろうとした。その姿はまるで動物のようかわいかった。

「ははは。いいですよこのくらい。一緒に住んでいるのですから不便なほうが嫌でしょう」

ソラは微笑みながら返してきた。

「もちろんあさみも一緒です」

「そ、そう。だったらあさみちゃんの分だけでも」

「さっそくなので香奈の分でも買っときましょう。もう夏ですので水着も必要でしょう」

「み、水着!？」

その瞬間、香奈の顔は一気に赤くなった。

もちろん。鈍感なソラさんにはその理由は分からなかった。

次の日。

大聖堂のデパートの来ていた。

あさみは物凄く喜びながらデパート中を走り回っていました。

「あさみ、はしゃぎたいのは分かりますが、迷子にならないようにお願いしますよ」

ソラは心配そうにあさみに言った。

ソラの格好は赤のＴシャツに黒の半袖の薄いパーカーに前のチャックを全開に空けたラフな服装に紺のジーパンだった。

「あさみちゃん。デパート初めてらしいからはしゃいじゃっているのね」

香奈が微笑みながら言った。

香奈の格好はノースリーブの白い服で、ミニスカートだ。

あさみは黄色いワンピースを着ている。

みんな完全に夏の服装だった。

はしゃいでいるあさみを連れて洋服売り場に来た。

「おにいちゃん。気に入った服選んでいいの？」

「ええ。いいですよ」

聞いてきたあさみに対してソラは笑顔で答えた。

「本当に私の分までいいの？」

「いいですよ。香奈だってこれからの生活に必要でしょう」

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

それから2時間ぐらいが経った。

今は女子の2人は下着売り場に来ていた。

「あ、お姉ちゃん。意外と胸大きいんだね」

「そ、そうかな？」

ただいまブラ売り場を見ているらしく、香奈は悩んでいるらしい。

実際、香奈の身長は155センチもないのに、ランクはCと、意外と大きかったりする。

「私も大きくなりたいな」

「がんばれば何とかなるよ」

香奈はあさみを励ましていた。

ちなみにソラは売り場の外で待機していた。

そして、あっという間にお昼が過ぎ、ソラ達はデパートを出た。

「さて、買うものは大体買いましたかね」

「うん。ありがとうソラ君」

「この服大切に着るねお兄ちゃん」

2人ともソラにお礼を言った。

そのときだった。

ソラは左目がSⅠ反応をキャッチした。

「2人とも、こっちに来て下さい」

ソラは2人を引きつれて、人気が無いところに来た。

誰もいないことを確かめた後、スキル・アイ・リング「超能力ノ眼・輪」を発動した。

（近くに、魔獣がいますか、なんだかここらへんは魔獣が多いですね）

前回もここで魔獣を戦ったことがある。

しかし、今回は反応を見る限り、地上系の魔獣であることが分かる。

（速さはそんなに早くはありませんね。だったら速さでかく乱させる作戦で行きましょうか）

だが、今回の作戦はソラ1人が行わなければならない。

地元ではないために、優菜たちを呼ぶことは出来ない。

「ものすごく近いですね。2人とも、僕から離れないでください」

香奈たちは首を縦に振った。どうやら状況が理解できているらしい。

（来ます！！）

魔獣が上から突然現れた。

「ヒューマンタイプ人間型の魔獣ですか」

そう。その姿は人間と形が似ており、人間でたとえてみればボディビルダーと同じ体格をしている。
魔獣は腕を振り上げた。

——来ます！！

ソラの予想どおりに魔獣は攻撃をしかけてきた。
バックステップでソラは魔獣のパンチを避けたが別のところで驚く点があった。
それは避けたとき、代わりに殴ったコンクリートの地面が割れていたのである。

「力は相当ありますね」

——だとしたら、捕まるわけには行きませんか！！

ソラは即座に『デジタル・ベルト電子ノ帯』を放った。

だが、魔獣の体からいきなり筋肉みたいな針が体から生えてきた。

「やばい！！」

ソラは一瞬で状況を理解した。
これで、ソラに攻撃の余地がなくなってしまった。

「しまった!!」

魔獣はまたソラに向かって腕を振りかぶった。

そのときだった。

魔獣は何かに殴られたように吹っ飛んでしまった。

「え!?!」

ソラもこれには驚いた。なにせ、殴った人物が意外だった。

「あ、あさみ!?!」

そこにはあさみが立っていた。

「お兄ちゃんをいじめないで!!」

第33章 終わり

第34章 使えないS I

近くの公園でソラ達は休んでいた。

さっきの魔獣はあの一撃で倒された。

魔獣は倒されると灰のようになり消えていく。まるで存在を消されるように。

そして、さっきの魔獣を倒したのはあさみだった。

「あさみちゃん。さっきのは一体なんだったの？」

香奈はただいまさっきの状況にたいして混乱していた。

「わ、私も何が起きたのかわからない」

あさみはジュースを飲みながら言った。

「どうやらさっきには無意識に起きたようだ。」

「多分。見る限り、あさみにはS Iはありません。ただ」

ソラは言ってきた。

「あさみが前にかけられたS Iが体に染み込んでいて、反応はしません。力が少し残っているようです」

「それってどういうこと？」

香奈は状況を理解できていない。

だが、それは当たり前だ。香奈にはあさみがS Iに利用されていたことは伝えていないからだ。

ソラはそこに気づいたので全て香奈に話した。あの時起こった出来

事全部を。

「そんなことが起きたの」

香奈はなんだかショックを受けているように見えた。

「でも僕の左目に反応しないと見ると、あさみはS I関連で狙われることはまず無いと考えていいでしょう。でも、さすがに力を発動するときは弱いですが反応します。そこは気をつけたほうがいいでしょう」

ソラはそう言いながら立ち上がった。

「さあ、みんな帰りましょうか」

帰った後、ソラは自分の部屋で読書していた。
そのとき、ドアに誰かがノックしてきた。

「どうぞ」

ソラがそういつたら入ってきたのは香奈だった。

「ちょっといいかなソラ君」

「S Iのことですか？」

香奈はそう言われたあと、小さく縦にうなずいた。

「ソラ君。私もS Iを使えるようになりたい」

「つまり、そうなるように特訓したいと」

香奈はうなずいた。

「それは無理があります」

「え!？」

「S Iは心の力に等しいものです。その僕もできたらそうしたいです。ですが心の問題を体で解決できると思いません」

そう、ソラも同じ気持ちだった。

S Iを使いにならなければただ、S Iの反応がする人間は生き延びることは難しい。

ただ、ソラ達はそれだけが理由だけではない。

それは、足を引っ張りたくない気持ち。

ソラ達はいまはグループで活動してもいい状況だ。

特に最近は魔獣やS I使いが襲い掛かってくるのが「ダークネス・ロードス暗闇の道人」を含めて多くなってきた。

それはつまりS Iをもつてなければただの足手まといなだけだ。

「そうゆうことで僕にはなんにもできません。残念ですが、これは自分のみの問題みたいなものです。それは君だけではなく、僕もそうです」

ソラはやさしくそう言った。

「そう。ありがとうソラ君。やっぱり相談してよかった」

香奈は一旦残念そうな顔をしたがその後すぐに笑顔でソラの部屋を出て行った。

（ソラ君も同じ気持ち）

複雑だけど、なんだかうれしかった。

好きな人が自分と同じ状況であるからしてそれはそれでうれしい。ただ、このままじゃ自分は邪魔なだけ。

香奈はそう思った。

香奈は自分の部屋に入った。

7月11日。日曜日。

長門家の入り口の前にある少女がいた。

その少女の名は崎野秋。

ソラに恋心を抱く高校1年生。

その秋はただいま長門家のインターホンを押そうか押さないか悩んでいた。

手は押そうとしたり、引いたりしている。それでもう何回目なんだろう。

（は、早く押さなきゃ日が暮れちゃう。さっそくここまできたんだから押さないと。ファイト秋！！）

後ろで友の佐藤と遠山はがんばれと言い続けている。

秋はまたインターホンに手を伸ばした。

「崎野お前何回そんなことしてるんだよ。俺が押してやる」

そう言っていきなり現れた道長がインターホンを押した。

「ちょっと、道長君。いきなり押さないでよ!!」

秋は道長に文句を言った。

「だって何回も同じこと繰り返しているから」

実際、道長と進藤はちよつと前に来ていて秋の動作を見ていた。

「だからってなんか言ってよ!!」

秋は講義している。

「はい」

そうしている間に香奈がドアを開けて出迎えてきた。

「あ、崎野さんたち。来てくれたんですね」

後ろでソラが言った。

だが、とある2名は違うことを考えていた。

（あ、長門君。私服姿カッコいいかも）

だが、しかし。秋は一度ソラの私服を見ているが、そのときの記憶は都合よく忘れていた。

（あ、蒼希の私服ワンピースに合っていてかわいいっす）

道長は感動していた。

「おっす、長門。きたぞ」

進藤は冷静に挨拶した。

「ええ。どうぞ入ってください」

そう言つてソラは全員を招きいれた。

秋と道長はただいま感動中。

家の中に入ったとたん、その感動は大きくなった。

（ここがいつも長門君が生活している部屋か）

（なんか今までと違っていて蒼希が住んでいるだけで違う感動が）

2人ともなんだか違いそうで同じことを考えていた。

「そういえば、長門、例のもう一人の女の子はどうした」

道長が思い出したように言ってきた。

「ああ、彼女なら外に友達と遊びに行きましたよ」

「あさみちゃん。もうお友達が増えてよかったね」

「ええ」

そう言いながら2人はお茶の準備をしていた。

そのあと、すぐにまたインターホンが鳴り響いた。

「だれでしょう。僕が出ます」

そう言つてソラは玄関へ行つた。

ドアを開けるとそこには見慣れた顔があつた。

「やあ、ソラ君」

「遊びに来たぞソン君」

「こんにちはソラさん」

来たのは優菜、雪、朱里といつもの面子だつた。

「3人ともどうかしましたか？」

ソラは聞いた。

「うん。3人生活が上手くいっているか見に来た」

「右に同じ」

「私もそうです」

「そうですか。とりあえず入りましょうか」

かくして、女同士の戦いみたいなものがソラの家で始まつた。

第34章。終わり

第35章 女子たちの家拝見

今日は客が多い長門家だが、家の中では一言も会話がなかった。ソラはただいま台所で飲み物を作っている。

女子は無言でなにか怪しげなオーラを放っていた。

男子2人はそのオーラを感じ取ったのか、足が震えていた。

「な、なんでさっきから無言なんですか？」

ソラはお茶を持ってきながら言ってきた。

そしていかにも鈍感な一言を言った。

「そ、そうだよ。でソン君はどうなの今の生活は？」

雪が気を取り直して聞いてきた。

「ええ。まあちゃんとできていますよ」

「長門君。家事とかどうしているの？」

次は秋が聞いてきた。

ものすごく必死で聞いてきた。

「ええ。一樣、香菜と交代交代で行っています」

「じゃあ、香菜さんが洗い物を担当するときは」

「僕が洗濯するという分担をしています」

朱里の質問を答えたソラだがその答えは言っではいけない気がした。

「洗濯物つてと、言うことは下着も洗っているの？」

佐藤が聞いた。

「え！？じゃあぶ、ブラとかも」

「え！？まあ、そうですね」

ソラは平然に答えた。

だが、香菜の顔はものすごく恥ずかしかったそうで赤くしている。

「な、なんてうらやましい」

道永が泣きながら言ってきた。

こっちは本当に空気が読めない人でした。

「俺だったらその瞬間、握りながらそのひと時をすごす・・・」

そのことを言っている間女子どもは集まってひそひそ話を始めた。
もちろんその内容はさっきの一言にあった。

ソラは呆れて、進藤は笑っていた。

そのことに気づいた道長は部屋の隅っこに蹲った。

「で、長門君の部屋はどこなの？」

秋が気を取り直して聞いてきた。

「じゃあ見ますか？」

そういつてソラは全員を2階に上がるように連れて行った。

2階に上がってすぐそばにあるドアを開けた。

その部屋は掃除がよくできていて、ものすごくきれいだった。

壁際にはほとんど本棚が置いてあり、机が一個置いており、その上にはノートパソコンが置いてあった。ベツトも壁際に置いてあった。

非常に地味といってもいい部屋だがソラの綺麗さがよくわかる部屋だった。

「あいからわず落ち着けそうな部屋ね」

優菜が言ってきた。

もちろん雪も朱里も一度どころか何度も入っている。香菜に対しては何回も入っているものでもある。

「させと、そういえばなんで崎野さんたちは来たのですか？ なにか御用で？」

ソラが本題を聞いてきた。

「それに思ったのですが連絡さえ入れてくれれば向かいに行きましたよ」

「その、あの、番号知らないから」

秋が恥ずかしそうに言ってきた。

「ああ、そう言えばそうでしたね。中学から一緒でしたのに」
「う、うん」

夕方になり、秋たちは帰っていった。

秋はソラと連絡先を交換してご機嫌がよかった。

優菜達はまだ長門家に残っていた。

秋たちには絶対話せないことがあるからだ。

「そうですか。また大聖堂に魔獣が」

ソラは昨日起こったことを説明した。

「とりあえず、魔獣が増えていることは間違いないよね」

雪が言った。

「雪、それはどうゆうことですか？」

「私と雪ちゃん。魔獣と前接触したのよ」

優菜もそのとき一緒だったらしく説明してきた。

「それって一体」

「本当に魔獣が増えてきたようですね。この前私も雫さんと一緒にいたときに襲われましたがなんとか撃退しました」

「あーちゃんも!？」

「やっぱり魔獣が増えてきている」

ソラは考え出した。

「でも、増えただけで実力は強くなかったですね」

ソラはさらっと言った。

「それはそうね」

「問題は一般人に対しての被害です。何とか大きな被害が出ないようにはしないといけませんね」

「じゃあここは私たちが？」

優菜が聞いてきた。

「ええ。僕たちがここは警備しないといけませんね。こうなってくると、S I使いも良からぬことを考えそうです」

「うん」

「そうならならぬように私たちがなんとかしないといけませんね」

朱里もやる気だ。

「これから夏休みに入ります。それを利用してすべての原因を解決させましょう！！」

ソラは言い張った。

「うん！！」

「了解！！」

「やりますよ！！」

3人とも了承した。

「こうなるとやっぱり僕と香菜のS Iの目覚めが必要となります。なので僕らは何とかその解決策を最初に突き止めます。それまでお願いしますね」

第36章 球技大会、選手決め

その日の夜。

「で、ソラ君。使えるようにするって一体何するの?」

「とりあえず、魔獣と戦うのが一番効率が高そうですね」

ソラは考えながらいった。

ちなみにしゃべっているところはリビングであさみもこの話を聞いている。

「まあ、お兄ちゃんが言い分もわかるけど、お姉ちゃんには危険すぎるんじゃないの」

あさみは指摘してきた。

「そこなんですよね。僕は何とかできますが、香奈は戦えるものを持っているませんから。ちなみに香奈。中学のころの体育の成績はなりました?」

体育の成績を聞いたのは、とりあえずいま運動神経がいいのかとりあえずわかる範囲で利いてみたのだ。

「たしか、3だった」

「3……ですか」

「うん。でも、足はそんなに速くないし、どちらかと言うと苦手なほう」

「つまり、授業態度を考慮しての3ですか」

ソラは額を支えた。

「お姉ちゃん。ますます、心配事が増えた気がするよ」
「え！？」

あさみは顔が引きずっていた。

「やっぱり、香奈は僕よりも効率が悪いですが、僕らの戦いを見ていたほうがいいですね」

ソラは思いつたらしく言ってきた。

「それってどういうこと？」

「あさみと似た現象を起こします」

ソラはあさみを指差した。

「お兄ちゃん。私と似た現象って？」

「あなたの力のことです」

あさみは長年、父のS Iの影響を受けてきて、今では今までどうりには行かないがS Iの力みたいな力が出すことができる。

「S Iと言うのは電波みたいなものです。ときには暴走して、周りに被害が受けてしまうこともあります」

ソラが言いたいことは、つまりS Iとはソラが感じ取れたりできる電波的ものが人の体から発生しているのだ。

これを近く感じることで、己のS Iを感じやすくさせることもできるのではないとソラは考えたのだ。

「ですが、やっぱり非常に危険です。その影響を受け続けると、コントロールする前に暴走してしまうことも有るかもしれません」
「下手したら魔獣と同じ現象が起こるかも」

あさみはソラの話を理解していた。

長くS Iの影響を受けていたのか、そのところを理解できやすくなっている。

「そういえば、魔獣ってどうやって生まれるの？」

香奈はいまだに魔獣のことも良く知らなかった。まあ、当たり前だが。

「魔獣というのはS Iを取り組みすぎたり、影響を受け続けた存在のことです」

ソラは説明した。

「僕ら人間と違い、動物はS Iを感じやすいのですよ。とくにS Iは周りの空気と同じ、空気中に散乱しています」

人間はその影響は一切受けないが、動物はもろ受けてしまう。

だが、その動物にもさすがに格差がある。

人間が近くに居るところ動物。たとえばペットとか動物園は影響を受けにくいのだ。

「人間はS Iを取り組みやすくさらに影響が受けにくいですから、それを己の力に代えることはその非常にS Iを体に取り込めて、影響を受けない人間のみがなせるものです」

だが、その反面。野生の動物は魔獣になりやすい。別の日でハイキングに行ったとき。

あの魔獣は園山に生息していたものと考えてもいいだろう。

「魔獣になったらもう、破壊思考か死しかありません」

そう。魔獣になったらもう、暴走と同じ。破壊することしか考えられない兵器と化するのだ。

そして、死ぬとき、あるいは体のS Iが全部抜けたとき、灰となり消えていくのだ。

「それって、生きる道が無いってことじゃ」

「そうですね。暴れたらもう、S I使いの破壊対象です。もう、生きる道はなくなっているのですよ」

「そんな」

香奈は悲しそうに肩を落とした。

「ちなみに人間でも、体にS Iに侵食され、魔獣みたいなことになった人間がいます」

「それって誰？」

ソラは自分を指差した。

「僕です。まあ、小さいころですが、そのときは考えることが失っていましたし、なにせ、何も見えませんでした。ずっと暗闇で」

香奈とあさみは無言でソラの話聞いていた。

「幸い、人間にはS I体制が強いですから、S Iが体内に消えても、灰になることはありませんでした」

ソラは話が終わったのと同時ににこやかに笑った。

「そうか。だからお兄ちゃんはS Iが使えるんだね」
「そうかもしれませんね」

（ですが、僕はそれだけでは無いような気がします）

ソラはそのことを声には出さなかった。

「あ、もうこんな時間ね」

時間はもう午後11時を挿していた。

「あ、本当だ。じゃあ、私は寝るね。お休みお兄ちゃん、お姉ちゃん」

「お休みです。あさみ」

「おやすみなさいあさみちゃん」

あさみが二階に上がったことを確認した後、ソラと香奈は会話を続けた。

「でも、大抵のことでは人間が魔獣化をすることは無いでしょう。ただ、やっぱり、コントロールができるのは時間がたくさん必要ですね」

「うん。わかったわ」

香奈は力強くうなずいた。

「そうですか。じゃあ、僕も部屋に戻りますね」

「うん。私ももうちょっとしたら寝るわ。おやすみなさいソラ君」

「ん。おやすみなさい」

そう言っソラも二階に上がった。

私は一人で明日の弁当の準備をしながら考えていた。

やっぱり、S Iを自分自身でコントロールしようとするのは難しいみたい。

ソラ君に聞いたところ、朱里さんは戦ってる間、コントロールができるようになったらしい。

いや、実際は身について、すぐにコントロールできたとか。

「うらやましいな」

私はボソツと言った。

朱里さんみたいに私も協力してみたい。ソラ君の力になりたい。だけど、今はその力が無い。

「やっぱりうらやましいな」

私はいつの間に、ソラ君への気持ちは恋心になっていた。

それは、優菜さん、雪さん、朱里さん。そして崎野さんも同じこと。

「がんばらないといけないわね」

私は強く決心した。

そして、握っていたにんじんに手形がついてしまった。
……強く握り締めちゃった。

次の日、7月12日。

夏休みまでもう少しだった。

だが、その前に一つの行事が行われようとしていた。
それは球技大会だ。

「えーそれじゃあ、来週から始まる球技大会の選手を決める」

学級委員のメガネをかけた男子が言っている。

「ねえ。ソン君は何に出るの？」

雪はソラに聞いてきた。

ちなみに種目はサッカー、バスケット、テニス、バレーボールだ。
人数の関係で、2日に渡って開催される。

ちなみに、1日目はバスケットにテニスだ。2日目はサッカーとバレーボール。

サッカー、バレーは男女混合のチームになる。

テニスは人数によってダブルスか、シングルスに決まる。

1クラスに一種目7人か8人ぐらいだ。（1クラス30人で6クラス。だが、1組のみ31人）

だが、バレーは5人で決定で、その分サッカーに人数が行く。
全競技クラス対抗で全試合の得点で優勝クラスが決まる。

「僕はサッカーに出ますよ。雪と香奈は何ですか？」

「私はテニスだよ」

「わ、私もテニス」

ソラはサッカー、香奈と雪はテニスに立候補した。
だがこれはすぐに決まった。

「進藤たちはどうするのですか？」

ソラは進藤と道長に聞いた。

「俺はサッカーだ。よろしくな長門」

「俺のほうはバスケだぜえええ！！」

どうやら、進藤はサッカー、道長はバスケのようだ。

「でもバスケ、いま人数あわせのじゃんけんしていますが」

「Nooooooooooooo！！まてえええええええ！！」

道長はあわててじゃんけんしているグループに集まった。

結果。道長は何とかバスケの選手に決まった。

「サッカーなんかしたら誰かさんのおかげで活躍ができないからな」

「な、なんでこっち見るのですか！？」

「うるせえ鈍感野郎！！」

どうやら道長はサッカーでいやな目に会ったらしい。しかもソラが
らみらしいが本人は自覚が無かった。いや、実際ソラはなんにもし
ていない。活躍しただけで。

「俺は、バスケで天下を取る！！」

第37章 近藤と秋の恋作戦・近藤の気持ち

7月13日火曜日

蒼希香奈は学校内はとも無口だ。

ただ、ソラや優菜たちが話しかけると答えてくれるのだが、それ以外の人特に男子はそっけない返事をする。

香奈はソラが先生に呼ばれて仕事しているあいだ。

そうそう。ソラはよく、先生に仕事を手伝わされている。

ちなみに彼は学級委員ではない。

そのため、ソラがいないときは香奈は読書で時間をつぶしている。雪は優菜と話しているときが多い。

香奈の趣味は読書。だが、結構内気な性格で図書委員に立候補できていない。

家の中と学校の中の香奈はまるで性格が違う。

ちなみに彼女はこのことを狙っていない。

学校でもソラたちと話すときは家の中にいるように話すし、むしろ、そっちのほうが本心だと思いたい。

そんな香奈に恋している男が一人いた。

体系は太めで、身長はソラと少し低い。

そんなにかっこよくもないし、むしろ汗臭い男だった。

名前は近藤誠（こうどうまこと）。クラスは1年2組。

ただいま、近藤は1組の悪友と話をしていた。

しかし、時々、読書している香奈をチラ魅している。

「おまえ、また蒼希さんをみてるだろ」

悪友の一人が近藤に言った。

「おまえ、蒼希のこと好きなのはわかるぜ。顔は上玉だしな」

悪友Bが言ってきた。

「うるせーお前ら、蒼希さんは俺が何とかしても落としてやる」

ちなみに近藤が香奈のことを好きなことは1組も2組も全員が知っていることだ。

あ、前言撤回。ソラのみそのことを知らないというか、気づいていない。この鈍感主人公が！！

「おまえ、告くらねえのか？」

悪友Aが言ってきた。

はたからみればおおきなお世話だ。

「うるせえ」

近藤が椅子にもたれついた。

「こいつ、前大きな声で言ったけど見事に無視されたんだぜ」

悪友Bが笑いながら言った。

そう。近藤は前、香奈に告った。

しかも、教室の中で全員が見ている中でだ。

もちろん香奈は綺麗に無視した。『振られたというのにこの男はい

まだにあきらめていない。

逆に香奈は無視し続けている。

「おれは、いつか蒼希さんを落としてみせる!!」

無駄な努力ですなはい。

ご愁傷様。

その日の放課後。

「それでは香奈帰りましょうか」

ソラは香奈に言った。

香奈は静かにうなずいた。

「私もいくよ」

「私も!!」

雪と優菜もソラに言ってきた。

「じゃあみんなで帰りましょうか」

ソラは笑顔で言った。

下駄箱前。

そこであの男と出会った。

「蒼希さん一緒に帰りませんか」

そう、近藤だ。

今日は一緒に帰ろうと誘ってきた。

「ごめんなさい」

だが、香奈はあっさり断った。

まあ、当たり前だが。

香奈が近藤を通り過ぎた後、悪友AとBが近藤に近づいていった。

「おまえバカだろう。彼女、長門と一緒に住んでいるんだぜ」

「そうそう。しかもどう見たって完全にあいつ長戸のこと好きだろ」

「え！？マジ！？」

どうやらこの男はそのことを知らなかったらしい。

ちなみに香奈が長門のことが好きなことは周りから見ればバレバレだ。

気づいていないのはもちろんソラのみ。

「てか、ルックスも体系もお前は長戸に勝てねえだろ」

悪友Bが止めを言い放った。

「うるせえー」

近藤は泣きながら言った。

そのとき、悪友Aがある少女に気づいた。

「あれ、崎野じゃねえか」

そう、秋が下駄箱でソラたちに見えない位置でいた。後ろには佐藤と遠山もいた。

「おまえ何してんの？ああ、長門のことか」

悪友Aは聞いたのに自分で思い出して納得した。

「うー!!」

秋のはなぜばれたみたいな声を出した。

「いや、普通わかるからね秋ちゃん」

佐藤が感づいて言った。

「で、島田くんたちは何してるの？」

遠山が聞いてきた。

ちなみに島田とは悪友Aの苗字だ。Bのほうは山田。

「俺たちはあのバカの付き添いだ」

島田は近藤を指差した。

「ああ、蒼希さんのことだね」

佐藤がわかつたらしく言った。

「それで、失敗したそうね。帰りのお誘い。残念」

「良くわかったな」

「まあ、秋ちゃんと一緒だからね」

「「「「・・・・・・ハア」「」」」」

近藤と秋の友は一斉にため息をついた。

「なんでため息!？」

「なんか似たもの同士に見えるからやめてよね!！」

「いや、完璧に似たもの同士だろ」

「「「うんうん」「」」

山田の一言に3人ともうなずいた。

2人はツツコむ気もうせた。

「じゃあ、早速なら2人で協力したら!！」

佐藤が提案してきた。

「「はい!？」」

「それはいいな。たしかにそっちのほうが効率がいい。・・・・（面白そうだし）」

島田も納得した。ただ、面白がっていることは確かだ。

「そうね。それはいい提案ね・・・・（面白そう）」

「ああ、それは確かだな・・・・（面白そうなことになりそうだ）」

「そうしようよ。そうしようよ。・・・・（面白くなりそうだ）」

4人とも完全に面白そうと考えていた

しかし、恋は盲目なのか、いや、それは関係ないと思うが2人ともそのことに気づいていない。

「そ、それは確かにそうよね」

「俺はいち早く落としたいからそっちのほうがいいな」

2人とも本心を隠したのかテキトーな理由をつけて納得した。

「あれ！？なにやっているのですか？みなさん集まって」

ソラが話しかけてきた。

「な、長門君！？」

「おまえ、帰ったんじゃないのか？」

秋と近藤が動揺しながら聞いた。

「ええ。教科書もって帰りたいのが無かったので取りに来ました。で、何しているのですか？」

ソラは再度聞いた。

「それは、真美ちゃんたちが呼びとめったからって、いない？」

秋が振り返った瞬間。そこには佐藤たちはいなかった。

「佐藤さんですか？僕は見ていませんが」

佐藤たちはソラが近づいていることをいち早く知ったので隠れたのだ。

「あ、あいつら」

近藤もそのことに気づいた。

「（どうする崎野？）」

「（とりあえずテキトーに誤魔化しましょ）」

2人は目で言葉を伝え合った。

「二人とも、すごく仲がいいんですね」

「な、何よいきなり」

「だって、目で言葉を通わせるって結構仲がよくなかったらできませんよ」

ソラは幾多ものの目での会話を見てきたので、こんな素人の会話はすぐにわかる。

てか、素人なんかあるのかこれは。

「それでは僕はこれで」

そう言ってソラは教室に向かった。

「とりあえず」

「場所を移すか」

第37章、続く。

第37章 近藤と秋の恋作戦・作戦開始！！

次の日、7月14日水曜日。

今日は秋と近藤にとつて大切な日だ。

それは、昨日の夜でそうなった。

前の日、公園。

近藤と秋はソラから逃げるように公園へ来た。

「とりあえず、お前らなぜ逃げた！！」

近藤は悪友2人にがんを飛ばした。

「いや、これは逃げたのではない！！見守ったのだ」

島田が言った。

「お前ら」

「真美ちゃんひどいよ」

秋も佐藤と遠山に言った。

「まあ、それはともかく、これからどうするの」
「瑠璃ちゃん」

秋はしょうがないなと思いつつ話を戻した。

「こうなったらいま作戦を決めて、1日早く、そう！明日実行したわね」

秋が燃えながら言った。

「お、秋ちゃんが燃えている」

「そうだな、それは名案だ！！」

「こ、近藤も燃えている」

「やっぱり似たもの同士ね」

遠山はくすくすと笑った。

「で、具体的にはどうするきだ？」

「そんなの簡単だろう」

近藤は自信満々に言った。

「まずお前らが不良役として蒼希さんを襲い……」

「ちよつとまで！！それは聞いたことあるぞ！！」

山田が止めた。

確かにこれはべたなパターンだ。しかもこの作戦は思いもしない、いや、すぐにわかる落とし穴がある。

「だいたい、蒼希さんのところには長戸がいるに決まってんじやないか」

そう、学校内ではこの作戦を実行するのはバカにもほどがある。だが、外ではいつも晃がその場にいる。

「そ、そうか」

「じゃあ、私が長門君に助けられる作戦は？」

「それだったら秋ちゃんもさらに長門君に惚れちゃうと思うんだけどな」

「あ、そうか」

6人が考えてもなかなか思いつかない。

これは 0×6 を表しているのか、いや、それは言いすぎだが、絶対に $1 + 1 = 2$ には絶対なっていない。まあ、この2人はま0だが。それともこの2人が本当に救いようの無い人かもしれない。

「やっぱり、俺もう一回告白するか？」

近藤が思いついたように言った。

「やめとけ。0・1秒で瞬殺&玉砕決定だ」

島田が冷静に言った。

「すこしぐらい信用しろよ!!」

「」「」「無理無理」「」「」

「全員で言うな!!」

近藤は泣きながらツッコんだ。

「じゃあ、やっぱり長戸と蒼希を何とか別行動させるしかないよな」

山田が言った。

ちなみに近藤は隅っこですんでいる。

「やっぱりそれしかなさそうね」

方法はやっぱりそれしかなかった。

それはこの2人が無能と相手が悪すぎることを表していた。

「だけど、一番難しい」

うーんと全員うなった。

「おい、崎野。お前中学一緒だったんだろ。それだったら長門のこ
と、少しは詳しく知っているのじゃないか」

「バカね。それだったら苦労してないわよ」

「知っているよ」

「そうそう。知っているは……ええ!!」

佐藤はものすごく驚いた。

秋はもちろん不機嫌な顔をしていた。

「真美ちゃん。そんなにおどろくこと無いのじゃないの」

「う、ごめん秋ちゃん」

佐藤は両手を合わせて謝った。

秋は「ま、いいよ」といつて許してくれた。

「まず、長門君はね、誕生日は8月7日で両利き。身長は168センチ、ただいま成長中で体重は54キロ。趣味は読書と機械いじり、好きなものは、本とカツ丼。嫌いなものは変態。前回のテストは現代文96点、数学100、英語96、古典92、地理94、科学98で運動は蹴り系のものが得意で走るのも早くって50メートル走は5秒45。こうしてみると文武平等だけど、力が女子にも負けるほ

ど無くって腕相撲はただいま100連敗以上、で握力も20代（両方）。だから腕を使う力を使う競技は二ガテ。でも脚力は半端なく強くなって、それでね」

（（（（この子怖い））））

秋が一生懸命説明（？）しているが、この場の全員そう思った。実際、秋のこの説明は聞かなくて結構です。

下手したらストーキングしているのじゃないかと思うほどの情報量である。

ぶっちゃけありえない。てか、なぜ腕相撲の連敗数を知っている！！

全員驚きで無言になっていた。

「あ。秋ちゃん。ちょっとストップ」

佐藤が秋を止めだした。

「なに？真美ちゃん」

「秋ちゃん。これ以上はいい。時間が」

「あ！！」

秋はやっと気づいたらしい。

全員ため息を漏らした。

以上、昨日の作戦会議。

これを見てわかるように結果、なにも作戦がないことを表している。わかったとは秋がものすごく怖いことだけだった。

（だが、俺はあきらめない！！レッツチャレンジ）

そう、近藤は香奈が座ってる席に着いた。
ちなみにソラはトイレに行っている。

近藤は読書している香奈に気づかれるような声で言った。

「蒼希さん。好きです！付き合ってください！！」
「ごめんなさい」

・・・・・・・・・・・・・・・・チーン。

結果、0・1秒も持たず、瞬殺&玉砕だった。

ある意味新記録だ。悪い意味で。

香奈は何も気にしないで読書している。

悪友の2人は遠くで笑っている。

クラスの生徒は見てすらいない。もう、こうなることを予想していないのは近藤のみだった。

「あれ？近藤君？何か固まっていますね」

ソラが教室に入ってきて、香奈のところへ来た。

「香奈、何かしましたか近藤君に」

「なにもしていない」

「じゃあ何ででしょうか」

晃は首をかしげた。

その後、悪友2人が固まっている近藤を回収した。

「お前、新記録達成だぞ!!」

山田が行った。

場所は学校の中庭。

「な、なにが？」

「振られた時間。ただいまの時間、0.01秒!!」
「う、うれしくねえー」

近藤は頭を抱えた。

「ぶつちゃけ、蒼希さんも慣れているよな」
「ああ」

「うわーーーーー」

近藤は大声を放った。

「あんた、本当にこりないわね」

遠山が言っ て来た。後ろには佐藤と秋がいた。

「お前らか」

「近藤君、なに珍タイムたたき出しているの」

佐藤が面白そうに行った。

「うるせえ！！お前らのほうはどうなんだよ！！」

近藤は指差しながら聞いた。

「こっちは告白もしないで終わったわよ」

「告白の前提すらねえのかよ！！」

近藤と秋は自分の力のなさに（？）にかっがりした。

「結局、近藤君は何したかったんでしょうか」

「さあ」

ソラと香奈はそうゆう会話が一瞬あったが、すぐに終わった。

第37章。終わり

第38章 ストーカークライシス

7月15日木曜日。

ソラは教室にいた。そのときだった。

「あのーソラ君いますか？」

それは第4章に登場した相川あゆだった。

「あゆ！お久しぶりですね」

「うん。2ヶ月ぶりかな」

あゆはテレながら言った。

「で、今回はどうしたのですか？」

ソラは改めて聞いた。

「うん。実はね」

そう言っであゆはその場から少し横にずれた。

そして後ろから、ものすごく体が小さく、あさみよりも小さい。

身長は145ぐらいで小学生と間違えそうだ。

髪はロングで背中が隠れるぐらいの長さだ。

「彼女が相談あるんだって」

「相談ですか？」

たけなにかえで

「うん。名前は竹中楓で私の幼馴染で同じ5組の子なの」

「どうも」

あゆが説明したら楓はものすごくかわいらしい声でちいさくうなずいた。

もし母性が目覚めていたら気絶するほどのかわいさだ。

「最近、なんかストーキングされているようなの」

「またですか」

「え!？」

「なんでもありません」

ストーキングなら朱里のことがあった。

ソラは息を吐いた。

「てか、それって完璧に変態の類ですよね」

男ならば完璧にロリコンだ。

「本当にそうだとしたら僕、その人の骨2、3本折ってしまうかもしれませんよ」

ソラは怖いことをさらっと言った。

「ソラさん。怖いと言いますね」

あゆは少し怖がっていたが、楓はものすごく怖がっていた。
うーん。かわいい。

ちなみに今はソラの視点ではないのでご注意を。

「まあ、そうじゃなかったらいいのですが。本当だったらまじにですよ」

ソラは変態は嫌いである。オカマなんか人間ではないといっている。

「ソラ君。ロリコンは破壊範囲なんだね」

香奈が話を聞いていたのか加わってきた。

「いえ、ロリコンは別にいいですがあまりにも歳が離れていればさすがに」

つまり、おっさんが小学生が好意的な意味で好きだったらソラがそれを見た瞬間、その人の明日はないだろう。

「でもまあ、そうだとしたらその頼みごと引き受けますよ」

その瞬間、楓の顔がものすごく笑顔になった。

「で、竹中さん。僕らは普通にその変態を破壊、もとい、そのストーカーを捕まえればいいのですね」

絶対にソラはいま「変態を破壊すればいいのですね」と言いそうになっただけ。お、怖い。

「とりあえず、帰りに一緒に帰って詳しく見ましようか」

ソラは手をあごに当てて言った。

放課後。

とりあえず、ソラ、香奈、あゆと楓は一緒に帰っていた。

一緒に帰ってそのストーカーが現れるだろうとこの作戦である。

「で、竹中さんはいつ気づいたんですか？そのストーカーのことは」

ソラは聞いた。

楓は最初、聞かれたときに驚いてたが普通に答えてくれた。

「昨日」

「それはずいぶん急ですね」

「うん。私もびっくりした」

それはそうだろうとソラと香奈は思った。

「だから、そのことはソラさんが頼りになるんじゃないかなと思って。警察の人とも仲がいいですし」

あゆはソラをものすごく信頼していた。

「まあ、香奈が居候の件も警察が絡んでいますから」

ソラはあっさり言うてはいけないことを言うてしまった。

あゆと楓はものすごく驚いた顔をしていた。

「やっぱり、一緒に住んでいるうわさって本当だったんだ」
「ええまあ」

ソラは何も感じないであっさりと言った。

楓は驚いて声が出てきてないように見えた。

「そういえば竹中さん」

ソラは聞いてきた。
だが、返事はない。

「た、竹中さん？」

楓はただいま驚き中。しばらくお待ちください。

「な、何ですか？」

楓は復活した。

「楓ちゃん。大丈夫？」

「ふあい！！」

あ、噛んだ。

あゆの言葉にびっくりしたのか言葉を噛んでしまった奏であった。

「で、なんですか」

楓は改めてソラの話聞いた。

「ストーカーで、あの人は」

ソラはいかにも人影がある電柱に指を刺した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

香奈とあゆは沈黙。

「あ、は、はい」

楓は言った。

どうやら本当にその人、本人らしい。

「あ、あの子、今日もかわいいな」

その声はどう考えても30代の声だった。

「もう、我慢ができーい!!」

そう言つてその男は楓に飛びついてきた。

その姿は本当に30代ぐらいでもものすごく太っていた。

「すみませーん。僕のあるところやこんなところご奉仕してくださーい!!」

男は楓に抱きつこうとした。

だが、今日はやめていたほうが良かったのに。
誰もがそう思った。

抱こうとした瞬間。

男は顔面に蹴りを入れられて、後ろへ吹っ飛んでいった。

「ほほう。いかにもバリバリの変態さんですね」

ソラは下を見ていた。

だが、その分ものすごく怖かった。

「破壊の時間です」

ソラの目はいかにも人を破壊する目だった。

「ぎゃーーーーー！！！」

男の声が響いた。

何されたのは皆さんのご想像にお任せします」

結局、男はソラにふるぼっこにされた。

顔は映っていないが、多分モザイクが掛かっている。

何をさせられたのかはさつきと同じく皆さんのご想像にお任せします」

「これで無事解決です」

「あのおじさんのみ無事じゃないけど」

香奈は言った。確かにそうだった。

「あ、ありがとうございます」

楓はお礼を言ってきた。

「いいですよこのくらい。竹中さんも無事で何よりです」

「あの、楓でいいです。友達はみんなそう言ってくれます」

楓はそういったが完璧に顔を赤くしていた。
これは完璧にあれだった。

「そうですか。じゃあこれからもよろしくです。楓ちゃん」

ソラは背のせいか、ちゃん付けになってしまった。

「はい！！ソラさん」

楓は笑顔で返した。

その日は楓とあゆは一緒に帰っていた。
この二人の帰り道は途中まで一緒なのだ。

「あ、あゆちゃん」

楓はあゆに話しかけた。

「なに楓ちゃん」

「ソラさんって、この背でも受け入れてくれるかな」

楓は顔を赤くしていった。

その瞬間、あゆは楓が言いたいことがわかった。

「楓ちゃん。ソラさんに惚れた？」

「ボン！！」

楓の顔が沸騰した。

「う、うん」

楓は正直に言った。

「じゃあ、私とライバルだね」

あゆは力強く言った。

あゆもあの頃からソラに好意を向けていたようだ。

実際、ソラは忙しく見えたのであゆは話しかけづらかったようだ。

「・・・・・・・・うん!!」

楓は微笑みながらうなずいた。

放課後の夕日が彼女らの赤い顔を照らしていた。

第38章。 終わり

第39章 あさみの同級生

7月16日金曜日。

星皇中学校。

これが、昔ソラが通っていた中学校の名で、いまのあさみの通っている中学校でもある。

その学校の中であさみのクラス1年2組。

「あさみちゃん。今日暇？」

あさみの友達の雲空夕日くもそらゆづひがあさみに話しかけてきた。

「うん。まあ」

あさみは答えた。

「ねえ。思ったのだけど、あさみちゃん家は行けないの？」

あさみは痛いところを言われた。

理由はひとつ。あさみは家族、つまりソラのことは友達には伝えてはいない。

「う、うん」

「そういえば、俺このまえお前のこと見たぞ」

クラスの男子、朝田長治あさだちやうじは、言ってきた。

「なんかこの前デパートで、年上の男と女と一緒に歩いていたぞ」

どうやら彼もその場にいたらしい。

「え！？どうゆうことあさみちゃん」

「長門、まさかやばいことではないよな」

「違うから、私のお兄ちゃんとお姉ちゃんだから」

あさみは一気に言ってしまった。

「え！？あさみちゃんお兄さんとお姉ちゃんいたの！？」

「でも、俺が見ていた様子だと、兄のほうはそうだととしても、姉のほうは違うだろ。会話聞いたし」

どうやらもうごまかすことは難しくなった。

「じゃあ、私、お兄ちゃんに家に友達呼んでいいのか聞いてくるね」

あさみは言った。

で、わけで次の日。

あさみは公園にいた。

結果。ソラは簡単に了承してくれた。

そのわけであさみはここでみんなと待ち合わせしている。

「あ、あさみちゃん」

夕日の声が聞こえたのであさみはそつちに振り向いた。

ちなみに今回来る人数は女子3人、男子2人だ。

その中には長治の姿もある。

みんなもちろんあさみの友達だ。

「それではいきますか。いざ！長門家へ」

そんなことで長門家についた。

「友達呼んできたよー」

あさみはドアを開けてリビングに向けて言った。
そしてすぐにリビングのドアが開いた。

「あ、いらっしやーい」

迎え出たのは香奈だった。

「お邪魔しまーす」

全員挨拶した。

「おい、長治。あの人めちゃくちゃかわいいくないか？」

「だろ、俺も始めてみたときびっくりした」

男2人は聞こえないように話した。

「ソラ君。あさみちゃんが連れてきたわよ」

そういつて香奈は全員をリビングへ招きいれた。
入ったらソラがお茶の準備をしていた。

「どうも、妹がお世話になってます」

ソラは丁寧に行った。

「ど、どうもです」

「それでは僕は部屋に戻りますね。困ったことがあったら言ってください」

そう言っソラと香奈はリビングを出た。

「あさみちゃん。お兄ちゃんすごかつこいいね」
「でしょ。私の自慢のお兄ちゃんだもん」

自信満々にあさみは言った。

「でも、姉のほうも美人だったよな」

「ああ、本当にお前の家族か？特にあの姉のほうは」

「こら！！失礼でしょ！！」

「あはは。実は本当に血が繋がっているわけではないけどね」

あさみは本当のことを言った。

実はこのこともソラには言ってもいいと了解してくれた。

「実はね」

あさみはあのことをすべてい言った。

「そうだったの」

みんな暗い空気になってしまった。

「でも、私はこの生活は好きだからいいの」

あさみは微笑みながら言った。

夜、ソラは部屋にいたがそのとき、メールが来た。
ソラが見た内容はこうだった。

「夏休み中に俺のペンションを貸切にするから、今度遊びに来てくれ！！」

という内容だった。

送り主は中学時代にお世話になった、おじさんのところだった。
今は海でペンションを経営している。

（これは一体何のつもりでしょうか）

だが、断る気はなかった。

人員は入るぐらいの人でいいと書いてあったので今まで会った人たちとの交流にちょうどいいだろう。

ソラはそう思った。

「とりあえず聞いてみますか」

そう言ってソラは自分の部屋を出た。

第40章 夏の球技大会・女子テニス

7月19日月曜日。

夏休みまで残すところ、あと4日となった。
その中の2日は競技大会となっている。

「え！？海で泊り込みで遊べる！？」

ソラと香奈以外のいつものメンバーが言った。

「ええ。皆さんでいきませんか？」

「俺らはいくぜ！！、な、道長」

進藤は道長に言った。

「女の子の水着、女の子の水着」

道長はどす黒い顔でつぶやいていた。なんだか怖い。

「わ、私たちも行っているの？」

佐藤が改めて聞いてきた。

「ええ。3人とも招待いたしますよ」

「で、ソン君。他に誰が来るの？」

雪が聞いてきた。

「一樣、優奈を入れた5組の3人と、あと朱里と雫さんとレンジさ

んも呼びました」

ソラは丁寧と言った。

ちなみにあとの5組の2人は、あゆと楓のことである。

「これで、14人だねソラ君」

香奈は言った。

だがここで話を聞いていたのかある3人が名乗りあげていた。

「おっと。俺たちもその行事に入れてくれ」

近藤だ。ものすごく上から目線で言ってきた。

「で、日時は」

もちろんソラは無視した。

近藤は最初固まっていたがすぐに切り替えしてきた。

「お願いします。連れて行ってください」

思いっきり頭をぶつけて土下座してきた。

これはさすがに無視はできない。

「わかりました。3人ですね」

ソラはため息をつきながらこの3人もメンバーに入れた。

ちなみにもう2人は近藤の悪友2人の事だ。

一人の男は廊下で悩んでいた。

彼の名前は章堂正明。しょうどうまさはる

歩いていると、なんにんかの女子が振り向いてきている。

そう。それぐらい、彼はイケメンなのだ。

だが、彼にも悩みがあった。

（なぜ、なぜこの俺がとりこにできない女がいるんだ！！）

だが、それ以前に性格が糞だった。

そう。彼はものすごいナルシストだ。

もちろんその悩みのしようもなかった。

さらには彼がとりこにしたい女子とは、ソラの恋する乙女たちのことであつた。

ただいまソラに恋する乙女は全員美少女。それも学校で1、2を争うほどのものだった。

だが、その中で誰一人、正明のことは見ていなかった。

そのときだった。一人の美少女が彼も前を通った。楓だ。

彼女もまた、この背からものすごい男子が憧れている少女である。

「そこのお嬢さん。俺との世間話をすこしいですか？」

だが、男性がニガテな楓はおびえていた。

「す、すみません」

楓はびくびくしながらお辞儀をして丁寧に断った。

「あ、そうですか」

そのあと、楓が向かったのは1組でソラの席だった。

「ソラさん。この前はどうもありがとうございました」

一目散にソラとの会話を始めた楓。

正明はものすごく悔しそうに見ていた。

「くそっ、また長門か」

「お前、長門の付きまといっているやつらを落とそうなんて考えているだろう」

正明の幼馴染である長瀬健太ながせけんたが正明に話しかけてきた。

「うるさい！！競技大会で必ず俺はあの子達のハレームを作ってみせる」

正明がこぶしを作りながら言った。

「ちなみにお前が出る競技はなんだ？」

「もちろんサッカーで長門をばる糞にしてやる」

正明がふふふつといいながら笑っていた。

健太はあっそといいながらどこかへ行った。

今日の球技種目は男子はバスケット、女子はテニスだ。
香奈たちは全員テニスなのでソラはもちろん応援に来ていた。

「てか、なんでみんなテニス選んだのでしょうか？バレーニガテで
すかね」

鈍感なソラさんのつぶやきはほつといて試合が始まった。
テニスの人数が多いため、今回はダブルスとなっていた。

最初の試合は、香奈、雪ペアだ。対戦相手は他クラスの生徒だ。
試合が始まり、雪が早くも猛攻！！

香奈はあわあわしていたただけだが、雪がほとんど、いやすべて点数
を取ったので勝利を収めた。

「雪、すごいですね」

「まあ、伊達にS I使いと戦ってないからね」

どうやらS Iが使えるようになると体の身体能力も上がるらしい。

「お、次は崎野さんたちですね」

「秋ちゃん燃えているね」

「はい」

結果。秋は情熱の力で勝ちました。て、なんだこれ？

そんなことで試合はどんどん進んでいった。

次は優奈、楓ペアだ。

もちろん優奈も雪同様の運動神経を持っている。

驚きなのは楓が意外と点数を入れていたことだ。

決して運動神経はいいと思えないが、ラッキー点数が多かった。

これが運を味方につけたものの力か！！

さらに試合は進んでいった。

そして、雪、香奈ペア vs 優奈、楓ペアの対決となった。

「どっちもがんばってください」

ソラはどちらにも応援している。

それぐらいこの2組はいい勝負と言ってもいいだろう。

「はっ！！」

サーブは雪が打った。

その弾を優奈が打ち返した。

だが、雪もすぐに反応して打ち返した。

そぐさま優奈も打ち返すって、これじゃあシングルとほぼ変わらない状態だった。

だが、2人は試合に真剣でそのことを考えている暇はなかった。

「あの2人は一体」

ソラが呆れながら見ていた。

そのとき、雪が動いた。

雪はわざと短めに打ち、バックにいる優奈に届かないように打った。

だが、もちろんそこには楓が控えているわけだが。

楓はびびりながらも打ち返した。

「怖いのはわかりますよ楓ちゃん」

ソラは同情した。

「香奈ちゃん!!」

楓の球を香奈が打ち返した。

だが、その後、優奈が前に出てきて、思いっきり打ち返した。雪も負けていない。

即座にナイスセーブを決めてくれた。

結果。結局奏の体力切れで雪、香奈ペアの勝利に終わり、そのままこのペアは優勝へと運び込んだ。

「おめでとうございます。2人とも」

ソラが2人を出迎えた。

「ソン君くまでてくまでてく」

「はいはい」

ソラは優しく雪の頭をなでた。

雪の顔は気持ちよさそうな猫の顔になっていた。

「あ、雪ちゃんずるい!! ソラ君。私も!!」

優奈もねだってきた。

ソラもそこもはいはいと言って頭をなでた。

「ごめんなさい優奈さん。私の体力がなくなつて」

楓がさびしく頭を下げた。

「いいえ。楓ちゃんも良くがんばりましたよ。ですよね優奈」
「うん。そうだよ楓ちゃん」

ソラは微笑みながら奏の頭をなでた。

「あ、ソン君！！楓ちゃんだけ微笑みながら頭なでてる！！私も」
「」

雪がまた言ってきた。

「ゆ、雪はさつきやりましたよね」
「なんか奏ちゃんと私たちとは雰囲気違ったよね」
「へ！？優奈さん？」

優奈もボソツと言った。
なんか怖い。

「なんかややこしいです」

ソラは肩を落とした。

第40章続く

第40章 夏の球技大会・男子サッカー

次の日、7月20日火曜日。

今日は球技大会の2日目で男子はサッカー、女子はバレーである。ソラはサッカーに出るのでグラウンドに出ていた。

香奈たちは昨日のテニスに出たのでソラの応援に来ている。

「おい長戸。準備はどうだ？」

進藤がソラに聞いてきた。

「ええ。そういえば、今日の道長はどうしたのでしょうか？なんか魂が口から出ているみたいになっているような気がします」

ソラは心配しながら進藤に聞いた。

「ああ、あいつなら昨日のバスケットで、思いっきりカッコ悪い転び方をしたからな」

「ああ、なんかわかりました」

それで、女子に笑われてしまってショック状態になっているのだ。ソラはそのことをわかっていた。

「あと、テニスの試合見れなくて悔しがっていた」

進藤が説明に付け加えた。

「ああ、そのことは予想できていませんでした」

ソラは呆れながらつぶやいた。
進藤も呆れていた。

「まあ、おかげでうちのクラスバスケットは最下位から2番ぐらいだったな」

「でも、テニスは1位でした」

「まあ、これで1位になれば優勝には近くなるな」

ソラは息を吐いた。

「まあ、がんばってみますかね」

靴紐を強く締めた。

「お前がいるならこっちが百人力だな」
「あんまり期待はしないでくださいね」

そんなことで集合の合図がかかった。
ソラと進藤は集合場所に向かった。
そしてそこにはある男の姿があった。

いや、ソラとは違いおかしい妄想を抱いている2人がいた。
近藤と正明だ。

（これで大活躍して蒼希さん。あなたに告白するぜ！！）
もちろん近藤はこんなことを考えていた。
そして正明は。

（これで活躍してすべての女の子をとりこにするぜ！！）

ある意味同じことを考えていた。女の子こと。
だが、この2人は考えていなかった。ソラの実力を。

こうして試合が始まった。

最初の試合は1組vs2組だ。

「うおー俺はやってやるぜー!!」

近藤は思いつき張り切っていた。
理由はソラがいるからだ。

「長門、お前を倒して俺が蒼希さんを落としてみせる!!」
「あー。がんばってください」

ソラは呆れながら答えた。

「試合はじめ!!」

最初は1組ボールだ。

最初からソラにボールが渡った。

「勝負だ長門!!」

近藤がボールを持ったソラに突っ込んできた。

どうやら勝負を挑んできたようだ。

近藤は思いつきボールにめがけてけりだした。
だが、ソラは簡単に避けた。

そのあと、味方にパスを出した。

「早いな。勝負が着くの」

進藤が少し笑いながら言った。

その後、ある意味事件が起こった。近藤にとってのソラはボールを持ち、ドリブルしていた。

「長門ー！！」

また近藤がソラに向かってきた。

ソラはまた簡単に避けた。

その後、ゴールに向かってボールを蹴った。

だが、そのボールはものすごく早く、DFどころか、GKも触れないぐらいな早さだった。

ボールは見事にゴールネットに当たった。

1組先取点。

その後、5対0で1組の圧勝だった。

近藤は完璧に絶望な表情になっていた。

ちなみに点を入れたのはすべてソラだった。

「おーけが人は0か」

「進藤。それはまるで僕のシュートが危険みたいな言い方ですね」

「まあ、そのとおりだからな」

そして、次は正明がいる4組との試合だった。

「君が長門君か。よろしくね」

「は、はあ」

ソラはテキトーに挨拶した。

「長門、あいつには容赦なく顔面ぶつけてやれー」

道長が大声でソラに言った。

だがそのあとすぐに正明の追っかけににらまれた道長であった。

そんなことで試合が始まった。

ボールは1組から。

また早くもボールがソラに渡った。

ソラはそのままドリブルをした。

そのあと、DFに道をふさがれたので味方にパスした。

だが、味方はボールを奪われてしまったが、ソラがまた相手からボールを奪い、味方にパスした。

「長門！！あれいけるか？」

「やってみましょうか」

進藤とソラは短い言葉で会話した。

進藤にパスが渡った。

そのまま進藤はゴールに向かって思いっきり上空へ蹴りだした。4組のゴール前はたくさんの人が集まっていた。

だが、ソラは人一倍たかく飛んだ。

そのまま足を思いっきり上げて上空でボールを蹴った。
ボールはそのままゴールの中へと入っていった。

このゴールは誰も予想してなかったはず。てか、普通はできないが。
まあ見事にスーパープレーを披露したソラだった。

「ナイス！！長門」

「いいパスありがとうございます進藤」

2人は気持ちよくハイタッチした。
ちなみに客席では。

「ソラ君。すごい」

「ソン君。サッカー得意なんだね」

「ソラ君いつもより生き生きしてます」

優奈、雪、香奈が感心しながら言っていた。

「俺だって負けられないぜ！！」

スタートと同時に正明はドリブルを始めた。
だが、油断したのかあっさりソラに取られた。

「くっそ！！」

正明は追ったがなぜかドリブルしている相手。ソラには追いつけなかった。

結果。7対0で1組またもや圧勝！！
次はソラ以外の人もゴールを決めた。

それで、最終結果。

1組全勝の優勝となった。

「ヨッシャー！！ナイスだぜ長門！！」

「長門！！お前サッカー強いんだな！！」

「お前！！サッカー部入ってないんだよな」

クラスの人が長門に言ってきた。

「みんなの役に立ててうれしいです」

そのとき、雪がソラにいきなり抱きついてきた。

「ご苦労様ソン君」

「あ、だからって抱きつきのはなしなんじゃないの」

雪に対して優奈が言った。

「へへ〜ん。早いもんがちだよ」

「じゃ、じゃあ、私も」

楓がソラの腕にくっついてきた。

「あ、だったら私も！！」

「わ、私もです！！」

優奈、香奈もソラにくっついてきた。

「あ、私も私も！！」

とどめにあゆもくつついてきた。

ソラの体はただいまいろんなおおきさの胸が当たっていた。

「くそっ何で長門ばっかり」

「長門の裏切り者」

道長がどこかへ走り去った。

だが、その後すぐに教師に捕獲された。
なにやっているのか。

第40章終わり

第41章 1学期終了

7月22日木曜日。

今日は1学期の終業式だ。

ちなみに昨日は大掃除をやっていた。

式が終わり、みんな教室に戻ってきていた。

「長門。お前は夏休みどこに行くのか？行かないよな」

道長がソラに聞いてきた。

「わかっているのなら聞かないでください」

「やっぱりこいつのみ海に連れて行くのはやめようか？」

「ごめんてば」

道長は夏休みはいるからってお気楽な気持ちだった。

いや、多分次のことに目を伏せておきたいんだと思うが。

「でも、次は通知表をくばわれるのですから、このテンションも下がりますでしょ」

ソラはわざとそんなことを言ってきた。

道長は「うー！」と言いながら動きが止まった。

やっぱり図星である。

「お前、それは完全なる現実逃避だぞ」

「でも、うまく逃避できていませんし」

2人は呆れながら道長に言った。

「うるせー！！成績がいいお前らにこの気持ちがわかってたまるか」

そう言つて道長はドアに向かって走り出した。

「うわーん。進藤のまじめかぶり野郎！！長門のハーレム野郎！！」

道長はそう言つてドアを出た。

てか、ソラに対しては完全なる嫉妬である。

「あいつ、後で殺そう」

進藤がその言葉は言つてほしくないらしい。

あと、道長の命は短いものになった。

「じゃあ、HRはじめるぞ」

そう言つて先生が教室に入ってきた。

「「あ」」

ついでに道長は先生に連行されながら一緒に教室に入ってきた。

そんなことで通知表が返された。

僕は渡された瞬間、先生が思いつき苦笑いしていたのを見た。

先生。それは生徒に失礼なのではありませんか？

だが、どうでもいいことなので僕は聞かなかった。

席についた後、雪が話しかけてきた。

「ねえねえソン君。成績どうだった？」

ちなみに雪は転向してきたので出席番号は最後になっている。

僕は普通に雪に通知表を見せた。

そのあと、雪は驚いた顔になっていた。

「ソン君。本当にこの学校の生徒？」

たしかに、僕の成績はほとんどが4か5だが。あ、ちなみに5段階評価です。

てか、その言い方はこの学校の生徒さんに失礼なのでは？

「ソラ君。そんなに成績良かったの？」

香奈も話しに入ってきた。

香奈は男子たちと話しているときは入ってこないが、雪と優奈と話しているときは話に加わってくる。

「そう言うかーちゃんはもうだったの？」

ちなみにかーちゃんとは雪が考えた香奈のあだ名である。

しかし、それだと自分の母親の呼び方と一緒になりませんでしょうか？

香奈の通知表を見たとき、雪はまた驚いていた。

「かーちゃんもすごいね。さすがだね。やっぱりこの学校の生徒ではないでは」

雪、だからそれは失礼ですよ。

だが、僕はあえて声に出さない。

ちなみに皆さんは覚えているだろうか、雪はあれだってことを。お、そんなこといつている間に雪の名前が呼ばれましたね。

雪は通知表を渡された後、またこちらに戻ってきた。

「どうでしたか雪」

「うんまあまあ、あ、ソン君たちも見てみる？」

僕は雪の通知表を手にとって開いた。

横から香奈が覗いてきた。

「雪ちゃん。これって」

「まったく香奈と同じですよね」

やっぱりそう思いました。

雪は帰国子女なので頭がいいのです。

「じゃあ、私もこの学校の生徒ではないのですね」

「それはこの学校の生徒に失礼ですよ。結構頭がいい高校ですよ」

僕は一瞬、道長を見た。

「一様」

「おい！その一様って俺のことではないよな！！」

聞こえたらしく、道長がこっちに突っ込んできましたね。

「よせ、道長、正しすぎて反抗ができないだろう」

進藤が止めに入った。

いや、あれはただ火に油を注いでいるだけの気がしますが。

「おい、慰めにもなつてないぞ」

「ああ、そうか？」

確信犯ですよね！！

僕はそう思った。

「このやろーお前にバカになる呪い駆けてやろうか！？」

「やめろ、リアルすぎるから」

「お前、マジで言っているよな」

そんな2人の漫才はほつといて、僕らは話を戻した。

「そつえば、雪はどこか旅行するのですか？」

僕は話題を変えて言った。

「いいや、私はどこも行かないよ。例の件もあるしね」

雪が言っている例の件とはつまり魔獣のことですね。

夏休みに入るので僕らも長時間動けることとなるでしょう。

「これからが本当の戦いね」

香奈は張り切っていた。

ちなみに僕と香奈は何とか自分のSIを習得しなければならない。

「かーちゃん。それ打ち切りフラグ」

いや、それはどうでもいいとして。

これからの戦いは本当に今までとは違う戦いになりそう。
僕は感でそう思った。

「何とかしないといけませんね。本当に」

僕はボソツと言った。

「では、今学期最後の挨拶をするぞ」

先生の一言で高校1年の1学期が終わり、夏休みが始まった。

夏休み前日編。 終わり。

第41章 終わり。

第41章 1学期終了（後書き）

次回から夏休み編を投稿いたします。

第42章 夏休みの始まり

7月23日、夏休みが始まった。
天気は快晴だ。

ソラはただいま洗濯をしている。

「いい天気ですね」

ソラはボツソとつぶやいた。

一人暮らしが多かったのか、時々独り言を言ってしまうのはソラの癖でもある。

「ソラ君。洗い物終わったよ」

香奈がベランダから顔を出してきた。

「ええ。わかりました」

「そ、ソラ君」

笑顔で答えたソラだが、香奈はあることに気づいた。

「なんですか香奈」

「そ、それ」

「ん？」

ソラは首をかしげた。だがただいまソラが持っているのは香奈のブラだった。

ちなみにつぶやいているときも手に持っていた。

「どうかしめたか？」

そう言っソラは平然にそのブラを干した。

ソラにとっこのことはどうでもいいことだが、香奈はものすごく意識していた。

「おかしいですネ香奈は」

はははっといいながらソラは洗濯を再開した。

ものすごく意識されなっ香奈は安心と残念な気持ちをした。

昼、ソラは香奈とともに外に出ていた。

魔獣の探索である。

前に魔獣が増えてきた話をしてそれを自分たちで何とかしようとの話をしたのだ。

一様、ほかのみんなにも連絡をした。

「とにかく、僕らは戦って自分のSIを手に入れるしかありませんね。もしかしたら火事場のバカ力になるかもしれませんが」
「うん」

香奈はうなずいた。

「さて、でも見つけるのも結構大変ですね」

そのときだった。

いきなりソラたちの場所が暗くなった。

「危ないです香奈!!」

ソラは危険を察知して香奈を抱きかかえてその場から離れた。その後、何か大きい物体がその場に落ちた。

煙が舞い上がったが、すぐに消えてその正体がわかった。

「魔獣ですね」

そう、魔獣だ。

形は前と似ているが顔的にゴリラが変化したものだ。だが、ソラはそれよりもほかの事に悩んでいた。

（めずらしいですね。魔獣が自分から現れるのは、そういえば）

ソラは前のことを思い出した。

——前もいきなり現れましたね。

だが、そんなことを考えている場合ではない。

魔獣は腕を振り下げてきた。

ソラは横によけた。

（あの腕の攻撃は一撃食らったら終わりですね）

ソラは次は上へ避けた。

魔獣は吠えている。

「だったらその動きを鈍らすだけです」

デジタル・ベルト
ソラは【電子ノ帯】を発動した。
そのまま魔獣を体に巻きつけた。

（大きさはそんなには大きくないですね）

だったら話は簡単だ。

ソラは姿勢を不低くした。

そのまま一回転。

【^{ベルト}帯】が魔獣の足に引っかかり、そのまま倒れていった。
だが、そんなに簡単にはいかなかった。

ソラの腕の筋力ではその落下スピードは遅い。

魔獣は手を着いて体を支えた。

——しまった！！

ソラは【^{ベルト}帯】を切って後ろに下がった。

「どうしたのソラ君」

香奈が聞いてきた。

「いままでの魔獣にはこんなことしませんでした。前にもこの方法は使いましたが同じ速さなのに防がれたことはありませんでした」

ソラはあせりながら説明した。

「魔獣はほとんど暴走しても言うてもいいです。そのため知能には欠けている部分がありますが、この魔獣は違います。まるで暴走はしていない気がします」

ソラはあせりながらも適切な説明をした。

「じゃあ」

「ええ。誰かが操っている可能性はありますね」

ソラは魔獣の攻撃を避けつつ答えた。

「これは一筋縄にはいきませんか」

ソラは左右に手を広げた。

（この方法でいきますか）

——【デジタル・ヘルト・スパイダー電子ノ帯・蜘蛛】！！

ソラの手が隠れるほどに帯が出てきた。

そのままソラの前には【ヘルト帯】で作られた、蜘蛛の巣が現れた。

「さあ、きてください」

ソラは魔獣を誘い込んだ。

だが、たったいま自分で知能があるといっていたのにこのままでは引つかかるわけがない。

「来ないなら引き込むだけです」

ソラは蜘蛛の巣の前に立った。

「いくらなんでも野性の本能はとめられないでしょう。いくら操られていても」

そう、ソラはそれを狙っていた。

魔獣は目の前の獲物に野生のように突っ込んできた。

ソラはぎりぎりまで引き付けていて、【縄^{ロープ}】を使って上に逃げた。ぎりぎりまで引き付けられていたので止まることができない。見事に蜘蛛の巣に引っかかってくれた。

上空にいたソラはその隙に左腕に大量の【帯^{ベルト}】が集まっていた。

デジタル・ベルト
「電子ノ帯！！」

みるみる【帯^{ベルト}】は変化していった。

ウィップ
「鞭！！」

ソラは鞭のように左腕を振り落とした。

ものすごい音が回りに響き渡り、煙が舞い上がった。

煙が引いた後、立っていたのはソラのみだった。

どうやら魔獣は倒せたみたいだ。

「ソラ君！！」

香奈が呼びながらソラの下に来た。

「どうやら、大きな問題ができましたね」

「それって、魔獣が操られていること？」

香奈は聞いてきた。

「ええ」

ソラは歩き出した、香奈はそれについていく。

「たぶん。【ペット・マスター動物使い】ですね。動物を扱うSⅠです」

ソラはすらすらそんなことを言った。

「ソラ君。何でそんなことわかるの？」

「え！？あ、ああ。そうですね。なんででしょうか」

ソラは無意識でそんなことを言ってしまったのだ。

（これも、詩音の力ですかね。でも、こんな技僕は知りませんし）

——まさか、詩音本人の力なのですかね。

ソラは一瞬考えたかすぐにそのことをやめた。

「とりあえず、みんなには連絡しましょうか」

だが、ソラにももうひとつ気になることがあるらしい。

第42章終わり

第43章 誰が守るのか

ソラたちは一度集まってきた。

集まったメンバーはソラと香奈はもちろん、優奈、雪、朱里のいつもの高1のメンバーだ。

「それじゃあ、やっぱり操られているの？」

雪が驚きを隠せないまま聞き返してきた。

「まだ、決定だと言えませんが。後もうひとつ」
「もうひとつですか？」

朱里が聞いてきた。

「もしかしたら、その操っている人の狙いは香奈だと思うのですよ」
「か、香奈さんですか！？」

「ええ。今まで、魔獣が襲ってくることはありませんでした」

ソラは考えながら言った。

「ですが、香奈と一緒にいるときのみ、魔獣からこっちにくる例が多いですよ。いや、はつきり言って100%と言ってもいいでしょう」

ソラは説明を終えた。

「本当にそうだとしたら」

優奈はわかったように言った。

「ええ。香奈には本当に特別なSIを持っていてもおかしくはありません」

そのあと、4人ともうーんといいながら悩んだ。だが。

「ねえ。こう悩んでいても仕方がないんじゃないの？」

雪の一言で沈黙が終わった。

「そうですね」

「とにかく実行あるのみですね。ソラさん。私にも考えがあるので」

「何ですか？」

ソラは話しかけてきた朱里に聞いた。

「よかつたらこれからの戦闘は私たちだけでさせてもらえないでしようか？」

「え！？」

「そうだよソン君。これからの戦い、ソン君の力では何にもできないと思うんだよね」

雪も朱里と同じ意見だそうだ。

「雪」

「ソラ君。ソラ君は香奈ちゃんのそばにいて、そして私たちのそばに、それだけで私たちは安心して戦えるから」

「優奈」

優奈もソラに力強く言ってきました。

「僕は……」

ソラが自分の意見を言う前に、後ろから爆発音が聞こえた。

「『『『『』』』』」

5人は一斉に振り向いた。

そのとき同時にソラの目が反応した。

「S Iの反応!!」

その言葉を言った後、煙の中から人の姿が見えた。

「よし!!これでよし!!」

だが、人は1人ではなく、2人だった。

さっきの台詞を言ったのは20代ぐらいの若き女性だった。

髪は金髪のロングだ。

「よしじゃねーだろ。完璧にお嬢さんたちが驚いてるんじゃないか」

もう一人は30代ぐらいの短髪の男性だ。

「だ、だが、これぐらいしないと意味がない」

「けどな、女性の前ではきれいに登場したいんだよ俺的には」

2人はなんか言い争っている。

5人は意味がわからずその場にいた。

「ほら、驚かれてんジャンか」

そう言つて男性のほうがこっちを見てきた。

そのとき、ソラは背筋が寒くなったのを感じた。

これは体に対する危険を感じてきたことをソラはすぐに感じた。

「みんな！！早く逃げてください！！」

理由は言わず、急いでみんなに叫んだ。

4人はいきなり叫ばれて驚いていた。

「おっと、にがさねえぜ」

そう言つて男は手の平を前に向けた。

「早く！！」

「残念もう遅い」

ソラたちの周りにはいきなりたくさんの剣が浮いてあった。

「ようこそ、ソード・バトルステージ【剣が戦う世界】へ」

男はその場にあつたひとつの剣を取った。

だが、その瞬間、その世界がいきなり割れた。

バリーン！！と大きな音とともに見事に破壊された。

「そう簡単には捕らえられませんよ」

ソラが自身がある一言を言った。

「はっいまのお前やったのか？」

「……………」

ソラはなにも言わなかった。

だが、その無言がはい自分ですと伝えてしまっている。

「おもしろい小僧だなー！」

男はもう一回、【ソード・バトルステージ剣が戦う世界】を発動した。

「スキル・アイ超能力ノ眼・Lv2……」

ソラがそういったとき、左目の輪についている小さな輪が大きくなり、ソラの前に現れた。

「ワールドブレイク……世界破壊！！」

ソラはその輪を思いつきり割った。
その瞬間、男の世界も一気に破壊された。

「面白い能力しているな」

男そっぴいながら後ろに下がった。

「ソラ君。いまのは」

だが、驚いているのは見方のほうもそうだった。

「あとで事情は説明します。いまは早く逃げますよ!!」

そう言っソラはみんなを連れて走った。

「おっと、だから逃がさないぜ。セラ!!」

男がそういった瞬間、セラと言われた女性は前に立ち、右手をあげた。

「…逃がさない」

その手が、いや、つめが光を浴びて大きくなった。

「女の子は傷つけたいようにな」

「無理」

「おい!!」

セラは思いつきりその手を振り下げた。
ものすごい爆風がソラたちを襲った。

「任せて!!」

優奈が前に立ち、ライン・シールド【線ノ盾】発動した。

「なに、防がれた!?!」

セラは驚いていた。

「優奈!!」

ソラたちは優奈のそばに行った。

「大丈夫。みんなは」

「ええ。大丈夫です」

だが、見た目は大丈夫に見えたが、相当の威力のため、ほとんどの体力を失っただろう。

「優奈。下がってください。ここは僕が」

ソラはそう言って前に立った。

「ソン君!!」

雪が叫んだ。

「さっきの話、僕は反対です」

「え!？」

「僕はみんなを守るために戦うのです。そんなみんなに守られては意味がありません」

「ソラさん」

「ソラ君」

「だから、僕はいまここでみんなを守ります!!」

ソラは【スキル・アイ・リンク超能力ノ眼・輪】を発動しながら言った。いや、決意した。

第43章終わり

第44章 夏の戦いの初め・剣と爪

ソラはみんなを先に逃がした。

「おい、セラ尾上ちゃんたちのほうは頼んだぜ」

「まかせた!!」

「まて!!」

仲間が行った方向にセラは進みだした。

ソラはそれを止めようとする。

「待て少年」

「なんですか？」

男はソラを止めた。

「少年は俺と相手してくれや。このまま俺を逃がせば、被害は大きくさせるぞ」

「.....」

「そんな顔するなって少年」

ソラは屈伸しながら男のほうを向いた。

「どうやらセラという女性のほうはみんなに任せるしかなさそうですね」

ソラはあきらめて、いや、仲間を信じた。

「少年。名前は」

「聞くほうの名乗るほうが礼儀と聞きますよ」

「おうおう、言うねー少年。いいだろう。俺の名は寅島竜司だ」

男は先に名乗った。

「長門ソラといいます」

「ほう、少年。ここはいつちよ男同士の戦いに行くか」

竜司は笑いながら言った。

「俺は女性を傷つけることはできないからな」

ソラはさっきまでの竜司の言動を思い出したところ、そのことは確かに本当のことだろうと思った。

「そうだとしたら、僕は早く、あなたを破壊しなければなりませんね」

ソラは構えた。

「僕はいち早く仲間と合流します」

「その心意気は嫌いじゃねえな」

竜司は掌を前に差し出した。

「勝負だ少年。【剣が戦う場所】――！」

ソード・バトルステージ

次はソラは破壊しようとしなかった。

「男ならガチンコ勝負といこうや。ルールは簡単。この周りに舞っ

ている剣を好きなものを持て。数はどれでもいいし形もそうだ」

「つまり、剣を使った真剣勝負ですか」

「お分かりがいいようで何よりだ」

竜司は中にある一本の剣を持った。

ソラも同時に剣を構えた。

「では行くでしょうか」

2人は同時にダッシュした。

はじめに攻撃を仕掛けたのはソラだった。

ソラは横に剣を振った。

竜司はしゃがんで避ける。そのまま足に向かって剣を振ったが、ソラはジャンプしてその剣を避ける。

「やるねえ少年」

「それはどうも」

しかし、この戦いではソラが不利だ。

理由は簡単だ。

まず、ソラは剣を使ったことは一切ない。いや、あるはずがない。

そして竜司のほうはこのS.I.で使っていないことはない。

さらにはこの剣の重さもわけがある。

ソラの腕力では、今の剣を両手で持っているでやっただ。

「そうだ少年。剣の重さもそれぞれ違う。良く選びな」

「それはどうも」

ソラはその言葉と同時に剣を振った。

もちろん竜司は簡単に避ける。

避けられた後、ソラは竜司の後ろにあった剣を持っていた剣を捨てて持ち変えた。

そのまま低い体制である竜司に向かって剣を縦に振った。

竜司は体を回転させて攻撃を避けた。

「ほう、攻撃中に一番使いやすいものを選ぶうとしているのか。器用なことするね」

「これぐらいしか方法がないのですよ。あなたが待っているわけはありませんからね」

「ハッそれはそうだな」

ソラはそう言ってる間にも剣を取り替えている。

「どうやら、お前がじっくり来る剣はまだ見つかっていないようだな」

「どうですかね」

ソラはなにかいいことを考えたらしい。

優奈たちは香奈をソラの元へ置いていき、3人でセナを倒す作戦へと出た。

まず、3人はばらばらに行動する。

ばらばらになる前にあらかじめ見られていることで誰かについていくことで作戦を替える気でのだ。

「くそ！！逃げ足の速い小娘どもだ」

セラが優奈のところにやってきた。

「私のところよ」

優奈は通信機でみんなに連絡した。

セラはさっき己の攻撃を防がれたのでその止めた張本人の優奈のところにきたのだ。

「こんどは逃がさない」

「そんなことさせないわ」

優奈はセラの周りにあらかじめ書いていた円形の線に【線ノ盾】ライン・シールドを発動した。

「こざかしい壁だな。行くぞ【終わらせる爪】エンド・エッジ！！」

セラの爪が大きく光りだした。

「所詮、何の変哲もない壁だ！！」

セラは大きく振りかぶった。

「私の敵ではない！！」

見事にまた優奈の盾は割られた。

「きゃ！！」

「終わりだ小娘！！」

「そうはさせません！！」

セラの後ろから電気の光線が降ってきた。
セラはバックステップで避ける。

「残りの小娘か」

セラが向いたところには朱里の姿があった。

「あなたのS Iは完全攻撃型のS Iですね」

朱里はわかったように言った。

「それがどうした!？」

「だったら作戦をそのまま実行あるのみです!!優奈さん!!」
「うん!!」

優奈はそういった後、後ろにあった水が入っているバケツを地面にこぼした。

このバケツは優奈がセラに追いつかれる前に用意したものだ。
ちなみにバケツ本体はどっから借りたものである。
水は雪が持っていたのもだ。

「雪ちゃん!!」

「任せて!!」

上から登場した雪が地面に手をつけた。

「いつけ!!」
【ウォーターアイス 水十氷】!!」

セラの足元の水が見る見る氷に変わっていった。

「そんなもの、私に通用しない!!」

セラは【終わらせる爪^{エンド・エッジ}】を使い、氷になっていく地面を割った。

「これならもうその作戦は通用しない!!」

「いや、狙い通り!!」

「な!!」

セラはもしかと思い、さつき朱里がいた方向に目を向ける。

「もう、遅いです!!」

朱里は大きな銃を構えていた。

「発射!!」

朱里は引き金を引いた。

「ソラ君」

香奈はただいま、ソラの元へいた。

香奈は気づかれていなかったのか、それと気づかれていたのかは知らないが、【剣が戦う世界^{ソード・バトルステージ}】の中にはいなかった。

外から見れば、そのみ大きな球体となっていた。
この中にソラと竜司はいるのだ。

（どうか、ソラ君、皆さん。無事でいて）

なにもできない香奈はただ祈るのみだった。
そのあと、香奈はその場から離れた。

第44章続く

第44章 夏の戦いの初め・剣―つるぎ―

ソラは作戦を実行した。

まずは手に持っていた剣を竜司に向かって振投げた。

竜司が避けた後、近くにあった剣をすぐに持ち接近して剣を振るった。

「なるほど、ここにあるすべての剣を使う気か」

竜司がわかったように言った。

「そうですよ」

次は剣をブーメランのように投げ出した。

「投剣かよ!!」

だが、竜司は簡単に避ける。

だが、竜司がまたソラを見ようとしたら、そこにはソラの姿はなかった。

「ち、どこへ逃げやがった」

そのときだった。

竜司の後ろからさっき投げた剣が戻ってきた。

「後ろか!!」

後ろを見たが、やっぱりソラの姿はなかった。

「て。ことは」

竜司を上を見た。

「やっぱり上か！！」

そう、ソラは上にいた。

さっきの剣はわざとブーメランになるように投げたのだ。

「器用なことするね」

ソラは【デジタル・ベルト電子ノ帯】を剣に巻き、上にいたのだ。

「行きますよ」

ソラは持っていた2本の剣を竜司に向かって投げた。

もちろん竜司は避ける。だが、ソラはただその2本の剣を竜司の前に置きたかっただけなのだ。

ソラは竜司の後ろを取り、剣を振った。

竜司は姿勢を低くして避ける。

ソラが空ぶったあと、狙いを定めたように剣を振った。

ソラは隙をつけられて避けれることができない状態だった。

だが、切られた音はしなかった。

ソラは【デジタル・バンド電子ノ腕輪】で剣を受け止めていた。

「そのリストバンド。なかなか硬いな」

「そうみたいです。僕もこれのことは良く知らないの」

竜司は一步後ろに下がった。

ソラはそれを好機だと思った。

「デジタル・ロープ
電子ノ縄！！」

ソラは竜司に向かって【縄】^{ロープ}を放った。

「チツ！！」

竜司は剣を縦に振って切ろうとしたが、外れた。

「な！！」

【縄】^{ロープ}は竜司の剣が届かない場所でクロスし、竜司の横へと通り過ぎて行った。

「何がしたい少年」

「いいえ。これでいいですよ」

ソラは負けていないと眼で告げた。
そのときだった。

竜司はいきなり縛られた。

「なっ！！」

竜司はあわてて後ろを見た。

さっき放った【縄】^{ロープ}があの時投げた2本の剣に架かっていた。
しかも竜司の後ろもさらにクロスされていた。

「少年。はじめから俺を動けなくさせる気だったのか」

「ええ。ストレートに捕まえようとしても見抜かれたら終わりです。」

なので、仕込ませてもらい巻いた」

ソラは剣を持った。

「これで終わりです」

「いいや、まだだ」

そう言つて竜司は足で持っていた剣を蹴った。
その剣は見事にソラの下へと向かつていた。
いや、正確にはソラの下へとあつた【縄^{ロープ}】だ。
見事に切られて、竜司の拘束が解ける。

「まだまだ終わらんよ少年」

「……………」

ソラは無言だった。

竜司はソラに向かつて剣を持ってダッシュした。
だが、ソラは冷静に腕を後ろに引っ張った。
そのときだった。後ろにあつた剣がいきなり飛んできた。

「な!!」

剣の持ち手の部分が竜司の手首に当たった。

「しまった!!」

「これで終わりといいましたよ」

ソラは拳を下に向けた。

——【超能力ノ眼】・【LV2・世界破壊】——
スキル・アイ ワールド・ブレイク

地面に輪ができ、ソラは割った。
同時にこの世界も破壊された。

「少年。やるね」

「それはどうもです」

ソラは竜司の腹を思いっきり蹴った。
竜司は壁にぶつかり、気絶した。

（早く、みんなを助けに行かないといけませんね）

ソラは走り出した。

（あの人は相当やばい人ですよ！！）

いやな予感がする。そうソラの脳裏を横切った。

「なんだ、これで終わりか」

朱里の射撃を食らったはずのセラがそこにいた。
そして、セラの目線には気絶している優菜がいた。

「優奈さん。だいじょうぶですか？」

朱里は優奈のところへ向かったが、返事はない。
あのとき、朱里は確かにセラに攻撃を当てたはず。だが、誤算だったのは左手。

セラはあの時、左にもS Iを発動し、朱里はカウンターを食らいそうになった、そこで優菜が防ごうとしたが、一瞬だったので防ぎえず、優菜が朱里の代わり攻撃を食らってしまった。

「よくも、ゆーちゃんを」

雪は水鉄砲を乱射した。

「だめです！！雪さん！！」

セラはその攻撃を簡単に防いだ。

「終わりだ！！」

セラは雪に向かってダッシュした。

雪は氷の棒を作り、抵抗をしたが、もちろんやりあえる者ではない。棒は簡単に雪の体ごと破壊された。

雪の体から痛みがあふれていく。

雪は恐怖心におびえてすぐに氷の壁を作ったが、これも簡単に破壊された。

また同時に雪に衝撃が加わった。

「雪さん！！」

「これで残り1人」

セラは朱里を見た。

「『恐れる電撃、はじける閃光、その名の通り、弾き飛ばして！！』」

朱里は詠唱を唱えた。

「詠唱術か」

サンダー・フラワー

「電撃ノ花火！！」

「こんなもので私はやられぬ！！」

そう言つてセラは移動しようとしたが、できなかった。

「これは！！」

「朱里ちゃん。早く打つて」

優菜の円形の盾でセラを足止めしていたのだ。

「こんな壁すぐに！！」

だが、セラの足元にも、足止めされていた。
そう、氷だ。

「あーちゃん。今よ」

あのときの水はいまだに乾いていたわけではない。

「撃ちます！！」

朱里は引き金を引いた。

「この、小娘が！！」

セラは【エンド・エッジ終わらせる爪】を発動した瞬間。

後ろのほうでガタツと音が聞こえた。

戦闘本能で後ろを見てしまったセラ、同時に発動も中途半端な状況だ。

だが、今は間が悪かった。

セラは朱里の攻撃をもろに食らった。

そのあとの花火が勝利の証みたいに見えた。

第44章続く

第44章 夏の戦いの初め・癒ノ保護者―ホーリー・ガーディアン―

朱里の一撃がセラにヒットしたはずだったが。

「まだまだ、私は戦えるぞ!!」

セラはまだ立っていた。

朱里は詠唱術を使ったので体力がやばい状況だ。
ちなみにさっきの音は香奈がこっちに来たときの足音だった。

「朱里ちゃん!!」

「これで終わりだ!!」

セラがそう言ったとき、上から影が見えたので攻撃をやめて回避した。

「朱里、香奈!!大丈夫でしたか!？」

ソラが叫びながらこっちに向かってきた。

「ソラ君!!」

「ソラ……さん」

朱里はソラの声が聞こえてうれしいがもはや、声も出にくい状態だった。

「ごめんなさい。優菜も雪もがんばってくれたのに遅れてしまって」

ソラは朱里を抱えながら言った。

「ソラさん」

「……ソラさん」

「ちょうどいい。お前もここで倒す」

セラはソラに言った。

「あなたは必ず、僕が破壊します」

ソラはそう言って立ち上がった。

「いいだろう!!」エンド・エッジ【終わらせる爪】!!」

「行きます!!」デジタル・ベルト【電子ノ帯】!!」

2人の攻撃が交じり合った。

だが、ソラの攻撃が早く、セラの腕を巻きつけてソラは接近した。セラは爪を短くして、近距離型にした。

ソラはデジタル・バンド【電子ノ腕輪】で攻撃を受け止めていた。

「本来女性なら、本気ではいきたくはないですが」

「じゃあ、どうする」

「今は話は別です。僕の仲間を傷つけたことは許せません!!」

2人は上空へ飛んだ!!

ソラはベルト【帯】で上空へのサポートをした。

「くられ!!」

セナの爪が大きく光った。

爪の一つ一つから小さな針が出てきた。

「散れ!!」

セラの爪から無数の針が出てきた。

ソラにはもちろん、今は逃げ場はなかった。

——やばい!!

ソラは見事に攻撃を当たってしまった。

ソラはそのまま地面へ倒れた。

「これで、あいつも終わりだ」

「終わりではありません」

そう言つてソラはものすごくぼろぼろで立ち上がった。

多少は防げたが、やっぱり完璧ではなく、立っていられるのがやつとだろう。

「あなたは僕が破壊します」

ソラはうまく立ち上がったが、ふらふらしていた。

その光景を、香奈は見えてられなかった。

（なんでいま、私は見ているだけなんだろう）

香奈は脳内で悟っていた。

「いやだ」

香奈は涙を流した。

涙の雫が、抱えている朱里の顔に落ちる。

「私だけ、何もできないなんて」

そのときだった。

かなの体が光りだした。

「みんなが傷ついていくなんて」

どんどん光は増していった。

「絶対にいやだ!!」

その言葉と同時に大きな光が香奈と朱里を包み込んだ。

「なんだ!?!あの光は!?!」

「香奈!?!」

ソラとセラはじつとその光を見ていた。

光はどんどん小さくなっていった。

時間が経っていくほど小さくなっていき、ついに2人の姿が見えた。
そのとき、ソラとセラは驚いた。

朱里の怪我が完全に治っていた。

「香奈さん!?!」

「今のは一体」

香奈は自分の掌を見た。

「これが私の」

「ソラさん！！香奈さんのS I って回復効果ですか？」

——！！だとしたら。

「ソラさん。一回戻ってください！！あの人は私が相手します！！」

そう言って朱里はセラの下へ銃を撃った。

「ソラ君！！」

香奈が叫びながらソラの下へ寄った。

「香奈……」

「あなたを癒します」

香奈はボソツと言った。

そのときまた、大きな光が出てきてソラと香奈を包んだ。
さつきより早く、光は収まり、ソラの怪我は治っていた。

「そ、ソラ君！？」

「やっぱり、香奈のS I は回復型」

香奈はまた自分の手を見た。

「怪我を癒す人、名を『ホーリー・ガーディアン癒ノ保護者』！！」

「【ホーリー・ガーディアン癒ノ保護者】。私のS I 」

「これでまた、戦えます。朱里！！」

ソラは拳を強く握った。
その後、朱里を呼んだ。

「わかりました!!」

朱里はソラの下へと来た。

「さっきのお返し行きますよ!!」
「はい!!」

ソラは両手を手首に回した。
朱里は新たな銃を作った。

——
デジタル・スピア
【電子ノ針】!!

——
サントー・ウェポン
【電撃ノ銃装備】!!

ソラは両手で【針^{スピア}】を放ち、朱里はグレネード型の銃を作り、引き金を引いた。

2人の猛攻でセラは防戦一方だった。
だが、やはり弾切れは起こすし、ソラにだって疲れは残る。

「いまだ!!」

セラは笑いながら攻めようとするが、何者かによって肩を触れて止められた。

「な、誰だ!!」
「ストップだセラ!!」

竜司だ。

もう気絶から立ち上がった。いた。

「俺らはここで引くぞー!!」

「クッ!!」

「やることはやった。行くぞー!!」

そう言って2人は後ろへ走り去った。

ソラたちは追わなかった。

ここで追っても意味がないからだ。

「さて、とりあえず、僕の家へ行きましょうか」

「はい」

考えることがたくさんある。

ソラはそう悟った。

第44章 終わり

第45章 癒ノ保護者―ホーリー・ガーディアン―

竜司、セラが去って、ソラたちは少し休んでいた。

「じゃあ、ソラ君。2人を回復させるね」

香奈がそう言った。

だが、ソラははっきり言って心配になってきた。

あんなに一瞬で回復させてしかも2回も。彼女の体は大丈夫なのか。

香奈は一回深呼吸した。

その後、香奈は大きな光に包み込まれた。

同時に、優菜と雪も包み込まれた。

光は段々と小さくなり、やがて2人の怪我は治っていた。
直ったのと同時に、2人の気も取り直した。

「これって」

「すごい」

2人は立ち上がった。

だが、それと反面、香奈は倒れた。

「か、香奈!!」

ソラは香奈のそばへ寄った。

「そ、ソラ君」

ソラはあわてて香奈の額に手をつけた。

「すごい熱です」

「「え!」「」」

「すぐに家へ帰りましょう」

長門家。

香奈は自分の部屋まで連れて行って寝かせた。

「ソソ君。これって一体」

「多分、オーバーヒートですね」

「オーバーヒートですか？」

ソラは無言でうなずいた。

「力の使いすぎです。それに体もまだS Iが馴染んではないいでしよう」

「そういえば、私が最初、手にしたとき、S Iの力がものすごく強かったです」

「そうですか」

ソラは手をあごにつけて考えた。

「だとしたら、回復があんなに早く強力なのはそのせいでしょう」

ソラは分析しながらしゃべった。

「香奈のS Iは強力なものだと思ってもいいでしょう。それをあんな

なに連発して、体が無事なわけありません」

「ソラ君」

優菜が心配して声をかけた。

「だとしたら、僕は止められなかった責任があります」

ソラは強く拳を握った。

「とりあえず、直るまで看病するのみだね」

雪が言った。

「そうですね。私たちが傷ついたのが原因なのなら恩返しするのは当たり前ですしね」

「うん。みんなやろう」

「皆さん。ありがとうございます」

次の日。7月24日。土曜日。

香奈は今も夏は下がないでいた。

ソラは香奈の額にあるタオルをとり、絞ったあと、また額に乗せた。熱は38度。体の体調からして風邪だと考えられる。

「まあ、容態が酷いものではなくって良かったです」

ソラはボソツと言った。

「おにいちゃん」

あさみがドアを開けていつてきた。

「おねえちゃん。大丈夫？」

「ええ。風邪ですの。」

ソラはあさみの頭をなでた。

「あとは彼女の回復を待ちましょうか」

そんなことで今日は香奈の看病で1日が過ぎた。

7月25日、日曜日。

ソラは朝下へと降りた。

「ソラ君。おはようございます」

リビングには香奈の姿があった。

「香奈。もう大丈夫なのですか？」

「うん。心配かけてすみません」

香奈は頭を下げた。

「無事でよかったです。昼からみんなも来るのでいろいろと話すとがあります」

「うん」

「あ、お姉ちゃん。おはよう」

あさみがリビングにやってきていった。

「あさみちゃんもおはよう」

「うん」

香奈はあさみの頭をなでた。

昼、いつものメンバーが長門家で集合した。

「とりあえず、議題は香奈のS I、ホーリー・ガーディアン【癒ノ保護者】ですね」

「この前を見てみれば回復型のものだと思いますね」

2日前のことを思い出しながらソラと朱里は言葉を交わした。

「香奈、ために使ってみてください」

「う、うん」

そう言って香奈は両手の掌を前に向けた。

——発動！！

香奈は心の中で叫んだ。

そのとき、香奈の手から桃色の光が出てきた。

「これが、本来の力ですね。香奈ありがとうございます」

香奈はふうといいながら発動を解けた。

「そういえば、S Iの使い方ってどうやってしてるのですか？」
「私の場合はなんか脳になんか説明してきている感じがするんだよね」

雪が説明した。

「説明……ですか」
「私も雪ちゃんと同じ」
「私もです」

優菜、朱里も同じようだ。

「香奈はどうですか？」
「私は昨日寝ているとき、夢の中で説明されたの」

香奈はソラの質問に答えた。
だが、3人とは少し違う。
まだ。3人のほうが説明がわかりやすい。

「本当に不思議ですね」
「私のS I、【ホーリー・ガーディアン癒ノ保護者】は私の体力を使って相手の傷を治すものらしいの」
「それが言われてことですか」
「うん」

香奈はうなずいた。
それならば説明が早い。

「思ったのだけだね。私の【ライン・シールド線ノ盾】も、体力を利用するけど、私

のは線を書かなければ発動もできないのに」

「香奈のS Iは発動元はあるけど、発動上限がないのですね」

優菜はうなずいた。

「私が思つにはほとんどのS Oは体力を元にして発動するのだと思います」

朱里も優菜と同じ考えだった。

「だとしたら、かーちゃんのS Iは」

「相当強力なものだと考えてもいいでしょう」

雪の言葉をソラがつなげた。

「つまり、香奈はそのため、狙われやすい対象となっているわけですね」

……………。

「えーーーー!!」

香奈がショックを受けた声を出した。

第45章終わり

第46章 2人の強さ

その日の午後。

あさみを入れた6人で外を歩いていた。

「思ったのだけど、何であの時ソン君は逃げると言ってきたの？」

雪がソラに聞いてきた。

「あの人たちのS Iの気配と言いますが、殺気といいますが、なんか左目で見たとき恐怖を感じました」

「でも、実際、ソラさんはその竜司と言う人に勝っているわけですよね」

朱里はあせりながら言った。

「ちがいます」

ソラはみんなが考えていた違う言葉を放った。

「竜司さんのS Iは【ソード・バトルステージ剣が戦う世界】ではありません」

「「「「え!?!?!」」」」

5人は同時に驚いた。

「あのS Iは別のところの人のものです。竜司さんは一切S Iを使っていないませんでした」

「何でわかるの」

優菜は聞いた。

「僕の目にはごまかせませんし、彼の剣の使い方はまるできこないものでした」

本当にあのS Iの使い手なら、あんなふうになれない手つきで戦うものではない。

まして、他の剣を利用しない戦い方なんてますます怪しいものだった。

しかもそれに加えてソラの目でこのことは決定打になったのだ。

「しかも、セラさんはあれだけの猛攻に耐えられるものではありません。あれはたくさんの人と戦ってきたと考えてもおかしくはありません」

ましてや、朱里の攻撃を受けても立ち上がったリ、詠唱術まで対抗できるものは相当いない。

もしかしたらあの時逃げてくれていたのは助かったかもしれない。いや、完全に助かっていた。

このままでは全滅も目に見えていたのだから。

「セラさんの方は少し本気になりかけでしたが、竜司さんは完全に0パーセントの力ですよ」

ソラは説明を続けた。

自分のS Iを使わない。それは自分の力を使っていないともいえるのだ。

「やっぱり、香奈のS Iが目覚めたとしても、僕らには完全に足りないものがあります」

「攻撃……ですよね」

香奈が理解したように言った。

「ええ。今、この中では朱里がゆういつの攻撃型のS I。あさみに対しては無理はできませんので」

防御、援助、回復はそろったが、肝心な攻撃が足りなさすぎる。

「実際、雫さんのS I、アクアトロマスター【水ノ達人】も、レンジさんのマグネッツ・イロン【磁力ノ鉄】も援護型と補助型です」

つまり、攻撃の駒は完全に朱里しかいなくなるわけである。

「しかも、香奈のS Iはいまだに謎が多すぎますし」

ソラは頭をかいた。

「考えることは山ほどあります」

5人は心配しながらソラを見た。

この5人にはいまなんて答えればいいのかわからなかった。

自分たちはいままで戦い残れたのもソラの作戦があったこそだった。とくに、優菜、雪、朱里はそのことを重く感じていた。

もしかしたら、あの時、自分がソラを守ることが無理かもしれない。このままだと、ソラが自ら戦闘員として自分たちよりも重い戦いをさせてしまうかもしれない。

「考えても思いつかないなら気合で何とかするしかないだろ」

とある声が聞こえた。

ソラたちは聞き覚えがある声を探した。

「ここだここ」

だが、みんなが見ている逆の方向にレンジはいた。

「今こんなことになるとは相当テンパッてるみたいだな」

レンジはそういいながらこっちに来た。

「私たちも少しは信じてほしいな。何だってお姉さんだからね」

後ろから雫もやってきた。

「やあ、香奈ちゃん」

「ど、どうも」

雫は香奈に挨拶をした。

そういえば、レンジは香奈とあさみとは初対面である。

「年下のお前らばかり、つらい思いはさせねえ。俺らも戦っ―！」

「レンジさん。雫さん。ありがとうございます」

ソラは感謝をこめて言った。

「で、結局香奈ちゃんもSI使いだっただけね」

話を聞いた雫は納得してくれた。

「で、攻撃の手が足りないわけか」

レンジも納得してくれた。

「それでよ、これからはどうする気だ？」

レンジは続けて聞いてきた。

「とりあえず魔獣退治を専念しようと思っています」

「で、前回みたいなことにならないために一緒に行動していると」
「はい」

雫の聞き答えにソラは答えた。

「思ったのだけど、ソラ君は作戦を考えることを専念したほうがいいんじゃないの？」

雫はソラに提案してきた。

「なぜですか？」

「そうだとしたら、これからは協力がもつとも必要になるわよ。それなのに肝心のソラ君が何も考えていないのは致命的なのよ」

「ああ、それなら大丈夫です」

ソラはそんなことかと思った顔で言った。

「もう、すでに考えてありますよ」

5人もそのことをわかっているために口答えしなかった。

「そう。それならこれを渡せるわね」

雫は手紙をソラに渡した。

「これは？」

「SⅠ使用の被害にあった人たちからの救援の手紙よ」

「なんでこんなものを雫さんが？」

「それがね」

どうやら雫は前日、この手紙を一人の少年から渡されたいらしい。その少年の顔も、雫は見えていない。

「そうですか」

ソラは納得しているのかはわからないが、手紙を開けた。そこには地図と場所しかかかれていない紙が入っていた。後は、数文字しかないメッセージカード。

『助けてください』

内容はその一言だった。

そのとき、後ろに誰かが倒れた音がした。

長門家。

ただいま倒れた少年を養っている。……飯で。

「プハッ!!」

少年は気持ちいいぐらいに食べてくれた。

「おいしかったッス。これ誰が作ったッスか？」

ソラと香奈は手を上げた。

ちなみにこの2人の腕はの中でトップだ。

「ご馳走さまッスきれいなおねーさん」

いきなり少年は香奈の手をつかもうとしたが、香奈は避けた。

「バキッ!!」

もちろんのごとく、床に顔をぶつけた。

「で、まず名前教えてください」

ソラは何事もなかったように聞いた。

「はいッス!!俺の名は錦^{にしきのしき}乃織ッス。あと、SI使いッス」

その言葉を聴いたとたん、全員後ろに下がった。

「実はさっきの手紙。俺が頼んだッス」

「じゃあ君もその街の人？」

「はいッス。きれいなお姉さん」

識は雲に飛びつこうとしたがレンジに殴られた。

第47章 出かけの前

次の日。7月26日月曜日。

ソラたちは電車に乗っていた。

識の願いで彼の故郷を助けに行くのだ。

時間は昨日の夕方に戻る。

「で、なんで君は僕らにそのことをお願いしてきたのですか？」

ソラは識に聞いた。

断る、断らないの前に理由ははっきり聞かないことにはこっちも動けないからだ。

「は、はいッス」

識はさつきレンジに殴られた頭をさすっている。

「実はそこ、俺の故郷で、それに、その町はS Iに関する歴史があるッス」

識の言葉にみんな反応した。

「S Iの歴史………ですか？」

「はいッス」

識は一回首を立てにかしげた後、話を進めた。

「実は今回襲ってきたやつもそれが狙いだと思うツス」
「でも君、S I使いなんですよ。なんで戦わないの？」

雪は聞いてきた。

識は残念な顔をして言った。

「俺のS Iはその町に伝わる、代々のS Iでしかも、戦闘用のS Iではないのツス」

「代々伝わるS Iってあるのですね」

朱里が感心しながら言った。

「俺のS Iの名は『メモリー・メモリー記憶ノ記録』ツス。S Iの知識を持つS Iツス」
「たしかにそれじゃあ戦えないわね」

優菜がわかったように言った。

「では、これの何かの縁ツス。あなた方にS Iの歴史を説明するツス」

「では、お願いします」

ソラはそのことを了承した。

遠い昔のこと、今S Iと言えるものは人の超人差を表すものではなかった。

昔は戦争続きの中で、それは人間も動物もなかった。
完全に生き物の戦いである。

しかし、何も無いその世の中は野生本能がある動物たちにはかなわなかった。

そこで、ある一人の神が現れた。
その神はこう言った。

「弱し人よ」

それだけだった。

そのとき、ある日、一人の男が凶暴な動物を倒したとの連絡が入った。

人々は集まった。

それがS Iの始まりだ。

S Iは人間に更なる力を渡した。
あるもには火を操ったり、あるものは時間を止める。あるものは何でも切り裂き、あるものは風を利用した。

それがどんどんエスカレートして、とうとう、人間同士の戦いまでに発展してしまった。

その中で生き残れたものは少なからずいたかもしれない。

識は話を終わらせた。

「こう、聞いてみますと、S Iは人間が戦って生きるためにできたものに見えますね」

「やっぱりそう思うッスか」

ソラはうなずいた。

「でも、そんなことどこで調べたの？」

香奈は聞いた。

「そのことを知れるのが俺の故郷ツス」

「なるほど、つまり、その歴史を知りたいのかあいつらは」

レンジがわかったように言った。

「いいえ。違います」

ソラはレンジの言葉に否定した。

「そのことを記憶しているのがその代々伝わる町のS.I、【メモリー記憶ノ記録】だとすれば、これ以上の秘密がその町にあるかもしれませんね」

ソラは自分の考えを言った。

レンジは少し驚いていた。

まあ実際、レンジのは完全に安易過ぎるものだ。

「錦乃さん」

「識でいいツス」

識はわかったように言った。

「識。そのお願い聞きますよ。君の故郷、救い出しましょう」

ソラの言葉に識はうれしかった。

「ほ、本当ツスカ？」

「いいですよ、皆さん」

ソラはみんなに聞いた。

「私はソラ君についていくわよ」

「お兄ちゃん。私も行く」

「ソラ君。言わなくつてもわかつているのに」

「ソン君。私たちが断るとでも」

「それこそソラさんです」

「こちらからもお願いするわ」

「わかつているじゃねえか」

全員、ソラの意見に賛成した。

「そういうことです。識。よろしくお願いしますね」

そしてこの日の集合時間。

みんな9時ごろ駅前で集まった。

「お、ソン君。なんかかっこいいのつけているね」

雪がソラが耳につけているヘッドホン形のイヤホンを指差した。形は丸だが、模様はダイヤの形をした十字架が刻まれている。

「それ、どうしたのですか？」

朱里が聞いてきた。

「これは昨日熊田さんが持ってきてくれたものです。実はお父さんの設計図を下に警察の科学部が作ってくれたものです」

これはソラがもっているギアにも対応できる代物になっている。

「お前の父さん。マジすげえな」

レンジは感心しながら言った。

「ははは。それはどうもです」

ソラは微笑みながら答えた。

「でも、これが昨日届けられて良かったです。これでいろいろできますから」

安心しながらソラは続けた。

「今回は相手は僕たちのことを知りません。ならば、僕たちはいつもより不利な状況ではないと考えてもいいでしょう」

ソラの言葉に全員うなずいた。

「そういえば、あなたたちは全員SI使いなのッスか」

識が聞いてきた。

「僕とあさみは違いますね。あさみはもどきみたいなもので、僕はSIなんて一切使えませんので」

ソラは説明した。

「でもなぜ、あなたが仕切っているのッスかね」
「簡単よ。ソラ君は私たちの知将ですもの」

識の疑問に優菜は答えた。

「そうそう。ソン君は私たちを救ってくれた存在」
「ソラさんがいなければ、私たちはここにいません」

雪と朱里も一緒に言った。

「そ、そうッスか」

ソラ以外の全員うなずいた。

「では皆さん行きましょう」

あれから時間は経ち、最初に戻った。

「あ、ソラ君」

香奈がソラを呼んだ。

「ここがそうですか」

ソラたちが見たのとはあまりにも予想外だった。
まるで魔女が住んでいるのではないかと思われる暗さだった。

「ようこそッス」

識は立ち上がった。

「古邦村へ」

第48章 古邦町

電車を降りて、【古邦町】ふるほうちやうに着いた。

「なんだか暗いわね」

優菜が心配しながら言った。

確かにこの町は全体的に暗い。

まるで待ちの人たちのことを示しているように。

「これもS Iの影響ですか？ ソラさん」

朱里はソラに聞いてきた。

「ええ。今調べます」

ソラは【超能力ノ眼・輪】スキル・アイ・リングを発動した。

「——これは!!」

「どうしたの？」

香奈はソラの言葉に疑問を持ち聞いてきた。

「識、この霧は一体なんですか？ 確かにS Iらしいのですが」

ソラはこの暗さはS Iによるものだとは判明した。

ただ、それ以外の正体はわからないので、詳しい説明を識に求めた。

「はいッス。この霧はたしかにS Iによるものですが、攻撃的のも

のではないッス。ただ、これでは前が見えないッス」

識は説明した。

「それでは、こちらはうまく動けませんね」

ソラは考え出した。

「とりあえずはみんなまとまって活動しましょう。この霧では何が起こるのかはわかりませんから」

ソラがそう言ったとき、香奈、優菜、雪、朱里、あさみは同時にソラの体に抱きついた。

「……なんですか？」

「……だつてまとまつてと言つたから」「……」

5人同時に同じ答えを言つた。

だがまあ、これならはぐれる可能性はないとソラは思った。

「しょーがないですね」

ソラは一回息を吐いた。

ソラたちはとりあえず、町の人たちが集まっているといわれる場所に向かった。

だが、ここでソラからの提案があつた。

「思ったのですが、この霧がS Iなら、そのS I使いを先に捕まえたほうがいいですね。これでは方向がわかりませんし」

ソラはみんなに言った。

ちなみに識に聞いたところ、霧は前よりも黒く、前が見えにくくなっている。

「そうッスね。これではたどりつけようがないッス」

識は賛成した。

「ですが、これではどこにいるのかわからないのですが」

朱里は聞いてきた。

「この霧はS Iです。それで僕は考えました。S Iならば、僕の【スキル・アイ超能力ノ眼】で追跡できると思うのですよ」

ソラは自分の目を指しながら言った。

「そうか。それなら反応が強いほうが発動者に近づいているということね」

香奈は理解したのか解説した。

「そうです。発動!!」

ソラは再び、【スキル・アイ・リング超能力ノ眼・輪】を発動した。

——さあ、追ってください!!

ソラは心の中で唱えた。

「こっちです」

ソラは反応が強いほうへ指差した。
みんなそこについていった。

「ちくしょう。なんで俺がこんなことしなくちゃならないんだよ」

どこかの廃墟のビルの中で一人の男、みやざわきり宮沢桐はつぶやいた。
桐ここでこの町を自分の能力で暗くさせとけといわれたのだ。

（あー。だるい）

桐は完全にここから離れられない状態にいる。
もう、一週間ぐらいいは経ったと思う。
ここでは飯と飲み物以外何にもない。
ついでにこの2つは同盟からの差し入れである。
だが桐は自分がこんなことになるとは初めは思っていなかった。

（もう、抜け出そうかな）

もう桐は何回こんなことを思ったのだろう。
だが、それ以外にやることはない。
桐はあくまでも人間。
何事にも恋しくなるときはあるものだ。

そのときだった。

「ここにいます！！みなさん探してください！！」

一人の男の声が聞こえた。

もちろんその声の持ち主はソラだ。

半眼だった桐は姿を見ることをし損ねた。

（ち、侵入者か、暇つぶしにはちょうどいい）

桐は立ち上がったとき。

「見つけました」

ソラは桐の後ろから話しかけた。

「うおおおおー！！」

桐は叫んだ。

実際、本当にこんなことされたら誰でも驚く。

「お前か侵入者は」

「まあ、そうですね」

ソラは戦闘の構えをしながら言った。

「そうか、立つたら話は早い！！
【霧の煙】スモーク・スモーク！！」

霧は口からドス黒い霧を出した。

しかし、ソラは冷静だった。

そう。ソラにはこのS Iは通用しない。

ソラは躊躇なしにダッシュした。

「なっ！！」

これは桐も驚いていた。

ちなみに桐は自分で出したので中は簡単に見える。

「あいつ、バカか！！」

「そう思ってもかまいませんよ」

ソラはそういった後、霧から出てきて、桐に思いっきり蹴りを入れた。

「ガッハ！！」

桐は倒れこんだ。

「さあ、この町の霧を消させてもらいましょうか」

ソラは言った。

「いやだな。それは」

桐は立ち上がりながら言った。

「じゃあ、しかたねえな」

また後ろから声が聞こえた。
次はレンジだった。

「S Iを解く方法は2つあります。一つは使用者自らの発動拒否、それと気絶するかです」

ソラは言った。

「じゃあ気絶で終わらせるか」

レンジは鉄の棒を持ち出した。

ソラは察したのか、遠くで見届けることにした。

「だ、大丈夫かな？レンジ君」

「僕は保障できませんね。あれは」

雪の言葉に同情したソラだった。

桐の明日は果たしてあるのか？

第48章終わり

第49章 化け物扱い

桐を縄で縛って身動きできないようにした。

「で、なんでここはお前一人なんだ？」

レンジが聞き出した。

しかし、桐は「ケツ！！」っと、舌打ちしかしない。

「こ、この餓鬼が」

レンジは怒りながら言った。

「あなたはなぜ、ここにいいのか、目的を教えてください」
「いやだね」

ソラが聞きなおしても、桐は何もしゃべらない。

「あ、一つ警告があります」

ソラは人差し指を立てながら言った。

「今のあなたの身柄はこっちにあるのですよ。このまま何かしゃべらないでいると、凍らせれるか、おぼれるか、痺れ死になるか。あなたが決めてくださっていいですよ」

ソラはさりげなく怖いことを言った。

「ハッターだと思ってくださってもかまいません。ただ、ナニをす

るのは僕らで決めますので」

ただ、これはハツタリではなくマジでこんなことできるので、相手についてはたちの悪いことである。

「あと、翩り殺される。と、言う選択肢もありますよ」

ソラはそう言いながら鉄の棒を不機嫌に持っているレンジを指差した。

「……………」

桐は声が出なかった。

なぜなら完全にハツタリではないことに気づいたからだ。

「それで、結果。あいつは何も知らずに利用されていたただと知った」

「そ、そうですか」

あのと、拷問（？）を終えたレンジがソラに言った。

「でも、そうだとしたら私たちはまだ何もできないと言つことになりますね」

朱里の言葉にみんなうなずいた。

「そうですね。だとしたら僕らはまず、識の仲間が集まっているところに行くべきですね」

ソラの提案にみんな賛成した。

「霧もなくなりましたので道案内もできるッス」

識が胸を叩きながら言った。

「そうですね。ですがそれよりも」

ソラはぼろぼろで縛られている桐を見た。

「あの人はどうします？」

「あー。そのマンまでいいんじゃない？」

「いや、ダメですよね」

ソラはレンジにツツコンだ。

しかし、いま彼をどうすることはできない。
ならば手段は一つ。

「じゃあ、レンジ君。彼を担いできて頂戴」

雫がレンジに言った。

「ああ、それはいい考えです。こつ気絶してしまったのもレンジさんのせいですし」

「……マジでか」

桐のことは速攻で解決した。

ソラたちはでっかい建物の近くに来た。

「ここッス」

識が指差した。

そこはかなりでかいが、建物だけで入り口はトンネルみたいになっている。

中を見てみると、そこにはたくさんの人がいた。

その中には老人も子供も。

「結構人がいますね」

「はいッス」

ソラが識に言いながら中に入っていた。

「ばあちゃん。つれてきたッス」

識は一人のおばあちゃんに言った。
ちなみに後ろでは。

「あ、何打こいつら？」

「蹴ってみようぜ」

「いてーなこの餓鬼！！」

子供に蹴られたレンジが叫んでいた。

「それで、こいつらが私たちを救ってくれるやつらか？」

「どう見てもただの子供だぞ」

そのばあちゃんの隣にいた20歳ぐらいの男性が言った。

背は高く、いかにもこの中のリーダーと思わせる人だ。

「はじめまして、長門ソラといいます」

ソラは頭を下げた。

「餓鬼が何かできる事件じゃないぞ。帰れまったく」

男が言ってきた。

「でも、彼らも俺と同じ力を持っているッス」

識が講義してきた。

「だとしたら、こいつらも化け物か。おい気おつけろ！！油断していたら食われちゃうぞ」

男がそう言ったら後ろの男たちがはははと笑った。

ソラはその光景を不愉快に見ていた。

そのとき、目の前にいたおばあちゃんが男性の頭を叩いた。

「この、バカ息子！！お前がだらしないからこうなったんだろぅが
！！」

しかし、その言葉にもソラはあまり良いものだと思わなかった。
なぜなら「こうなってしまった」。「本当は呼びたくなかった」と
思っても等しい。

「しかたねえな。俺の名前は茨城浩介だ」
いばらけこうすけ

そう言つて2人は立ち去つた。

「識。どうやら僕らは君以外の人には歓迎されていないみたいです
ね」

「そ、そうツスね」

「ソラ君」

香奈が心配そうに言つた。

「それに、あの中にもあの人たち曰く、化け物がいますよ」
『え！？』

みんなソラの一言に驚いていた。

「みなさん。今日から行動開始です。予定が変わりましたよ」

みんなうなずいた。

「僕の眼は誤魔化せんよ。茨城浩介さん」

とりあえず、桐は気絶しているためにそこらへんにおいていた。
ソラたちは誰も見ていないところで作戦会議していた。

「これで行きますか」

伝えることが終わったソラは立ち上がった。

「そうね。いいんじゃないかな」

「これは私が肝心ね」

雪が自身ありそうに言った。

「では、さっき伝えたとおり、僕と雪、朱里、雫さんは町の中の調査。レンジさん、優菜はこの警備。香奈とあさみはこの中の調査をお願いしますね」

そう言って、ソラたちは外に出た。

ソラたちはまず、識に言われた昔から伝えられている古井戸の調査に行った。

「ねえ。なんで古井戸なんて調べるの？」

雪が疑問に思い言ってきた。

「簡単です。SⅠが古くから伝わっているのならば」

「古いものには歴史があると言っわけですね」

朱里がソラの言葉をつなげた。

ソラは無言でうなずいた。

第49章終わり

第50章 古邦町の古井戸

ソラを先頭に、雪、朱里、雫は古井戸に向かっていった。

古井戸に向かう理由はただ一つ。

S Iが古く伝わってきたものなら、その町に古いものになにかS Iの秘密があるかもしれないということだ。

古井戸の場所は結構町の中では遠いほうで、そのために何人か、非常用のために、必要になりそうな人のみを連れてきた。

もしも、この予想があっていたのなら、完全に戦闘になる。絶対に話し合いは通じない相手ともてもいい。

しかも、あの茨城浩介がものすごく怪しい。

ソラの左目で確認したところ、彼はS I使いと分かったからだ。

そして、彼が味方なのか敵なのかも分からない。

だが、言い方で、このことは町の人たちに秘密にしているみたいだ。だとしたら、敵だという可能性も高くなる。

安全地でも警戒を怠ってはならない状況になってしまった。

「そろそろ見えてきましたね」

ソラは古井戸を確認したのか、みんなに告げた。

ソラたちは走るのをやめて、次からは慎重に行動をし始めた。走って体力負けしてしまったら意味が無い。

ソラが誰もいないか確認しないと次の行動に動けない。

だが、その心配は無かった。

そう。人は誰もいなかった。

ソラたちは急いでその場で立ち会った。

「どうやら、出会わせは無かったようですね」

「ねえソン君」

雪がソラに聞いてきた。

「ターゲット・メモリー【目標ノ記録】で過去の記憶を除けないの？」

雪は自分たちがこの場所に来るまでにここに誰かが来たのか確認したいらしい。

だが、ソラも同じ気持ちだが。

「無理でしょうね。その技は時間帯も設定しなければならないのですから」

そう。場所の条件は合っているが、問題の時間が条件に等しくないのだ。

時間さえ分かれば、いいのだが、それでは意味が無いのだ。

「それでしたら私たちが来る前の数時間前のことなら調べられるのではないのでしょうか」

朱里が提案してきた。

「そうですね。だとしたら長時間、時間が必要となりますね。電気は足りませんかね」

ソラの【ターゲット・メモリー目標ノ記憶】は時間を設定した後、電撃を当てた両のよっ

て時間が延びるのだ。

長時間伸ばしたいのなら、死にいたることを恐れなくて浴びるしかない。

ただ、今回は長時間の戦闘が考えられるわけで。

その大量の電撃はもちろん朱里の電気からもらうわけである。

つまり、命としても、戦闘にしても、長時間の追跡は難しいのである。

「す、すみません。ソラさんに危険になるような言い方をしてしまつて」

朱里は気づいたのかソラに謝った。

「いや、それはいいのですが、やはり戦闘に問題があると困りますから」

ソラはまったく自分の命のことなんて考えていなかった。

しかも、本人自身はそれは慰めではなく、本当に思っていることを口にしたのだ。

「正確な時間を知るのは無理だとして、電気の量に問題が……」

ソラは言葉の途中で黙り込んだ。

「どうしたの？ソラ君」

雫が心配しながら言った後、ソラは雫に頼みだした。

「雫さん。僕に水を上からかけてください。そうしたら電気の威力が増しますので節約になるでしょう」

水の特徴を思い出しながらソラは提案してきた。

「え！？でもそれじゃあソラ君が危険じゃ」

雫は急いで講義した。

「そうですよ。そんなことしても私は電気を浴びさせません」

「ソン君。いくらなんでも自分の命は大切にしなくちゃ」

朱里と雪も同じく講義してきた。

「大丈夫です。僕は絶対に耐えて見せます」

ソラは真剣な眼で言った。

「これで自分の体を張らなければ、戦うあなたたちに申し訳ありません。自分にこんな能力があるのならば使ってきたいです！！」

ソラのまなざしは本気に真剣だった。

「分かったわ。だけど、それは最後の手段ね。まずこの古井戸を調べましょ」

雫がソラの肩を叩きながら言った。

「はい」

ソラもそのことには賛成した。

「で、やっぱりこの古井戸はやっぱりS Iと関係あるの？」

雪は井戸を見ながら言った。

「そうですね。怪しいといえば、やっぱり外よりも中ですね」

ソラは考えながら言った。

「「「中!?!」」」

3人は驚きよりも、本当にと想ったほうが大きかった。

「ええ。てか、中以外怪しいところは無いので」

ソラは井戸をのぞきながら言った。

その後、なんか個か石を井戸の中に投げた。

―ポチャン！

―ポチャン！

―カッーン！

―ポチャン！

石はそれぞれ別の方向に投げられた。
だが、一つ。別の音が聞こえた。

「ビンゴですね。中に洞窟がある可能性があります」

ソラは靴紐を結びながら言った。

3人は同時にまさかと思っていた。

「今から行きますよ。何か手がかりがある間も知れません」

3人の予感は見事にど真ん中ストレートに当たった。

ソラは意味が分からず？マークが浮かんでいた。

「どうかしましたか？」

ソラは頭に？マークを浮かべながら聞いてきた。

「い、いや」

「なんでも」

「ほ、本当に行くの」

雪、朱里、雫の順で言ってきた。

「はい!!」

ソラは笑顔で思いつきり即答してきた。

3人は本当にショックを受けた顔になった。

ソラたちはソラの【デジタル・ロープ電脳子ノ縄】で下に下っていった。

ソラは別に平然に下っていったのだが、女性3人はやはり時間がかかっていた。

「仕方ありませんね」

そついいながらソラは2番目に降りてきた朱里（ちなみに1番はソラ）を体を抱いた。

「キャ!!」

朱里は驚いたのか声を出してしまった。

「ど、どうかしましたか？」

ソラはあせって手を離れた。

「そ、ソラさん。一体何をしようと？」

朱里は分かっているが一樣理由を聞いてきた。

「え？なんだか下りにくそうでしたので、僕が抱えてくだらうかと

……」

「そ、そうですか」

朱里は頭の中では喜んでいたが、ここはこらえていた。

「迷惑でしたらもちろんやりませんよ。ですが、やはり格好的に」

ソラはそついいながら降りて行った。

「だ、大丈夫ですので、その、ソラさんお願いできますか？」

朱里はこの好機を逃さずにいた。

「そうですか。分かりました」

そう言ってソラは朱里の体を抱きながら下っていった。

「では、次は雪ですね」

そう言って2人は雪を待ったが、なかなか降りてこない。
そのあと。

「そ。ソン君おねがい」

雪のわざとらしい声が井戸の中に響き渡った。
もちろん口調的にもわざとだが、ソラは問答無用に朱里と同じことをした。

「ゆ、雪さん」

朱里は降りてきた雪に言った。

「あーちゃんだけにいいことはさせないよ」

雪は朱里に言った。

もちろんソラはその意味が分かっていなかった。

「ソラ君お願い」

「分かりました」

だが、この後同じことをまたソラは行った。

第50章 終わり

第51章 古井戸迷路・雪の弱点

ソラたちは古井戸の中を調べだした。

意外と中は湿気が無く、じめじめしていない。

女性3人が一番このことを気にしていたが、その問題は一瞬で消えた。

問題は暗いところだろう。

ソラはライトを持ってきているが、他の女子は持ってきていないのである。

だが、3人とも携帯のライトを使おうとしていたが、いつか携帯は使い時が来るかもしれないのでここはみんなソラに近寄って移動していた。

「ソン君。ほ、本当に誰もいないの？」

雪は怖がりながらソラに言った。

「ゆ、雪？まさか怖がっていますか？」

ソラは何かを感じたのか聞きなおした。

「ソ、ソナコトナイヨ」

ものすごく動揺しながら雪は言った。

「雪ちゃん。このまえ聞いたんだけど、お化け怖いんだって」

雫がソラに補足した。

「し、しーちゃん!!」

雪はあせりながら雫の口を塞いだ。
どうやら凶星らしい。

ソラは感づいたのでなんの言葉を言わなかった。

「ソラさん」

「なんですか朱里」

朱里に呼ばれてソラは朱里を向いた。

朱里は遠くを指差しながら言った。

「あそこ、何か光が見えます」

たしかに朱里が指差した方向には光が見えている。
ソラも良く見たらその光に気づいた。

「あれは、火の玉ですかね？」

「ひ、火の玉!？」

ソラの言葉に雪がものすごく反応した。
気づいた二人は雪がいる後ろに振り向いた。

「火の玉って、妖怪だよね!？な、なんでこんなところに!？」

完全に雪はテンパっている。

この科学で常識が通るこの世の中、火の玉なんかいろんな考えで生み出せるものだ。

もちろん頭がいい雪はそのことは知っている。頭の中では。
ただ今は脳回路がショートしているみたいだ。

「ゆ、雪。落ち着いてください!!」

「そ、そうですよ雪さん。一旦落ち着いてください!!」

ソラと朱里は急いで彼女を慰めた。

「あ、ミイラ男」

だが、雫は面白半分そんなことを言った。
もちろんテンパっている雪の反応は。

「きゃー!!もうやだ!!」

泣きながらソラにしがみついていた。

「し、雫さん。余計ややこしくしないでください。これでは移動が
うまくいきません!!」

ソラは雪を引き剥がしながら雫に講義した。

「そ、ソラさん。あれを」

「次は何ですか?」

また朱里に呼ばれて朱里のほうを向く。

「あそこに人影が!!」

さっきと同じ方向に朱里は指を刺しながら言った。

「きゃー!!」

また、雪は叫んだ。

さっきよりも叫びは強く、中を響かしていた。

「朱里！！」

「ち、違います。本当に人影ですよ！！」

あーややこしい。

誰もがそう思った。

「だとしたらやばいですよ。さっきの叫びで見つかったかもしれない。てか、見つかってないほうがおかしいですが」

ソラは目をそむけながら言った。

冗談はさておき、ソラたちはその人影がいたところに向かって走った。

ちらみに全身の力が抜けた雪は驚かした本人の雫に任せました。

「朱里、どっちの方向に向かってましたか？」

走りながらソラは朱里に聞いた。

後ろの2人はとりあえず後で来るように言うておいていたので、全力で追う。

「左です！！」

「左ですね！！分かりました！！」

ソラは言われたとおりに左に曲がった。

――バーン！！

「ぐあー!!」

しかし、急に曲がったのはいいが、そこには壁以外何も無かった。
ソラは見事にその壁に顔面直撃を食らってしまった。

「か、壁ですね」

「え!? でもたしかにここに通っていったはず」

朱里の言葉に疑わず、ソラは考え出した。

たしかにその方向に逃げたのなら、ここには壁は無い。
ならば、SI使いか。

「そういえば」

ソラは何かに気づいたのか、急いで【スキル・アイ・リング超能力ノ眼・輪】を発動した。

「やっぱり」

「ど、どうしたのソラ君」

こっちにやっと追いついてきた雫がたずねてきた。

「僕は罨にかかってしまいました」

「は、ハニヤ?」

眼をぐるぐる回しながら雪が聞いてきた。
てか、あのときに一体何が起こった。

「罨です。この古井戸の中は完全に」

ソラは一回言葉を貯めた。

「誰かのS Iの中にいます!-!」

「え!?!」

「フニ?」

考えをまとめたところ。

ソラの眼でわかったことはこの古井戸の中は完全にS Iに犯されていることだった。

「それってつまり、私たちはもうここから逃げられないと言っわけですか?」

朱里が冷静にソラに言った。

「そういうことになってしまいますね。僕らがこのS Iの持ち主を倒さない限り」

「ふえええええ!-!」

怖いところが大嫌いな雪が言った。

ちなみに混乱はいまだに直っていない。

「一番やばいことは彼らは敵の仲間、僕らの足止めだということです」

ソラは指を立たせながら言った。
つまり、それが正しいとするなら、完全にこっちが振りになってしまっう。

そうだとしたら彼らの残された時間は少ない。

「だとしたらこっちはやばいです。早く脱出方法を考えなければ」

朱里はあせりながら言った。

「そして問題はもう一つあります。それはここが今迷路になっていることです」

ソラは次の問題を口に出した。

「め、迷路？」

雫は聞き返してきた。

「ええ。どうやらここはいまでも操作ができるみたいです」

その時、ガコンという音が聞こえた。

「それってつまり」

「はい。罾がいつでも作れると言うことです」
「それって」

雪がソラの裾を引っ張る。

「あれのこと？」

雪に言われた方向にみんな顔を向けた。

そこにはごろごろ転がってくる大岩がこっちに向かって転がってきた。

ソラたち全員（雪以外）は思いつきり2秒で1リットルの汗が流れるように感じた。

「に、逃げますよ!!」

ソラは雪を引っ張りながら走り出した。
それを追って朱里と雫も走り出した。

「つ、つまりこんなことが超即興でできるの?」

走りながら雫が言ってきた。

「か、簡単に言えばそうですね!!」

ソラもあせりながら言った。

「で、どうします? ソラさん?」

「と、とりあえず、逃げましょう!!」

朱里の質問に大声でソラは答えた。

暗い中、しかも道が知らないところで大岩が後ろから転がってくる状況は正直に言ってやばい。

「みんな、先に行ってください!!」

そう言いながらソラは雪を雫に渡し、（ちなみに雪はただいま気絶中）立ち止まった。

「ど、どうするの?」

雫は急ぎながら聞いた。

「これがもしも世界系のSⅠだとしたら」

ソラは強く拳を握った。

「これで壊せます!!」【LⅤ2・世界破壊^{ワールド・ブレイク}】!!」

ソラは大きな輪っかを思いっきり割った。
しかし、何も反応が無かった。

「うそ、ですよね!!」

ソラは効かないことを知った瞬間、また走り出した。

——これは、正直やばいです!!

第51章続く

第51章 古井戸迷路・迷路謎

ソラたちは走り続けていた。

あのおきな岩を破壊する手当てはまずソラたちにはない。ならば逃げるしか解決策が無いわけだが、これも時間の問題である。

「ソン君たち。ここは私に任せて!!」

お化けがいないことに気づいた雪はいきなり立ち止まって言い出した。

「ゆ、雪？何する気ですか!？」

ソラは不安ながらも聞いた。

「私がこの岩を止めてみせる!! しーちゃん。サポートお願い!!」
「分かったわ」

雫は何かを知ったのか、雪の作戦に応じた。
てか、作戦は果たしてあるのか？

「行くわよ!!」
「水ノ達人」
「!!」

雫は持っていた水を増やし操りながら岩の下に敷いた。
岩が水の上に乗ったとき、雪の作戦は始動した。

「凍って!!」
「ウォーターアイス」
「【水十氷】!!」

岩の下からどんどん凍り付いてきた。

ソラたちは後ろでこのことを見ている。

雪は自身気に手を腰に当てている。

だが、岩の破壊力は強く、見事に氷は割れて行った。
同時に一緒に雪も下敷きになってしまった。

「雪ー！！」

「ゆ、雪ちゃん！！」

「て、まったく成功していない！！」

3人はまた走り出した。

本当にこれはやばいことになってしまった。

「これは非常にやばいですね。どうしましょうか？」

「ソラさん。一つ思ったのですが」

朱里はソラに言ってきた。

「なんですか？」

「そういえば、さつきから分かれ道が一つも無いのですが」

朱里が言ったとおり、さつきまで一直線の道しか走っていない。
いや、道がそれしかなかったのだ。

「どうやらルートまでも決められるらしいですね」

ソラは走りながら考えた。

だが、いくら考えても、答えは出ない。

ソラは一旦、後ろを見て岩を見つめた。
そのとき、何かいい考えが浮かんだ。

「雫さん。すみませんが協力してください!!」

正面に向けなおしたソラが雫にお願いした。

「それって」

「ええ。いい回避方法を見つけましたよ」

「分かったわ。で、なにをするの？」

ソラは聞かれてすぐに向かっている先の天井を指差した。

「あそのこに取っ手をつけてくださいませんか？」

「うん。分かったわ」

雫は【アクアトロマスター水ノ達人】を使ってソラに支持されたところに取っ手をつけた。

「それじゃあ、2人ともしっかりつかんでくださいね」

そう言っソラは2人に【デジタル・ベルト電脳子ノ帯】を巻きつけた。

そして、相手法の手で取っ手に向かって【デジタル・ロープ電脳子ノ縄】を放った。
そのままくっつくように天井に着陸した。

「2人とも、怖いなら目は閉じてくださいね」

ソラは一旦忠告した。

そして、岩は容赦なく襲ってきた。

だが、ソラたちには当たりはしなかった。

「ふう。危なかったです」

「あの、ソラさん。今のは一体？」

天井に引っ付きながら朱里は聞いてきた。

「僕たちはさっきから逃げてばかりでしたので、良く観察しませんでしたよね。あの岩を。それで、あのとき雪のおかげであの岩を観察することができまして、上のほうに隙間があることに気づきました」

ソラは着陸しながら説明した。

「あ、ソン君たち、みつけた」

雪がいきなりこっちに來たので全員一気に後ろに下がった。

「お、お化け!!」

雫がボソツと言った。

「え!?!お化けってどこ?」

雪はそれを聞いてソラの後ろに下がった。

「あれ?でも足はありますね」

「わ、私死んでいないよ」

雪は察したのか、講義してきた。

「実はさっきの場所に隠れ床があったの」

「あゝ大体事態は察しました」

ソラは分かったように言った。
のこりの二人もうなずいた。

「それにしても、これでは脱出が難しいですね。【ワールド・ブレイク世界破壊】が効かないとすればどうすればいいのでしょうか」

朱里がソラに聞いてきたがソラは何か考え事をしてきた。

「もしかしたら、こうすれば」

ソラは【スキル・アイ・リング超能力ノ眼・輪】を発動したまま壁に向かった。

「【ワールド・ブレイクLV2・世界破壊】！！」

ソラは目の前に出てきた輪つかを割った。
そうしたら、目の前の壁も同時に壊れた。

「ビンゴです」

「ソラ君。今のは？」

雫が不思議そうに聞いてきた。

「どうやら、ここは今たしかに世界系のS Iですが、井戸がS Iに侵されているわけではなく、この中にS Iの力があるみたいです。
通りで上空からでは破壊できないみたいですね」

詳しく言うと、井戸自体にS Iの影響があれば、一気に破壊ができるが、この中はS Iで作られ物であり、それで破壊したらこの世界ごと、つまり、ソラたちの場所が消えてしまうことだ。
さっきソラは岩を単体に破壊すればすべてが終わっていたが、あの

行き良いでこのことを詳しく分析する暇が無かったのだ。
だが、ここはS Iで作られた空間。つまり、井戸の本当の中ではないのだ。

「これなら本当に手が出せない状態ではないことですね。移動は壁を破壊すれば言い訳ですから」

説明を終えたソラは歩き始めた。

（問題は脱出方法。このなかにこのS Iの使い手がいればいいのですが）

もし、ソラの考えがそうであれば、多分簡単に倒せるだろう。
そんなことを考えていたら次のトラップが作動した。

―バコッ―！！

「へ！？」

「そ、ソン君。し、下―！！」

そう、いきなり落とし穴として床が消えていたのだ。

「雫さん。あの壁をお願いします」

落ちながらも、ソラは冷静に指示を出した。
さっきと同じ方法で水の取っ手を作り、回避する作戦だ。

ソラを一番上にして、みんな落ちずにいた。
だが、トラップはそれだけではなかった。

なんと箱のように、地面が閉じていく。

「あ、出口が――！」

完全に出口がふさがれて閉まった。

そしていまソラは両手が使えない。

これはピンチだと思ったが、1秒で閉ざされた床が破壊された。

「残念ですね。【世界破壊】ワールド・ブレイク 足でもいいですよ」

上りながらソラは言った。

「でもなんでいままで手で割っていたの？」

雪が聞いてきた。

「手のほうが隙が無いですし、次の攻撃に移りやすいからです」

ソラはそう言いながらみんなを引き上げた。

みんなが引きあがった瞬間、次は棘つきの壁が出てきた。

「なめては困りますね。【世界破壊】ワールド・ブレイク――！」

ソラは地面に輪を出して叩き割った。

両方の壁が床ごと破壊された。

床はあらかじめ、水を張って凍らせおいたためソラたちが落ちる心配は無かった。

「前に場所が無いなら下を使えば発動できます」

ソラは手を前にできないときや、側面を破壊するときは地面に向かって割るのだ。

そうすることでこの状況での隙がなくなるのだ。

安心できると思った瞬間、第4トラップが発動した。

次は天井から壁が次々に早く落ちてくるものだ。

「朱里、お願いします!!」

「はい!! 準備はもうできています!!」

朱里は逆方向に先が大きい銃を作り出した。

「サンダー・ウェポン【電撃ノ銃装備】、ジェットキャノン!!」

ソラの【ベルト帯】でみんなひと集まりしたら、朱里は引き金を引いた。その瞬間、壁よりも早く、朱里たちは進みだした。

あっという間に、壁は落ちてくるのに追いつけなくなっていた。その瞬間を逃さずに、ソラは【ワールド・ブレイク世界破壊】を発動して破壊した。

「さあ、早くおびき寄せますか」

ソラのこの言葉には確かな確信があった。

第51章続く

第51章 古井戸迷路・迷路の謎

「あの男、危ないな。だが、俺の場所は分からない」

一人の男が、謎の画面を見ながらつぶやいた。
まるで楽しんでいるかのように微笑んでいた。

「そして、お前らはここで干からびる！！」

その画面にはソラたちの姿があった。

落とし穴に閉じ込められた僕は考え事をしていた。

たしかにこのトラップは予想していなかったが、だが、あまりにも弱い。

実際、床を利用するトラップは基本弱いのです。

落とし穴は所詮落ちるのみ。

実際、人を傷つけるなら、天井を利用するトラップを使用するはず
です。

なのに、さっきから天井からのトラップは見当たりません。

岩石、落とし穴。

まるで、天井が傷つくのを恐れている気がします。
ならば、僕にだって考えはあります。

そして、その考えが正しいなら、正気はあります。

ですが、深追いは危険です。すこし危険ですが、様子を見ましょう。

（やっぱり、あのときの考えはあっていましたね）

ソラはあのとき、のことを思い出していた。

そして、すぐにソラは確信を持った後、すぐに指示をだした。

「雪、水の一部のみを凍らせることはできますか？」

ソラは雪に聞いた。

「う、うん。どんどん凍っていつちゃうけどいい？」

いきなり聞かれて雪は驚いていたが、ちゃんと質問に答えてくれた。

「それで十分です。雫さん。水を使って、僕らを天井まで運んでください！！雪は土台をお願いします」

ソラは指示を詳しく言った。

「うん！！」

「了解！！」

雫と雪は張り切って言うてくれた。

雫は円形に水をまいた。

アクアトロマスター

その後、【水ノ達人】を発動した。

雪はその上を凍らせた。

これで土台は完成した。

そのあと、みんなその土台に乗った。

「雫さん。お願いします!!」

「うん」

雫は指を上に入れて水に指示をした。

水はそのまんま上に上っていった。

天井にぶつかりそうになったとき、ソラが動き出した。

【Lv2・世界発動^{ワールド・ブレイク}】発動!!

ソラは天井に向けて、拳を上げた。

いきよいで輪は割れて、天井が破壊された。

そして、とうとう、このS Iの使い手を見つけた。

「見つけましたよ!!」

「な、長門ソラ!!なぜ分かった!!」

水の行き良いでソラは跳んだ。

「残念ですが、今は急いでいるので、スミマセン!!」

ソラは男に思いっきりかかと落としをお見舞いした。

もちろん、男は気絶した。

気絶したのでS Iの発動が解けた。

「やはり、ラピンス・クリエーター【迷宮ノ製作者】ですか」

ソラは冷静に言った。

しかし、もちろん気絶しているので返事はない。
そして、どンドン、井戸の中の本当の景色が出てきた。

「これは」

ソラそこに描いてある壁画を見た。
そこには人間2人がかかれていた。

「ソラさん。これは」

朱里は明らかに日本語では書かれていない文章を指差した。
みんな聞かれたがもちろん答えられない。
誰もがそう思ったとき。

「この世に居座る哀れな人間。もろく、そして弱い。われに従える
なら未知なる力を与えやってもよ」

ソラの左眼の瞳が変化しながら言った。
しかも、ソラの意味に関係なく【スキル・アイ・リング超能力ノ眼・輪】を発動していた。
どうやらこの言葉が読めているらしい。

しかし、今の言葉、確かに一人の人間がもう一人の人間にひざまづ
いて手を差し伸べているてだ。
立っているほうがここに書かれている神で、ひざまづいているのは
本当の人間。

「たしかに、ここに書かれているとおり、S Iは人間が生き残るた

めの能力かもしれませんね」

ソラは冷静にいった。

だが、みんなはソラにこの言葉が読めたことに驚いている。
ソラの瞳はあいからわず変化している。

「ですが、なぜ、ここを隠す必要があったのでしょうか」

ソラが悩みながらいった。

そのとき、最後の文を見つけたソラは読んだ。

「これは、もしかして!!」

ソラは何かに気づいたらしくあせった表情になった。

「みなさん。早く戻ります!!」

「「「え!?!」」」

全員驚いた声を上げた。

「香奈が危ないかもしれません!!」

ソラはそういつて気絶した男を【^{ベルト}帯】を使って巻き、出口を探した。

「急ぎます!!もう手遅れになるかもしれません!!」

出口を見つけたソラはみんなを連れて走り出した。

ちなみにぐるぐるにされた男は引きづった。

「誰だ貴様らは」

外を見張っていたレンジは謎の黒ずくめの人2人に聞いた。
しかし、返事はなかった。

「屍じゃないんだよなお前ら、なぜ答えない」

そのとき、前にいた背の高いほうが手を出した。

「レンジさん、危ない!!」

「チッ!!」

いきなり、針が手から出てきた。

優菜に呼ばれたレンジはぎりぎりに避けることができた。

「こんなことができるというのはS I使いか!!」

「レンジさん。こっちです!!」

「ちい!!」

いきなり横から背の小さいほうが抜けてきた。

「行かせない!!」
ライン・シールド【線ノ盾】!!」

優菜はあらかじめ書いていた線を発動した。

そのとき、その人のフードのなかから髪らしきものがでてきた。
そのまんま盾を切り裂いていった。

「う、嘘!!」

「大木の盾が一瞬でかよ!!」

優菜もレンジも驚いた。

確かに今まで破壊されることはあったが、真っ二つに切り裂かれることは1度もなかった。

優菜は追うように走り出した。

「逃がしはしない」

その言葉と同時に針が飛んできた。

「お前らはここで殺す」

背の高いほうがフードを脱いだ。

短髪で、めがねをかけてさらにはデブだった。

「おまえらここで終わらす」

だが、格好はなんか変身ベルトみたいなものをつけていた。

「まじワロス」

なんだかいやな予感がしたレンジであった。

第51章終わり

第52章 合流と謎

「じゃあ、行くぞ！！スーパーハイパスピア！！」

フードを取った男は必殺技らしき名前を叫びながら針を出した。

「だまれ！！」

レンジはいらいしながら鉄の盾で防いだ。

「レンジさん。加勢します！！」

優菜はレンジに言った。

「いいや、大木はあいつを追え。俺は今こいつをボコボコにしてから行く！！」

レンジは大声で言いながら優菜に先に行かせた。

「えゝ俺的にはあの子にご奉仕されたいのだけどゝ」

男は足をくねらせながら言った。

「黙れ、うざい！！戦いは奉仕じゃねえぞ！！」

「でもでもゝやっぱりかわいい子に殴られるならそれがいかも」

レンジのイライラのメーターは増大に上がっていつている。

「黙れ！！この餓鬼！！」

レンジはそう言いながら鉄の棒を持ちながらダッシュした。

「うるさい！！俺は20代だ！！」

「もっぱらダメ人間じゃねえか！！」

レンジは力任せに棒を振った。

「うるさいな」青年

男の腕から一気に針が連射された。

「ちっ！！」

レンジは仕方なく、防御に回った。

そのまま後ろに下がり、体制を整えた。

どうやら、彼はどこから針が出てくる能力であろう。

「さっきからその針は邪魔だな……………て」

なんと男は上のTシャツを脱ぎだした。

「なにやってるんだ貴様は」

「何って準備だよ準備」

男は腰に手を当てながら言った。

「準備。だと？」

しかし、いかにも怪しいとレンジは思った。

ここで脱ぐやからは変態か、その能力の最大に使い残すための。
だが、こいつは怪しすぎるのでまったく見当は付かない。
まあ、変態と言うのは大まか正解だが。

「ごちゃごちゃ考えてもきりが無い。

レンジはそう重い、鉄を新しい形に変えた。

「これはどうだ」

鉄の棒はまるでいや、本当に鎌になった。

「ふんだ、そんなのかんけーねえ!!」

男は足ふみを始めた。

「行くぜ、デブ野郎!!」

「違う!!俺の名は細川瞬だ!!」
ほそかわしゅん

「いや、逆だろ!!」

たしかにこの体系でいかにも遅そうなのに細いに瞬なんておかしい。
いかにも太山遅のほうがあっている。

「ふん、その余裕も今のうちだぜ!!」

レンジは鎌を構えた。

そのままダッシュし、細川に突っ込んだ!!

「じゃあな、デブ川!!」

レンジは思いつきりほえた!!

そのとき、細川は思いつきり両腕を広げていた。まるで、抱きつくような。

「発射スタンバイ!!」

こいつまじやばいと心の中でレンジは叫んだ。だが、レンジの考えは外れた。

細川の体から一気に針が前方発射された。

「なっ!!」

レンジは鉄の鎌を回しながら防御した。

そのまま着地した後、なるべく後ろに下がった。

（なんだ、いまのは）

いかにもあやしい。

何にも無いところに針が大量にレンジに向かってきた。もちろん、いまの細川は上半身裸だ。

なんだかいやな図だが。

「しかし、やつは何も仕込んではいないな」

そこでレンジはひらめいた。

その考えとは。

「あいつ、汗を利用しているのじゃねえか？」

レンジはそうぼそっとつぶやいた。

だが、それはあまりにも単純すぎる。

レンジが考え中でも相手にとってはお構いなし。

「第二発射!!」

「ちい!!」

レンジは避ける。

「オールレンジ」

「げ!!」

レンジがいるところ前面に針が飛んできた。

——しまっ!!

そのときだった。針はレンジには当たらなかった。

「レンジ君!!」

レンジの目の前には水が浮かんでいて針を飲み込んでいた。そのままどんどん凍り付いていった。

「レンさん!!」

雪と霰がどうやら到着したみたいだ。

「おそくなってごめんなさい」

「ああ、それはいいが、ソラはどうした」

レンジはソラの姿が無いのを気にして聞いた。

「ソン君はさきにかーちゃんの所に行ったよ」

雪が説明した。

「そうか。だったら問題は無い。おい、窓辺！！あいつは変態だぞ！！」

レンジに言われて雫は近づいた。

「雫でいいわよ。でもそうだとしたらソラ君を連れてくるべきだったかしら」

「しーちゃん。それあの人死ぬ」

雪がすこし笑いながら言った。
だが、たしかにソラが相手なら容赦なく殺される可能性は高い。本能的に。

「じゃあ、攻撃はお願いね。私はあのおデブの動きを止めるわ」

雫は指示を出した。

雪も同時に雫と同時に動いた。

「こっちよ。来なさい」

「おお、巨乳のお姉さん」

細川は雫に付いていった。

「さあさあ、早く来てね」

「おお、こっちのレベル高い！！今日はもてるな俺！！」

完全に油断している。

「じゃあ、まずこの水かぶってね」

雫は思いつきり細川に水をかけた。

細川は気持ちよさそうに水をかぶった。

「じゃあ、次はこっち」

雪が足場を凍らせた。

「もしかして君たちSI使い!!」

遅い。

だが、もう遅い。

「死ねゝ変態!!」

レンジは思いつきりジャンプして鎌を振り下ろした。

「なめるな!!」

細川の体の全身から針が出てきた。

と、思ったが、針はまったく出てこなかった。

「ホゲラ!!」

思いつきりレンジの攻撃を食らって細川は気絶した。

「やっぱり。汗を針に変えるのね」

「水で汗を流したので無効化」

2人は分かっていたらしく声をそろえていった。
てか、本当にその通りだったとは。

第52章 終わり

第53章 金髪の力

ソラは走っていた。

雫たちは正面でレンジと合流しているとき、ソラのみ別のところで移動していた。

簡単に言えば窓だが。

ソラは窓から中に入った後、香奈たちがいる方向へ向かった。

優菜はなんとか香奈と合流に成功した。
だが、問題は山積みだった。

優菜が盾を張っても、さっきのように髪みたいなものに破壊されてしまう。

「……」

そして何もしゃべらないので何を考えているのか分からなかった。
しかし、このままでは優菜が不利だ。

「あ、優菜ちゃん。怪我」

「あ、ありがとう」

優菜の腕にかすかなカスリ傷があった。

さっき、盾が破壊されたとき、とばっちりで切れたのだろう。

香奈は手を光られて治療を始めた。

どうやら、使い方は慣れてきている。

実際発動は難しくは無いのだろう。

「でもどうする？このままじゃ勝てない」

優菜は香奈に言った。

香奈は治しつつ聞いていたが作戦はやはり作り出せない。

「まずは、相手のSIを良く知らないよね」

優菜はそういった後、直った手を回しながら言った。
だが、やはり作戦はないままだ。

「優菜おねえちゃん。手伝う」

あさみが優菜の横に来て言う。

「ありがとうね。じゃあ、まずあのフードを取りに行くわよ」

いかにもあのフードの中は怪しいと思った優菜はそうあさみに伝えた。

あさみはうなずいた。

あさみは右に、優菜は左に回りこんだ。

先に仕掛けたのは優菜だ。

優菜は棒を使って棒術戦へと移行する気だ。
だが、優菜の思惑は違った。

優菜はいわゆる囷だ。

優菜に気が回っている間、あさみがひとまずフードを取る作戦である。

「……………」

しかし、見事な反射神経で避けられてしまった。
だが、そのときだった。

あさみが空振りしたとき、後ろから手が伸ばされた。

「！！！」

「こんにちは」

ソラだ。

一瞬ですべての状況を理解したソラは優菜の作戦にのった。
もちろんそのことを知らない優菜、あさみ、香奈は驚いていた。

ソラはフードに手をかけた。

そのまま力を入れてフードを脱がせた。

「え！？」

「お、女の子！？」

ソラが取ったフードをかぶった正体はソラたちと同年齢と言えるほどの金髪の長髪の美少女だった。

ソラは女の子と分かった瞬間、次の攻撃に移るための足を止めた。
いくらなんでも女性を問答無用でいきなり蹴ることはできない。

「き、君は」

ソラは聞き返した。

「くうくさっそくうまくいくと思ったのに。って」

少女の言葉がいきなり途切れた。

「そ、ソラお兄ちゃん？」

「み、美沙^{みさ}！？」

どうやら2人は過去に出会ったらしい。

「な、なんでここにいるの？」

「それはこっちのセリフです」

ソラと美沙を言われる少女は言い合った。
それを良く見ていない優菜は聞いてきた。

「え！？ソラ君。知り合い？」

「あ、あのーいい、一体どうゆう関係で……」

香奈も優菜につられて聞いた。

「えーと。簡単に言いますと、僕らに海にご招待してくれた人の娘です」

全員が目が点になった。

金髪美少女の名は朝方美沙^{あさがたみさ}。

本人の父親は昔ソラの父親のつまり研究室の助手の一人なのだ。
いまは母親が切り盛りしていた海の宿泊で働いている。
つまり、日は少ないが、彼女とソラは何度か会っている。

「本当にお久しぶりですね。それで、君は一体何を？」

ソラは改めて聞いた。

後ろで3人は納得しない眼で見えていたがそこはあえて気にしない。

「え？バイト」

4人同時にこけた。

「ば、バイトっているいろいろ突っ込ませてください」

ソラは起き上がりながら言った。

「私ね。そこのおねいちゃんたちみたいに変な力があるの。でね。一人のおっさんがこの女性を捕らえてくればいくらでも金を出すって言ってくれたの」

まだ4人同時にこけた。

「それで、引き受ける人がいますか！！君の頭は一体なんですか！？」

「えっと。ふつうに伸ばしている」

「髪型ではありません！！」

「そうといわれてもねーまあ、とりあえず」

美沙はいきなり髪を伸ばした。

「つかまって！！」

そして香奈に向けてはなった。だが、ソラが蹴り飛ばした。

「え!？」

美沙が驚いたように声を上げた。

「なに驚いているのですか。仲間を守るのは当たり前です」

ソラはそう言いながら「スキル・アイ・リング超能力ノ眼・輪を発動した。

「もし、君が手を出すなら、僕は仲間を守りために君と戦います」
「な、何でその子をかばうの？」

美沙はいまだに驚いた顔で言った。

「何回も言いますよ。仲間だからです。君のバイトとは違い、信頼できる仲間です」

ソラは強気にそういった。
仲間のことになるともう止められない。

「だ、だったらいいもん。ソラお兄ちゃんより私のほうが強いもん
!！」

美沙は前方に髪を伸ばした。

「聞いているのよ。男性のどちらかは力が使えないってね。さっき
の人は使えたからソラお兄ちゃんは使えないのだよね」

髪がソラの周りを覆った。

「私の【不思議な髪】^{トリック・ヘヤー}の敵ではないよ」
「それがどうしたのですか」

覆った髪の中からソラの声が聞こえた。

「【^{デジタル・ベルト}電子ノ帯・^{ハンド}手】！！」

ソラは髪の覆いを破った。

左手には帯で作られた大きな手があった。

右腕の帯を背中に通して左手まで持っていて、自分の手を基準に大きな手を作り出した。

「君は僕には勝てません。理由は能力ではありません」

ソラは大きな左手を持ち上げながら言った。

「志であなたは僕に勝てません」

ソラの目はいつもの戦うときの真剣な眼だった。
そのまま手は消して、ソラは次の攻撃に移った。

「くっ、【^{トリック・ヘヤー}不思議な髪】！！」
「【^{デジタル・ロープ}電子ノ縄】！！」

美沙は突進的な髪を伸ばした。

それに対してソラは右腕を前にして、リストバンドの周りから縄を放った。

縄は美沙の髪を避け、美沙のところまでたどり着き、拘束した。

「僕の勝ちです。美沙」

第53章 終わり

第54章 second dust・新の恐怖

雪、雫、レンジはソラたちがいるところへ来た。

美沙はソラの隣でおとなしく座っている。

場所はいろんなものが捨てられているガラクタ置き場である。

「で、ソン君はなんでそんなに急いでいたの？」

「ええ。それはですね」

「蒼希香奈の能力が特別だからだ」

暗いところから声が聞こえた。

その言葉はソラが言おうとしていた言葉をさえぎっていた。

「蒼希香奈のS Iは【セカンドフェイス第二型】でしかもその中でも特別なものだ」

暗闇から出てきながらしゃべっていたのは茨城浩介だった。

「やっぱり、あなたが犯人でしたか。さまざまなS I使いを従えていたのは。一人はバイトですが」

ソラが指を刺しながら言った。

そのあと、浩介はその言葉を理解しているため、「ははは」と笑った。

「正解だ。長門ソラ。だがな、俺が従えていたのは人間のみではない」

「え！？」

みんなソラに続いて驚いた。

「さあ、目覚めろ、【セカンドフェイス第二型】、【スクラッパガラクタの兵】！！」

そう言ったとき、浩介の両隣のガラクタの山が大きなロボに変化した。

しかも、それだけでなく、ソラたちの周りにもガラクタの山が同じようなロボがさらに二対出てきた。

「ガラクタの、ロボット！？」

ソラはそうつぶやいた。

大きさはざっと、ソラの10倍ぐらいの大きさだ。

「しかも4体も」

完全に道が一個しか残らなくなった。

「ソン君。こういうのって大抵世界系のS.Iだよね。破壊して」
「え、ええ」

雪にそういわれたが、ソラはなんかいやな予感がしていた。

「【スキル。アイ超能力ノ眼】、【Lv2……】」

ソラの前に大きな輪が現れた。

「……ワールド・ブレイク世界破壊】！！」

ソラは思いつきりその輪を割った。
だが、変化は起きなかった。

「残念だな。セカンドフェイス【第二型】のSⅠが【第1型】のSⅠと一緒にするな。ファーストフェイス世界系は【第一型】のみの形状だ――！」

浩介が大声で言い放った。

「やっぱり、そうでしたか」

「そ、ソラ君。それってどういうこと？」

優菜が聞いてきた。

「ファーストフェイス【第一型】は系統があるSⅠで区別が作られおり、現実に近いものが多いです。ですが【第二型】セカンドフェイスはゲームでいうチート技のオンパレードのことをさします。これには系統は存在しません――！」

その言葉に反応するようにゴーレムたちは動き出した。

「いくぜ、ソラ――！」

「え、ええ」

レンジの言葉にあやふやだがソラは答えた。

「今です――！朱里――！」

そのあと、ソラは叫びだした。

その言葉が合図みたいに、何発のレーザーがゴーレムたちを狙った。

「こ、これって」

「朱里にはこの後の戦闘を予想して、別のところで待機してもらっ

てました！！」

香奈の疑問にソラは答えた。

だが、安心だけはこのときはできなかった。

「残念だな。俺のゴーレムがそんな攻撃が効くものか」

浩介がそういった後、ゴーレムたちを覆っていた煙が消えていく。完全に見えたとき、そこにはまったく言葉の通り、攻撃が聞いていないゴーレムたちがあった。

そのなかで、一番朱里に近いゴーレムが朱里をにらみつけた。

「やばい、デジタル・ベルト【電子ノ帯】！！」

ソラは朱里に危険があると感じて一気に朱里のところへ行った。

だが、ゴーレムはすでに攻撃態勢であった。

思いつき腕を後ろに下げ、拳を突き出そうとしている。

ゴーレムの拳が朱里のいるところへ一気に突き出された。

だが、攻撃は明かりには当たらなかった。

「大丈夫ですか？ 朱里」

「ソラさん」

ギリギリのところでもソラの救出が間に合ったようだが、まったくここでは安心できなかった。

「ソラ君。あぶない」

香奈が叫んだとおり、もう一体のゴーレムが攻撃態勢になっている。いくら空中戦が戦闘スタイルになっているソラでも、この高さでしかも女子を抱えている状態では避けることは難しい。

しかも、もうすでに攻撃しようとしているところで気づいてしまった。

「朱里、危ないです!!」

ソラは朱里をやさしく落とした。

だが、この高さではやさしさもクソもないが、ソラはいまこれ以外の朱里を救う方法が無かった。

ここに残れば、怪我は確実である。

「ソラさん!!」

落下しながら朱里は叫んだ。

そのあと、レンジが朱里をキャッチした。

「やれ!!」

「【電脳子ノ……」

ソラが回避体制をとり始めた。

——やばい!!

しかし、間に合わず、思いっきりゴーレムの拳がソラに当たった。

「ソラお兄ちゃん!!」

美沙が叫んだ。

拳だけならず、壁にもぶつかってしまったのでもう体が無事に済むはずは無い。

だが、ソラは無事だった。

ソラの背中には金色の網が張られていた。

いや、正確には髪の毛だ。

「み、美沙」

「ソラお兄ちゃん、無事？」

そのまま美沙はソラを地面へ持っていった。

「あ、ありがとうございます」

「ソラ君、今すぐに怪我を治すからね」

壁にはぶつかっていないのでそれほどのダメージは食らっていないな
かった。

香奈が少し治療した後、ソラは叫びだした。

「みなさん、いますぐ逃げてください！！」

『！！！！』

みんないままでソラが言っていない言葉に驚いていた。

「お、おい、ソラ！！」

「いいですから、今はここから離れましょう！！」

ソラはそう言いながら、美沙を抱え、香奈の手を取った。

「早く!!」

そう言いながら走り出した。
みんなも続いて走り出した。

この状況、ソラはこのままでは勝てないと判断した。
理由は一つ。

それは戦力の差だ。

あのS Iはおそらく破壊系のものだ。
今の優菜ではあの拳は防げない。
何しろ、破壊する手当てがないのだ。

さっきだって朱里の攻撃は聞かなかった。
この中で朱里が最高の攻撃力を持っているのだが、それが聞かなかった。

それはソラたちの攻撃が全て効かなくなるといってもいい、

ソラはただ、逃げるのみの指示しか出せなかった。
手をつないでいる香奈はその思いがはつきり伝わっていた。

「……ソラ君」

香奈は心配してソラの手を強く握った。

「逃がすな、ゴーレムよ!!」

浩介の言葉にゴーレムは反応し、動き出した。

「くっそ!!」

ソラは香奈の手を離し、美沙を放した。

「ソラ君!!」

「ソラお兄ちゃん!!」

「早く逃げて!!」

ソラは完全に自分が犠牲になろうとしていた。

第54章続く

第54章 second dust・決意と……

ある一人の男がさつきソラたちがいた井戸の中にいた。

「これは、あいつは読めたのか」

男は驚きながらつぶやいた。

さつき読んでいたところは見ていないが、だが、たしかにこれを見て彼は理解していた。

男は悩みだした。

そのときだった。

「海くん。ここにもおかしいところは無かったよ」

もう一人の少女が男の名を呼んだ。

「智美^{とちみ}。お前はこれを読めるか？」

海はさつき見ていた絵を指差した。

「ううん。まったく。それがどうしたの」

智美と言われる少女は首を振った。

どうやら2人は仲間らしい。

「そうか。だったらあいつはなぜ、これを読めた」

「それって、文字が読めるSII!？」

海の言葉に智美が反応した。

「いや、そうじゃない。これはS Iはまったく次元が違う」

海は手をあごにおいて悩みだした。

「あれ？海くん、ちょっと楽しくなってきた」

智美が微笑みながら言った。

凶星だったらしく、海は驚きながら智美の顔を見た。

「良く分かったな」

「えへへ。だって私、海くんの彼女だもん」

そのあと、海は智美の頭をなでた。

だが、眼は真剣そのものだった。

「あいつは一体。何者だ」

海はそうつぶやいたあと、智美に言った。

「智美、あいつらを追うぞ」

「海くん？」

だが、智美の顔には心配の要素が無かった。

「うん。分かった」

「もし、俺の読みが当たりならあいつらが危ない」

海と智美はともに走り出した。

「だめ！！ソラ君！！」

「ソラお兄ちゃん！！」

香奈と美沙は立ち向かおうとするソラを止めようとする。

「ははは！！そっちから来てくれるなら容赦はしない」

「みんなは早く逃げてください！！」

ソラは走り出した。

ゴーレムの拳を次々に避けていく。

「ちっ、早いやつだ！！」

「大きさのみでは勝負は決まりません！！」デジタル・ベルト【電子ノ帯】！！」

帯は見事に一体のゴーレムの体に巻きついた。

だが、安心はできなかった。

「そんな帯、このゴーレムをなめるな！！」

巻きつかれたゴーレムは力任せにソラの帯を引きちぎった。

「！！」

いままで相手自ら引きちぎられたことが無いため、これは異常な驚きだった。

「そんな」

「貴様など、敵にもならない！！」

ゴーレム全員がソラに向かって拳を突き出した。

「ソラ君！！」

近くに優菜が来た。

そのまんま、ソラと自分の周りに線を引いた。

「私が防ぐ！！」
ライン・シールド
【線ノ盾】！！」

優菜たちの周りに大きな盾が現れた。

ゴーレムの拳と盾がぶつかる。

「優菜、ダメです！！これでは君の体力が！！」

「そ、ソラ君」

その時、有菜の盾にひびが割れた。

拳がソラたちに襲い掛かった。

だが、手をどけたときにはソラたちの姿はなかった。

「ソラ君。無事？」

「優菜おねいちゃん！！」

ソラは水の上におり、優菜はあさみの手にいた。

「た、助かりました。2人とも」

ソラは優菜の分までお礼を言った。

「それなら、私たちをもつと頼ってよ。ソナ君」

雪がソラに向かいながら言った。

「そうですよ。戦うときも、逃げるときも一緒です」

朱里も言ってきた。

「雪、朱里」

「俺たちの力をなめるなよ。知将さん」

「レンジさん」

「私たちを好きに使って、ソラ君のおかげで今の私たちはいるの」

香奈の言葉はみんなが当てはまっていた。

たしかに今、ソラがここにいないければ、みんな違う道、最悪の道に進んでいたかもしれない。

ソラにはそのことが実感できていなかったが、いま香奈の言葉で目が覚めた。

「全部、自分で背負わないでください」

「ありがとう。香奈」

そう言っソラは立ち上がった。

「みんなでここを切り抜けましょう」

『おう！！』

ソラの言葉にみんな手を上げた。

「このままでは逃げてもいつかは追いつけられます。ならばここで戦うのが吉」

ソラがみんなに作戦を伝えた。

「ならば、あのゴーレムの大きさを逆に利用させてもらいましょう！――まずは狭いところまでおびき寄せましょう！――」

そう言つてソラは何名かの2組に分けた。

一組目は逃げる役目を持つ、ソラ、香奈、あさみ、美沙。

もう二組目は攻撃の準備に移るために先回りをして待機する。

ソラが狙われているなら、いざというときのために、香奈は同行させてもらう。2人は香奈の警備だ。

美沙はソラの空中戦のサポートにも回ってもらう。

「こつちです！――」

ソラたちはおびき出した。

距離はまったく遠くないのであっさり来ることができた。

「ここなら、そのゴーレムは動きが取りにくいですよ。さあ、どうします！――」

「そんなの関係ない！――いけ、ゴーレムよ！――」

浩介はゴーレムに指示を出した。

――引つかかった！――

「今です！――隼さん」

ソラは叫んだ。

「ええ。いけ！！水ノ蛇！！」
アクア・スネーク

大きな水蛇がゴーレムたちの上に振ってきた。
だが、これは攻撃のためではなく、攻撃するための準備だ。
ちなみに詠唱はあらかじめ発動していた。
攻撃力をなくすことで大きな蛇を作ることができたのだ。

「朱里！！今です！！」

ソラがとどめの言葉を言い放った。
だが、現実そんなに甘くは無かった。

「残念だな、いけ、【ガラクタの兵】」
スクラッパー

ゴーレムの近くにまたさつきより少し小さいゴーレムが作成された。

「しまった！！」

「やれ！！」

ゴーレムの腕がいきなり大きくなり、雫と朱里を襲った。

「雫さん、朱里！！」

「おっと、お前も一緒に行ってもらうぜ！！」

もう一体のゴーレムがソラをロックオンしていた。

——これは、避けられない！！

ソラはそう思い、眼をつぶった。
だが、痛みは無かった。

「大丈夫か？お前」

声が聞こえた。

ソラはつられて眼を開けた。

「き、君は？」

「俺、俺の名は及川^{おいかわかい}海お前は？」

そこには長い棒を持った少年がいた。

「な、長門ソラ」

第54章続く

第54章 second dust・朧月夜〔ヴェイク・ムーン〕

ソラは海に言われて名乗った。

「じゃあ、ひとまず下がってくれ、長門」

背を向けながら海は言った。

「こいつは俺が狩る」

そう言って海は両腕を前にあげた。

「発動！！」^{ヴェイクムーン}【朧月夜】！！」

海の掌から月みたいな円形の光が出てきた。

その光はやがて細く、長くなっていった。

そして海はそれを手に取った。

「【人に不可能の肉体を与えるSI】、^{ヴェイクムーン}【朧月夜】。暴れだせ！！」

そう言って海はゴーレムどもに突っ込んだ。

「人に不可能の力を与えるSI？」

ソラはそうつぶやいた。

「やれ！！ゴーレムよ！！」

浩介はゴーレムに指示を出した。

指示通り、ゴーレムは海に攻撃を仕掛けてくる。

「遅い!!」

だが、海はひらりとゴーレムの拳を避けた。

「高い!!」

ソラは驚きながら言った。

他のみんなも驚いていたが、一人のみその光景を何度も見ている人がいた。

「あれが、海くんのS.Iです。長門さん」

「君は!？」

ソラは聞いた。

「はい。みやべともみ宮部智美と言います。彼のパートナーです」

智美は自己紹介をした。

「さて、私も海くんの援護しますね。マジック・ステッキ【魔法ノ杖】」

智美の手からは杖が出てきた。

そしてそのあと、杖の端を地面につけた。

「ナチュラル・トラップ【自然の拘束】!!」

地面からは8本ほどの草の根が出てきた。
そのままゴーレムの動きを封じ込めた。

「ナイスだ智美!!」

海は高く飛んだ。

「切り裂け!! 月刃!!」

棒の先端が月型の刃が出てきた。

「月夜に沈め!!」

刃はさらにでくなり、ゴーレムの腕を切り裂いた。

「彼、すごいですね」

ソラはボソツと言った。

「うん? 力が?」

智美は何がすごいのか確かめた。

「いいえ。一瞬で間接部分で一番弱いところを狙っていました。しかもあんな瞬時で」

ソラは感心しながら言った。

その姿を微笑みながら智美は見ていた。

「でも、このままでは限がありませんね。宮部さん」
「なに?」

「力をお借りできることはできますか?」

ソラは確かな確信を持っていった。

「うん。いいわよ」

「ありがとうございます。雪」

「な、なに？」

ソラに言われて雪は返事した。

「大きな一撃を出したいのですが、構いませんか？」

「うん。構わないよ」

雪は笑顔で言った。

「ありがとうございます」

ソラはお礼を2人に言った。

「香奈はみなさんの保護を！！」

「はい！！」

香奈はそう言って優菜たちのところへ向かった。

「で、どうするの？ソン君」

「宮部さん。水系の技でゴーレムに届きますか？」

「うん。全員のゴーレムに当たるよ」

智美は親指をつきたてていった。

「ありがとうございます。雪」

「うん。ソン君がやりたいことはわかったよ。任せて♪」

ソラはその言葉を聴いてうなずいた。
雪もうなずき返した。

智美はそれを見た後、黙り込み、杖に力をこめた。
そのあと、眼を見開いて、大きく呪文を唱えた。

「いでよ！！」
トゥ・アクアタワー
【10の水柱】！！」

10本の水の柱が全ゴーレムの足を止めた。
そのあと、雪はその1本の水の柱を触った。

「凍って、
ウォーターアイス
【水十氷】！！」

水の柱が見る見る凍っていき、足場が作られた。

「おっし、足場ができた！！」

それを見た海は足場を利用し、上っていった。
ターゲットはもちろん、浩介だ。

「くそっ！！いけ、ミニゴーレム！！」

だが、海の前には海の身長ぐらいのゴーレムが足止めに来た。
手は剣に形になっている。

「ちい！！」

「俺はやられない！！」

「それはどうですかね」

この氷を上ったのは一人だけではない。
ソラが浩介で飛んでいた。

「き、貴様!!」

「僕たちのこと、忘れないでください」

ソラはそのまま浩介にとび蹴りをした。
顔面に思いつきり当たった浩介はそのまま地面に叩きつけられた。

「おっと、このゴーレムも消さないとな」

そう言つて海は後ろに一步下がった。
そのあと、棒を振り回した。

「行くぜ!!」
【ウェイクムーン朧月夜】!!」

振り回した棒はそのまま月状になっていった。

「【回転突転・月槍!!】!!」

行きよいがある突きがゴーレムの腹部分に貫通した。
そのまま縦に棒をまわして真つ二つにした。

「俺をなめるなよ。オッサン」

ソラは一気に下に下がった。

「僕たちの勝ちです」

「こ、この餓鬼が」

浩介が立ち上がりながら言った。

「あ、そういえば、一つ言い忘れてました」

ソラが思い出しながら言った。

「作戦はもう一つありました」

「何だと」

ソラは合図を送るように指を鳴らした。

「狙い通りです！！ソラさん」

後ろを見てみるとそこには【サンダーズ・フラワー電撃ノ花火】を持った朱里がいた。

「思いつきりやってください、朱里！！」

「手加減はしますよ」

朱里は言われたままに引き金を引いた。

「くそっ！！【スクラッパーガラクタの兵】」

浩介は近くにあったゴーレムの盾を作ったがもう遅い。

電気の光線は容赦なく浩介にヒットした。

「き、貴様ら、ゆ、許さん」

電気の光線を浴び終わった浩介はそう言って気絶した。

「はあはあ。皆さん。ありがとうございました」

そう言つてソラは地べたに倒れるように座つた。
朱里もつられてその場に座つた。

「おい、長門。これで終わりじゃない」

海がいきなりソラに告げた。

「もう一人、あいつらに仲間がいる」

「えー!!」

ソラは立ち上がった。

「及川さん、知っているなら朴をそこまで連れて行ってください」

「ああ、いいがお前の仲間はとうする？」

海は目で合図しながら言つた。

いまの香奈たちはほとんどS.I.の使いすぎで疲れている。
これ以上の戦いは無理だ。

「無論。僕だけで行きますよ」

ソラははつきり言つた。

「ならよし!! 付いて来い!!」

「香奈は皆さんに付いていてください」

ソラはそう言つてその場から離れた。

「気をつけてください。ソラ君」

香奈はそう言ってソラの安全を願った。

第54章 終わり

第55章 長い古邦町の1日の終わり

ソラは海についていった。

海が向かっている場所はとうやら池のようだ。

「池に何かあるのですか？」

ソラは地図を見ながら聞いた。

「ああ。お前、あの字読めたんだろ」

「……………はい」

ソラは少し考えてから答えを出した。

「実際、何で読めたのかは僕にもいきなりだったので分かりません。ただ」

「ただ？」

「僕の左目に関するものだということは分かります」

ソラは左目を抑えながら言った。

海はその仕草をただ無言で見ていた。

「僕からも一つ質問いいですか？」

「ああ」

海は何一つ表情を変えないで言った。

「あなたたちの目的は、一体なんですか？」

ソラは実際、もっと聞きたいことはあった。

なぜこの場所に、なぜ、自分たちを助けてくれた。あのS Iは一体だが、一番聞きたい質問をソラは海に聞いた。

「…………。お前、天涯孤独は知っているか？」

「はい」

知っているも何も、今のソラはその天涯孤独そのものだ。

「俺らは、俺と智美の親はS Iの研究をしていた」

「研究！？」

ソラは驚いた。

S Iは否定科学の代名詞のオカルト的力だ。

そんなものは実際研究が可能だったことはソラははじめて知った。

「だが、殺された。謎のやつらに」

「…………」

「俺らの目的はそいつらの逆襲と、親父たちが果たせなかった、S Iの歴史を調べることだ」

ソラと海の会話に無言が続く。

ソラは彼になんて言ったらいいのかをまったく分からなかった。

分かることは同じ天涯孤独のみ。

ただし、ソラの場合、何をして親が殺された理由は分かっていない。

記憶に残っているのは、血まみれの部屋で親が死んでいる、一瞬の記憶のみ。

ソラには小学生の記憶がない。

あるのはさっき言った一瞬のみ。

「着いたぞ」

海はそう言って池のところまで来た。

「この中に何かあるのですか？」

「いいや。俺らも調べたところ、ここには何も無い。ただ」

その時、ソラの左目が反応した。
同時に池の中から人が出てきた。

「ここにSⅠ使いがいることしか知らない」

海は分かっていた口ぶりで言った。

「どうやらそのようですね」

ソラはそう言って【スキル・アイ・リング超能力ノ眼・輪】を発動した。

「行くぜ！！」【ヴェイグムーン朧月夜】！！」

海の手に魔棒【ヴェイグムーン朧月夜】が現れた。

「さあ、出て来い！！」

海がそう言ったとき声が聞こえた。

「では、お構いなく！！」

そして自ら出てきたのは人ではなく、タコだった。

「た、タコ!?」

「なんですかこれは!?!」

海とソラは後ろに下がった。

「こいつは予想外だな!?!」

「あのタコはS Iで作られたもの、つまり変化形のS Iですね」

「自ら変化するS Iってありかよ!?!」

「いえ、これは」

ソラはよく左目で池を見た。

そしたらもう一つの同じ反応があった。

「これは何かを変化させたものです!?! S I使用の本人は中にいます!?!」

「そういうことか!?!」

だが、このとき海は思った。

なぜ彼はそんなことを知っているのかと。

「クッソ!?!めんどいことするな!?!」

海とソラは池に足を入れた。

だが、ソラはそこまでしか入れない。

この奥は結構深めにできているからで、ソラは泳げない体質。

ソラはここでの戦闘は不利だ。

「そっちはタコのほうを頼みます!?! 僕発動者を狙います!?!」

「おう!!」

そう言つてソラは腕を池の中のほうへ突き出した。

「デジタル・ロープ
【電子ノ縄】!!」

池の中に入った縄は何かをつかんだ手ごたえが合った。

「行きます!!」

ソラは一気に引き上げた。

たしかに普段のソラなら腕力がないので引き上げることは難しい。
だが、引き上げるのはソラの腕力ではない。

引き上げるときはリストバンドのほうが自ら縄を戻す。

簡単に言えば掃除機のコンセントと同じ方法だ。

さらにはここは池。

つまり水。

一回でも両足が離れれば、簡単に引き上げることが可能。

引き上げられたのはシュノーケルと酸素ボンベついている男だ。

「くっそ!!」

「こんばんは」

ソラはにつこりと挨拶をした。

「行くぜ!! タコ野郎!!」

海は【一朧月夜《ウェイグムーン》】を振り回した。

そして、迫ってきた2本のタコ足を同時に切り倒した。

「そんなんじゃ足がなくなるぜ」

海はにやりと笑った。

「この、餓鬼!!」

男はソラに殴りかかろうとした。
だが、見事に返り討ちにあった。

「みなさん。そういいます」

男は倒れていった。

こうしてソラたちの長い一日が過ぎた。

「本当にありがとうございました!!」

結果。あの男は一瞬でKO。

ソラたちはあの後、事情を話、一晩泊まっていた。

「いいですよ。誰だって僕らのことはそう思います」

ソラは手を振って許した。

「一晩泊めてくださって本当にありがとうございました」

香奈もそう言って頭を下げた。

「それではソラさん。元気でいてくださいッス」

識が元気よく言った。

ちなみにあの夜。識はずっと隠れていたみたいだ。

「本当に皆さんには感謝感激雨嵐ッス」

「雨あらね。みんなも元気で。それでは」

ソラたちは歩き出した。

こうして、ソラたちは戻ることになった。

しばらくして、電車を乗って大きな駅に着いた。

「ここでお別れだねソラお兄ちゃん」

美沙が悲しそうに言った。

「そうですね。まあ、あと数日でまた合いますけどね」

「あ、そうか来るんだね」

ソラがそういった後、美沙は元気を取り戻したみたいに言った。

「ええ。みんなできますから、そうしたらたくさん遊びましょう」

ソラは笑顔で言った。

「うん楽しみにしてるね」

そう言って手を振りながら自分が帰る道に行った。

「それで、君たちはこれからどうするのですか？」

ソラは後ろにいた海たちに話をした。

「ああ。そのことなんだが、長門ソラ。お前には話がある」

「話ですか？」

「ああ。ここではいえないことだ。S Iのことと、その左目のこと
でな」

どうやらまだ休めることはできそうにもない。

第55章 終わり

第56章 休日と休憩なし

7月28日。

朝になって、ソラはベットから起きた。

ソラは本当にあの一日が長かったのか、自分の家で寝るのが本当に久しぶりだと思った。

実際。あの日、寝ることさえ久しぶりと思ったほどだ。

海はあれからソラが知っている情報を話した。
ただ、ソラ本人もうまく知らない状態である。

あのと、どこに行ったのかは知らない。

ソラは着替えた後、下へ降りた。

寝ているかもしれないので静かにリビングへ向かった。

そのとき、ソラは洗面所で顔を洗おうとし、ドアを開けた。

「ふえ？……」

「あ……」

だが、そこにはバスタオルを巻こうとしている香奈の姿があった。
ちなみにドアにある『女子、入浴中』の板は裏返しになっている。
どうやら香奈は寝ぼけて板を表にしていなかった。

実際、香奈は長門家に着てからソラよりも早起きである。

「そ、ソラ君」

香奈は驚きながら言った。

顔はまるで新鮮なりんごみたいに赤い。

「あ、ごめんなさい。着替え中でしたか。今出ますね」

だが、ソラは超平常心で香奈にそう言ってからその場から出た。超鈍感野郎のソラは女子の裸を見ても何も思わなかった。

（悪いことしちゃいましたね）

と、そう思っていた。

香奈はそのことがわかって、鈍感でよかったのか、悪かったのか分からなかった。

ただ、あの時、叫ばなかった香奈も結構すごい。

顔を赤くしながら香奈はリビングへとやってきた。

「あ、香奈。一樣、味噌汁ぐらいは作っておきましたよ」

「う、うん」

あんなことが起きたのにソラは平然と話しかけた。

なんだか気にしている自分が恥ずかしくなってきた香奈であった。

「では、僕はシャワー浴びてきますので、後のことお願いできますか？」

「う、うん」

香奈はさっきと同じ言葉で言った。

「お姉ちゃん。どうしたの？」
「ふに！？」

香奈はいきなり声をかけられて普段出ない声が出た。
振り返ると、そこにはソファに眠たそうに目をこすっているあさみがいた。

「あ、あさみちゃんいたの？」
「うん」

あさみは眠たそうに言った。
どうやら香奈が着替えている間にこっちに來たみたいだ。

「眠かったら寝ていいのよ」
「ううん。いい。それよりも、お兄ちゃんとかあったの？」
「な、なんでもないよ」

香奈は手を振りながら言った。
確かに何かはあったが、このことはなるべく口に出したくはない。
ただ自分が恥ずかしくなったただけだからである。

ソラと香奈とあさみは外に出た。
もちろん、魔獣の探索であるが、残念なことに、いや、うれしいことに反応はまったくなかった。
そのため、ファーストスードでただいま食事中。

「しかし、お兄ちゃんのS.I、いつになったら目覚めるのかな？」

あさみが気になって聞いてきた。

「そうですね。僕自身、今は何も感じません？」

ソラはジュースを飲みながら言った。

そのときだった。

窓側の席にいたソラは良からぬ顔を見てしまった。

いや、その人もソラの顔を見てきた。

そして、両者その顔は知っている。

「見つけたぞ、長門ソラ！！」

確かに彼女の名前は、セラ。

「逃げてください！！皆さん！！」

ソラは殺気を感じたのか、みんなに言った。

同時にセラは爪を光らせて、壁とガラスごとソラたちに攻撃してきた。

壁は破壊され、そこには壊されたテーブルしかなかった。

「手ごたえがない。どこだ！！」

そう言ってセラは回りを見た。

そして、そこで店を通り過ぎているソラたちの姿があった。

ソラはあの時、すぐに縄を味方に巻きつき、近くの電柱に引っ掛けて移動したのだ。

「逃がしはしない!!」

セラは行きよい良くダッシュした。
なかなか早い。

「やばいですね。このままでは追いつかれてしまいます」

いくら足が速いソラといえども、香奈とあさみを置いては逃げられない。

「2人とも、ここは僕が足止めをします。ですので早く行ってください!!」

ソラはそう言ってセラと向き合った。

「そんなことしなくたっていいんだぜ。少年」

その時、上から声が聞こえた。
見てみるとそこにはあの男がいた。

「寅島さん」

そう。そこには寅島竜司がいた。

「お、名前覚えてくれたんだな」

そう言って竜司は下に下りてきた。
そのあと、いきなり土下座してきた。

「と、寅島さん?」

意味が分からないソラはあせりながら言った。

「長門ソラ、お願いだ。お前の力を貸してほしい」

「ち、力ですか？」

ソラたちはとりあえず、近くの公園で話を聞くことにした。

「で、一体何が起こったのですか？」

ソラは改めて聞いた。

前の敵だったので少しは警戒している。

「俺たちの仲間が捕まった」

「仲間ですか？」

「ああ。お前はもう気づいているだろう。このまえのS.Iは俺のものではないことに」

「はい」

そのあと、竜司は一枚の写真をソラに渡した。

渡された写真には一人の女性がいた。

黒髪の長髪。結構な美人さんだ。

香奈とあさみもまじまじと見てくる。

「そいつがそのときの使い手だ。名前は板橋歩美だ」

「この人ですか。一体どうゆうご関係で？」

ソラは失礼承知で聞いた。

「ああ。セラとは幼馴染で、俺とは……」

「……彼女さんですか？」

「こういうことは鈍感なソラよりも香奈が分かったように言った。

「……………ああ。そうだ」

竜司ははっきりそういった。

「そうですね。でも、なぜに彼女が、板橋さんが捕まったのですか？」

鈍感キングのソラは何も気にしないで聞きなおした。

「あいつらの狙いは歩美じゃない。俺たちだ」

「どういうこと？」

あさみはソラに聞いた。

「つまり、人質ですか？」

「簡単に言えばそうなる。だが、本当は俺たちも早く助けに行きたい。だが、今回は人数的に不利だ」

「人数？」

「ああそうだ。あいつらはSⅠ使いを10人も従えていると聞いた」

竜司の口からありえない言葉を聴いて3人は驚いた。

「10!？」

「それっておかしいのでは？」

驚いている香奈の横で、驚きいた顔を隠せていないソラは聞いた。

「そんなにＳＩ使いが集まるなんて、そんなこと」

「できることが一つある」

「できるって、ああ。そういうことですか」

ソラは分かり納得した。

説明すると、ＳＩ使いを集めるならＳＩを使える人、つまり、その人の中に、虫の知らせみたいなＳＩの持ち主がいるかもしれないということだ。

「分かりました。僕は協力します」

ソラは竜司にはっきりといった。

「そうか、恩にきる。時間は一刻も無駄にできない。明日この場所に来てくれ！！」

そう言つて竜司とセラは走っていった。

「ソラ君」

「香奈はあさみと残ってください。僕だけでも」

「ううん。私も行く」

「あさみは足手まといになりそうだから残っている」

あさみは状況が読めているのか、そう言ってきた。

「では、準備をしましょうか」

だが、ここで最悪なことが起きる。

第56章 終わり

第57章 7対7

7月29日木曜日。

ソラたちは昨日竜司に言われた場所に来た。

なんとか昨日のうちに優菜、雪、朱里は呼べたが、受験生の雫や親の仕事を手伝っているレンジはくることができなかった。

「よ、来たな少年」

竜司とセラがこっちに来ながら言った。

「竜司さん。一つ思ったのですが」

「なんだ？」

「ここ、何も無いところなんですがいいのですか？」

そう。ソラが言ったようにここは何も無い草原が広がっている場所だ。

「あいつらがここに来いと言ってきたっだ。お前らに会う前の日にな」

竜司は事情を説明した。

「よう、来たな竜司」

一人の男が話しかけてきた。

「虎二か」

「久しぶりだな、我が友よ」

男は竜司をそう呼んだ。

「俺はもうお前の友ではない」

男の名前は竜我虎二。りゅうがとらじ

話によると、昔、竜司とペアを組んでいた人物らしい。

「お前も仲間を連れてきたらしいな。だったらちようどいい」
「どういうことだ？」

竜司は虎二の言葉に疑問を感じて聞き返した。

「簡単なことだ、7対7の勝負と行こうじゃねえか」

——7対7!!

「ふざけんな、こっちに不利な要望にはこたえられねえ」
「そうです!!いくらなんでもひどすぎます!!」

虎二の答案に竜司とソラは否定した。

たださえこちらは女性が多く、その中には戦えそうにもない香奈や、
SIを持っていないソラがいる。

完全にこっちが不利だ。

「だったら、女の取引はやめようか」

「くっ!!」

「そんな...」

竜司とソラは言葉を呑んだ。

ここは完全に従うしか方法がない。

「しかたねえ。俺たちが先に4連勝するしかねえ」

作戦は戦えるメンバーが先に戦う。

そのことでこの戦いを早く終わらせるしかない。

ルールは基本に単純で、どちらかが4勝したら勝利となる。

勝利方法は相手が気絶か、降参したらとなる。

「じゃあ、セラ。行つてこい」

「了解」

竜司は最初はセラに行かせた。

「じゃあ、こっちは3番。行つてこい」

虎二がそう言ったとき、後ろから男が一人現れた。

「……」

ものすごく背が高く、見た目190センチはありと見える。

それだけでなく、体格もものすごく筋肉が付いていると見える。

「いくぞー!!」

セラが先制攻撃を仕掛けはじめた。

セラは早速、【終わらせる爪^{エンド・エッジ}】を発動した。

「……」

だが、男は何も動かないでその場に立っていた。

「避ける気がないのですかあの人は」

ソラは驚きながら言った。

それはあの男が確かな自信があると見てもいい。

「はああああ!!」

セラの光り輝く爪が男を狙った。

だが、男には爪がとどなかった。

男は無事にその場におり、セラは何が起こったのか分からない顔をしていた。

(まさか!!)

ソラは何かを感じたのか、大声でセラに言った。

「セラさん!!そこから離れてください!!いやな予感がします!!」

「セラ!!」

竜司はソラが何を言っているのかは分からないが、とりあえず意見は尊重しようと言う考えでセラに言った。

「……」

男は黙ったままだ。

「ソン君。どうしたの？」

「自分でも分かりませんが、何か嫌な予感がします」

ソラはおびえながら言った。

「そんなのは関係ない！！」

セラは再び男に向かってダッシュした。

「破壊するのみ！！」

だが、やはり男はそこから動こうとはしない。

セラが接近した後、セラの動きがまた止まった。

「な、う、動かない」

さつき爪が男に届かなかったのはこれのせいである。

状況としては、今、男はセラの影を踏んでいる。

「影ふみですか！？」

朱里は話を聞いたのか驚いていた。

「多分、あの人のSIは【影ふみ^{シャドーストップ}】というものです。影を踏まれたらその場から動くことは不可能」

ソラは説明した。

「……それだけではない」

男がいきなりしゃべりだした。

「しゃべった!!」

「あなたが驚いてるのですか!？」

虎二は初めて彼の声の聞いたらしく驚いていた。

「われらのSⅠは相手がわれの影を踏んでもわれが相手の影を踏んでも、同じ能力だ」

男は説明した。

「つまり、あの人の大きな影を踏んでも今と同じ、動けなくなると」
「それって接近戦は非常にやばいですね」

朱里とソラは言った。

「関係ない!! だったら届かせるのみ!!」

セラは爪を伸ばした。

「無意味!!」

男はセラの手をつかんだ。

そのまま背負い投げをした。

「ガハッ!!」

あの図体での背負い投げは食らってはやばい。
しかも、着地地点が男の影だ。

セラはまた動けない。

「雲が出ないうちに、終わらせる!!」

さっき、セラが後ろに下がれたのは雲が出ていたときだった。
だが、いまは雲が出る気配はない。

「すぐに終わらせる!!」

「やらせるいか」

セラは大きく爪を光らせた。

「無駄だ」

男はセラの両腕をつかみ、投げ飛ばした。

セラは大きな木にぶつかった。

同時にこっちにいきよいよく向かってきた男がセラの影を踏む。

「くっそ」

そのまままた背負い投げをした。

「お前は俺には勝てない」

完全に男の一方的な戦いになってしまっている。

「くそ!!」

「終わりだ!!」

男は思いっきりセラの顔面を殴った。

それも1発ではなく、10発ぐらいだ。

セラはそのまま気絶した。

「そんな」

「いくらなんでもひどい」

香奈と優菜が言った。

「いくらS Iを持っていようと女性ですよ、ためらいはないのですか!？」

ソラは男に言った。

「そんなの人間には必要ない」

「まったくその通りだ」

虎二は笑い出した。

「香奈、セラさんの回復」

「うん。任せて」

香奈はセラの回復を始めた。

「次、私が行きます」

朱里が自ら行くと宣言した。

「朱里」

「許せません。絶対に」

「お願いしますね」

「はい!!」

朱里は返事を出した後、前に出た。

第58章 朱里VS体の鉄強化へボディ・メタル

次は自分から出たいと言ってきた朱里。

ソラはそのことを認め、朱里は鞆をあげ、なんかたくさん物が付いているベルトを腰につけた。

「次はその女か。では、2番のやつよ、いけ!!」

虎二は指示を出した。

しかし、こいつらは一体どこから出てくるのだろうか。

てか、名前を教える気はないのか。

2番とバッチをつけたフードをかぶった人がいきなり出てきた。

「行きます!!」

朱里は左後ろのポケットに近いもののふたを開けた。

そこから電気が流れ出した。

朱里はそこに手を開けてた。

「発動!! 【電撃^{サンダー・ウェポン}ノ銃装備】!!」

朱里は小さなピストルを作り出した。

その後、ために相手に向かって撃った。

弾は見事に相手に当たった。

「ぬるい!! ぬるい!!」

煙の中から男の声が聞こえた。

そのあと、男と思われる人はいつきにマントを脱ぎだした。

「ぬるいぞ!!その攻撃では俺を熱くさせんぞ、お嬢さん」

マントで煙が消えていった。

そしてその中からいかにもむさくるしそうな男が出てきた。

『…………』

一同、無言になった。

「どうした!?どうした!?元気がないと戦えないぞ!!」

そう言つて男は上半身をいきなり脱ぎだした。

しかし、その体はボディビルダーみたいな体だった。

「はっはっは!!すごいだろ!!」

男は笑いながら自慢してきた。

「そ、そうですね」

朱里は静かにそういった。

「ん!?あんまりすごそうと思つてなさそうだな!!よし、ここは下も脱ごう!!」

そう言つて男はズボンに手をかけた。

「やめい!!」

「やめてください!!」

そう言って朱里は銃を撃った。
しかも、さっきより威力が大きそうだ。

「そんなものこの筋肉があれば関係なし!!」

男はポーズを決めたした。

そしたら弾は当たっているのに食らっていないように見える。

「はっはっは!!どうした!?!どうした!?!」

男は笑いながらいった。
なんだかむかつく。

「な、なんですか?あれは!?!」

朱里は戸惑いながら言った。

「おかしいですね」

ソラはボソツと言った。

「そうだな。少年。あの能力は一体!?!」

「いえ、能力の方はもう分かっているのですが」

ソラの言葉に竜司は驚いている

「じゃ、じゃあ」

「ええ。あのS.Iは人体能力を強化させるものです。あの筋肉はフ
エイクで、実はあの体を鉄のように硬くさせているだけです」

ソラは説明した。

そのS Iのことを【体の鉄強化^{ボディ・メタル}】と呼ぶ。

「それよりも、おかしいのはこの対戦カードです」

「どういうことだ？」

「あのS Iは朱里のニガテなものだと考えてもいいです。ですが、なんでこんなに適度に自分たちの弱点が来るのか」

ソラは怪しいところを説明した。

「だが、それではセラのときも」

「ええ。たしかにそこは元仲間なので怪しいところはありません。ですが、あの人とは僕らは初対面です。なのにこの偶然にしては作りすぎています」

さらに、虎二は次々に番号を言ってきた。

これはなにか細工があっても言いと考えてもいい。

「もしかしたら、予言の能力を持つ人がいるの？」

優菜が聞いてきた。

「予言と言っても前みたいに時間をとめたりで予言と思わせることもできます」

ソラの考えは続く

その間でも、朱里の戦闘は続く。

「どうした！？どうしたお嬢さん！？」

朱里はただ闇雲に連射していた。

「そんな攻撃じゃあダメージなんて与えられないよ!!」

雪が朱里に言う。

「雪、大丈夫ですよ。朱里なら」

ソラは雪の肩を軽く叩いていった。

「きっと朱里ならいい戦法を考えていますから」

しかし、見た目ではただ単に躊躇なく連射しているのみだった。

男はあいからわずポーズを決めている。

こうして連射している間にも電気はどんどん減っていく。

朱里は無言のまま、次の攻撃に移った。

次は同じところを何発も撃ち続けた。

だが、男はあいからわず余裕な顔を見せる。
てか、ドヤ顔だ。

男は攻撃してこない。

どうやら弾が切れるまで待つ気だ。

「なあ、少年。あの子はあんなに電気に当たっていいのか？」

竜司が聞いてきた。

「ゴム手袋をつけているので大丈夫です。ですが、さすがに素手で触るのはちょっと」

その時、ソラはあることに気づいた。

そして、そのことは朱里はもう気づいていた。

「もしかして、朱里は発動条件を見破ろうとしているのですかね」
「そうか。それであの連射を」

竜司もソラの一言で理解した。

ＳＩの【ファーストフェイズ第一型】は能力の発動時に体力が削られるだけではなく（
ＳＩによつて異なる）発動条件をクリアしなければならぬ。

つまり、優菜は線を書かないと発動はできないし、雪だつて水がなければ何もできない。

なので、あのＳＩにも発動条件はあるのだ

ソラは男をゆっくり見た。

その時、ソラは男の発動条件を見破った。

「そういうことでしたか」

だが、朱里には教えない。

「そこです！！」

朱里は少し大きな銃を作った。

引き金を引くと、男に向かって大きなミサイルが飛んだ。

だが、そのミサイルを食らってなお、男は立っている。

「ここで終わらせませす!!」

朱里はそう言いながら両手に2本の大型銃器を作り出した。

「お譲ちゃん。そろそろあきらめたらどうだい!？」

男は言った。

「いやです!!」

朱里が引き金を引こうとしたとき、男の地面からいきなり爆発した。

「な!!」

男は空中に飛んだ。

「あれは!?! ソラ君？」

優菜はソラに聞いた。

「朱里、あのミサイルのとき、小さな地雷を落としていたのですね」

実はあのミサイルはフェイク。

本当の狙いはあの地雷を落とすことが狙いだったのだ。

「これで、終わりです!!」

朱里は銃器を構えた。

男は空中でもポーズを決めている。

「もうあきらめてください。あなたの発動条件はそのポーズではありません」

朱里は言った。

「本当の発動条件は」

ソラは続いて言う。

「「発動時、爪先立ちでいることです!!」」

朱里とソラは口をそろえて言った。

実は男はポーズを決めながらさりげなく爪先立ちで立っていたのだ。いくらなんでもそんなバランスが取りにくい体制でずっと立っているのは怪しすぎる。

ポーズは目を引かせるためのフェイクだ。

その瞬間、朱里は引き金を引いた。

2本の銃器から太いビームが男をねらった。

当たったあと、男は気絶しながら落ちていった。朱里はフウと息を軽く吐いてからこつちを見た。

「ソラさん。勝ちましたよ!!」

微笑みながらガッツポーズを決めた。
こうして竜司チームの一勝が決まった。

第58章、終わり

第59章 雪VS炎ノ達人へフレイトロマスター

「よし！！次は私が行くわ！！」

張り切りながら雪が言った。

「どうする？少年」

竜司はソラに聞いた。

「では、ここはお任せします。雪」

「ラジャー」

雪はそう言って前に出た。

「次は氷の女王様か。6番。お前が行け」

虎二はあいからわず番号で指名している。

「やっぱり、言葉的に少年たちのSIを知っているように見えるな」

「そうですね。ですが、さっきのように知っているから勝てるとは違うのですよ」

ソラがさっきの戦いを見てそのための答えが出せた。

「ソン君の言うとおり！！私も負けない！！」

雪は水鉄砲を出した。

「いいだろう。それなら俺が相手になろう!!」

フードをかぶった人物がフードを脱いだ。

「この俺、あらかわえんじ荒川炎治相手になろう!!」

そう言って炎治の手から炎が出てきた。

「少年。あれってまさか!!」

「ええ。あれが『フレイトロマスター炎ノ達人』です!!」

その声を聞いて炎治はドヤ顔になった。

「そんなの関係ないわ!!」

雪は水鉄砲を撃った。

途中水は氷に変化した。

「無駄だ!!俺には氷は効かない!!」

炎治は掌から炎だしてガードした。

「そんなこと分かっている。だからわざと攻撃した」

雪は後ろに周り言った。

そして、水を地面に流した。

「地面を凍らせるわよ!!」

雪はそのまま地面を凍らせた。

だが、地面ごと炎で燃やせば関係はないはずだが。

「そんなの意味ねえよ！！」

炎治は思ったとおり地面ごと氷を燃やした。

「それだけじゃないわよ！！」

雪は大きな雪だまを作った。

「雪ちゃん。氷だけじゃなくって雪も作れたんだ」

優菜が感心しながら言った。

「無駄だ！！」

投げしてきた雪だまを炎治は燃やす。

そのときだった。

雪の作戦の下ごしらえができたようだ。

「次はお前本人を燃やしてやる！！」

炎治は雪に迫った。

「今よ！！」ウォーターアイス【水十氷】！！」

雪がそう言ったとき、炎治の周りが凍り始めた。それだけではなく、炎治本人の足元も凍ってきた。

「これは!!」

炎治は雪に聞いた。

「これはね。あなたがずっと氷ばかりを燃やしていたからそれに熱中している間、水をばらまいたのよ」

そう。つまりさっきまで雪は攻撃しているようで実は罠を張っていた。

いままでの攻撃は全て罠だ。

「な、なめるな!!」

「え!？」

「俺の炎をなめるな!!」

いきなり炎治の周りが渦巻状に燃えた。

「へ燃える魂、今こそ我が鳥で全てを灰にせよ!!」

これは、いや確かに詠唱術だ。

「雪、詠唱術です!!」

「そ、そんな!!」

「【火の鳥の突撃】!!」
フレイバード・バーン

炎の鳥が雪を襲った。

同時に周りの氷が全て溶けていく。

「きゃあああ!!」

雪は炎に包まれた。

鳥が消えたときは雪はこげ後が残りながら立っていたが、完全にふらふらだ。

「しつこいな。止めだ!!」

「雪!!」

雪のピンチにソラは飛び出た。

ソラはそのまま倒れ始めた雪を抱いた。

「そ、ソン君？」

「誰だお前は!? 試合中だぞ」

「そんなの関係ありません!! 女の子がふらふらなのにこれ以上戦い意味がありません」

ソラは力強く言った。

「だったら、こいつの負けだったらいい」

「ええ。それで十分です。命を失った勝利なんて勝利ではありませんので」

そう言っソラは次に雪を見た。

「そ、ソン君。ゴメンね」

「いいですよ。雪。良くがんばってくれました」

ソラは笑顔で言った。

同時に雪も自然に笑顔になった。

そのとき、ある一人の男がその顔を見たとき、表情が変わった。

（す、ストライク！！）

炎治は心の中で叫んだ。

顔は赤い。

これはもしかしくつても雪に惚れてしまった。

ソラはそのことを知らずに雪をおんぶし、みんなのところへ連れて行った。

「雪ちゃん！！」

「雪さん！！」

「雪ちゃん！！」

優菜、朱里が雪の元へやってきた。

香奈はいまだにセナの回復を続けていた。

そのとき、いきなりセナは起き上がった。

「おい、今すぐそいつを回復させてやれ私はもう十分だ」

そう言つてセナはその場から離れた。

「セナさん」

「いいからいけー！！」

「ありがとございます」

香奈はお辞儀をして雪の元へ向かった。

「雪ちゃん。次は私が行く」

優菜は雪に言った。

「優菜」

「ソラ君。私も信じてくれるよね」

優菜の言葉にソラは一つも悩まず言った。

「ええ。もちろんです優菜!!」
「うん」

優菜は笑顔でうなずいた。

「竜司さん。いいですよね」

「少年。ここは俺は口出し無用だろ」

竜司は頭をボリボリかきながら言った。

「ありがとうございます。竜司さん」

優菜は竜司にお礼を言って前に出た。

第59章 終わり

第60章 優菜VSわが身の蛇へペット・スネーク

優菜は前に出た。

「私の相手は？」

「あたしよ！！」

虎二が指示をする前に一人の女性がフードを脱いで姿を現した。

「あなたの相手はこのあたし、三千院真琴さんぜんいんまことよ。観念しなさい」

そう言つて真琴はミニスカートの腰につけていた紐を手につけた。

「食い千切れ、【わが身の蛇】ペット・スネーク！！」

紐はみるみる蛇の形に変化した。

「行つて！！」

蛇は大きくなりながら優菜に迫ってきた。

「そんな蛇、SIを使うまでも無いわ！！」

優菜は棒で蛇をはじいた。

「そう。だったらこれはどう？スネーク！！」

蛇は口を開け、光る光線を放ってきた。

「な、なにこれ！？【線ノ盾】！！」
ライン・シールド

優菜は手前に線を引いた。

そのまま透明の盾が現れて攻撃を防いだ。

「まだまだよ！！スネーク！！」

そのとき、優菜は気配を感じた。

後ろをもて見ると、そこにはあの蛇がいた。

だが、今見ているのはたしかにあの蛇だが、前にもまったく同じ蛇がいる。

その蛇は口を大きく開けた。

——させない！！

優菜は速攻で線を引き、思ったとおり、さっきの光線が優菜に向かって放たれた。

優菜の周りに煙が舞い上がった。

優菜は周りが見えなくなってしまった。

それを好機だと思い、真琴は上空から何かをもって振り落としてきた。

優菜は人の気配を感じて何とか避けることができた。

ちなみにこのとき、優菜は周りの攻撃を防ぐためにさっき書いた線を発動していた。

だが、そんなのは関係なかった。

優菜は後ろに下がり、煙が少ないところへ行った。

やがて煙は止み、真琴の姿が見えた。
そのときの真琴は何かを持っていた

だが、優菜はすぐに分かった。

それはさっきの蛇だ。

まるで蛇が剣のようにもたれていた、口からは長い舌を出している。
それがおそらく剣の刃だろう。

「良く避けたわね。戦いの経験は多いみたいね」

さっきまで優菜が避けられたのはいままでの優菜が戦闘で身に付いたことだ。

「それはどうも」

「どういたしまして!!」

真琴は優菜に向かってダッシュした。

剣を振るってきたので優菜はそれを棒で防ぐ。

「ふうん。接近戦にも慣れているようね」

剣を振りながら真琴は優菜をほめる。

「それはどうも、特訓したかいはあるものね」

「そうだったらこれはどう？」

真琴は剣を持っていない左手を後ろに伸ばした。
後ろからはさっきの蛇が向かってきている。

やがて蛇は軽く飛び跳ねた。
そのまま真琴は蛇をキャッチした。
持ち方は右手の蛇と同じだ。
左手の蛇はほとんど右手に持っている蛇と同じ形になった。

「二刀流だったらどうか？」

優菜は嫌な予感がして一步後ろに下がった。
だが、真琴は優菜にせまる。

「いくわよ!!」

真琴は二刀流で優菜を襲う。

優菜はさっきと違って動きが鈍っている。

だが、理由は簡単だ。

いままで優菜は二刀流との戦いを見ても、やってもいない。
ましては特訓もしていないのである。

さっきと違い隙が無くなり、優菜は手間取る。

「さらに行くわよ」

右手にもっていた蛇が急に口を開いた。
これを何を意味するのか優菜は分かっていた。

だが、もう一方の剣で邪魔されているのでなかなか線が引けない。

「これはどう？」

蛇の光線が優菜を襲う。

優菜はそのまま倒れこむ。

「優菜！！」

「優菜さん！！」

ソラと朱里は叫んだ。

その言葉を聴いたのか、優菜はそのまま立ち上がった。

「まだまだ、負けない」

優菜はそう言って自分の周りに線を書いた。

「じゃあ、行くわよ！！」

優菜は棒を引きずりながら真琴に迫っていく。

「いいわゆ、来なさい！！」

真琴はさっきと同じ、二刀流で相手をしてくる。

だが、優菜は次は剣にさわさず、そのまま急ブレーキをかけた。
その間、優菜はさりげなく前に線を書いた。

「発動！！」

優菜と真琴の間に盾がでてきた。

真琴は急な出来事に手間取っている間に優菜は横にスライドした。

「しまった!!」

真琴は自分の身に何が起こったのか理解した。

「もう、遅い!!」

優菜は真琴の腹を思い切り叩いた。

真琴はそのまま後ろブレーキをかけながら体勢を立て直す。

優菜の腕力ではそこまで飛ばすことができなかった。

「やるわね。おもしろくなってきた」

真琴がそう言った。

「そう。でも私にも時間が無いのよ。準備ができたからね。いくわよ!!」

真琴は蛇を離れた。

だが、そのあと、2本の蛇は大きく口を開けた。

そしたらさっきとすこし太い光線が優菜を襲った。

それをみた優菜は棒を両手で持った。

「くっ、困め、3つの壁よ」

優菜はある言葉を放った。

「ソラさんあれって」

朱里は気づき、ソラに言った。

「ええ。あれは詠唱術。優菜、使えたのですね!!」

ソラは感心しながら言った。

「いでよ!!」トライ・シールド【三角形の盾】!!」

真琴の周りに3つの盾が現れた。

その一番前の盾が光線に当たった。

「重ね!!」

優菜がそう叫んだとき残りの盾が動き重なった。

光線は時間が経つことに消えていった。

「そうか。あのお嬢ちゃんの詠唱術は保護術か」

「ええしかも、書いた線から盾が指示を出せば動くこともできるのですね」

竜司が言った意味とは。

詠唱術とは、そのS Iの能力強化である。

一つ一つ名前と意味がある。

優菜のは保護術で、盾をさらに操れるようになってる。しかも一

度にたくさん発動もできるし、詠唱も短い。

朱里のは作成術。

おもにいままででない武器を作り出すことが可能になっている。

「そう。だっらいいわよ。私のも見せてあげる」

真琴はそう言った後、詠唱を唱え始めた。

「優菜、とめないと!!」

「うん!!」

優菜は真琴に元へ向かった。

「ハ我が護身の蛇を、いまこそその役目を果たしたまえ!!」

だが、もう遅い。

「【巨大な光線蛇】!!」

ビックビームスネーク

一体の蛇から超ごくふとな蛇型の光線が優菜を襲った。

「優菜!!」

「しまった、破壊術か!!」

破壊術。

名前の通り、新たな攻撃型の技を生み出す詠唱術だ。

いくら優菜でも、これには耐えられなかった。

優菜は気絶してしまった。

第60章終わり。

第61章 竜司VS虎二・物体と檻

「優菜!!」

ソラは気絶した優菜のそばに来てそのまま抱えた。
いやゆるお姫様抱っこだ。

だが、いまのソラにはそんなこと考えてはいない。

「そ、ソラ君」

目が覚めた優菜はソラの名前を呼んだ。

「優菜。体のほうは大丈夫ですか？」

「うん。なんとかね。雪ちゃんよりはまし」

しかし、優菜にも服の上からでも分かるほど傷ついている。

「ソラ君。私が全部直す」

「香奈」

悲しそうな顔をしているソラをみて香奈は安心できるように呼んだ。
香奈は自分はこのなことしかできないとわかっている。
だけど、ソラを安心できるにはこの言葉しかなかった。

「優菜をよろしくです。信じてますよ香奈」

「ありがとう。ソラ君」

ソラは優菜を香奈の近くに寝かせた。

「じゃあ、次は俺が行くか」

竜司はそう言って歩き出した。

「まっってください」

しかし、ソラは呼び止めた。

「なんだ少年」

「ここは僕が行きます」

ソラは拳に力を入れて言った。

「残念だが、その要望にはこたえられない」

「なんでですか？」

ソラは意味が分からず聞いた。

「少年にはお譲ちゃんたちのもとのいな。それだけでもちよつとは傷の回復が早いだろ」

竜司は香奈たちを指差して言った。

「しかも、今は1対3で負けている状態。ここで俺には少年にプレッシャーをかけるには行かない」

そういつて竜司は前に歩き始めた。

その背中はとても勇敢だった。

「少年、前の敵だったから無理だと思うが、ここは俺も信じてくれ」

や」

ほほえみながらソラに言った。

「無理ではありません。あなたを僕は信じます」

ソラは迷いのない言葉で言った。

「と、いうことだ。次の相手は俺だ。出て来い虎二」

竜司は腕組しながら言った。

「いいだろう。俺がこの手で前を殺してやろう」

虎二はそう言いいいながら前に出た。
体格はガタイがいい虎二のほうがよく、見た目では竜司はすばやそうだ。

お互いにらみ合った。

「いくぜ！！」【エア・オブジェクト空気ノ物体】！！」
「いでよ、【グラウンド・ゲージ地面ノ檻】！！」

竜司は手を上げながら言った。

虎二は地面に手をつけながら言った。

竜司の上に透明な四角の物体が現れた。

さらに、前斜め上には丸上の透明な物体が現れた。

虎二の前には地面から次々と先端が針状の檻が出てきた。

それは細く、長い。

「あれが、竜司さんの本当のS I」

朱里が驚きながら言った。

それはそうだ。いままではこんな形状のS Iは無かった。

「2人とも、セカンドフェイズ【第二型】のS Iです!!」

つまり、これは最強対最強の戦いもいい。

ソラは見ただけではどういう型のS Iなのかはわからない。
だが、普通は世界系のものとなるのだが、S Iの反応が周りには無く、その物体のみに感じる。

つまり、簡単な予想であるがこれ以上の強い反応がソラをそう確信させた。

「準備体操はなしでいくぜ」

竜司は四角の物体の上に乗った。

「あいからわず空中戦で来るきか」

「まあな、これが俺の戦いだからな」

虎二の言葉に竜司は冷静に返す。

「だが、逃がしはしない」

虎二は強く地面に両手をつけた。

そしたら檻はみるみる長くなっていく。

そして、一瞬で竜司の周りは檻だらけになった。

これで、竜司はうまく動けなくなった。

「これで俺のフィールドができた」

虎二はにやりと笑った。

同時に竜司も笑った。

「残念だな」

そう言つて竜司は檻と檻の間に四角形の箱を出した。

竜司はその箱を確認した後、乗っていた箱を強く蹴った。
そのまままっすぐ箱に飛び移った。

「これなら関係ないことお前も知ってるだろ」

竜司はさらに手を虎二に向かって差し出した。

そのあと、その手から丸状の物体が現れた。

「ショット」

竜司がそう唱えたとき、その物体は虎二に向かって放たれた。

「ふん」

虎二はひるみもせず、その物体を腕一本ではたいた。

「まじかよ。あれをあれだけで破壊できるのかよ」

竜司は驚きながらいった。

「俺はな、肉体をこのために鍛えてきたんだ。そう、お前を倒すためにな!!」

虎二は自信ありげにそう言った。

「うち、あの腕力はめんどくさそうだな」

竜司はそう言いつつ、第2発目を撃った。

次は虎二は拳でそれを割った。

「本当にマジかよ」

「けっこう硬そうなのに拳には傷一つ付いていませんね」

ソラも驚きながら言った。

「これは本当に面倒だな」

竜司は頭をかきながら言った。

「悩んでいる時間はやらん」

そう言って虎二はまた竜司に向かって新たな檻をだす。

「くそっ!!」

竜司は別の箱に乗り移りながら避ける。

「このままではどんどん移動範囲が減ってきてしまいます」

ソラは現状を理解して言った。

「ですが、あそこから降りるのも危険ですし」

朱里も心配になっていった。

朱里が言った通り、この状態で、いや、相手がこのS.Iなので、地面に降りるとさらに危険になってしまう。

ここは空中でなんとか耐えるしかないだろう。

考えてみれば、虎二のS.Iに太刀打ちできるのは竜司のみだったかもしれない。

「ち、逃げ足が速い野郎だな」

虎二はそうつぶやいて、笑った。

「だったらしょうがねえ。こいつをやるか」

そう言つて虎二は手を重ねた。

「グランド・ゲージボルト【地面ノ檻】、【閃】」

虎二がそうついた瞬間、さっきまで出ていた檻からつきつぎに閃が

出てきた。

「なっ！！」

「やばいです！！」

気づいたときにはもうおそい。
完全に竜司に道が無くなった。

「さあ、終わりだ」

第61章続く

第61章 竜司VS虎二・竜と寅

竜司は完璧に檻に閉じこめられた。

「ち、面倒くさいことするな」

竜司は箱の上で困り果てていた。

完全に竜司の動きが止められた今、完全に的と化してしまった。虎二は見逃さず、次の攻撃に移った。

竜司の近くにある檻から閃が出てきた。

竜司は間一髪避けることができた。

「良く避けたな」

「まあな、この状態でやることはそれぐらいしかねえだろ」

「それもそうだな」

虎二は鼻で笑った。

「だが、お前は完全に避けることはできない」

「それはどうかな？」

竜司は何とか別の箱に飛び移れた。

「いくぜ！！ストッパー【固定】、解除！！」

竜司は上に手を向けながら言った。

その時、虎二の檻の上に、おおきな丸状の物体が落ちてきた。

重力に負けた檻はどんどん破壊されていく。

「っち、罨か」

「そういうこと、正確には罨返しだな」

竜司は指を挿しながら言った。

「だが、俺のはいくらでも量産出来る」

虎二は手を地面に当て、檻を出した。

「俺の檻はお前の命に届く」

「だったら俺は体ごと届かない位置に行くぜ」

上空に四角の箱がたくさん浮き上がっている。

竜司はその上に乗った。

「いくぜ!!」

竜司はどんどん上へと乗り移りながら上っていく。

「な、貴様、昔はそんなに上空へ作れなかったはず!!」

虎二が驚きながら言った。

「お前と同じ、俺も力が上がってるんだよ!!」

竜司はとうとう檻が届かない場所に着いた。

「たしかに、俺のSⅠ、【エア・オブジェクト空気ノ物体】は空気が薄い上空への発動

は困難」

つまり、竜司の【空気ノ物体】エア・オブジェクトは空気ノ無いところや薄いところでは発動ができない。

しかも本人の扱うレベルが低かったら上空への発動もできない。多分、竜司は昔、さっきまでの高さではないと発動はできなかったみたいだ。

「だが、昔の俺と今の俺、一緒にしてもらったら困る!!」

竜司はにっと笑った。

たしかに、今、虎二の檻はここまで伸びてこない。やはり、虎二のS Iにも限界はある。

「いいだろう。そこまでとどかかせてやる!!」グラウンド・ゲージ【大地ノ檻】、ボルト【閃】
!!」

檻から上に向かって閃が竜司を狙ってきた。気づいた竜司は飛び移って避ける。

「へ我、不法者を捕獲す檻を持つ、ゆえに、逃げるものに刺し殺しの刑を処す」

虎二は長い詠唱を唱えた。

竜司はそれを見て阻止しようとするが、場所が遠く、間に合わない。

「まさか、竜司さんをわざと上空へ上がらせたのでは!!」
「なるほどな!!」

ソラの言葉に竜司は納得した。

どうやら、さっきの驚きはフェイントらしい。

「ゲージ・ラン・フォレスト
【檻舞森】――！」

虎二が唱え終わったとき、檻はまるで生きているかのように竜司を狙って動き出した。

そして、次々に閃をいや、檻を放ってくる。

「まじかよ――！」

竜司は逃げ始めた。

いくら高くつても檻から檻が枝のように伸びてくる。さらには横からも狙ってくる。

竜司は完全防戦一方になってしまった。

「ち、良く逃げるな」

虎二が鑑賞しながら言った。

「しかたねえ。作戦その2――！」

竜司は虎二がいる方向に動き出した。虎二の近くにきたら次は下りだした。

「勝負だ――！虎二――！」

竜司は丸い物体を持ちながら言った。

「それはお前の思い込みだ――！」

虎二の周りに檻が出てきた。

「くそっ!!」

竜司は自分の足元に箱を置いて止まった。

「やっぱり、あの檻をなんとかしないとな」

だが、解決策は見つからない。

この状況では詠唱術も使えない。

（まてよ）

竜司は避けつつ、考え出した。

（やっぱり、この方法でしかねえか）

竜司はなにか言い策を考えたようだ。

だが、実行するには虎二に隙を生み出さないといけない。

（そこところはやっぱり動かねえとな!!）

竜司はまた虎二の方向へ行った。

「実行開始!!」

竜司は虎二に向かって丸上の物体を放った。

「無駄だ!!」

檻が盾のようになり、攻撃を防いだ。

「やっぱ、そう来るか。ならば!!」

竜司はまた違う行動をとった。
なんとその場で止まったのだ。

「避けなければいい!!」

檻は容赦なく竜司をさした。

「がははは!!どうした?気でもくるったのか!？」

虎二はその行動を見て笑い出した。

「お前、知ってるか?この言葉を」

竜司は言葉を言った。

「あん？」

「肉を切って骨を絶つてな」

竜司は虎二に向かって手を伸ばした。

「貴様、なにをする気だ!!」
「残念。もう遅い【エア・オブジェクト空気ノ物体】!!」

その瞬間、虎二の手の前にひらつべたい物体が現れた。

「しまった!!」

「これで、お前はこいつらを操れない!!」

竜司は両手を重ねて虎二に向けた。

「お前に詠唱術は使えわねえ、こいつで終わりだ」

竜司の手から大きな球体が姿を現した。

そして、ぎりぎりの大きさになったらその球体を撃ち放った。

このとき、檻は動かせるが、もう遅い。

球体は虎二に当たった。

虎二は球体の重さに耐えられない。

「重力を利用した重みをくらえ!!」

煙が上がっている中、竜司はそう言った。

煙が消えた後には虎二は見事に気絶していた。

それを見た竜司は大きく手を上げた。

「俺の勝ちだ、虎二!!」

そう言ってソラたちのところへも戻った。

「竜司さん」

「さすがです。竜司さん」

ソラと朱里が言った。

「おうおう。惚れたっていいんだぜお嬢さん」

「ははは。遠慮します」

朱里は愛想笑いをしてからさりげなくことわった。
だが、問題はここからだった。

第61章 終わり

第62章 願ってきた救世主

竜司は虎二に勝利した。

だが、問題はここからだ。

最大の問題、それは戦えるメンバーがいないことだ。

ソラはS Iを持っていない、だが、何とか戦えることはできる。しかし、一番の問題は香奈である。

香奈は戦うためのS Iではない。回復専門だ。しかし、もう負けることは許されない状況だ。

「どうします？ソラさん」

朱里は心配になってソラに聞いた。

「相手は絶対聞く耳を持たないでしょう」

「交渉は絶対無理だな」

ソラと竜司は頭を抱えた。

ちなみにいま竜司も香奈に治療されている。

「香奈、大丈夫ですか？」

ソラは心配になり聞いた。

「うん。ありがとうソラ君。私は大丈夫だよ」

そう言って傷の回復を続ける。

そのとき、ソラたちはある人影に気づいた。

「誰ですか？」

ソラは気になって振り向いた。
だが、そこには知っている人物がいた。

「及川さん」

そう、そこには海がいた。

だが、前とは違い、隣には智美がいなく、海の手元にいた。

「長門ソラ、お願いがある」

「なんですか？」

海は智美をおろして言うてきた。

「及川さん。宮部さんは一体？」

智美の顔はものすごく苦しんでいた。
まるで傷を傷めているみたいに。

「お前と取引がしたい」

海はまじめな顔をしていった。

「取引ですか？」

「ああ。この戦い、次は俺が出てやる」

「本当ですか？」

めったに聞きたいことをソラは聞いて喜んだ。

だが、取引と言う言葉を忘れていなく、すぐに切り替え。

「で、その条件は何ですか？」

「こいつを、智美を助けてほしい」

そう言って海は智美を包んでいた布を取った。

「これって」

ソラたちは驚いた。

智美の体は思いきり傷づいていた。

「及川さん。これって？」

「ああ。今話す」

海は魔獣を探していた。

だが、あるとき反応が2つあった。

両方S I使いのものだ。

「どうする？」

「だったら分かれましょう。私があっちに行くわ」

「わかった。俺はあっちに行くな」

智美の意見で分かれて同時に倒すと言う戦法になった。

智美の十分なS I使いだ。

海は何も心配をせずに分かれた。

海のほうはまったく問題なく終わった。

一度、集合場所に戻ったが、そこには智美はいなかった。

（まだ戦ってるのか。しかたがねえ行ってみるか）

海はそう思い、智美が向かった場所に行った。

智美の向かった場所に着いた海は見たくないものを見てしまった。そこにはボロボロのフラフラで戦っている智実だった。

「智実！！」

海は驚きながらも智実のそばに来た。

「なんだ、男か」

「貴様、智実は何をした！！」

海は怒りながら言った。

「か、海くんごめんなさい」

心細い声で智実は言った。

一瞬智実のほうを顔を向けた海は再び男の方に顔を向けたときには誰もいなかった。

「と、言うわけなんだ」

海はそう言っ て頭を下げ始めた。

「お願いだ、智実を、俺の彼女を救ってくれ!!」

「それは僕にお願いすることではありません」

だが、ソラは厳しい言葉を言った。

「そのお願いは僕ではなく、香奈にお願いしてください。もっとも、香奈の考えはもう決まっていると思いますが」

ソラがそう言った後、海はごもつともだと思い、香奈のほうに向いた。

そのあと、いきなり土下座を始めた。

「お、及川さん？」

香奈は驚いた。

「お願いだ、智実を直してくれ!!」

香奈は少し考えた後、口を開いた。

「分かりました。ですがそれには私からも条件があります」

いままでの香奈とは違い、力強い言葉だ。

「及川さん。これから、私たちの、ソラ君の仲間になってください」

香奈の言葉に海は驚いた。

「ああ。分かった」

そう言って海は智実を香奈の近くに寄せた。

「お願いする」

「はい。任して下さい。必ず直します!」

そのあと、海は前に出始めた。

「やくそく通り、この試合は俺が出る。準備たいそつでもしとけよ、ソラ!」

「……ええ。海!」

一瞬驚いていたが、すぐに答えた。

「俺も、本気で行く!」

そう言って海は自分の手を目元に行かせた。

そのあと、その手からコンタクトレンズが落ちた。

「じゃあ、行ってくる」

そう言っただときの海の目は緑色になっていた。

「海、その目は?」

「ああ、お前と同じだ」

ソラと同じ、それはあの目が証拠だ。

「俺も【達人ノ眼】^{マスター・アイ}の持ち主だ。まあ、お前の左目は【超能力ノ眼】^{スキル・アイ}」

「なっているがな」

【達人ノ眼】^{マスター・アイ}、それはソラの右目であり、左目の【超能力ノ眼】^{スキル・アイ}の
原型。

ソラは赤く、海のは緑だ。

「海は僕と同じ」

ソラはそうつぶやいた。

「俺の相手は誰だ？」

前に出た海は聞いた。

「俺だ、餓鬼」

体が細い男が前に出て言った。

「なんだ、ほっそいオッサンだな。戦えるのか？」

「ち、黙れ餓鬼が」

海はその言葉を「はいはい」で返した後、腕を前にした。

「行くぜ、^{ヴェイク・ムーン}【朧月夜】！！」

海の手に緑色に輝く両刃の棒が出てきた。

「いくぜ、俺のSIは……………」

「回れ、朧月夜！！」

海は男の声をさえぎった。

そのとき、海は一瞬で男の近くにより、一気に叩いた。

海は男の後ろに言った後、男は前に出てきた月上の回っている物体に切り裂かれた。

「【円形の月、ロール・ムーヴ回転する月!!」

男はそのまま倒れて気絶した。

「安心しろ、回転数は4分の1にしてやったぞ」

一瞬でこの戦いはおわり、味方も敵も驚いていた。

「おい、及川という少年。強すぎねえか？」

「僕も驚きました」

そう言っているうちに海がこちらに来た。

「後は任せたぜ、大将」

「ええ!!」

ソラは力強く答えた。

第62章終わり

第63章 ソラVS「第二型ヘセカンドフェイス」・消えるSI

ソラは意を決して前に出た。

「お前が最後の一人か」

フードをかぶった男っぽい声の人が言った。
いや、多分男だ。

「僕では不服ですか？」

「そんなことは無いさ」

そう言つて男はフードを脱いだ。
ガタイはでかく、まさに大男だ。

「お、お前は？」

一番反応したのはソラでは無く、海だった。

「海。知ってるのですか？」

ソラは聞いた。

「知ってるも何も、こいつが智実を傷つけた本人だ」
「！――」

海の一言により、ソラの目は険しくなった。

「その女か、そういえばこの前殺し損ねたな」

「ころ」

男の言葉でさらにソラの怒りが高まった。

「しかし、貴様は俺と同じにおいがする」

男はソラを指差した。

ソラにはまったく意味が分からなかった。

「おまえも、人を殺した殺したくってうずうずしているだろ？」
「そうですね」

男の質問にソラは答えた。

「ですが、僕は人を殺さない！！僕は今」

ソラは男に指差した。

「あなたを破壊することしか頭にありません！！」

「ふん。言い切るじゃねえか、あんちゃん」

男はそう言って息を吐いた。

「つきぐまたいら月熊平良だ。覚えておけ！！」

「長門ソラです。よろしくです」

両者、自己紹介をしてから構えだした。

「いくぜー！！」

平良はソラに向かって走っていった。

—— スキル・アイ・リンク
【超能力ノ眼・輪】発動！！

ソラは何も恐れずよく、平良の動きを見た。
そのとき、平良の腕がいきなり大きくなった。

ソラはやばいと感じてすぐにそこから離れた。
もちろん、平良の拳を避けることはできた。

「月熊さん。それがあなたのS Iですか」

しかし、平良の腕は元に戻っていた。

「さあな、何のことかな」

平良は次は足元を狙ってパンチしてきた。

ソラはジャンプしてそれを避ける。

だが、代わりに殴られた地面がめり込んだ。

「な、なんて破壊力のあるパンチだあいつは！？」

竜司は驚いて言った。

「まだまだいくぜ！！」

次は左手でソラを殴ってきた。

ソラは避ける。

避けた後、なるべく遠くへ行こうとするが、以外と平良は早く、追いつかれてしまう。

ソラはその間、考え事をしていた。
もちろん内容は平良のS Iのことだ。

さつきからS Iの反応がおかしい。
普段は無いはずなのに、殴ろうとしてきたときのみS I反応が出てくるのだ。

それはつまり、使い分けしているとしか言いようが無い。

だが問題はそれでは分かりようが無いのだ。

ちゃんと見るためには殴られる覚悟で見なければならぬ。
だが、あの破壊力。

下手したら一発KOになってしまう。
それでは本末転倒だ。

「ソラさん。完全に防戦一方ですね」

朱里は心配していった。

「やっぱり、ソン君の場合、相手のS Iを知らなきゃ作戦が立てられないからね」

よろよろしながら雪が朱里に向かっていった。

「雪さん。体のほうは？」

「もう、大丈夫だから、抜けてきた。かーちゃんの体力もやっぱり

限界が近そう」

雪が言った通り、香奈はさっきまで5人の傷を治している。しかも、ほとんどが重い。

雪はそのことを思い、全回復ではないが、傷がふさがったのでそこから出てきたのだ。

「ソン君ならやれるよね。あーちゃん」

「はい。きつと」

「おい、あいつのS Iをどう思う？海少年」

竜司は海に聞いた。

「そうですね。とりあえずは多分、あいつにとっては戦ったことの無いタイプでしょう」

あくまでも年上なので海は敬語を使って話した。

「ああ。それもあるが、なぜ、隠す必要があると思う？」

「それは……まさか……！」

竜司の質問に対して一瞬考えた海だが、すぐに答えは出た。

「暴走してもおかしくないということ」

海は分かったことを竜司に言った。

「ご名答。つまり、使う時間が多いと暴走してしまうS Iかもしれない」

「でもそれって」

海と竜司は現状を分かってしまい少しあせりだした。

「こいつは一番やばい相手をソラ少年にぶつけてしまったようだ」

ソラはとりあえず、逃げ続けた。
今はそれしか選択肢が無かった。

「ほらほら、どうした小僧!!」
「クッ!!」

ソラは平良の挑発に乗らず、避け続けた。

相手のS Iがわからなければ、得意の空中戦も死につながってしまう。
う。

攻撃に当たらない方法で相手のS Iを見つけるしかなかった。

しかし、知らぬ間に、ソラは壁まで追い込まれてしまった。

たしかにここは原っぱだが、川は一つもない。

近くにはすこし小さな森と、あとは岩の壁のみだ。

平良は好機と思い殴りだした。

「デジタル・ヘルト【電子ノ帯】!!」

ソラは帯を近くの木に巻きつけてそのままその場所に行き、回避し

た。

変わりに殴られた壁や見事といえるほど殴られた部分が凹んでいた。

ソラは油断しているときにためしの攻撃に移った。

「デジタル・スピア
【電子ノ針】！！」

何本もの針が平良を襲った。

だが、筋肉質な平良に両手で払われてしまった。

「やっぱりそうですか」

これで、針は効かないことが分かった。

（とりあえずは仕込み、第一段階終了ですね）

ソラは確かに平良のS.I.が分からないが少しでも仕込みをしようとした。

「ちっ良く動き回る餓鬼だ」

だが、逆に平良の方が痺れを切らしてしまった。

「そろそろ、終わりにするか」

平良はそう言って足に力を入れた。

そしたらものすごい行き良いでソラに迫った。

ソラは一瞬でやばいことが起きたと反応した。

「やばい！！デジタル・ベルト【電子ノ帯】！！」

ソラは反射的に帯で進路の邪魔をした。
だが、効果は無かった。

ソラはぎりぎりに拳を避けることがつて来た。
そのとき、ソラは後ろを見た。

（これは……）

このときソラは平良のS Iが確信した。

（……熊の手！？）

そのとき、平良はまた殴ってきた。
ソラは足で受け止めた。

だが、それも一瞬。

もう片足をつかまれて投げられた。
思い切り体を壁にぶつけてしまった。

「もう、終わりにしようぜ」

「分かりました」

ソラは平良の言葉をさえぎった。

「あなたのS Iがわかりました！！」

第63章続く

第63章 ソラVS「第二型ヘセカンドフェイス」・変化ヘコンパート

ソラは頭をさすりながら宣言した。

「俺のS Iがわかった打と？」

平良は驚きながら聞いた。

「ええ。あなたなのS Iは確かに【第二型】セカンドフェイスです」

ソラは言葉を続けた。

「そして、あなたのS Iの正体は、体の一部を熊と同じ部位に変化させる【熊ノ変化】ベアー・コンパートです！！」
『！！！』

ソラの言葉で一同驚いた。

「おい！！それって」

海はあわててソラに言った。

「ええ。S Iの中でもっとも恐ろしい能力だと聞きました」

アニマル・コンパート
【動物変化】はもっとも自分にも、相手にも危険が及ぶS Iである。使いの越せなければ、S Iは暴走して、使用者にも制御できなくなる。

もちろん、その分強力なのは確かである。

ソラがこのことを知っているのは、前に識にこのS Iは危険だと言われていたからだ。

「どうやら本当にやばい相手を少年にぶつけてしまったようだな」

竜司は冷静に言った。

「だがな、もう対戦カードは動かすことはできない!!」

平良は腕を熊の腕に変化させてソラを殴ろうとした。

ソラは避けて後ろに回った。

「貴様が俺のS Iを分かったて俺の攻略法など無い!!」

平良はソラに向かって振りかぶった。

ソラはやはり避け続ける。

「しかし、ソラ少年の動き、どんどんよくなってないか？」

竜司は疑問に思っただけ聞いてきた。

「俺も、そう思ったが、やはり【達人ノ眼】マスター・アイの能力だと思います。なんか聞いていないか？」

海は朱里たちがいるほうへ顔を向けてたずねた。

「私は、そう聞きました」

香奈は海の質問に答えた。

「ソラ君の＋能力は【ターゲット・アイ目標ノ眼】と、自己経験能力と聞きました」
「自己経験能力か。なるほどな」

海は香奈の言葉に納得が言ったらしい。

「どういうことだ？」

竜司は意味分からず聞いた。
雪と朱里も同じ気持ちだ。

「俺とソラの目は【マスター・アイ達人ノ眼】と言われていた、その力は＋能力と言われる人を強化させる能力と、－能力と言われる人体の弱体させる能力の２つある」

海は説明を続ける。

「俺の場合。＋能力は情報収集能力と、知能増幅能力で、－は字が下手になることと、冷え性になることだ」

「なんか意外とやさしそうな弱体だな」

竜司の言葉にみんなうなずいた。

「まあ、＋能力が強力なほど、－能力も強いものになる」
「でも、それって選べるのでは？」

朱里は質問した。

「それは無理だな。この眼はこうなったときから決まっていて、自分で選べるものではない」

「で、ソン君の能力って一体」

雪は次は香奈に聞いた。

香奈は少し考えた後、説明した。

「ソラ君の【目標ノ眼】ターゲット・アイは知ってますよね。それで、自己経験能力とは、自らが努力した分の経験値をそのまま自分のものにする能力です」

つまり、ソラが勉強した分、その分の知能が上がり、運動すると、その分の運動神経が上がる。ただ、この能力は人間の最高値までは大きくならない。そのため、ソラの腕力は努力してもあんなのだ。しかも、努力をしないでいると、劣ってしまうのだ。

「だから、ソラはこの前あんなに疲れていたのにあんなに戦えたのか」

海はあの池のときの戦いを思い出しながら言った。

「ソラさんは昔からずっと努力してきてあの運動神経を保ってきたのでしょ」

朱里も納得した。

雪もうなずいている。

「ソラ君」

香奈は心配しながら言った。

ソラは平良の攻撃を避け続けた。

「本当に良く避ける餓鬼だな」

ソラはその言葉は無視して攻撃を避け続ける。

「こんのー!!」

大降りで平良は殴ろうとしたが、ソラは大きく後ろに下がった。その後の、パンチにも後ろに回り避けた。

「そろそろ行きますか」

ソラはボソツと言った。

実は今の状態、つまり、平良の後ろがすぐ壁の状態にしたかったのだ。

「行きます!!」デジタル・スピーア【電子ノ針】!!」

ソラは立ち止まって針を放った。

だが、向かっている先は平良以外のところまで飛んでいく。ところどころ、壁に刺さった。

「ハッとんだノーコン野郎だな!!」

平良は鼻で笑った。

だが、笑っているうちもそこまでだった。

「続けます!!」デジタル・ロープ【電子ノ縄】!!」

ソラは右手で縄を撃ち放った。

しかし、この縄はまったく平良には当たっていなかった。

「残念だな！！うらむなら、自分のノーコンに恨みな！！」

平良はソラに殴りかかった。

「いえ、計算通りです！！デジタル・ベルト【電子ノ帯】！！」

ソラは最後に左手でドリル状の帯を放った。

だが、平良には当たらない。

「仕込み、成功です」

ソラは冷静に言った。

ソラは右手で持っていた縄を引っ張った。

その瞬間、ソラ一気に壁際まで移動した。

「なっ！！」

ソラはさっきまでの動作をこのときのためにしていた。

まず、針で縄の固定場所を作る。

そのあと、帯でソラをその場所まで連れて行く作戦だ。

ドリル状にしたのは移動を早くするためだ。

「行きますよ！！」

ソラはすぐにそこから飛んだ。

平良は完全に油断している。

ソラは思いつきり背中を蹴った。

だが、そううまくはいかなかった。
なんと、平良の腹が熊のようになっていた。
服の破片が地面に落ちる。

「こんなこともできるんだよ!!」

平良は思い切りソラの腹を殴った。
避けることができなかったソラは壁にぶつかる。

「ほらよ!!」

さらに一発ソラの顔面を殴った。
ソラの頭から血が出てきた。

「まだまだ」

さらにもう一発腹を殴ってきた。
ソラは血を吐いた。

「どうした、どうした!!」

平良はソラの腕をつかみ、そのまま投げ飛ばした。
無抵抗のままソラは別の壁にぶつかる。
もう、意識がなくなりかけた。

「ほう。これを食らっても気絶はしないか」

そう言いながら平良はソラに迫った。
ソラにはほとんど歩く力が残っていなかった。

気絶しないのがよっぽどすごい。

「こざかしい餓鬼だな」

「ぜ、絶対に負けません」

「うるせえ！！」

平良はさらに平手打ちでソラの顔面を殴り、そのまま飛ばした。
だが、ソラは立たずとも起き上がった。

「まだ耐えやがるか」

「あなたみたいな人に、人の死を楽しむ人には負けたくは無いです」

ソラはしゃべった。

「人の命を、思いを侮辱する人は許せません！！」

ソラは大声で言い放った。

第63章続く

第63章 ソラVS「第二型ヘセカンドフェイス」・ソラのSI

ソラは強く言い放った。

そのとき、ソラはなんか体が軽く感じた。

「おめえの言い分なんか知るか！！死ねえ！！」

平良は腕を熊に変化させて殴りかかってきた。

——守る！！

「はあああああああああ！！」

その瞬間、ソラの周りに赤いものが広がった。

「破壊します！！」

そのとき、ソラの周りから強い風が吹き荒れた。

同時に平良は一気に吹っ飛んでしまった。

そのまま壁にもものすごい音を立ててぶつかり、上から岩がなだれのように落ちてきた。

平良はそのまま岩に埋もれた。

「そ、ソラ君！？」

「今のは一体？」

「ソラさん」

香奈、雪、朱里が驚いたように言った。

「海少年。あれが多分」

竜司は驚きを隠しながら海に聞いた。

「ああ、あれが赤の【達人ノ眼】^{マスター・アイ}の持ち主」

海はわざと遠まわしに言った。

「長門ソラのS Iだ」

海が言葉を言い終わったとき、ソラは立ち上がった。

（これが、僕のS I）

ソラは自分の手を見た。

そのとき、頭から声が聞こえた。

「だけど、あんなS I見たことも聞いたことは無い」

海は言葉を続けた。

「ああ。風だったな、つまり」

「^{エレクトロマスター}【風ノ達人】と考えるのが妥当でしょう。だが」

海は平良が埋もれた岩を指差した。

「人は吹っ飛ばせても、岩まで崩れるほどまでにできるなんて」

海が言いたい事はつまり、さっき平良がぶつかったのはまったく壁には穴すらも付いていない場所だ。

さつきソラのS Iの発動時、平良を吹っ飛ばす以外にも、後ろの壁までにダメージを負わせていた。

エアクトロマスター

しかも、海が言っていた【風ノ達人】にはそんな物事を吹っ飛ばす能力しかないものだ、壁などにダメージなど負わせることなんてできない。

「つまり、これは海少年の情報に無いまったく新しいS Iと言うことか」

「物事を破壊する風、記すなら」

エアロ・ブレイカー

「【風ノ破壊者】」

海の言葉をソラがつなげた。

「エアロ・ブレイカー【風ノ破壊者】それが僕のS Iで、風を使い、物体を破壊するS

I」

ソラは独り言のように言葉をつなげた。

「それが、相手のS Iだとしても、破壊する」

ソラは強く拳を握った。

「この程度で、まだ終わっていませんよね、月熊さん」

ソラは月熊が倒れた方向に言葉をやった。

そのとき、岩の塊が動き出した。

「たった一撃で、いい気になるなよ、餓鬼」

体の上半身がほぼ熊の状態で平良は出てきた。

「ええ。そうですね」

ソラは眼をつぶった。

「次で終わらせます!!」

ソラは眼を強く開いた。

同時に【スキル・アイ・リング超能力ノ眼・輪】を発動した。

「いくぜ!!」

平良は足も熊化し、ソラに突進してきた。

「予想通りです。【デジタル・ベルト電子ノ帯】」

ソラは一瞬の隙に、帯をさっき崩れた岩にまきつけた。
そのまま帯を戻す反動で、ソラは攻撃を避けた。

「なっ!!」

いきなり避けられた平良は止まることができなかった。

「これで終わらせます!!」

ソラは左手を平良に近づけた。

——頭から脳まで伝わってくる。

ソラはこのとき、何かを感じていた。

――僕のS I使い方が。

ソラはゆっくり息をはいた。

――戦い方が――！

「エアロ・ブレイカー
【風ノ破壊者】――！！」

ソラの後ろから大きな赤い風が平良を襲った。

平良はそのまま壁に顔面でぶつかった。

そのあと、いつきに岩の壁が崩れていった。

そのまま力がなくなつたように崩れ落ちていた。

ソラも同時に安心したのか、膝から崩れ落ちた。

香奈たちはありえないものを見たような目をしていた。

「か、勝ちました」

ソラは息をゆっくり吐きながら言った。

そのまま拳を握った。

「さあ、約束だ。歩美を返してもらおうか」

竜司は虎二に言った。

しかし、虎二は舌打ちしてきた。

「そんなに簡単に返すものか、行け――！お前たち――！」

虎二は残ったSⅠ使いに指示を送った。

「ちっ！！」

竜司は戦闘体制に入った。

だが、状況は最悪。

竜司もソラももうフラフラだ。

はたして海一人でいっきに4人も相手はできないだろう。

「おまえも外道になつたな虎二」

「なんとも言え。これが俺のやり方だ」

竜司は強く歯を噛んだ。

「やれ！！おまえら！！」

男たち4人は同時に襲い掛かってきた。

「俺、あのショートヘヤーの子好み。俺の彼女にするぜ！！」

男の一人は香奈の方へ行った。

その瞬間、海に殴られた。

「こいつには約束事があるんでな、いまここでやられてもらうわけにはいかねえ」

海はそう言って【ヴェイク・ムーン朧月夜】を発動した。

残りの男も女のほうに襲いかかろうとした。

「ふざけないでください!!」

だが、その瞬間、男たちは一気に吹っ飛んでしまった。もちろんぶつかった壁は一気に崩れ落ちた。

「なんですか、その考えは。ゆとり世代みたいなこと言わないでください!!」

ソラは明らかに怒っていた。

「人との約束は守る。それは人にとって大切なことです!!それを誇ってなんの意味があるのですか!!」

ソラの言葉に虎二はひるんでいた。

そのとき、竜司は虎二の胸ぐらをつかんだ。

「さあ、拷問してでも、歩美の居場所を吐いてもらおうか」

竜司は大きく威嚇した。

「本当に、ありがとうございました」

歩美といわれる人は大きくお辞儀をしてきた。

何とか、あのあと、居場所を吐かせる事ができ、救出したのだ。行ったのは竜司とセラと海だ。

そのとき、ソラたちは香奈の回復を待った。

「香奈。大丈夫ですか?」

ふらふらになっている香奈をソラは支えた。

「こ、ここでごんばらないと。私は何しに来たのかわからないから」

そう言って香奈は回復を続けた。

そのとき、香奈の手が光りだした。

「か、香奈？」

香奈はいきなり行動をとめた。そのあと、なんか言い出した。

「へ傷をい負え、その痛みから救出せよ」

「これって、詠唱術ですか？」

そう。香奈が言ったのは詠唱術だ。

「【癒しの輪】ヒールング」

回復メンバーは一気に集まっていたので、その範囲に輪が作られた。そのあと、どんどん傷が治っていく。

「香奈の詠唱術はやはり再生術ですか」

ソラは関心しながら言った。

そのあと、全員の回復はできる手前、香奈はいきなり倒れた。

「か、香奈さん――！」

「大丈夫です。寝ているだけです」

そう言ってソラは香奈をおんぶした。

「さあ、帰りましょうか」

第63章 終わり

第64章 理解

とりあえず、皆長門家に来た。

香奈は自分の部屋で、智実はあさみの部屋で、優菜はソラの部屋で寝かせた。

起きている人はとりあえずリビングで話をする事となった。

「本当にありがとうな」

ソラがお茶を作り終わって配っているとき、竜司がいきなり頭を下げた。

「このご恩は絶対に忘れない」

竜司は頭を下げ続けている。

ソラはいきなりのことだ驚いていた。

「そ、そんないですよ。おかげで僕のS Iを知ることが出来たのですから」

ソラは手を振って許した。

「それよりも、ソラ。お前のそのS Iのことで聞きたい」

海はソラに聞いてきた。

「なんですか？」

「はつきり言おう。おまえのS Iは、エアロ・ブレイカー【風ノ破壊者】俺の情報には一切ない」

ソラは海の近くにお茶を置いて、話を聞いた。
同時にやっと、竜司は顔を上げた。

「俺の【^{マスター・アイ}達人ノ眼】の+能力である、情報収集能力は俺の知りたい情報をいつでも集められるのだが、俺はあちこちいろんなところへ行ってきたが、そんなS Iは聞いたことが無い」

海は言い終わった後、お茶を飲んだ。

「それって、本当に正体不明なS Iということですか？」

朱里は聞き返した。

「もし、俺の情報が正しかったらそうなるな。ただ、S Iというのはそれ自体正体不明なものだ」

「海」

ソラが心配してそう言ったとき、上の階からいきなり何かが落ちた音がした。

「な、なんですか？」

ソラはあわてて音が出た場所に言った。
その場所はソラの部屋からだ。
ソラは急いでドアを開けた。

「あいたたたた」

そこにはベットから落ちたのか、優菜が頭を抱えながら地べたに座

っていた。

「あれ？ここは？」

「ここは僕の部屋ですよ。優菜」

ソラはやさしく声をかけた。

「え！？ソラ君の部屋？」

優菜はあわてて聞き返した。

「ええ。気絶していたので僕のベツトで寝てもらいました」

ソラはあっさりと言った。

だが、優菜は逆に顔を赤くした。

「ゆ、優菜？」

ソラはいきなり顔を赤くした優菜にあわてて声をかけた。

「そ、そ、ソラ君のべ、べ、ベツト」

「優菜！？」

優菜はさらに壁にぶつかった。

あれから香奈、智実も起きた。

そして、竜司とセラと歩美は先に帰ることになった。

「もっとゆつくりしてて良かったですね」

ソラは残念そうに言葉をかけた。

「これ以上迷惑はかけられない。それと、次はお前たちがピンチになったとき、俺たちが次は駆けつけてやる」

竜司は笑いながら言った。

ソラも「そうですね」と言いながら微笑んだ。

「本当にありがとねソラ君」

そう言っ て歩美はいきなりソラのほっぺにキスをした。

いきなりされたソラ本人は驚いていて。

女子4人は殺気を立てていた。

「じゃあね」

「また合おう!!」

そう言っ て竜司たちは歩き出した。

「では、俺たちも行くか。智実」

「うん」

そう言っ て海たちは自分の荷物を持った。

「俺はこれからS Iの情報を集める。なにか大発見があったら知らせる」

「はい。分かりました」

「香奈ちゃん。直してくれてありがとう」

「どういたしまして」

それぞれ分かれの挨拶を交わした。

「じゃあな、同盟よ!!」

海はそう言って歩き出した。

「今日は本当に散々な日でしたね」

そう言いながらソラは後ろを見た。

だが、そこにはさっきのことで殺気を出している恋する乙女の4人がいた。

「さて、ソラ君なにかいうことある?」

香奈は笑顔で言った。

「な、なんのことですか?」

「言い逃れは出来ないわよ」

優菜は完全に眼が据わっていた。

「ソン君。なんであんなことでデレデレしているのかな」

雪は手を鳴らしながら言った。

「僕はデレデレなんかしてませんが」

ソラはたしかにデレデレはしてはいなかった。

「言い逃れが出来ると思っていたのでしょうか？」

朱里の場合、完全に眼が人殺しの眼だ。

「あのー僕はなんにもしてないですよね」

この日、ソラの叫び声が聞こえたのは言うまでもない。

次の日、7月30日金曜日。

そろそろ7月も終わりが近づいてきた。

「ソラ君。今日はどうするの？」

朝食、香奈は笑顔で言った。

ソラは一瞬びっくりした。

昨日あんなことが起きたのですこし抵抗がある。

「え、ええ。またいつもの魔獣探索です。そっちの問題は解決して
いませんで」

ソラはすこしビビリながら言った。

「うん。お昼の後でいいよね」

「ええ。優菜たちはどうします？」

「今日は2人で行こう」

香奈は珍しくそんなことを言った。

「いいのですか？」

「ええ」

どうしたのだろうとソラは思ったが、すぐに借り替えた。

「分かりました。昼過ぎにでも行きますか」

そう言って食べ終わったソラは立ち上がった。

「あ、今日は洗濯物をおねがいますね」

香奈はそうお願いしてきた。

「わかりました」

ソラは手を上げて答えた。

洗濯を終えたソラは自分の部屋のベッドの上で自分の手を見ていた。ソラはあのときの、【風ノ破壊者^{エアロ・ブレイカー}】が壊したのは壁だけではないと分かっていた。

あのあと、行く見たら、壁の後ろにある、大きな崖に大きな破壊後があった。

ソラは確信した。

戦闘前にはあんな破壊後は無かった。

つまり、【風ノ破壊者^{エアロ・ブレイカー}】で破壊したと見てもいい。

その時ソラは思った。

このS Iは危険だと。

破壊力が半端ないのだ。

あるとき、後ろにあんな崖がなかったら相手の肉体を破壊することになってしまった。

しかも、全部無意識だったので制御のことなんて考えていなかった。

（うまく、制御できますかね）

ソラは強く拳を握った。

（やっぱ、やってみなければ分かりませんね）

第64章 終わり

第65章 【風ノ破壊者へエアロ・ブレイカー】の弱点とミス

晃と香奈は外に出た。

「まずはどこに行きましょうか？」

「そうだね。気まぐれに外に出てきたからね」

香奈も悩みだした。

「とりあえずは駅前に行きましょうか」

香奈はうなずいた。

とりあえずは駅前に来たソラたち。

まずは暑いので飲み物を買うことになった。

「しかし、こう考えて見ますと魔獣というのは本当に出てこないものなんですよね」

「そうですね？」

「むしろ、僕たちは魔獣を探すのを目的ではなく、外に用事があるから出かけたほうが自然ですよ」

「うん」

ソラはまた考え込んだ。

「だとしたら、今度はちゃんと予定を持ってきましょうか」
「うん」

香奈は笑顔でうなずいた。

「とりあえず、本屋さんへ行きましょうか」

ソラは立ち上がった。

香奈も同時に立ち上がる。

そのまま本屋さんへ向かった。

近くの本屋さんに着くと、いきなりソラの左目がつずきだした。ソラはそのままうずくまった。

「ソラ君!？」

香奈はソラを心配して声をかけた。

「大丈夫です」

そう言って立ち上がったソラはそのまま香奈の腕を引っ張った。そのあと、人が少ないところへ走り出した。

「ソラ君。もしかして」

「ええ。魔獣です。近くにいます!!」

ソラはさらに【超能力ノ眼^{スキル・アイ}】を発動した。そのとき、ソラはあることに気づいた。

「まさか!!」

「ソラ君。どうしたの？」

「魔獣は僕たちを追いかけてきます!!」

これはいまままでに無くはない行動だ
だが、いままではいきなり現れたので、はつきり追いかけてくるの
を見たのは初めてだ。

「でも、それなら話は早いです！！香奈、人気の無いところへおび
き寄せますよ！！」

ソラはそう言っただけで方向を変えた。
だが、そのときだった。
なんと、魔獣が目の前に現れた。

「早い！！」

ソラはこの速さに驚いていた。
魔獣は吠え出した。

「仕方ありません！！行きます！！」

ソラは左手を出した。
そのとき、ソラはあることを思い出した。

もし、あのときみたいに普通に【エアロ・ブレイカー風ノ破壊者】を発動して、もしか
したら町を破壊してしまうかもしれない。
そしてそれは冗談なしの話だ。

魔獣はまた吠え出した。

「ソラ君！！」
「ハッ！！」

考え事をしていたソラは香奈の声で何とか魔獣の攻撃を避けることが出来た。

「デジタル・ベルト【電子ノ帯】！！」

ソラは魔獣の体と壁を利用して空中に上がった。

「デジタル・ベルト【電子ノ帯】・ウィップ【鞭】！！」

ソラは空中で大きな鞭を作り出して思いっきり叩き出した。魔獣はそのまま倒れていった。

「ほほう。魔獣をS Iを使わずにして倒せるのか」

ソラが地面に付いたあと、一人の優男が手を叩きながら言った。

「あなたはS I使いですね。なんのようですか？」

「きみもそうでしょう風使いさん」

ソラはそのとき気づいた。

「なんであなたは僕がS I使いだとわかったのですか？」

いくら気配で分かるうが、どんなS Iを使うのかは分からない。

「なんでこんなこと分かるみたいな顔してますね。理由は君にあります」

男はソラに指差しながら言った。

「僕にですか？」

「そう。君のSⅠは強すぎる。しかも、コントロールできてない状態でのSⅠは自分はこのなものをもってますよと公開しているみたいなものです」

——！！

ソラは男の話の意味が分かった。

「まあ、これも何かの縁」

男は言葉をつなげた。

「コントロールされる前に、君はここで殺して起きましようか」

ソラは男の殺気を感じた。

「遅い、ヘアー・スピア【髪ノ針】！！」

男は頭をこっちに向けて髪ノ針を飛ばしてきた。

「エアロ・ブレイカー【風ノ破壊者】！！」

ソラは躊躇なしに発動した。

しかし、防ぐだけなのにこの前と同じ威力が出てしまった。ソラたちの前には残酷な破壊の後が残った。

「そんな」

「どうやら本当にコントロールできてないようですね」

男はさつきと同じ方法で攻撃してきた。

ソラはそれを避ける。

しかし、この攻撃のせいで接近が出来ない。

「くそっ!!」

ソラはまた左手を出して【エアロ・ブレイカー風ノ破壊者】発動した。

だが、威力はまったく変わらず、しかも一直線的な攻撃のため、避けられてしまった。

被害をなるべく出さないために一直線的に攻撃したのだが、逆になつてしまった。

「なら、これなら!!」

ソラは左手に力を入れた。

「力が強いのであれば、自ら強制的に弱くするしかありません」

男を一発で気絶させ、さらには被害を出さないぐらいの威力でソラは発動しようとした。

だが、そのときソラの左手に異常が起きた。

「うっ!!」

ソラの左手から切り口ができて血が出てきた。
同時に猛烈な痛みが襲ってきた。

「はああああ!!」

ソラは痛みを無視し、【エアロ・ブレイカー風ノ破壊者】を発動した。

だが、放たれた方向は男ではなく、ソラの目の前で暴発したみたいになった。

しかも、痛みを起こすほどに制御したはずの力がまったく変わっていなかった。

「どうした、まったくこっちは何もしてないぞ」

男は笑いながらいった。

「はあはあ」

ソラは右手を前に出した。

「エアロ・ブレイカー【風ノ破壊者】発動！！」

だが、発動はまったく出来なかった。

「な、なんで？」

「おら、隙あり」

ソラがいきなり発動できなくて困っているときに男は攻撃してきた。

「うお！！」

ソラは持ち前の反射神経で避けた。

「まさか、エアロ・ブレイカー【風ノ破壊者】は撃つのに限りがあるのですか？」

ソラは分かったように言った。

「バカが、S Iにそんなのはねえよ」

男は続けて攻撃してきた。

「ソラさん!!」

そのとき、電気の光線が男の針攻撃を打ち落とした。

「大丈夫？ソラ君、香奈ちゃん」

そこにはいつもの頼もしい仲間がいた。

「朱里、優菜!!」

「な、なんだよお前ら!!」

男は朱里たちに針を飛ばした。

「なめないでね!!」

優菜は攻撃を防いだ。

「くっ 防御型のS Iか!!」

「隙あります」

ソラは男に向かって思いっきり顔面を蹴った。

男は顔からコンクリートに激突した。

「なんとか、危機一髪でしたね」

ソラは自分の汗を拭いた。

「ソラ君。回復するね」

香奈はソラの左手の治療をした。

「ですが、【風ノ破壊者】^{エアロ・ブレイカー}のこと、良く分かりました」

第65章、終わり

第66章 海1日目・部屋決め

8月2日月曜日。

今日はソラの知り合いに誘ってもらって海に行くのだ。

メンバーは男子は、ソラ、レンジ、進藤、道長、近藤、島田、山田の7人である。

女子は、香奈、あさみ、優菜、雪、朱里、雫、秋、佐藤、遠山の9人で合計16人である。

「お、お前、いつのまに妹なんて出来たんだよ!!」

集合場所にソラたちがついたとき、あさみのことで道長が言った。

「あ、そういえば紹介しませんでしたね」

ソラは気づいたのかそういった。

「お前!!なんだよ!!たださえ超美人の蒼希と同棲の癖にさらにはこんなかわいいこと兄妹として住んでいるのかよ!!」
「そうですよ」

ソラは怯まずにあっさり言った。

「あさみちゃん。海は初めて?」

優菜はあさみに聞いた。

「うん。プール以外の時間に泳ぐのは初めて」

「あ、それでは水着のほうは?」

朱里は気づいたかのように聞いた。

「大丈夫。この前、お兄ちゃんと香奈お姉ちゃんと一緒に買いに言ったから」

あさみは笑顔で言った。

「へーソン君。水着買いに言ったんだ。良かったね」

「良くないですよ。女性の方には変な目で見られるし、なので僕はずっと外で待機していました」

ソラは説明した。

そのとき、ソラは後ろのほうで殺気を感じた。

「「おーまーえーなんだそのスンバラシイスチュエーションは!!」」

「

道長と近藤が泣きながら言ってきた。

「それは家族ですから、買い物も一緒に行きますよ。大体、そのときはあさみの服の買い物でしたので」

ソラはあわてて言った。

「「もつといいじゃねえか!!」」

今のこいつらにはどんな話も通じない。

「あれあれ？秋ちゃん。うらやましがっている？」

佐藤が秋に言った。

「私も長門くんに水着買いに行きたかって思ってるでしょ」

さらに遠山が秋に言う。

「ちょっと、2人とも、そ、そんなことは無いよ!!」

秋はあわてながら言った。

そのあわてぶりで完全に動揺しているのが分かる。

「さて、行きますか」

ソラの一言でみんな歩き出した。

科学都市から離れた一番近くの海に朝方家が経営している海の家がある。

「で、本当にこれは海の家なのか？」

進藤が驚いて言った。

みんなが見ているのは明らかに海の家ではなく一つのホテルみたいだった。

「あ、ソラお兄ちゃん!!」

ソラたちの姿を見た美沙がソラの名を呼ぶ。

「美沙！！」

美沙はソラに抱きつこうとした。

だが、ソラに頭を支えられて抱きつくのは無理だった。

「なにやっているのですか？」

「いや、久しぶりの再開だったから」

「この前、会いましたよね」

ソラはため息をついた。

「それで、この人たちがソラおにいちゃんの友達？」

「ええ。人数はあらかじめ言っておいてでしょう」

「でも、女の子のほが多いのは何で？」

にらみながら美沙は言った。

「僕に言われなくても」

「まあ、いいや。お部屋に案内するね」

そう言って美沙は歩き出した。

「なあ、お前、あの子紹介してよ」

道長がソラに美沙の紹介をお願いした。

「ええ。朝方美沙、中3で僕のお父さんの知り合いの娘さんです」
「て、ことは従兄妹でもないわけ？」

佐藤はさらに聞いた。

「ええ。そうですね」

ソラはあつさり言った。

「秋ちゃん。またライバル増えたね」

「ううー」

残念そうな声を出した秋だった。

「でね。ソラお兄ちゃん。一つ相談があるの」

「そうなんですか？」

美沙が残念そうに言った。

「うん。部屋がね、2人部屋しかなくてね、それでねみんな2人づつに分けてほしいの」

「なんだ。そういうことですか」

ソラは理解したように言った。

「つまり、一つ、男女のペアが出来るんだよ」

まったく言葉の意味を分かっていないソラに美沙は呆れながら言った。

「まあ、そうですね」

それあの言葉に次はその話を聞いていた女性陣がため息をついた。女子たちは一気に肩を落とした。

理由は簡単だ。

男子と一緒に部屋にはなりたくは無いのだ。

そのことを知らないくとも、知っていても、男子共は止まらない。

「第一回、ペア決めくじ引き!!」

道長が張り切っていた。

「てなわけて、長門、さっさとかくじ引き作ってくれ!!」

「作っていなかったのですか!? まあ今決まったことですから仕方がありませんね」

「ついでに、これ。お父さんから預かっていた」

美沙は2つのくじ引きセットを渡した。それぞれ男子と女子と書かれていた。

「……確信犯ですよね」

ソラは感づいていった。

「まあ、いいですか。みんな一斉に引きますよ!!」

ソラは男子に声をかけた。

『一斉のせつ!!』

結果、女子と一緒にの部屋になるのは、超健全で、超鈍感のソラにな

った。

男子共はものすごく悔しがっている。
それとは逆に一気に女子のやる気が上がった。

「香奈ちゃん。香奈ちゃんはソラ君と一緒に住んでいるからいいよね」

優菜が香奈に言った。

「ごめんなさい。ソラ君と一緒にの部屋ではないのでこれだけは譲れません」

「かーちゃん、ゆーちゃん。残念だけど、ソン君と同じ部屋は私と一緒にになるのだよ」

「いいえ。雪さん。私です！」

「私もお兄ちゃんと一緒にいい」

「わ、私も負けない！！」

5人の恋する乙女の中かららみ合った。

『一斉のせつ！！』

全員一斉に引いた。

ソラと一緒にの部屋になったのは朱里だった。

「あ、私ですね。やりました」

朱里は笑顔で喜んだ。

結果。

男子は進藤と道長、レンジと山田、近藤と島田になった。

女子は香奈とあさみ、優菜と雪、秋と雫、佐藤と遠山になった。

「では、後で海で集合でいいですね」

「あ、着替えるなら自室にしてください」

最後に美沙はそう言って自分の部屋に戻った。
美沙はこの一階の部屋を使っている。

「「ソラ君」「

「ソン君」

3人にいきなり声をかけられてソラは振り向いた。

「「「へんなことをしないようねに」「」

「? ? ?」

意味が分からなかったが、とりあえずは殺気が出ていたことには気づいたソラだった。

第66章続く

第6章 海1日目・水着

ソラたちは部屋には言った。

「綺麗な部屋ですね」

感心しながら朱里は言う。

今回の泊まりは6日間、実はさつき、女子たちの提案があり、女子は3日後、つまりちょうど半分の日に女子のみ部屋決めのくじを引くらしい。

男子もしたいと道長は言ったが、女子たちの殺気で折れた。

「さあ、早く着替えてみんなのところにいきましょう」

「でも、着替えはどうします」

朱里は疑問に思い聞いた。

「簡単ですよ。僕がこの部屋から出ればいい話です」

ソラはあっさり言った。

「でも、それではソラさんの着替える時間がないのでは？」

朱里は遠慮がちに聞いた。

「そこに対しては何の問題はありません。どうせ僕水着に着替えませんもん」

「え？」

「僕、泳げないので水着買ってないのですよ。だから着替えもしません」

ソラは普段の人は恥ずかしそうに言う言葉をあつさり言った。

「あ、そういうばそう言っていましたね。目のせいで泳げないって」

朱里はこのまえ、海の言っていた言葉を思い出した。

「ですので、僕のことは気にしないでくださいね」

そう言ってソラは部屋から出た。

「青い空、青い海、女の子の水着！！」

道長が海に向かって大声で言った。

「道長、そのまんま捕まってください」

パラソルを地面に刺そうとしているソラは道長に冷静に突っ込んだ。ソラの腕力ではまったく刺しても、刺してもなかなか奥に入らない。

「ほれ、俺に貸せ」

レンジはソラからパラソルを受け取った。

「あいからわず、腕力無いな。お前」

進藤はソラに言った。

「仕方ないでしょ。身体問題では」

ソラは腕を回しながら言った。

「では、俺たちはナンパに行ってくるぜ!」

道長を先頭にして、近藤、山田、島田は向こう側に行った。

「ええ。出来たらそのまま捕まってください」

ソラはまた冷静に言った。

そのあと、レンジはソラに耳打ちした。

「しかし、このまま魔獣が出たらやばくないか」

内容はやはり、魔獣のことだ。

「仕方ありません。そのときは、そのときにでも考えましょう」

ソラは問題なく言った。

「それもそうだな」

レンジは納得して言った。

「おーい。ソン君たち」

雪の声が聞こえて、一斉に声が聞こえる方向を向いた。
さっきの男子たちはなぜかすぐに戻ってきていた。
道長の右側のほっぺに手形が付いているのは気にしないでおう。

「へへ。いいでしょう」

雪は付いたときに体を一周させてソラにアピールした。
雪の水着は水色の普通のビキニだ。

「どう？ソラ君」

「ええ。似合ってますよ」

ソラは笑顔で言った。

「ソラさん。私のはどうですか？」

朱里はソラに聞いてきた。

水着は黄色のビキニで、腰にパレオを巻いている。

「ええ。とても」

ソラはまた笑顔で返す。

「ソラ君。私のは？」

優菜も言ってきた。

水着はオレンジのビキニだ。

「いいですよ」

「うん」

ソラの答えに優菜は笑顔になった。

「ど、どうですか？ソラ君」

香奈が遠慮がちに聞いてきた。

桃色の水着で、ビキニだが下のほうはスカート状になっている。

「似合ってますよ」

やはりソラは笑顔で言った。

「むーソン君。そればかりだよね」

雪はなにか疑問に思い、たずねてきた。

「な、なにがですか？」

「だったらこの中で一番は誰？」

「へ！？」

雪は爆弾を投下してきた。

他の男子みたいなそんな感情が無いソラにはまったくもって最悪な質問だ。

「えっと。そ、そうですね」

「「「「じ〜〜〜〜〜〜」」」」

4人同時ににらんでくる。

その威圧感に耐えられなかったのか、ソラは一気にダッシュした。

「『『『あ！』『』『』」

4人は同時にソラを追いかけ始めた。
その光景を男子共は悲しく見ていた。

「なんで、俺たちにはきいてくれないのかな？」
「さあ」

良く見る光景にレンジはため息をついた。

「あれ？ソラ君たちは？」

雫はレンジに聞いた。
水着は黒のビキニだった。

「お、おう。いつものようにソラを追いかけたぞ」

目のやり場が困るレンジは雫を見ないで言った。
他の男子は雫を見てうれしがっている。

「そう。残念」

雫はボソツと言った。

「おっし、お前ら、ナンパ再会するぞ！！」
「『『『おーーーーー』『』『』」

道長の言葉に近藤、山田、島田は答えた。
そのあと、さつきと同じ方向へ走っていった。

「あいつらもこりねえな」

レンジはその光景を見てつぶやいた。

ソラはとりあえず、女子たちから逃げるために走っていた。

「ふう。そろそろ戻りましょうか」

ソラはそう言っただけでターンした。

「あれ？ソラ君。もう終わり？」

合流した優菜たちは不思議そうに言った。

「暑いので、君たちも海に入ったらどうですか？」

「まあ、もうちょっと追いかけてほしいけど。暑いから入ってくる」

雪たちは納得してくれた。

「でも、ソラ君はそこっこうでいいのですか？」

香奈は聞いた。

ソラの格好はジーンズでTシャツの上に黒のYシャツを前のボタンを空けて着ている。

「まあ、一番動きやすい格好ですのでいいですよ」

「そうですか」

「では僕はいろいろな食べ物とかを用意してきますね」

その言葉に全員「はい」と答えた。

このときソラは何かのS Iの反応を感じていた。

第66章続く

第6章 海1日目・中学生

海。

ここは海で、みんなが泳ぎ、楽しむところである。

だが、ここで一人むなしく友達の遊びを見ている少年が独りいた。

「長門、お前なんのために来たんだ？」

進藤がソラに近くに寄り、聞いてきた。

「そう言われますと、保護者と案内人とでしか言いようがありませんね」

「……俺は保護者のほうだと思っぞ」

「どうも」

進藤はそのままジューズを取り、ソラの横に座った。

「そういえば、道長たちは？」

「ナンパです」

ソラはアッサリ言った。

「あいつらもこりねえな」

「さっき、もう片方の頬に手形が付いていました」

「本当にこりねえな」

「そうですね」

「……」

ソラと進藤は無言でペットボトルを口につけた。

そのあと、また無言になった。

「あ、ソン君。そろそろ昼ごはん食べたいな」

雪がこっちに來てソラに言った。

隣には香奈、優菜、朱里、あさみ、雫がいた。

「分かりました」

「それならいいものがあるぜ」

レンジの音が聞こえたので全員そっちに向いた。
そこにはレンジのほかになんかいろいろ持たされているナンパ組みがいた。

道長と近藤の両頬はさらに赤くなっていた。

「焼きそば買っていたぜ、みんなで食べようぜ」

「では、いただきますか」

『いただきますーす』

昼飯を食べ終わり、みんなくつろいでいた。

「道長、さっきから望見鏡でなにみているのですか？」

「……秘密」

その時、道長の近くに近藤が來た。

「おい、分かったか？」

近藤は静かに道長に聞いた。

「ああ、大木はB、冬野はC、倉田はD、長門妹はA、窓辺さんはEだ」

これは多分、いや、多分でなくともバストサイズのことだろう。

「蒼希さんは？」

「Dに近い、C!!」

「マジか!!」

その時、ソラは2人の頭に蹴りを入れた。

「なにやっているのですか？」

「なにを、俺たちはなにもエロイことはしてねえぞ!!」

「そつだそつだ!!」

2人は文句を言ってくる。

だが、証拠がもう顔にあった。

「そうですか、ではなぜに鼻血が出ているのですか？」

「おい、女子の胸のサイズ分かったか？」

その時、島田が2人に大声で駆け寄ってきた。

「「ちょ、バカ!!」」

「へ!？」

そのとき、やっと周りの状況が分かった島田。
だが、もう遅い。

結果、3人は正座のお説教。

変態ことには厳しいソラであった。

お説教が終わり、3人はフラフラしていた。

「おい、ついでにあの美沙と言う子はなんだった？」

「AAだ!!」

そのとき、浜辺なのに、大きな足音が聞こえた。

「そこ、いま失礼なことを言ったな!？」

返答を拒否するように美沙はも道長に思いっきり蹴りを入れた。

ソラは、みんなが遊んでいるあいだ、さつき感じたS Iの反応を追っていた。

「たしか、ここら辺ですよね」

ソラは周りを見渡した。

ここには誰もいない。

だが、近くにはたくさんの木に覆われているところがある。

ソラはそこにS I反応を感じた。

(とりあえずは、行って見ますか)

ソラはなにも恐れずにそこに進んだ。

夏というのに、まったく虫の気配が無く、むしろ涼しかった。ソラは確かにS Iの反応が強いところまで進んでいる。

その時、人の気配がして、ソラはそこをのぞいた。

そこには、中学生らしき、男性が4人、女子が3人いた。

しかし、問題なのはそこではない。

なんと全員からS I反応があるのだ。

その時、背の高い若い女性が姿を現した。

「みんな、調子はどう？」

「はい。調子はいいです」

まじめそうな黒短髪の少年が返事をした。

「そこに、誰がいるわね！！」

背の高い女性はいきなり声を上げて、ソラにめがけて何かを投げた。大体ばれる予想はしていたのでソラはすぐに避けた。

そのまま逃げるのもありだと思ったが、誤解されたら後から困ることがありそうだと思い、その場所にとどまった。

そのあと、木の葉を避けながらソラは姿を現した。

「姿を現したね！！悪のS I使い！！」

女性はそう言ってまた何かを投げ出した。しかも、さっきよりも量が多い。

「しかたありません！！」デジタル・ベルト【電子ノ帯】！！」

ソラは帯を使い、投げたものを包み込んだ。

「やるわね！！」

女性はにやりと笑った。

「ちょっと、待ってください」

ソラは手を上げて言った。

「なに？」

「すこし、お話させてください」

「やだ」

「ちょっと！！」

女性はまた構えだした。

だが、ソラはその先のことを読んだ。

すぐに後ろ周り、足を軽く蹴った。

女性はそのまましりもちをついた。

「安心してください。僕は本当に話をするために来たんですから、戦う気はまったくありません」

ソラはさっき言いそびれた言葉を最後まで言った。

「話って？」

「一体、ここで何をしていますのですか？8人のS.I.使いさん」

「あなた、この子達がS Iをもっているって知っているの？」

女性は驚きながら言った。

「ええ。ものすごく弱いですが、その分、しっかりコントロールできていると思います。僕のS Iとは違って」

ソラは自分が見て知ったことを全て言った。

「あなた、良く分かっているじゃない」

「だから、あなたは僕をS I使いだと分かっているのでしょうか。コントロールが出来ていないので無駄にS Iの反応が強すぎるために」
「あなた、本当に良く分かっているじゃない」

女性は感心しながら言った。

子供たちは何を言っているのか分からない顔をしている子が何名かいた。

「で、ここになんのよう」

「教えてほしいことがあります」

ソラは本題を話し出した。

第66章終わり

第67章 特訓・ためし

ソラはとりあえず、話し合えることになった。

「そうですか。それでここで特訓を」

聞いた話によれば、この中学生たちは、不思議な日からあることで、小さいころ捨てられて、孤児園に預けられていたが、昔、その孤児園は火事で無くなり、その先生であつた、この女性、きむらかえで木村楓さんが全員の世話をしているらしい。

彼女もまた、SI使いだ。

多分、彼たちの気持ちを良く知っているだろう。

「その様子だと、君も本当に自分のSIにこまっているようね。長門くん」

「はい」

ソラ正直に言つた。

「分かったは、つまり、自分のSIをうまくコントロールしたいからここに來たのね」

「えつと、少し違います」

ソラは勘違いさせないように言つた。

「僕がここに來たのは単なる偶然です。ですが、ここに來て決心が付きました。僕はここで自分のSIをコントロールさせます」

「ふうん。聞き分けのいい子ね」

「どうも」

お互い少し笑った。

「うん気に入った。うんと鍛えてあげるわ」

「ありがとうございます！！」

ソラは丁寧にお礼を言った。

「で、ここにいる時間は？」

「6日です。そのあいだ、僕のSIをコントロールさせます！！」

こうして、ソラの特訓が始まった。

まずは、それぞれ知るために自己紹介から始まった。

「長門ソラ、都立星光高校1年です」

ソラは微笑みながら言った。

「へー長門くん、星光高校なんだ。結構頭良かったりする？」

「それは自分では分かりませんよ」

実際、頭はいい。

楓はまた「ふーん」と言って興味を持った顔をしている。

「ほら、あなたたちもご挨拶」

「ふじいたくみ藤井匠です。よろしく願います」

黒髪の単発の少年が丁寧に挨拶してきた。

「小山美咲こやまみさきです。よろしくお願いします」

赤髪のショートヘヤーの子がビビりながらも、丁寧に挨拶してきた。

「荒川誠吾あらかわせいごよろしくな」

坊主頭の少年が元気よく言ってきた。

「あ、荒川圭吾あらかわけいごです。よ、よろしくです」

髪が少し長い少年がオドオドしながら言った。

「どうやら誠吾とは兄弟らしく、彼のほうが兄らしい。」

「日比野御子ひびのみこよ、よろしく」

元気よさそうな茶髪のロングヘアーのが言った。

「原田茂はらだしげるよろしく」

眼鏡を持ち上げながら茶髪の少年が言った。

「……椎名美優しいなみゆう」

本を読みながらロングの黒髪の少女が挨拶してきた。

「はい、これで挨拶は終ねみんな仲良くしてね」

『はい！ー！』

何人かが返事をした。

「で、君のS I って一体どんなの？」

「それは教えできません。危険すぎますし、きっと知りません」

「ほゝそれはぜひコントロールしたときの姿をみたいね」

楓は興味心身に聞いた。

「あの、すこしいいですか？」

「ええ」

匠がソラに聞いてきた。

「さっき、見ていたのですが、あなたは結構体術に慣れている感じがします。すこしお手合わせいいですか？」

「別にいいですよ」

ソラは微笑みながら言った。

「では、行きます!!」

匠は一気にソラに突っ込んできた。

そのまま、拳で何度かぶつかってきた。

ソラはそれを避け続ける。

「ほう、避けるんですね。受け止めはしないと」

「僕はS I が使われている手に触る趣味は無いもので」

『!!--』

全員、ソラの言葉に驚いた。

「楓さんから聞いたのですか？」

「いいえ。僕には見えますので」

ソラは目を指差しながら言った。

「それなら、こっちも容赦はしません」

「いいですよ」

匠はまたソラに向かってダッシュした。

次は不思議な殴り方でソラを追い詰めてくる。

「戦い方が変わりましたね」

「すこし、本気で行きますので」

そのあと、匠は一回まわり、裏拳を当ててきたが、ソラは体制をひくくして避ける。

だが、それが匠の狙いだった。

「行きます！！」

瞬時に体の回転を止めて、そのまま一気に腕を伸ばして、ソラの腹は両手で殴った。

ソラはそのまま後ろに下がって行った。

「まだまだ！！」

そのまま匠は高く飛び、思いっきり殴ってきたが避けられた。

だが、またそれも囧。

回転をし、ソラの横腹を殴った。

「ガッ!!」

ソラは大きな痛みを感じた。

「手ごたえはありました」

匠は手を持ちながら言った。

だが、それが彼の油断だった。

ソラはふらつく体を足でとめて、その足を中心にして一気に回転。
匠の後ろを取った。

「な、確かに手ごたえは合ったはず!!」

「残念ですね。こっちはいくらでも死にそうな思いはしてきたので」

そう言つてソラは匠の足を軽く蹴った。

「さっき使った方法は効きませんよ。一度見ましたから」

「そうですね。ですので違う方法を使わせてもらいました」

匠はソラの蹴りを避けた後、一気にソラのほうへ向き直った。

だが、そこにもうソラの姿はなかった。

「君の戦い方は踏み台がしっかりしているときのみにちゃんとした
威力を発揮します。ですが、今は地面についている足は片足のみ」

ソラは残った足を蹴り、こけそうになった匠をしっかりと受け止めて、

やさしく地面に置いた。

「ま、負けた」

勝敗の決まりはつけてはいなかったが、彼の口から確かこの言葉が漏れた。

「では、僕の勝ちですね」

ソラは微笑みながら言った。

「へえ、匠のS Iの正体を知ってから、そのあとにその攻撃方法を見破りさらには対抗手段までも導き出してきたね」

楓は手を叩きながら言った。

「そして、その戦い方は、いや、その推理は君の力かい？それとも、今までの戦闘の経験の差かな」

「僕にはそういうことはわかりません」

「しかし、匠に負けを言わすなんて、しかも、S Iを使わずにね」

「いままでの戦闘で、ほとんど僕はS Iを使っていますし、自分のS Iを知ったのはつい最近です。ほとんど、いいえ、全部仲間に助けてもらってばかりです」

ソラはいままのことを口にした。

「そう。その仲間のために、君はS Iをコントロールさせたいんだね」

「はい。それ以外の理由はありません！」

「そし、とりあえずは、よろしく、ソラ君」

「よろしくです。楓さん」

2人はお互いに挨拶を交わした後、握手をした。

第67章つづく

第67章 特訓・追いかけて

ソラはとりあえず、実践の特訓の前に、追いかけてこされていた。

「おい、ソラ！こつちだ！！」

誠吾が追いかけてくるソラに言って逃げている。

「なんちゅう速さですか、彼のSIは」

ソラはさっき言われたことを思い出す。

「とりあえずは、誠吾とでも、追いかけてこしてきな
「はい？」

いきなり楓にいわれてソラは驚いていた。

「お、追いかけてこですか？」

「そう、だがただの追いかけてこではない。誠吾にはSIを使わせる」

「SI…ですか？」

「そう」

そう言って誠吾に何かを書いた石を渡す。

そのあと、誠吾に何かを言うてから、誠吾はいきなり木の上に乗ってダッシュした。

「誠吾にはある石を渡した。その石を君が奪えば君の勝ちさ」
「なんか、見たことがあるのですが」

楓は一瞬無言になった。

「……気にしないでくれ」
「はあ」

ソラはなにかを察したのか、これ以上は聞かなかった。

「誠吾のS Iの説明を終えてからが君のスタートだ」
「わかりました」

誠吾のS Iはどうやら、自分の下半身の強化あるらしい。
名前は【足の強化】。
フットベース
ファーストフェイス
能力系の【第一型】のS Iだ。

ソラがなぜこんなことになったのかは理由は簡単だ。

彼らは自分のS Iをさらにうまく使えるように特訓している。
それはコントロールするためにもいえることで、ソラはみんなの
特訓の相手をする事により、自分もコントロールする、またはヒ
ントを得るために初めは誠吾との体力をつける特訓になった。

「へへっ！！追いつけるものなら追いついて見やがれ！！」

誠吾がソラをバカにした顔で言ってくる。
ソラはその言葉を完全に無視する。

SIが使えない状況で完全にソラは不利。
だったら、捕まえられる作戦を考えるしかない。

ソラは考えながら誠吾を追いかけた。

まずは相手を見失わないようにすることが先決である。

「え、あの人、次は誠吾と追いかけてこしてるだって!？」

匠が驚きながら言った。

「早いですね。今日あったのですから明日からでもいいのではないのですか？」

圭吾が楓に聞いた。

「それだと、彼に時間がなさ過ぎるのよね」

「そういえば、今日入れて6日しかないとか」

美咲がさっきの会話を思い出しながら言った。

「そう。つまり、彼には時間がない分、後回しが出来ない。まあ、

これはソラ君本人の願いなだけだね」

「へえ、女みたいな顔をしているのに、意外と男っぽいね」

御子がバカにしたみたいに言った。

「それだと、俺が女に負けた言い方に聞こえるのは気のせいかな？」

匠がさっきの言葉に疑問を持った。

「そうね。そうなんじゃない」

「なんだと」

「コラコラ、喧嘩はやめなさい。でもね、実際、彼は結構な戦いをくぐり向けてきたと思うの、さっき私がチヨークを投げたとき、冷静に対処していたし、いつでも逃げれる体制だったわよ」

さっき、ソラと戦ったことを楓は思い出す。

ちなみにあのとき投げてきたものは実はチヨークだったのだ。

「あ、でも。たくさんの戦いをしてきたのは私も分かります」

美咲は納得して言った。

その頃、香奈たちは。

「あれ？ソラ君はどうしたのですか？」

香奈はいなくなっているソラを心配して、レンジに聞いた。

「さあな、俺がトイレに行っている間にいなくなっていたぞ」

「そして、ソラ君以外は全員いるからね、一人でどこかへ行ったんじゃないの」

雫は分析しながら言った。

「まあ、ソン君なら、晩御飯まで帰ってくるでしょ」

雪が気楽に言った。

「まあね。今は3時近く出し、心配するのははやすぎるよね」

優菜も雪の言葉を信じた。

「実は、長門はナンパしに行ったとか」

道長の言葉にほとんどの女子が反応した。

「それは無いですよね。ソラさんにはそんな感情はありませんよね」

朱里は微笑みながら言った。

だが、完全に目は笑っていなかった。

「そうだよね。私の体を見たってなんの反応もなかったですし」

香奈のこの一言は余計だった。

「見たの？ソラ君は香奈ちゃんの体」

「え、あ、はい。私がたまたまお風呂前のドアの板を裏返してなくてそれでたまたま朝に」

香奈は優菜の怖い一言により、さらっとあのときのことを言ってしまった。

考えてみれば、香奈が一番恥ずかしい話だというのに。

「へえ、そうなんですか」

朱里の顔はもう笑ってすらいなかった。

ちなみに、近藤は遠くで泣いている。

「ソン君のそのときの反応は？」

「ま、まったく無反応で、顔を赤くすらしてませんでした」

「ふふ、ソラ君らしいね」

雫は笑いながら言った。

「それって、ただ単にかーちゃんが恥じかいただけ？」

「は、はい」

雪の言葉に香奈はあのことを思い出してしまつて顔を赤くした。

「まあ、本当にソン君らしいね」

雪はそう、つぶやいた。

誠吾はまだ、ソラから逃げ続けている。

場所は木の上。

「へんだ、S Iの使えないやつが、この俺に追いつけるわけ無いだろ」

誠吾は自信満々に言い張った。

同時に後ろを見たが、そこには誰もいなかった。

「あいつ、俺のすごさにビビッて逃げたのか？」

自信まんまんの誠吾はその場に止まった。

「まあ、俺の速さに追いつけなかったとかだろう。しょうがねえからここでまってやるか」

そう言つて仁王立ちで木の上に立った。
そのときだった。

「まっていたよ！！」デジタル・ヘルト【電子ノ帯】！！」

後ろからソラの声が聞こえた。

「う、うお！！」

だが、もう遅い。

誠吾は見事にソラの帯に捕まった。

「な、なんでいきなり現れた！？」

「簡単ですよ。僕はずっと木の下で走っていたので」

そう。誠吾を見つけた後、木の上からではさすがには追いつけないので、予定を変更して、自分が走りやすい地面で誠吾を追っていた。

さらには誠吾は自分は自信家と言うことに分かったソラは、ソラの姿を見えないことにより、余裕を持ってソラが来るのを待っているだろうと予想したのだ。

「しかし、単純に作戦に引っかけてくれましたね。石はもらいます」

「あ!!」

「また、ご相手お願いしますね」

そう言ってソラは木から下りた。

第67章続く

第67章 特訓・制御

「おお、意外と早かったな」

ソラが戻ってきて寒心しながら楓が言った。

「くそっ！！なんで俺がこんなやつに」

「見ているようだ、待ち伏せ作戦は使っていないようだね」

楓は誠吾の態度を見て把握する。

「まあ、そんなことをしたら特訓にはなりませんし、時間もかかってしまいます」

ソラは思ったことを述べた。

「しかし、誠吾の足の速さに勝るとはね」

実際、誠吾は木の上にいたわけなので、誠吾の足の速さなの問題ではなかった。

だが、ソラの足が速いのも確かだ。

「じゃあ、次は御子と特訓ね」

「ええ！！」

楓がそう言ったとき、その御子がいやな声を放った。
顔もめちゃくちゃいやそうだった。

「まあ、圭吾も一緒だったわね」

「そ、そこじゃないくつて」

なにに反応したのか、御子は急いで訂正した。

「僕は別にいいですよ。ソラさん」

「では、お願いします」

ソラは丁寧と言った。

「じゃあ、あとはよろしくね。サポートに匠も一緒にいてあげて」
「はい」

そう言い残して楓はどこかに行った。

「では、まず。僕らの特訓方法を教えます」

圭吾は丁寧に説明をした。

どうやら、圭吾と、御子のS Iは非常に強力な攻撃的なS Iらしいのだ。

そのために、いまのその歳の体では、コントロールをするのは難しい。

それで、彼らは自分ら独自の力を抑えるための力を開発したのだ。

「その名もR^{ルール}uleです」

R u l eとは、自分たち独自のS Iの能力を変えることである。

「僕の場合、発動する前にはあることをしなければ、暴走してしまうこともあります」

「つまり、補助系の技を出してから、自分のS Iを使うと」

「それでも、やはりちょっとしたコントロールはしなければなりません」

後ろから声が聞こえたので、ソラは振り向いた。
そこには美咲が行儀良く立っていた。

「Ruleだと、ちょっとしたコントロールは必要となってます」
「つまり、生き物と同じ、言うことを聞くか、聞かないかという話ですね」
「はい」

美咲はソラの理解差に少し驚きながら言った。

「ですが、それでは拉致が明きませんね」
「ですので、わ、私の考えですがいいですか？」
「いいですよ。今は聞いたほうがいいですよ」

遠慮がちに美咲は聞いたがソラにはそんなに遠慮しなくともいい。

「私が使っている制御能力と、Rule。どちらも使ってみればいいのではありませんか？」
「君が使ってういる制御能力？」

ソラはどちらも使ってみる言葉には反応せずに、前者の制御能力が気になった」

「はい。Ruleはまず先の動作をしなければなりません、私の場合、SIをまず、理解することから始めました」
「自分のSIの理解」

ソラは納得しながら言った。

「はい。暴走するなら、そのS Iの反することを行っている。そういうことではないのでしょうか」

ソラは考え出した。

どこら辺を反しているのか、実についたばかりなので、思い当たる節がまったく無い。

「それか、S I自体のともとと強力なのか」

「そこらへんも分からない。だから暴走すると」

「そういう考えもあります」

ソラは再度考え出した。

「もし、後者のほうならば、自分でS Iを加工すればいいのではないのでしょうか」

ソラはその言葉に大きく反応した。

「そうか。いままではみんなはS Iにもともとあった力を使っている。ならば、S Iのもとの能力と、自分の作るイメージをあわせれば」

ソラはさらに考えを導き出した。

「Rule、制御、そしてイメージ。これなら!!」

ソラは美咲の手をつかんだ。

「ありがとうございます。君のおかげで何とかできそうです」

ソラは喜びながら言った。

美咲はものすごく照れて、顔が赤くなっている。

「自分のS Iを知りたいのなら、いい方法があります」

いきなり声をかけられてソラのそこに目を向けた。

そこにいたのは美優だった。

眼鏡をかけている少女は本をしまった。

「長門さん。自分のS Iを知りたいのですよね」

「ええ。ですが、このS Iがやりたいことがわかりました」

ソラは拳を握った。

「それならいいです」

美優はすこし笑った。

多分、ソラを試すために聞いたのだろう。

「じゃあ、もう戻ったほうが言いのじゃない」

そのとき、楓がいきなり声をかけてきた。

「仲間がいるんですよ。そして、ここにこの子たちがいたんじゃないS Iも発動も出来ないんですよ」

「心遣いありがとうございます」

そう言って一礼してからソラは歩き出した。

「また、ここにいるからね。また明日おいで」
「次は勝つからね!!」

楓の言葉に後、誠吾がソラに言った。
ソラは手を上げて答えた。

（さあ、みんなの場所に戻りましょうか）

その日の夜。
今晚はバーベキューだ。

「さあ、みなさん。出来ましたよ!!」

焼いていたソラがみんなに伝えた。

「そういえば、結局ソン君どこに行っていたの？」
雪が食べながらソラに聞く。

「秘密です」

ソラはただ一言、そう言った。

「でも、ソラ君。なにかすがすがしい顔してます」
「そうですか？」
「はい」

香奈は笑顔で言った。

そのあと、ソラは確かに笑顔になった。

「それは多分。本当に君たちと共に戦える日が近くなってきたからでしょう」

「つまり、あのS Iのことがなにかわかったのね」

雫がその顔と言葉で理解した。

「はい」

「長門くん。何の話」

いきなり秋が声をかけてきて、ソラは驚いた。

「び、ビックリしました」

ソラは落ちつ置いて肉を焼き始める。

「あれあれ？秋ちゃんの言葉に驚くなんて長門くんにしては珍しいわね」

佐藤がにやにやしながら言った。

「いきなり声をかけられたらそれは驚きます」

そう言ってソラは秋が持っていた皿の上に肉を置く。

「あ、ありが」

「ソラさん。この後はどうします？」

秋がお礼を言う前に、朱里がソラに声をかけた。

「そうですね。中でゆっくりしときましようよ」

ソラは笑顔で言った。

これから、ソラの一人の戦いが始まる。

第67章 終わり

第68章 海の初めての夜

ソラたちは夕飯が終わり、独自の部屋に戻っていた。

ソラは本を呼んでいて、朱里は夏休みの宿題をやっていた。

「あの、ソラさんは宿題終わりましたか？」

「ええ。7月中に終わらせました」

ソラは本を読みながらさらっと言った。

「すごいですね。結構いろんなことで忙しかったのではないのですか？」

朱里が感心しながら言った。

「そうですね。ですが、家事がラクになってきたので。空き時間が増えたので」

ソラは本を読むのをやめて、会話に集中した。

「そうなんですか」

「ええ」

そのあと、いきなりドアが開いた。

「やーソン君！！なにやってる？」

そう言いながら雪が入ってきた。
後ろには香奈、あさみ、優菜がいた。

「いきなりなんですか？」

「おうっ、冷静なツツコミー！」

雪はなんかテンションが高い。

「なんか、テンション高いですね」

「そりゃ、みんなと一緒に寝泊りが出来るからね」

思いつきり雪の頭にはわくわくと言う文字が見える。

「そうですか。で、なにをするのですか？」

「とりあえずは、トランプ」

こうして、トランプをやることになった。

だが、ババ抜き、5回目が終わった頃に、みんなあることに気づいた。

「ソラ君。絶対にさっきまでババ引いていないでしょ」

優菜がもしやと思い、聞いてきた。

「よく分かりましたね」

「本当だったんだね」

「あ、だから私にもババが来なかったんだ」

香奈は思い出したように言った。

「香奈さんもそうでしたか」

順番としては、ソラは優菜のを引き、香奈はソラのを引き、あさみは香奈のを引き、雪はあさみのを引き、優菜は雪のを引く形になっている。

「ソラ君。まさかどれがババなのか分かる？」

「ええ。優菜の目が教えてくれます。これがババだと」
「なにそれ！！」

雪が興味心身に聞いた。

「優菜が意識してみないようにしても、目は正直にちょっとでもババのほうを見えています」

「この前、お兄ちゃんとババ抜きしたら、ババを一回でも引いちゃったらそのあと、絶対に引かれなかった」

あかみが残念そうに言った。

「つまり、人の視線を見る能力が長けているのね」

「し、雫さん！！いきなりどうしたんですか？」

いきなり現れた雫にソラは聞いた。

「お風呂が開いたからって聞いたから呼びに来たの。ソラ君は男子たちに言ってきてね」

「はい」

そう言ってソラは立ち上がった。

「こっちが男子で、あっちが女子ですね」

指を刺しながらソラは確認を行う。

「そうね。それではいきましょうか」

そう言つて男子と女子が分かれたとき、佐藤ははとどめの言葉を言つた。

「あ、長門君以外、のぞいたらダメだからね」

その時、女子たちは一気に佐藤の口を封じた。
何人かは、顔が赤かった。

「見ませんし、見させません」

ソラは呆れながら言つた。

女子たちは安心して息を吐いた。

「ちえ、なんだよ、長門ばかり」

道長が服を脱ぎながらぶつくさ言つ。

「なにがですか？」

「なにがつて、お前ばかり愛されているからだよ！！」

「そんなこと僕に言われなくても」

ソラはなにがなんだか分からなかった。

「おまえ、本当に蒼希さんと同棲してるんだよな!!」

「ど、同棲ですか？同居ではなく」

ソラはわけが分からなかった。

「てか、お前普通に家事していて、洗濯物よく干せるよな」

「なにがですか？」

「そりゃ、女子の服までも洗うんだろ」

道長は少し興奮しながら聞いた。

「しかも、下着までも!!」

道長はさらに鼻息を強くさせた。

「まあ、洗いますけど、普通に衣服なのでそんな気持ちはありませんよ」

「て、てめえ!!」

道長は悔しそうに言う。

「じゃあ、風呂とかはなにやってる」

「なにつて、普通に交代交代でしてますよ。基本僕が最後で」

そう言っつてソラは頭をシャワーにつける。

「まあ、時々バスタオルを巻いただけの状態で出てくるのは困ります」

その言葉を言った瞬間、近藤は鼻血を出した。

「なにしてるんですか？」

「バツ、お前な、蒼希さんのバスタオル姿を想像して鼻血を出さないものがあるかよ」

鼻を押さえながら近藤は言う。

「いや、出てくるのは、香奈ではなく、あさみのほうですが」
「え？」

当たり前である。

彼女の性格からして、そんな状態で出てくることはまず無い。

近藤はものすごく勘違いしていた。

これでは、あさみの想像をして鼻血を出した、ロリコンである。

近藤は膝と、手を地面について悔しがった。

「なに考えてるのですか」

「おい、長門、あれ」

進藤に言われてソラはその方向を見ると、そこには近藤と同じ状態になっている道長がいた。

「この人たちは一体なんですか？」

「一種の変態」

ソラの言葉に進藤が返答した。

「まったく、なに考えてるんだが」

「そう言って鼻を押さえている人がいますか？」

レンジは湯船に入りながら、鼻を押さえていた。

その光景にソラはツツコンだ。

風呂から上がりソラ一人で、人氣がまったく無い海岸にいた。

「弾は最低で3発のみ」

ソラはそう言って手を前に出す。

昼に習ったことを今、試す気である。

「行きますよ、【風ノ破壊者】エアロ・ブレイカー！！！」

ソラの周りに赤い風が舞う。

前は海。

ここならなにも壊れないからだ。

「はああああ！！！」

ソラは放った。

だが、威力は前と何も変わらない。

ソラはそのまま後ろに飛んだ。

「やっぱり、だめですか」

ソラは次は、想像を強く持つて放ったが、これまた何も変わらない。

（もっと、強く！！）

ソラは息を軽く吐いた。

これで、海での合宿の1日が過ぎた。

第68章 終わり

第69章 電撃特訓・砲台

ソラはまた、みんなが海で遊んでいる間、例の場所に来ていた。来たとき、ソラを見つけた楓が声をかけてきた。

「あら、本当に来たのね」

「自分のことですのでそれぐらいはちゃんとします」

「うん。エライエライ」

楓は微笑みながら言った。

楓にとって高校生のソラも子供どうぜんなのだ。

「一つ、お願いがあるのですが」

ソラは改めていった。

「なに？」

「少し、美咲ちゃんに、彼女と話がしたいのですが」

「わかったわ」

そう言っつて楓は席を離れた。

ソラが美咲と話がしたいのは、もっと例の話。制御能力の話を知りたいからだ。

特訓の前に、そういう理論は頭に入れていたほうが言いと思ったからだ。

2分ぐらいしてから美咲は姿を現した。

「長門さん。どうしたんですか？」

美咲は疑問に思いながら聞いた。

「昨日の話、良く聞かせてもらえないでしょうか？」

ソラは微笑みながら聞いた。

「それって、制御能力のことですか？」

「ええ」

そのあと、美咲は困った顔をした。

「あのー実はあの話は昨日で全て話しました」

「そうですか」

どうやらそこまで行くと、完全に制御能力は完成していないとソラは分かった。

「いや、実際には完成は出来ないのですね」

「はい」

そのことは美咲も分かっていたようだ。

SIは今でも不思議な力、その不思議な力を人間がすぐに制御できるとはまったく思えない。

逆に完全でないほうがおかしいのだ。

人間は必ずしも全て出来る種族ではないのだ。
出来ないことだってたくさんある。

「まあ、それぐらいは覚悟していました。ありがとございます」

ソラは美咲に例を言った。

「では、話も終わったし、特訓の続きでも始めるか」

またもや、楓はいきなりソラの後ろに立っていた。
だが、次はソラは驚かなかった。

「また、なにをしてるのですか？」

「お、次は驚かなかったね」

感心しながら楓は言う。

「まあ、2回目ですし」

ソラは呆れながら言った。

「それで、今日は何をすればいいのですか？」

ソラは気を取り直して聞いた。

「今日はね御子と相手してもらおうよ。特訓法は簡単。ただソラ君が御子の攻撃を避け続けられればいいの」

楓の言葉にソラは嫌な予感がした。

「それって、もしかしたら」

「もしかしくってもそうよー!!」

後ろから声が聞こえたので、ソラと美咲は振り向いた。

「御子ちゃん!!」

そう。そこには美咲が言った通り、御子が木の上に立っていた。

「ほら、女の子が木の上で立っているのは危ないですよ」

ソラはなぜその場にいるのか、なんて関係なく、心配して言った。
御子はその言葉に反応した。

「うるさい!! いいの、私はここから落ちたことが無いの!!」

御子は自信満々に言った。

「2日前も違う木に登って落ちたのは誰だ」

その場にいた匠が御子に言った。

「うるさい!! とにかく、今日の特訓相手は私よ!! 観念しなさいよ」

御子は腰に手をあてながら言った。

だが、ソラはその言葉を聴いていなかった。

「美咲ちゃん。一つ思ったのですが」

「なにがですか?」

ソラに耳打ちされた美咲は聞き返す。

「御子ちゃんのS Iって、破壊系の類のものですか？」
「良く分かりましたね」

ソラはその言葉を聴いたとき、ものすごく嫌な予感がした。
だが、もう遅かった。

「行くわよ。【電撃ノ砲台】^{サンダー・キャノン}！！」

御子はいきなりピストルを構えだした。
いや、正確にはB B弾を発射する、モデルガンだ。

御子は容赦なく引き金を引いた。
そして、出てきたのはB B弾だが、そのB B弾の周りには電気がま
ざっていた。

ソラは横に避けた。

「放った玉を電気の衣をつける能力形のS Iですか」

ソラは冷静に分析した。

S Iの名前と、攻撃方法。
それをこう考えればそんな答えが出てきた。

「ですが、関心している場合ではなさそうですね」

ソラは一気に駆け出した。

「逃がさないわよ！！」

そう言って御子はそろりそろりと木から降りてソラを探し出した。

だが、ソラの足の速さと彼女の木から降りる速さはものすごく差があり、ソラはもう見えなくなっていた。

「あいつ早いな」

その光景を見ていた誠吾が言った。

「もう、どこに行ったのよ！！ちょうどいいわ、あんたも来なさい！！」

「ふえ、私も？」

いきなり腕をつかまれて美咲は驚きながら聞いた。

「そうよ、いいから来なさい！！」

「それじゃあ、御子ちゃんの特訓にならないのじゃ」

美咲は正論を吐いたが、御子にはそんなこと本当にどうでもよかった。

御子は必死になってソラを探し始めた。

「なはは。御子に目をつけられるなんてソラのやつも大変だな」

誠吾は笑いながら言った。

「まあ、この中の一番のトラブルメーカーだからな、あいつは」

匠はさらに嫌な予感を告げることと言った。

そのころ海では。

「あれ？お兄ちゃんまたいないの？」

あさみは気になって聞いた。

「そうね。またどっか行つた見たいね」

優菜があさみに言った。

香奈もその会話に入ってきた。

「ソラ君泳げないから、どこかでS.Iの特訓とかしているかも」

「まあ、ソラ君の場合はありえるね。あんな性格だし」

思いつきり香奈と優菜の考えは当たっていた。

「お兄ちゃん。悪い人とかに引つかかってなければいいのだけど」

あさみはさらに心配していった。

「ソラさんの場合はその人たちを蹴って終わらせそうですので逆に一番心配が無いところだと思います」

朱里があさみを心配させないとしていった。

「まあ、ソラ君の場合は心配事はないと思うよ」

「そうですね。ソラ君はいつも私たちとは違う考えを持っていますか

「ら

こうして、全員今のところはソラを心配するのをやめた。

第69章 続く

第69章 電撃特訓・終わり

「もう、どこに行つたのよ!!」

小さな林の中で、御子が叫んだ。

あれから、ソラは見つかっていないのだ。

「本当に足の早い人ですね」

御子に強制に連れてこられた美咲は言う。

これなら、誠吾のスピードについてこれると納得したみたいだ。

「くそつ、本当に逃げ足が早いやつね」

「あんな特訓だったら逃げるのは当たり前だわ。それに、逃げるこ
とが今回の特訓の内容なんだし」

「うるさいわね。そんなの分かっているわよ!!」

御子は怒りの目で美咲を見た。

「ふえ、ごめんなさい」

美咲は驚いた涙目で謝った。

だが、彼女は一切悪いことはしていない。

「だから、私はあんたを連れてきたのよ。早くやってちょうだい!

」

「はい」

御子に言われて、美咲はSIを発動した。

「発動、【超自然的電波】」
サイキック・ウェーブ

美咲は目を閉じながら両腕を前に出した。

「【動きの確認】」
モーション

美咲のS I、【超自然的電波】は【第二型】セカンドフェイスのS Iである。
自分の周りに自然に反応する電波を発信し、人や、物を感じたり、
意志のないものは動かすこと可能となる。

その技の一つの【動きの確認】モーションとは、人間のその場の場所と、動き
の確認が出来るのだ。

ただ、このS I【第二型】セカンドフェイスであるために、彼女の体では、全ての能
力が一度に発動が出来ない。
そのため彼女はの一つ一つを技に代えて、発動するのだ。

つまり、美咲はいま、このS Iを使ってソラの居場所を突き止めよ
うとしているのだ。
そして思ったとおりにソラは見つかった。

「御子ちゃん。こっち」

「分かったわ。案内しなさい」

美咲と御子は走り出した。

「ほら、ここにいた」

美咲は草むらの中でソラの正体を確認した。

「見てなさい。いまからここで打ち抜くから」

御子がそう言ったとき、ソラはいきなり走り出した。

「そこにいるのは分かっているのですよ」

ソラはそう言っただけでまた消えてしまった。

「なんなの一体!!まさかばれていたの!?!」

「でも、【コシアメント気配隠し】が見抜かれたのでしょうか」

【コシアメント気配隠し】とは、その名の通り、人の気配を消す技である。

だが、その技はソラには通用しない。

ソラはさっきからずっと【マスタ・アイ達人ノ眼】または左目の【スキル・アイ超能力ノ眼】の【Lv1・ターゲット・アイ目標ノ眼】の天眼を発動しているのだ。

天眼はソラの周り半径400メートルまで見ることが出来る。

前回までは300だったがLvが上がったので範囲も増えたのだ。

だが、彼女らはそんな能力は知らない。

「だったらいいわよ!!美咲、場所は分かっている」

御子が怒りながら言った。

「うん。あっちのほうよ」

美咲がそういった後、その方向に御子は銃を構えだした。

「遠くの場所から撃たれたら避けるのも難しいでしょ」

そう言つて御子は銃の引き金を引いた。

電気をおびたBB弾がソラに迫った。

「うおー!!」

ソラはぎりぎりのところで避けた。

「あ、危ないですね。ですが、美咲ちゃんはどうやら人のいる場所がはつきりとわかるみたいですね」

そう言つてゐる間に第2発目が襲つてきた。

そのまま第3、第4まで撃たれてきた。

「遠距離攻撃だと、こちらからはなにも出来ないですね」

ソラは攻撃を避け続けた。

「ですが、防ぐ手立てはあります!!」
デジタル・ベルト
【電子ノ帯】

ソラは帯を前に壁のように出した。

玉はそこで威力を吸収されてソラには届かない。

「ああ、もう!! またあの不思議なものを出したわね」

イライラしながら御子は言った。

「こうなったら特大のを放ってあげる!!」

「はい。そこまでだ御子」

御子の頭をチョップして匠は言った。

「ちょっと、なんなの!？」

振り向きながら御子は文句を言う。

「なにつて時間だ、時間。これ以上続けるとお前はおっかないことをしそудだからな。あらかじめとめる時間を決めておいた」

匠は誰にも分かる言い方をした。

「とにかく、お前の負けで終わりだ」

「くそ、覚えておきなさい長門ソラ!!」

悔しそつに御子は言った。

「それで、なにか導き出せたの？」

香奈はソラに聞いた。

あれから3日後の夜。

ここから明日離れることとなる。

ちなみに2回目の同室者は香奈だ。

「ええ。何とか」

ソラは冷静に言った。

香奈たちには今日あの中学生たちの話をした。

「そう。良かったですね」

「はい」

そういう会話をして、2人とも眠りに付いた。

そして、最終日。

ソラはみんながいる場所に行った。

「大丈夫なの？これから一人で」

楓がソラに言った。

「ええ。ご心配かけました」

「別にいいのよ。あ、一樣私たちも科学都市に住んでいるから、電話番号渡しておくわね」

そう言って楓は携帯電話を取り出す。

「助かります」

そのあと、ソラはみんなにお別れの挨拶をした。

「うっ、またあってくれるよな」

「ええ。もちろんです」

あれから、なぜか誠吾はソラになつきだした。
そのほかの子も、御子もソラのことを信賴していた。

「では、また会いましょう」

そう言ってソラはその場から離れた。

「あ、ソラ君」

帰りの片付けが終わったらしく、みんなソラを待っていた。

「お待たせしました。では、行きましようか」

ソラは微笑みながら言った。

「あ、ソラさん、なんか顔すっきりしてます」

朱里がソラの顔の変化を見て言った、。

「そうですか？」

「はい。なんか悩みが消えた感じで」

朱里は微笑みながら言った。

ほとんどのメンバーはその意味を分かっていた。

「まあ、悩みは消えました」

ソラはまた微笑みながら言った。

そのとき、香奈は感じていた。

なんだか、ソラの髪の毛が伸びていた、そんな気がしていた。

第69章 終わり

第70章 復活の「一暗闇の道人へダークネス・ロードス」・ゲーム

8月9日水曜日。

ソラたちは街中を歩いていた。

今日は雫とレンジもいる。

あれからソラは帰ってからの一人でどこかで特訓していた。
今日はみんなと一緒にだ。

「しかしね、魔獣もなかなか現れないものね」

優菜が飲みものを飲みながら言った。

「そうですね。大聖堂まできましたのに」

ソラたちはいままで遭遇率が高い大聖堂までできていたのだが、魔獣は一切出てこない。

そのときだった、たまたま電気屋を通っていたとき、いきなり外に置いていたテレビのチャンネルが変わった。

ソラたちはそれを見過ごさなかった。

「ソラ君、今のは」

香奈は驚きながらソラに聞いた。

「ええ。SIによるものですー!!」

そのとき、テレビから人が一人出てきた。
髪の色は赤の長髪だ。
顔はサングラスで隠れている。

『え、今この世に生きているゲスどもに伝える。今からここ大聖堂
は我ら、ダークネス・ロードス【暗闇の道人】が貰い受けた！！』

『！！』

その言葉に全員驚いた。

「ソラさん。今の言葉って」

「ダークネス・ロードス【暗闇の道人】！？」

「それって、私たちが倒した団体名だよね」

みんな一斉に混乱した。

「ですが、あの人は見たことがありません」

ソラは落ち着きながら言った。

「そうよね。でもなんでダークネス・ロードス【暗闇の道人】がまた復活したのかしら」

優菜もソラに続いて冷静になってくれた。

『文句があるものは、ここまでこい、特に、長門そらと、その仲間
は大歓迎だ！！』

そのとき、テレビからさらにこんな言葉が聞こえた。

「どうやら、歓迎してくれるらしいですね」

「ソラ君。どうします」

「それは、言うまでもありません」

みんな一斉にうなずいた。

「行きましょう！！」

ソラたちはその場所に走り出した。

ソラたちは記された場所に着いた。

この場所はすでに科学都市で手を出していない場所である。

完全に回りは岩と砂ばかりである。

確かにこんな場所はたくさんあり、ここは人もめったに来ない。

ソラたちは確かにここだと思い立ち止まった。

『良く来たな、長門ソラ！！』

どこからか、声が聞こえた。

「なんですか、あなたたちは一体、いきなり出てきて」

ソラは大声を出した。

『ふん、そんなことはどうでもいい。それよりも、ゲームしようぜ』

どうやら、あつち話を聞く耳は持っていないようだ。

「どういことですか？」

『なに、簡単なゲームだ。俺たちのチームとお前たちのチーム。大將が死んだら終わりのデスゲームだ。そして、対象はお前と、俺だ。いいな』

男はいきなりルールを説明してきた。

『おっと、始める前に、名前を言う必要があるな、きんげいおつて如月黄土だ』

「僕は、そんなことは聞いてません」

『では、ゲームスタートだ』

完全にソラの聞かずにゲームが始まってしまった。
そのとき、ソラは後ろに殺気があるのを感じた。

「本当に聞く耳が無いようだな!!」

「みなさん、後ろ!!」

レンジがそうだった瞬間、ソラは叫んだ。

「もう遅い、ケツケツケ!!」

いきなり現れた黒ずくめの男にS Iの世界を作らせてしまった。

「ケツケツケ!!お前らはいきなりこの俺様にゲームオーバーさ!!」

男は上を向いて叫んだ。

「【LV2・ワールド・ブレイク世界破壊】」

ソラは冷静に【ワールド・ブレイク世界破壊】を発動した。

男のS Iの世界が破壊されていった。

「ゲゲッ」

男はこの事態に驚いていた。

「こつちだ!!」

「こつちよ!!」

レンジと優菜はお互い、棒を持っており、挟み撃ちにした。
棒は男の腹と顔面に直撃した。

男はそのまんま気絶した。

「さてと、どうします?」

ソラは改めてみんなに聞いた。

「そうね。一緒に行動するか、別行動にするか」

雫の言葉にみんな悩んだ。

そのとき、ソラは何かを見たような顔をした。

「みなさん、あそこに確かにたくさんの方のS I反応が見えます」

ソラは指差して言った。

「え!?! 本当?」

優菜はそこを見た。

「たしかに、こっちに向かってきそうね」

雫も納得して言った。

「一緒に行きましょう。そっちのほうが勝率高いです」
「いいえ、ここは僕一人で別行動にさせてください」

ソラの口から意外な言葉がでた。

「その通りです」

だが、そのとき、違う言葉が聞こえた。

「あなたたちと長門ソラ君は別行動にさせてもらいます」

そう言つて男は手を合わせた。

その瞬間、ソラ以外の仲間を全員囲んだ壁が出てきた。

「ロード・ウォール【移動する壁】、ボックス【箱】」

「な、なにこれ」

「ソラさん」

「ソラ君!!」

「僕は大丈夫です!!」

ソラは壁を蹴る出そうとした瞬間、男はさらに言葉を続けた。

「【^{ワープ}次元移動】」

その瞬間、みんな消えていった。

「みなさん！！」

ソラはいきなり消えたので驚いた。

「君の相手は僕がしますよ。長門ソラ君」

男は微笑みながら言った。

「そうですか。まあ、別行動にさせてくれたお礼をしなければなりませんね」

ソラは男のほうに向き直って言った。

「ほう、よっぽど自信があるようで」

「自信なんてありません」

ソラは右腕を近くに上げた。

「ちゃんと発動できるのが僕には心配で、これでみんなを巻き込まずにすみませす」

そして、赤いリストバンドを少し触った。

「ほお」

男はその言葉に少し笑った。

第70章 復活の「一暗闇の道人ヘダークネス・ロードス」・みんなの行方

香奈たちは箱に閉じ込められたままどこかへ着いた。

「う、ここはどこですか？」

香奈は頭を抑えながらみんなに聞いた。

「どうやら、本当に私たちはソラ君と離れさせちゃったみたいね」

雫が香奈の問いに答えた。

外を見てみると、黒ずくめの男が5人いた。

「しかも、場所が悪いところでおろされたな。丁度いいんやら、悪いやら」

レンジは頭をかきながら言った。

そこはなんと、ソラが言っていた何人かがS I使いがいる場所だった。

「ほ、本当に丁度いいのかわかりませんね」

朱里が冷静に言った。

「ここからは、ソラなしで戦うわけだ」

レンジは立ち上がった。

「まあ、知将がいなのはきついけど、やるしかないわね」

雫は戦闘態勢に入った。

「じゃあ、私は香奈ちゃんのそばにいますね」

「ま、それしかねえよね。みんな、けつの穴占めるよ」

レンジは気合を入れるように言った。

そのあと、女子たちの文句が替わりに飛んできたのは言うまでもない。

だが、みんなそれぞれの戦闘態勢に入った。

香奈と優菜は後方でいる。

その瞬間、いきなり壁が壊れたした。

「いくぜー!!」

レンジが戦闘を切って走り出した。

出てきた場所はやはり、S Iの気配が大量にするとところだ。

「おい、行くぜー!!」

一人の男がそういった。

「なんでお前が仕切ってたんだよ。俺が仕切る」

だが、もう一人の男がアッサリ断った。

そのあと、もう一人の男が口を開いた。

「なにいつている。俺が仕切るんだよ!!」

そのあと、2人も同じことを言った。

完全に相手は険悪モードである。

「お前、ふざけんなよ」

「はあ、それはこっちのセリフだ!!」

完全に見方同士での喧嘩が始まった。

しかも、内容が小学生だ。

「あいつら、アホか」

レンジはボソツと言った。

見た目は完全にレンジと同じ年か、それ以上である。
だが、精神年齢が本当に低い。

「まあ、いいか、あのかわいい子でも遊んでいよ」

とうとう、一人が違う内容に切り替えた。

「お、本当だ、あの男以外全員かわいい」

レンジはやな予感がした。

同時に全員、銃を取り出してきた。

瞬間、いきなり撃ってきた。

「ちい、いきなりだな!!」

レンジは鉄を広げてガードした。

「ちい、あいつか、化け物みたいな力を使うやつは」

そのとき、レンジは思った。

(はあ、何言ってるんだ、こいつら)

レンジはそう思いつつ、鉄の棒を長くした。

「はああああ!!」

そのまま一気に2人の男たちに振るスイングを浴びさせた。
男2人は一気に飛ばされた。

「発動、アクアトロマスター【水ノ達人】!!」

雫は一気に水を全員に浴びさせた。

「雪ちゃん!!」
ウォーターアイス
「発動!! 【水ノ氷】!!」

雪は男たちにかかった水を凍らせた。

「あーちゃん、交代」

「はい、撃ちます!!」

もうすでに朱里は大型の銃を作っており、引き金を引いた。
一気に3人の男たちを気絶に追い込んだ。

「おい、こいつら少しおかしいぞ」

レンジは疑問に思ったことを言った。

「ええ。まるで、自分たちはSⅠ使いではないように言ったわね」

「まあ、そうなんだけどね」

またもやいきなり声をかけられて全員振り向く。

そこには黒髪のショートヘアの男がいた。
背はなんか低い。

「このクソオタクどもはもう使えないか」

ため息をつきながら男はつぶやいた。
その態度に朱里はたしかな確信をもった。

「あなたがこの人たちを戦わせたのですね」
「そうだよ」

男は意外とアッサリ、言った。

「僕のSⅠは【戦闘武装】^{フルアーマー}って言ってね。この世の生物を鎧をつけ
させて、戦闘意欲をわかせるものなんだよ」

雪はその時、男たちの服を脱がしてみた。

そこには結構装備していた鎧があった。

「やっぱ、オタクはダメだな」

男はそのとき、長い鎖を出した。

「やっぱり、動物が一番だね」

そういったとき、男の後ろから大きな蛇がすごい武装をして現れた。

『！！！』

全員驚きながら後ろに下がった。

「へ、へびですか！？」

香奈は驚きながら聞いた。

「まあね。僕のS Iは動物ならなんにも装備できるんだよ。人間も動物だからね」

男はそう言って蛇に指示を出した。

「しかも、僕は、元サーカスの団員をしていたからね。動物を言うことをきかせるなんてわけないさ」

そう言って蛇を香奈たちに襲わせた。

「危ない【ライン・シールド線ノ盾】！！！」

間一髪、優菜が蛇の口を塞いだ。

「やっぱ、小さいかな。兄さん、後は頼むね」

そのとき、後ろから誰かが現れた。

髪は黒の少し長め。

背も彼と比べては少しでかい。

「いいぜ、ブラスアーマー【武装追加】！！」

さつき出てきた男がそう言ったとき、蛇がいきなり大きくなった。いきなり、香奈たちはピンチに追い込まれた。

そのころ、ソラはというと。

「き、貴様、なんだその力は」

男はそう言いながら倒れていった。

「よし、上出来です」

そう言いながら真剣な目でS I反応が強いところを確信した。

見たところ、香奈たちは5人の男たちと対じしているみたいだが、動きを見てこれはラクだと感じた。

だが、同時に強いS Iを持った男が迫ってきていることも分かった。いたが、その時、見たことのあるIS反応も感じた。

（すみません。僕はあの人のところに向かいます）

そう思い、ソラは走り出した。

第70章 続く

第70章 復活の「一暗闇の道人ヘダークネス・ロードス」・蛇使い

香奈たちはとりあえず後ろに走り出した。

蛇の大きさは完全に人間を一口で丸呑みできるほどの大きさになってしまった。

「ちょっと、あんなのありなの!？」

雪は走りながら言った。

「本当に【セカンドフェイス第二型】はめちゃくちゃな能力ね」

雪は走りながら怒る。

「くそつ、こっちは破壊手段は倉田しかねえのに」

そのとき、いち早く前にいたレンジはその場に止まった。

目の前にはなんと武装した大型のライオンが立っていたからだ。

「嘘だろ!?!」

レンジの言葉を聴いて、皆も止まりだした。

「な、なんですか?あれは!?!」

香奈は驚きながら聞く。

「知らん。いや、多分さっきのやつのS.I.だろ!?!」

そのとき、武装ライオンは前足を上げだした。
不意を疲れてしまつてさらにいきなり走りまたとまったので切り返しが出来ない。

しかも、たださえ、足場が悪いのだ。

武装ライオンは前足を落としてきた。

そのとき、ある少年が棒を持ってその前足を止めた。
眼の色は緑色に輝いていた。
そう、海だ。

「おお、あのときのやつか」

レンジと雫は2回目の顔合わせになる。

「後ろから来るぞ!!」

海は後ろのメンバーに伝えた。
みんなその言葉に反応して、後ろを見た。
そのとき、大口を空けた蛇が突っ込んできた。

「【術式・炎の玉】!!」
ファイヤー・ボール

そのとき、智実がいきなり前に出て、炎の玉を口に入れた。
同時に、蛇は炎を口にれられたためにひるみだした。

「みなさん、今のうちに!!」

智実の言葉によりみんなそのまま前に行った。

「突き切れ【朧月夜】――！」
ヴェイク・ムーン

そのとき、朧月夜と呼ばれる棒の両先から月状の刃が槍の刃みたいに出てきた。

海は出てきたのを確認した後、円形に回し始めた。

「いくぜ――！」

海はそのまま武装ライオンに突っ切っていった。

ライオンの攻撃を避け、そのまんまジャンプし、上がりながらはその部分の武装を真つ二つにした。

上空に行った海は長い滞空時間の中、朧月夜を振り回した。

「月よ落ちよ――！」

朧月夜の片方の刃の部分がどんどん大きくなってきた。

「【月夜刃剣】――！」
つきよはけん

でかくなった刃は武装ライオンの真上に落とした。

「こいつ、この前脱走したと言われるライオンじゃねえか」

レンジは延びてもとの大きさに戻ったライオンに向かっていった。

「ふ、どうやら加減は間違っていなかったようだな」

海はそう言ったとき、あの二人の姿が見えた。

「おやおや、新しい人が見えますね」

「貴様らか、こいつらを操っていたのは」

「はい。それがどうかしたのですか？」

その言葉に海はキレ出した。

「貴様！！」

海は男に向かってダッシュした。

もちろん狙っているのは動物を操ったあいつだ。

「そう、カリカリするなよ」

その時、海に大きな衝撃が当たった。

海はそのまま倒れていった。

「今から俺が相手してやるよ」

そして、その場に立っていたのはあの男がさっき兄さんと言っていたやつだ。

体には強大な鎧をつけていた。

そして、手には刀を持っていた。

「お前の相手はこの俺だ」

「面白い」

お互い、少し笑った。

「じゃあ、君たちの相手はこの僕の愛蛇の2頭が相手してくれますよ」

男の後ろから蛇が2頭出てきた。

一匹はさっき攻撃を与えたやつだ。口当たりが焦げているのでわかる。

しかし、その蛇はずいぶん怒っているように見える。

「さあ、行きなさい!!」

男は蛇に指示を出した。

「こ、これは私一人では無理です!!」

智実は言った。

「分かってる!!いいからこっちきて作戦立てるぞ!!」

レンジの言葉にみんな反応した。

とりあえず今は逃げることしか出来ない。

「おらおら、どうしたこの餓鬼が!!」

海は男の連続の攻撃に避けたり、耐えたりしていた。

「ちい!!」

海は横に振ったが、男は軽い身のこなしで後ろのジャンプして避ける。

まるで、重力を感じていないみたいだ。

「おまえ、武装した自分に軽量化の能力をつけただろ」

海はもうすでに男のS I、【武装追加】プラスアーマーの正体を知っていた。

このS Iは武装した動物や人間に特別な能力与えるものだ。

ライオンと蛇がでかくなつたのは、巨大化の能力を加えたものだ。

「めんどくせーものもつていやがるな!!」

海は気持ちを切り替えて、本気モードになった。

これぐらいしないと、こいつには勝てないことが分かつたのだろう。

「気をつけねえと、殺すぞ!!」

海の鋭い緑色の瞳が男を見た。

そして、同時にレンジたちも走りながら作戦を立てていた。

「とりあえずは、倉田と宮部は攻撃を中心的に回れ、俺と窓辺があいつらの気をそらす。大木はいままでとおり蒼希の近くにいろ」

レンジはみなに的確な指示を出した。

「いくぜ!!」

みんなは「おう!!」といって答えた。

男は小さな廃墟同然の家の中でこの戦闘を見ていた。
そして、同時に悩んでいた。

男はこうして確かにこの戦闘を見ている。

これは鳥型の監視カメラロボットを飛ばしているものだ。

だが、なぜか一台。

つまりソラの戦闘を見るはずだったロボットの連絡が付かないのだ。

考えはただ一つ。

壊された。

（だが、あいつに物を壊す動作は無かった）

これでは一番の危険人物が黙認できない。

だが、答えはすぐに出ていた。

実はソラはここに来てから、ロボットの存在を知っていたのだ。

そして、ロボットにそのロボットに残された映像はソラの仲間が捕まったところのころだ。

じつはそのとき、ソラは急ぐのと同時に、
【デジタル・スピーア電子ノ針】でロボットを狙って破壊していたのだ。

しかし、このとき、ソラは目線を仲間に向けているために誰にも怪しまれずに壊せる。

しかも、ソラはわざわざ前を向かなくても、狙い打つことはできる。

高ささえ分かっているれば、あとは天眼で距離が分かるので狙って破壊することが出来る。

そして、この男はただいまソラを完全に見失っているのだ。

しかし、男はいきなりにやりと笑った。

暗闇の部屋の中、男は何を考えていたのかは誰にも分からない。

第70章続く

第70章 復活の「一暗闇の道人ヘダークネス・ロードス」・緑色の朧月夜

レンジたちはとりあえず作戦のまえに役割分担を決めた。

まずは朱里と智実が攻撃担当、隙が出てきたときに強力な一撃を放てるように準備している。

雫とレンジは相手の隙を作らせるための特攻隊。雪は雫の攻撃のサポートをする。

優菜は香奈の近くにいて、香奈の安全を守る。

回復型のS Iを持つ香奈は雄一の生命線である。

しかし、優菜にもぬかりはない。

あらかじめ、何本か線を引いたのだ。

何があったとき、緊急時に守れるようにと彼女の気遣いだ。

「いくぜ!!」

「うん!!」

雫はレンジの言葉にうなずいた。

2人同時に別の蛇に向かってダッシュした。

作戦としては、簡単な作戦だ。

雫とレンジが蛇の隙を作り、朱里と智実がそこを叩くというものだ。

この作戦は、いままでソラと優菜と雪が担当していた。

だが、今回は人数が増えて、しかも守るものもあり、さらには一番重大な人物がいないのだ。

よって大幅にソラのいつも考えてきたちょっと違うものになった。

「はああああ!!」

雫は水をやりのように手元に作り出した。
これを武器に使うらしい。
刃の部分は雪のS.Iで凍らせた。

しかし、武装しているだけではなく、巨大化しているためになかなか隙は作りにくい。
攻撃はことごとく跳ね返させる。

レンジも同じように悪戦苦闘している。

大きな口が雫に襲ってきた。

「そう簡単には食べられないわよ!!」

雫はそう言って、水のばねを足元に置き、大きくジャンプした。

そして、もっていた槍の水を蛇の口元にかけた。

「ついでに凍りなさい!!雪ちゃん!!」

雫は雪の名前を叫んだ。

「凍って!!」
【ウォーターアイス 水十氷】!!」

雪は雫の叫びに答えて、自らのS Iの名を叫んだ。
同時に、蛇の口物にかかっていた水が凍っていった。

こうして口を封じる気でのいるのだ。

手足が無い蛇にとって口は大きな武器だ。

だが、逆にそれを封じてしまったら大きく攻撃手段が減ってしまう。

しかし、完全に凍る前に、蛇は大きな口をあけて氷を割った。

「やっぱりそうなるのね」

雫は地面に付いたのと同時に水の槍をまた作り直した。

「雪ちゃん。別の方法で行くわよ」

「はい!!」

雫の言葉に雪は答えた。

「はあああああ!!」

レンジは大きな鉄の鎌を作り、蛇に攻撃しようとした。

だが、やはり武装している蛇は硬く、太刀打ちが出来ない。

「【術式・炎の放射】!!」
ファイヤバーナー

その時、智実が蛇の足元に火炎放射を放った。

「大丈夫ですか?」

智実はレンジに言った。

「おまえこそ、力溜めなくっていいのかよ!!」

「はい!!この蛇は結構隙が大きすぎます。なのであらかじめ攻撃して、弱らせたほうがいいです」

智実は的確な言葉をレンジに言った。

たしかに、良く見てみれば体が大きい分、隙が大きい。

そう考えればどんどん攻撃して装甲を壊したほうがいいはずだ。

特に、智実の攻撃はそっちのほうが向いているのだ。

「わかった。そうしよう!!」

レンジは智実の作戦に乗った。

その頃、海もある男に苦戦していた。

「ほらほら、本気で行くんじゃなかったのか？」

男はそう言って攻撃してきた。

「ちいいいい!!」

海はまた反撃しようとしたが、高いジャンプにより避けられてしま
う。

「くそ、お前、ちよくちよく能力変えているだろ」

海は今までの戦闘の中で確かな考えを持った言葉を言った。

「お前は身体を軽くしているはずなのに、避ける以外すばやい攻撃をしてこない。逆に軽いはずなのにもものすごい重い一撃ばかりくる」

海は朧月夜をまわしながら男に近づいた。
同時に、説明も続ける。

「これってお前は自分自身なら簡単に能力の切り替えができるとうわけだろう」

「……その通りだ。良く分かったな」

男は感心しながら言った。

「それは、どうもな!!」

海はそう言って朧月夜を振るう。

だが、またもや簡単に避けられてしまう。

「だが、それが分かったってお前には俺が倒せん!!」

男は海を指差しながら言った。

だが、海はその言葉を綺麗に無視した後、息を軽く吐いた。

「しかたねえな」

海がボソッとそう言ったとき、朧月夜が緑色に光ってきた。

「本気で行くぜ、朧月夜！！」

同時に、朧月夜の両先についている刃がさらに延びだした。形は月状の形だが、色が緑色に輝いている。

「な、武器が変化しただと」

「ああ。これこそが、緑の【達人ノ眼】マスター・アイの力だ」

海は構えだした。

「いくぜ！！」

海は大きくジャンプした。

海のS I、ウェイク・ムーン【朧月夜】は同じ感じの両槍棒、朧月夜を出すことにより、発動者の身体能力を上げることができる。

さらには刃には技によってさまざまな形になり。

そして、簡単な術なら詠唱術を使わずに技を出せるS Iである。

「踊れ朧月夜」

海は朧月夜をまわしだした。

そして、とめた後、海の周りに4つの回っている大きな月が現れた。

「行け、しげんげつらん【四幻月乱】！！」

4つの月は回りながら男に向かっていった。

男の鎧はこの攻撃でボロボロになってしまった。

「ちい、肉体鉄強化！！」

しかし、男はまだ頭に鎧があるためにS Iを発動できる。

「おそい!!」

しかし、すでに海が近くに迫ってきた。

「月夜に踊れ【月光乱舞】げつこうらんぶ」

海はいきなり緑色に輝きだした。

同時に男の体を何回も切り裂きだした。

「終わりだ」

海がそう言ったとき、男は倒れた。

そして、同時にこの男のS Iが切れた。

そのために、蛇は元の大きさに戻った。

「な!!」

小さな男はこの事態に驚いた。

「海くんがやったんだわ!!」

「あーちゃん!!あの男にやっちゃえ!!」

「はい!!」

雪の言葉に朱里は照準を男に合わせた。

もう、あの男に守るものは無い。

朱里は引き金を引いた。

「ぎゃああああ!!」

男は光線のなかで叫びながら気絶した。

「これで、なんとか終わったな」

海は額の汗を拭きながら言った。

「ソラ君」

香奈はそうつぶやいた。

(そろそろ来るな)

小屋の中にいた男がそう何かを感じた。

「勝負だ、長門ソラ!!」

男は小屋から出てきた。

第70章 終わり

第71章 【風ノ破壊者へエアロ・ブレイカー】

ソラはあの男を探し回っていた。

そして、ある小屋を一つ見つけた。

さらにその前にあの男が立っていた。

「どうやら、あちらさんも同じのようですね」

ソラはそう言って男に近づいた。

「良く来たな、長門ソラ」

「あなたは僕のS Iを感じるために、何人かのS I使いを送り込んできましたね」

そう、ソラはさっきから何人のもS I使いと戦ってきたのだ。

「それで、一体何が目的なのですか？」

ソラは改めて聞いた。

「目的、そんなの簡単だよ。言っていたことが全てだ。そのためにはお前を、いや、お前たちを殺す必要があつたのさ」

ソラはその言葉に怒りを感じた。

「さあ、そろそろ殺しあおうじゃねえか」

そう言っつて男は右手を前に出した。

「行くぜ、ブラスト・タンカ【咆哮ノ戦車】！！」

男の右腕には不思議な力を感じさせる黒きオーラが出てきた。
そのオーラは男の右腕全部包み込んだ。

「覚えとけ、俺の名は、あらきじどうは荒岸洞霸この科学都市の支配人になる名だ
！！」

荒岸の右腕のオーラの一部が砲弾のようにソラに受かってきた。

ソラはそのことにいち早く気づき、後ろへ走って避けた。
避けた後、そのまま後ろに走る。

「逃がしはしない！！」

さらに荒岸は連射してくる。

ソラはそのまま走る。

煙で前が見えなくなってきたとき、荒岸は撃つのをやめた。

「ち、どこに行きやがった！！」

しかし、この煙を起こすことがソラの狙いだった。

「アクセラレータ【一方通行】」

ソラは煙が消え始めたとき、大きな岩の上に立ち、そう言った。
そのとき、ソラから、荒岸まで不思議な赤い風が通る。

「行きますよ、エアロ・ブレイカー【風ノ破壊者】！！」

その後、ソラは体を横にして、後方にした右手を広げて、赤い玉を作り始めた。

「見つけたぞ！！貴様！！」

荒岸は右腕をソラに向けた。

「遅いです！！放て、風玉！！」

その時、ソラの右腕にあった風玉が消えた。

同時に、荒岸の右腕がものすごい勢いで切り裂き始めた。

「ぎゃああああ！！」

荒岸は発動を解いて、血まみれになった右腕を押さえた。

「貴様、なにをした」

しかし、もうその場にはソラはいなかった。

「面白い」

荒岸はそうつぶやいた。

「俺を怒らせたこと、後悔するがいい！！本気を出せ、
【咆哮ノ戦^{ブラスト・タ}車^{ンカ}】！！」

そのとき、黒いオーラが荒岸の体全体を包み込んだ。

「死ねえ！！長門ソラ！！」

そのとき、体中のオーラから一気に何発の玉が発射された。方向はみなどれもバラバラだった。

その中の一発が香奈たちの近くまで来た。

「きゃああ！！」

「な、なんだあれは！！」

レンジは荒岸のS Iに気づき、指を刺した。

「なにあれ？」

「せ、戦車！？」

そう、まるでそのS Iの姿は乱暴に発射する戦車そのものだった。

「まさか、ソラ君が戦ってるの？」

香奈はそう言った。

「そ、それって」

「ソラ君があの子を怒らせたと考えていいかもね」

雫が香奈の考えに乗った。

「ソラ君、がんばって」

香奈はそう願った。

「どこだ、どこに行きやがった長門ソラ!!」

すこしずつ動きながら荒岸はさけぶ。

「ここです!!」

そのとき、ソラは後ろから声をかけた。

「行きます、アクセラレータ【一方通行】」

ソラはまた、左腕を前に出しながら言った。

このソラのアクセラレータ【一方通行】は、ソラの技を補助するための技である。

「このアクセラレータ【一方通行】の中では、僕の風は、光の速さを持つことが出来ず」

つまり、この風で作られた道をソラの風が通ることにより、光の速さに相手に届くことのだ。

ただ、名前の通り、一方通行しか発動ができない。

つまり、動きの遅い相手にピッタリの技なのだ。

場所を変えるときはまた、発動しなおさなければならぬ。

しかし、ソラのS Iは回数制。

「僕のS Iはたしかに回数制です。ですが、それは技の威力で変わります。技が弱いほど回数制限が少なく、何発も出すことが出来ます」

つまり、制御していないときは、大きすぎて3回までが限界となっ

ていた。

だが、【一方通行】^{アクセラレータ}の回数は補助のために多いのだ。

「次は、僕も中心を狙います!!」

ソラの右腕に風が集まってきた。

「そんな威力も無い技にこの【咆哮ノ戦車】^{ブラスト・タンカ}は崩せん!!」

ソラの右腕の風玉がさっきより大きくなってきた。

「さっきよりも威力をあげます!!」

その対じる光景を香奈たちも見ていた。

「あれ、ソン君!？」

「あれが、ソラ君のS.I」

雫とレンジは話しか聞いていなかった。

「ですが、今回はコントロールしているはずですよ」

朱里はソラを信じて言った。

「ソラ君なら、大丈夫です。私は信じてます」

香奈の言葉にみんなうなずいた。

「死ねえ!!」

荒岸は吼える。

「破壊します！！」エアロ・ブレイカー【風ノ破壊者】」

ソラは右手にあった風玉を飛ばした。

一瞬。一瞬でその風玉は荒岸の前に現れて、一気に切り裂く風が舞い始めた。

「こ、この餓鬼iiiiiiiiiii！！」

荒岸はそのまま体を切り裂かれながら後ろに飛んだ。

「あれが、ソラ君のS.I」

「あの小さい玉であの威力、多分あのトンネルみたいなやつがソラ君の技の威力をあげたのね」

雫は納得して言った。だが、その効果は【一方通行】アクセラレータには無い。

「貴様、なんでそんな技で俺の力を破った」

「僕の風玉にはただ突進するだけではなく、中におおきな風を閉じ込めて、僕自身でその中を開けることができるのですよ」

つまり、ソラの風玉は敵の近くに来ると、外の玉になっている風が分解、その後閉じ込められていた風は相手を切り裂く。

「エアロ・ライフフル【風ノ弾】」エアロ・ライフフルとでも言いましょうか。そしてあの威力なのは簡単な話です」

そのとき、ソラはみんながこっちに來たのが分かった。

「速さは力です。早くなるほど威力はプラスするように高まります」

光の速さになるということは物理的に物に威力を与える。

つまり、【一方通行】^{アクセラレータ}は、速さを与えるだけではなく、副作用で威力を与えると考えてもいいのだ。

「それに、なぜ、殺さない。俺はお前たちを殺そうとしたんだぞ」

荒岸はさらに質問してきた。

「僕のSⅠは守るSⅠ、知ってますよね、【第二型】^{セカンドフェイス}のSⅠには一つ一つ意味があることを」

「ああ、俺のは【物事を無双に移動破壊するSⅠ】だ」

「僕のは、「優しさの心を持つとき破壊し守れるものを守るSⅠ」です。僕が優しいのは分かりませんが、守りたいものは、無限にあります」

ソラは荒岸に向かって微笑んだ。

「そして、それは人間の命です。確かに、この世の命は無限に無くなつていきます。ですが、目の前のものなら守りたいのですよ」

香奈たちはソラの近くに來た。

「それが理由です。命は敵も味方ありませんから」

そのとき、荒岸はすこしだが、笑い出した。

「甘い餓鬼だ」

「それで守れるなら、本望ですよ」

第71章 終わり

第72章 S Iと科学都市

8月10日木曜日。

ソラたちはその後、長門家に戻っていたが、ソラはなぜか正座していた。

理由はただ一つ、あの個人行動についてだ。

「で、ソラ君は私たちに秘密であの人に戦おうとしていたわけなの？」

優菜が怖い眼で見てる。

「え、ええ。一度、戦闘のときに試させないといけませんから、そのときに暴走したら皆さんに迷惑をかけてしまいますから」

ソラは思ったこと、すぐに言った。

「ソラさん、本当にまじめすぎです。そんなときは私たちをもっと信用してもいいですよ」

頬を脹らませながら朱里は言った。

あの後、荒岸は香奈に傷を治してもらった後、どこかへ消えた。ソラたちは普通にこっちに戻ってきた。

あの時は戦闘後なのであれこれ言われなかったが、その次の日、つまり今日、ソラはあの行動に説教を食らっていた。

「まあまあ、ソラ君も結果無傷だったわけですし、そのぐらいで」

香奈はソラをかばった。

そのあと、3人はしぶしぶ引き下がった。

「それはそうと、これから結構やばくなりそうですね」

「はい」

ソラの言葉に香奈はうなずいた。

「どうしたのソン君？」

「昨日、香奈と相談したのですが、これからは、いや、もうすでに
セカンドフェイス【第二型】との戦いが増えてきています」

確かに、今までは【第一型】ファーストフェイスとの戦いが多かったのか、完全に逆に
なってきた。

「それってやっぱり」

朱里は分かったように言った。

「ええ。もしかしたら、S I使いはほとんどここ、科学都市を狙って
きているかもしれません」

「昨日の人もその一人と言うわけね」

雫もどうやら理解したらしい。

「ええ。そして、魔獣が増えるのは、S I使いが増えているから増
えてきているかも知れません」

「そうか、魔獣はS Iの力を吸ってなるから、S I使いが多いほど、
吸うS Iも増えてくるというわけですね」

朱里がソラの言葉をつなげた。

ソラと香奈はその言葉にうなずいた。

「そうになると、やっぱりS Iをどうにかするしかないよね」

「つまり、S Iをこの世から無くす、それが一番可能性としては出来ることです」

ソラの言葉に香奈を入れて全員驚いた。

だが、驚くのは当たり前である。

「でも、その方法の手がかりはあるの!？」

あせりながら優菜はソラに聞く。

「ありません。はっきり言って」

ソラはきっぱり言った。

みんなはポカンと口をあけた。

「ですが、この科学都市にそのヒントはあるかもしれません。そう海は言っていました」

あのあと、海とソラはS Iのことで話し合った。
そのことである結果が生み出された。

「S Iはこの科学都市で出来たものだということですよ」
『!?!』

この言葉にやはり皆驚いた。

しかし、この考えははずれではない。

SⅠの歴史が残された場所があり、さらにはSⅠ使いが大勢この科学都市を狙ってくる。

そのことをみんなわかってて否定はしなかった。

「しかし、やはり時間はかかります」

「そこはやっぱり迫ってくるSⅠ使いを根こそぎ倒すしかねえな」

レンジは拳同士を合わせた。

ソラはその言葉にうなずいた。

「ですが、そのためにはやはり戦力が必要です。僕は一樣、8人ぐらいの協力してくれそうな人たちがいますが、やはり年齢的に無理は出来ないでしょう」

ソラの言葉にみんなうなずいた。

いくらSⅠ使いと言っても中学生には無理はさせられない。

「この戦力だとやはりきついことがあるか」

「ここにいる7人と、海たちの2人でいくらなんでも範囲が狭すぎます」

「しかも、それでは大星のみに守備範囲しかいきわたりませんね」

香奈はそう言った。

そのとき、ドアがいきなり叩かれた音がした。

「なんでしょうか」

ソラは玄関に行き、ドアを開けた。

そこには見慣れた人物がいた。

「よっ!!」

そいつのあの【炎ノ達人】フレイトロマスターの荒川炎治だ。

「荒川さん!!」

ソラはそいつの名を言った。
そのとき、雪が玄関から顔を出した。

「あ、あのときの【炎ノ達人】フレイトロマスターの人だ」
「何しに来たのですか？」

ソラは単刀直入に聞いた。

「聞いたぞ、お前ら少し困っているってな、竜司さんから聞いた」

炎治の口から意外な人物の名が出てきた。

「竜司さんからですか？」
「ああ、それでここの場所を教えてもらった」
「とりあえず、詳しい話は家に入ってからにしましょう」

ソラはすぐに炎治を家に招いた。

「すまねえ」

炎治は一礼してから中に入った。

話を聞くようだと、どうやら虎二はあのあと失踪したらしく、炎治

は竜司のところへ言ったらいい。

そしたら、力になるならソラたちのほうがいいと言ってこの場所を教えたらいい。

「そうでしたか。それなら丁度いいです。こちらからもお願いします」

ソラは笑顔で言った。

レンジはそのことに驚いていた。

「いいのか？前までは敵だったやつだろ」

「それを言うなら隼さんも同じです。それに、ここまでされたら」

そう言っただけでソラは炎治のほうを見る。

あのあと、リビングに着いたあと、炎治は光の速さで土下座をしてきたのだ。

「こんなことまでしてきた人を折り返すことは僕には出来ません」

「ま、まあな」

レンジは言葉を失った。

「それで、炎治さん。あなたは知り合いのS I使いはいますか？今はとりあえず戦力がいるのですよ」

「知り合いのS I使い」

「いいからまずはその土下座をやめてください」

ソラは呆れながら言った。

「とりあえずは、俺の幼馴染がそうだ」

土下座をやめた後、敬語を使おうとしたが、ソラの話によると同年齢なので敬語はやめた。

「幼馴染ですか。連絡はできますか？」

「じゃあ、明日この場所に」

そう言っただけで炎治は地図を書き出した。

「ここに来い、そしたら合わせる」

しかし、その紙には得体の知らない線しか書かれていなかった。

「すみません。住所教えてください」

ソラはアッサリ言った。

「ああ、そっちのほうがいいのか？変わったやつだな」

炎治は笑いながら言った。

「この絵を見れば誰だってそうしますよ」

「そうか」

そう言っただけで炎治は住所を言った。

「とりあえず、エン君の言った通り、ここに行くのよねン君」

「え、エン君！？」

雪の言葉に炎治は反応した。

「うん。炎治だからエン君」

雪は笑顔で言った。

そのとき、炎治の顔は赤くなった。

「そ、そうか」

テレながら炎治は言った。

その光景を女子たちは確かな確信を得た。

「では、お、俺はもう帰るわ」

「ええ。明日はお願いしますね」

「ああ」

そう言って炎治は長門家を出てった。

「そういえば、竜司さんを入れるの忘れていたね」

優菜が言った。

ソラはそのことをすっかり忘れていた。

第72章終わり

第73章 電撃少女・出会い

8月11日金曜日。

ソラたちは昨日言い渡させた住所に向かっていた。

来た場所は科学都市の流星集りゅうせいしゅうと言われる場所で、物や食べ物の輸入や輸出が一番多いところである。

学園都市の大星、盛大都市の大聖堂とは違い一見地味であるが、大聖堂のつながりが一番大きく、大星でもたくさんの援助を送ってきてくれているいわゆる縁の下の力持ちであり。

「僕はここに来るのは初めてですね」

ソラはボソツと言った。

「私は何度か来ています」

実際、ここは学生がめつたに来る場所ではない。
朱里のような代名詞の家柄ではないとここに来る用はまったく無い。

「ソラ君。この後どこに行けばいいのでしょうか？」

香奈はソラに聞いた。

「えっと。あ、あそこですね」

ソラは目印を見つけたらしく、指を指した
指を指したしたのは一見普通のマンションだ。

「ここかあ。普通のマンションだね」

雪がソラに言った。

「普通が一番です。さあ、行きましょうか」

そう言ったとき、いきなり叫び声が聞こえた。

ソラたちが振り向いたとき、一人の男がガラスを割って空を飛んでいた。

「あれって、炎治!?!」

良く見たら飛んでいるのは炎治だった。

炎治はそのまんま木に引っかかった。

「炎治!?!」

ソラはそう言いながら木に引っかかっている炎治を助けようとした。
そのとき、

「あんた、なに勝手に入ってきて着替え見ているのよ!?!」

ショートヘアーで茶色の髪の毛の女の子が炎治に文句を言った。
だが、その言葉に反応したのはソラだった。

「お、長門、おい!! 助けてくれ!!」

「自分で何とかしてください」

ソラは笑顔で言った。

変態には厳しいソラであった。

「長門って、ああ。昨日あのバカが言っていたやつね」

そう言っただけ少女はソラのほうに向いた。

そのとき、彼女は自分に電気が走るように感じた。
そして、出てくる言葉はただ一つ。

（す、ストライク！！）

そのとき、ソラも彼女の言葉の意味を理解した。
そのまんま彼女にそばに来た。

「君が炎治が言っていた人ですか。初めまして長門ソラといいます」
ソラは笑顔で言った。

その笑顔に彼女はそのままフリーズしてしまった。

「あの〜」

「あ、す、すみません！！」

気を取り直した彼女はお辞儀した。

「こ、こちらこそ初めまして。い、井上美穂いのうえみほと言います」
「長門、そいついま完全に猫被ってるぞ！！」

木に引っかかりながら炎治が言った。

「うるさい！！」

そのあと、美穂は炎治に向かって右腕を出した。
その瞬間、電撃が出てきて、炎治に当てた。

「そのS Iは、エレクトロマスター【電気ノ達人】ですか」

その光景をみたソラは言った。

「あ、えっと。その、今はま、マジックですのでえっと」

美穂は顔を赤くしながら言った。

「ああ。いいですよ。僕らも全員S Iを持っていますから」

ソラは普通に微笑みながら言った。

あんなところで話しているのも何なので、炎治の部屋に入れさせてもらった。

井上美穂、中学3年生。

炎治とは幼馴染らしく、マンションの部屋も隣である。

「たつく、なんで手加減できねえのかよお前はよ!!」

髪の毛をアフロにしている炎治が言った。

「うるさい、変態野郎!!」

「それはお前の勘違いだろ!!」

「だまれ、見たのは確かでしょ!!」

「お前の無い胸なんて誰も見たくねえよ!!」

完全に2人の言いあいが始まってしまった。

ちなみに炎治が言った通り、美穂の胸は限りなく小さい。
着やせなんていえるものなどではない。

「すみません。言い合いはちょっと待ってくださいますか？」

ソラは2人に聞いた。

「あつと、すまん」

「ごめんなさい」

2人はそのことに気づいて、座り込んだ。

「そこまでいわなくてもいいのですが。それで、本題ですが」

高速の切り替えでソラは視線を美穂に向けた。
そして、昨日はなしていたことを全て話した。

「なので、申し訳ない話ですが、僕らに力を貸してくれませんか？」

ソラはお願いした。

「いいですよ」

美穂は笑顔で言った。

「ちょっとすみません。席を話します」

そう言って美穂は席を立った。

「なんだ、シヨンベンかよ」

「だまれ、デリカシ無し男！！」

そう言って美穂はトイレに入った。

そして、携帯電話を取り出した。

「長門ソラ、発見しました」

『分かった。われわれが来るまで時間稼ぎをしてろ。決してこの町から逃がすな！！』

電話相手はなにやらものすごく怪しい人物からだ。

そして、この言葉から分かることは、完全に彼らは美穂を入れて敵だと言うことだ。

もちろん、ソラたちはそのことを知らない。

「わかりました」

そう言った後、美穂は電話を切って、トイレの水を流した後、トイレから出た。

「おい、おっせーぞ！！」

炎治は出てきた美穂に文句を言った。

「うるさいわね」

そう言って美穂は席に座る。

そして、ソラを見る。

（たしかにかっこいい人だけど、今回はこの恋はみのが無きゃ。でないで私のほしいものが手に入らない）

美穂はそう思い、拳を強く握った。

「あの、天気もいいので、外に出ましようか。町を案内します」

美穂は家の中で戦闘にならないように外に出し、町案内でこの町から出さないようにした。

「僕はいいですよ。皆さんは」

そう言ってみんなうなずいた。
どうやら町案内には出来るようだ。

「では、外に出ますか」

そう言つて、美穂は外に出た。
みんなその後が続いて、外に出て。

「レンジさん」

ソラはレンジに近づいてみんなには聞こえない声で言った。

「美穂さんがトイレに行っている間に、確かに電話の電波を感じました」

ソラはそう言つてギアを取り出す。

ソラとレンジは美穂がいまだに完全に見方になるとは考えられない。もしかしたら、誰かに脅されたり、大金を払ってしたがっているかもしれないかもしれないのだ。

ソラのギアはある程度の範囲の電波を感知できるようになっている。感じた電波は電話。

だが、みんなこのときは携帯を触っていない。怪しいのはトイレに行った彼女のみなのだ。

「とりあえずは、周りを厳重注意でおねがいします」
「分かった」

レンジはソラの言葉にうなずいた。

第73章続く

第73章 電撃少女・理由

ソラたちは美穂の提案で外に出ていた。

しかし、ソラとレンジは彼女は敵ではないと思っていた。彼女は必ず誰かとの連絡を取っている。

これが必ずしも敵とはいいい互い。だが、確立は大きい。

「長門さんはいつぐらいまでここにいます？」

美穂は微笑みながら聞いた。

「ええ。僕たちは暗くなるまでに帰りますね」

ソラは微笑返しながら答えた。

「長門、そいつの猫かぶりは気をつけろよ」

炎治が笑いながら言った。

そのとき、ソラの後ろに男が現れた。

「あのーすみません」

男はすこし弱そうな声で言った。

そのとき、ソラの左目は確かな反応を感じていた。

「あなたの名は長門ソラですか？」

同時に左腕の手刀が飛んできた。

「「ソラ君!!」」

「ソン君!!」

「ソラさん!!」

「長門!!」

全員この状況に気づいて名をあげた。

だが、ソラは左目でSⅠ反応を感じていたので簡単に避けることができた。

「やはりそうですか。あなたが井上さんによばれた人ですか」

『え!?!』

この驚きの言葉は美穂も声を上げていた。

「僕はだまされません。あのとき、トイレの中で電話の電波反応がありましたからね。レンジさん!!」

ソラは説明したあと、レンジの名を呼んだ。

「もう一人います。あの4時の方向のベンチに座っている男です!!」

「おうよ!!」

レンジはソラに言われた方向に走った。

「捕まえたぜ!!」

「ちい!!」

男とレンジは手をお互い合わせて力比べになった。

「ちい!!」

さっきソラを襲った男は一気にソラにナイフを持って迫ってきた。

「あなたの相手は私たちです!!」

だが、優菜がそのナイフを持っていた棒で受け止めた。

「ありがとうございます!! 炎治はそのままレンジさんの援護を、みんなは優菜に続けてあの男をお願いします!!。井上さんは僕が話をします!!」

そう言っている間に美穂はどこかへ逃げた。

だが、どこに行こうとしても、ソラの目からは逃げられない。

エレクトロマスター

美穂は【電気ノ達人】を足に集中して、まるでローラースケートーみたいに町を走っていた。

人気の少ない路地に入ったとき、いないはずの人が現れた。

「見つけましたよ。井上さん」

「な、長門さん!？」

美穂はソラの登場に驚きながらその場に止まった。

「な、なんで追いつけたの？」

「まあ、あなたは地面からでしたけど、僕は屋根の上から来ました

から」

その言葉を聴いたとき、美穂は両手を出した。
同時にソラも構えた。

「なんで、こんなことをしたのですか？」
「お、お金がほしかったのよ！！」

美穂の両手に電気が出てきた。

「本当にそれだけですか？」
「それだけよ！！」

美穂の電気がさらに増してきた。

「分かりました。アクセラレータ【一方通行】！！」

ソラの前に風の道が作られた。
美穂の電気はさらに力を増してきた。
ソラの右手にどんどん風が集まっていく。

「死ねええええええええ！！」

美穂の手から強力な電撃が放たれた。

「破壊します、エアロ・ライフル【風ノ弾】」

ソラも弾を放った。
弾は美穂の電気に当たり、相殺された。

「うそ!!」

おのとき、美穂の前にはソラがいた。
そのままソラは美穂の頬を両手で押さえた。

「ふざけないでください!!」

「ふえ!?!」

美穂は両頬を押さえられてうまくいえない。

「人の命を無くして、得られるものなんてあるわけありません!!」

ソラの目は怒りと優しさであふれていた。

「たしかに、お金がないと確かにあなたにとっては大切なものですが、命を、それが他人のでも、無くして手に入るものではありません!!」

美穂の目から涙が出てきた。

「お金が無いなら理由を言ってください。僕もできるだけ協力します」

そのあと、ソラはやさしく微笑んだ。
その姿にさらに美穂は泣き出した。

「う、ごめんなさい!!」

美穂は泣きながら謝った。

「過ぎたことはもうしょうがありません。ここから立ち直りましょう」

「はい!」

美穂は泣きながら返事をした。

ソラと美穂は香奈たちのところへ戻った。

そこには見事にボコボコにされたみつともない大人の男たちに図だった。

「ソン君。こいつらめちゃくちゃ弱かったよ」

「まあ、君たちも一対一で強くなつたのでしょ」

ソラは笑いながら言う。

そのあと、縛られている男たちのところへ言った。

「いいですか。井上さんはもうそっちには戻りません。そして、僕に用があるなら直接来いと伝えて置いてください」

そう言つてソラは2人の縄を解く。

男たちは本当にみつともない姿で逃げ出した。

「さて、井上さん。改めてお願いします。僕たちに協力してください」

「はい!」

ソラの言葉に美穂は笑顔で答えた。

その後、美穂は話してくれた。
なぜ、金が必要なのかを。

炎治も知っていたことだが、実は彼女の母親は体に大きな傷跡を残して入院してしまったらしい。

次の日、7月12日土曜日にソラと香奈は美穂と共にその入院している病院に来た。

「あ、美穂ちゃん」
「お母さん」

美穂の母さんの顔はものすごく顔色が悪かった。
完全に傷の痛さに耐えているのだろう。
しかし、これ以上は時間が無い。

「香奈。お願いします」
「はい」

香奈はそう言って美穂の母さんの前に立った。

「今から治療しますね」
「で、できるのですか？」
「はい。癒しますよ、【癒しの保護者】^{ホーリーガーディアン}」

香奈な手が桃色に光りだした。
同時に、美穂の母さんの顔色がだんだんよくなってきた。
傷が治ってきた証だ。

10分後。

「はい。完全に直りました」

香奈からすばらしい言葉が告げられた。

「あ、ありがとうございます」

「ほ、本当にありがとうございます」

2人は一気に泣き出した。

ソラと香奈はその場で立ち去った。

「ソラ君。どうでしたか？あの傷は？」

病院を出た後、香奈はソラに聞いた。

「ええ。あれは完全にS Iで傷つけられましたね」

「そうですか」

ソラはそのとき、あの傷にS Iの反応を感じたのだ。

「そして、それは多分今日襲ってきた人たちの親玉ですね」

ソラは強く拳を握った。

「絶対に許せません！！」

香奈はやさしくソラの拳を握った。

第73章終わり

第74章 ビル戦闘・星空

8月13日曜日。

ソラたちはあいからわず外を歩いていた。

とにかくSI使いをどんな目的でも見つけなければならない。

自由に行動できる夏休み中にはなんとか集めたい。

「ソラ君。あれ」

隣にいた香奈がソラに言った。

「朱里ですね」

公園の近くに朱里を見つけた。

そして、見知らぬ男子と話していた。

「朱里」

「あ、ソラさん」

ソラの声に朱里は反応した。

「どうしたのですか？」

ソラは朱里の近くに来た。

「ええ。クラスの友達と話していたのですよ。紹介します。星空^{ほしぞら}ゆ
うさんです」

「どうも」

隣にいたゆうと言う少年は頭を下げた。
髪は黒で少し跳ねている。

そして、一番特徴てきなのは青い瞳だ。

「長門ソラといいます」

ソラも頭を下げた。

そして、そのときソラは朱里の耳元で何かを言った。

「朱里。彼S I使いですね」

「え!？」

そう。ソラは左目でゆうにS Iがあることが分かったのだ。
どうやら朱里は気づいていないようだ。

「そして、彼は【達人ノ眼】マスター・アイを持っています」

どうやらそのことにも気づいてないようだった。
ソラの目は今は同じ【達人ノ眼】マスター・アイも感じ取れるようになった。

2人が耳元で話しているのをゆうはずっと黙って見ていた。

「あ、すみません。私はこれで失礼しますね」

「おう。またな」

そう言ってゆうは別の方向へ歩いていった。
しかし、今の言葉が彼の本当の言葉なのだろう。

「朱里。さっき彼にS Iがあると言いましたが、彼は戦えません」

「なんでですか？」

ソラの言葉に朱里は疑問を持った。

「彼は自分がSI使いだと分かっています。反応も弱いですし、間違いありません」

「そうですか」

「でも、あの人が危険なのは確かです」

香奈の言葉にソラはうなずいた。

「あのままほつとしていると、あの人の実に危険があるかもしれません。SIのなかでもSIを感じるものもありますから」

ソラの言葉に香奈と朱里はうなずいた。

「とにかく、彼の安全はこちらが確保しなければなりませんね」

「はい。わかりました」

朱里はそのあと、携帯を取り出してゆうに連絡を入れた。

あのあと、ゆうを捕まえて、なんとか話をすることは出来た。親しみがある朱里を通して話を進めた。

「やはり、俺にそんな力があつたのか」

ゆうは意外とアッサリ自体を受け入れた。

「意外と受け入れが早いですね」

「まあな、感じてたんだよ。こっちなおかしな力があるとな」

ソラたちは顔を見合わせた。

「なら、話は早い。俺にそのS Iとやらを仕えるようにしてくれ」

ゆうは頭を下げた。

しかし、ソラたちはそのことに答えることはできない。

「残念ながら僕たちが目覚めさせることはできません。ですが、なにかのきっかけがあれば可能性はあります」

ソラは今までの自分たちの経験を言った。

「S Iは本当に良く分からない力です。それが僕たち人間の能力だけでははつきり解明は出来ないでしょう」

「そういうものなのか」

「ええ。実際、解明できたほうがおかしいと僕は思います。人間はそこまで超人ではありませんから」

「ごもつともだ」

ソラの言葉にゆうは笑顔を見せた。

「お前、俺と気が合いそうだな」

「それは光栄ですね」

お互い笑い出した。

「とにかく、僕らの経験ではまず戦闘を学ばなければなりません」

「そういえば、ソラ君のS Iのコントロールってどうやってできたのですか？」

香奈は疑問に思い聞いた。

「僕はS Iの一つ一つ技を作って、その技に一つ一つに制御プログラムを使ってます」

つまり、ソラの【エアロ・ライフル風ノ弾】は、球体、はじき飛ぶ、割れる、切り裂くと言う順番でプログラムしているのだ。

他のS Iと違うのは、みんなそれぞれ状況に応じて違う技を、つまりいちいちプログラムを変えられるのだ。

しかし、ソラのはあらかじめ決めたプログラムではないと発動がでず、最悪には暴走してしまう。

強力な力ほど、プログラムの数が必要となる。

だが、弱いほどプログラムをおおく付け加えられるのだ。

つまり、ソラのなれや使いこなすことでどんどん上限が上がってくるのだ。

「ですが、僕の場合はS Iを知ってですからね。単純にS Iを知らなければなにも出来ません」

ソラは悩み始めた。

この状況では何とかしても早く彼のS Iを目覚めさせてやりたい。そう思ったとき、いきなりソラの後ろに人影が現れた。

「——！！」

ソラは気づいて後ろを向いた。

「だれですか？あなたは」

「俺か？お前が喧嘩を売られた大将の部下Aとでも言っておこうか」

男は体がでかく、服の上からでも筋肉があるのが見える。

「言われたとおり、ここに来た。今日中にこの場所に行かなければ、ここにある学校全てを破壊する」

「『え！？』」

男はソラに一枚の紙を渡されてどこかへ消えた。

「朱里、香奈！みんなに連絡をお願いします。今からではいつものメンバーしか集まりませんが」

そう言っソラもギアを取り出した。

紙に書かれている住所を検索するのだ。

「場所はどうします？」

「僕の家から一番近い公園でお願いします。僕たちもすぐに移動しましょう」

そう言っ検索しているとき、ゆうがソラに聞いてきた。

「なあ、俺も行っ方がいいか？」

「星空さん」

「実戦経験が必要なんだろ。だったら俺も行く！！」

ソラは少し悩んでいたが、すぐに答えは出た。

「ええ。行きましよう！！星空さん！！」

「おう!!」

ゆうは拳を握りながら言った。

「ソラ君。みんなに連絡入れておきました」

「よし、行きましよう!!」

ソラたちは公園に向かって走り出した、

ソラたちが招待された場所は廃墟された大きなビルだった。
結局いつものメンバーは全員集まることは出来た。
ゆうのことはもう自己紹介を終わらせた。

「良く来たな、この俺様に勝負を挑んできたやつが」

入ったらそこに椅子に座っている人物が一人いた。
横にはたくさんの不良らしき人が集まっていた。
ソラが見る限り、S I 使いは座っている人の近くの人であり、全員
がS I 使いではない。
おそらく利用されているのだろう。

「じゃあ、ゲームと行こうか。ルールは簡単どちらかが全滅したときだ!!」

そのとき、上から大きな鉄の壁が落ちてきた。
ソラたちは固まって後ろに避けた。

「どうやら、この壁はただの壁と言うことですか」

ソラは納得して言った。

「どうするソン君？」

「やるしかないでしょう。香奈、炎治たちの連絡は？」

「はい。終わってます」

「そうですか。ならば僕たちは先に戦いましょう。ですが、問題は一つあります。あの中に何人か一般の人がいます」

その言葉に全員驚いた。

「多分なにかで従えているのでしょう。なので、僕、優菜、レンジさんが先に向かいます。S I使いが現れたらすぐに知らせます」

ソラはS Iを使わなくとも戦える2人を先発した。

「俺も、その中に入れてくれ」

しかし、ゆうがいきなりソラに言った。

「俺も喧嘩には自信あるぜ」

拳を握りながらゆうは自慢げに言った。

「では、優菜の近くにいてください」

「おうよー!!」

ソラはゆうの参加を認めた。

第74章 ビル戦闘・一般人

ソラを先頭にして優菜、ゆう、レンジは階段を駆け上がった。そのとき、何人かの男の階段の上で待ち伏せしていた。

「ソラ君。この人たちは？」

優菜は聞いた。

「この人たちは一般人です」

そう言つてソラは階段を力強く蹴つて駆け上がった。

同時に近くにいた男を次々に蹴り飛ばした。

男たちはひるんで攻撃してこない。

「ソラ君」

「あいつ一人でここの男全員たおせんじゃねえ？」

レンジが呆れながら言った。

「上は順調そうね」

上の音を頼りに雫はそう感じた。

「結構すごい音してますが」

「まあ、ソラ君がただの人にはやられないからね」

まあ、雪の言っているとおりでソラはただいま一人で不良どもを蹴り飛ばしている。

ギリギリ避けたやつは優菜の棒の餌食になっていた。

「おかしいです」

「どうしたの？」

ソラの言葉に優菜は聞く。

ソラの目の前には大きな壁がふさがっていた。

たしかにここに階段があるはずだ。

「しかも、ここからS Iの気配を感じます。ここにここを操作するS I使いがいますね」

『それって、あの古井戸と同じみたいなやつですか？』

朱里の声が通信機から聞こえる。

「ええ。ですがこれは世界系のS Iではありません」

ソラは悩んだとき、優菜がいきなり声をかけてきた。

「ソラ君。こつちの階段にも壁があらわれた!!」

「ちい、めんどくせえやつだな」

優菜の言葉にレンジが声を上げる。

「とりあえずは、ここににいる人は何とかしときますか」

そのとき、何十人のも不良が現れた。

そして、ここの部屋にはS Iの反応がない。

「ここ全員一般人です!!」

そう言つてソラは構えた。

一人の男がソラに向かって金属バットを振りかぶってきた。

「そんなもので僕は倒せませんよ!!」

ソラは一瞬の隙に男の顔面にハイキックを入れた。
この蹴りで何人かひるんだ。

「ソラ君の蹴り、なんか切れが上がつてる」

優菜が驚きながら言つた。

「行きますよ!!」

ソラは突っ込んでいった。

迫っていく男には次々と蹴りを入れる。

「ソラに続け!!」

レンジも迫ってきた男を躊躇なく殴っていく。

「女だ、女を捕らえろ!!」

一人の男が声を上げながら言つた。

そのあと、一人の男が優菜に迫つた。

だが、見事に棒で顔面を殴られた。

「なめないでよね。ソラ君に特訓してきたんだから」

優菜の隣にはゆうが優菜にきた男を次々に殴っていく。

「長門は一体何をやりたいんだ？」

ゆうはソラの姿を見ながら言った。

（さてと、部屋の中心部はここですかね）

ソラはそう思っただ確認した。

（確かにここですね）

そのとき、ソラはゆっくり息を吐いた。
同時に右腕を上げた。

「吹っ飛ばせ！！」
ブレイク・フロウ
【破壊ノ突風】！！」

ソラの周りに大きな突風が巻き起こった。

これはソラの対一般人用に作った技である。
あくまで人を飛ばす技で傷つけることは出来ない。
名前は敵を威嚇するために名づけた。

「さて、ここは一蹴しましたよ」

ソラはみんなに声をかけた。

「お前、本当に使いのこしやがって」

「ソラ君。技を出しても回数が」

「このぐらいはまったく関係ありません。数十分でこのぐらいの回数は回復します」

優菜の心配にソラは微笑みながら答えた。

「さあ、次に行きましょう」

「おい、階段の壁が無くなったぞ」

そのとき、ゆうが声をかけてきた。
ソラたちは階段のところに行った。
そこには一人の男がいた。

そして、ソラの左目はSⅠがあることを察した。

「よく、あの不良たちをすぐに倒せたね」

男はいきなり褒めてきた。

「じゃあ、次は俺が相手しようか」

そのとき、男は背中から鎖を取り出した。

「ソラ、星空。ここは俺らが何とかする。お前たちは窓辺たちを連れて先に上げれ」

レンジがソラの前に立って言った。

「ソラ君。私なら大丈夫よ」

「いいえ。ここは私が残るわ」

その言葉に全員下の階段を見た。

「優菜ちゃん。ここは私とレンジさんが相手するわ。だからあなたもソラ君について行って」

「し、雫さん」

さっきの声は雫のものだった。

雫の言葉に優菜は手間取っていた。

「ソラ君。優菜ちゃんたちを連れて先に行って」

「分かりました。皆さんいきましょー」

そう言って優菜の手を引く。

「でも、ソラ君もいいのまた」

「僕らには信じることしか出来ませんよ」

そう言ってソラたちは階段を駆け上がった。

「さて、行くわよレンジさん」

「おうよ、年下に心配されていたら先輩としてなさけねえ!!」

雫とレンジは構えた。

「いいよ。かかっておいで」

男はにこやかに言った。

「では、お構いなく!!」

雫はすぐに【水ノ達人】アフアトロマスタを発動して水の槍で男に放った。

「水使いか。では、えっと。レンジさんと雫さんね。俺の名はいつもみな皆だ。名前なのか苗字なのかは想像にお任せする」

そう言つてさらにもう1本背中から鎖を出した。

「行け、チェーン・ウェポン【鎖ノ武器】」

鎖の先がいきなり剣と化した。

そのまま鎖をまわして水の槍を切った。

「鎖が変化した!!」

「くそっ!!」

レンジは相手が雫に気を取られているうちに階段を上ってジャンプした。

手には鉄の太目の棒を持っている。

そのまま後ろからジャンプ攻撃をする。

「これならどうだ!!」

「残念。俺の鎖は今2本だ」

そして、その2本目の鎖の先はドリルと化した。

レンジは空中にいるために回避が出来ない。

雫はやばいと思い、レンジの体を水で押し出そうとする。

そのまま棒と同時にドリルはレンジの肩を貫いた。

水で押しても肩までは間に合わなかった。

衝撃でレンジは壁にぶつかる。
肩からどどん血が流れていく。

「レンジさん」

雫は急いでハンカチで傷がついた部分を覆う。

「ふーん。さすがにこの速さはここまでは追いつけるんだね」

感心しながら雫は感心していた。

「そんな。こんなさいレンジさん」

「いや、いい。それよりのあれは厄介だ。あの鎖は剣だけではねえ、他のものまで変化できるのかよ」

レンジは苦し紛れに言った。

雫の手の鎖はすでに元に戻っていた。

「だが、一つだけだが、弱点がわかった」

確信があるようにレンジは言った。

第74章続く

第74章 ビル戦闘・【鉄ノ変化ヘイロン・コンパーカー】

レンジは自身気に言い張った。

「弱点って、でも、発動したのは」

「ああ、さっきまでの2回のみだ。確認は戦いの中で分かるさ」

そう言ってレンジは立ち上がった。

雫はそんなレンジの一所懸命な姿を見て止められなかった。

「援護はたのむ」

「うん」

そう言って雫も壱皆に向かい直った。

レンジは確認した後、壱皆に向かってダッシュした。

レンジは手元の鉄を変化させた。

「同じ変化系のSIなのに、ずいぶん違ったんだね」

のんびり壱皆は言った。

ファーストフェイス

壱皆のSIは【第一型】の変化系のSIだ。

だが、変化系の中でももっとも強いものだ。

「ゆっくりしているのも今のうちだぜ！！」

レンジは鎌を構えた。

それを見て、壱皆は鎖を剣に変化させた。

鎌と剣がぶつかり合った。

「へえ、その傷を負ってまだそんなに力出るんだ」

感心しながら壱皆は言った。

「俺はお前と背負っているものが違っからな」

お互い、一旦後ろに下がった。

「残念だが、ここは通らせてもらっぜ」

レンジは鎌を一回転させた後に言った。

「残念。それは出来ない」

そう言いながら壱皆はさっき剣に変化させていない鎖を投げた。
レンジはその鎖を避けた。

「残念」

だが、避けさせることが壱皆の狙いだった。

鎖の先端は錘になっており、そのままレンジの体に鎖が巻かれた。
これはまるで鎖鎌である。

「俺は鎌は鎌でも鎖鎌（くしち）のほうが好きだな」

「クソッ……」

完全にレンジは身動きが取れなくなっていました。

「では、まずあの女の子からやっちゃおうか」

そう言つて壱皆は雫に迫つた。

「来ないで!!」

雫は壱皆に向かつて水の固まりで針みたいのを打ち込んだ。
だが、壱皆は簡単に避けた。

「なに考えているの?こんな簡単に避けられるよ」
「だったらこれならどう?」

そう言つて次は手元から横から水を噴射させた。
壱皆は鎖をまわしてガードする。

「無理だ。その水では俺には傷すらも与えられない」
「だったら鉄ならどうだ!」

そのとき、壱皆の後ろから声が聞こえた。

壱皆は頭に大きな衝撃を食らつた。

壱皆は頭を抱えて血が出てきたのを確かめる

「やっと、傷を与えられたぜ」

なんと壱皆の後ろにはさつき縛られていたレンジがいた。

実は雫が壱皆に初めてに放つた水は壱皆にダメージを与えるために
撃つたものではなく、

レンジの鎖を切るために撃つたのだ。

細く早く小さく打たれた水は範囲は小さいが、確かな破壊力がある。
弱くなつたときにレンジは鉄を長くさせて鎖を破壊し見事に脱出し
たのだ。

「さて、俺のS I、【鉄ノ変化】イロン・コンバーカーの本当の使い方見せてやる」

そう言ってレンジはまた手に持っていた鉄を鎌に変えた。

「行くぜ！！」

「また、お前の攻撃は俺には通じないぞ！！」

そう言って次は鎖の先端をドリルにした。

「あれはさっきレンジさんを傷つけた」

「関係ない！！」

そう言ってレンジはそのドリルを素手で触った。
手は削られて激しい痛みがレンジに襲ってきた。

「レンジさん！！」

「お前、何したい」

レンジの手から血があふれ出す。

「発動、【鉄ノ変化】イロン・コンバーカー！！」

そのとき、レンジが触っていたドリルがいきなり変化した。

「なっ！！」

「やはりな、これも鉄だったことだ！！」

鎖ごと変化し、レンジの腕に巻きついた。

「さて、お前の武器、利用させてもらっぜー！」

そう言っただけでさっき変化させた鉄をグローブに変えた。

「くそっ！！なめるな！！」

そう言っただけで壱皆はもう一本の鎖を鞭に変化させた。

「これならもう掴めねえだろ！！」

壱皆は鉄の鞭を振り回しだした。

「オラオラオラ！！」

レンジは鎌を振り回して防戦一方になってしまった。
だが、さすがに鞭の動きは予想できない。
レンジは集中的に食らってしまっている。

「終われ！！」

壱皆が声を上げたとき、いきなり四方向から水は噴射された。

「な、なんだこれは！？」

「なんとか間に合った」

壱皆の言葉に反して、雫が言った。

この水はもしかしくつても雫の発動したものだ。

「さあ、動きを止めるわよ！！」

水の柱から次々に枝が生えて壱皆を捕らえる。

「へ流れる川のように、形とる蛇よ、今こそ復元せよ！！」

雫は続けて詠唱を唱えた。

「この鎖ももらっぜ！！」

拘束されている壱皆から鎖を奪い取った。

「アクア・スネーク
【水ノ蛇】！！」

雫の横から水の蛇が現れた。

「とどめ行くぜ、イロン・コンバーカー
【鉄ノ変化】！！」

レンジは壱皆から奪い取った鎖の鉄を合わせて大きな槌を作った。
そのまま壱皆の背中を思いつきりたたいた。

「ほら、パスだ！！」

壱皆はそのまま蛇の口に向かって行った。

「さあ、食べなさい」

雫の言葉に従えて蛇は口を閉じた。

雫が発動を解いたとき、壱皆は気絶していた。

勝利が確信したとき、雫は急いでレンジのところへ向かった。

「レンジさん。大丈夫？」

雫はレンジの手の傷を見た。

これ以外にもレンジはたくさん傷を負っている。

「無茶する」

「男は無茶しなきゃやってらんない時があるんだよ」

「でも、もうちょっとはソラ君みたいに冷静になって」

雫はそう言いながらレンジの傷にやさしく水をつける。

「俺はこのままでいい。だから、お前はソラのところへ行け」

「でも、私もう体力もないから今から行っても足手まといだから、あなたの傷の手当をするわ」

「そ、そうか」

雫のこの言葉はレンジにとってうれしかったが、少し照れ恥ずかしかった。

そのとき、さらに上ではソラたちは誰もいないためにどんどん上に行っていた。

「今のところ、誰も着ませんね」

「ソラさん、相手のS-I使用は何人いましたか？」

朱里はソラに聞いた。

「大将を入れて4人です」

「つまり、あと3人いるのか」

雪は困りながら言った。

「問題は全員の实力です。あの中に【セカンドフェイズ第二型】がいるかもしれませ
ん」

考えは山積みだった。

そして、ソラたちはとうとう最後の階に着いた。

さらに、そこにはソラが言っていたS I使いの3人がいた。

「どうやら、ここで終わらせる気ですね」

ソラはそう言ってリストバンドは強く締めた。

第74章続く

第74章 ビル戦闘・【空間ノ剣ヘスペイシャル・ソード】

ソラたちはとうとう最後の3人と対峙した。
どうやらここは団体戦になりそうだ。

「良くここに來たな。長門ソラ」

椅子に座っている男がそういった。

「僕は何もしてません。これも仲間のおかげです」

ソラは冷静に言い張った。

その言葉に対して、男は少し笑った。
女子たちはその態度に少し怒った。

「仲間か、お前はまだその安易な仲なのかよ」

「あなたの横にいるのは、仲間ではないのですか」

確かに、男の横には他に2人いる。

「なに言ってる。こいつらは駒さ。この涼宮^{すずみや}様の偉大なる駒だ。あの不良もな」

ソラはその言葉に齒を食いしばった。

「いや、違う。この世の人間全てが俺様の駒だ」

その言葉でソラは完全に怒った。
だが、ソラだけではなく。全員、怒りを感じていた。

「ふざけんな!!」

だが、叫んだのはソラではなく、ゆうだった。

「てめえ、俺ら人間を何だと思ってやがる、この愚図野郎!!」

ゆうは思っていた言葉を完全に言い放った。

そのとき、ソラはゆうに大きなSI反応を感じた。

「うるさいやつだ。佐助^{さすけ}、あいつを殺せ!!」

「御意」

そう言って佐助と言うやつはゆうに近づいた。

「俺たちのボスのために、お前は死ね」

「その言葉、のしつけて返してやる!!」

そのとき、ゆうの周りに大きなSI反応が発生した。

「まさか、星空さんのSIが目覚めた!?!」

ソラは左目でよく見た。

そして、意志とは関係なく、勝手に【超能力ノ^{スキル・アイ・リング}眼・輪】が発動した。
これはもしかやゆうのSIに反応したのだろうか。

「発動、【空間ノ剣】^{スペイシャル・ソード}」

ゆうの手元からいきなりなにかの空間が出来た。
その中から一本の剣が出てきた。

ゆうは躊躇なく、その剣を持った。

「長門、こいつは俺が引き受ける。あのバカ大将は任せた」

佐助に剣を向けながらゆうはソラに言った。

「分かりました」

ソラはすぐに了承した。

ソラには分かってた。

ゆうは自分のS.Iの使い方が頭から伝わってくることを。

「じゃあ、私たちはもう一人の人とやればいいのね」

優菜がソラに言った。

「ええ」

「香奈さんはソラさんの近くにいてください」

ソラの返事の後、朱里は香奈に言った。

「でも」

「私たちは大丈夫よ。だから、ネッ」

「わ、分かりました」

雪の言葉により香奈はソラの近くに行った。

「じゃあ、最後の戦いというか!」

そう言つて涼宮はいきなり右腕を上げだした。

「了承」

左助はそう言つて、いきなり地面を殴り始めた。

ゆうのところまで割れは行つて、2人とも同時に落ちて行つた。

ゆうと左助は下の階に来た。

「なるほど、ここが俺とお前の勝負場か」

そのとき、割れたはずの天井がいきなり修復し始めた。

「こいつも、お前のS Iか？」

「違う。俺のS Iはこれだ！！」

そう言つて左助はいきなり上の服を脱ぎ始めた。

佐助の体はいかにも鍛えている体だった。

「これが俺のS Iだ、【筋力増加】^{プラスパワー}だ」

いきなり佐助の体が大きくなった。

そして筋肉はさらに増加しているのが一目で分かる。

「なるほど、初めての相手として不足はねえ」

そう言つてゆうは剣を構えた。

「行くぜ！！」

ゆうは佐助に向かってダッシュした。

「愚かなやつよ、力の前では何もかも無力」

そう言っただけで佐助は近くにあった柱を腕一本で持ち始めた。

その瞬間、ゆうは動きを止めた。

ゆうはこう思ってきた。

（このパターンはあれを持って攻撃するはず）

そして、ゆうが思ったとおり佐助はその柱をふ振り回し始めた。

ゆうは急いで走って逃げた。

「ほ、本当にやりやがった！！」

遠くに離れた後、ゆうは再び剣を構えた。

「なんとかしてあいつの動きを止めなければな」

この状況、完全に攻撃範囲は佐助のほうが大きい。

そして、ゆうはいまだにS Iの使い方を良く知らない状態である。

これは非常にやばい。

（とりあえずはこのS Iの把握だ）

とりあえず、ゆうの頭に響いた言葉は、この剣は空間を操る剣。と、しか聞いていない。

だが、ゆうは大体は読めていた。

つまり、空間が出来ることがこの剣を使えばできると言うことだ。

とりあえず、ゆうは剣を力強く握った。

「はああああ!!」

ゆうの剣が青く光りだした。

この光は、ゆうの【マスター・アイ達人ノ眼】の色と同じ色である。

「いけええええ!!」

剣は青く光り輝いた剣を思いつきり振った。

そして、剣からは青い空間らしく物体が佐助を狙った。
佐助は反応して柱でガードした。

柱はそのまま壊れてばらばらになった。

「ち、こんな使い方が出来るようだが、少し疲れるな」

ゆうはすこし息を吐いていった。

だが、今は物理空間の衝撃波である。

しかし、このままこの技の連発はやばい。

「なんとかして、この技を至近距離で撃たないとな」

ゆうは早くもこの技の理解をしたようだ。

「他に、他に技は!？」

ゆうは頭を振り絞った。

だが、こんなことをのんびりその場で考える暇などない。

佐助は新しい柱をもぎ取った。

「主のため、お前を早めに殺す!!」

そう言ってゆうに向かつてダッシュしてきた。

「ちい!!」

ゆうは仕方なく後ろに走った。

「にげるな!!」

「誰だつてこの状況になれば逃げるわ!!」

確かに、柱を持った筋肉まみれの男に追い回されたら誰だつて逃げる。

そのとき、また剣が光りだした。

まるで、ゆうに伝えたことがあるように。

ゆうはやさしく剣の刃を触った。

なんだか、こうすると、伝えたい気持ちが分かるような気がしてきた。

「よし、分かった」

ゆうは走るのをやめてさつきとは違う真剣な眼で佐助を見た。

「いくぜええええ!!」

剣は思いつきりさつきの衝撃波を出した。

しかし、威力がさつきよりも低い。

だが、そんなことも知らない佐助は柱でガードした。
しかし、これがゆうの狙いだった。

ゆうはすかさず地面に刺した。

「逃がしはしねえ、【遅くなる空間】――！」
スロー・ホール

ゆうを中心に円形の青い光が佐助までに広がっていた。

何かや名予感がして佐助は逃げようとした。
だが、足が思ったように動かない。

「残念だが、この中では入っているものの足の動きは全て10分の1になる」

ゆうは剣を抜いた。

「それはもちろん俺も含まれるが、今は意味がない」

ゆうは剣を構えた。

剣はさつきよりも強く光りだした。

「食らえ――！【破空斬】――！」
とくへいせん

ゆうの攻撃が佐助にヒットした。
そのまま佐助は倒れていった。

「さてと、俺は早くあいつのところへ行くか」
「誰だ、お前は――！」

その時、何者かがゆうの後ろに現れた。

第74章続く

第74章 ビル戦闘・女子たち

時は戻り、ゆうは下の階へ落ちていった。

「さて、壊れた床があるな」

涼宮がそう言ったとき、割れた床が再生した。

「それが、あなたのS Iですか？」

「それはお前が確かめてみる」

だが、これほど早くしかも物を直すS Iはない。

涼宮そう言ったときソラは涼宮に言われたとおり構えだした。

ソラは思った。

もし、このものが直るのは単なる前置き。

もしかしたら涼宮のS Iはもっと違う力があるかもの知れない
と思ったのだ。

「アクセラレータ【一方通行】」

そのあと、ソラの右手にどんどん赤い風が集まっていく。

「破壊します、エアロ・ライフル【風ノ弾】」

ソラは一瞬で弾を撃ちはなった。

だが、弾はいきなり現れたブロックによって破壊された。

「！！」

「これって石のブロック!？」

香奈がそう言ったとき、隣にいた男がそのブロックを触った。

「おっと、俺たちの大将を倒したかったら俺を倒しな」

男は完全チャラそうな男だった。

そのあと、さらに巨大なブロックが涼宮を閉じ込めは。

「さて、それでは、長門ソラの首を取ろうか！！」

そう言って男はソラに向かってダッシュした。

だが、いきなり何かにぶつかったようなブサイクな表情になった。
これは優菜のS.I.の【線ノ盾】ライン・シールドだ。

「な、なんだこれは」

「あなたの相手は私たち」

そしてソラのそばに美少女たち3人が集まった。

「こっちだって大将の首をそう簡単に取りせないから」

「ソラ君はそのまま見てて。この人は私たちがやる」

「ソラさんのS.I.には回数があります。ここで減らしてはいけません」

優菜と朱里もそう言ってきた。

「いいねえ。この祐助様ゆうすけのいい相手になりそうだ」

そう言って祐助は指を鳴らした。

「じゃあ、早速だが、死ね」

いきなりブロックが優菜たちの真上に落ちてきた。

「発動、ライン・シールド【線ノ盾】！！」

優菜はあらかじめ引いていたそれぞれの3人の前の線から盾を発動した。

いつもとは違い、縦長である。

「そんなものが俺のS I ロック・キューブ【岩ノ球体】の落下が防げるかよ」
「防ぐとは確かに出来ない。でも！！」

盾とブロックが当たったとき、見事に盾は簡単に破壊された。
だが、その場にはもう優菜たちはいなかった。

「一瞬の隙は作れる！！」

朱里は電気の銃を作り、連射した。

「ちい！！」

祐助は大きな壁型のブロックをだしてガードした。
その隙に優菜が後ろから思いっきり棒で頭を殴った。

「この、屁！！」

祐助が優菜をつかもうとしたとき、優菜の後ろから雪が水鉄砲を構えていた。

優菜はそのことを知っているためにわざと祐助の視界を邪魔した。

雪は作戦通り水鉄砲を撃った。

途中、水は氷になっているために祐助の体を傷つける。

「なめるな!!」

祐助は優菜たちの頭上にブロックを落とそうとした。

「させません!!」

だが、朱里が祐助の足元に電撃の光線を放った。

避けることはできたが、ひるんだせいでブロックを作ることが出なかった。

「ソラ君直伝!!」

その際に、優菜が思いっきり棒で祐助の腹に突きをした。

「回転砲突!!」

優菜は棒を回転することにより、貫通力を増したのだ。

しかも、バランスを崩している状態の相手にとって女性の力でも相手を後ろに下がることも出来る。

安易だが、力が女子と同じソラだからこそ考えられた技である。

祐助はそのまま倒れた。

「この、女どもめ、俺を怒らせたことを公開させてやる」

そう言って祐助は立ち上がった。

「いくぜ!!」

祐助はそう叫んだ後、手元から小さいブロックをたくさん打ちはなつた。

「ゆーちゃん!!」

「うん!!」

雪に言われて優菜は離れている朱里の足元と雪の近くの線から盾を発動した。

「それを待っていたぜ!!」

だが、そうさせるのがこの男の作戦だった。

祐助は優菜のまん前に来た。

「お前たちもそうしたように俺もお前のS Iを利用させてもらった。

「雪ちゃん、逃げて!!」

嫌な予感がした優菜は雪を弾き飛ばした。

だが、祐助の手には何も無い。

優菜はとりあえずその場の盾で防ごうとした。

「その技はもう終わりだ!!」

いきなり祐助の手から大きなブロックが出てきた。

距離はない。

優菜は避けられずに盾の破片と一緒に壁に激突した。

頭を打ったために血が出てくる。

「お前さえ死ねば全てが終わる」

そう言つて祐助は止めを誘つと優菜に近づく。

「そうはさせない!!」

雪は水を凍らせた槍を持つて祐助と優菜の間に入った。

「これ以上、ゆーちゃんには近づけさせない」

「女の仲良しごっこは見ている暇などねえ!!」

祐助は手を上げた。

上からブロックが落ちてきた。

もう防ぐ手段がない雪と優菜は真上に落とされたブロックを避けられなかった。

「バイバイ!!」

そのとき、祐助の腹に思いっきり電気のビームを朱里が当てた。

「よくも、優菜さんたちを!!」

朱里はさらに両手に銃を構えて連射した。
だが、祐助は冷静にブロックの壁で防いだ。

「そんな」

「お前らなんてしょせん俺の敵ではねえ」

そう言って手を上げる。

朱里は出来るだけ逃げようとする。

「逃がしはしねえ!!」

斜め方向に朱里にめがけてブロックが落下してくる。

朱里に当たりそうになったとき、いきなり朱里の前に盾が現れた。そして、下には線が引いてある。

これは優菜の【線ノ盾】ライン・シールドだ。

「いまよ、朱里ちゃん!!」

「いつけえ!! あっちゃん!!」

ブロックの外からフラフラの状態で優菜と雪は叫んだ。

「撃ちます!!」

朱里は大型の銃を作り出した。

作った瞬間、すぐに朱里は引き金を引いた。

電気の巨大光線が祐助に向かってくる。

祐助は壁型のブロックで防ごうとした。

だが、ブロックからいきなりヒビがはいってきた。

「はあああああ!!」

「こんの、くそあまああああ!!」

攻撃はあたり、朱里は肩を落とす。

「まだ、終わってねえぞ！！」

だが、祐助はまだ立っていた。

「これで終わりだ」

そう言って両手を挙げたとき、無数のブロックが祐助の体の回りから放たれた。

もう女子3人はその攻撃に当たってしまっただけで同時に気絶してしまっただけだ。

「ぎゃははははは！！俺の勝ちだ！！このクソ女共」

祐助は叫んだ。

だが、これで終わりではなかった。

「アクセラレータ【一方通行】」

ソラの言葉が祐助に届く。

「はん、お前もすぐにこ」

「もう、遅いです」

ソラは右手に集めていた【エアロ・ライフ風ノ弾】を放った。

一瞬の攻撃に防御もすることが出来ず、風の力で祐助の体か切り裂かれる。

「ガハッ！！」

「僕の仲間の悪口は許しません」

そのまま祐助は倒れていった。

「香奈、優菜たちの手当てをお願いします」
「はい」

そう言って香奈は優菜たちのところへ向かう。
そして、とうとう大將戦になる。

第74章 終わり

第75章 リメイク・恐ろしさ

涼宮を囲んでいたブロックが祐助の気絶によりなくなった。

「ほう、祐助をやるとはな」

「これも仲間のおかげです。最後は僕が決めます!!」

ソラは力強く言った。

「いいだろう、この俺様がお前の死を選ばしてやろう!!」

「僕は死にはしません!!」

ソラはそう言っていていつもの構えをした。

涼宮はゆっくり椅子から降りた。

「アクセラレータ【一方通行】」

ソラの右手に風が集まる。

同時に涼宮は椅子から何かを取り出した。

「破壊します、エアロ・ライフル【風ノ弾】」

ソラは完全に何かを見せる前に撃ち放った。

だが、攻撃をくらったのは涼宮ではない。

変わりにくらったのは涼宮が取り出したのは人形だった。

「残念だな、代わりにこいつに食らわせてもらったぞ」

その言葉にソラは反応しなかった。
逆に冷静に涼宮に言った。

「なんで、今出したまねをしたのですか？」
「え！？」

ソラ言葉に反応したのは香奈だった。

「お前、何を言っている」
「なにつて、あの人形にはS Iの反応がありました。僕の目は誤魔化せません」

あの時、ソラはちゃんとあの人形にS Iがあつたのを見た。

「あなたのS Iは、これは予想ですが、物を生み出すS Iなのでは？」

ソラ言葉を聴いたとき、涼宮は笑い出した。

「はっ、そんなに早く見つかるもんだな」

笑いながら涼宮は言った。

「そうだよ、俺のS Iは物を生み出せる【ザ・リメイク創生者】の持ち主さ！！」

ソラはこの言葉を冷静に聴いていた。

「俺のS Iは俺の好きなものを生み出せる、このビルはもう、俺のS Iの範囲ないの中だ！！」

「だから、床や壁などがいきなり」

それは今までにあった出来事を思い出しながら言った。

つまり、あの時出てきた壁も、いきなり再生した床は全てこいつの
SIで生み出されたものだ。

「さあ、お前も死んでくれ!!」

そう言っていきなり涼宮のまえに巨大ビーム砲が出てきた。
好きなものを生み出せる。それはつまり好きな武器も好きなだけ生
み出せると言うことなのだ。

「発射!!」

その声に反応してビーム砲が発射された。

「守り、破壊します」

ソラはそういった後、左手を前に出した。
同時に赤い風がソラの周りに吹き荒れた。

「壁の風、エアロ・ウォール【風ノ壁】」

赤い風がソラの前に集まり、風の壁が作り出された。
そして、ビーム砲とぶつかり合った。

「バカが、このビーム砲に耐えられるものか」

ソラもそれは承知の上だ。
もちろんソラはこのままぶつかり合う気はない。

ソラはそのまま横に回転してビーム砲を避けた。

「貴様、それが狙いか」

「僕にはこれしか出来ないのですか」

「いいだろう。、だったらこれはどうだ!!」

次に涼宮が生み出したものは大砲だ。

これなら風に当たればすぐに爆破である。

「アクセラレータ【一步通行】」

ソラはその動きを読んでいたのか、すでに風がソラの右手に集まっていた。

「破壊します【エアロ・ライフル風ノ弾】」

発射される前にソラは撃ち放った。

もちろん狙いは大砲。

「チッ」

大砲が破壊されて涼宮は舌打ちをする。

「あなたの遠距離武器は僕には届きはしません」

ソラは冷静に言い張った。

「そうか、それならこれはどうだ!!」

次に涼宮が生み出したのは、刀を二本持ったロボットである。

ロボットも人間ではないので生み出すことが可能なのだ。

「そんなのありですか？」

「いけ！！」

涼宮の言葉により、ロボットはソラに突っ込んでくる。

「ですが、それも破壊します【デジタル・ベルト電子ノ帯】！！」

ソラは右手から帯を使ってロボットを捕らえた。

「さらに、【デジタル・ロープ電子ノ縄】」

さらには左手から縄を放ち、ロボットの腕を動けないように固定した。

ソラはそのことを確認した後、ダッシュした。

そのまま蹴りでロボの腹を蹴った。

「【エアロ・ライフル風ノ弾】」

ソラは溜めずに速攻で弾をロボットに撃った。

ロボは中心部がなくなり動かなくなった。

「これでロボも通じさせません」

ソラは涼宮に言った。

だが、その言葉とは裏腹に涼宮は不適に笑った。

「分かったぞ、お前の弱点」

「え!?!」

この言葉はソラではなく、香奈が驚いていた。
香奈はいまでも優菜たちの傷の回復をしていた。
傷は治ってきても気絶はしたままだ。

「いや、正確にはお前のS Iの弱点だ」

「……………」

言い張る涼宮とは違い、ソラは冷静に聞いていた。

「安心しろ、今から実行してやる」

そう言って涼宮は刀を生み出した。

そのあと、またさっきのロボットも生み出した。
しかも次は2体だ。

（まさか、制限がないのですか?）

「行くぜ!?!」

涼宮とロボ2体はソラに迫ってきた。

「無駄です【デジタル・ベルト電子ノ帯】!?!」

ソラは体を回転しながら帯を放った。
相手の刀に帯が巻きつかれた。

「その攻撃を待っていたぜ」

そのときだった。

ソラの近くにはさつきとは小さいがビーム砲が確かにそこにあった。

「！！」

「死ねええええええええええ！！」

ビーム砲を放つ瞬間、ソラは新たな技を使った。

「な、なんだよそれ！？」

ソラの左手は【デジタル・ベルト電脳子ノ帯】で巻かれていた。
その形はまるで獣の爪だ。

「エアロ・エッジ【風ノ爪】、デジタル・ベルト【電脳子ノ帯】と、エアロ・ブレイカー【風ノ破壊者】が組み合わせさつた技です」

そのとき、ソラの左手の爪が赤く光りだした。
その瞬間、ロボ2体を一気に切り裂いた。

「僕は、残念ながら接近戦のことも考えています」
「ぎゃ、ぎゃはははははははは！！」

ソラがそう言ったとき、涼宮はいきなり笑い出した。

「いいねいいね。俺様を本気にさせたなお前は」

高笑いをしている涼宮がソラには良く分からなかった。

「いいだろう、お前に死のざまを見せてやる！！」

涼宮がそう言ったとき、ソラは新たなS I反応を感じた。
そして、これは涼宮のS Iと同じ反応。

「まさか!!」

「いまさら気づいたってもう遅い!!」

ソラの予感はずたつてしまった。

なんとこのビルの下に何台もの巨大ビーム砲があるからだ。

「死ねええええええ!!」

ビーム砲が一気に屋上まで一斉放射された。
ビルが一気にもものすごく形を変えた。

第75章続く

第75章 リメイク・恐ろしさ（後書き）

創^{ザ・}生者はライおさんが考えてくれたS Iです。
ありがとうございます

第75章 リメイク・思い

ビーム砲で完全にビルの上の階が消えてなくなった。
その中にある少女がいた。

「……うつつ」

雪は激しい音の中で気がついた。
そして、あるものを見た。

「て、天使!？」

なんと雪が見たのは中に待っている小さな天使だった。
そして、雪は香奈の姿を探した。

香奈はその場で座り込んでいた。

「か、かーちゃん？」

雪は香奈を呼んだ。

「雪ちゃん。気がついたの？」

雪の言葉に反応して雪が聞いた。

「かーちゃん。これって」

雪はそのとき、ここが今どんな状況なのか理解した。

香奈たちの前には瓦礫以外何もない常態だった。

そして、ソラの姿もない。

さらに、香奈たちがここで無事なのは香奈の力だということだ。

天使の周りには大きな壁がある。

「かーちゃん。この天使は？」

「私の再生術の1つです」

「再生術！？」

雪は香奈に聞き返した。

香奈はあのととき、打たれる前に、無意識に詠唱術を使っていたのだ。

「私も分からないのですが、頭の中で使ってたと言われて」

「あ、頭の中？」

「はい。この術の名前は【再生する建物】^{リバース・ホール}と言いまして、人間以外の中の物は再生するする術です」

もっと詳しく言えば、この中では再生するシールドをはり、中に入ったものは外に出されるか、消えてなくなるかである。

つまり、ビーム砲は消えてなくなるのだ。

それがS Iだろうが関係ない。

しかし、範囲が狭く、優菜たちがギリギリ入っている程度だった。そのためにもソラも救えるわけがない。

「かーちゃん。すごいね」

「でも、ソラ君は守れなかったです」

香奈は悲しく言った。

そのとき、いきなり瓦礫が動き出した。
香奈と雪はソラということを望む。

「ふう、やっと外に出られたな」

しかし、出てきたのは涼宮だった。

「そ、そんな」

「ソラ君は!？」

「お前らは生きていたか、だがな、長門ソラはもう生きてはいない
!！」

そう言つて涼宮はビーム砲を生み出して打ち出した。

だが、今は香奈の技、【再生する建物】^{リバース・ホール}の発動中である。
ビーム砲は消えてなくなる。

「な、なんだその力は」

「ま、守る。ソラ君の変わりに、皆さんは私が守る」

そのとき、いきなり【再生する建物】^{リバース・ホール}はいきなり消えていった。

「!！」

「おっと、どうやら時間切れのようだな」

「そ、そんな」

香奈は絶望にさらされた。

「終わりだ、女」

涼宮はそう言ったあと、またビーム砲を発射した。

そのとき、炎がビームごと、発射台を燃やし始めた。

「な、なんだ!？」

いきなりの出来事に涼宮は驚く。

「どうやら間に合ったようだな」

そこには炎治と美穂がいた。

「おい、長門は!？」

そしてそばにはゆうがいた。

実はさっきゆうに合った人物はこの2人なのだ。

「またまたさっきの人間とまた新しい人間か。しかもまた女か」
「私たちもいるわよ」

涼宮の言葉をさえぎるようなレンジに肩を貸している雫が言った。

「れ、レンジさん!？」

「香奈ちゃん。レンジさんの回復お願いできる?」

「わ、分かりました」

香奈はそう言われて傷の回復を始めた。

「長門ソラはこんな人数の部下がいたのか?」

「そ、それは違います!!」

涼宮の言葉に香奈が反発した。

「ここにいるのはソラ君の部下ではありません！ー仲間です」

香奈は力強く言い放った。

「仲間、だと？」

このとき、涼宮は少し怒るように言った。

「はい、誰にも強制しないで、お願いし、信用してくれている。それが仲間です！ー」

「じゃあ、なぜお前らは長門ソラの仲間になった」

涼宮は聞いた。

「私は自分がいるべき場所をソラ君は作ってくれました」

香奈は優しく伝えた。

親が消えて家は火事になり住むところがなくなった香奈をソラはやさしく家に招きいれてくれた。

「私は、ソン君助けてくれたから。悩みを解決してくれたから。そしてそれはゆーちゃんも、あーちゃんも同じ！ー」

雪は言い放った。

優菜も朱里も同じ理由だ。

SIのことで悩んでいたことを救ってくれた。

「私は自分が帰る場所をソラ君は戻してくれた」

雫は一度、親と生き別れになってしまった。
だが、それをソラが引き合わせたのだ。

「俺はそいつとは気が合ったからな、それに俺と同じ目を持つてる
しな」

「お、同じ目だと!？」

ゆうのこの言葉は涼宮はわかっていなかった。

まあ、それは炎治と美穂もわかっていなかったが。

「俺は敵だったことをわすれて仲間に入れてくれたしな」

「私を間違った道を正してくれました」

炎治と美穂は続けて言った。

「おい、それだと俺の理由が情けなく聞こえるのは気のせいかな？」

炎治はそのとき、ある疑問を美穂に聞いた。

「いや、気のせいじゃない」

美穂はあっさり言った。

「そうか、そうか。気のせいではないのかって、おい!!」

「なによ、もちよつとちゃんとした理由がないの?このバカ!!」

「んだと!？」

美穂の言葉に炎治は反発する。

「喧嘩はやめなさい」

雫がすぐに止めた。

「私たちがいまこうやって笑っていられるのも全てソラ君のおかげです」

香奈は気を取り直して言った。

「だから、俺たちはソラのために戦う!!」

ゆうは【空間ノ剣】スペシャル・ソードを発動した。
それ以外のみんなも構えた。

「雪ちゃん、体は大丈夫なの？」

雫は心配しながら聞いた。

「私だけ寝て入られません!!」

雪は元気よく言った。

その言葉にみんなうなずいた。

第75章続く

第75章 リメイク・仲間の奮闘

みんな一斉に涼宮に向かって戦闘体制に入った。

「この中で一番戦えるのは炎治君と美穂ちゃんだけ。この2人を出来るだけ利用するわよ」

『はい!!』

みんな雫の言葉に賛成した。

「私がまず視界を防ぐわ。【水ノ達人】アクアトロマスター!!!」

雫が先頭を切ってS Iを発動した。

水の槍が涼宮に向かう。

「こんな攻撃無意味だ」

その水を涼宮は壁を生み出して防御した。

「はああああ!!!」

だが、その壁を利用して上からゆうが攻撃しようとした。

「なるほど、これが作戦だったか。だがな!!!」

そう言ったあと、涼宮は壁の後ろからさらにもう一個壁を生み出した。

ゆうの剣と壁がぶつかった。

行きよいがどちらともあったので、ゆうは跳ね返されてしまった。

「はああああ!!」

美穂はその間、電気を手に溜めていた。

「行けええ!!」

そのまま一気に電気を槍のごとく打ち出した。
地面を焦がしているのでそのぐらいすごい電気だと言っのはすぐに分かる。

「残念だ。俺に電気攻撃は一切当たらない」

そう言っつて涼宮が生み出したのは、避雷針だった。

「しまった!!」

美穂が思ったとおり、電気は避雷針のほうに当たった。
そのせいで涼宮にはまったくダメージはなかった。

「そんな」

「俺がやる!!」

悲しむ美穂の横で炎字が言い出した。

「燃えろ!!」

炎治な大きな火の玉を涼宮に撃った。

「無駄だ!!」

だが、いきなり出てきた大岩につぶされた。

「あんなものまで生み出せるのかよ!!」

どうやら、真っ向勝負では適わない。

「お前らもそう簡単には持たないないだろ。すぐに楽にしてやる」

そう言つて、いきなり涼宮はいきなり雫に指差した。

「まずはその女からだ!!」

そのとき、雫の前にいきないボクサーの格好をしたロボットが現れた。

「やれ!!」

そのとき、雫は反応したが、距離はゼロに近い。思いつき顔面に拳を当てられてしまった。

雫はそのまま吹っ飛んで瓦礫にぶち当たった。

雫の額から血が流れる。

そのまま気絶した。

「まずは、一人」

「はあああ!!」

だが、そのとき、ゆうがロボを一瞬にして切り裂いた。

「残念だが、俺にはロボットは通じない」

ゆうは剣を振り回しながら言った。

「そうか。それならこれはどうだ？」

涼宮がそう言ったとき、いきなり前から剣が何本も放たれた。

「なっ！！」

ゆうは剣を振って抵抗するが、手数があわず、次々に剣に刺さってしまった。

そのままゆうは倒れた。

「この野郎！！」

炎治は両手に炎を溜めた。

「お前は絶対に許さん！！」

そのまま炎治はその炎を放った。

「お前の攻撃はもう無意味だ！！」

そのとき、いきなり炎治の上から岩が振ってきた。

「マジかよ」

炎治は炎をだして抵抗するが、さすがに重力には適わない。

「くそおおおおお！！」

炎治はそのままつぶされた。

「よくも、みんなを！！」

次は雪が涼宮に向かって水鉄砲を放った。
だが、ここでも涼宮は冷静だった。

「無駄だ」

そう言っ出したのは火炎放射器だった。
放射器から一気に放射された炎は雪を捉える。

「きゃあああああ！！」

わめきながら雪は炎に包まれてしまった。
放射が終わったときには雪は服もボロボロの状態だった。

「これで、終わりだ」

そう言っ次次のターゲットを美穂に向けた。
そのときだった。

電気の光線が涼宮を狙った。

「貴様」

涼宮の目線に飛び込んできたのはさっきまで気絶していた優菜、朱里、レンジがいた。

「このままの状況でゆっくり寝ていられるかよ」

「美穂さん。力を貸してください」

「最後の希望、香奈ちゃんは私が守る！！」

3人それぞれの戦闘態勢に入っていた。

「前ら、まだ生きていたのか」

「私たちはあんなので死にません！！」

「ソラ君もきつとそう。だから、今私たちがやれることは今やるの！！」

涼宮の言葉に全員威勢よく言った。

「しつこい野郎どもだ。いいからさっさと死ね！！」

涼宮は一気に5台ぐらいのビーム砲を生み出した。

「死ねえええ！！」

「へ私たちを守る盾よ、真の力を持って強靱に鋼に武装しろ！！」

優菜は詠唱を唱え始めた。

「発射！！」

フル・アーマー・スリー

「【完全武装×3】！！」

このときのためだったのか、最後の最後に優菜はおおきな線から巨大な盾を作り出した。

しかも、優菜の詠唱術は保護術。

盾を使って更なる力をもたらすものだ。

この術は盾の強化をするものだ。
まるで盾が何重にさせる技だ。この術は3重だ。

「それだけではねえ!!」

さらにレンジは鉄で盾の強化をした。

これならばあんなビーム砲簡単に防げる。

「うぬぼれるな!!」

涼宮がそう叫んだとき、いきなり巨大大砲が出現した。

「全て碎ける!!」

しかも3台あり、一斉に撃ってきた。

完全にこれでは防げ切れない。

盾は破壊され、香奈以外全員気絶した。

「後は、お前だけだ。お前がいなければ早く終わった」

そう言って涼宮は香奈に迫った。

だが、このとき、香奈は何かぶつぶつ言っていた。

「へ皆を起こす、奇跡を起こせ、私の癒しの光みんなにとどいて!!」

そのとき、いきなり香奈の体が光りだした。

「輝け、【癒しの光】!!」
ホーリー・ライト

そのとき、みんなの傷が一斉に消えていった。
だが、痛みは消えていなくみんな動きは出来ない。

「小ざかしいまねを」

一瞬驚いていたが、涼宮はさらに香奈に迫った。
そのときである。

いきなり香奈と涼宮の間から強い風が、竜巻が起こされた。

「な、なんだこれは!？」

そのとき、誰かの手が涼宮の襟首をつかんだ。

「こんにちは」

そこには微笑みながらそうやってきたソラがいた。

「な、長門ソラ!!」

ソラは驚いた涼宮の隙を見逃さずに思いっきり縦からの回し蹴りを
頭上にめがけた。

同時に涼宮は後ろに吹っ飛ぶ。

「さあ、次は僕が相手です」

ソラは地面に着地した後と言った。

第75章続く

第75章 リメイク・決めます。

「ソラ君!!」

香奈が思い切ってソラの名前を叫ぶ。

ソラはその声を聞いて香奈の元に行く。

「よく、がんばってくださいましたね」

ソラは香奈の頬に手を添えた。

「ソラ君」

「みんなの思い。僕がつなぎます」

その後、ソラは涼宮のほうに向き直った。

「お前、どうやって瓦礫の中で生きていやがった」

「驚くことはありません。僕もあなたと同じSI使いなのですから」

ソラは心強く言った。

ソラは瓦礫の中で埋もれていた。

骨は完全に何本か折れていた。

だが、ソラの意識は完全になくなってはいなかった。

しかし、激しい痛みで体を動かすことが出来なかった。

ソラはそっと目を閉じた。

（ソラ君）

——誰かが、僕の名を呼ぶ。

（私よソラ君）

——君は、音無詩音？

そのとき、ソラの目には綺麗な川辺が映し出された。
そこにはロングストレートの桃色の髪の毛の少女がいた。

（ソラ君。ここでやれる気？約束したじゃない）

——そうですね。

詩音はソラに近づいた。

近づいてみると、肌は白く顔立ちは香奈に似ていた。

（じゃあ、生きなきゃね）

——ええ。約束はまだ続いています。

そのとき、詩音の体がいきなり小さく、幼くなっていた。

（じゃあ、次ぎあうときも、約束は守っている状態ね）

そう言って詩音は消えた。

——君は一体。でも。

ソラは我に帰り、目を開いた。

「ありがとう」

その時、なにやらやさしい光がソラの体に当たってきた。

「へ我が守りし風の壁よ、いまこそ撒き散らせ」

ソラは瓦礫の中から手を伸ばした。

「ストーム
【竜巻】」

場面は変わり、ソラは涼宮の場所から竜巻を発生させた。

「これが貴様の詠唱術か！！」

「僕の詠唱術は風破壊術、風を使い破壊する術で、これならプロゲラムは関係ありません」

「ちい！！」

涼宮は回りに大きな壁を生み出した。

「貴様の攻撃など、俺には効かぬ！！」

「アクセラレータ
【一方通行】」

ソラはいつもの構えにして発動した。

「貴様の弾など俺の壁で封じてやる！！」

しかし、風は右手に集まっているが、発射するとき、ソラは手の動

きを変えた。

そして、ソラの手元から一気に涼宮を貫いた槍が現れた。壁を貫通した槍はそのまま涼宮の足を刺した。

「なっ！！」

「貫け、エアロ・ランス【風ノ槍】」

ソラの右手には確かに槍のもち手がある。

「あれが、ソラ君の別の技」

「まだまだたくさんあるそうだね」

体の傷は消えて、優菜たちは痛みを耐えながらしゃべった。

「貴様、だが、その槍も封じてやる！！」

涼宮は威勢よく言った。

（同じ技を撃つには無駄にしかない。……ならば）

「くられ、5台からの巨大ビーム砲を！！」

涼宮が言った通り、ソラの前には5台のビーム砲台が並べられていた。

「これが、香奈たちを傷つけた」

ソラはひるむことはなかった。

「消費が多いですが、仕方ありません！！」

ソラは左手を後ろにした。

「切り裂け、エアロ・スラッシュ【風ノ切り裂き】」

ソラは左腕を横に振り切った。

そのとき、一気に5台のビーム砲台は足元から切り裂かれた。

「決めます、アクセラレータ【一方通行】」

ソラはまた風の道を作り出した。

「そんなもの、俺には効かない!!」

涼宮がそう言い終わるとき、ソラはもう目の前にいた。

「残念です。アクセラレータ【一方通行】は技ではなく、その力の源の僕も移動できません」

ソラの右手にはすでに風玉が作られていた。

「破壊します、エアロ・プレイヤー【風ノ破壊者】」

風玉が涼宮の腹にぶつけた。

涼宮はそのまま飛んで行った。

だが、涼宮は巨大なクッションを作って瓦礫にぶつかるのを防いだ。多分、こいつがあのととき無事だったのはこれと同じものを生み出したからだろう。

「どうやら、お前は俺にこいつを出させる気か」

ソラは大きなSⅠ反応を感じたのか、同時に両手で一個の風玉を作り出した。

「どうやら、最後の一撃はお互いのためが必要のようだな」

どちらが溜めるのが早いのか。

「はあああああ！！出て来い、巨人兵よ！！」

そのとき、いきなり涼宮の後ろから巨人兵が現れた。

「残念だな、お前のその小さな風玉では、俺のこいつを破壊するとは出来ない」

だが、ソラが作っていたのはいつもと違っていた。

ソラが作っているのを風を使い、空気を圧縮したものだ。これを放てば、一気におおきな爆発物となる。

「僕のほとんどのSⅠの回数を使い、これを発動します」

その威力はまるで核爆発になるものだ。

ソラの、人間の力では、多分このビルを一気に消せるものしか作ること出来ない。

「だが、それが爆発するのは手元が離れて一秒もしないで爆発する。どっち道お前らは全員死ぬ」

（分かっていますよね）

ソラは何かに思いをこめた。

「おい、きいてるのか？」

「ええ。聞いています。ですが、ちょっとした時間に隙があれば僕はこれを放てます」

「はあ、なにいつていやが……！！」

涼宮はあの時、ソラの言葉を思い出した。

そのときのソラの言葉は「僕のほとんどのS.Iの回数を使い、これを発動します」。

つまり、後一撃、あの技のために残していたのだ。

「アクセラレータ【一方通行】」

「やめろおおおおお！！」

ソラは手を離れた。

光の速さでその爆弾は涼宮の巨人兵の元に届く。

「決めてください、エアロ・ボム【風ノ爆弾】」

大きな爆風が巨人兵を包み込んだ。

第75章続く

第75章 リメイク・戦いの後

ソラの最後の技が涼宮と巨大兵ごと破壊された。
涼宮はボロボロの状態だが、生きている。

ソラは涼宮のもとへ来た。

「て、てめえ。一体何者だ？」

涼宮はソラに聞いた。

「僕は、【達人ノ眼】マスター・アイを受け持つものです」

そう言われたとき、涼宮はソラの目を見た。

「あ、赤い目かよ」

涼宮は鼻で笑った。

そのとき、いきなり涼宮の足が砂になって行った。

「涼宮さん！？」

ソラは驚きながら言った。

「実は【創生者】ザ・リメイクは現実にあるものを生み出すことは普通に可能だが、非現実のものはたとえばさっきの巨人兵は相手に破壊されたらその分自分の体はすなとなるというわけさ。あの巨人兵は普通なら破壊されないからな、この勢いなら俺はこのまま砂となるだろ」
「そ、そんな」

ソラは悲しそうに言った。

「安心しろ。お前が殺したわけではねえ。全ては俺の責任」

ソラの顔を見て涼宮は気を遣うように言った。
いや、彼は本当にその気持ちなのだろう。

「そんなことはありません」

ソラは力強く、さっきの言葉に反発した。

「誰かのせいなんて関係ありません！！人が死んだら誰なんて関係ありません。それがいがみ合う人でも、生きていなければダメなのです！！」

「だが残念。もう、おさらばだ」

そう言って一気に涼宮は消えていった。

「涼宮さん！！」

ソラは聞こえないのに大声で涼宮を呼んだ。

ソラは涼宮と分かれた後、みんなのところに来た。

「ソラ君。無事でよかったです」

香奈はそう言いながらソラに向かってきたが、いきなり倒れこんだ。

「香奈!!」

ソラは香奈の倒れた体を支えた。
そのまま膝を突いて香奈を抱えた。

「香奈ちゃん。あんな技を出したから体力が限界に来ていたのね」

雫が理由を分かって説明した。

「ですがソラさん。あの瓦礫の中でよく戻ってきてくれました」
「ほんとによく死ななかったな」

朱里とゆうが聞いた。

「僕の【マスター・アイ達人ノ眼】の第3能力です」

ソラは説明した。

「僕の第3能力は【ハート・アーマー心ノ鎧】。心の強さで死ぬことを致命所に耐える力です」

あのときの夢でソラはそのことを知った。

発動はずっとしており、実際、気絶から起きるのが早いのもこの能力のおかげだ。

だが、病気、毒での死は耐えることができない。
あくまで致命所のみだ。

「でも、それって・能力もあるってことよね？」

「ええ。そしてそれはもうすでに僕は分かっていました」

ソラは悲しそうに言った。

「僕はいま、人間としての一つの動作をすることが出来ません」

「人間としてのですか？」

「それは、涙が出ないのでしょ」

『！！』

全員その言葉に驚いた。

しかし、優菜、雪、朱里はそのことを静かに感じていた。

涙が出ない。

それは人間の悲しむ表現を無くすと言うことだ。
いくら流したいからって流れることは一切ない。

「ソン君。そういえば」

「ガハッ！！」

「なんで！？」

雪がソラの近くに來たとき、炎治はいきなり鼻血を噴射した。
それもそのはず、雪の格好は服が燃えてしまつて、下半身はいいとして、上のほうは雪が自分の手で隠しているからだ。

鼻血を出している炎治と裏腹にソラは冷静に雪の言葉を聴いた。

「どうかしたのですか？雪」

ソラは雪に自分が着ていた上着を羽織らせながら聞いた。

「うん。思ったのだけど、さっきまでの爆発で人が集まつてしまつ

のじゃないの？」

雪の言葉により、全員動きが止まった。

「確かに。そうですね」

「それってやばくないか？」

相当やばい。

このことは熊田にも伝えてはいない。

「どうでしょうか」

「大丈夫ですソラさん。私立った今、へりを呼んでおきました」
「すごいですねー！」

ソラはツッコんだ。

何とか全員へりに乗ることが出来て、今上空にいた。

「しかし、全員乗れるってすごいへりですね」

ソラは改めて聞いた。

「みなさんのお役に立てて光栄です」

朱里は笑顔で言った。

ちなみに他の人はただいま出された飯をばくばく食べている。

「ソラさんは食べないのですか？」

「僕は香奈が起きてから、あさみと3人で一緒に食べます」

ソラは香奈を見ながら言った。

「朱里。僕らを先に下ろしてくれませんか？」

ソラの言葉に朱里は微笑んだ。

「そういつと思いましたので、今向かっています。それよりもソラさん」

「なんですか？」

朱里は改めて聞いた。

「S I、すべて使い切ってしまいましたが大丈夫なのですか？」

「ええ。1日経てば何とかかなります。せめて24時間は必要ですね」

ソラのS Iは時間が経つにつれてどんどん回復していく。

戦闘中でもちよつとだが長引けば回復はする。

「そうですか。あ、着いたようですね」

気がつくのと、へりは段々低くなっていた。

「ありがとうございます。朱里」

香奈をお姫様抱っこをしながらソラはへりから降りた。
朱里は笑顔で「どういたしまして」といった。

「あ、お兄ちゃん。お帰りなさい」

外の音で気づいたのか、あさみが家から出てきた。

「ただいまです」

そのとき、香奈もそんなことを言っていたのか、すこし笑顔になっていた。

第75章 終わり

第76章 8月の終わり

8月14日 月曜日。

ソラたちは長門家に集まっていた。

「ソラさん。体はどうですか？」

朱里がソラに聞いた。

「大丈夫です。あのあと香奈が念入りに回復してくれましたので」

ソラは微笑みながら言った。

「それでもソン君のS Iの回復はしない」

「体力の問題じゃないものね」

雪と優菜がつぶやいた。

今日はこの3人とゆうしか家に来ていない。

他の人はそれ以外にもいろいろ忙しいみたいだ。

「ソラ、俺のS Iってやつは【セカンドフェイス第二型】なのか？」

ゆうが改めてソラに聞いた。

昨日、あんなことがあったので2人とも下の名前で呼び合っている。

「そうですね。ゆうの場合はもっと理解したら強くなると思います」

「でも、力が強すぎると代償も強くなってしまう」

「涼宮さんの例ですね」

6人とも悩んでしまった。

そのとき、誰かが来たのかインターフォンが鳴った。

「お兄ちゃん。識さん」

あさみのこの言葉により、ソラたちは玄関に向かった。

「お久しぶりッス!!」

そこには以前知り合った識がいた。

「識。なんでここに？」

「竜司と言う人に言われて俺のS Iが必要になるって聞きまして飛んできたッス」

「本当ですか!?!ありがとうございます!!」

2人は握手を交わした。

そしてリビングに上がったもらい詳しい話をした。
そして、一番聞きたいことをソラは聞いた。

「識。僕のS I、エアロ・ブレイカー【風ノ破壊者】は、識のS I、メモリー・メモリー【記録ノ記憶】にありますか？」

ソラたちは第一にこれが知りたかった。

識は考え始めた。

S Iを使用しているのだ。

数秒ぐらいで識は口を開いた。

「残念ながら、俺のメモリーにはそんなS Iはないッス」
「そんな」

識の言葉により、みんな無言になる。

「ですが、いい情報があるッス」

「お願いします」

「確かに、S Iには【ファーストフェイス第一型】、そして【セカンドフェイス第二型】以外にもう一つの謎の型、【サードフェイス第三型】と言うものが俺のメモリーにあるッス。もしかしたら、ソラさんのS Iはその類なのでは？」

たしかに、今までの戦いの中でゆうのS Iまでは全てどちらかに入っているが、ソラのS Iのみ入っていないと言うと、完全にソラのS Iは【サードフェイス第三型】と見てもいい。

「もちろん、根拠もあるッス。この世の中で一番最強と言われるS Iがあるッス」

みんなはこのことを驚いた。

確かに、S Iの中でもあの時と同じ、レベルがまったく違うS Iもあれば、こういわれるS Iもあるはずである。

「最強のS Iの名は、【インデックス禁書目録】ッス。さまざまな最強の能力をそれぞれ発動することが出来るS Iッス。それは自分の姿を消せたり、一瞬で人を殺せたりとか、自由にいろんな場所に移動したりとか、名の通り、禁じられた技の目録ッス」

「【インデックス禁書目録】、禁じられた技の目録」

「そ、そんなものがこの世に存在するの？」

みんなの反応を見て、さらに識は話を進める。

「このS Iは【セカンドフェイス第二型】ッスけど、【サードフェイス第三型】を生み出すためのS

「Iでもあるッス」

このとき、一気にみんなソラを見た。

「そういうことは、ソラは昔、インデックス【禁書目録】の使い手にあったというのか」

ゆうは識の代わりに解説した。

「でも、あまり昔過ぎると、ソラ君のメモリー・シャッフル【記憶のかき回し】で記憶が」

香奈はソラの記憶が変だと言うことを伝えた。

【メモリー・シャッフル記憶のかき回し】はソラの記憶を消すのではなく、思いださせないものだ。

ある意味、消えるよりもひどい能力だ。

あるかもしれないのに、思い出せない。それは人間にとってとても苦痛だ。

「ソラさんの記憶はあてにならないという意味ッスか」

「ソン君。幼馴染とかいないの？」

雪は聞いた。

もしかしていたらソラの過去を少しは知っているかもしれないからだ。

「すみませんがいません。僕はずっとここで暮らしてきたのですから、親がいなくなったときは誰にもほとんど関わることがなく、かわってきた人物は中学からの進藤、道長、それに崎野さんです」

秋の名前が出たとき、女子たちは少しむっと表情になった。

「その中からいるとしたら」

「それはありえません。僕の眼は誤魔化せません」

「その眼はS I以上の力を持っているッスからね」

全員悩みだした。

「なあ、こう考えても意味が無い。ここはそのままでもおりにすればいいのじゃねえか？」

「そうですね」

全員ゆうの言葉にうなずいた。

「識さん。今晚はどうするのですか？今日はもう帰れないでしょう」

「あ、それならここに住んでも別にいいですけど」

「」「ダメ（です）！！」「」

いきなり優菜、雪、朱里が叫んだ。

「いいソラ君。私たちが香奈ちゃんたちをソラ君に任せているか」

「普通の人なら一緒に泊まるなんて猛反対するよ！！」

「ソラさんは絶対に安全と保障があるからいいですが」

そしてコンビネーション良くソラを説得する。

「この人はもしかしたら狼かもしれないから香奈お姉ちゃんが危険」

あさみも3人に加わって言った。

「そういうことだ。今日は俺の家に泊まるぞ！！」

「えゝ早速かわいいことお泊りが出来かもしれないのに」

識は文句言いながらゆづに連れ去られた。

「さて、僕らはこれからどうします？ 一様に買い物に行きますが」

切り替え早くソラは言った。

「お、それだったら俺もついていくぜ。ボディガードだ」

「あ、いいねそれ。なんかかつこいい」

「では、私たちはソラさんと香奈さんのボディガード、SPですね」

全員うなずいた。

こうしてあさみをいれて全員で買い物に出かけた。

ソラたちはスーパーに向かって歩いていった。

そのときだった、いきなり上から人が降ってきた。

「これを、今日は私に来た」

落ちてきた男はそう言ってソラに一通の手紙を渡した。

「9月。戦争だ」

それを言ってから男は消えていった。

ソラは手紙を開けてみた。内容は以下の通りである。

『9月からわれわれは本格的に科学都市を手に入れる。
長門ソラ一味よ、科学都市をかけて戦争だ。
それまで十分鍛えていろ!!』

それだけだった。

「戦争」

ソラは手紙を強く握った。

「皆さんを集めてください」

ソラは全員に言いかけた。

「9月まで、特訓です!!」
『おう!!』

ソラの言葉に全員反応した。

こうして、8月の戦いは終わり、全ては9月から、科学都市戦争編になる。

夏休み編終わり。
第76章終わり。

第77章 新学期

9月1日木曜日。

今日は全ての学校の新学期だ。

あれからソラたちは特訓を積んできた。

手紙に書いていたとおりにあの日からS I使いは誰一人も来なかった。

始業式が終わり、ソラたちは教室にいた。

「ソラ君。今日からですね」

香奈がソラに話しかけた。

「あの手紙の意味は、多分科学都市の侵略ですね」

「たぶん、たくさんのS I使いを従えているだろうね」

雪はのんきに言った。

だが、それぐらいがソラたちの緊迫感をまわりに感じなくさせている。

「私たちはいままでがんばってきたんだからね。ね、ソン君」

「そうですね」

雪の言葉にソラは反応した。

「なんだ、長門。面白い話か？」

道長が話しに入ってきた。

「残念です。こちらの秘密の話なので」

「ちえ、そういえば大木さんは？」

「いや、優菜は5組ですから」

もうすぐHRが始まる時間が近いのに来るはずもない。

そんな会話をしていたら、噂をすれば影なのか、先生が教室に入ってきた。

ソラたちは話すのをやめて先生の話聞いた。

HRが終わり、優菜が1組の教室に入ってきた。

「ソラ君。帰ろう」

「ええ」

あいからわず美人に囲まれているソラを周りの男子は嫉妬のように見ていた。

しかし、ソラには関係無いことである。

「ソン君。あーちゃんはいつ来るの？」

「朱里は早く終わったらいいのでゆうをつれて校門前に来るらしいですよ」

朱里とゆうは私立星道高校の生徒である。

偏差値はこの高校よりも高い。

ゆうは意外と頭がいい。

ソラがそこに入らない理由は金が無いからだ。

「さて、僕たちの校門前に行きましようか」

ソラの言葉に3人はうなずいた。

そして、校門前にソラたちは向かった。

「あ、秋ちゃん。長門君と一緒に帰ろうって声かけたら？」

そんなソラたちが話しているのを見ていた佐藤が秋に話しかける。

「でも、前よりも仲良くなっていない？」

「海でも長門君が泳げないのは誤算だったからね」

「あ、長門君行っちゃった」

ソラたちが教室に出て行くのを秋は黙って見ていた。

そんな秋を見て佐藤たちはため息を吐いた。

「そんなことしてたら絶対にあの中の誰かに取られちゃうわよ」

「油断大敵」

「そ、そんなこと言ってたて」

秋は完全にテンパッてしまった。

ソラたちは朱里とゆうが待っているはずの校門に来た。
どうやらまだ着いていないようだ。

「まあ、気長に待ちましようか」

ソラは気軽に言った。

みんなその言葉にうなづく。

校門ではたくさんの生徒が話し合っている。

この高校の校門から校舎に向かう道では木とベンチがあるので話しやすい場所になっている。

ソラたちはベンチには座っていないが日陰の場所にいる。

「あ、ソラさん」

朱里の声が聞こえたのでみんな振り向く。

朱里、ゆう以外に雫も同行していた。

「雫さん。今日は予定があるのでなかったのですか？」

実は前日雫は用があるからってこれないと言っていたのだ。どうやら用は終わったようだった。

「まあね。お母さんがいいって言うてくれたから来たのよ」

「そうですか。それでは行きましょうか」

ちなみにソラたちが集まっているとき、男子はこんなに美女が集まっているのを珍しそうにチラチラ見ていた。

あとは、ソラに対する怒りもある。

ソラたちはそんなこと関係なく歩いていった。

ソラたちはとりあえず、長門家に向かっていた。

会話は普通の会話。

だれも特訓の成果は聞かない。

人氣が少ない道に来たとき、大きな風が吹き荒れた。

同時に、ソラは近くのS I反応を感じた。

「皆さん。今すぐに走って僕の家に行って下さい。鍵は香奈に渡しています」

ソラの言葉にみんな黙った。

「ソラ君？どうしたの？」

香奈は心配して聞いた。

「近くに強力なS I反応を感じます。みなさんは先に帰ってください」

「じゃ、じゃあ私も残る」

「俺もだ」

優菜とゆうがソラに言った。

だが、ソラは首を横に振った。

「いいえ。ここは僕一人で戦わせてください。僕がいま感じているS Iは僕のS Iと同じ匂いがします」

ソラの言葉に香奈は一瞬考えたが、すぐに答えを出した。

「みなさん。ここは、私はソラ君に任せたいと思います」

心配性の香奈の意外な言葉にみんな驚いたが、一斉にうなずいた。

「ありがとうございます。香奈」

そう聞いた後、香奈たち走って行った。

そのとき、すこし背の高い男を横を通っていった。

「ありがとうございます。彼女たちに手を出さないでくれて」

ソラはその男に声をかけた。

「ちっ、言われたとおりSIを本気で感じられるのかよ」

男はくびを曲げながら言った。

「まあ、いい。あの女どもを殺すのは俺の趣味に反する。お前一人殺すのは簡単なことだしな」

「どうやら、僕は本気でなめられているようですね」

ソラは少し口元が笑った。

「さあな、自分で考えろ」

そのとき、横にある木の葉がいきなり浮かびだした。

「一瞬で死ねや!!」

その葉はカッターのようにソラに向かった。

デジタル・ヘルト
「【電子ノ帯】――」

ソラはその葉を帯で包み込んで防いだ。

「次はこっちから行かせてもらいます」

そう言つてソラはいつもの構えをした。

アクセラレータ
「【一方通行】――」

風の道が男に向かって伸びた。

「これは、風か」

「当たりです」

男の言葉にソラは答えた。

同時にソラの右手に風が集まつた。

エアロ・ライフル
「破壊します。【風ノ弾】――」

それが弾となり、男に向かって放つた。

だが、その時、男に届くまで一瞬にして弾は何か相殺されたように消えた。

ソラはその答えを知っていた。

「風、ですか」

「あたりだ小僧」

アクセラレータ
「【一方通行】に乗った弾は早さの副作用で威力も上がる。

その弾に相殺するためには同じ威力の攻撃か、風にしかない。

【一方通行】アクセラレータは自分だけではなく、相手の風も同じ効果を持つてしまう。

つまり、そんな威力の気配も無いのなら、おなじ風で相殺したにしか答えが無い。

「当たり前だ。小僧。それでは俺も自己紹介してもらおうは」

男はそう言ってポーズを決めた。

「姓は藤澤、ふじさわ名は啓輔、けいすけそして、我がSIの名は【空気操作】エアオペレーション！！！」

「【空気操作】、名の通り空気操作。それ以外にも風を操るSI」

ソラは納得した。

「どうやら僕と同じにおいがするのは確かなようですね」

ソラの目は本気となり、【超能力ノ眼・輪】スキル・アイ・リングを発動した。
この戦いはこれからの戦争の火蓋となる。

第77章終わり

第77章 新学期（後書き）

【エアオペレーション空気操作】は作戦参謀さんが考えてくれたSIです。
ありがとうございました。

第78章 風と空気・+風

ソラは考えていた。

あいてのS Iが風を操るS Iのため、アクセラレータ【一方通行】が使えなくなっ
てしまった。

「さあ、行くぜ!!」

啓輔がそう言ったとき、ソラの周りに大きい風が吹き荒れた。

「お前のS Iはただ俺に力を宿らせるだけだ!!」

そう言うって同時にたくさんのレンガがソラに向かって振ってきた。
風の中にいるために移動は不可能だ。

「デジタル・【電子ノ……」

ソラの両腕のリストバンドから帯が出てきた。
だが、これはいつもの帯ではない。

「エアロベルト……風帯】!!」

ソラは風帯に包み込んで自分の体をレンガから守った。
レンガはそのまま当たっただけでソラにはなんのダメージも無い。

風がやんだ後、ソラも包み込むのをやめた。

「なんだ、それは？」

啓輔はソラに聞いた。

「簡単です。僕のS I、【風ノ破壊者】^{エアロ・ブレイカー}と、【電子ノ腕輪】^{デジタル・バンド}の合体技です」

例えば、さっきの【電子ノ風帯】^{デジタル・エアロベルト}は帯にそのまんま、【風ノ破壊者】^{エアロ・ブレイカー}の能力を付け加えたものだ。

そのおかげでソラの帯は強化され、さらにはいつもより操れるものになっている。

また、貫通能力や、さっきのような防御能力にも長けているものになった。

「僕の技は【一方通行】^{アクセラレータ}を使わないと本気が出せないのは昔のことです。僕はいまさまざまな工夫をしました」
「なるほどな」

そう言つて啓輔とソラは一步後ろに下がった。

「ハ我が空気を圧迫し、今ここで放て！！」
「ハ我が守りし風の壁よ、いまこそ撒き散らせ」

お互い、詠唱術を唱えた。

「【空気砲台】^{エアバスター}！！」
「【竜巻】^{ストーム}」

空気砲と、竜巻がお互いぶつかり合った。
木は揺れて、今にも吹っ飛んでいきそうだ。

お互い相殺した後、ソラは次の攻撃に一瞬で移った。

「デジタル・エアロスピア
【電子ノ風針】」

一瞬の隙を突いたかと思えば、啓輔は風を自分を持ち上げるように操った。

だが、それでも風針はレンガを貫通した。

「あの威力、マジかよ」

だが、いまだに啓輔は空中にいる。

「食らえ、空気砲!!」

空中からの空気砲がソラを襲う。

ソラは風針を投げて抵抗する。

「空中にいるなら、叩き落します」

そう言っただけでソラは左手に風を集めた。

「エアロ・ランス
【風ノ槍】」

ソラは長い槍を発動した。

そのまま両手で持って啓輔を狙って叩き落した。

だが啓輔はわざと地面に降りることによってこの攻撃を防いだ。
そのあと、また空中に上り、空気砲を放った。

「そろそろ、終わりにするか、へ我が操るし風よ今こそ嵐となり、

その実物を復元せよ」

啓輔はまた詠唱術を唱えた。

最初の言葉を聞き、ソラはやばいと思い、次なる詠唱を唱え始めた。

「破壊と守り、2つの名を生み出す風の壁よ、その名を今ここで名乗り上げろ」

だが、詠唱の長さで啓輔が先に詠唱に成功した。

「ライフィン・フトーム
【暴雨風竜巻】！！」

巨大な竜巻がソラに迫ってきた。

しかし、ソラの反応が良かったのか、当たる直前にソラは詠唱を唱え終わった。

「破壊しろ、ブレイク・ストーム
【破壊ノ竜巻】！！」

更なる大きな竜巻が啓輔のライフィン・ストーム【暴雨風竜巻】を飲み込み、啓輔を襲った。

そのあと、その場には誰もいなかった。

だが、風で瓦礫になったレンガの山から啓輔が出てきた。
頭からは血が流れている。

「あの餓鬼、やりやがったな」

さっきの戦い方がうそのように啓輔は怒っていた。

「どこだああ！！長門ソラアアア！！」

その瞬間、ソラは上空から現れた。
いつもの戦闘スタイルの空中からの奇襲だ。

「破壊します、エアロ・ライフル【風ノ弾】」

「ちiiiiiiii！！」

ソラの弾に啓輔は空気砲で対抗する。

「残念ながら、さっきは見せられませんが僕の弾はちょっとした工夫してますよ」

そのとき、風弾が徐々に分裂してきた。

「直撃後、エアロ・ソード【風ノ剣】発動」

風弾から一気に風の刃が出てきた。
空気砲どころか、真下にいた啓輔の体も切り裂いた。

「この餓鬼が！！」

そのあと、啓輔は地面に着いたソラにめがけて大きな空気の弾を作り出した。

「ウォール・ハリケーン【防壁ノ暴風】」

ソラはとっさに風の吹っ飛ばす壁を作りだした。
放つ前に啓輔は後ろに吹っ飛んだ。

「ちっ、しかたねえ。あれを使うか」

そう言って啓輔は黙り込んだ。

（なんか、嫌な予感がします）

ソラは瞬時に構えた。

「へ破壊と守り、2つの名を生み出す風の壁よ、その名を今ここで名乗り上げる」

啓輔は長く何かを溜めているのか、反撃してこようとはしない。

「これで決めます！！」
ブレイク・ストーム
【破壊ノ竜巻】

「もう遅い！！」

ソラが言い終わって技が発動する前、ソラは何か息苦しさを感じた。

「こ、これって」

——まさか、酸素を減らした！？

ソラはよろけた。

集中が切れたのか、技は不発で終わってしまった。

「酸素を減らされた気分はどうだ」

「へ輪が守りし風の壁よいまこそ撒き散らせ」

ソラは小さく詠唱を唱えた。

「^{ストーム}【竜巻】」

ソラは小さい竜巻で自分の体を飛ばして回避した。
この少ない酸素の中、あれだけの威力の物をあれで出すのが精一杯なのだ。

「ち、逃げたか」

ソラは近くの物陰に隠れた。
そして、更なる問題が発生した。

それは【^{エアロ・ブレイカー}風ノ破壊者】の回数限界が迫っていた。
詠唱術はもう使えない。
低レベルの技で攻めるしかない。

だが、【^{アクセラレータ}一步通行】を使えば必ず振り返り討ちになってしまう。

なら、答えは一つ。

「見つけたぞ、長門ソラ！！」

その声が聞こえたとき、ソラは【^{アクセラレータ}一方通行】を使い、自らの体を移動させた。
移動してからすぐに発動を取り消した。

そのまま思いつきり啓輔の腹に蹴りを入れた。

「がはあー！！」

「僕には、もうこの道しかありません」

ソラはそう言って後ろに下がった。

もうソラの戦いのデフォルトの蹴りで攻めるしかない。

「だが、残念だ。俺の最終奥義はそろった」

ソラの耳に最悪の言葉が響いた。

その奥義とはソラも使ったことがある。

だが、彼のほうはためが早い。

「まさか、ガスと空気による爆発……」

「正解だ!!」

啓輔は上に上がった。

「終わりだ、長門ソラ!!」

啓輔は手に持っていた爆発物をソラに向かってはなった。

ソラには音が聞こえなかった。

大きな爆発が周りの建物すらも飲み込んだ。

第78章続く

第78章 風と空気・覚醒

大きな爆発の前に、ソラは完全に師を予感していた。

風と空気によるガス爆発。

ここは周りが普通の民家の近くであるためにガスを集めるなんて造作もない。

しかも、この方法はソラも知っている方法だがこの前はやらなかった。

いや、正確にはやりたくないのだ。

理由は簡単だ。

この方法を使えば、人は簡単に死ねるのだ。

ここで回避できるのはやはり【一方通行】アクセラレータのみだ。

だが、ここでは使えない。

【一方通行】アクセラレータも風の技、つまりこの爆風をさらに大きくさせるネタにしかない。

そのままだと関係ない人を殺してしまう。

「ソラ君！！」

そのとき、いきなりいきなり聞いたことがある声がソラに聞こえた。

「香奈！？」

ソラはこの声の主が香奈だということがわかった。
天眼で確認したところ、今は香奈一人らしい。

「香奈、なんで戻ってきたのですか!!」

ソラは香奈に思いつきりいった。

「ごめんなさい。でも、私もやな予感がして」

香奈は悲しくいった。

そしてその香奈を追ってきた仲間たちが向かってくる。

——このままでは仲間を死なせてしまいます。

「いやだ」

ソラはボソツとつぶやいた。

「そんなのはいやです!!」

そのとき、ソラはまた一瞬意識がなくなった。

——また、来てしまいましたか。

僕はまたこの世界に来た。
なぞの少女が住む世界。

——詩音、君は一体何者なんですか？

僕は近くにいた少女に話しかけた。

こうして近くに見てみるとますます香奈に似ている。

「私は、君の事覚えているよ」

詩音はそうつぶやいた。

僕にはいつている意味がわかりません。

——どういことですか？

「私は、君の眼だから、君が忘れても私は君を見守っている」

どうやら僕は昔に彼女にあっていたように聞こえます。
ですが、【記憶のかき回し^{メモリー・シャッフル}】のせいで思いだせない。

詩音はいきなり僕に抱きついてきた。

そのとき、僕は一気に頭痛が襲い掛かってきた。

「思い出して、私とのあの日のことを」

——僕は確かに、君と出会っていた。

僕は小さいころの記憶が一気に襲い掛かってきた。

「それさえわかれば、ソラ君はもうここに来なくっていい」

詩音は悲しく言った。

——大丈夫です。もうあの頃と同じ思いはさせません。

僕がそういったとき、僕と詩音の体は小さくなった。

小学3年生の姿だ。

僕と詩音は無言に指切りした。

——約束します。

「うん」

そのまま詩音は消えていった。

そして、残ったのは、血まみれの大人たちの中にいた小3の僕がいた。

これが、すべての始まり。

ソラはわれに戻った。

だが、雰囲気がいいつもと違った。

「ありがとう詩音」

そして、ソラの左目の瞳には黒眼がなく、完全に赤い。
眼の周りは赤いオーラが出ている。

——L V O・覚醒!!

ソラは両手を爆風に向けた。

「破壊と守り、2つの名を生み出す風の壁よ、その名を今こころで
名乗り上げる」

ソラの周りに赤い風が集まった。

「破壊します【破壊ノ竜巻^{ブレイク・ストーム}】！！」

ソラは竜巻を起こすことによつて爆風を上に乗せた。そして、ソラの赤い風は周りの建物を破壊しない。

「な、なんだあれは！！」

この異変に気づいた啓輔は叫びだした。

「【一方通行^{アクセラレータ}】」

ソラは爆弾に向かって風の道を作り出した。

「巻き込んでください、【風ノ爆弾^{エアロ・ボム}】」

小さな風の玉が高速の速さで啓輔の爆弾に向かった。

「おまえの風では俺の風は破壊できん」

「それはどうですかね」

空中に浮かびながら啓輔は叫んだ。

「何だと」

「僕のS.Iの名は【風ノ破壊者^{エアロ・ブレイカー}】」

ソラの爆弾が一気に風を巻き起こした。

「相手の風すらも破壊します！！」

そのとき、啓輔の爆弾が一気に破壊された。

「う、うそだろ」

そのとき、ソラは一気に上空に上がった。

そのまままわし蹴りを啓輔に当てた。

「くそ、立ったらお前の酸素の濃度を落としていやる」

そのとき、ソラは確かな息苦しさを感じた。

だが、覚醒している今のソラにとってはどうでもいいことである。

エアロ・ホルテックス
「【風ノ渦巻き】」

ソラの周りの風がソラを中心に広がった。

このことによってソラは自分にここ以外の酸素を送り込んでいるのだ。

簡単にいうと渦潮の原理を利用しているのだ。

「う、うそだろ」

啓輔は酸素の下げが効かないことがわかった。

「へ我、空気を集め、ここになにもかも破壊する塊を作成する力を放て」

啓輔は最期の一撃に長い詠唱を唱え始めた。

「へわが手に風の力を宿し、その思いの形となり、すべて破壊せよ」

「
ソラも最後に残った詠唱術を唱えた。

「エアリー・ファントム
【空気ノ大行進】！！」

大きな空気の塊がソラに襲い掛かってきた。
だが、ソラも詠唱を唱え終えた。

ソラの片手ずつに風が一気に包みこんだ。
そのまま、一気に空気の塊に突っ込んで行った。

「壊れろ、長門ソラ！！」
「すべてを破壊します」

ソラの手を包みこんだ風は大きな刃となり、空気の塊を切り裂いた。
そのままソラは啓輔に向かった。

「ここの餓鬼iiiiiiii！！」

ソラはその言葉を見殺して回転して啓輔を切り裂いた。
啓輔はそのまんま倒れた。

「おやすみなさい」

そのとき、香奈たちはソラの下に来た。

「ソラ君。その眼は！？」

香奈はまずその完全に赤い眼に対して聞いた。

「これが、僕の新しい力です」

そういった後、ソラはその場で倒れた。

第78章 終わり

第79章 剣・誘拐

「ソラ君!!」

香奈の声が聞こえてソラは自分のベットの上で目覚めた。
左目はいつもの状態になっている。

「僕は、一体？」

「それはこっちのせりふだソラ。いきなりぶっ倒れやがって」

ゆうが話をした。

ソラにとってもあの時は完全に倒れるときは無意識だった。

「でも、なんなS Iを倒すなんてね。私は驚いちゃった」

雫が言った。

「ソラさん体は大丈夫ですか？」

朱里が空に聞いてくる

その言葉とともにソラは起き上がった。

「大丈夫です……痛ッ!!」

そのとき、ソラの左目から赤い涙が流れた。
いや、これは血だ。

ソラはあわてて左目を隠した。

「ソラ君。その眼」

香奈が急いでソラに心配しながら言った。

「さっきの戦いだって左眼が変だった」

香奈の言葉にソラは無言になる。

「ソラ君？」

「覚醒」

ソラはボソツと言った。

「僕もよくわかりませんが、あの時、自分の口から覚醒といったま
した」

ソラは静かに口を開いた。

「ですが、なぜそうなったのか、僕にはよくわかりません」

空の言葉を聞いた後、香奈は急いでティッシュを用意してソラに渡した。

ソラはそのティッシュ受け取る。

「またソラ君に新たななぞが増えたね」

雪がかんがえながら言った。

ソラは申し訳なく笑った。

「だけど、本当に科学都市を奪うのは本当のことみたいね」

「それってどういうことですか？」

優菜の言葉にソラは聞いた。

「あのあと、星空さんがあの人に話を聞いたのです」

朱里の言葉にゆうはうなずく。

だが、あれは話を聞いたよりも拷問が正解だ。

「やっぱり、このままでは科学都市が危ないのは確かなようですね」
「でも、ソラ君がこの有様だったら私たちは」

優菜は心配しながら言った。

「大丈夫ですよ優菜。あなたたちは僕以上にS I使いとして最高値まで来ています」

ソラの言うとおりである。

ソラのS Iでは鍛えるのに限界が低すぎるのだ。

特訓の成果は【＋風】と【破壊ノ竜巻】^{ブレイク・ストーム}のみである。
それと比べて香奈たちの特訓はそれ以上の成果を出した。

「ですが、今日はソラさんは安静でお願いします」

朱里は人差し指を上に向けながら言った。

「ええ。そうさせてもらいます」

ソラは笑顔で言った。

そのあと、夜も近づいてきたので夕菜たちは自分の家に帰った。

「ソラ君。大丈夫？」

ソラの部屋に来た香奈が心配しながら言った。

「ええ。大丈夫です。今日はゆっくり休ませてもらいます」

左眼の流血が止まったソラは普通に本を読んでいた。

今回の戦いは意外と体のダメージは少なく済んだ。

だが、あのS Iは一撃でも当たれば相当な重傷になってしまうだろう。

ソラはそつと夜空を窓を通して見上げた。

次の日。

ソラたちは普通に登校した。

今日はテストがあるので午前中で終わる。

「長門、道長。テストどうだった？」

H R前、振動がソラたちに聞いてきた。

「僕はいつもどおりです」

「俺もいつ通りだぜ！！」

冷静に答えるソラに対して道長は歯を光らすように普段しないので

変な笑みになって親指を突きたてながら言った。

「同じ言葉でもこうも意味とうざ差が変わるもんだな」

進藤はため息をついた。

「ゆうちゃん。メールで泣いていた」

雪がソラに言ってきた。

「今回はテスト対策していませんでしたからね」

今までのテストは優菜は対策してきたが今回のみはあんなことがあったので対策をすることを本人すら忘れていた。

「ありやりやだね」

雪はまさに呆れたように格好をとった。

メールの内容から絶対に今机に顔を伏せているだろう。

「明日からまた普通の授業だね」

「そうですね」

雪はテストの出来がよかったのか、ニコニコしている。
そのとき、チャイムが鳴り始めた。

「え〜ではHRを始める」

同時に先生がそう言った。

HRが終わりみんな帰ろうとした。
もちろんソラたちもそうだ。

優菜が来たのを確認し、ソラがバックを持ったとき、いきなり大きい音が響き渡った。

「おい、ヘリコプターが来たぞ!!」

道長が外を見て叫んだ。

「へりってあーちゃんかな？」

「でも連絡はありません」

雪の言葉にソラは言い返した。
ソラたちも窓際へ来た。

そのとき、いきなり窓が開き始めた。

「見つけたよ。ソラ君」

そのとき、一人の女性が現れた。
この人はソラが一番よく知っている人だ。

「か、楓さん!？」

そう。

夏休みに出会った楓だった。
よく見るといつものメンバーが全員ヘリに乗っている。

「ほら、ソラ君早く乗って」
「の、乗ってて」

反論しようとしたとき、いきなり腕をつかまれて無理やりヘリに乗せられた。

ソラが乗った瞬間ヘリのドアが閉められた。

「先生、長門君が誘拐されました」

「「ソラ君!!」」

「ソン君!!」

3人の声は残念ながらソラには届かなかった。

第79章続く

第79章 剣・目的

ソラはヘリコプターの中に無理やり乗せられた。顔はただいまものすごくにらんでいる。

この状況で話もしないで納得するものはいない。

学校ではただいまトラブル中である。

「それで、僕はなぜにここに連れてこられたのですか？」

ソラはヘリに入れた張本人の楓に聞いた。

「うん。実はあるものの回収にソラ君の力が必要なのよ」

「あるものですか？」

「うん。そしてそれはソラ君にとっても悪い話じゃないわよ」

人差し指を上に向けながら楓は言った。

ソラは意味がわからなかった。

「私たちが発見したのはS.Iの力を持った剣なのよ」

そう言って楓は一枚の写真をソラに渡した。

しかし、ソラにとってその写真に写っている剣は少し変だった。

「これ、剣ではなくいわゆる刀ですよ。しかも鞘までもが錆がついています。とても抜刀できそうにもありませんね」

そうその剣、もとい刀は完全に全体的に錆びてしまっているのだ。

「でもね。私が言いたいののはそれじゃなくてその刀が前にソラ君にあつたみたいに強力なS Iの反応をしていたのよ」

その言葉を聴いたとき、ソラはあることを聞いた。

「楓さん。この刀の反応はいつからでしたか？」

「そうねえ。私たちが住んでいる近くの山に昨日反応したわ」

「昨日!？」

ソラはその言葉に反応した。

完全に矛盾が出来上がっているからだ。

「おかしいです。こんなに錆び付いているならば何年前にあるものですよ。それが昨日いきなりS Iの反応を始めたっておかしくないですか？」

ソラの言葉により、みんなそのことに気づき始めた。

「たしかに、それならもつと早く見つけていた。S Iの気配が大きいから山の外でも感じるほどの気配をいきなり出せえるはずがありません」

ソラの言葉を聴いて匠がわかったように言った。

「考えられること2つありますね。1つは誰かが持ってきたか、ですがそれだと持つてくるときにわかって島します」

「2つ目は何ですか？」

美咲の言葉にソラはうなずいた。

「2つ目は、いきなりそこからその状態でいきなり出てきたことです」

「何かの発作で、それとも誰かが仕組んだか。ですね。」

圭吾が意味がわかったらしく言ってきた。

誠吾いまだにわかっていない。

「ええ」

「でも、なんでさび付いているのですかね」

「そちらも理由は2つあるとおもいます。1つはもともとそういうものか」

「2つ目は適合者が来るのを待っているか」

いきなり声を出してきた美優の言葉にソラはうなずいた。

「適合者？」

茂がめがねをあげながら聞く。

「つまり、その刀を持つべき人のことです」

この会話に誠吾と御子はまったくついていけてなかった。

楓は生長している教え子ににこにこしながら見ていた。

「さあ、目的地はそろそろよ。今回の作戦はすべてソラ君に任せるわ」

「え！？僕ですか？」

いきなりの言葉にソラは聞き返した。

「そうよ。頼んだわよ。知将さん」

ウインクしながら楓はソラに言った。

「ええわかりました」

さっきのウインクを無視するようにソラは力強く言った。

「おい、この剣。本当に抜けるのか？」

体がものすごく太っている男が言った。
Tシャツからは完全にへそが出ている。

「それは刀だデブ」

すこしイケメンの男性が怒鳴った。

「そろそろ奴さんが来ますぜ。ひっひっひ」

体が細い怪しげな男性が男に言った。

「げっげ、まじかよ」

「びびるなデブが！！いいかお前ら、侵入者はいつか絶対にやってくる。気を引き締めるぞ！！」

男性はほかの2人に声をかけた。

ソラの作戦により、ある程度のチームが決まった。

まず、中に入って敵を困惑させるのが、匠、圭吾、茂の男子3人と楓だ。

外で出てきた人の撃退と中のサポートは美咲、御子、美優の女子全員だ。

そして、相手の隙を着いた隙に中に特攻するチームはソラと誠吾だ。今回ソラは「風ノ破壊者」の回数が完全に回復していない状況で相手する。

【風ノ破壊者】は1回使い切ってしまうと丸24時間でないと完全に直りはしない。

しかも覚醒をしてしまった分、さらに回復時間が必要となっている。いまの回復量は3分の2ぐらいだ。

一様半分は回復しているが、敵の力がどんなものか知らない。しかも今回はいつもの仲間はないの状況ソラはやりにくいだろう。

場所は山の中にある大きな山小屋。
ソラたちは草むらに各自隠れている。

「お前、足手まといになるなよ」

「誠吾、油断はしてはいけませんよ」

余裕を見せている誠吾にソラは強く言った。
誠吾はその後黙った。

ソラの格好は制服ではなく、白のTシャツと白のシャツを羽織っている。

ズボンはジーパンだ。

この服はヘリの中であつたものである。

「作戦、始めます」

美咲はそう言つて両手を前に出した。

「いきます、サイキック・ウェーブ【超自然的電波】」

美咲のS I、サイキック・ウェーブ【超自然的電波】が山小屋を包みこんだ。

「美優ちゃん。お願い」

「了解した」

美咲の言葉に美優は反応してうなずいた。

「発動、オペレーション【観察室】」

美優の周りに大きな画面がたくさん出てきた。

これは美優の世界系のファーストフェイス【第一型】のS I、オペレーション【観察室】だ。

「電波察知、連絡電波乗せます。同時に地図電波察知しました」

【オペレーション観察室】は一切攻撃的なことができないS Iである。

だが、S Iによってさまざまな支援をできることができる。

そのことによつていまはソラたちとの連絡、支持ができる。

さらにさっきの画面にはその山小屋の地図があり、確認することもできる。

しかもさまざまな電波を利用できるのだ。それがS Iだとしても。

そのため、残念ながら美優の今の力では範囲の拡大が制御されているので美咲のS Iの特別な電波を利用したのだ。

しかし、その分相手の動きが完全に把握できるようになった。

「確認完了、動いていいですよ」

「了解」

美優の言葉に違う場所で楓が返事した。

「さて、みんな、突入よ」

静かな声で男子たちにそう伝えた。

「さて、美咲ちゃん。頼んだわよ」

「はい」

通信越しで美咲は答えた。

そのあと、草がいきなり浮き出した。

「放ちます」

そのまま草はカッターのように山小屋のガラスを割り始めた。

「侵入者ですねひっひっひ」

ガラスの割れた音がこの場の全員に知れ渡った。

「よし、デブ。お前はガラスが割れたところに行け、たぶん敵がそこにいるはずだ」

そう言つて男はデブの男を蹴った。

「わ、わかつたよ」

デブ男はしぶしぶそこへ言つた。

「へえ。１人だけなのね」

「うそ、子供かよ、しかも女」

そのことにデブ男はおどろいた。

「子供だと安心していたら、大怪我するわよ」

御子はそのとき、少し笑つた。

第79章 終わり

第80章 刀争奪戦・デブチャラ

ガラスが割れた隙に楓たちは侵入することにした。

「頼んだわよ。圭吾」

「は、はい」

そう言つて圭吾は思いっきりガラスにパンチした。
そのとき、いきなり音もなくガラスが割れた。

「さあ、いくわよ」

楓の声とともに男子3人は中に入つていった。

とりあえずは、中をかく乱させてソラたちを中に入りやすくさせるのが作戦だ。

最初ソラは後輩にそんな無茶はさせたくないと思つたが、楓の子達を信じてほしいとの一言でソラの反発は終わった。

「おいおいおい。なんでここに女子供がいるんだよ」

楓たちが中に入るとそこには見た目も声もチャライ金髪の男がいた。

「だが、残念。これ以上は進ませねえ」

かっこいいのかわからない格好でチャラ男はそういった。

「じゃあ、ここは茂くん。任せたわよ」

「おれが、ですか？」

「そう。馬鹿には馬鹿に相手させるのがちょうどいいの」

さりげなく毒を吐いた楓だった。
もちろん茂は不服そうな顔になっている。

「わかった。俺がやる」

「じゃあ、頼んだわよ」

そう言つて茂をおいて楓たちは走り出した。

「逃がすかよ!!」

チャラ男が逃がさないといつて楓たちに手を出したその時だった。
いきなり何かがチャラ男の手をかすった。

チャラ男はあわてて振り向く。

そこには大きな弓矢を持った茂がいた。

これが茂のS I、アローコントロール【弓矢操作】だ。

実際の弓矢も生み出すことが可能なのだ。

「おまえの相手は俺だ」

そう言つて茂は矢を放った。

チャラ男は反応して避ける。

「仕方ねえな」

そう言つてチャラ男は懷からマイクを取り出した。

そのあと、いきなりマイクに向かって大声を出し始めた。

そのとき、何かの超音波が発生して窓ガラスを割り始めた。

床も木なので削れてきている。

「ちい！！」

茂はあわてて矢を放った。

だが、まるで目の前に壁があるみたいに跳ね返された。
そのあと、超音波は止まった。

「どうだあ！！これが俺のS I、
【音楽ノ音波】だ！！」
ミッドック・ラップ

大声を出しながらチャラ男は言った。

「そろそろ終わりにするか」

「くそつ！！」

茂は使われる前に矢を放った。
それも10本ぐらいは放った。

「無駄だ！！」

チャラ男はS Iを発動した。

「馬鹿が！！俺の勝ちだ！！」

声の超音波は茂を狙った。

「馬鹿はお前だ」

そのとき、さつき茂が放った矢がチャラ男の後ろから迫ってきた。

「なっ！！」

いきなりの出来事にチャラ男は手間取り、攻撃をやめた。
だが、もう遅い。

矢はチャラ男の背中に刺さった。

「き、貴様、どこから矢を放った」

「バーカ。そういえば俺のS.Iの名を覚えていなかったな、
【コントロール操作】だ。以後よろしく」
【アローコ弓矢

めがねを上げながら茂は言った。

弓矢の操作。

つまり自らはなった矢は自分自身で操作できるものとなっているのだ。

さっき音波で破壊されたガラスを利用してここまで通したのだ。

「馬鹿なのはお前のほうだ。任務完了」

倒れたチャラ男を茂は引きずり歩いた。

御子とデブ男は退治していた。

「かわいい女の子だな」

だが、デブ男ははあはあと言っていた。
ものすごくキモイ。

「な、なによこいつ」

さすがの御子も呆れていた。

「いいねえ、いいねえ。こんなかわいい子ならおじさん本気でやっちゃうよ」

そのとき、デブ男の背中からいきなり黒い足が8本出てきた。

「オクトパス【蛸足】。このかわいい子をつかまえちゃえ!!」

8本中、4本の足が御子を襲い掛かった。

だが、その中の1本が何かに撃たれたように怯んだ。

「いいわよこのロリコン。一生歩けなくさせてあげる」

御子の体から電気がはじき飛ぶ。

サンダー・キャノン完全に【電撃ノ砲台】を発動している。

「私の前に散りなさい!!」

一気に8本の足にめがけて電気を放った。

御子の【サンダー・キャノン電撃ノ砲台】と【エレクトロマスター電気ノ達人】の違いは前者のS Iは完全

に電気のみを使用するS Iであり、完全なる破壊系のS Iだ。

後者のS Iは電気以外にもその応用が使えるのだ。

ほかにも破壊以外の使用方法もある。

デブ男は足の盾を作り、攻撃を防いだ。

そのまま残った足で奇襲をしようとした。

「なめないでよね」

だが、御子は回りに電気の光線を放ち、一気にはじいた。

「そろそろくたばって!!」

さらには大きな一撃を放つために電気をため始めた。
見る見るその形は丸となりどんどん大きくなっていく。

「散りなさい!!」

しのあと、声とともにためた電機を一気に放った。

「こつちもなめるな!!」

デブは足をばねのように使って上空へあがった。
そのとき同時にこの攻撃を避けた。

「そんな攻撃になんか当たらないよ!!」

「だったら撃ち落す!!」

御子は上空にいるデブに向かって撃ち放った。
だがなぜ泳ぐようにデブは避ける。

「ちょっと、なにあれ!？」

御子はその完全に変な状態に驚いた。

「絶っつ対に撃ち落す!!」

御子は電気を乱発した。
だが、軽くしあわれている。

「御子ちゃん。そのままじゃあ体力が」

美咲が御子を心配して言った。

「心配ないわ。これぐらい。でも本当にウザイ!!」

御子は完全にイライラしていた。

「だったら私が落とす!!」

そう言つて美咲は葉っぱをコントロールして一気に発射した。
だが、またもや簡単に避けられる。

「でもなんであんなに上空にいられるのだろう」

美咲は考え始めた。

御子はそんなことも聞かずに乱射する。

「そうだ、ソラさんなら」

そう言つて美咲はソラに連絡した。

「それは蛸ではなく、感じが違う風で【オクトパス風足】ですね」

話を聞いたソラはすぐに答えを出した。

「だから飛行能力を持っているというわけですか」

凧という感じならこのことは考えられる。

「ですが、そう考えれば御子には不利です。美咲が相手するほうがいいでしょう」

「わたしが、はい！！がんばります！！」

そう言って美咲は連絡を切った。

「ソラさん、私やってみせます！！」

美咲は両手を前に出した。

「いきます、サイキック・ウェーブ【超自然的電波】！！」

そのとき、デブの周りに草が舞い始めた。

しかし、その草はなかなかその場を離れようとしない。
そのせいでデブの視界と動きを封じ込めた。

「ナイス、美咲」

御子は一気に大きな電気砲撃ち放った。

デブはまるで豚の丸焼きのようになって落ちてきた。

「ろ、ロリ最高」

そう言っただけでデブは気絶した。

「サイテーね」

呆れながら御子はそう言って、美咲は横で愛想笑いをしていた。

第80章 続く

第80章 刀争奪戦・取り付く蛇

楓たちは山小屋の中心部へ来ていた。

「さて、始めようとするわね」

楓は両手を地面に乗せた。

そのとき、一気に地震がおき始めた。

この地震は楓のS Iで起こさせたものだ。
こうして敵をかく乱する気である。

「さあ、大将は誰かしら」

楓がすこし笑いながら言った。

「見つけたぞ、侵入者だ！！」

そのとき、2人の男が声を上げた。
だが、楓たちは驚いてはいない。
このぐらいのことは予想の範囲だった。

「さあ、匠、圭吾。いきなさい！！」

「はい！！」

楓に言われて2人はその場を駆け足で離れた。
その場には楓しか残らなかった。

「いいのか？お前一人で」

男が残った楓に聞いた。

「問題ないわ。2人なんて楽なほうよ。3人くると思ってたし」

楓は笑いながら言った。

「なめてやがるな」

隣の男が怒りながら言った。

「そう思うなら実際やってみればわかるわよ」

「そうか。だったら死ね!!」

一人の男が楓に突っ込んできた。
だがそのとき、いきなりその男が一気に吹っ飛ばされた。
男は壁にぶつかる。

「貴様!!」

「さて、本気でいくわよ」

楓は手を男に向ける。

「吹っ飛んで!!」

さらにその男は壁ごと外に吹っ飛んだ。

「き、貴様の能力はまさか!!」

男は気づいたように言った。

「そう。私のS Iは【サイコキネシス念力】よ」

【サイコキネシス念力】は静止した物体を動かすなど、術者が念じるだけで事物に物理的效果を与える現象であり、楓はその使い手である。

セカンドフェイス
【第二型】の中でも上級レベルのS Iである。

「さあて、どんな風にやられたいかしら」
「残念だな。お前に俺たちは倒せない」

そのとき、楓の周りに大量の人間が囲んできた。
それも全員S I使いである。

「お前にはこの人数は倒せない」
「いいのよ。これが当初の目的だから」
「まだ言うか!!」

男たちはいつせいに楓に突っ込んでいった。
そのとき、楓は少し楽しそうな顔になった。

匠と圭吾は残りのS I使いを探し、足止めするために走り回っていた。

ソラたちはまだ最初の場所に隠れている。
だが、楓の力のおかげでもものすごい数のS Iが減ったのであとは上レベルのS I使いを残すのみとなった。

だがこちらの2人もあの中では上レベルの使い手である。

「圭吾。この壁を破壊して。隠し扉だ」
「はい」

匠の言葉に答えた後、圭吾はその壁を殴って壊した。
そのとき、その隠し扉には1人の男性がいた。

「見つけたぜ。お前らが侵入者か」
「匠さん。ここは僕が行きます」
「無視するな!!」

圭吾の言葉に男はツツコンだ。
その言葉を聞いた後、2人は見るからにいやな顔になった。

「まあいい。ここでお前らは終わる」
「じゃあ、圭吾。頼む」
「だから無視するな!!」

匠の言葉に男はさらにツツコむ。
だがその言葉は無視して匠は走り去った。

「まあいい。お前の能力は大体わかっている」

圭吾に指を刺しながら男は威張りながら言った。
だが圭吾はあわててはいなかった。

「それは関係ありません」

そのとき、襲い掛かってきたが、圭吾は冷静にそこに立っていた。

「死ねえ。【豪炎ノ魔人】！！」

ファイヤー・ウッズ

男の後ろから大きな炎の魔人が現れて圭介に向かって拳を振りかぶってきた。

圭吾はそのまま右手を前に出した。

「なめないでください」

その言葉を言ったとき、圭吾の右腕から2匹の白く小さい蛇が腕に巻き付いていた。

そのまま2匹の蛇は圭吾の腕からするする抜けていく。

「ミラージュ・スネーク
【鏡ノ蛇】」

蛇はそのまままさにあの魔人と同じ炎が出てきて圭吾の拳を巨大化した。

まるでそれはあの魔人と同じものだった。

「な、何だよそれは！！」

「これは、あなたと同じ力です」

そのまま圭吾は男の腹を思いっきり殴った。

男はそのまま後ろの壁にぶつかった。

「もう一撃行きます」

そしてさらに左手にも同じような拳になっていた。

そのままジャンプして男に向かって両拳を振りかぶった。

「くそっ！！【豪炎ノ魔人】！！」

ファイヤー・ウッズ

だが、魔人は男を自分の体を張って守った。
しかし、圭吾にはもう片手武器がある。

「食らってください!!」

圭吾は右手でさっき殴ったところを左手でもう一回殴った。

魔人の腹を貫通させた。

「な、何だと!？」

「あなたと同じ力ですよこれは。別に驚くことはありません」

圭吾のS I、ミリージュ・スネーク【鏡ノ蛇】は相手の見たS Iを自分のできる範囲でコピーできるS Iだ。

一様セカンドフェイス【第二型】だが、ファーストフェイス【第一型】のみしかコピーできない。
蛇の形にしているのはなにかに取り付くという意味がある。
普段は発動しているときのみしかコピーできない。

だが、あの蛇が取り付けば条件を満たしていれば発動もできる。

さっきまで壁を破壊していたのは匠のS Iのコピーである。
相手が監視をふまえてこの方法を使ったのである。

「くそお!!」

だがそんなことも知らない男は再びファイヤー・ウッズ【豪炎ノ魔人】を発動した。
このS Iは普通だったら上級のファーストフェイス【第一型】のS Iだが圭吾のS Iの前ではそれも意味がない。

圭吾も再びコピーして両腕に巨大な炎の手を生み出した。

「死ねえ!!」

実戦戦闘を経験している圭吾にとって操り人形の攻撃は簡単に避けられる。

圭吾はそのままさつきと同じく魔人の胴体を思いつきり殴った。さらにまた殴って貫通させた。

「ひいい!!」

さらにまた圭吾は貫通した魔人の中から男に向かって拳を振りかぶった。

「さようなら」

圭吾は思いつきり男を殴った。

自分の力だとはいえ破壊系のS Iの力を生身に受けたらひとたまりもない。

男はそのまま気絶した。

圭吾は一息してからまた先に進んだ。

第80章続く

第80章 刀争奪戦・接触

匠はいま美優のアドバイスにより、この中の大將がいると思われる部屋に来た。

だが、その前には4人ぐらいのS I使いがいた。

「ここまでだな餓鬼が」

男の中の1人がそう言った。

もちろん全員S I使いである。

匠は避けるだけでも苦戦していた。

「匠さん!!」

だがそこに圭吾が匠に追いついた。

「圭吾。ここに例のものがある」

「ええ。僕もその気配を感じます」

そう。その前の扉には剣の気配が完全にしていた。

だが、中に入るためには男たち4人を相手しなければならない。

「どうする圭吾？」

「何とか2人ぐらいには減らさないと中に騒ぎがあったら抑えられません」

匠と圭吾は小さな声で会話をした。

どうやらこの4人の中から2人は倒さなければならぬことになった。

「いくぞ!!」

そのとき、匠の手から青白い光が出てきた。

これこそが匠のS I、ファイターマスター【拳法ノ達人】だ。
ファーストフェイス

【第一型】の達人系のS Iだ。

文字通り、さまざまな拳法を繰り出すS Iである。

単純だが達人系の中では上レベルのS Iだ。

「いくぞ!!」

「はい!!」

匠と圭吾は男たちに向かってダッシュした。

そのとき、ソラたちはさっきまで例の場所に隠れていた。

「誠吾。準備はいいですか？」

「どうしたんだよ急に」

靴紐を強く縛っているソラに誠吾は聞き返す。

その言葉を聞いた後、ソラは誠吾に向かって微笑む。

「初陣ですよ誠吾」

ソラの言葉に反応した誠吾の目が輝く。

「ヨッシャー!!」で、どうやって中に入る？」

誠吾は喜んでいたが、やはり何も考えてはいなかった。

「ヒントです。この世で一番簡単で早く侵入する方法です」

ソラは微笑みながら言った。

その言葉に誠吾は反応した。

「いいのか？」

「ええ。思う存分やりましょう！！」

ソラはそう言った後、ガラスに手をおいた。

「破壊します。【エアロ・ブレイカー風ノ破壊者】」

ソラがそう言ったとき、窓ガラスが切り裂かれた。

「ヨッシャー！！」

その切り裂かれた窓からソラと誠吾は中に入った。

そこにはもちろんあの男がいた。

「き、貴様ら！！」

いきなりのご登場に大将と思われる男は驚いていた。

「観念しやがれ！！」

「こんにちは」

ソラたちは見事に奇襲に成功した。

「お前が、長門ソラか」

「ソラ。お前有名人か？」

男の言葉に誠吾はソラに聞いた。

「知らないのか？この男はなぞの左眼で俺たちSⅠ使いを倒してきたんだぞ」

「な、なぞの左眼？」

知らない言葉に誠吾は再びソラに目を向けた。

「もう。隠す必要はありませんね」

ソラがそうボソツと言ったとき、ソラは【スキル・アイ・リング超能力ノ眼・輪】を発動した。

その眼を見て誠吾は驚いていた。

「やはりか。だったら相手にとって不足はない！！」

「誠吾。君は刀のほうをお願いします」

ソラの少し重い言葉に誠吾は黙って刀を取りにいった。

「させるか餓鬼！！」

男は誠吾を捕まえようとした。

だが、ソラの【デジタル・ロープ電脳子ノ縄】に腕をつかまれた。

「あなたの相手は僕ですよ」

ソラの言葉に男は少し笑った。

「いいだろう。表を上げる【影ノ異物】」
シャドー・ジーン

そのとき、いきなり男の影が大きく広がった。

そのまま影から何体かの人間型の物体が出てきた。

「覚えとけ、俺の名は内海だ!!」
うちつみ

その言葉を言ったとき、影の物体がソラに迫ってきた。

ソラはその影から来た拳を次々に避ける。

だが、数が多いのですぐに囲まれてしまう。

「やれ!!」
デジタル・エアロベルト
「【電子ノ風帯】……」

ソラは風帯を放ちつつ体を回転した。

「……」
ウィップ
「【鞭】」

そのまま大きな鞭を作り出して周りの影を破壊した。

「そんなんじゃ俺には届かない」

また次々に影が現れた。

「【電子ノ風帯】・【棒】」
デジタル・エアロベルト
ロッド

次にソラは左手から大きな帯で作られた棒を作り出した。

そのまま次々に影をなぎ倒した。

だがやはり影の数はますます増えるばかりだ。

「お前のS Iでは俺には届かない!!」

「それはどうですか」

ソラはにやりと笑った。

——ここです!!

「アクセラレータ【一方通行】」

ソラは棒を捨てていつもの構えにした。

「今のやつは動けない!!やれ!!」

内海は影に指示をした。

だが、もう遅い。

「貫いてください、エアロ・ランス【風ノ槍】」

ソラは内海に向かって一直線に槍を放った。

高速の速さに内海は避けられない。

「なめるなよ。餓鬼」

だが内海は避けはしなかったが換わりに影の盾で防いでいた。

「あれが、ソラのS Iかよ」

感心しながら誠吾は刀に近づいた。

「この刀は取らせない」

だがそこに別の男が来た。

「チッ!!」

このことによつて2対2の戦いが始まつた。

第80章続く

第80章 刀争奪戦・幻想

匠と圭吾は4人のSI使いと交戦していた。だがいくらこの2人でも大人4人はきつい。

そのとき、ひとつの連絡が入った。

それはソラたちが侵入に成功したことだった。

「この状況で普通侵入するかよ!？」

「でも、それはソラさんに作戦があるということですよね」

「だが、このままでは俺たちがやばいぞ」

完全に2人は苦戦している。

壁際に追い詰められてしまったとき、いきなり壁が破壊された。そこからは我らがお師匠様、楓がいた。

「私の生徒に何やってるのかしら!!」

楓は男2人を思いつきり吹っ飛ばした。

「「楓さん!!」」

「さて、後はあの2人の仕事ぶりを見ようかしらね」

そう言つて3人は例の場所に向かった。

ソラは大群の影化け物に苦戦していた。

（どうやらこのS Iは僕との合性が最悪らしいですね）

このままではソラの【エアロ・ブレイカー風ノ破壊者】の回数が0になってしまう。
あのS Iに対抗するには今までの戦法は通じない。

——ならば、方法はただひとつです！！

ソラは軽く息を吐いた。

「巻き起こせ【エアロ・ボルテックス風ノ渦巻き】」

ソラを中心に渦巻状に風が吹き荒れた。
衝撃に影は地面から離れたことにより消えていった。

「どうやらあなたのS Iは地面から、影から離れると消えるみたいですね」

ソラは理解して言った。

「それがどうしたというんだー！！」

「だったら話は早いのですよ」

ソラは両手の手のひらを音を立ててくつつけた。
それが合図だったかのように風はさらに強くなっていく。

「あなたごと吹っ飛ばせていただきます」

下から風がおき始めた。

そのまま内海は上に飛んだ。

ソラはそれと同時にジャンプした。

巻き起こっている風を利用して、ために大きくジャンプをすることができた。

そのままソラは縦に回ってかかと落しを食らわせた。

内海はそのまま地面に叩きつけられた。

「誠吾!!」

ソラはいやな予感がして誠吾の名を呼んだ。

そのとき、いきなり誠吾がドアを破壊して出てきた。見ているように吹っ飛ばされたように見える。

「せ、誠吾!!」

「……ここは？」

ソラの言葉をまるで聴いていないように誠吾は答えた。そして誠吾の目はなんだか苦しそうだっ

「誠吾？」

ソラは誠吾に別のS I反応を感じた。

「おやおや。まさか別のやつが現れたか」

そのとき、男がいきなり現れた。

ソラはこのS I反応が今の誠吾と同じ反応を感じた。

「あなたですか。呪いのS Iですか？」

「それはかかってからわかる」

そのとき、男はカードみたいなのを投げてきた。
もちろんソラはよける。

「そんな危ないものに触る人は相当いませんよ」
「それもそうか」

男は意味不明に笑った。

「なんでわらっていられるのですか？」
「簡単なことだ」

男はそう言ってさっき投げたカードを持ってソラに向かってきた。
ソラは後ろに下がって避ける。

「吹っ飛んでください!!」

ソラは大きくジャンプして後ろに下がった後、咆哮の風を発動した。

「風か。めんどくさい能力だな」

男はそう言ってジャンプしてからカードを投げた。
ソラは次々に避ける。

「そこだ!!」

男は狙いが決まったように言ってカードを投げ出した。
ソラは横に避ける。
だが、これが男の狙いだった。

「ヴッ」

ソラはいきなり目がくらつとなった。
だがこれは相手のS Iのものだすぐにわかった。

「なんですか。あのカードには触っていないはず」
「少年。足元を見てごらん」

男にそういわれてソラは足元を見た。
ソラの足にはあのカードを踏んでいた。

「まさか!!」
「そのまさかさ」

——踏んだカードにも同じ効果が!!

ソラの周りにはたくさんカードがばら撒かれていた。
今までの攻撃はこのための下ごしらえだった。
そしてあの攻撃はソラにわざと避けさせるものだった。

「そんな」
「さて、夢を見る、ファントム【幻想】」

ソラの目は完全に黒くなった。
同時にソラの眼には不思議な光景が見えた。

「お前にとっての人生の悪夢を見せてやる」

ソラは頭の中から最悪の映像が流れ込んできた。

それは自分の以外全部血まみれの映像だった。
そこらへんに見たことある人の体が見える。
まるで、死んだように。

「あああああああ！！！」

ソラは叫んだ。

ファントム セカンドフェイス
【幻想】は【第二型】のSⅠで相手に幻想を見せるものである。
いくらかからだが強くても一回かかってしまったらこの悪夢から逃
れるものはいない。

「いやだ」

そのとき、ソラはそうボソツと言い出した。

「こんな夢、幻想。僕は見たくありません！！！」

同時にソラの左眼が赤く光りだした。

「こんなこと、現実も夢も、僕がさせません！！！」

ソラの左眼がいつもの眼に変化した。

右眼は変わっていなく黒いままだが今のソラには幻想なんて効か
ない。

「な、なんだその左眼は」

スキル・アイ
ソラの左眼、【超能力ノ眼】、【LⅤ1・多機能ノ眼】の一つの夢
破壊。

これは自分の夢や幻想を見させない能力である。

そのためにソラは寝るときに夢などは見ない。
だが、詩音に合うのは別だ。

しかし、それが相手のS Iだろうが幻術や、眼をごまかすための力は通用しない。

「お、俺のS Iが通用しないだと!!」

「さあ、誠吾を元に戻させてもらいます。【一方通行】」
アクセラレータ

ソラは構えてS Iを発動した。

「く、くるな!!」

「もう遅いです」

ソラは【一方通行】アクセラレータに乗って、光の速さで近づいた。
近づいた瞬間、思いつきり腹を蹴った。

この速さ、行きよいでの蹴りに絶えられるはずも無い。
男はそのまま倒れた。

「これで、終わりましたね」

ソラがそうつぶやいたとき、いきなり地面から針が出てきた。

「逃がさねえぞ餓鬼」

そこに、内海が現れた。

「さあ、第二ラウンドだ」

第80章 続く

第80章 刀争奪戦・第一抜刀

ソラの目の前にはさっき倒したはずの男、内海が立っていた。

「俺のS Iはあんな程度ではねえぞ」

その言葉が威嚇でも、負け惜しみでもないことがソラは左眼を見てよくわかった。

内海のS Iの力が完全にさっきよりも増幅しているのだ。

「いいですよ。仲間を守るために、僕はあなたを完全に破壊します」
「勝負だ、長門ソラ！！」

内海はそういいながら影の軍隊をまた出してきた。
さっきとは違うのは武器を持っているのだ。

（やっぱり、さっきとはぜんぜん違います）

ソラは後ろに向かって走った。
なるべく距離を離す気である。

「行きます、
アクセラレータ【一方通行】」

ソラはなるべく離れてから
アクセラレータ【一方通行】を発動した。

「貫きます、
エアロ・ランス【風ノ槍】」

ソラの槍が影軍団を破壊する。
だが、数はなかなか減らない。

「やはりこの方法が一番いいですか」

ソラはすばやく、【デジタル・エアロベルト電脳子ノ風帯】、【ステッキ棒】を発動した。
持った後、そのまま軍団に突っ込んだ。

このままではソラのS Iの数がやばくなる。
それを防ぐために体術で対抗するしかない。

「どうやらそこまでしてS I使いたくないのだな」

その言葉とともに内海は少し笑った。

ソラはさっきとはまるで違う影の軍団に苦戦していた。
武器を持ったのか、戦法をいちいち変えてくるので手のつけようが
無い。

だが、ソラにも作戦があった。

ソラはむやみに突っ込むように見えていたが狙いは部屋の中心部に
あった。

「そろそろですかね」

ソラはそう言って風の力を使って高くジャンプした。
ジャンプして狙った場所は天井の蛍光灯だ。

ここは山小屋ということなので一般的な少し古い形の蛍光灯だ。
ソラは思いっきり蹴ってその蛍光灯を落とした。

蛍光灯はそのまま地面に落ちた。
部屋の中が一気に暗くなった。
そのせいで影軍団は消えていく。

「あなたのS Iの対抗策の2つ目です。これでもうS Iは使えないはずですよ」

「それはどうかな」

内海はまたにやりと笑った。

そのとき、ソラの右側からいきなり黒い巨大な棘が飛び出してきた。
ソラはなんとか避けることができた。

だが、いきなりさつきとは違う方向に黒い巨大な球体がソラに思いつきりぶつかった。

ソラはそのまま壁にぶつかった。

外からの日の光で影でこつちまで攻撃してきたのだ。
小屋の壁が壊れたので光が部屋の中に入ってくる

行き良いがよかったか、壁も少し破壊した。

ソラは頭から血が出てきた状態で立ち上がった。

「なるほど、タフだな」

「それはどうも」

「だが、この相手はきつそうだな」

ソラの目の前には剣を持ったたくさんの影軍団がいた。

「抵抗の隙など与えるな」

内海の言葉がスイッチだったように、影軍団は動き出した。

ソラは抵抗の隙など無く、攻撃を避け続ける。
だが、さすがに数には勝てず、次々に体に切り裂かれた傷が出てくる。

「ほらほら、どうした長門ソラ!？」

そのとき、内海の目の前から黒い球体が発射された。

影軍団を引きながらもそのスピードは衰えず、ソラにそのままぶつかった。

ソラはまた壁にぶつかった。

「あ、あそこってたしか」

内海はソラに吹っ飛ばしたところを思い出した。

ソラはあちこちから血を出していた。

傷が大きく痛む。

「俺が勝負だ」

そのとき、内海の前に誠吾が現れた。

「だめです誠吾!!」

だが、誠吾はソラの声を聞かない。

「この俺がお前を倒してやる」

「子供のうわごとか」

「俺は中学生だ!!」

内海の眼は完全に興味が無い目になっていた。
ソラはその目を見て危ないと判断した。

「誠吾、逃げてください!!」

「え!?!」

だが、気づいたときにはもう遅い。

誠吾は黒い手に思いつき叩かれた。

誠吾はそのまま吹っ飛んで外に出てしまう。

「誠吾!!」

「さあ、あのじゃまなやつはほつといて勝負の続きといこうか」

完全に誠吾のことはどうでもいい言葉にソラは怒った。

「ふざけないでください!!」
「輪が守りし風の壁よいまこそ撒き散らせ」

ソラは詠唱術を唱えた。

「いいだろう、
」影で作り出すわが美術作品よ、
今こそその姿を現せ」

内海も詠唱術を唱え始めた。

「ストーム【竜巻】!!」

「シャドーアート【影の美術作品】!!」

ソラの前に巨大な竜巻が現れ、内海の周りには巨大な影の城が出てきていた。

巨大な城にソラの竜巻は破壊できなかった。

「……そんな」

「まだまだ終わりじゃないわが生み出す影の騎士を、今こそその勇士ごと復元せよ!!」

内海はさらに詠唱術を唱えた。

これは復元術。

内海の後ろから巨大な騎士が出てきた。

その大きさはやまごやをの天井を破壊するほどだ。

「死ね!! 長門ソラ!!」

騎士は一気に剣を落としてきた。

大きな音が鳴り響いた。

ソラはぎりぎりS.Iで移動して避けたが、衝撃のせいでさらに傷が増えていた。

「避けたか。だがこれで終わりだ。長門ソラ」

そのとき、いきなり巨大騎士の足が浮き出した。

「大丈夫ソラ君!？」

そこには楓がいた。

今の攻撃は楓によるものだった。
隣にはほかのメンバーもいる。

「邪魔をするな」

そう言って騎士を楓たちに仕向けた。

「お前なんか俺一人で十分だ」

そう言っただけで内海はソラに近づいた。

ソラは立つことができたがただ後ろに下がるだけだった。
そのとき、ソラは何かが足に当たった。

それは例の刀だった。

ソラは刀を持った。

その行動は自分の意思ではなかった。

「死ね。長門ソラ」

内海は何体かの影軍団を作り出した。

「僕は、まだ死ねません！！」

そのとき、ソラが握っていた刀が赤く光りだした。
そのままどんどん錆が取れていった。

形は普通の刀よりもち手のところと鞘にガードがついており、デザインは赤と白でカッコいいデザインになっている。

「な、なんでその刀を」

ソラはその刀を持って構えた。
そのまま一息ついた。

「行きます」

ソラの眼はさっきよりも凛々しくなっている。

「破壊と守り、2つの名を生み出す風の壁よ……」
「させるか!!」

ソラは詠唱術を唱えようとしたがやはり内海は止めようとする。

「させるか!!」

そのとき、誠吾が何体かの影軍隊を蹴った。

「なんかよくわからんけど、邪魔はさせねえ」
「チッ!!」

「……その名を今ここで名乗り上げろ」

その間にソラは詠唱を唱え終わった。

「破壊します、ファイレイク・ストーム【破壊ノ竜巻】」

さらに大きな竜巻が影軍団を弾き飛ばした。

「っ、この餓鬼!!」

内海は影で剣を作り出した。

同時にソラは刀のもち手を握った。

「死ねえ!!」

「第一抜刀術……」

2人はともに振り合った。

だが、ソラはぶつかる瞬間、一步後ろに下がった。

「なっ!!」

「【無刀】むとう」

一瞬の隙にソラは刀を鞘から抜き、そのまま内海を斬った。

第80章続く

第80章 刀争奪戦・第一抜刀（後書き）

すみません。話数を間違えてしまいました。
もう直しましたのでこれから応援お願いいたします。

第80章 刀争奪戦・一週間

内海はその場で倒れた。

ソラは持っていた刀を鞘に戻した。

「ソラ。お前」

誠吾に呼ばれるのと同時にソラは自分が持っている刀を見た。

「この刀は、僕の力」

ソラは頭から出てきた言葉を言った。

「名を、はるかぜ春風」

その刀はまさにソラ専用みたいに赤と白で彩っている。

「まさか、刀がソラ君を選んだ。そういうこと？」

「いいえ。まるで、昔から僕を待っていた。そんな感じがします」

みんなゆっくりソラが持っている刀、春風を見た。

「とりあえず、こいつらは倒せたけど、また1つなぞが増えたわね」

楓が頭を描きながらそう言った。

「すみません」

「まあ、いいけど。それよりソラ君。君はまた特訓しなければなら
ない見たいね」

顔を暗くするソラに楓は笑顔で指を指した。

ソラはそれを聞いて静かにうなずいた。

「そうと決まったら早速行動。ソラ君には一週間学校を休んでもらうわ」

「い、一週間ですか」

いきなりことなのでソラは少し声を上げた。

だが、これぐらいの時間が必要なのは本人も知っている。

「その刀。まず刀を振るのが初心者の方は最低でこのぐらいが必要なのよ」

まるで刀を振ったことがあるような言い方で楓は言った。

ソラは静かにうなずいた。

「いいですよ。僕たちには時間がありませんから」

「ふん。僕たちね」

少しにやけながら楓は言い返した。

ソラはそのことに気づいていない。

「すべてお話します。この科学都市でまさに起きようとしていることを」

ソラは真剣に言った。

あれから香奈はリビングで携帯を見ていた。
理由はソラからのメールが来たからだ。

内容は一週間休みます。

あとは楓たちが協力してくれることだった。

香奈は安心して優しく息を吐く。

「お兄ちゃん。大丈夫みたいね」

その姿を見てあさみが香奈に話しかけた。

「うん。でも一週間、学校にも来ないって。家にも帰らないみたい」

香奈は残念そうに言った。

「ねえ。香奈お姉ちゃんはソラお兄ちゃんのこと、好きなの？」

あさみのこの言葉を聴いた香奈の顔はいきなり赤くなった。

「ななな、何？いきなり!？」

完全に香奈は動揺していた。

顔はさらに赤くなる。

「お姉ちゃん、顔赤いよ!!」

「き、気にしないで」

香奈は顔を思いつきり振る。

そして一回息を吐いて落ち着く。

「いきなりどうしたの？あさみちゃん」

「うん。なんでもない。わかつちゃったから」

あさみは笑顔で言った。

たしかにこのことを聞かれて赤くなるということは好意があるといつてもいいだろう。

そのことに気づかないのはソラぐらいの鈍感さんぐらいだ。

「でも、いきなり休むって、なにかあったのかな？」

あさみは気を取り直して話題を戻す。

「確かにそうよね。でも、ソラ君がいないとき、ここを守るのは私たちだけよ」

「うん」

2人はともに微笑んだ。

次の日。

ソラは学校に来なかった。

優菜、雪もこのことを知っていた。

ソラはたぶん全員にメールを送ったのだろう。

「なんか視線を感じるわね」

雪がそうつぶやいた。

実際、男子生徒がたくさん見ているからだろう。

美女3人が集まっているところを男子が見逃すはずは無い。
今まではソラがいたので女子たちはそのことを気にしてはいなかったのだ。

「ソラ君がいないとこう変わるものなのね」

優菜がしみじみと言った。

確かに、いつもいるものがないと新しく見えるものもある。

「ねえ。今日、みんなで大聖堂に行かない？今日4時間までだし」

雪が2人に提案してきた。

「いいですね」

「そうね。朱里ちゃんと星空君も呼んでね」

完全にゆうはボディガードである。

「うん。そうしようか」

そしてさっき言っていたメンバーで大聖堂に来た。
あいからわずここは人が盛んな場所である。

「ソラさんの分までがんばりましょう!!」

朱里が元気よく言った。

「そうだな。俺はソラの代わりにお前らを守るしかねえな」

もし、セカンドフェイス【第二型】のSⅠ使いが現れたら対抗できるのは同じゆづのみだろう。

もちろんゆづも夏休み中は特訓してきた。

「しかし、ここは本当に魔獣の出現率が高いのか」

「はい。なんどこで出会ったのでしょうか」

「まあ、いい特訓だったけど」

朱里と優菜はここでよく魔獣を探していたらしい。
そのときだった。

歩いていたとき、横の壁がいきなり砂になっていった。

「みづつけた。見かけないSⅠ使い」

体が大きそうな男が現れてそう言ってきた。

「しかも男は一人だけか。ハーレムかよこのやろっ」

男は少し笑いながら言った。

「だれだ。お前」

「おうおう。俺の名はひとまず巳沢みざわと名乗っておこうか」

巳沢は腕組をしながら答えた。

「さあ、SⅠ勝負だお前ら！ー」

そして完全に挑発的にそう言った。

「いいだろう」

ゆうは剣を出した。

「かかって来い!!」

そして全員構えた。

第80章終わり

第81章 体力回復

ゆうたちは戦闘の構えをした。

だが、なんか相手のほうは余裕そうな表情だった。

「女が3人。男が1人か。まあいいハンデだろ」

巳沢はさっきからこうやって上から目線だった。

ゆうはその態度が気に入らなかった。

「まあ、この最強の俺にハンデなど関係ないがな」

——ピキッ!!

「ふざけるな!!」

そう叫んでゆうは巳沢に向かってダッシュした。

「おう、威勢がいいな小僧」

巳沢がそう言ったとき、いきなりゆうが通る道がいきなり砂と化した。

ゆうはどんどん吞まれていく。

「なめるな、破空斬!!」

ゆうは斬撃の衝撃でそこから抜け出した。
そのままさっきいた場所に戻った。

「なんだ。お前の能力は」

「ふふ。いいだろう。教えてやろう」

自信満々に巳沢はしゃべった。

「俺のSⅠは【砂の変化を持つ者】サンド・ザ・チェンジ！！あらゆるものを砂に変えることができる！！」

この言葉と能力により、【セカンドフェイス第二型】のSⅠだとわかった。
さらに巳沢は言葉を続ける。

「残念ながら、生き物は砂に変えることはできない。だがコンクリートなどなんかは簡単に砂に変えられる！！」

聞いただけで完全にめんどくさい能力だとわかる。
だが、ゆうは少し笑った。

「なんだ。お前の能力はそれ程度か。だったら話は簡単だ」

ゆうはそう言ってみんなに下がれのジェスチャーをした。
みんなそれにしたがって後ろに下がった。

「行くぜ！！斬空剣！！」

ゆうは空間の斬撃を放った。

巳沢はいきなり地面からめり込んだように下に下がった。

「何だ？」

良く見ると巳沢は足元には普通のコンクリートだが、周りは砂だら

けだった。

どうやら砂の沈みを利用して避けたらしい。

「お前も来い！！」

そう言つてゆうの足元も砂に変えた。

「断る！！我に従う空間の玉よ、黒を持って悪を征せ」

「詠唱術！？」

「こんなタイミングに！？」

朱里たちが驚くのも無理は無い。

織が言うには詠唱術は確かに体力を多く利用する。

だが、その戦いでS I自体を使いまくれば体が馴れて詠唱んぼ時の消費体力を抑えられるのだ。

なのでこんな早いタイミングでは詠唱術は大きく体力を消費すると考えていい。

だが、ゆうは発動した。

「スペシャル・デスボール
【黒球ノ青空間】！！」

剣を地面に突き刺して大きな黒と青の3つの球体が砂を払った。
いや、正確には砂を吸い込んでいると考えてもいい。

「なんだよ、その技は、俺に教えろ！！」

「上から目線の野郎に教える技などねえ！！」

「餓鬼が！！」

さらに巳沢は大きく地面を砂に変えた。
これではゆうの足場が無い。

ボール
「球」

だがゆうは剣のもち手の先から自分と同じぐらいの大きさの球体を
生み出してそこに乗った。

「これで、俺には足場は関係ない」
「くそっ!!」

巳沢はなんと砂を手の形にしてゆうに向かわせた。
ゆうは同時に何個か球体を浮かばせて乗り移って移動し始めた。

砂の手に近づいたとき、ゆうの剣、スペシャル・ソード【空間ノ剣】の刃はさらに青く
光大きくなった。

「はああああ!!」

ゆうはそのまんまその手を切り裂いた。

「へ我に従う空間の玉よ、黒を持って悪を征せ」

さらに詠唱を唱えた。

このとき、ほかの攻撃に集中しているときの詠唱術はさらに体力を
消費する。

だが、ゆうはお構いなしだ。

「散れ!!」スペシャル・デスボール【黒球ノ青空間】!!」

黒と青のでかい3つの球体が巳沢を襲った。

ゆうはそのとき、一瞬の隙を突いて巳沢が立っていた足場にたった。

「まだ終わりじゃない。へ空間をゆがみ、わが意思に従え」

さらにゆうは今日3回目の詠唱を唱えた。

「ビジョンスホール【幻想空間】！！」

ゆうの前に青い影が円の形になって巳沢の足元に来た。

そのとき、巳沢の目には空間がゆがんだ光景を見てしまった。

この技は全体に影響する。幻想術である。

幻想術といってもこれ以外の幻想は見えない。

さらには仲間にもこの術はかかる。

そのためにさつき香奈たちを後ろに下がらせた。

「これで、お前はS Iを扱いにくくなる」

「な、なめるな餓鬼が！！」

そのとき、一気に砂が噴水のように吹き荒れた。

ゆうはその場から離れた。

ビジョンスホール【幻想空間】は術者本人もその中に入っていないければ効果が無くなる。

そのために巳沢がかかった幻術が解けてしまった。

「死ねえええええ！！」

そのまま砂はゆうを飲み込んだ。

「星空さん!!」

そのとき、朱里の電撃の光線がゆうが包まれている砂を攻撃した。
ゆうは砂の中から出てきた。

「た、助かった」

「ゆー。あんなに詠唱術撃って大丈夫」

「ああ。大丈夫だ」

雪の質問にゆうは平然と答えた。

「でも、あんなに連発したら」

香奈も心配して言った。

「ああ。それは大丈夫だ。俺の【達人ノ眼】^{マスター・アイ}の能力、体力高速回復があるからな」

みんなその言葉に驚いた。

ゆうはあの夏休み、【達人ノ眼】^{マスター・アイ}の能力を自分で解明したのだ。

体力高速回復は文字通り、体力の回復が並みの人よりもすごく早い。
そのおかげで詠唱術を連発できるのだ。

「そう言うことだ。おっと。そろそろ奴さんがくる」

ゆうはまた自分の球体の上に載った。
砂の波がまた迫ってきた。

「へ我に従う空間の玉よ、黒を持って悪を征せ！！」

ゆうはまた詠唱術を唱えた。

「スペシャル・デスボール
【黒球ノ青空間】！！」

3つの黒と青の球体が砂の波を止める。

「これで終わりだ！！へ空間を従い、破壊する力よ、刃の形となり破壊せよ！！」

ゆうはさっきまでとは違う詠唱を唱えた。

「切れる！！」

スペシャル・ソード

【空間ノ剣】の刃が巨大化した。
同時に大きな青い光を放っている。

ゆうはその剣を下に振りおとした。

「てんざんけん
【大剣・天斬剣】！！」

砂の波は一気に2つに切られた。

もちろん、その場にいた巳沢も無事ではなかった。

巳沢のS Iの効果が無くなったとき、巳沢の姿はもう無かった。

「な、何でいないのですか？」

「たぶん。S Iが切れるときに自分の砂に飲み込まれたんだろ。今はたぶん。このコンクリートの中だ」

ゆうはぶつきらぼうに言った。

女子たちはその行動に少し衝撃が走った。

「聞こえるなら聞いておけ。人を上から見るのはやめろ!!!人はみな平等だ!!!それがわからないやつは生きる資格は無い!!!」

ゆうはそう言ってからS.Iを解いた。

「お前が違う性格だったら、もっと違う戦いだっただろ」

そう言ってゆうは歩き出した。

香奈たちはそんなゆうを追った。

第81章終わり

第82章 海の旅路

ある日、科学都市がある東京から離れて海と智美は埼玉に来ていた。場所は結構田舎の場所だ。

この前も言ったかもしれないが、こういう古風な場所ほどいい情報が手に入る。

「しかし、あいからわず情報は無いわね」

「仕方が無い。SIとはそういうものだ」

智美の言葉に海は反応して答える。

実は海たちはいままで何の情報も無くいろんなところにきていたのだ。

そんな場所を探すだけでも結構骨が折れる。

「しかし、ここは人が少ない。結構あるかもしれないな」

「そうね。早速聞いてみましょうか」

今回かいたちが来ている場所は人口密度はものすごく少なく、高年齢の人が多い。

ちなみに会話は女である智実の役目である。

必要なときだけ、海も会話に加わる。

智実は情報を得るために会話を続ける。

話しかけているのは全員高年齢の人のみだ。

若い人には歴史に疎いかもしれないかもだからだ。

「そうですか。ありがとうございます」

いい情報が入ったのか、智実はさっきよりもふかぶかにお辞儀をした。

「いいじゃよ。それより、あの子はお前さんの彼氏かの？」

「かかかか、彼氏！？」

いや、確かにこの2人は恋人同士である。

だが、智実はものすごく顔を赤くしている。

「そそそ、そうですが、そう簡単に言われると恥ずかしいです」

そいつってもう一回お辞儀をしてから海がいるところに向かった。しかし、顔が赤いままだ。

智実は顔を振って顔が赤いのを消そうとした。

「どうだった？」

「は、はい」

「ん？」

智実の変な返答に海は疑問を持つ。

「まあいい。情報はどうだった」

「あ、うん。ここに一番高い山に変な言い伝えがあるらしいのよ」

「近くの山？」

海は周りを見回した。

だが海はいやな予感がものすごくした。

「智実、一番近い山はどれだ？」

「たぶん、三つ子山だど」

智実が指差したのはこの田舎町の一番あるらしい横に三つ並んでいる山を指差した。

その山は結構高く、同じ高さで一つの山となっている。

「ちなみに秘密は頂上にあるらしい」

「どこだよ頂上は」

これは簡単に三つの山を頂上まで上って確かめることしかできない。

「さらに言うと、めったに人が上らないので道や階段はないらしい」
「カオスだな。ってか、どこかのギャグ漫画かよ、この展開」

海は呆れながら言った。

だが、方法はそれしかない。

「ちなみにこの情報は違う人にも話したらしいわよ。しかも今日」

その言葉に海は反応した。

このとき海は最悪のことを考えてしまった。
海はいきなり智実の手を握った。

「いくぞ、智実！！」

「う、うん」

いきなり手を握られて智実は驚いた。

だが、海はそんなことは関係ない。

それは急がなければならぬ理由がある。

それはもしかしたらさつき智実が言っていた人がS I使いなら何されるかわからないからだ。

「いくぞ」

「うん」

海たちは何とか一つ目の頂上へ来た。

普段旅をしているこの二人はこの山に登る大量は有り余るほどある。

「ここには無いな」

「そうね」

「次ぎ行くぞ」

そのとき、いきなり熊の姿をした魔獣がいきなり出てきた。
そしてなぜか怒っており、その怒りは海たちに向けられていた。

「いきなり魔獣のご登場か」

魔獣は大きなつめを生やした手を海に向かって振ってきた。
海はこの状況に馴れているのか、冷静だった。

「……
ウェイク・ムーン
【朧月夜】」

海は朧月夜を出して一気に魔獣の手を切り裂いた。
そのまま海は高くジャンプした。
そして、朧月夜を振り上げた。

「さよならだ!!」

朧月夜を回転しながら一気に魔獣の体を切り裂いた。
魔獣は灰となり消えていった。

「やはり、魔獣がいるな」

「それってもしかしたら」

「ああ。ある」

海は確信したように言った。

海たちは三つ目の頂上へきていた。
だが、そこには先客がいた。

「よう。お前らか」

長身の男だが、海と智実の記憶にはこの人は始めて合う人だ。
だが、確信は一つある。

それは、ここにいる以上、彼はS I使いだということだ。

「お前らもここにいるってことは、S I使いか」

「そっいうお前もか？」

海は聞き返した。

「ああ。そうだ。俺はあるやつらに科学都市を手に入れるための作戦を実行するために来た」

これで確定だった。

海は一気に殺意を男に向けた。

「お前もそうじゃないのか？」

男は笑いながら言った。

「ふざけるな！！」

海は大声で怒鳴った。

海の声には確かな怒りがこもっていた。

「これ以上、俺の大切なものは亡くさせねえ！！」

海はそう言いつつ、朧月夜を手を持った。

「な、何だよお前、マジであの科学都市が大切なの？ウケルね！！」

この言葉により、海の怒りは爆発した。

海はものすごいスピードで男に迫った。

「おつとあぶねえ」

だが、男は避ける。

海は続けて振り回すが、これも避けられる。

「怒りが出し向いているやつの攻撃を避けられるわけねえだろ。しかし、怒るとは本当のことか、マジウケル！！」

男は笑いながらいった。

海の朧月夜の刃の光がさらに増した。

「……………」

海は小さい声で何かを言った。

「え、何だって？」

男はうごく、わざとらしく耳を傾けた。

「あいつを殺すぞ、ウェイク・ムーン【朧月夜】」

海の目は本物の怒りに包まれていた。

朧月夜は海の感情に反応しているのか、光がどんどん増していく。

海はそのまま上に向けて振り回した。

「何がわからんけど、殺されるのはお前だね！！」

「エアロ・シユート【術式・風の吸い込み】」

海の後ろにいた智実が技名を言ったあと、男は風に押されているように海に近寄った。

海はにやりと笑った。

「手がしねえ、月夜に踊れ、げっごうらんぶ【月光乱舞】」

緑色に輝いた海は一気に男の体を切り裂いた。
男はそのまま倒れた。

「海くんあれ」

智実が何かを見つけたように指差した。

「……これは」

第82章 終わり

第83章 前

香奈たちは学校の休み時間に集まっていた。

あれから三日たったが、ソラからの連絡は無い。

「ソラ君。どんな特訓しているのかな？」

優菜がそうつぶやいた。

「でも、ソラ君にS Iのコントロールをさせた人たちと一緒にいるらしいですよ」

香奈が優菜の問いに答えた。

「ソラ君はまた強くなって帰ってきます」

「そうよね」

「私も信じているよ」

3人はお互いに微笑み会った。

あれから香奈たちの前に何人もののS I使いが現れた。

もちろん香奈たちはゆうの活躍で切り抜けてきた。

ほとんどが【ファーストフェイス第一型】の使い手だったので連戦でも何とか戦いきれたのだ。

だが、こんなにS I使いと出くわすことはまったく無かったことだ。これは戦争が近づいてきている証拠でもあるかもしれない。

「やっぱりカーちゃんもゆうちゃんも戦いの準備しているの？」

「私は緊急時のために非常食の用意を始めてます」

香奈は遭難かなんかする気であるのか。

「真面目ね。そういう雪ちゃんはしているの？」

「私は持ち運びやすい水の入れ物を集めているよ」

その言葉聴いた瞬間、優菜は窓を見た。

雪はその行動が何を示しているのかをわかった。

「ゆーちゃん。今から雨が降るかと思っていない」

「ギクッ！！」

優菜のところからいかにも古い発音が聞こえた。

「「「……………」」」

いつもより長い無言の10秒。

「ちょっと、ゆーちゃん！！どどういう意味！！」

「えっ、なに？」

「いやいや、「ギクッ！！」って、思いっきり聞こえたから！！」

雪は腕をグルグル回して叩きながら説教した。

だが、ここまで言われる雪っていったい。

香奈は2人の談笑を微笑みながら見ていた。

もしかしたらソラがいなかったらこんな楽しい会話もできなかったかもしれない。

星道高校。

今は授業と授業の合間の休み時間だ。

ゆうは廊下を歩いていると偶然朱里とであった。

「よう」

「あ、星空さん」

朱里は笑顔でゆうの下に来る。

「どうだ、体調は？」

「はい。大丈夫です。ソラさんががんばっているので、私もそれぐらいのことでへばったりできません」

両拳を握ってがんばるというポーズを朱里はした。

そんな朱里を見て、ゆうは少し笑顔がこぼれる。

「あ、あのさ。倉田」

「なんですか？」

ゆうは意を決して朱里のいま自分が言いたいことを言おうとした。

「あら、朱里ちゃんに星空君」

そのとき、いきなり通りがかった雫に話しかけられて決心が崩れた。いかにも怪しいゆうに雫は何かを察した。

「ごめんね。なんか邪魔しちゃったかしら。ごめんなさいね。2人の間を邪魔しちゃって」

まるでそこらのおばちゃんみたいに雫は言った。
だが、もう言おうとする決心は今は完全に崩れていた。

「も、もういいです」

先輩の雫にはゆうも敬語を使う。
だが、ゆうの顔はなんだか赤かった。

「あらあら、何を言おうとしたのかしら」
「う、うるさい。俺はもういく!!」

そう言ってゆうはその場からはなれた。

「どうしたのでしょうか星空さん」
「どっちもどっちな」

雫は心の中で少しため息を付いた。

海と智実^{ちみ}は歩いて科学都市に向かっていた。
いつもこの2人は大抵は歩きだ。
だが、今回は少しあせっているので電車に乗りうとしたが、今いる
のは完全にド田舎である。

「か、海くん」

「な、何もいうな智実!!」

海は急いで智実の言葉を防いだ。
智実^{ちみ}は微笑みながら呆れた。

しかし、これは海が方向音痴というわけではない。

さつきから向かっている先が田舎ばかりでなかなか駅が見えない。見えたとしても、科学都市行きに行けそうな場所にいける電車が無いのだ。

「しかし、海くんの情報網に無いということは本当にここどこだろう」

「このままでは戦争が始まってしまう」

あれから海は何かものすごい情報を入手したのかいつもよりあせっていた。

「でも、香奈ちゃんがメールで送ってくれて知ったのだけど、ソラくんは今は誰も知らない場所で特訓してるみたいだよ」

「そうか。どおりで連絡がつか……」

何かを言おうとしたとき、海は言葉を止めた。そして、携帯を出した智実をそつと見た。

「お前のほうは、つながるのかよ」

そのことに気づいた海は智実に言った。

しかし、この2人は携帯持っていたのか。どこで充電しているのかはいまだに不明である。

竜司も海と同じく科学都市に向かっていた。
セラと歩美も一緒にいた。

「本当にあいつらに手を貸すのか」

「なんだ？セラは不満なのか？」

竜司の言葉を聴いたセラは静かに笑った。
それを見ている歩美も同じく微笑んでいる。

「不満なんか無い」

「それは結構なことだ」

「でも、なんでいきなり大星なの？普通なら大聖堂のほうにいくと思ったのだけど」

歩美は竜司に聞いた。

「理由は簡単だ。あいつらは大星を最期に落とそうとくる。」

「つまり、そこが最終決戦だと？」

セラは納得していった。

だが、問題はこれ以上がある。

「問題は少年がそのことに納得してくれるかだ」

「納得？」

「あの少年の性格からして、この作戦は気に入らないだろう」

そう。大星が最終決戦場所になるなら、ほかの地域はまったく防衛線を張らないことになる。

ソラの性格からしてそのことに納得してくれない確率が高い。

「この戦争。簡単に言えば科学都市争奪戦だ」

そして、日は経った。

科学都市から少し離れた場所。ここがソラたちが今特訓しているところだ。

「ちょっとみんな集まって」

楓の一言で全員集まる。

そのとき、楓はある一枚の服を見せた。

「みんなよくがんばったわね。これは私からの贈り物よ」

だがその服はある漫画で見たノースリーブのオレンジ色のドラゴ。

ボールの主人公が着ていた服とまったく同じだ。

違う場所は楓という文字が大きく書かれていた。

『いない（いません）』

一蹴だった。

完全にパクリのものはさすがにみな着たくは無い。

「さて、そろそろ行きましょうか」

そう言ってソラは長細い黒いバット入れ見ないなものを肩で背よった。

「みんなを必ず守りにー!!」

新学期・準備編
第83章 終わり

特章・簡単キャラ図鑑

今回は人気投票に向けてのキャラ図鑑を発表します。

・ながと長門ソラ

主人公。

赤の達人マスター・アイノ眼を持つ者。

真面目な性格でものすごく恋愛には鈍感。

人を殺すのもっとも嫌がっており、だが仲間を守るためには誰よりも強い戦士になる。

戦闘時には持っているリストバンドと蹴りを多様に使っていく。脚力はすごいが、腕力は女子の平均以下。

一人暮らしで家事が大の得意。

SIは風ノ破壊者。エアロ・ブレイカー

あおきかな
蒼希香奈

ヒロインの一人。

途中から出てきたが、ソラともっとも近い場所にいる人物。ソラに好意を持っている。

ものすごくやさしい少女で、人を傷つくことを嫌っている。

家事は大の得意。

運動は普通だが、体力はものすごくある。

SIは癒ノ保護者。ホーリー・ガーディアン

おおきゆうな
大木優菜

ヒロインの一人。

やけどののろいにかかっていたときにソラに出会い救われる。ソラに好意を持っている。

頭はよくないほうだが、運動神経はいいほう。

戦闘時は棒術も使う。

SIは線ノ盾 ライン・シールド

ふゆのゆき

冬野雪

ヒロインの一人

自分のSIを狙われていたときにソラに救ってもらった少女。
ソラに好意を持っている。

帰国女子で、気軽な性格だが、頭はいいほう。

水鉄砲をバツクによくいれている。

芸術の才能はまったくもってない。

ウォーター・アイス
SIは水十氷。

くらたあかり

倉田朱里

ヒロインの一人

知らない力に悩まされていたときにソラに出会い救ってもらった。
ソラに好意を持っている。

真面目な性格でいかにもお嬢様。

本当に大金持ちで移動のときは本当に役に立っている。

最近では武器の本をよく読んでいる。

サンダー・ウェポン
SIは電撃ノ銃装備

まじべしずく

窓辺雫

ヒロインの一人

間違った道をソラに正せてもらい、本当の家族に合わせてもらった。
実はソラに好意を持っていたりする。

本人も結構鈍感でレンジの好意にはまったく気づいていない。

最初は敵だったがソラの説得で仲間になり、以後、SIの経験者で
あり先輩ということでたくさんの戦闘で活躍している。

アクアトロムスター
SIは水ノ達人

そがえんじ
祖父江蓮時

みんなレンジと呼んでいる。

雫に好意を持っており、ひそかにしているつもりだが、周りにはバレバレである。

気づいていないのは雫とソラのみ。

兄貴肌で精神的面で活躍してくれる。

ほかにも力仕事のとくにも役に立ってくれる。

SIは鉄ノ変化
イロン・コンバーカー

長門あさみ

ソラの義理の妹になった少女。

元は無意識にソラの敵となっていたが、親が死んだことによりソラに引き取られた。

ソラに好意を持っている。

親のSIの後遺症が残っており、すきに力を解放できるようになっている。

おいかわかい
及川海

サブ主人公。

マスター・アイ
緑の達人ノ眼を持つもの。

旅をしているために戦闘経験は豊富。

SIのことを調べているためにそのことに詳しい・

智実に好意を持っており、付き合っている。

ぶっきらぼうのようで実は冷静なタイプ。

ウェイク・ムーン
SIは朧月夜

みやべともみ
宮部智実

海と付き合っている少女。

もちろん海に好意を持っている。

海のことをもつとも理解しており、一緒に旅をしてきた。

マジック・ステッキ
S Iは魔法ノ杖

ほしぞら
星空ゆう

サブ主人公
青の達人ノ眼マスター・アイを持つもの。

性格的には主人公タイプの少年。

何事にも一直線で向き合える心を持っている。
朱里に好意を持っている。

実は頭は結構良い。

スベイシャル・ソード
S Iは空間ノ剣

とりあえずは主要人物は書き残しました。
人気投票は後書きで詳しく見てください。

特章・簡単キャラ図鑑（後書き）

こんにちは、kuxuです。

今回は大発表を行います。

題して、キャラクター&SI人気投票です!!。

まずはキャラクター部門では、今まで出てきたキャラを投票させてもらいます。

1人3人まで投票が可能です。

SI部門では、同じくいままで出てきたSIの投票です。
こつちも1人3つまで投票できます。

なお、ソラの超能力ノ眼はSIではないので投票しないでください。

締め切りは9月27日です。

たくさんのご投票お待ちしております。

<http://enq-maker.com/aFkPR7J>

第84章 作戦事項

ソラが楓にさらわれて5日後。

星光高校では普通に授業をしていた。

放課後になり、香奈たちは星道高校のメンバーが来るのを待っていた。

集まったら今日は商店街へ向かっていた。

商店街にきて、電気屋のテレビからありえない情報が香奈たちの耳に入ってきた。

『ニュースです。今日の2時ごろに流星集が何者かに襲撃されました』

「しゅ、襲撃!?!」

「そ、そんな。これってまさか」

香奈たち全員同じことを思っていた。

これは完全にSI使用による襲撃である。

彼らもとうとう本格的に科学都市を襲ってきたのである。

『死人もけが人も多数居り、住民は避難してます』

「無差別に殺しにきているのかよ」

「あの、美穂さんたちは大丈夫なのでしょうか」

そう。朱里が言ったとおり流星集には美穂と炎治が住んでいる場所である。

彼らはもしかして対抗して大怪我を負ってしまったのか、それとも

もつと最悪の状況になってしまったかもしれない。

テレビからは残酷な風景になっている流星集が映っている。
これを見てしまったらもう最悪的な想像しかできない。

「私たちも早く流星集に行きましょうか」

「その必要は無い」

香奈たちが一斉に流星集に行こうと決意したとき、後ろから誰かが
声をかけてきた。

その声はものすごく聞きなれた声だった。

「りゅ、竜司さん。それにセラさんに歩美さん」

そこには頼もしい仲間の竜司たちがいた。

「俺たちだけじゃないぜ。お嬢さん」

竜司がそう言ったとき、後ろから誰かが現れた。

「み、美穂さん!!」

そこには美穂と炎治がいた。

みんな一斉に美穂のところに駆けつけた。

炎治のところには誰も来なかった。

「先輩方、お久しぶりです」

美穂は微笑みながら言った。

炎治も同じことがいいたいそうにしていた。

「襲撃になる前にあらかじめ彼らを流星集から離れさせた。まあ、ああなるとは俺もおもってもいなかったがな」

どうやら運がよかったらしい。

竜司は仲間を一齐に一箇所に集めようとしていただけだがタイミングがちょうどズレて彼らを襲撃にあつことは無かった。

「さて、ここからが本題だ」

「それならばソラ君の家で話をしましょう」

香奈の提案にみんなうなずいた。

「おい」

「は、はい」

長門家に向かっている途中、セラが香奈に話しかけてきた。
いきなりのことで香奈は驚いた。

「お前、たくましくなったな」

「は、はあ」

だが、セラの口からは完全にはめ言葉と思われる言葉が出た。
香奈はそれを聞いてキョトンとしてしまった。

「始めてあつたみたいに戦いに恐れが無い。いいことだ」

「はあ。でも、今でも戦いは怖いです」

「なに？」

香奈は勇気を出して自分の思っていることを言った。
次は逆にセラが驚いている。

「でも、怖くなければ戦えません。仲間が、ソラ君とみんなが傷ついたり、いなくなるほうがもっと怖いです」

「私にはそれはわからない」

香奈の言葉にセラは首を振った。

香奈の気持ちは弱者しかわからない言葉であろう。
なにが怖い。だけど、それ以上怖いものがある。
以上の怖さを見ないために怖いものに耐える。
だからセラにはたくましく見えたのだろう。

「譲ちゃんの言い分は正しいな。怖いものを知っているからいえる言葉だ」

途中、竜司が声をかけてきた。

「お前たちはそれを戦って知った。だから、強くなれたのだろう」

微笑みながら竜司はみんなに言った。

だが、そのとき香奈は少し悲しそうな顔になった。

「どうしたの？ かーちゃん？」

「ソラ君は、もっと怖いものを知っているような気がします。怖く絶望の闇を見たような気がします」

香奈の言葉にみんな黙る。

たしかに今までのソラはまるで自分はどうなってもいいという戦い方だ。

昔ならSⅠ使いに恐れなく戦ってきた。

それは自分が死ぬよりも恐ろしいものを見たような。

「そう言っても少年本人がいらないと意味が無い。それよりも今はもっと最悪な状況を直す必要があるのだからな」

竜司に言われてみんなうなづく。

気づけはもう長門家についていた。

香奈は家の鍵を空ける。

ドアを開けるとあさみが玄関にやってきた。

「おねえちゃん。お帰りなさい」

「ただいまです」

香奈が入ってきたと同時にみんな玄関へ入っていく。

リビングに着いたら竜司が話を始めた。

みんな自由に座っている。

「さて、今はもっとも最悪な状況になっている。見たとおりに例のやつらが科学都市を本格的に攻め込んできた」

「私たちの予想では、ほとんどのSⅠ使いがその人たちの仲間だと考えて良いでしょう」

竜司の言葉を歩美がつなげる。

この言葉ではつきりしたのは、相手はものすごい数のSⅠ使いと考えても良いだろう。

「本当に立った少人数で相手できるのでしょうか」

「それでだ。無駄にいろんなところに言って戦力を分散するよりも、陣地を張るほうが良いだろうと俺は考えた」

朱里の言葉に竜司は答えるように言った。

たださえ少人数なら一箇所に集まったほうが勝率が上がる。

「もちろん場所はここ、大星だ。俺の読みだここに襲ってくるのが一番最後だと予想する」

「なんで？」

「学生が多いからだ」

「そのことに対しては俺が説明するッス」

そのとき、いきなりベランダのドアから識が声をかけてきた。

その言葉を聞いたとき、優菜と雪は立ち上がっていきなりドアを閉め始めた。

識は門前払いされた。

「ちょっと、何でッスか？いきなり」

「不法侵入」

まるで虫を見るような目で優菜と雪は同時に言った。

だが、一番ツツコむところはなぜに玄関から入らないところだった。

結局識は玄関から入ってきた。

「それで、なんで学生が多いといいのですか？」

切り替えが早いのか、マイペースなのかわからないが香奈は識に改

めて聞いた。

「それはSⅠに関係することで、SⅠは身体に影響するもので年によつてSⅠの調子も違うツス」

「調子ですか？」

朱里の言葉に識はうなずいた。

「SⅠにとって一番使いこせる年はちょうど高校生ぐらいツス。それ以上若くつても超えてもだめツス」

そう考えれば今までの成長の早さ、戦闘の勝率はうなずける。今までは大人の相手が多かった。

ちなみにこの前ソラが相手した啓輔は高3である。それならばソラにあそこまで追い込ませることができる。

「つまり、学生が多いここ大星は強力なSⅠ使いが多いかも知れませんがせんし」

「しかも、相手にとって陣地が多いほうが戦いやすくなるっということか」

朱里とゆうが理解していった。

「ここ大星は半分ぐらいが学生ですからね」

香奈も話しに納得した。

だが、問題の点が一つある。

「ですがそれってほかの地域は捨てると同じ意味ですよね」

「まあ、そうなってしまうな」

だが、背に腹は変えられない。

一番状況がいい方法でたたくしかない。

「少年がこの話に納得してくれるといいのだが、まあいい。ここは俺たちが実行すればいい話だ」

みんな同時にうなずいた。

かくしてソラが帰ってこないまま、作戦は決まった。

次の日。

さらに最悪のニュースが香奈たちの耳から入ってきた。

それはまた科学都市の一つの町げっかんとうちょう月館当町が襲撃された。

月館当町は月に対しての研究が広く、これまで今までの人を月まで運ばせていった。

科学や研究もそれぐらい発達している。

実際、ソラの父親もその研究所もそこに訪れたことがある。

そしてもう1つの町が襲われた。

そつげんせいちよう草原星長せいと言って、自然に対しての研究が進んでいることだ。

さらに科学都市以外にもこの研究は進んでおり、科学都市の中でも一番外への交流が多い町だ。

だが、香奈たちはまだ動こうとはしない。

ソラが戻ってくるのは明日。

あと残っている科学都市の中の有名な町は2つ。
それは大星と大聖堂だ。

大聖堂は一番の町と言える町であるたくさんの人の息抜き場所になっている。

大きさもほかの町とは断然違う。

大星は一番の学生の町である。

だが、それとは裏腹に一番の物事に対しての研究も進んでいる。
その科学を一番に発達させた人物の名は長門祐樹。
苗字でわかるようにソラの実の父である。

「もう、大きい町はあとひとつですね」

そのニュースを見ていた朱里はそう言った。

ニュースではもう大聖堂の住人の避難の声をかけている。

大星の方では学校での避難が始まっている。

もちろん、香奈たちはその場所には行かない。

「みんな避難しましたでしょうか」

「大丈夫だろ。ここの科学は名のとおり発達している。それに考えてみる、あいつらにはそれぐらいしかやることがない」

香奈のつぶやきにゆうが答えた。

香奈はそれを聞いて無言でうなづく。

「それに、ソン君が戻ってきてくれたらこつちも何とかできるよ」

「この調子だと、明日には大聖堂は落ちるな」

雪の言葉のあとに竜司が後付する。

もちろん大聖堂への襲撃も見逃すことになる。

だが、時間がない分、それに周りの残酷的な状況に香奈たちは少し
ぎこちなくなっている。

まるで友達と喧嘩をしたように。

力があるものはすべて敵になってしまったと言ってもいいだろう。
それに一番問題なのは誰が黒幕なのか。

ソラにもその情報は一切ない。

それどころか。知らない情報しかなかった。

知っているのは科学都市を襲ってきている。それだけである。

目的も何も知らない。

何がしたいのか、何を目指しているのか。

謎は考える分、大きくなっている。

「力か、栄光か、独占か。どれだって大きな迷惑しかない」

竜司はそう行ってテレビの電源を消す。

たしかに、何が目的だろうが、その行動は迷惑なだけである。

次の日。

とうとう大聖堂にたくさんのS.I使いが押ししかかってきた。
しかも、人数も相当多い。

その光景を見ている少年たちはその場にいた。

「さて、初陣です」

そこにはソラを先頭にした中学生軍団がいた。

第84章 終わり

第85章 大聖堂の戦い・登場

明らかに相当な数と実力者のS I使いがいる中、ソラたちはいた。

ソラの格好は白と赤のTシャツに黒と赤の半袖の服を羽織っている。そして、右肩には野球バットを入れるような入れ物を肩にかけている。

「さて、みんな。作戦はさっき伝えたとおりね」

楓の言葉にみんなうなづく。

そのあと、一気にバラバラにみんな動き出した。

ソラは敵が多いそうな場所に行った。
ほかのS I使いたちもやる気である。

ソラは走った後、すぐに急ブレーキをかけて止まった。
そのあと、体を横にして構えだした。

「これ以上は好き勝手にさせません。【アクセラレータ一方通行】」

ソラの前に風の道が作られた。

そして、右手には風が次々に集まっていた。

「貫け、【エアロ・ランス風ノ槍】」

一気に風の槍が次々に光速の速さで相手に向かっていく。
だが、途中にいきなり風の力が弱まっていった。

「風か、俺にとっては食い物だ」

デス・イーター
「【食い意地】ですか。それなら」

ソラは一気に走って向かった。

男も迎え撃つ氣でいる。

デジタル・エアロベルト
「【電子ノ風帯】」

ソラは小さく作られた帯を片手で握った。

「噛みつくしてください。」ファング
「【牙】」

ソラが手を開いたとき、大きな帯で作られた牙が男に向かって放たれた。

その迫力に男は黙ってしまった。

そして牙は一気に男の体を思いつきり挟みだした。

男はその間で氣絶してしまった。

「次ぎ、行きますよ」

「なら、俺が相手だ!!」

ソラがそう言ったとき、また新たに違う男がソラの前に立った。
しかし、ソラはものすごく邪魔そうな顔をした。

デジタル・エアロベルト
「【電子ノ風帯】」

ソラの左腕に次々に帯が巻かれていく。
そのままソラは相手に左腕を向けた。

「打ち打て【鞭】」ウィップ

鞭が一気に放たれるとき、男の腹に思いっきり放たれた。だが、男は何が起こったことすらわからないのか、ものすごく無事な顔をしていた。

「効かないな」

「それはどうですかね」

鞭はそのまま男の後ろにいき、いきなり曲がりだした。これはソラの風的能力で操作したものだ。

そのまま鞭は男の顔面に思いっきり横から叩いた。男はそのまま横に倒れる。

どうやら、頑丈なのは体のみで、顔はそうできないみたいだ。

だが、油断はまだできない。

一人の男がソラにナイフを持って迫ってきた。

「死ね!!」

「そうはさせるか!! スーパージャンプキック!!」

そのとき、男は思いっきり吹っ飛んでしまった。

けた犯人はその場にいた誠吾だった。

「さて、まだまだこい!!」

そういつて誠吾は猛スピードで男たちに迫った。

そのあと、思いっきり地面を踏んで高く飛び上がった。

「必殺!! スーパーローリングジャンプキック!!」

そう言つて体を回しつつ、次々に男たちの顔面を蹴っていく。
だが、男たちもそれだけで怯んではいられない。

「この餓鬼が！！」

「誠吾！！」

男の声よりも、ソラの声が耳に入つたのか、誠吾はその場から離れた。

「いいタイミングです。誠吾」

そこにはすでに【アクセラレータ一步通行】を発動しているソラがいた。
右手には大きく風が集まつていた。

「打ち放て、エアロ・ライフ【風ノ弾】」

大きな風の弾が男たちの目の前に急に現れた。
そのとき、風の弾はすぐに割れて、風の波状攻撃が男たちに迫ってきた。

その攻撃で男たちはどんどん倒れていく。

「誠吾！！」

「よっしゃー次行くぜ！！」

同時に、匠と御子も次々に相手をなぎ払っていく。
匠は一人ひとり次々に急所をあてて気絶していく中、御子の場合は次々に相手を黒焦げにしていく。

「さて、次の獲物は誰かしら」

「お前、殺したりしてないよね」

さすがにこうなつてはそのことが心配になつていく。

「大丈夫よ。そんなことしたらこの馬鹿共と一緒になっちゃうじゃない」

御子は少し笑いながらそう言った。

その言葉に匠はうなずいた。

人は殺さない。

これが彼らが決めたルールだ。

殺してしまったら彼らと同じ、それでは戦う意味がなくなるのだ。

今回は科学都市を守るためにも戦うが、あいつらと同じ戦い肩はしたくないのだ。

だが、それは人間、動物ならの話だ。

相手の中には何体かアンドロイドが紛れ込んでいる。

そのためにこの大人数になつているのだろう。

科学都市ではアンドロイドの製作も行っているために、そのことも可能になつている。

「さあ、痺れ焦げなさい!!」

御子の体からものすごい電気が発射された。

次々に男たちは倒れていく。

その頃、大星ではそのことを記したニュースがやっていた。
内容は大聖堂での戦闘のことだ。

いままでは誰も戦おうとしなかったが今回はソラたちが戦っている
ことでの話題になっている。

そのニュースを香奈たちは見てしまった。
そして、思ったとおり、全員絶句していた。

「こつれてソラ君だよね」

香奈がそれを見てつぶやいた。

「ソン君。やっぱり戦っている」

「はあ、まったく。かいからわず人の作戦を破壊するのが得意なやつだな」

竜司がそういつて自分の頭をかく。
その行動に香奈たちも微笑み会う。

「さて、どうする」

「どうするって？」

「これから、ソラに加勢するか、それともここに残るか」

「私は、行きます」

竜司の言葉の後、すぐに香奈は竜司に言った。

「私、ソラ君と一緒に戦います。私では、そんなに力になれるかわかりませんが、せめて怪我をした人に癒しを渡したいです」
「そうか」

そのとき、竜司はすぐに次の言葉を言った。

「全員、行くぞ！！俺たちも少年に加勢する」

全員その言葉で笑顔になった。

「行くぞ！！」

『はい！！！！』

第85章続く

第85章 大聖堂の戦い・登場（後書き）

人気投票開催中です。

<http://enq-maker.com/aFkPR7J>

第85章 大聖堂の戦い・抜刀術

ソラたちはどんどん敵を倒していく中、大聖堂の中心にある、一つの神殿がある。

その中に一人の男が大きな椅子に座っており、隣には男が2人立っている。

「さて、長門ソラはやっぱり来たか」

座っている男が戦闘の映像を見て言った。

どうやらこの男がこの軍団を仕切っているようだ。

「はやり、長門ソラは危険人物というのは真実でしょう。暫時さま

暫時さんじといわれる男の隣にいる男が言った。

「さあ、この男の実力を試してみようか」

暫時は不適に笑った。

同時に横の2人も不適に笑った。

まるで、ソラを侮辱しているような。

ソラたちは相変わらず敵と退治していた。

ただ人数が多いだけで実力は大したことは無い。

「さて、ここは占領できましたね」

匠が一息ついて言った。

隣にはたくさんの屍になったS I使いとアンドロイドの山があった。

「ソラさんは大丈夫ですかね？まあ、心配なのは誠吾のほうだな」

「まあ、いいのじゃないの？」

楓が笑いながら言った。

匠もそのことでうなずいた。

そのころソラたちはいまだにアンドロイド軍団に囲まれていた。だが、疲れていた様子はない。

「さて、次はだれですか？」

ここでもアンドロイドの死体の山が作られていた。

ソラは額の汗を拭いた。

「ソラ、ここは俺たちの任務範囲は占領したのじゃねえか？」

「そうですね」

ソラは【スキル・アイ・リング超能力ノ眼・輪】を発動して天眼であたりを見渡した。どうやらここら辺の敵は片付いたようだ。

「僕らはみんなの場所に帰りましょうか」

「そうだな」

「そんなつれないことを言うなよ」

そのとき、ソラたちの後ろから渋い声が聞こえた。そこには確かに大きな体をした男がいた。

「すこし、相手してくれよ長門ソラ」

「あなたもここの場所やこの人を殺そうとしたのですか？」

ソラの目が厳しくなった。

そのめをみて男は不適に笑った。

「いい眼をしてやがるな。面白そうだ」

「僕は、楽しんではいられません」

ソラは肩に背負っていた野球バットの入れ物を手につけた。

そのままチャックを開けて、包帯でぐるぐる巻きにされている刀を手を取った。

「相手しますよ」

ソラの眼が強く赤く光った。

「勝負だ！！長門ソラ」

男は拳を握って鳴らした。

その音は力強さを表していた。

「俺の名は豪道重治だ！！」
「ゴウドウヘイジ」

後ろにあげた重治の腕がいきなり大きくなった。

これが彼のS Iだ。

「俺のS Iは【パワー・ポイント力ノ強化】だ。見たとおり力を挙げるS Iだ！！」
「そうですか」

重治は思いつきり拳を振った。
ソラはバックステップで避ける。

そして、重治が次々に攻撃を繰り返してくる中、ソラは次々に避ける。

だが、さすがにも瓦礫が多いここで最後まで避けられるのは難しい。
ソラは早速瓦礫の壁にたどり着いてしまつて身動きが取れなくなつてしまった。

「さあ、もう避けられねえぜ!!」

「それはどうですかね？」

ソラは力強く足を踏み込んだ。
そのまま高くジャンプをした。

風の力を足元に集中することで高く飛び上がることができる。

「僕も、本気でいきますよ」

ソラは持っていた刀の包帯を解き始めた。

「破壊しますよ。春風」

そう言いながらソラは右手で刀のもち手を、左手で鞘を持った。
これだけ聞けばごく普通の持ち方だが、違うのはソラは刀を丸ごと
背中後ろに持ったのだ。

「第5抜刀術」

ソラはそのままの状態で鞘から刀を抜いた。
そのまま一気に振り下げた。

「じゅうほうはけん【豪砲破剣】」

まるで巨人が刀を振り落としたかのように強大な剣波が重治を襲った。

「なめるな！！」パワー・ポイント【力ノ強化】足！！」

重治は足に力を集中させて足をばねのようにして思いっきり地面を蹴ってソラの技を避けた。

だが、ソラの刀は思いっきり巨大な切り裂いた後を残した。

「やはり、力を足に集中させても速さはほどほどですか」

ソラは地面に着地してからわかったように言った。

春風はもう鞘に収められている。

「それがどうした？俺に早さなど関係ない」

「教えてあげますよ。速さの前に、力など無意味なことを」

ソラは腰を低くし春風を構えた。

足はドンと構えているが、体は少し前かがみになっている。

「死ね！！長門ソラ！！」

「破壊します」

重治は叫びながらソラに力強く迫った。

パワーポイント【力ノ強化】を再び手に発動した。

逆にソラはまるで力を抜いているみたいだった。

それをあらわしているようにゆっくりと息を吐いた。

「第3抜刀術」

その瞬間、ソラは一瞬でその場から消えた。
だが、消えた瞬間も一瞬だった。

ソラはすぐに重治の後ろに現れた。

さっきと違うのは刀をすでに収めようとしていたことだ。

逆に、重治はそのまま止まってしまった。

「【竜行破刀】」 りゅうこうはだち

ソラがその言葉を言って刀を納め終わったとき、まるでアニメのように重治の体から一気に切り裂かれたように血が吹き上がった。

「な、なんだよ。そ、その速さは」

倒れながら重治はそうつぶやいた。

「言いましたよ。速さを前に、力など無意味だということを」

ソラはそのまま重治を背にして歩き出した。

重治はそのまま倒れこんだ。

「大丈夫です。血はすぐに止まりますし、死にはしません。それに」

ソラは言葉を続けた。

「あなたにもまだ人生は残されています」

ソラは少しだけ悲しそうな顔になった。

ソラは実は切るだけではなく、風を相手の人体に侵入させて、血をなるべく出さないようにしているのだ。

切ったものを生かす。

それがソラの厳しさでもあり、やさしさでもあるのだ。

「ソラ。ちょっと来てくれ」

ソラの通信機に誠吾の声が聞こえた。

「なんですか？」

「新たなSⅠ反応だ！！」

「！！。詳しく教えてください」

そう言いながらソラは走り出した。

第85章続く

第85章 大聖堂の戦い・抜刀術（後書き）

人気投票開催中

<http://enq-maker.com/aFkPR7J>

第85章 大聖堂の戦い・集合からの別れ

香奈たちは朱里の自家用ヘリで大聖堂に着いた。だが、みんなの目に映ったのは残酷な風景だった。

「そんな。これがあの大聖堂？」

「テレビで見るより残酷だね」

ヘリから降りた優菜と雪がそう言った。香奈は手を口元に当てて悲しんでいる。

「とりあえず、ソラさんに連絡をしましょうか」

そう言つて朱里は携帯電話を取り出した。

「おかしいです。つながりません」

どうやら、ここでは電波が通りにくくなっているらしい。いや、通りにくくしているのだ。実はこれが敵の作戦の一つだ。

電波操作ができるアンドロイドを利用してさまざまな電波を妨害しているのだ。

つながるといっても近くににいる相手でしか連絡しかできない。

「しかたないな。ソラは自分たちで見つけるしかねえか」
「そうですね」

ゆうが朱里の近くで言った。

そのときだった。

いきなり上から細長いビームが降ってきた。

「みんな、避ける！！」

竜司の声がみんなの耳に届く。

そのままそれぞればらばらになって瓦礫に隠れた。

「いきなり、襲撃かよ」

「仕方ありません」

レンジが香奈を肩に担ぎながら言った。

香奈の運動神経ではある程度の速さで走れないのだ。

「レンジさん。こっち」

違う瓦礫に隠れていた美穂がレンジを呼ぶ。

どうやら左右違いに同じ瓦礫に隠れたようだ。

雪はいきなりの襲撃に驚いていたが、何とか瓦礫に隠れることができた。

だが、そのとき、後ろからいきなりビームが襲い掛かってきた。

どうやら反対方向にも敵が潜んでいるようだ。

雪はその場にここ以外の隠れ場所が見つからないと知り、そのまま戦闘態勢に入ろうとした。

「私だって、一人で戦える」

いままで一人では戦っていない雪はここで戦うつもりだった。

だが、そう決心した雪とは裏腹に、炎治がいきなり雪の体を抱え込

んで走り出した。

そのままべつの瓦礫に隠れる。

「え、炎治君!？」

「お前のその無茶振りはソラの遺伝かよ」

「こつちだ、2人とも」

後ろから竜司が2人を呼んで合流する。

「これは完全にみんなで一緒に行動することはできないだろ。敵も姿も見えはしない」

そう。さまざまな瓦礫がある中、敵の姿はまったく見えないのだ。だが、このビームで完全に人間ではないことは明白だ。

「通信もできないしな。ここは俺たち3人で少年を探すぞ!!」

「おう」

「了解」

炎治と雪は返事をして敵の攻撃の隙をついてその場から移動した。

おなじときに、雫と合流したあさみとセラは何とか攻撃の隙をうかがっていた。

だが、このまま伺っていても埒が明かない。

「しょうがないわね。このまま強制突破でソラ君をみつけるわよ」

雫の言葉にあさみとセラはうなずいた。

そのうなずきに雫は見てから手元で水の玉を作った。

「うまく読みが当たってほしいわね」

雫はそう長いながら水だまを上投げた。

そのとき、たくさんのビームが水だまを狙い始めた。

「今よ」

雫の後に続いてあさみとセラも動き出した。

雫の読みは、どうやらものの動きに反応してあのビームを撃つてく
ると思ったのだ。

その読みはどうやら当たっていたみたいだ。

その方法を朱里もいま考えていたところだ。

集まったのは優菜とゆうだ。

戦力的には申し分ない3人だ。

ちなみに、歩美は別のところで待機している。

彼女のS Iでは戦うことはできない。

「どうします？このまま3人でソラ君を探しましょう」

「だな」

「賛成。このままじゃあみんなと合流できない」

3人は意見があつたのでほかのみんなと同じ、先にソラを探すこと
を先決にした。

「よし、なら左右に俺と倉田の攻撃を放ってあいつらの気を引き付
けるぞ」

引き付ける考えはすでに朱里の行動でわかった。
そのまま朱里とゆうは攻撃の準備をした。

「いくぜ!!」

「はい!!」

2人は同時に低めの遠距離攻撃を放った。
相手のビームは一気にその攻撃に反応した。
その間、ゆうたちは誘導攻撃をしていない後ろからその場から離れた。

結局、3人ずつに分かれてソラのところにおのおの向かうことになった。

だが、戦力的には傾いているように見えない。

「意外とすぐに回避できたな」

「そうですね」

ゆうの言葉に朱里が答える。

結果、あの襲撃はあの場所のみで行われたのですぐに回避することができた。

問題なのは全員が合流する確立は非常に低い。

理由は一班ずつ別々の方向に向かってしまったのだ。

ソラを見つける可能性は高くなるがその後の合流が難しくなった。
連絡は取れないので完全に何の手がかりもない状態である。

「まあ、うじうじしてても仕方がないな。ここは何とかしても情報

を入手しないとイケないな」

「でも、どうするの？」

ゆうの言葉に優菜が聞く。

ゆうは自身ありげに笑った。

「簡単なことだ」

ーボン！！

ゆうがそう言ったとき、いきなり地面から男が現れた。

しかし、いきなり地面から現れることは、この男は地面になんらかの能力を持つS I使いだとわかる。

「貴様が侵入者か。敵というのならここで撃退する」

そう言って男はまた地面に潜ろうとする。

「発動、スベイシャル・ソード【空間ノ剣】」

ゆうはその瞬間にできた隙について自らのS Iを発動する。
そのまま発動した後、剣を地面に刺した。

「逃がしはしない！！スロー・ホール【遅くなる空間】」

そのとき、いきなり男の移動速度が遅くなった。

「へ我に従う空間の玉よ、黒を持って悪を征せ」

ゆうは冷静に詠唱を唱えた。

そして剣を男に向けた。

「スベイシャル・デスボール
【黒球ノ青空間】」

剣先から三つの黒と青の球体が放たれて男に向かっていった。

【スロー・ボール遅くなる空間】はすでに発動は解けているが、解けているときももう攻撃されたときだ。

「こ、この野郎!!」

男はそう言っただけで倒れた。

だが、ゆうはこれだけで終わらせなかった。

倒れた男に向かっていきなり連続ビンタを放った。

まるで起こそうとしているようだが、このままではある意味一生起きることがない。

「起きろ!!」

イラついたゆうは思いっきり男の腹を蹴った。てか、踏んだ。

「ごはごはっ!!」

もちろんのごとく、男はむせだした。

だが、完全に目がうつろだ。

「起きろ!!」

さらにゆうはビンタ再開する。

「起きます起きます!!」

男はこのビンタをとめるために敬語でそう言った。
その言葉を聞いたゆうはビンタをやめていきなり胸倉をつかみ出した。

「おい、ここの状況を説明してもらおうか!!」

「な、なんの拷問ですか!？」

男がツツコミたい気持ちは優菜と朱里にもわかった。

第85章終わり

第86章 砂の再び・復活の男

香奈たちはとりあえずは手当たりしだいソラを探すことにした。

レンジは少し前に出て前の安全の確認をしてから前に進む。

香奈と美穂もあたりをキョロキョロ見渡しながらソラを探している。
だが、やはり影すらも見えてこない。

「ソラ君。どこに行つたのだろう」

「香奈さん。ソラさんのことそんなに心配なのですね」

「え、ええ!？」

美穂の一言で香奈の顔は一気に沸騰したみたいに赤くなった。

香奈は顔を横に振って赤くなった顔を消そうとする。

「な、なんでそんなこと聞くのですか？」

「私も同じだからです」

美穂はあっさりライバル宣言をした。

香奈もその言葉の意味をそう受け取った。

「そうだとしても、負けません」

「それはこつちもです。先輩」

2人は同時に微笑み合った。

「おい、一回止まれ」

レンジの一言により香奈と美穂はその場から止まった。

「どうかしたのですか？」

「なにか、気配を感じる」

「気配、ですか？」

なぜそんなものがわかるというツツコミはしないまま、香奈たちはレンジの話を聞いた。

「あれだな。なんか、地面からS.Iの反応が」

そうレンジが言いかけたとき、いきなり地面から穴が落とし穴のようになり始めた。

「感じるって、なんだこれ！？」

レンジのツツコミとともに香奈たちも一緒に落ちてしまった。だが、レンジは対抗しようとする。

「なめるなよ！！」

レンジは自分で持っていた小さい鉄の塊を長い棒に変化させた。そのままその棒を壁にぶっさして落下を止めようとする。

レンジの落下速度はだんだん落ちていき、もうすぐで止まると思った。

「きゃああああああ！！」

そのとき、いきなり制服のミニスカートを抑えながら美穂がレンジの顔面に落ちてきた。

レンジのほうに体重が重い分、2人よりも早く落下していたのだが、

レンジが速度を落としたので、そのまま美穂が追いついてしまったのだ。

しかも、空中なので身動きは取れない。

レンジはいきなりの出来事に、棒を持っていた手を離してしまった。そのままお二人は仲良くしたに落下してしまっただ。

「いたたた。ここは？」

「いいから早くどいてくれ」

美穂が気が付いたのは良いが、まだレンジは美穂の下にいた。しかも、スカートの下にレンジの顔があるわけで。

「きゃあああああ！！」

美穂はそう叫んでジャンプしてその場からどいた。そして、とどめと言うのか、レンジの顔面にかかと落としをした。

「そ、ソラさんだったら良かったのに」

「それは悪いごさんした」

美穂の言葉にレンジは呆れた。

「それよりも、私たちは確かに落ちたのですよね」

「ああ。だがこの大量の砂のおかげで助かったわけか」

そう。香奈たちの地面には大量の砂で埋もれていた。これがクッションになって助かったのだろう。

「でも、服の中にたくさん砂が入りましたね」

「はい。気持ち悪い。いろんな意味で」

「そのいろんなは俺も含まれているように聞こえるぞ」

だが、実際美穂はレンジを見ながらそう言っている。
これはレンジが含まれている確立は100パーだ。

「おいおい。見事に引つかかっているねえ」

そのとき、遠くから男の声が聞こえた。
当たりが暗いところにいるので姿までは見えない。
しかも、その口調は嫌味にしか聞こえない。

「なんだ。お前は」

その声を聞いたレンジが男に名を聞く。
だが、男はまるで聞こえていないかのように別の話題で話してくる。

「しかし、女が2人とはうれしいねえ」

「おい、聴いているのかお前!!」

レンジはむかついて大声で叫ぶ。

その声には反応したのか男はこっちを向く。
ようやく男の長い髪までは見えた。

「あん？それはこの偉大なる俺様に言っているのか？」

だが、その顔は今の3人には見覚えは無いが、ソラと朱里にはわかる顔だった。

元朱里のボディガードの角田僧衣^{かくたそつゐ}だ。

だが、髪はものすごくボサボサで口調もおかしい。

そして、彼は確か警察に捕まったはずだった。
ここにいるということは脱獄してきたとは思えない。

「貴様もあいつらの仲間か」

「あん？王の俺様にそんな口の聞き方していいと思ってるのか？」
「だめです。完全に聞く耳持っていませんね」

美穂が呆れながら言った。

「しかたがねえ。お前はここで倒して拷問してやる。覚悟しろ！！」

そう言つてレンジは鉄の棒を手に持つてそのまま構えた。
だが、角田はものすごく余裕の笑みをしていた。

「そんな棒切れで俺様に対抗するのかよ？バカかお前は」

笑いながら角田はバカにしたように言った。

その言葉を聴いて美穂も体から電気を発生させる。

「私も戦います」

「来い、バカの男！！」

「バカはお前だ！！」

角田はそう言いながら右手を前に差し出した。

「波となつて流せ！！」
【砂ノ嵐】
「サンド・ストーム」

その時、角田の後ろから砂の大浪がいきなり出てきた。
その波は完全にレンジたちを狙っている。

「な、なんだよ。これは!?!」

「流れやがれ!?!」

レンジは即座に鉄の棒から板に変えた。

だが、こんな小さな板ではあの波を防ぐことはできない。

「これはどう!?!」

美穂が電気の槍で砂の波を狙った。

だが、砂では電気は通らない。

完全に波はビクともしない。

「そんな!?!」

波は完全にレンジと美穂を飲み込んだ。

「きゃあああああ!?!」

「くそおおおお!?!」

レンジと美穂は壁にぶつかって、そのまま立たなくなった。

だが、香奈は何かあの間に攻撃範囲から逃れていた。

だが、それを角田が見逃すわけではない。

角田はそのまま、強大な球を作り出した。

そして、さっき波に当たらなかった香奈に向けた。

「死ね」

その時、いきなりその砂の球が誰かによって破壊された。

「だ、誰だ!？」

「大丈夫?お姉ちゃん?」

「あ、あさみちゃん」

砂の球を破壊したのはあさみだった。

あさみがここにいるということはつまり、雫とセラも近くにいる。

「な、なんだ貴様!？」

「おい、こつちだ」

女の言葉に反応した角田は後ろを向いた。
だが目の前にはセラがすでに【エンド・エッジ終わらせる爪】を発動しながら角田に迫っていた。

角田は自分の手に砂の爪を作り、セラに対抗する。

「お前、なかなかやるな」

「お前、俺様に対しての口調は気をつけたほうが良いぞ」

「関係ないな」

「そうか」

そのとき、角田の爪からいきなり手首のところまでいき、そのまま手首のところから爪が出てきた。

「ちい!!」

セラは大きく後ろにジャンプして避ける。

「なるほど、相手にとって不足は無いな」

セラも不適に笑った。

第86章続く

第86章 砂の再び・水と砂

「いくぞ!!」

セラの爪がさらに光りだした。

そのまま空中で思いっきり腕を振り落としながら落下した。

だが、角田もそのことを考えていたかのように動き出した。

セラの攻撃は外れたが、それでも彼女の不適な笑いは止まらない。

「どうした。負けてそんなに楽しいのか？」

「バカが、戦っているから楽しんだよ」

次々にセラの攻撃が角田を襲う。

角田はその攻撃を避け続ける。

「そろそろその笑いも止めてやろう」

角田は自分の足元の砂を2本の槍のようにセラに向かわせた。

セラはもう片手も【終わらせ^{エンド・エッジ}る爪】を発動した。

その両手を使いセラは砂の槍を後ろへ受け流した。

「だったらこれはどうだ？」

さつきよりも小さいが、確かな砂の波を角田は発動した。

砂の波はセラを見事に飲み込んだ。

「なめるなよ!!」

だがセラはその砂の波を突き破って出てきた。

「それはこっちのセリフだ!!」

角田はさっき槍になっていた砂を次は地面から突き出す針の形になった。

これではセラは着地ができない。

しかしセラは両手を下に向けて着地と同時に針を破壊した。

「残念だな。砂などもろすぎるぞ」

「そうだな。だが、この俺様に硬い砂などいくらでも作れる」

角田はそういいながら自分の周りに砂を集めた。

砂は角田の前で渦巻きのように集まっていく。

その中心は何かを発射しそうだった。

「死ね!!」

角田の手元の渦巻状の砂の中心からだんだん伸びて一気に突き出した。

先が細くまるで槍だ。

セラは爪を使って対抗する。

さっきの砂と違って硬く、まったく破壊できそうにも無い。

「ちい!!」

セラはいったん後ろに下がった。

だが、角田の攻撃は続く。

「休ませるなどこの俺様の前でさせるか!!」

そう言つて角田は自分の腕に砂を集めた。

そしてその砂はみるみるどんどん集まっていき、終いには大きな腕となつていた。

「こいつ!!」

それを見てセラも攻撃態勢に入つた。

角田は思いつきり腕を振るつた。

セラも対抗しようと爪でその腕を受け止めた。

力と力のぶつかり合いに、一瞬、時間が止まつたかのように見えた。だが、その競り合いも一瞬だった。

みるみるうちにだんだんセラが押されていった。

角田の腕を良く見ていると、なんと砂で固定されている。

これではセラの勝ち目は無い。

「こ、このやろっ!!」

セラはさらに両手を使い出した。

このまま負ける気はまったく無いようである。

「死ね!!」

さらに角田は使っていない腕にも砂を集めて巨大な腕を作り上げた。すでに両手を使っているセラには対抗手段は無い。

「しまった!!」

その時、セラは思いつき顔面を殴られて飛んでいって後ろの壁にぶつかった。

この男には女性だからといって顔面を殴らない考えは無いようだ。

「終わりだ!!」

「そうはいかない!!」

そのとき、水の壁がセラを守った。

そして同時に角田の後ろに雫が現れた。

「次は私が相手よ」

「また女か」

角田は雫をにらんだ。

その顔を見て雫は構えた。

「水を相手に砂には何ができるのかしら」

そう言つて雫は右の手刀から水をまとわせた。

その水はまるで剣のような形になった。

「水も砂を相手になができる!!」

角田はそれに対抗するように右の手刀を剣のような形をした砂でまとわせた。

それを見た雫は角田に向かってダッシュした。

角田も同時にダッシュした。

水の剣と砂の剣がぶつかり合った。
だが、この光景に角田の口元が不適に笑った。

「かかったな」

その言葉と同時に砂の剣から2本の砂の枝が出てきた。
セラと戦ったときにも使った戦法だ。

「関係ないわよ」

その時、いきなり角田の砂の剣がいきなり湿りだした。
これが雫の狙いだった。

「砂ではなく、泥にしたらどうかしら」

「な、なに!？」

泥と化した砂はみるみる浸透していった。

「くそが!!」

そう言っただけで角田は後ろに下がった。

雫は角田が離れた瞬間、次の攻撃の準備をした。

「くらえ!!」
【砂ノ波】サウンド・ウェーブ!!」

角田はいままで使ってきた砂の波を雫に放ってきた。

「そっくりと思ったわ」

そう言っただけで雫も同じような水の波を放ってきた。

「この、小娘が!!」

両者の波は泥となって落ちていった。
だが、角田は次なる攻撃を仕掛けていた。

「なら、これならどうだ!!」

雫の足元がいきなり針が出てきた。
しかも前よりも針が細かい。
さらには泥になってもその強硬さは残るとするだろう。

「これで、お前の水は効かない!!」

角田が笑いながら言ったとき、いきなり雫の後ろから誰かの人影が見えた。

その人影をみて角田は驚いていた。

「だが、破壊すれば関係ない」

その人影はさっき倒れていたセラだった。

セラはすでに【終わらせの爪^{エンド・エッジ}】を発動していた。

そのままセラは地面の砂の針を破壊した。

「貴様。さっきあそこで」

「それならなんにも問題は無い」

そう。実は雫が戦っている間、香奈がセラの元に行き、回復を行っていたのだ。

「あいつ、【第二型】か!!」
セカンドフェイス

角田は香奈を見て言った。

「こつちよ」

「お前の相手はあたしらだ!!」

「この、小娘共が」

角田は少し怒りながら言った。
同時に周りの砂が浮き始めた。

「俺様をなめるなよ!!」

その時、砂が何本の巨大な針が作られた。
その大きさは人間の10人以上ある大きさだ。

「死ねえ!!」

巨大な針は一斉に落ちてきた。
雫とセラは破壊しようとしたが、数が数なので破壊しきれない。
結局2人は避けることに集中した。
だが、もう遅い。

「きゃあ!!」

「くそ!!」

2人ともその場で伏せてしまった。
体から少しづつ血が出てきたのが分かる。

「さあ。次はお前だ」

そう言つて角田は香奈のほうに向き直つた。

「死ね!!」

最期に残つた針が落ちようとしたとき、いきなりその針が真つ二つにされた。

切られた砂の間から一人の少年の姿が見えた。

「出たな。長門ソラ」

角田が言つたとおり、それはソラの姿だつた。

第86章 砂の再び・抜帯双

ソラの登場にみんな驚いていた。

「そ、ソラ君」

その無言を断ち切るように香奈はソラの名前を呼んだ。

「お久しぶりです。香奈」

ソラはそんな香奈に振り向いて笑顔で答えた。
香奈もつられて笑顔になった。

「皆さんもお疲れ様です。あとは――」

ソラはそう言って肩にかけていた入れ物を手に取った。

「僕があの人と、角田さんと戦います」

ソラは包帯に巻かれた刀を取り出した。

「長門ソラ。貴様のせいで俺の人生はめちゃくちゃにされた」

角田はどうやらずっとソラを恨んでいたみたいだ。
だが、それはただの逆恨みである。

あの事件では完全に彼が悪い。

「お前を、お前を今ここで殺す――!!」

角田は一斉に砂の槍をソラに撃ってきた。

ソラはその場から動けなかった。

いや、動かなかった。

「防御プログラム」

ソラがその言葉を言ったとき、いきなり赤い風がソラを砂の槍から守った。

「な！！」

いきなりの出来事により角田驚いた。

それもそのはず、あのときのソラはこんなことはできなかった。ましてやS Iなんか目覚めてはいなかった。

「これで終わりですか？」

「な、なにに！！？」

ソラはそう言ってから香奈から離れた。

いまここで戦ったら香奈が巻き込まれてしまうからだ。

同時にソラは刀、春風に巻かれていた包帯を取った。

『！！』

その刀に香奈たちは驚いた。

この刀はまだ香奈たちは見てはいなかった。

「俺様の実力をなめるなよ長門ソラ！！」

角田は雫が思ったとおりに砂の波をソラに向かって放った。

だが、ソラは刀を抜刀する形で構えた。
持ち方は逆手ではなく、普通の持ち方だった。

「第二抜刀術」

ソラは静かに息を吐いた。

「ふうしょうは【風翔刀破】」

ソラが抜刀した瞬間、ソラの目の前に赤く切り裂く風が舞散った。
その効果はでかく、砂の波の中心が一気に破壊された。

「な、なんだこれは!？」

角田が驚いている間、ソラは一気にその波から出てきた。

「ちい!!」

角田は出てきたソラを見逃さない。
そのまま砂の針が地面から連射される。

「空中では身動きが取れないはずだ!!」

だが、角田の考えは甘かった。

ソラはそのまま、まるで空気を蹴っているかのように一気に空中で
踏み込んだ後消えた。

だが、消えたのは一瞬。

すぐにソラは少し移動したみたいに現れた。

だが、それは一回ではなく、何回も使ってきて角田に向かってきた。

これがソラの新たな技。

名を【風進^{ふうしん}】。

風を使い空中で移動する補助型の技である。

一歩一歩が早いために回りは一瞬消えて見えるのだ。

「僕のS Iは風ですよ」

ソラはそう言っと思って思いつきり足を構えた。

角田は砂をボードのように使って逃げた。

地面が砂だらけなので角田はあらゆる方法でいろんな対策ができる。

「逃がしはしません」

ソラは風進をやめて春風を鞘に納めた後、そのまま背中に春風を構えた。

「第五抜刀術」

地面に付く瞬間、ソラは鞘から刀を抜いた。

「【剛砲破剣^{こうほうはけん}】」

その刃は地面の砂を真つ二つに切り裂いた。
だが、角田は避けたみたいだ。

「こんなのによられるかよ。ゝわが守りし砂の神よ。今こそ破壊の
姿として現れろ」

角田はいきなり詠唱術を唱えてきた。

「サウンドアート・ドラゴン【砂の芸術・竜】！！」

どうやら角田の詠唱術は作成術のようだ。
作成術とはものを利用してわが武器として作る術だ。

「死ね！！」

角田の砂の竜がソラを襲う。

「第一拔刀術」

ソラは刀を腰に構えて持ち手を逆手に持った。

「【無刀】むとう」

一閃の刃が角田の竜を横に2つに切られた。

「では、僕の竜をお見せしましょう」

ソラは春風を右手で一回まわしてから鞘に収めた。
その後、さつきと同じ構えで、少し足を強く踏み込もうとしている。

「第三拔刀術。【竜行破刀】りゅうぎょうはつとう」
「砂の箱！！」

いきなり迫ってくるソラの攻撃に対して角田は急いで全体防御型の
ものを作り出した。
だが、そんなものに風の刃は防ぎきれない。
角田の砂は見事に破壊された。

「そのまんま行きますよ。第一帯刀術」

ソラは帯刀するまえにさらに鞘ごと構えた。

「おんほうは【音砲破】」

鞘に収めた瞬間、音と風の衝撃が角田を襲った。
角田はそのまま後ろに下がってしまった。

「このやろっ!!」

角田はソラの前に砂の壁を出した。

だが、その壁は一瞬でソラに抜刀で切られた。
だが、抜刀させるのが角田の作戦だった。

「おまえのその剣術は抜刀のみと見た。だったらこれでどうだ」

帯刀する隙も無く、角田は張り付きの箱でソラを閉じ込めようとした。

だが、それは甘い考えだ。

「誰が、抜刀のみといましたか？」

そのとき、いきなり鞘から赤い刃が出てきた。
この反応はSⅠの刃だ。

ソラはそのまんま鞘と刀。同時に縦に回した。

「な、なんだ。その技は!？」

角田はその刀に驚いていた。

「行きますよ」

ソラは風進で一氣に角田に近づいた。

そして蹴りで角田を打ち上げた。

そのままジャンプして鞘のほうで殴ってさらに空中に。

だが、そのまま吹っ飛ばすわけではなく、そのままソラが横に回転して刀のほうで角田を殴った。

その回転を利用してソラはさかさまの状態で角田の上に来た。

そして、さらに横に回転してまるで空中から落とされるドリルのように地面にめがけて撃ち放った。

だが、これだけでは終わらせない。

デジタル・ベルト

【電脳子ノ帯】で角田の落ちるのを防いだ。

そして角田の真正面に行って、ソラは鞘と刀を同時に一回転してから離れた。

その刹那、回転しながら2つの刃となった刀と鞘は角田を一瞬で切り裂いた。

角田はそのまんま地面に落ちていった。

そんなに高く飛んでいないのでそのことに対してのそんなにはダメージは無い。

だがすでに角田は気絶していた。

そして、角田には叩かれた後のみしかなかった。

実は言うと、春風は鞘と刀。

両方あわせて春風という名の刀なのだ。

春風の鞘はソラのS Iに反応して風の刃を作り出すのだ。

そして、その両方の刃を操る剣術をソラは双剣螺旋術と呼んだ。回転を利用する技が多いのでそう呼んだ。

「そ、ソラ君」

香奈の声にソラは振り向いた。

「香奈。怪我はありませんか？」

「は、はい」

ソラは再び笑顔になった。

第86章 終わり

第87章 hall・搜索

ソラは周りにいるみんなを一箇所に担いで集めた。
集めた場所には香奈が回復を始めている。

「どうですか？みんなさんの容体は？」

美穂を担いでソラは聞いた。

女性なら軽いのでソラの腕力でも担げる。

「大丈夫みたいです」

香奈の言葉にソラは安心の息を吐く。

「よかったです」

「しかし、ソラ君が見つけるどころか見つけられるなんてね」

意識を失っていなかった雫はすぐに回復されてソラに問う。
美穂をゆっくり下げてからソラは雫の質問に答えた。

「ええ。でも、早くこれではもつと皆さんを早く守れましたのに」

ソラは残念そうに言った。

そんなソラに雫は頭をなでた。

「大丈夫よ。これが私たちが勝手にやったことなのよ。そのことに
対してソラ君が自分を責めることは無いわよ」

「そついわれると救われます」

ソラは雫に向かって少し微笑んだ。
その姿に香奈は優しく見守っていた。

「おい、ソラ！！」

その時、誠吾がソラたちがいる場所に来た。

「誠吾。無事でしたか」

「おうよ！！俺に任せてもらえばあんな数の敵！！」

誠吾は自信満々に言った。

実は誠吾にはソラがここに来るまでに追ってきた敵の相手をしてもらった。

「バカいうな。途中俺も手伝ったぞ」

誠吾の後ろから匠が呆れながら言ってきた。

「うるさい。お前は途中から来たんだろ」

「後先を考えないやつに言われたくない言葉だな」

威嚇する誠吾に匠は呆れながら反論する。

「ソラ君。この子たちが」

「ええ。彼らがあの僕の特訓に付き合ってもらった人たちです」

香奈の質問にソラは答えた。

その会話に気づいたのか、誠吾と匠はこっちを見てきた。

「よろしくです。話には聞いてました」

匠は香奈に握手を手を出してお願いした。
香奈と握手した後、起きている雫のところに行った。
そして、誠吾はまったくその場所から動かない。

（こ、これは）

ただいま誠吾の頭の中に5人ぐらいの小さい誠吾が天使に矢を討たれた感じになっている。
これは完全にあれである。

（す、ストライク！！）

「よろしくね誠吾君」

「は、はい」

いきなり話をかけられて誠吾は敬語で返事をした。

「誠吾、匠。彼女たちを運ぶのを手伝ってくれませんか？」

そんな誠吾を無視してソラは話を進めた。

ソラたちは一旦、楓たちのいる場所に戻った。
もちろん香奈たちも一緒だ。

あれから何とか全員起きてくれた。

「ほお、君にこんなにかわいい子たちがたくさんいたのね」
「おっさんみたいな口調をまずはやめてください。とりあえずはこ

れからやることは決まりました」

ソラはそう言ってパソコンの電源をつけた。

「僕たちの仲間を探します。楓さんたちにも協力してもらいたいです」

「もちろん。協力は惜しまないわよ」

楓は腰に手を当てながら言った。

この人は時々本当に年上なのかわからないときがある。

「まずは今の状況整理ですね。何とかアンドロイド軍団は減ったみたいですね」

「そうですね。でも、その中でも最も強いS I使いは見当たりませんでした」

美咲がソラにコーヒーを渡しながら言った。

ソラは「ありがとうございます」って言った後、またパソコンに眼を向けた。

「自体は最小限に抑えなければなりませんからね。どうします？」

「それはどうということかしら」

ソラの言葉に何か引っかかっていたので楓は聞き直す。

「相手の大将がいるところを何とか搾り出せました。これを総当りで探せばこの戦いを終わらせることができるかもしれません」

ソラはキーボードで何かを打ち込みながら答えた。

実はソラはさつきまで怪しいと思える場所をとりあえず見てきた。
いや、正確にはこの戦いで残っている建物を探していたと捕らえた
ほうがいいだろう。

ソラの考えはこの盛大な戦いに残っている建物は怪しすぎるのだ。
そう考えればその建物の中に隠れている可能性は大きい。

「さて、それでみんなと一緒に行くか、分かれることにするのか。
どうします」

「では、くじを引きましょうか」

楓の気軽な言葉にみんな一斉に脱力してしまった。
ソラなど椅子からずれ落ちてしている。

「か、楓さん」

「さあさあ、みんなくじ引いて」

みんなどうしてこんなものが速攻で現れたのかはさておき、気を取
り直してくじを引いた。

「僕は、赤ですね」

「では、私と一緒にです」

「私もです」

「俺もだ」

「よろしくな」

赤を引いたのはソラ、香奈、美咲、茂、セラだ。

とりあえずはこの5人は一番小さい建物を向かうことになった。
向かっている途中に仲間に出会ったら一緒に行動してもらうという
ことでみんな納得した。

あり建物の中に少年１人と女性２人の姿があった。
それはゆうと優菜、朱里だった。

「さて、これからどうする？」

ゆうが２人に声をかける。

とりあえずこの３人は大量のアンドロイド軍団を退治してしまったのでいまここで体力を回復しているとこだ。

「あれ？大木は？」

朱里しかゆうのそばにいなかったので改めて問う。

「星空さん。もっと察してはどうですか？」

「と、トイレか」

「デリカシーが無いですね」

ゆうの言葉に朱里はため息を付いた。

「なあ、お前はこの戦いが終わったらどうする気だ？」

「それは、どういう意味ですか？」

ゆうの質問が良くわからなかったのか、朱里は問い返した。

「そ、そうだな。たとえば、好きなやつに告白したりとかだな」

「こ、告白！？」

この言葉に朱里はいきなり顔を赤くした、

だが、思っている人物はソラだった。

（そういえば、皆さんもいつかソラさんにぞ、その、告白とかするのですかね？）

朱里の脳内は完全にパンクしていた。

（さ、先に越されたらどうしましょう）

「お、おい。どうした倉田。顔赤いぞ」

「な、何でもありません！！」

ゆづの言葉に反応して朱里は光の速さの如く振り向いた。

だが、顔が赤いのはまだ直っていない。

しかし、ゆづはもうすでに朱里がソラのことを好きなのを知っていた。

知っていたから聞きたいこともあるのだ。

「倉田、よく聞いてほしい」

「え！？」

「お、俺は」

―パターン―！！

そのとき、言葉をさえぎるように扉がいきなり落ちていった音がした。

第87章続く

第87章 hall・はぐれた2人

ドアがいきなり倒れたことを不思議に思い、ゆうと朱里は隠れながら様子を見守った。

しばらくすると、男が2人だけ出てきた。

「しかし、暇だぎゃ」

「だからって壁は壊すものではないぞ」

「うるさいぎゃ」

一人は背が低く黒髪で長くななんか印象が暗そうなやつと短髪でめがねをかけている優等生っぽいやつが出てきた。

ゆうたちはまだ出て行かない。

この状況で出てくるのはあからさまにおかしい。

おそらくどちらかがこの大聖堂のアンドロイド軍団を指示しているボスカ、その右腕たちかもしれないのだ。
深追いは禁物だ。

「ここは何かして気づかれずにするぞ」

「は、はい」

だが、今隠れているのは小さな隙間でそこにギリギリ2人が入っている状況である。

もちろん、ものすごい密着している。

ゆうの顔は気づかれていがものすごく赤い。

だが、朱里はものすごく平常心である。

「しかし、あの2人は一体何を？」

「そ、そうだな」

ゆうは考える。

もし、この状況でゆうではなく、ソラだったときのことを考えてみると結果は簡単だ。

朱里は逆にいまのゆうのように顔を赤くしているだろう。

（はあ）

ゆうは心の中で悲しみのため息を吐く。

もしそうだとしたらものすごく悲しいし、悔しい。

「あれ？」

その時、どこからか聞き覚えがある声がした。

「ん？なんだお前は？」

「いい女だぎゃ」

「あなたたち、誰？」

優菜だ。

優菜が戻ってきて男たちと接触してしまっただけ。

だが、優菜はすぐに状況の整理ができたようだ。

朱里たちのことは名前は呼ばうとはしない。

優菜は棒を構えた。

「なるほど、われわれと敵対するというのですか」

「面白いことをする女だぎゃ」

「残念だが、お前らの相手はこの女ではない」

この声も聞き覚えがある男の声だ。
だが、決してゆうやソラの声ではない。

「お前らの相手は俺だ」

海だ。

外につながるドアから海が現れた。
だが、後ろには智実の姿は無い。

「及川君」

「大木。ここは俺が担当する」

「うっん。私も戦う」

海という言葉に優菜は首を横に振って断る。

「そうか。だがあまり無茶するなよ。後で俺がソラに怒られる」

「多分ソラ君はそんなことでは怒らない気がする。逆に自分を攻め
ると思うの」

「そうか。どっち道あいつに迷惑がかかることは変わりはないな」
「うん」

そう言っヴェイク・ヤーンて海は手元に【朧月夜】を発動した。

優菜は横に真っ直ぐに線を引いた。

「俺はあのメガネに集中する。お前はあの暗そうなやつを頼む」

「うん」

「ふっ」

海と優菜の会話を聞いていたのか、メガネの男はため息をついた。

「ずいぶんなめられたようですね。この僕、穂書ほしと」
「飯田いいたのあいてをするなんかぎゃ」

穂書というメガネの男は一つの本を手取る。

「お仕置が必要か」

「光れ、朧月夜」

穂書はメガネを上げ、海は朧月夜を光らせる。

「危ない!!」

そのとき、いきなり海の目の前に電撃放が向かってきた。

海はすぐに反応して後ろに下がる。

それを確認した後、優菜はさっき引いた線から盾を発生した。

ギリギリ防ぐことに成功したが、いつの間に攻撃が来たのかはわからなかった。

「ほら、次ぎ、行きますよ」

「!!!上だ!!!」

穂書の言葉に反応して海は叫んだ。

海の言うとおりにいきなり針の山が天井から降ってきた。

海の反応がさっきよりも早かったので次は簡単に避けることができた。

「お前、何をした？」

「それは自分で理解してください」

「そりゃそうか」

海は再び朧月夜を構えた。

「しかし、君らは一体何しに来たのですか？」

「そうか。それは簡単だ。お前らがここにいるから俺らは来たんだよ」

「そうですか。それなら僕らはその答えはわかりませんね。僕らはただ付いてきたただけですし」

「付いてきたただけだと」

海は聞いた。

だが、もう答えはわかっていたはずだ。

「我らの王がここにいます。そしてそれは絶対に誰も前にはできない王が」

「バカが」

海は朧月夜を強く握った。

「大木。ここはやはりお前は離れろ」

「で、でも」

「大丈夫だ。ほかに理由ができたからな」

海はニヤリと笑った。

その時、穂書を狙っていきなりゆうが隠れていた場所から飛び出た。ゆうの手にはすでに【空間ノ剣】スペイシャルソードを握っていた。

「切る！！」

「そつくると思いました」

その時、いきなり穂書とゆうの間に壁が出来上がった。
ゆうはその壁を一回叩きつけてから一步後ろに下がった。

「このやろつ、なんか見たことがあるような能力の野郎だな」
「お前の相手は俺だぎゃ」

その時、海の後ろから飯田がいきなり現れた。
完全に気配が無かったのか、後ろを捉えかけられた。

「くそつ!!」

海は剣を後ろに振って抵抗した。

「戦いになれていやがるぎゃな」

「黙れへんな口癖野郎」

ゆうは飯田に向かって剣を構えた。

「海。そいつは頼んだぞ!!」

「言われなくてもわかってる。ゆう!!」

海はそう言ってから朧月夜を頭の上でまわし始めた。

「いいでしょ」

「死ぬがいいぎゃ!!」

その頃ソラたちはある人物と出会っていた。

「あ、ありがとう」

その人物とは智美だった。

ソラたちにとって不思議だった。

いつもは一緒にいる海と智美が別々に行動していたからである。

「一体どうかしたのですか？」

「もしかして、喧嘩か？」

セラは空気を読まずにソラの言葉に付け加えた。

だが、まるでそんなことが無いみたいに智実は微笑んだ。

「いや」。ただ海くんとはぐれただけで面目ない」

「はぐれたって、それも結構な大変なことですよ」

ソラは驚いて言った。

だが、みんな喧嘩ではなくってホッとしていた。

「実は砂嵐にあちゃってね」

「あちゃってね。では無くって、なんで砂嵐があるのですか？」

ソラはここでの地では発生しないことをツツコンだ。

「でも、本当に起こったんだよ。あれみたいに」

「あれ？」

智美がのんきに指を指した方向にみんな見る。

そこにはなんと一つの砂嵐が発生していた。

しかも結構でかめだ。

「な、なんで砂漠でもないのに砂嵐が発生しているのですが!!」
だが、そんなツツコミもむなく、ソラたちは砂嵐に飛ばされてしまった。

第87章続く

第87章 hall・結界

その頃、海たちのところでは過酷な戦いが始まろうとしていた。

「それでは始めますか」

穂書がそう言ったとき、いきなりこの建物の周りに青い結界見たいのがドーム状に作られた。

結界の中には海とゆう。それに穂書と飯田が残った。優菜と朱里は外にいる。

「これがお前のS Iか？」

「いいえ。これは単なる機会で作られた結界です。これでここにいるのは私たちだけになりました」

「まあ、そっちのほうが俺たちにとっても都合だ」

この結界がある限り、優奈たちには攻撃はできない。おかげでこっちは戦いに集中できる。

「行くぜ！！」

ゆうは飯田に向かってだっしゅした。

剣からは青い光が輝き、さらに大きな刃と化す。

「はああ！！」

ゆうは叫びながら剣を横に振った。

剣はそのまま壁にぶつかる。

だが、ゆうにはそれ以外のでこたえがまったく無いのだ。

「こつち。こつちだぎゃー!!」

「後ろか!!」

飯田の声が聞こえたほうにゆうは剣を振るった。
だが、その場所にも飯田はいなかった。

「こつちだぎゃよ」

「くそっ!!」

また後ろから飯田の声が聞こえて振り向きながらまた剣を振るった。
だがまたその場所には飯田はいなかった。

「くそっ!! 何だよこれはよ!!」

ゆうは大声を上げた。

声は聞こえるのにもうその場所には飯田はいない。

これは速さをあげるものか、それとも自らを消すものか、それとも相手の目をごまかすか。

人が見えないだけでもたくさんの考えがあり、対策もある。

だが、その対策は一つ一つ違う。

もし、一つの方法を使い、違ったらそのまま攻撃されてしまう。

「くそっ!!」

「だははは!! 早く見つけてみるぎゃー!!」

しかし、その前にゆうのイライラがさらに解決法を無くす。
このままでは無駄に力を使うだけである。

「くそっ!! だったらあいつの移動場所を無くすだけだ!!」

ゆうは剣を地面に刺した。

「わが周りに有する空間よ、わが力を吸い取り、爆破せよ！！」

ゆうの剣がさした地面からリング状の青い空間ができた。

「くうかんだいげきはく【空間大撃破爆】！！」

その青の空間がいきなり爆破した。

周りに飯田がいればこの爆発に耐えられるはずは無い。

「なははは。残念だぎゃ」

しかし、また飯田の声が聞こえた。

どうやら今の攻撃は届かなかったらしい。

「くそっ！！」

「どうやら、彼は飯田の能力をわかっていないようですね」

「そうか」

海の朧月夜を避けながら穂書はいう。

海はその言葉を攻撃しながら短い言葉で答える。

「そうですか。どうやら君は彼よりも冷静でいられるようですね」

「それはどうも」

お互い一歩後ろに下がる。

そして、海は朧月夜を槍のように構える。

穂書はまた本をページを開きなおす。

「では、こっちは種明かしをしながらでも戦いましょうか」

そのとき、いきなり穂書の目の前から破壊光線らしきものが発射してきた。

海はそれを横に転がって避ける。

「ほら、次は上から着ますよ!!」
「上から!？」

海は上を向いた。

そこからはなんと無数の槍が降ってきたのだ。

海は朧月夜を上には振り回して槍を破壊しつつ穂書に向かう。

「残念ですが、その進路はふさがしてもらいます」

めがねを上げながら言った穂書とダッシュしている海の目の前に壁が出来上がった。

海はその壁を見て足でストップをかけた。

「なるほど、その本がお前のS Iそのものなのか」
「ええ。見たとおりですよ」

S Iの元はわかった。

だが、問題の能力の情報や問題の発動条件がわからないままである。大雑把な能力はどうやら本を通してのものの実体化。

しかし、あの光線はなんだろうか。

ますます謎が増える。

ソラは誰かに揺さぶられているのを感じた。
寝心地の悪いところなのですぐに眼を開けることができた。
眼を開けたらそこには香奈の顔があった。

「香奈？」

「良かった。ソラ君」

ソラが起き上がったとき、香奈はソラの背中を支える。
改めてソラは回りを見渡す。

「香奈。ほかのみんなは？」

「それが、はぐれたみたいで」

「そうですか」

そのはぐれてしまった犯人は確実にあの意味がわからない砂嵐だ。
多分、あの砂嵐のせいではほとんどの人がはぐれてしまったみたいだ。
そして、今ここにいるのはソラと香奈のみであった。

「ですが、どうやら目的地は着いたみたいですね」

ソラは一つの建物を見る。

その建物は周りが瓦礫だらけなのをかわらず綺麗な建物だった。
すこし穴が開いているのは気にしないでおう。

「集まらないのなら仕方ありません。僕と香奈で入りますよ。今は
できるだけ時間を無駄遣したくありませんし」

香奈は首を縦に振ってうなずく。

ソラはそのしぐさを見て目の前のドアに手をかける。

そしてそのままドアを開ける。

そこには一人の男が座っていた。

「まさか、このフィールドの中に人が入っているとは」

「あなたはだれですか？」

男の言葉を無視するようにソラは問いかけた。
だが、男は気まぐれに話を続ける。

「しかもお前か。いいのかわるいのか」

「何を言っているのですか？」

「まあいい。始めようか」

その時、ソラは誰かに触られた感触が来た。
見てみるとそこには完全に死人といえる人がソラのウデに触っていた。

「ソラ君！！」

その時、その死人は長い爪をソラに向けてきた。
ソラは一気にやばい予感がした。

「離してください」

ソラはそう言って腕を振って死人を振り払った。
死人はそのまま地面に倒れる。

「まだまだ」

奥にいる男がそう言ったとき、さらに3体死人が現れた。
これは完全にホラーだ。

「ゾンビですか!？」

ソラは左腕を前に出して風でゾンビどもを吹っ飛ばした。
だが、まだ何体も出てくる。

「な、何ですかこれは!！」

「きゃあ!！」

ゾンビどもは香奈も狙ってきた。

「!！」。香奈から離れてください!！」

ソラはそう言つて【デジタル・ベルト電脳子ノ帯】でゾンビどもをなぎ払った。

「これは、あなたの力、SIですね。死人を復活させるものですか?」

「ふうん。まああれだけのヒントを出したらこれぐらいはわかるか」

完全に男はマイペースだ。

「それなら次は本気で行こうか」

男は右腕を上げた。

「ふざけないでください」

ソラは春風の包帯を取り出した。

第87章 h a l l・緑の覚醒

「第二抜刀術―」

ソラは春風に手をかけた。

「ふうしょうとうは【風翔刀破】」

ソラが抜刀したとき、一気に風舞った。
そのままゾンビたちを吹っ飛ばした。

「邪魔するならぶっ飛ばしますよ」

ソラは帯刀しながら言った。

男はその光景を見ても驚く素振りはない。

「やはり、お前はその刀で自らの力を上げているのか」
「そうですか何か？」

男はにやりと笑った。

「これでこそお前を倒す楽しみができたってことだ！―」
「僕は楽しむことはできないと思いますが」

男の言葉の後に、また春風を構えた。

「この俺、ひたいみずお比田井瑞夫のS I・リビングデット【死者復活】の敵ではないわ！―」

瑞夫といわれる男の前にさらにゾンビが現れた。

どうやらSⅠはそのまんまの能力だとみる。

「第二抜刀術、【風翔刀破】」
ふうしょうとうは

ソラは再び同じ技でゾンビたちを吹っ飛ばした。
しかし、さっきよりも数が多く、攻撃範囲が届かない場所にいたゾンビたちが襲い掛かってくる。

「第五帯刀術」

ソラは刀を鞘にしまわないで言った。

「【竜砲衝破】」
りゅうほうしょうは

帯刀した瞬間、竜の形になった風の砲弾が前に発射された。
そのために前の敵と帯刀ができた。
だが、まだ周りの敵がいる。

しかし、全体の敵には、【風翔刀破】ふうしょうとうはは届かない。
この抜刀術は周りではなく、前に広い範囲で攻撃するものだ。
周りの敵には通用しない。
だが、ソラにもそのことをちゃんと考えていた。

「第六抜刀術、【円陣空剣】」
えんじんくうけん

ソラは回りながら円状に抜刀した。
刀が円を描いた後、上空に向かって風が巻き起こった。
ソラはそのあと、刀と鞘を縦に回した後、帯刀した。

「なるほど、ちゃんと全範囲型の技もあるのか」

「ほめてくれているのですかね？それは」

ソラと瑞夫はにらみ合った。

その瞬間にもゾンビたちは増えていく。

しかも、次は武器も持っているゾンビもいた。

「なるほど、復活させるのと同時に武器まで」

「そうだ。俺のS.Iはただそこにいる死人を生き返らすだけではない。魂に肉体を与えることでここによりみがえる！！」

「つまり、肉体と同時に武器もささげたと、いうことですか」

「そのとおりだ！！」

「アクセラレータ皮肉ですね。【一方通行】」

ソラはゾンビ軍団に向かって風の道を作り出した。

右手には風が集まってくる。

「エアロ・ランス【風ノ槍】」

ソラの右手から高速に放たれた槍がたくさんのゾンビを貫いた。

さらには左手で持って、横に振り回し始めた。

このことで周りの敵を倒せた。

「武器を持たせても意味が無いか」

「それは、あなたの考えに任せます」

その頃、ゆうは苦戦していた。

声が聞こえるのはいいが、まったく飯田の姿が見えないのだ。

ゆうもそのことでイライラしている。

「クソッ！！どこにいるんだよ！！」

ゆうは剣を振りながら叫んだ。

もちろん、叫んでも出てくるものではない。

そして、近くにいる海はなかなかの勝負だった。
しかし、なかなか決着が着きそうにもなかった。

「しかし、よくここまでそんな武器で戦えるものですね」
「俺の朧月夜をなめるな」

海は朧月夜を上にも構えた。

そのまま回転しながら上に上がった。

「かいてんとつてん
【回転突転】」

朧月夜についている緑色の光が片方の棒先に集まっている。
海はそのまま下に振り下げた。

「つきは
【月刃】！！」

刃はさらにでくなり巨大な太刀になった。

そのまま穂書の上から叩き付けた。

後ろの床が割れる。

「さて、どうやら君のこの棒は結構コントロールできているようだ
ね」

「どうも、俺にはいやみぐらいしか聞こえないのだがな」

穂書はなぜか、今の攻撃を食らってもまったくダメージを受けた様子はない。

あの一瞬の間に防御系の術でも使ったのだろうか。

海は一步後ろに下がって一回おぼろ月夜を回して体制を整えた。

しかし、いつ防御術を使ったのか、穂書はただ本を開いていただけだ。

（クソッ！！あいつの能力は一体）

海はゆっくり穂書の周りをみた。

だが、怪しいところはまったく無い。

「どうかしましたか？ギブアップですか？」

「そんなこと無い」

「そうですか。それでは強制的にギブアップしてもらいましょう」

穂書は再び本を見た。

この光景に海は不思議に思った。

穂書はさっきから次々攻撃を繰り返す中、本を利用しているのなら、本のページを開くかもしれない。

だが、さっきまでの攻撃でまったく本のページをめくっていない。

海はそのことに本当に不思議に思った。

「そうか。そういうことか」

海はわかったように言った。

そして、穂書に向かって走り出した。

「行くぞ。【朧月夜】」

ヴェイク・ムーン

朧月夜の緑色の光が強くなった。

「では、死んでもらいましょうか!!」

穂書と海の目の前に火炎放射が出てきた。
もちろん発射方向は海のほうだ。

「それだけでは終わらせませんよ」

さらに海の足元から4方向から出てきた。
だが、海の顔はそのことをそんなに驚いてはいなかった。

「そんなもので俺を止められると思うなよ」

海の顔はいつもよりも激しいまなざしをしていた。

「お前には見せてやる」

海は一回眼を閉じた後、また開いた。

「覚醒!!」

海の両目の瞳は黒眼が無く、緑の瞳のみ輝いていた。

「き、貴様!!まさか!!」

「そうだ。俺は【達人ノ眼】^{マスター・アイ}の持ち主だ」

海の覚醒。

この前のソラの覚醒は左眼の能力ではなく、【達人ノ眼】^{マスター・アイ}そのもの

の能力だった。

朧月夜の光がさらに輝いた。

「散れ！！」しげんげつら【四幻月乱】」

海の回りに四つの月が現れた。

そして地面から出てきた槍を破壊した。

海はそのあと、朧月夜を後ろにしてまわしだした。

「かいてんとつてん つきやり【回転突転・月槍】」

一瞬に突き出された槍が穂書を襲った。

火炎放射はそのいきよいにより舞い散った。

穂書はなんとか本で防御していた。

「くそつまだまだ」

穂書は一步下がって本に目を向けた。

海はその瞬間を見逃さなかった。

「やはり、お前の能力は本は関係なく、紙が思ったものに变化する能力だろ」

つまり、穂書はこの部屋にはあらかじめ紙を何枚か仕込んでいた。人の目では見えないが、紙が術に変化していたのだ。

「ペーパー・マジシャン【紙ノ魔術師】。セカンドフェイス【第二型】のS Iか」

海はそういいながら朧月夜を前に出してまわした。

そして、緑色の光が中心に集まった。

「放て、かいてんまんげつほう【回転満月砲】」

緑の光の玉が穂書に向かって放たれた。

「くそ!!」

穂書はその攻撃を壁で抑えた。

だが、その防がれることを海は計算に入れていた。

「こつちだ」

海はいつの間にか穂書の後ろにいた。

「貴様、いつの間に」

「月夜に踊れ、げつこうらんぶ【月光乱舞】」

海は緑色の光に包まれた。

一瞬の隙に疲れてしまった穂書は対策を練ることができず、次々に繰り出される攻撃に耐えるのみだった。

「こ、こいつ。力が!!」

「俺の覚醒は身体能力の最大開放。できるだけ力を自分で調節することができる」

さらにはそれだけではなく、海の覚醒にはそれ以外の能力もある。

「とりあえずは、これで終わりだ!!」

海は朧月夜を回しながら一回転した。

「散れ!!」

そのまま渾身の一撃を穂書に当てた。

第87章続く

第87章 h a l l・緑の覚醒（後書き）

リヒングデット
死者復活はライおさんが考えてくれたS Iです。
いつもありがとうございます。

第87章 hall・消える秘密

海の渾身の一撃を食らった穂書はそのまま自回転してそのまま壁にぶつかった。

だが、まだ意識はあるようだ。

「これで、終わりではない」

穂書からものすごい殺気が放たれる。

海もその殺気に気づいて構えた。

「こいつ、まだ力を」

「へ我がみなぎる紙の神よ。神霊に対する哀れな人を抹殺しよ」

穂書が言い出したの詠唱術だ。

「へ夜に染まる一つの光よ、その光を稲妻にし電殺せよ」

対する海も送れて詠唱術を唱える。

「【神王断罪拳】！！」
しんおうだんざいけん

穂書の両側から大きな腕が現れた。

そして、穂書よりも短い詠唱をいった海の回りから緑色の電気の柱が海を囲んでいた。

「来い！！」

「言われなくとも！！」

穂書が発動した腕は海に向かってきた。
しかも、そのスピードは速い。

だが、海の回りには電気の柱がある。

「そんな電気は関係ない」

穂書の腕はなんとその電気柱を握り、海のところを空けてきたのだ。
このコントロールこそがこの術の強さだ。

「これで俺の勝ちだ!!」

「残念だな。お前の負けだ」

海は朧月夜を頭上に回した。

まわしたとき、まるで回りの電気が伝わったのか、朧月夜の刃が電
気を使ってさらに巨大なものになった。

「月夜に回り、朧に消えよ」

さらに大きく朧月夜を回した。

「らいかいいつせんでんけん
【雷回一閃雷剣】」

最後の一回転するとき、その刃はすでに術の拳を真つ二つにし、半
周した後さらに本体の穂書を切った。

「な、なんだその術は」

「今の俺に、ただ長い詠唱術だけで止められると思うなよ」

穂書は次こそ気絶した。

朧月夜の電気はみるみる消えていった。

同時間、ゆうはいまだに飯田のISを見抜けていなかった。
相手の気配がするのに姿が見えない。

「ほらほら。こっちだぎゃ」

「くそ、本当にどこだよ」

ゆうは体力の回復が早いおかげで体力切れの心配はまったく無い。
だが、このままの長期戦は相手の思う壺だ。

（落ち着け、このままでは俺はソラには追いつけない）

ゆうはソラのことを羨ましかった。

朱里のこともそうだが、それよりもなにもどこにいてもあの冷静さである。

冷静で早く状況に対応するソラに対してゆうは本気で羨ましいと思っていた。

だからこそ、ゆうにとってはソラは友でもあり、憧れだった。

「こんなところで俺は――！」

ゆうはそう言ってから剣を地面に突き刺した。
いまここでゆうは集中する気である。

（まずはあいつはこの場にいるのは確かだ）

声が聞こえることは必ずその場にいるのは確かだ。

そうでもなくつてもここはいま結界が張られている。
この場所からは離れられない。

（そして、あいつは俺を見ている。だが、俺には見えない。いや、
もしかしたら俺も見ているのかもしれない）

その時、ゆうは自分の言葉にあることに気づいた。

相手も自分を見ていて、そして、それはいつも自分が見ているもの
かもしれない。

「そういうことが!!」

ゆうはそう言って剣を持ってジャンプした。

そのまま上空で青い玉を一つ出してその上に乗った。

「やはりそうか。なら!!」

ゆうは地面に向かって剣を投げた。

だが、そこには誰もいない。

そう。誰もいなくていいのだ。

「すべてを包み込む空間よ。我を中心とし悪なるものを封じ込め」

「

ゆうの剣から青い球体が出てくる。

そのままその球体は広がり、ゆうを包みこんだ。

「ホール・イン・ワールド
【空間内の世界】」

空間の中ではゆうただ一人。

では無く、なぜかさつきまでいなかった飯田がその場にいた。

「ち、お前俺の居場所がわかったのかぎゃ？」

飯田はその世界のこと、ゆうが自分のS Iを見破ったことも驚いていた。

「そういうことだ、それが証拠に今お前はここにいる」

ゆうは自信満々に言った。

「あんたは俺を見ている。それは俺もあんたを見ているかも知れないということだ。今考えてみれば隠れている割に声が近かったからな」

ゆうは説明を続ける。

ここまで行けばもうすでに答えは出ている。

「つまり、あんたは自分を幽霊化しているのだ!!」

だが、帰ってきた言葉はものすごく間抜けな言葉だった。

「せ、正解だぎゃ」

まさかの当たりだった。

だが、もしゆうはそのことを確かに確信を持っていたようにこの術を唱えていたのだろう。

飯田のS Iはさつきゆうが言ったとおり自分を幽霊化させるものだ。名は【亡霊^{ゴースト}】。相手の攻撃をすり抜けるどころか、相手にも見えな

い存在となるものだ。

その分、ものはもてないのが弱点ではある。

「だが、この空間でも俺のS Iはつえるぎゃ！！」
【亡霊^{ゴースト}】！！」

そう自信満々に飯田は叫んだ。

だが、飯田の姿はなににも変わらない。

「な、なぜだ。なぜ俺のS Iが発動しないのだぎゃ？」

飯田は自分の手を見ながら手間取っていた。

「あんたのS Iは自分の姿を消す。ものではなく、そう相手の目に
そういう幻術をかけるものだろ」

ゆうが言いたいことは、つまり肉体の影響するものはあるが、自分
の姿を消すものは無い。

いいや、いくらS Iでも人間の肉体自体を変化させることはできな
い。

そう考えれば、このS Iは自分に影響をもたらすものではなく、相
手に影響を与えるものなのだ。

「この空間は幻術系のS Iを封じ込めるものだ。また、近くにある
ものを利用するS Iにも対応できる空間だ」

つまり、この空間は己の力のみを出すためのものである。

そして、ゆうはこの技に引かかる技は使ったつもりは無い。

「そして、お前にこの技は破れない！！」

ゆうはそう言っで飯田に向かつてダッシュした。
もちろん、今の飯田には武器はない。

「こ、この餓鬼が」

「そんなセリフは聞き飽きた!!」

飯田に向かつてゆうは剣でぶっ叩いた。

「峰打ちだ安心しろ」

その言葉と同時に空間が消えていった。

「お前も無事に勝ったか」

「及川。まあな。心配かけた」

ードーン!!

2人が集まったとき、いきなり壁が壊れだした。
そして、その壁からソラと一緒に飛んできた。

「ソラ!!」

2人はあせってソラも元に行く。
ソラは立ち上がって2人の姿を見る。

「ソラ君。大丈夫?」

同時に香奈もソラも元に来る。

「蒼希」

「お前がソラと合流したのか」
「は、はい」

そう言っただけで香奈はソラの傷を治していく。
傷を直されながらソラは2人に言う。

「2人とも、ちょうど良かったです」
「どうということだ？」
「あの人は以上です」

ソラが指差したところに巨大な人間が何体も出てきた。

「な、なんだこれは!？」
「あれが、いまソラ君と戦っていた人のS.Iです」
「2人とも。お願いがあります」

香奈の言葉に驚いた海とゆうにさらにソラが立ちながら言う。

「一緒に戦ってくださいませんか？」
「おお、ソラから珍しい言葉が出たな」
「足手まといではないというなら協力する」

3人は同時に笑った。

「では、行きましょう」
「「おう!!」」「

3人は同時に己の武器を持って構えた。

第87章 h a i l・消える秘密（後書き）

亡^{ゴースト}霊はライおさんが考えてくれたS iです。
いつもありがとうございます。

第88章 死者復活・三者同戦

ソラと海とゆうはともに立ち上がった。

「香奈は少し隠れていてください」

「は、はい。がんばってください」

そう言つて香奈は急いで瓦礫の後ろに隠れる。
これで一樣彼女の安全は守れるだろう。

そう思つたとき、巨人の後ろから瑞夫が現れた。
海とゆうは初対面である。

「あれが、この巨人を操っているやつか」

「いいえ。正確には死人の魂に巨人の肉体を与えたのです」

「なんか、それだけでめんどくさい相手ということはわかったな」

「おい、お前らなにごちゃごちゃ話していやがる」

ソラたちの会話を待つことなく、瑞夫は叫んだ。
これ以上ごちゃごちゃ言っている暇はなさそうだ。

「僕が一番前の巨人を切りつけますから、その瞬間に2人は両側からお願いします」

「了解」

「異議なし」

「行きますよ。第一拔刀術」

ソラはそういいながら抜刀する体制に構えた。
横の2人もダツシュできる体制になった。

「【無刀】」

ソラは一番前の巨人を切りつけた。

その瞬間、海とゆうはお互い違う方向からサイドへ飛び出た。だが、その道にもお互い巨人がいる。

「お前らの作戦は簡単に見えるんだよ!!」

「それがどうしたって言うのですか」

ソラは切りつけた後、すぐに帯刀し、前に向かってダッシュした。

「なに言ってるやがる、作戦は終わりだ」

「ですから関係ないのですよ」

「なに言ってる——」

ソラの言葉の意味がわかり瑞夫は両側を見た。そこにはすでに倒されていた巨人が2体いた。

「なめては困るな」

「これぐらいで、俺たちの作戦をつぶせると思うなよ」

そう。すでに2人は自分たちの進路をふさいだ巨人をなぎ払っていた。

作戦実行するときは、それ対応した力が必要だ。

だが、この2人はおつりが出るほど頼もしい仲間だということは一目瞭然だ。

「3方向からはさむぞ!!」

海の言葉に2人はうなずいた。

「なめるなよ!!」

瑞夫はそう言っで自分の前に大きな盾を持ったゾンビが瑞夫を囲んだ。

「ゆう!!」

「わかってるって」

ゆうはそう言ったあと技の構えに入った。
スピードは下がないでそのまま走りぬく。
そのまま剣を横に振った。

「食らいやがれ!!波空斬!!」

ゆうの技、波空斬が横にそって放たれる。
そのまま盾を持ったゾンビに襲い掛かる。
だが、惜しくもその盾は破ることはできなかった。

「残念だな!!」

「いや、おとりには十分だ」

「そうということです」

しかし、横から海と、いつのまにかソラがそこにはいた。
あの攻撃は瑞夫を油断させるのと、ソラの位置を把握させないため
のものだ。

そして、これが本当の狙いの両側の波状攻撃だ。

「第一拔刀術、【無刀】」

「【回転突転・月槍】！！」

ソラと海の両側の攻撃で盾を持っているゾンビは倒された。
だが、この瞬間、ソラたちは隙が出てしまった。

「バカが隙だらけだ！！」

思ったとおりに瑞夫は後ろにいたゾンビの剣を自分で持ってソラに向かつて振りかぶった。

だが、そのことを計算に入れていないソラではない。

「隙ができたのはあなたのほうです」

その時、上から一人の少年の姿が見えた。

「〽空間を回し、円となり切り裂け」

詠唱を唱えているゆうの剣さらに青く染まる。

「えんくうかいてんは【円空回転刃】！！」

剣を振ったとき、その放たれた空間は円状に変化した。

そのまま手裏剣のように自回転して瑞夫にむかった。

この攻撃が本命だ。

まず、ゆうが攻撃したとき、その瞬間ゆうは使い捨てのコマとして相手の頭から消える。

その後、ソラたちの攻撃で盾のゾンビの破壊と、相手の隙を作る着地。

ソラに何らかの恨みがある瑞夫にとってソラの隙は見逃せないものとなる。

その瞬間を付くために、使い捨てと思われたゆうがとどめの攻撃をする。

いま考えてみれば安易な考えだが、戦闘中ではそんなに簡単に人の頭は働かない。

「はああああ!!」

ゆうの攻撃を瑞夫は持っていた剣で防ごうとする。

だが、ただの受け止めで詠唱術の技が受け止められるものではない。

「な、なめるなあああ!!」

その時、瑞夫の足元からいきなり新たなゾンビが現れた。

そして、手にはチェンソーを構えている。

たださえすごい切れ味のチェンソーにいまはS Iの能力が加わっている。

しかもそれがわらにもう2体現れた。

3体のゾンビは同時にチェンソーでゆうの攻撃の削除に取り掛かった。

「やらせません」

「それはこっちのセリフだ!!」

その目の前にゾンビがさらに5体現れた。

それだけではなく、海とゆうにもゾンビが現れた。

「こんなものでは僕は止められません」

ソラは自分の回りに行きよいよく、風を巻き起こした。
ゾンビどもは吹っ飛んでいく。

ソラは走ってチェンソーを持っているゾンビどもに向かった。

「かかったな。長門ソラ」

「え？」

その時、上から何かの音がした。

「ソラ、上だ！！」

海の言葉に反応してソラは上を見る。

なんとそこにはもうすでに巨大な岩が落下していた。

あのゾンビは劣りだ。

上のほうにゾンビを出してあの岩を落としたのだろっ。

「アクセラレータ【一方通行】」

その瞬間、岩は地面に落ちてきた。

ギリギリ、瑞夫のほうには届かなかった。

だが、肝心のソラの姿がない。

「いた！！」

そのとき、海の近くにソラの声が聞こえた。

いや、聞こえたのではなく、ソラは瓦礫に頭をぶつけたみたいにしてその場にいた。

「そら、お前」

「きさま、お前のあの移動技では間に合わなかったのではないのか？」

瑞夫は驚きながら言う。

ソラは頭を抑えながら答える。

「確かに、【風進】だけでも、【一方通行】アクセラレータだけでも逃げれそうにもありませんでしたのでどっちも使わせてもらいました。初めて使いましたけどどうやら自分でストップはかけられないようですね」

つまり、ソラは【一方通行】アクセラレータの中で【風進】を使用した。

そのおかげで速さは掛け算のごとく上がっていく。

しかし、その掛け算はとめられず、進路に壁とかが無かったら一緒に進んでしまう弱点が出てくる。

「しかし、面倒なことはわかりました。どうやらあなたは数は今のところわからないほどゾンビを出せてしかも場所も範囲が無いのかのように出てくるくらいです」

面倒なことばかりわかって海とゆうは苦い顔をした。

「どうした長門ソラ。ここまでか」

さっきの岩でゆうの攻撃を破壊したのか、瑞夫はそのばでピンピンしていた。

「ソラ、とりあえずはあいつをぶっ飛ばす作戦を頼む」

「俺も及川に賛成だ」

「そ、そうですか」

いきなり2人に火が付いてきたのかソラに言ってきた。声は少し困っていたが気持ちは頼もしいばかりだった。

「では、次の作戦行きますよ」
「おうー!!」

第88章続く

第88章 死者復活・犯罪者

3人は一箇所に集まってソラは耳打ちで作戦を伝える。
通信できないこの状態で人に知らせないためにはこの方法しかない。

「お前ら、しゃべっている暇はねえぞ!!」

瑞夫はさらにゾンビを盛大に増やした。

瑞夫の後ろでは巨大なゾンビもいる。

完全に戦闘態勢だ。

「じゃあ、それでいくか」

「ええ」

「頼むぜ、海」

3人がそう言うってから一気にバラバラに動き出した。
一番瑞夫の近くに来たのはソラだ。

「行きます」

「そうくると思ったぞ。長門ソラ!!」

そう言うって瑞夫はさらに新たにゾンビをソラの目の前に出した。
しかもそのゾンビはソラに対抗するように刀を帯刀していた。

「第三抜刀術」

だが、ソラは気にしないように春風を構えた。

刀のほうのもち手は逆手で持っている。

ゾンビも同じ風に構える。

「【竜行破刀】」
りゅうぎやうははとう

その瞬間、ソラは一瞬でそのゾンビの後ろに来た。そして、そのゾンビはまるで何回も切られ傷跡を残して消えていった。

「っち、まねさせるのは無理か」

そんなこと言っている瑞夫だが、ソラの目の前はバズーカを構えているゾンビが3体いた。

「やっぱり、こっちのほうが都合がいいな!!」

そう言っただけのお手先の指令をする前に、瑞夫はあつたことに気づいた。

「そういえばお前の仲間はどこに行った？」

「さて、どこでしょう」

そう言っただけでソラは少しにやけた。

「まさか、後ろか!!」

「もう遅いです!!」

瑞夫が後ろを見た瞬間、ソラの言葉とともにゆづがさつき瑞夫が見ていた方向に現れた。

「なに!?!」

瑞夫はあわてて向きなおす。

だが、ソラがいったとおりもう遅い。
相手に後ろを見させる。

そのことで更なる隙を埋まらず。

しかも、さっきの行動により瑞夫も海とゆうにも気を配らなければならなかった。

「次こそ食らえ、【波空斬】！！」

ゆうの技が超至近距離で放たれた。

いや、正確には放れかけた。

ゆうの後ろに巨大なゾンビががちりゆうの腕を固定した。

「くそっ！！邪魔だなこいつら！！」

「ゆう！！」

ソラは春風ではなく、左手から風球を発射した。

その風球はゾンビにあたり、ゆうの手を離した。

「撤退です。ゆう！！」

「くそっ！！」

そう言ってゆうは後ろに下がる。

「ゆう」

「ああ。へ空間を回し、円となり切り裂けっ！！」
アクセラレータ

「【一方通行】」

2人は同時に瑞夫に向かって技を出す体制に入った。

ゆうは剣に詠唱を唱えながら力をいれ、ソラは右手にさらに大きく

風を集めていた。

「えんくうかいてんは【円空回転刃】！！」

「エアロ・ライフル【風ノ弾】」

2人は同時に技を放った。

「無駄だ！！」

しかし、やはりさっきの盾を持ったゾンビに技を防げられる。だが、技を防いだのはソラの攻撃のみだ。ゆうの攻撃はなんと一番高いところに飛んでいった。しかも、そこは瑞夫が下にいるところだ。

「貴様、まさか！！」

「さっきのお返しと言ったとおりです」

「くそっ！！」

瑞夫は巨大なゾンビで落下してきた瓦礫を防いだ。

「隙が大きくなってきたな」

その時、海が瓦礫と一緒に落下してきた。

実はこの海はずっとあそこにおいてこの攻撃をねらっていた。

海は強化された運動神経を利用して巨人を避けた。

「かいてんとつてん つきは【回転突転・月刃】」

海は思いっきり巨大化した刃を瑞夫に向かって振り落とした。

「くそっ！！」

その時、瑞夫が行った行動はなんと自分の生み出したゾンビを首をつかんでそのまま身代わりとして投げ飛ばして避けたのだ。

このことにソラはすこし複雑な思いをした。

あのゾンビは確かに死人の魂で作られている。

だからあんなふうになされてもおかしくは無い。

だが、ソラは今の行動にもものすごく不自然に思えた。まるでいつもやっていたかの鮮やかな行動だからだ。

「あぶねえな」

「お前、今のゾンビの投げ方、まるで人間を投げるような扱いだったな」

「はあ、なに言ってるんだおまえ」

その時、ソラはあのとときの瑞夫の行動を思い出す。

彼は確かにそのゾンビの首をつかんでいたのだ。

普通、ゾンビだけを投げるならもつとつかみやすいところがあるはずだ。

それなのに持ちにくい首を持ったのだ。

「まさか、人をこんな風になげたことがあるのですか？」

「あん？あるよ。妻と息子をな。あいつらひどいんだぜ、俺が優しくサンドバックのように扱ってやがっているのに警察なんか呼びやがって」

「家庭内暴力かよ！！」

「思い出しました。あなたは家族を拘束してそのまま川へ突き落としたあの比田井瑞夫さんですか？」

ソラは最近起こった事件を一通り思い出して答えを出した。

「あん？確かニュースにはなったからな」

「ええ。それ以前にそのことは結構詳しいほうですから」

ソラは結構警察署に行くのでそのことの情報が入りやすいのだ。

ちなみにこのことは熊田も結構怒っていた事件だからさらにわかりやすい。

この事件は名前のみが知らされていてその本人自体は見つからず、死体も見つからなかった。

しかし、警察はそのことを知っている。

理由は簡単だ。

瑞夫事態がこのことを手紙を使って暴露したからだ。

そのことでいろいろ問題になった人物だ。

「しかも、ドメスティックバイオレンスDVだけではなく、それ以外にも問題を起こしたそうで、しかもそのストレスの発散に家族を」

ソラは少し怒った声で言った。

「なに言ってやがる。家族は自分のためにあるものだろうが。俺がどう使おうがお前には関係ない」

その言葉がソラに対してのとどめの一言だった。

「アクセラレータ【一方通行】」

ソラは右手を差し出して「アクセラレータ【一方通行】を発動した。

「海。ゆう。あれ行きますよ」

「でも、あの作戦はお前はあまり使いたくなかったじゃ」

ゆうがそういう前にソラはその場にいなかった。

その瞬間、ソラはいつの間にか瑞夫の顔面に思いっきり蹴り飛ばしていた。

このスピードはさっき使った【一方通行】と【風進】アクセラレータを組み合わせた移動だ。

ソラは自分の危険を承知の上で瑞夫の顔面を蹴ったのだ。

「あなたにとって家族はそんなものですか!!」

ソラはそう大声で叫んでから後ろに【風進】で下がってきた。

「2人とも、あんな人に手加減は必要ないとわかりました」

ソラは完全に起こっていた。

家族を殺されたソラにとって家族をそんな風に扱うやつは本気で許されないのだ。

「そして、その作戦が終了したら後は僕一人で戦わせてください」

2人はその言葉にもものすごい重みを感じた。

これでは断ることもできない。

「了解。ただし、その作戦は俺たちも本気でやる」

「そうだな。お前の出番が無いぐらいにな」

「それはそれでかまいません」

ソラはそのまま鞘から刀を抜いた。

あの剣術を使用する気だ。

「絶対にあの人は許せん!!」

第88章続く

第88章 死者復活・空中

ソラは鞘から刀をぬいてそのまま瑞夫に向かってダツシュした。鞘と刀。いや、春風から赤い風の刃が大きく作られた。

「行きますよ」

ソラは回転し、一気に風を引き起こした。

赤い風は瑞夫を包みだす。

これで完全に瑞夫の視界を封じることが出来た。

「ゆう」

「了解！！」

その時、ゆうが風が巻き上がった中心から現れた。

台風の目と同じ、この舞い上がった風にも真ん中に穴が開いていたのだ。

ゆうは剣を下に突き刺すよう構えた。

「へ我に従う空間の玉よ、黒を持って悪を征せ」

落下中、ゆうは詠唱を唱えた。

この技はゆうが特に得意としている技だ。

「スベイシャル・デスボール
【黒球ノ青空間】！！」

突き出す状態になっている剣の回りに黒と青の球体がうつ出てきた。そのまま落下地点に向かう。

「くそっ!!」

この風の中では巨人のゾンビを出すわけにはいかない。
完全に逃げ道が一つしかない状態だ。

「バカが!!」

瑞夫はそのたった一つしかない逃げ道を見つけて、あるものを持つたゾンビを生み出した、

そのゾンビは巨大な大砲を持っていた。

そのまま瑞夫はその大砲の中に入った。

これはいわゆる人間大砲というやつだ。

だが、そのためのリスクは高い。

だが、瑞夫はそのことも計算に入れているはずだ。

瑞夫が入った人間大砲は一気に発射された。

その勢いにゆうは驚いたが、のけぞるわけには行かなかった。

ゆうは再びその人間大砲の瑞夫に向かって剣を構えなおした。

3つのボールはそのままゆうについている。

「わざわざそっちから来てくれるとはな」

ゆうは思いつきり剣を振りかぶった。

だが、その時。いきなり空中からある影が見えた。

「残念だが俺はお前と殺あう気はまったく無いんだよ」

空中から落下してきたのは巨大なゾンビだ。

どこから現れたかはわからないが、ゆうは完全に瑞夫を狙っているためにいきなりの狙いを帰ることは出来ない。

ゆうはなす術無く、そのまま巨大ゾンビの尻に敷かれた。

「ミスったな!!」

その時、いきなり瑞夫とゆうを閉じ込めた風はいきなり消えた。

「いきなり風が消えただと!？」

その瞬間、瑞夫の目にはとんでもないものが目に見えた。

「な、なんだこれは!？」

まんげつ さんらんめいひづき
「【満月・三乱明日月】!!」

海の声とともにその物体は落ちてくる。

それは完全なる三日月だった。

巨大な三日月がまるでカッターのように瑞夫に迫ってきた。

「くそが!!」

瑞夫は落下地点に何体かのキャノン砲を持ったゾンビを生み出した。
そして、一斉射撃であの三日月を破壊しようとした。

だが、残念ながら三日月はなかなか破壊できない。

この三日月は実は海の詠唱術の一つだ。

海はあらかじめ最初の風により一番高い場所へ飛んでいったのだ。

あの風はゆうの姿や瑞夫の行動範囲を減らすものだけではなく、海を気づかれずに上がらすことにも使っていたのだ。

「だったら!!」

そして、さらにはものすごく巨大な巨人を3体生み出してまでもその三日月をとめた。

これぐらいのだったらすぐにとめることは出来た。
同時に瑞夫はその巨人を使ってそのまま地面に付いた。

「はあ。はあ。俺をなめるなよ」

無茶したのか瑞夫はそうとう疲れてきている。

だが、今のソラにそんなことをゆっくりやらすソラは今にはいない。

いきなりものすごい風が瑞夫を襲った。

「約束どおり、ここからは僕があなたを破壊します!!」

ソラの怒りはものすごく高い。

これでは並の人間では止められない。

ソラは両手に春風を逆手で持った。

抜刀双剣術だ。

双剣螺旋術は回転を利用する抜刀双剣術の中の一種の剣術だ。

「行きます!!」

「餓鬼が!!」

瑞夫は双剣を持ったゾンビを生み出してその双剣をもった。
これでソラと対峙するつもりだ。

—ガキン—!!

お互いの剣と刀がぶつかり、激しい音が響く。

ソラはいつもどおりに回転を利用しつつ攻撃を続ける。

対して瑞夫はソラの刀を受け止めるのに必死だ。

「くそっ！！やれ、刀軍団！！」

刀を持ったゾンビが大量にソラに向かっていく。

「そんな数で、僕は止められません」

ソラはその場でとまって一気に風を周りに発生させた。

大きな渦巻きがソラの体を守る。

そして、風がやんだ頃にはその場にはソラの姿は無かった。

「空中か！！」

瑞夫がそう言つて上を見たときにはもうすでにソラは空中で構えていた。

ソラの構えは逆手持ちのまま春風をそろえて左側に構えていた。

「【風刃・一閃双剣】」

そのまま左に振つて大きな月牙を放った。

そしてそのままゾンビたちを一掃した。

「ちっ、だつたらこれはどうだ！！」

さらには巨人を3体生み出してきた。

だが、何も思っていないかのようにソラは突っ込む。

まずは一体目の巨人に向かって春風を振るう。

そのあと、そのゾンビに向かって鞘と刀のもち手の端っこを合わせ
て一気に回転させた。

ゾンビの体はまるでドリルに空けられたようになっていく。

その後、ソラはその巨人のあごを風に乗って思いつき蹴り飛ばした。

巨大ゾンビはそのまま倒れた。

「空中なら人間のやつは動けまい!!」

瑞夫は巨大ゾンビに指令した。

だが、その考えは安易過ぎる。

ソラの抜刀双剣術の中にもある剣術がある。

「やれ!!」

瑞夫が叫んだ瞬間、そこにはもうソラの姿は無かった。

次の瞬間、ソラは巨大ゾンビの頭の後ろにいた。

「遅いです!!」

その声に反応した巨大ゾンビは裏拳を繰り出すと同時に後ろに振りむいた。

だが、もうそこにはソラはいない。

「だから、遅いです」

そしてまたソラは頭の後ろに移動していた。

これは【風進】ではない。

風進は前にあるものはすり抜ける技ではなく、一歩一歩を高速に移動する技。

ソラが今使ったのは抜刀双剣術を使うときしか発動できない、まるで空を駆け回る移動術。

名を【風空翔進^{ふうくうしょうしん}】。

剣を翼のように見立てて移動するものである。

これは一歩歩くだけではなく、高スピードで移動する技である。

「さあ、行きますよ!!」

ソラはまたその場で高速で移動した。

その速さは相手には見えない。

「くそっ!!どこだ!!」

「ここです」

ソラの声が聞こえた瞬間、巨大ゾンビの体がいきなり切り裂かれた。移動しながらの攻撃。それに空中戦を制する剣技。

それが抜刀双剣術の中の剣術、【空走乱双剣術】くっそうらんそうけんじゅつ。

その名のとおり空を走るように攻撃する剣術である。

「くそっ!!」

最後の巨大ゾンビがソラの目の前に来る。

だが、その瞬間、ソラはすでに帯刀した。

「第五抜刀術、【剛砲破剣】こうほうはけん」

上から思いっきり脳天から足元まで一気に切り裂いた。

「後は、あなたのみですね」

「双はさせるか!!」

近づいたソラに瑞夫は最後の悪あがきに大量のゾンビを生み出した。どうやらもう巨人を出すまでの体力は無いようだ。

「て、てめえはなに俺が俺の家族を殺して怒ってやがる。おめえには関係ねえだろ」

「たしかに関係ありません。ですが、あなたは本当に愚か者です」

歩きながらソラは帯刀した。

「あなたは取り戻せないものを無くした。あなたを愛していた人たちはもうこの世の中にはいないのですよ!!」

ソラの言葉にはものすごい重みを感じられる。

「何を言ってやがるお前は」

「その家族の思い出をほしくっても手に入らない人だっていないのですよ!!」

ソラは家族を殺された。

そのせいでこの世に一人の力で生きてきた。

「そんな人にあなたは同じことがいえるのですか？」

「しらねえよそんなこと!!」

瑞夫は一気にゾンビどもにソラを襲わせた。

「第四拔刀術」

ソラの拔刀術の番号は決して強さの順番ではない。

この番号はソラが^{生み出してはならぬ業}生み出した順番であるのだ。
その中でも禁止技もある。

ソラは一気に鞘から刀を抜いた。

その瞬間、無数の刃の風により瑞夫ことゾンビたちを一掃した。

「くうらんとう【空乱刀】」

ソラは春風を縦にまわしてそのまま帯刀した。

瑞夫はもうその場から動かなかった。

これこそが第四抜刀術、生み出してはならぬ業禁止技である。

第88章終わり

第89章 集合

ソラたちは一様倒れた3人を一つにまとめて縛った。

「香奈、それに朱里と優菜。もう出てきていいですよ」

ソラは女子3人の名を呼ぶ。

その後、3人ともそれぞれの場所から現れた。

香奈はソラに言われたとおりその場において、朱里はゆうと約束してその場所から離れずに優菜は外にいて回りを見張っていた。怪しい人物はどうやら見てはいないようだ。

「みんな無事でしたか。あ、海」

安心の息を吐いた後、ソラは海に話しかけた。

「なんだ？」

「実は途中智実と出会いましたよ。事情も彼女から聞きました」
「なるほどな。しかもその状態だと智実はここにはいないようだな」

海はこの話を普通に受け入れてくれた。

そして、何で一緒にいない理由もわかっていた。

「やはりあの砂嵐か」

「わかったのはあの砂嵐がSⅠであることです」

ソラは気絶するまでに砂嵐をよく確認した。
そしてそれはSⅠそのものだった。

「で、これからどうする？」

「そうですね。とりあえずはみんなと合流したいところですね」

そう。今ここで何を考えても仕方が無い。
まずはどうやってみんなと合流するかだ。

「それなら俺に任せろ」

その時、ソラの後ろから声が聞こえた。

「あ、あなたは」

「よう、久しぶりだな。長門」

ソラが振り向いた先にいたのは第78章でソラと大激突した藤澤啓輔である。

彼は確かあのままどこかへ消えたと言ったとソラたちは聞いている。

「久しぶりだな本当に」

そう言っただけでソラに近づこうとしたときいきなり啓輔の首元にゆうつと海の武器が置かれた。

「お前はだれだ？」

「あの時ソラに襲ったやつだ」

「おいおい、お前ら面白いな」

そう言っただけで啓輔は不敵な笑みをこぼした。

「それで、藤澤さん。あなたはなににきたのですか？」

「かわいくねえ餓鬼だな。まあいい。話は簡単だ。俺がお前らの目

的に運んでやる」

その言葉にみな反応した。
だが、ソラのみ反応が違った。

「なるほど、あの砂嵐はあなたのS I、
【空気操作^{エアオペレーション}】が引き起こした
たものですか」

「ご名答」

啓輔のS I、【空気操作^{エアオペレーション}】は空気を操るS Iで、計算で出来れば風も操ることが出来る。
そう考えればあの砂嵐は説明ができる。

「じゃあ、つまりあんたが俺とソラたちをここまで連れてきたという
ことか」

海が冷静に聞く。

「そうだ」

「だったらほかのやつらはどこに行かせた」

「簡単な話だ。お前らの目的地だよ」

そう。

実は啓輔はあのまま全員を楓たちがいる場所へ連れて行つたのだ。
これではソラたちが来ることで全員合流できる。

「そうですか。ですが、あなたにも何か目的がありそうな気がします
が」

「またまたご名答。代わりにあんたらのパーティに入れてくれ？」

「つまり、僕たちの仲間になってくれるということですか？」

ソラはさすがにこのことは驚いた。
啓輔の性格なら誰かと群れることは嫌うはずだ。

「何か悪いものを食べたのですか？」

「俺はそんなに悪いやつなのか？」

さすがに信じづらいのでみんなにらんだ顔をする。

「交渉とするなら僕たちを正確に楓さんたちの場所に連れて行ってください。それが条件です。もし、それが成立して裏切った場合。僕はあなたを破壊します」

「お前、少し怖くなっただな」

みんなそのことに首を縦に振ってうなずいた。

「そんなことは無いと思いますよ。簡潔に言えばこれ以上仲間を悔しい思いをさせたくないのですよ」

「肝に銘じるさ」

「ありがとうございます」

これで一様は同盟を組むことになった。

その頃ほかのみんなは全員ソラたちの帰りを待っていた。
みんな心配でそわそわしている。

「楓さん。強いS I 反応が」

「え！？」

美咲の言葉に楓は驚く。

こんな状況にそんなに強力なS I相手に出来るのか。

「みんな。一樣全員で。それなら何とか戦わずにすむかも」

そう言つて全員外に出た。

「だからってなんでこんな方法しかないんだよ!!」

「だまれ、これ以外に方法があるというのか」

「あるだろ!!」

そこにはソラたちと口喧嘩しているゆうと彼女たちにとって見知らぬ男性だった。

もちろんその男性は啓輔だ。

「あ、楓さん。ただいまです」

ソラはみんなに気づいて挨拶をする。

「そ、ソラさん。これは一体？」

美穂がソラの前に来て聞く。

上目遣いでかわいいがソラはまったく気にしていない。

「この人がみんなをここまで飛ばしてくれた人です」
「はあ」

みんな美穂と同じく少し深いな顔をした。
まあ実際吹っ飛ばされたわけなので。

なのでそのことでゆうは啓輔に討論しているのだ。

「とにかくみなさん無事でよかったです」

「そうね。とにかくは急いで大星に戻らなければわね」

「ええ」

もう大聖堂を襲うボスはここにいるわけなのでもうここでの戦闘は終わった。

そして、最後の科学都市の町、大星が残っている。

「とりあえずは藤澤さんも僕たちと一緒に行くつもりですので」

「長門。その言葉は少し棘があるように感じるのだが」

とりあえずは役者はそろった。

「面白い会話しているねえ」

その時、どこからか高い声が聞こえた。

「あ、あそこです」

ソラはS.Iを感じて指を指す。

一番高い瓦礫の上にいたのはシルクハットをかぶった男性だ。顔を隠そうとしていかにも怪しい。

「なんですか。あなたは？」

ソラの問いに男はそこから降りて答える。

「簡単ですよ。長門ソラさん」

「僕の名を」

そう言って男はソラに近づく。

「あなたの過去を公開させてもらいます」

「！！」

その言葉にソラは激しく反応した。

「もう、遅いです」

男の目が不気味に光る。
そして話は過去にいく。

「今日の朝ごはんは」

体が小さい少年が一人、リビングの冷蔵庫を開けた。

「これかこれか」

その少年の目は遠くからわかるほど赤かった。

少年が取り出したのはさらに盛り付けられた料理だ。

「いただきます」

少年はそう言っで料理に箸をつけた。

今、彼の周りには誰もいない。

広いこの家で今は一人だ。

「ご馳走様」

長門ソラ。小学3年生。

この時、彼の人生は変わった。

第89章 終わり

第90章 Sky Start・すべての始まり

「ソラ君！！」

香奈の声が響く。

だが、ソラは何の返事もしない。

「あなた。ソラさんになにかしたのですか？」

朱里は男に銃を突きつけて言った。

その目はいつでも撃つてもいい目だった。

「お前らはじつと見ていてください」

だが、男は冷静に言う。

「お前らにも長戸ソラの過去を見せますから」
『！！！』

みんなその言葉に反応した。

ソラはまったく過去の話をしない。

いや、出来ない。

ソラの【達人ノ眼】^{マスター・アイ}の・能力の【記憶のかき回し】^{メモリーシャッフル}のせいでソラは
思い出そうとしても思い出せない。

「で、でもそれってソラのみは」

海があせって言う。

ソラの【記憶のかき回し】^{メモリーシャッフル}は消えるものではない。

だから、無理やり思い出せることが出来る。
だがその分、ソラの体に大きな影響を与えるのだ。

「大丈夫だ。あいつの精神力なら大丈夫でしょ。あなた方も彼の過去をみたいでしょ」

みんなその言葉を前に黙った。
彼の言うとおりだったからだ。
その過去はソラも知らないことがあるはずだ。
みんなはそれを知りたいのだ。

「スクリーン・アップ
【画面表示】」

香奈たちの前に大きな画面が表示された。

長門ソラ。

名の意味はどこまでも広がるという意味でつけられた。
しかし、小学生のソラにはまったくその意味を理解していなかった。
ソラが通っている星原小学校。
3年生であるソラは自分の教室に入る。

その瞬間、ざわついていたクラスがいきなり静かになった。
しかし、みんながしゃべっていないわけではない。
ひそかにひそひそ声は聞こえる。

「また来たよ」

「なんで学校にくるんだよ」

そして、その話の内容はソラに対しての文句だった。

ソラがこういわれる理由は簡単だ。
赤い目。

それが生まれつきの赤い目がソラをみんなから引き離していた。
ソラ自身もそのそのことを知っていたので反論はしない。
そのまま静かに自分の席に着く。

ソラは自分の机の中に手を入れた。
そこにあつたのは大量の泥だった。

（幼稚ですね）

もう何回こんなことされたのだろうか。
もう数えてもいない。

そのままソラは学校で一人だ。
ソラは侮辱しているやつらが学校中全体としても学校に来る。
それは親に心配されたくないからだ。
ソラのことを雄一大切にしてくれる両親がたった一つの支えになっている。

これ以上あまり心配してほしくないのだ。

まもなく学校の時間が終わり、ソラは自分の家に帰る。
だが、道中、会いたくも無いやつらに出会った。

「お前が長門ソラか！！」

それはいかにも餓鬼大将ともいえるデブだ。
学校でよく暴れている6年生として有名だ。

だが、ソラは無視して自分の家に向かう。

「ちょっと待てよ、細木さんに挨拶もねえのかよ」

隣にいる5年生ぐらいの男子がソラを呼び止めた。

ソラは見事にいやな顔をして振り向く。

その顔はいろんなツツコミをしている。

なんでそんなバカな口調。

逆だと思える名前。

しかし、ソラは声を出さない。

変に言うよりも聞き流したほうが効率がいいのだ。

これがバカに対するただしいやり過ごし方。

ソラはこいつら以外の人間は平等に見ている。

だが、なぜかそんな考えが彼の頭の中にある。

ソラはまた黙って歩き出す。

「おい、ちょっと待てよ」

その時、細木がソラの肩をつかんだ。

「ちょっと遊ばせてもらういぜ」

こいつら本当に小学生なのか。

そうつツツコミは一旦おいとく。

「聞いているのかよ!」

細木はソラに向かって腕を振りかぶった。
その瞬間。

ソラの顔には拳は来なかった。
変わりにそこで細木がうずくまっている。

あの瞬間。

ソラは一発蹴りを細木の腹にくり出した。
これは完全なる戦闘防衛だ。

この頃からソラの蹴りは生まれつき威力が高い。
ただのデブが普通にうずくまるほどだ。

ソラは無言で歩き出す。

ソラは家に帰ってきた。
親はいまこの家の中にはいない。

ソラの親は有名な科学者だ。
電腦技術を開発したほどの人である。

電腦技術とはそのまんまの意味で電腦、プログラムを現実に使える
ことをその技術と呼ぶ。
ソラの【デジタル・バンド電腦子ノ腕輪】はその技術の最先端のものとなっている。
ソラの父親、すばる昂はそれを家庭で使えるようにがんばって研究所に
いる。

母親の由美ゆみは父親の手伝いをして研究所にいる。
そのかわり、ちゃっかり夕方には帰ってきている。

今の時間は2時。

ソラは自分の部屋にいるか外に出るしか時間をつぶすことは無い。
友達は何だ。

部屋の中でも勉強以外はやることは無い。

ゲームなんてやったことは無い。

最近は少し料理も出来てきている。

もちろん食べるのは自分と親だけだ。

ソラは外に出た。

なんだかそんな気分だった。

だが、外に出ても何をするかの目的など無い。

公園でブランコに乗ったり川原で座って川を見るのだ。

実際、今のソラにとってはいまの人生はつまらないものだ。

最悪か、幸せといわれたらどちらでもない。

ただ、つまらなくなつて退屈。

ソラは公園に来た。

だが、子供がたくさん集まって遊んでいたのでソラはその場から離れた。

子供のためにお金もまったく持つてはいない。
だからこの地元で何とか時を過ごすしかない。

毎日の繰り返し。

その言葉が今のソラにはあっている言葉だろう。
何も変わらない。そんな日々。

ソラは川原に来た。

下に下りたら遠くで子供が遊んでいる。

だが、そんなに距離も近くは無いのでソラはそのまま座った。

ただ、川を見るだけ。

変わることは歩くか座るだけだ。

しばらく時間は経ち、ソラは立ち上がって歩き始めた。

まだ、川を見たい気分にいる。

「ん？」

その時、ソラの足に缶が当たった。

近くにはゴミ箱がそこにはあった。

ソラはそのままゴミ箱に捨ててまた歩いた。

しばらく歩いた後、一人の女の子がいた。

女の子はソラに気づいて話しかけてきた。

「ねえ。少しお話しませんか？」

その女の子はソラとそんなに背は変わらなかった。

多分同年齢だ。

髪は桃色のロングだった。

「……。いいですよ」

ソラは何も考えずに言った。

「私、音無詩音。おとなしおん君は？」

「長門、ソラ」

この出会いがソラの変わらない日常を帰ることになる。

第90章 続く

第90章 Sky Start・悪夢の始まり

ソラは音無詩音という少女に出会った。

「一緒にお話しようよ」

しかし、ソラは黙ったままだった。

ソラにはいま彼女と話す内容が無い。

「ねえ。聞いてる？」

詩音はソラの顔に近づいてニコニコと笑いながら覗く。
その仕草はものすごくかわいかった。

「でも、僕にはあなたに話す内容はありません」

ソラは我慢できずにしゃべった。

しかし、詩音はまだニコニコと笑っている。

「じゃあ、あなたのことを教えてほしいな。私もあなたに知ってほしいから」

「なんでそんなことを僕に？」

「私、友達いないから。昨日転校してきたから」

友達がいない。

その言葉は激しくソラに同意を誘った。

「そうですか」

ソラは自分では気づいてはいないが少し口元が笑った。

「僕も同じです」

それを聞いて詩音はうれしい顔になった。

これが、彼女との出会いの日だった。

それからソラは話した。

友達がいらないこと、親が博士だということ。
赤目のこと。

ソラにとっては彼女に話すことはだんだん快樂になっていた。
まるでたまっていたものが吐き出されていくように。

「ソラ君は。私とほとんど同じだね？」

「同じですか？」

ソラの話聞いて詩音はそうつぶやいた。

その言葉がソラはとても気になった。

「どういうことですか？」

「私の親も両働きだから、家では毎日一人なの」

ソラはこの言葉で確信した。

彼女がなぜこの場所にいるのか。

それはソラと同じ理由だった。

「でもね。なんかうれしいの。同じ人とこうやって話せて」

「……。僕もです」

ソラはまた少し微笑みながら言った。

この微笑と同じでソラは彼女を心から受け入れた。
しばらく時間は経ち。詩音はその場から立った。

「もう、時間だから」

「はい」

そう言っソラも立ち上がる。

「また会えるよね」

「明日もここに来ますよ」

その言葉が詩音にとってとてもうれしい言葉だったらしく、いきなりソラの手をとって上下に動かす。

「ありがとう。私も、私もきつと明日来るから」

そう言っ詩音はソラの手を離した。

そしてそのまま駆け上がった。

「また明日ね。ソラ君!!」

「は。また明日です」

手を振っている詩音にソラは手を振り返す。

「詩音」

この時、ソラは始めて彼女の名を名乗った。

次の日。

学校が終わり、家から帰った後すぐに例の場所に向かった。
ソラはまた昨日と同じ時間と同じ場所に来た。
そして、そこにはまた詩音がいた。

「あ、ソラ君。本当に来てくれたんだ」

「約束ですから」

そう言っソラは詩音に近づく。

「なにやっているのですか？」

近づく彼女は大木な木の枝を持っている。

「うん。絵を描いているの。ソラ君も描く？」

そう言っ詩音はもう一本の木の枝をソラに渡す。
もう一本あるところでソラがここにくることを信じていたのだろう。

ソラはうなずいたあと、地面を使っ描きだした。

「うん。これは自信作」

しばらく時間が経った後、詩音が額の汗をぬぐっ言った。
詩音はかわいい犬の絵を描いた。
レベルは小学生らしいレベルだ。

「ソラ君はどう？」
「ん」

そう言つて詩音はソラの元へ来る。

そこにはものすごくうまく描かれていた猫の絵があつた。

「こ、これ本当にソラ君が描いたの？」

「はい。昔からこういうこととしてしていましたので」

ソラは幼稚園の頃、これで絵を描くのが好きでものすごく上達した。最近描いていなかったので久しぶりとなるのだ。

「すごいね。ソラ君つてもしかして天才？」

「さあ、わかりません。誰かと競つたことありませんのでうまいともわかりません」

ソラはただ絵を描いているだけ。

一緒に競い合つたりすることは一回もない。

「しかし、もったいないね。私はいまソラ君と友達になつて楽しいのにみんなソラ君と友達にならないなんて」

「この目で近づきたいと思う人は君だけですよ」

「それってほめている。

「ほめています」

この会話のときソラは思う。

そういえば、彼女はソラの最初の友達となつていた。

友達が始めて出来たのでそんな感覚がまったく無かつた。

だが、これは心からうれしかった。

次の日。

ソラはまた詩音の場所に来ていた。
今日も詩音はいる。

「ソラ君は学校は楽しい？」

川を見ているといきなり詩音がそんなことを聞いてきた。
ソラには答えはすぐに出る。

「いいえ。退屈です」

即答のソラに詩音は悲しい顔になった。
でも、すぐにその言葉の理解をした。

「私も退屈。毎回おんなじことをするだけだもん」

ソラは詩音の言葉になんの変だとは思わなかった。
それは完全に自分と同じだからだ。

同じ、場所、変わらない人たち。
変わらない一人ぼっち。

「でも、そんな同じ日々を君が。詩音が変えてくれました」

ソラは上を向きながら言った。

今のソラのセリふは本人はまったく恥ずかしいと思わない。
だが、詩音はものすごく恥ずかしそうな顔をしている。

「あ、ありがとう？」

「ん？顔赤いですけど熱ですか？」

「な、なんでもないよ」

詩音は顔を振ってごまかす。

ソラは何のことかまったくわからなかった。

―ピリリリ。

その時、ソラの携帯がなった。

それは電話ではなくメールだった。

内容は今から研究室に来てくれとのことだった。

「詩音。僕」

「うん。いってらっしゃい」

「はい」

そう言っソラは走って向かう。

ソラは昴の研究室の前に来た。

そのままためらい無くソラはドアを開けた。

そして、そこには思いもしなかった光景があった。

「父さん？母さん？」

そこには血で染まっている部屋と血だらけの昴と由美がいた。

「お父さん！！お母さん！！」

らしくないほどソラは大声で叫んだ。

しかし、返事はない。

もうすでに息を引き取っていた。

「そ、そんな」

ソラは部屋の周りを見渡した。

ソラがここに呼ばれたってことはなにがあるはずなのだ。
そして、ソラの目に一つの箱が目に入った。

箱にはこう書かれてあった。

信頼なる息子。 長門ソラへ。

ソラの目から一気に涙があふれこんだ。

まるで信じたくない真実を知らされたかのように。

この日。

長門昂。 長門由美は何者かによって殺害された。

第90章 Skyll Start・終わりの始まり

あの日から一週間後。

長門夫妻のお葬式が行われた。

葬式が始まって数時間後、そこからソラの姿が無くなった。

「あ、ソラ君」

川原で一人座っているソラを詩音は見つけた。

悲しむようにソラはうずくまっている。

そして横にはあるものが入ったバックがある。

そんなソラを見て詩音は横に座る。

そして、申し訳ないように聞いた。

「終わりました。ですが、今はあそこには行きたくないです」

ソラはうずくまりながら答えた。

その声が聞けて詩音は少し安心した。

「でも、なんで戻りたくないの？」

「今は完全に話題が切り替えられて、僕を引き取る話になっていきます」

そう。

今はソラの身柄をどこかに預けるという話になった。

だが、誰もがこの赤目の少年を受け取りたくは無いのだ。

そして、ソラ自身それを嫌がっている。

「僕は、どこにも行きたくないのです」

ソラはここに居たがっている。

長門家の家のお金はすべて払い終わっている。

たとえ中にいる時間が少なくてもその思いでは大切なものだという思いを込めて建てられた家だ。

ソラはその家から離れたくは無いだ。

「ソラ君。かわいそうに」

そう言って詩音はソラを抱き始めた。

詩音の体は誰よりも温かった。

その抱きしめと同時にソラの涙はあふれていく。

「僕、ここに残りたいです」

「うん。わかっているよ」

ソラはそのまま泣いたままだった。

結局ソラはどこにも引き取られなかった。

それはソラ本人もうれしいことだ。

しかし、学校ではその噂が耐えなかった。

だが、ソラは普通に暮らす。

噂以外はソラにとっての普通の生活だ。

放課後になり、ソラはまたいつもの川原に来た。
またいつもどおりに詩音がその場にいる。

「そういえば、お父さんからなにか残してくれたんでしょ」

「ええ。赤色のリストバンドです。ですが僕にはまだ大きいです」

ソラは首を振って答える。

確かにソラの手元には昴が残した赤色のリストバンドがある。

その大きさは高校生のソラに合わせたような大きさだ。

「そのリストバンドと家。そしてこの眼はお父さんたちが残してくれた大切なものです」

「うん。そうだね」

ソラは微笑んだ後、詩音と一緒に微笑む。

この時がソラは一番楽しかった。

だが、その楽しい時間ももうすぐ終わる。
それをソラたちは知る余地も無かった。

日曜日。

この日でも2人は一緒に集まった。

場所はいつもと一緒の場所です。

「ソラ君は夢はあるの？」

木の枝で絵を描いている詩音が聞いてきた。

「僕の夢ですか。考えたことはありませんね」

ソラはそれを聞いてすこし笑いながら答えた。

今のソラにとって未来など考えていなかった。

「そういう詩音はどうなんですか？」

「うーん。私もないや」

詩音は一回考えてからペロツと舌を出してかわいらしく答えた。
ここでも2人は似たもの同士だった。

その時、2人の後ろに大きな影が来た。

「すみません。少しお尋ねしたいのですが」

「はい」

詩音が親切に答えた。

その男は黒のスーツにサングラスをかけている。
なんか怪しい。

「この娘を探しているのですが」

「どれですか？」

ソラもその写真を見た。

その写真には見たことがある少女が写っている。
その写真は間違っことなく詩音そのものだ。

「な、なんで詩音が？」

ソラは訳わからず聞いた。

だが、詩音はいつにもなく険しい顔をしていた。

「ソラ君。逃げるよ!!」

そう言って詩音はソラの手をつかんで逃げ出す。
男はその姿を見てグラサンを上げながら言う。

「捕まえろ。 インデックス【禁書目録】を逃がすな」
「はい」

男の後ろからさらに男たちがソラたちに遅いかかってくる。
子供では大人の早さにはかなわない。

「ソラ君。舌を気をつけて」
「へ？」

そう言った後、いきなりものすごい速さで詩音は走りだした。
これは本当に子供の足の速さなのか。

「逃がすな!!」

前からもさらに男たちは現れる。

「邪魔!!」

詩音はソラの手をつかんではいない左手を前に出した後、白い球体を連射して男たちに当てた。

男たちはそのまま後ろに吹っ飛ぶ。

（詩音？これって）

もう訳がまったくわからない状況だ。
その刹那、一番最悪の音が聞こえた。

―バキューン!!

この音は銃声だ。

そして当たったのは。

「ぎゃ、ぎゃああああああ!!」

ソラの左眼に、銃弾が当たった。

次々にソラの左眼から血が流れ出す。

「そ、ソラ君!!」

いきなりの出来事で詩音は止まる。

だが、これが男たちの作戦だった。

「いまだ!! 討て!!」

次々の射撃が詩音に当たる。

だが、詩音の体からは血は出てこない。

しかし、体は次々に無くなっていく。

足は完全に動かない。

「し、詩音？」

「大丈夫。怖がらせないように血は出さないようにしたから。体はもう動かないけど」

そう言って詩音はソラの左眼の傷を触る。

まだ血はあふれる。

今のソラは完全に左眼を失った。

しかし、男たちの銃声はまだやまない。
詩音の体はもうほとんど残らない。

「ソラ君。私もうだめかも」
「し、詩音」

いきなりの言葉にソラは驚く。

「あのね。ソラ君。私はソラ君のこと好きだよ」

その言葉はソラにとってもものすごく重く感じた。

「ぼ、僕も」

そして、ソラに言えることはこの一言しかない。

「僕も詩音のことが大好きです」
「ソラ君」

その言葉に詩音の眼から涙があふれる。

「うれしい。でも、これでお別れだから」
「詩音。どういっ」

ソラが言い終わる前に詩音はいきなりソラの唇にキスをした。
その瞬間、詩音はまるでソラの左眼に引き吸い込まれていった。

「な、なんだこれは？」
「し、おん？」

ソラの回りから大きな風が舞い上がる。

「うわあああああああああ！！！」

その言葉と同時にソラの眼からさらに涙があふれる。

「詩音んんんんん！！！」

さらに大きな風で大人たちを一掃した。
その場に残ったのはソラのみとなった。

——ソラ君。

声が聞こえた。

それはソラが愛した人の声だ。

だが、もう目の前にいない。

変わりにソラの左眼が復活していた。

だが、そのせいで詩音が死んだことをソラはわかった。

「詩音」

ソラはこの一ヶ月もしないまま、大切な人を3人も失った。
これがすべての始まり。

このあと、自分の力に気づき、新しい生き方をするのはまた別の話し。

第91章 向かう先は

ソラの記憶を見てみな黙りきってしまった。
そして、その沈黙を破った一人の男がいた。

「なるほど、最強のS I、【インデックス禁書目録】は君が隠し持っていたということですね!!」

「ど、どういうことですか？」

男の叫びにより、香奈は聞き返した。
あの映像で彼になにか起こったのか。

「簡単な話ですよ。あの少女が最強のS」

「バキッ!!」

男がそこまで言った後、いきなり前からぶつ倒れた。
そしてその後ろには春風を持ったソラがいた。
春風は帯刀してあるがなぜか剣先から赤い刃が出ていた。

「貴様、何を」

「僕の記憶。勝手にみないでください」

ソラはそう言った後、立ち上がった男の足に向かって帯刀した春風ではたいた。

風の力で持ち上げられて男はバランスを崩す。

「貴様、なぜにS Iを。体には何の反応も無いぞ!!」

「人の過去を勝手に見せた人には教えません」

ソラの眼は確かな怒りがこもっていた。

そのままソラは春風で男の体を何回もぶっ叩いた。
男はよろけた後、倒れた。

「そ、ソラ君」

「皆さん。とりあえずは話は後でこの場を離れましょう。嫌な気がします」

香奈の心配する声を阻むようにソラは言った。

それはソラにとっての気遣いだと香奈はわかった。
なので、少しほっとしている。

「わかりました。では今すぐ手配します」

ソラの言葉に朱里は移動するために自家製ヘリコプターを呼んだ。
そう。最初はみなヘリコプターだと思った。

「あ、朱里さん？これは？」

「ええ。人数が多いの」

驚くソラたちに朱里は平然に説明しだした。

「小型飛行船です」

そう。そこには飛行船が目の前にあった。

これはソラたちは驚くはずだ。

ちなみに運転手は左京さんらしい。

あの人は一体どれだけのものを操作できるのか。

「いいから早く乗ってください」
「は、はい」

とりあえず、すごいというのはわかった。

飛行船の中でソラたちはソラの記憶のこの話を始めた。

「それで、少年。あれは本当に君の記憶か？」
「はい」

竜司の言葉にソラは迷うことなく答えた。
とりあえずはこの質問をしなければ話は始まらない。

「ソラ君にあんな過去があつたなんて」
「しかもサラツと一人暮らしの詳しい理由まで知っちゃったし」

優菜と雪は残念そうに言った。

「いいですよ。みんなには見てほしかったですし、それにおかげ
でほとんどの謎がわかりました」

「最強のSⅠか」
「はい。【禁書目録^{インデックス}】の使い手は、音無詩音です」

あの過去を見ればそういうことがわかる。
そして、ソラの左眼のこともわかる。

「多分、長門の左眼は、【魂ノ救済^{ソウル・リリーフ}】。自らの魂を人のある人の部
分に吸収させて、魂を残す【禁書目録^{インデックス}】の技の一つだ」

インデックス

生み出したならぬ技

【禁書目録】はさまざまな禁止技を覚えるS.I.

啓輔の言葉はものすごく説得力がある。

「ちなみに、発動条件は粘膜接触。つまりキスだな」

『キス！？』

啓輔のキスという言葉に何名かの女子が反応した。誰というのは別に言わなくてもわかるだろう。

「ソン君は、もうすでにキスの経験を」

「ゆ、雪。言い方が」

「つまり、ソラ君のファーストキスはもう無い」

「ゆ、優菜まで」

完全に2人は変なところにスイッチが入ったようだ。

「そ、ソラさん」

「な、なんですか？」

朱里に言われてソラは振り向く。

だが、そこにはソラにキスをしようとしている朱里がいた。

「ま、待って！！」

「お兄ちゃんはこの場所で取らせはしない！！」

その刹那、美穂とあさみは一気に朱里を封じてくれた。ソラはいきなりのが過ぎて少し安心した。

「あの、ソラ君」
「香奈？」

香奈は少し心配した顔でソラにたずねてきた。
その顔で深刻なことだとソラは感じた。

「ソラ君は。今でも彼女のことを」
「好きです。多分？」
「多分。ですか？」

ソラのあいまいな言葉に香奈は首を傾げる。

「ええ。あれから僕は愛というのが良くわからなくなりました。そして、僕が愛した人は亡くなってしまふ。それは早く」

ソラは静かに言った。

確かに、ソラのあのときの積んできた日常はたった1ヶ月もしないで崩れ去った。

それでも、ソラは生きようとしたのだろう。

「藤澤さん。教えてください。僕は、インデックス【禁書目録】を、詩音の力が使えるのですか？」

「わかったことは一つある」

啓輔はソラの言葉を無視するようにいった。

「多分、お前が自主的に使うのは無理だろう。そして、今言ったようにお前の左眼には少女の魂があると」

「はい」

「つまりだ。少女は体こそ無いが、生きているんだ。そして今は寝

ている」

啓輔がそこまで言ったとき、ソラは気づいた。
やっと気づいたのだった。

「まさか、僕の覚醒は詩音が起きるときに発動するのですか？
いや、起きたから発動する」

「そういうことだ。そして、少女は多分、お前の左眼から外の世界
を見ている。そして、お前を助けようとする」

「つまり、僕は使えないけど、起きた詩音は使える」

この言葉により、みんなうれしい顔になった。

それは最強のS.Iを自分たちの手元にあるということなのだ。

「そういうことだ」

そう言うて啓輔は立ち上がって歩き出した。

「ずいぶん詳しいのだな」

その時、壁際に海が啓輔に向かって話した。
確かにここまで知っている啓輔は怪しい。

「まあな。お前にはまだわからんよ」

「どういうことだ？」

そついったまま啓輔はまた歩き出す。

「どこに行く気だ？」

「トイレだ。トイレ」

そう言っ腕を上げながら啓輔はトイレに向かった。

「海くん」

啓輔が下がったのと同時に智実が海の元に来る。

「大丈夫だ。とにかく、こちらには起死回生の光があるからな」
「そうだね」

お互い少し笑った。
そして、ソラたちは大星に向かう。

そのころ大星は非常に大変なことになっていた。
火事は大量に発生し、木が大量になくなっている。
そして、アンドロイドがたくさん増殖していた。

「手が空いているものは傷の手当か増援にこい。モタモタするな！」
「！」

熊田が大声で叫ぶ。

今は警察も特殊武器で対抗している。

これで今は何とかこらえているものだ。

「熊田！！これは何だ？」

「あ！？」

上司らしき声が熊田を呼ぶ。

熊田は嫌な顔をしながらいく。

だが、そこには最悪な光景が広がっていた。
それは空が、黒色に染まっていた。

「こ、これは」

そして、そこから大量の魔獣が降り注いできた。

「最悪だ」

第91章 終わり

第92章 着替えと魔獣の集団

ソラたちはその時、制服で戦うわけには行かないので朱里の好意に着替えを行っていた。

「これはどうだ？」

炎治が男子更衣室から出てきて服を見せる。

だが、残念ながらその服は朱里が用意したものであつて炎治のものではない。

実際朱里は上げるといつているのでいいかもしれないのだが。

ちなみに着替えているのは制服を着ていたメンバーと、あまり普段いい服を着ていない海と智実も一緒に着替えている。

「お前はもうちょっと落ち着けないのか？」

「まあ、こんないい服着たらテンション上がるよな」

海とゆうも一緒に出てきた。

ゆうはチックのシャツとジーンパンで、海は裾が長いパーカー見たいのを着ていた。

海の服のセンスは一体いいの悪いのかわからないほど似合っている。

「おい、ソラはどうした？」

レンジはまったく姿を見せないソラのことを聞いた。
しかも、更衣室からは人の気配がしない。

「ソラならさっきメイドさんに連れて行かれたぞ」

「なにやってんだあいつは」

男子メンバーは呆れていた。

「しかし、なんでソラを」

「ソラさんには特別な服をご用意させました」

その時、女子更衣室から声が聞こえてみんな振り向いた。そこには言葉の主の朱里が新しい服をきてその場にいた。ほかの女子たちもその場にいた。

朱里は半そでの黄色の服にフリルが付いたロングティアドスカート。

優菜は紫のノースリーブの服で腕には黒い布を巻いてひざまでのサ―キュラスカートをはいている。

雪は白のＴシャツに青色のノースリーブの服を羽織っており、サンレーブリーツミニスカートの中にスパッツをはいている。

美穂はネクタイつきの赤いシャツを着ていて、短いズボンをはいている。

智実はノースリーブの水色の服とティアドロングスカートを着ている。

香奈はノースリーブの白のシャツの上に袖が短い桃色の服を羽織ってプリーツミニスカートをはいている。

みんな個性があっている。

「みんな楽しく着替えていたようね」

雫が更衣室から出てきて言う。

ちなみに雫の服は青色のワンピースの上に袖ありの服を羽織っている。

る。

「ちなみに、香奈ちゃんの服は私たちが決めました」

「え？なんでだ？」

優菜の言葉にゆうが聞き返す。

「香奈ちゃん。ものすごくスタイルがいいのに大人っぽい服を着ようとしなから」

「うう。なんか疲れました」

「なんで？かーちゃんは胸が結構あるのに腰が細いからみんなうらやましいのだよ。もちろん私もね」

香奈はものすごく顔を赤くする。

だが、智実以外、ここにソラがいないことばかりしている。

香奈のみ、その逆だったわけだが。

もしこの場にソラがいたら恥ずかしくってここには出てこれない。そう思ったときだった。

「み、皆さん。すみません。め、メイドさんたちがなかなか離してくれませんでした」

ソラが疲れながらその場に登場した。

ソラの服装は白のＴシャツに、黒に赤の線が入っているパーカーの生地を使った半そでの服を羽織っていてジーンズを履いている。見た目は別に特別に作られたようには見えない。

「やっぱり、ソラさんにはその服が良く似合います」

「まさか、この服を着せるために僕を」

「はい」

ソラの疲れている言葉に朱里は元気良く微笑みながら言った。
さらにソラの疲れが増す。

「まあ、いいですが。それよりも大星にはもう着きそうですか？」
「おい、やばいぞ！！」

ソラがそう言ったとき、外を見ていた啓輔が声を上げながらこつち
に来了。

「どうしたのですか？」

「いいから外を見てみる！！」

「わかりました」

そう言って朱里は持っていたボタンを押した。

その時、いきなりリビングといえるこの部屋の中心にいきなり大型
のテレビが出てきた。

「こんなこともあるうと思ひまして」

「じゅ、準備がいいですね」

もうなんて言っているかわからないソラだった。
みんなも同じ気持ちだ。

「では、この飛行船についている外のカメラを」

そう言って朱里が言ったときテレビがいきなり映りだした。
そしてその動画は大星そのものの風景だった。
だが、違うところが一つある。

「な、なにこれ？」

外には黒い空間が広がっていた。
そこからなにか得体の知れないものが飛んでいた。

「ソラ君。これって」

「ええ。魔獣です」

ソラの言葉にみんな驚く。
今のソラの眼は魔獣たちを捕らえていた。

「朱里。急いください。みんなが危険です」

「わ、わかりました」

そして、大星では。

ソラたちのクラスメイトの秋、遠山、佐藤、道長、進藤、近藤ほか
二名はわけのわからない事態に混乱しながらも逃げていた。

魔獣のことも知らない8人はもう逃げるしかなかった。

「なんだよ。あいつらは」

誰もいない場所に8人は身を潜めた。
やっと人呼吸できる。

「本当に。あんな気持ち悪いの始めてみるわ」
「秋。大丈夫？」

「う、うん」

女子たちは体力に問題があるため、ここに良くこれたと思ってもらいたいだろう。

だが、問題はまだまだある。

「しかし、長門は一体どこに行っただんだ？」

「蒼希さんもないし」

しかし、今は人の心配をしているわけにはいかない。
その瞬間、いきなり天井にいきなりヒビが入った。

「みんな！！ここから出る！！」

進藤の言葉により、みんなすぐにその建物から出た。
その刹那、天井が一気に破壊された。

「そ、そんな」

そしてその上には巨大な魔獣がいた。
しかも形は虫型。
ものすごく気持ち悪い。

「な、なにこれ、なにこれ!？」

佐藤が驚きで同じ言葉を連呼する。
ちなみに佐藤は大の虫嫌いだ。

「こ、こんなのもいるのかよ」

「ギヤアアアアアン！！」

ほえる魔獣にみんなは動けなかった。

そして、そんなみんなに魔獣は容赦なく襲い掛かろうとする。

エアロ・ライフル
「【風ノ弾】」

その瞬間、光の速さのごとく、風の弾が魔獣を吹っ飛ばした。

「香奈と優菜はみんなの保護を」

「はい」

「うん」

そっついながらソラは魔獣の前に現れる。

同時に香奈と優菜はみんなの前に現れる。

「な、長門君？」

「それに大木さんと蒼希さん？」

ついに彼らに自分たちの秘密を伝える日が来た。

第93章 避難所

秋たち前にソラたちが現れた。

この登場に秋たちはまったく理解していなかった。

「虫型の魔獣ですか。始めてみましたね」

「ソラ君。私たちは何回か見たわよ」

優菜がソラの言葉に反応して答える。

「どうやらソラがいない間、香奈たちが戦った魔獣の中で虫型のがいたのだろう。」

「そうですか。さて、僕が相手ですよ。魔獣」

「そんな。長門が戦えるのかよ」

「信じる。それだけです」

道長の言葉に香奈がそう言った。

香奈たちもそれぐらいしか今はやることが無い。

「ギアアアアアン!!」

魔獣はほえて長い触角をソラに向ける。

ソラは冷静に息を一回ゆっくり吐いてから春風を構えた。

「第一拔刀術【無刀】」

一瞬の間に抜刀。

魔獣の触覚が真っ二つになったとの同時にソラは帯刀する。

「ギヤアアアアン！！」

アクセラレータ
「【一方通行】」

ソラは春風を持っていな右手を魔獣の前に出した。
そして、その前には風の道が広がる。

エアロ・ボム
「【風ノ爆弾】」

ソラの右手に風の球が一気に消えた。
その瞬間、大きな爆風の風が魔獣を襲った。

「ふう。何とかうまく出来ましたか」
「い、今のは一体」

今の光景に秋たちは驚いていた。
それは魔獣のこともそうだが、ソラがそれを撃退したことも驚いている。

「話は後にします。とりあえずは皆さんを安全な場所へ」

ソラの言葉に香奈と優菜はうなずいた。
そのまま安全な場所に連れて行くしか方法が無い。
だが、今のこの場所に安全な場所はあるのか。
ソラたちはそのまま走り出した。

「な、長門君。これって」

秋は走りながらソラに聞いた。

「見てのとおりです。僕らは今まであんな魔獣を倒していません」

「そう、なの」

秋は少し悲しそうな顔をした。

「え、じゃあ蒼希さんも？」

近藤が驚きながら言った。

しかし、誰もその答えを言わなかった。

いや、当たり前のこと過ぎて言う必要は無かった。

「着きました。ここでしばらく非難してください」

ソラたちが来たのは広く頑丈な建物だ。

中に入ったらたくさんの人がいた。

特に学生が多い。

「ここは大星にいた人たちをここに避難させた場所です。あなたたちもここにいてください」

「お、おう」

その時、一人の少女がソラたちの元に来た。

「おう、なんだあの美少女は？」

「ソラさん」

道長の反応は無視してこっちに来た少女、美穂はソラに話しかけた。
秋と道長は不愉快な顔をした。

「なんですか？美穂ちゃん」

「怪我人が多くって、香奈さんをお借りできますか？」

どうやら怪我をしている人も多数いるようだ。

「お借りするって、香奈はいつ僕の所有物になったのですか？」

「ふ、ふえ」

ソラの言葉により香奈はものすごく顔を赤くした。

そんな香奈をソラ以外みんな不愉快な眼で見た。

「まあ、怪我人はすべて香奈に任せます」

「は、はい」

そう言って香奈は怪我人がいる所に行った。

「じゃあ、皆さんは学生がたくさん集まっている場所に行ってください」

「男女は一緒ですか？」

「いえ、別です」

道長の言葉にソラは冷静にツツコンだ。

「長門君はどうするの？」

「僕らは外に出ます。まだ外に残っている人がいるかもしれないので。優菜はここに残っていてください。美穂ちゃんは僕についてきてください」

そう言ってソラは出口に向かった。

「あ、言っときますが、ここも必ず安全とはいえないということとはわかっておいてください」

ソラの言葉にみんなうなずいた。
そして、また出口に向かった。

美穂も言われたとおりにソラについていった。

しかし、秋たちはここで何をしていいのかわからなかった。

「私たち。これからどうする？」

佐藤が聞いてきた。

だが、誰も答えない。

「真美は、どうしたいの？」

「うん。そうねえ。とりあえずはお手伝いしたいな」

「お手伝い」

秋はその時思い出した。

香奈が怪我人の世話をしていることに。

「私、蒼希さんのところに行って手伝おうかな」

「あら、ライバルを監視するの？」

それを聞いた遠山がからかいながら言った。

「ち、違うからー!!」

「でも、いいじゃないの。私たちも行くわ」

「ええ」

そう言って女子たちは香奈がいる場所に向かった。

怪我人がいるといわれる場所に秋たちは来た。
香奈はどこにいるか聞いてからその場所にきた。

「怪我、治しますね」

そう言っただけで香奈は自分の手に光を出して怪我を治す。
その光景を秋たちは見てしまった。

「これって」

「S I。です」

後ろから声が聞こえて秋たちは振り向いた。
そこにはたくさん荷物を持った朱里がいた。
朱里もここで手伝いをしているようだ。

「S I?」

秋たちにとっては始めて聞く名だ。

「はい。人の体に潜む力の事です。私も、香奈さんも優菜さんも
雪さんもそしてソラさんも使えます。実際、あなたたちは一回見て
いるのではないのでしょうか」

3人はその時、ソラがあの時魔獣を倒したときのことを思い出した。

「まさか、あれが」

「ええ。私たちはここにいらっしゃる皆さんをお助けするためにここに来ま
した」

そんなことを聞いてしまって秋たちはしょんぼりしてしまう。

「なので、逆に助けてくださると本当に助かります」

この言葉で3人とも少し明るくなった。

人はたった一言でも人を変わらせることが出来る。

「ですので手伝ってくれと香奈さんはとても感謝してくれると思いますよ」

朱里は微笑みながら言った。

しばらく時間が経ってソラが新しい人を連れて帰ってきた。

「ここが、避難所ですか」

「はい。しばらくはここにいてください」

そこにいたのはあゆと楓だった。

「あゆと楓ちゃんらは学生のところですね」

「ん？呼んだ？」

近くにいた大人の楓が言ってきた。

「いや、楓さんではなく楓ちゃん」

「ん？」

「なんかややこしいですなあ」

確かに名前がややこしくなっている。

そこであゆがある提案してきた。

「では、ソラさんもかえちゃんと読んでみたら」

「そうですね。そっちのほうがいいですね」

相変わらず何も感じ取っていない。

だが、楓はものすごくうれしい顔をしている。

ちなみに美穂はものすごくうらやましい顔をしていた。

しかし、その少し楽しい時間はすぐに過ぎた。

その瞬間、ソラの左眼が反応した。

同時に【超能力ノ眼・輪^{スキル・アイ リング}】が発動した。

その眼にあゆと楓は驚いていた。

「上です。みんなさんここから離れてください！！上から強力なS
I反応が発生しています！！」

その言葉の後にいきなり天井が溶けたように無くなった。

そして上からいきなり人が一人振ってきた。

体が少し細めの背の高い男が一人いた。

「いたな。長門ソラ」

「あなたは一体」

ソラは感じ取っていた。

この男から今までに無い強力なS I反応があった。

第93章終わり

第94章 NoBreak・元素破壊

いきなり現れた男はソラの名を叫んだ。
回りのみんなは一斉にソラを見た。

「僕に何か用ですか？」

「簡単な話だ」

男は一回下を向いた。

「死んでもらう」

そしてものすごく怖い形相をしてソラを見た。

ソラはその顔に何かの恐怖感を感じた。

そして次の瞬間、いきなり何かの大きなS I反応がソラに襲ってきた。

「エアロ・ブレイカー
【風ノ破壊者】」

ソラの回りから大きな風が台風のごとく吹き荒れた。

そして、ソラの風と何かのS I反応がぶつかった。

ソラはこの時、ものすごく嫌な予感がした。

それはあのときの天井が溶けるという現象だった。

だが、このS I反応を見てみれば溶かすものではない。

それが何かわからなくものすごく不安だった。

次の瞬間、ソラは何か【エアロ・ブレイカー
風ノ破壊者】から何か変な反応を感じ取れた。

その反応とはいままでに無いものでこのS Iの目的でもあることだ。

(まさか、【エアロ・ブレイカー風ノ破壊者】が破壊されている)

破壊するS Iが不思議なS Iによって破壊される。

それはつまり、あの男のS Iは破壊するのだろうか。

そして次の瞬間、完全に風は消えていった。

「ソラさんのS Iが」

「消えた」

近くにいた美穂と楓は驚いた。

エアロ・ブレイカー

【風ノ破壊者】は、風を使い、S Iを破壊するS I・

また、物体にもダメージを与えることも出来る。

そのS IがほかのS Iに破壊されたのだ。

「あなたも破壊をつかさどるS Iですか」
アフソリユート・ゼロ

「ま、そのとおりだ。俺のS Iは【元素破壊】。名前どおり元素を破壊するS Iだ」

「元素、破壊」

ソラはわかった。

もしこのままぶつかれば自分が負けるということを。

「ちなみに今破壊したのは」

「酸素(O)。ですか。風が必ず必要なものが無ければ僕のS Iは発動しませんから」

「正解だ」

男はにやりと笑って答えた。

しかし、この状況で早くもソラに打つ手が無くなった。

「つまり、さっきの天井は鉄（Fe）を破壊したことに無くなった物体は消えて消滅した。そういうことでしょう」

「理解力があるよい餓鬼だな」

「それはどうも」

お互いにらみ合う。

この騒動に香奈たちがソラたちの下にきた。

「ソラ君」

「香奈。これを預かってもらいませんか」

そう言っソラは春風を投げて香奈に渡した。

しかし、みんななぜ武器を香奈に渡すのかがまったく意味がわからなかった。

「ソラ君。これって」

「今回は春風は役に立ちそうにもありませんから、預かってください」

ソラにそういわれて香奈はぎゅっと春風を抱いた。

「はい」

香奈は決心した目で答えた。

その答えにソラは安心した顔をしてまた男に振り向いた。

「さて、名前ぐらいは教えてくださいよ。会話が成立しませんし」

「そうだな。俺の名は東宮桐谷だ。あずまみやきりや覚えておけ」
「はい。しっかり覚えておきます」

そう言った後、ソラのまわりから赤い風があふれ出す。
どうやら戦闘態勢は万全のようだ。

「楓さん。後をお願いします」
「わかったわ。みんな着いてきて」
「そうはさせるか」

その瞬間、いきなり下から地面が盛り込んできた。
しかも、その量が半端なくでかい。
これでは移動が出来ない。

「お前らは長門ソラが死んだあとにでも殺してやる」
「それは、安心しました」

桐谷の言葉のあとに言ったのはソラだった。
みんなこの言葉に驚いている。

「どういうことだ」
「簡単な話です。僕が死ななければいい話ですから」

簡単に言えばそういうことになる。
ソラはまったく死ぬ気はない。

「ならいいだろう、お前に俺だ倒せるのか!？」
「やってみなければわかりません」

ソラの眼は完全に希望を見失っていない眼をしていた。

「行きます【風球】」
エアロボール

ソラの両手に風の球が出てきた。

ソラはその球を飛ばそうとはせず、そのまま桐谷に向かってダッシュした。

完全にソラは接近戦に挑む気だ。

「接近戦か。だが、俺には問題ないことだ」
「そうですか」

ソラが持っている風球が一回り大きくなった。
そのままソラは桐谷に向かって腕を振りかぶった。

「無駄なことだ!!」

桐谷に近づいた風球は次の瞬間に消えていった。
だが、消えたのは右手の風球だけ。

ソラはそのまま体を一回転して裏拳を使うように風球を放とうとした。

しかし、その風球も瞬間的に消えていった。

「お前のS Iの武器はもう無い!!」
「それはどうですか？」

ソラは風で加速したまままた体を自回転させた。

いままでのソラの戦いでは、使えない武器はいままで囷して使われていた。

そのため、今回の囷は【エアロ・ブレイカー風ノ破壊者】だ。
そして、本当の狙いの武器は昔から使ってきた武器だ。

「掛かりましたね」

足だ。

ソラのいままでの脚力がこの状態での一番の武器となる。

「ちい！！」

桐谷はバックステップで避ける。

空振りをしたが、すぐに体制を整える。

そのまま桐谷を追うようにダッシュする。

「逃がしはしません」

ソラは体の回りに【風球】エアロボールを6個ほど出した。
そしてその中の2つを桐谷に向かって放った。

2つの風球は桐谷にたどり着く前に消えていった。
もちろん放たれた風球は踊りだ。

その瞬間、ソラは【一方通行】アクセラレータを使い桐谷の真正面に来た。

「エアロ・ソード【風ノ剣】」

ソラの手から風で作られた剣をそのまま桐谷に向かって切りつけた。
た。

だが、桐谷に当たる前に剣は消えてしまう。

ソラはそれを確認した後、後ろに一旦下がった。
だが、後ろの足が地面に着いた瞬間、その場からソラは消えた。

「後ろか」

桐谷はそう言った後、ソラが桐谷の後ろに現れた。
この移動は【風進】だ。

「ちい！！」

桐谷は地面を盛り上げてソラをその場から切り離した。
ソラは【風進】で後ろに下がる。

「使えないから自分のS Iを圏にするやつは初めて見たぜ」
「それはどうも」

この戦いを見ていた秋たちは完全に口をポカーンとあけていた。

「なに、これ？」

「これが長門君が今までやってきたことなの？」

秋と佐藤は驚きながら言った。

「ソラ君は昔はS Iが使えなかったのですよ」

その2人に香奈は話をする。

2人は香奈の言葉に聞き入ってしまったている。

「だからこそ、S Iが使えない状況に馴れているのです。今までの
苦しみがソラ君をこの状況に対応させているのです」

香奈の近くにいた朱里もその言葉を聴いて黙ってしまった。

朱里もソラのS Iの苦しみを見てきたのだから。

「でも、2人もS Iを使えるんでしょ」

その秋の言葉に香奈と朱里は黙ってしまった、

「そうですね、私は人を癒すことしか出来ませんし」

「私のS Iでは対抗するどころか足手まといになってしまいます」

S Iといっても地球上に存在するもの。

それに適応している元素は簡単に破壊されてしまう。

「今は、私たちはソラ君の勝利を信じるしかありません」

第94章続く

第94章 NoBreak・元素に打ち勝てる武器

ソラの回りの風がさらに強くなる。

そして、両手に大きな風球が作りだされる。

「次、行きますよ」

そう言ってソラは桐谷に向かってダッシュする。
その間、風球はさらにでかくなる。

「無駄だ！！アフソリユート・ゼロ【元素破壊】！！」

ソラの眼の前に大きなS.I.が出てくる。

これはまさにアフソリユート・ゼロ【元素破壊】である。

だがソラはそのままダッシュし続ける。

そして一気に左手を出して風球を桐谷にぶつけようとする。

だが、すぐにその風球は消えてしまう。

その瞬間、いきなりソラと桐谷の間に煙が舞い上がった。

桐谷はその煙に目を閉じてしまう。

煙が減ったときに桐谷は目を開ける。

しかし桐谷の前にはすでにソラはいない。

「その手に何度も引つかかるかよ！！」

桐谷はすぐさまに後ろを向いた。

思ったとおり、その場にはソラがいた。

桐谷はそのままソラを手で掴み取ろうとする。

もちろんソラもそのまま捕まる気はまったく無い。

ソラは左手を桐谷の前に出して風を巻き起こす。

その風を使い、ソラは後ろに下がる。

そして風球を持っている右手の風球を桐谷に向けた。

その瞬間、風球から小さい風球が一気に連射された。

エアロボール
【風球】に並び、【風ノ連射球】だ。

「そんな攻撃は俺には通じはしない」

桐谷の言うとおり、風は次の瞬間に消えてしまった。

だが、その風からあるものがバリバリと音をしたものが出てきた。

「で、電気か!!」

「美穂ちゃん特製の電気球です」

ソラはあらかじめ美穂に電気球を作ってもらっていて、右手の風球の中に仕込んでいたのだ。

実際、さっきの煙も煙球を風球に仕込んでいたのだ。

作り方は簡単、ものを持ちながら風球を発動したのだ。

「さあ、痺れなさい」

遠くにいる美穂の声の元に電気球ははじけだした。

これであることがわかるはずだ。

「ふん!!」

しかし、桐谷の周りの電気はすぐに消えてしまった。
そが、その行動がソラにある確信がわかった。

「はやり、あなたは瞬時に破壊する元素を選べるということですか」
「そうだが、それはどうした」

「つまり、一度に違う元素は破壊は出来ないということですね」

しかも、少し桐谷の服がこげているのもわかる。

それはつまり切り替えるときは少し時間がかかるということだ。

「そうだ。だが、俺には関係の無いことだ」

「まあ、そうですね」

確かに元素は一つしか破壊できない。

だが、共通する元素を破壊すれば問題は無い。

「んじゃ、そろそろ終わらせるか」

そう言って桐谷は右手をソラに向けた。

「な、なんですか？」

その時、ソラは何をされたかわかった。

「こ、これって」

「わかったようだな」

——僕の周りの酸素を破壊されている！！

今のソラには酸素が無い状態である。

これではもうしゃべることも出来ない。

「楽になれ。長門ソラ」

（だ、ダメだ。酸素が）

完全にソラの眼はうつろになってしまっている。

だが、その時ソラは回りのみんなの顔を見た。

みんな心配そうな顔をしている。

だが、それは自分を心配しているのか、ソラを心配しているのかはわからないがソラには一つの確信があった。

（僕が、あの人たちを心配させてしまった）

理由はどうあれ、ソラは自分が心配させたのだと良くわかった。

（僕が、僕が何とかしなければ！！）

桐谷はソラが死んでいることをまさにわかっている感じに後ろを向いた。

そして、香奈たちに近づいてくる。

「長門ソラは死んだ。次はお前らは」

その声にみんなビビッている。

秋たちはそれを聞いて悲しい顔をした。

「大丈夫です」

香奈が秋に言った。

もう、香奈たちはわかっていた。

ソラはまだ死んでいないことを。

「誰が、死んでいますって」

その時、桐谷の前に白い帯が姿を現した。

「逃がしはしません」

そのまま帯で桐谷を拘束した。

そして、桐谷の前にはソラの姿があった。

「き、貴様。いつの間にあの酸素の無い中で」

「簡単な話です。あなたのSIを少し理解しましたから」

「り、理解だと？」

「あなたのSIはその場所のみの発動しかしないものですよね。それが僕にとって本当に好都合でした」

ソラはあの時、もう一つの武器、デジタル・ベルト【電子ノ帯】を地面に放ち、そのまま空中に飛んだのだ。

帯はその時はばねのように使ったので簡単に飛ぶことが出来た。

「だが、そんな帯で人間を飛ばすことが」

「出来ますよ。デジタル・ベルト【電子ノ帯】には僕のSIを流し込んでいますから」

ソラの^{デジタル・ベルト}【電子ノ帯】いや、^{デジタル・バンド}【電子ノ腕輪】は完全に元素が無いものだ。

電子は元素ではない。

これ以上に敵対できる武器は無いだろう。

しかも、中の風も破壊できない。

これなら強化も簡単に出来る。

「さあ、ここからですよ」

「そういつことか。面白い」

その時、桐谷は力ずくで【デジタル・ベルト電子ノ帯】を破った。

「俺に、力がないとでも？」

「そういつことですか」

彼はあらかじめ多分このことをいつ起きてもおかしくないと思っていたのだろう。
ものすごい力だ。

「お前は、俺には勝てない。それは決まりだ」

「なら、その決まりを僕は破壊します」

「ふん！！」

そのとき、ソラに向かって一気に地面が盛り上がってきた。
しかもその先は棘のようになっていく。
ソラは風を使い、空中へ逃げる。

「空中か！！」

その瞬間、ソラの風がいきなり消えた。
風が破壊されたのだ。

「デジタル・ベルト 【ウィップ電子ノ帯・鞭】」

ソラはそのまま空中にいたまま帯で大きな鞭を作った。
そしてそのまま振り下げた。

しかし、さすがに距離が広がりすぎたのかすぐに避けられてしまった。

「やはり、この距離では」

空中から落ちていく中、ソラは手を握った。

いや、正確には帯を握っていた。

デジタル・ヘルト ウッド
「【電子ノ帯・木】」

ソラの手から根っこが生えるみたいに帯が少し太くなって桐谷に放たれた。

だが、地面を盛り上がらせて封じる。

「さて、そろそろ、終わりにしてやる。おい、長門ソラ」

「なんですか？」

「お前はこの世で一番人間に生きるために、いや、この世に必要な元素は何だと思う」

「それはですね」

その時、ソラは桐谷が何を何をしようにするのがわかった。

「まさか」

「そのまさかだ」

その言葉の後、ソラは大声で叫んだ。

「皆さん。今すぐにここから離れてください!!」

「もう遅い!!」

この世で一番使われて必要な元素。
その答えは水素（H）だ。

「場所はどこ全域、全員死ね!!」

桐谷の周りから誰からもわかるS.Iの大きな反応が出た。
そして、それは今から爆発するような感じだった。

「やめろ!!」

ソラのこの叫びは届かなかった。

第94章 NoBreak・女神の幕

水素。

それは確かに非金属元素だ。

だが、水素分子(H_2)に変化させて、さらには水素分子(H_2)に酸素(O)を加える。

それにより H_2O 、つまり、IUPAO組織名ではオキシダンが、そして慣用名は水となる。これはつま水を破壊すると言ってもいい。そして、人の体は95%が水といわれている。

つまり、この攻撃一発でここにいる人をすべて殺すことも可能になってしまうのだ。

「全員死ね!!」

桐谷の周りから大きなSI反応が広く発生した。

しかし、範囲が広すぎるのか破壊場所は遠いほど遅くなる。

だが逆に破壊は一瞬。

触れてしまったら一貫の終わりだ。

だが、ソラたちの後ろは逃げ道のない壁。

これでは逃げる事が出来ずにすぐに殺されてしまう。

「お願いします【風ノ破壊者】^{エアロ・ブレイカー}」

ソラは両手を前に広げて【風ノ破壊者】^{エアロ・ブレイカー}で対抗する。

だが、あまりにもSI反応によりまったく聞いていなかった。

「そんな」

ソラは肩を落とす。

このままでは、自分の弱さでみんなを巻き込んでしまうことにシヨックを受けてしまった。

（みんなを、みんなを守りたいのに、守れないなんて）

ソラは唇を強く噛んだ。

まるで血が出るくらいに強く。

——守りたい。守らなければ。

その時、ソラの左眼が少し勝手に動いた

ソラは強く思う。

気持ちがあふれ出るように。

「僕が守る！！守らなければなりません」

ソラは手を前にして【デジタル・ベルト電子ノ帯】を放つ準備をした。

今はこれでは対抗できない。

だが、【アブソリュート・ゼロ元素破壊】は目の前に迫っている。

——ソラ君！！

その刹那。

ソラは聞いたことがある声を聞いた。

「……し、詩音？」

その瞬間、【アブソリュート・ゼロ元素破壊】がソラたちを襲った。

すべてが遅かった。

ソラたちの回りの大きな煙が舞う。

それを見て桐谷は不適に笑う。

「お、俺の勝ちだ。長門ソラ!!」

桐谷は大声で叫ぶ。

その声は完全に自分の勝利を感じていた。

「誰の、勝ちですって？」

その時、どころしかソラの声が聞こえた。

そしてその場所はさっきまでソラがいた場所だった。

「僕は、僕らはまだ生きています」

その声が聞こえたときには煙がすべて消えていった。

そして、桐谷はありえないものを見たような顔をした。

「貴様、何だそれは」

桐谷は我慢できずに聞いた。

体が完全に引いている。

だが、桐谷が驚くのは無理は無い」。

何せあの攻撃で生きており、そしてあの姿。

ソラの今の状態は両手の【デジタル・バンド電脳子ノ腕輪】から透き通る白いオーラがみんなの前に包むこむ壁となっていた。

そして、ソラの左眼はあのとときと同じく、黒目の部分が赤色に変わっていた。

これは、覚醒だ。

それと同時に詩音が起きてきたのだ。

「綺麗」

秋たちとともにいた香奈がそうつぶやいた。
そのとき、香奈の言葉には誰もが共感した。
その白さは誰もが認めるほどの美しさだった。
まるで何もかも映されないように。

「し、死ね!!」

何が起こったのかまったくわからない桐谷はソラに向かってSIE
ネルギーを放った。
さっきまで威勢のよさはどこに行ったのか。

「行きますよ。詩音」

対してソラは詩音の名を呼びながら左手を前に出した。

「Lv3・【女神の幕】」
ガールズ・カーテン

ソラの左手の【デジタル・ベルト電子ノ帯】が放たれた。

「そんなもので俺の【アブソリュート・ゼロ元素破壊】が止められるものか!!」
「止めません。ただ」

ソラの言葉に何かの恐怖感を感じたのか、桐谷は相槌をした。

「ただ？」

「破壊するだけです」

「!!」

その瞬間、桐谷はわかった。
自分のSⅠがたった今破壊されたことに。
何があればただ一つ。

「お前、何だその力は？」

桐谷はにらみながら聞いた。
ソラはまったくそのにらみに反応せずに話をする。

「【女神の幕】^{ガレス・カーテン}。それは僕が望む形」
「ソラ君が望む形？」

香奈が小さな声で聞き返した。
ソラはその言葉が聞こえたみたいになづいた。

「この力は第二の【禁書目録】^{インデックス}。僕が思うことに詩音が反応してく
れて始めて発動する力」

ソラは覚醒している自分の左眼を触った。

「いま、この力は僕だけのものではなく、詩音とともにある力です」
左眼を触っていた腕をソラは思いっきり広げた。

「第二の【禁書目録】^{インデックス}」
「最強の力」

雫と楓が交互につぶやいた。

「さすがに限界というのはあります。たとえば」

ソラが説明しているとき、いきなり桐谷が瓦礫を手に持ちながらソラに襲い掛かってきた。

だがソラはそれを簡単に避けて、小さな風を当てる。

桐谷は後ろを何とか向いて避ける。

「たとえばですね、人を傷つける技は無いことですね」

この力は思いの力。

人を殺したくない気持ちがあるソラには人を殺すための技は作れないのだ。

「黙れ！！」

そういいながら桐谷は大きく【元素破壊】アフソリユート・ゼロを発動した。だが、ソラはものすごく冷静な眼をしていた。

「残念ながら、今の僕にはS Iは通用しません」

ソラは右手から帯を放つ。

その帯はさつきと同じく透き通る感じの白色だった。

「この帯は今僕が望みたい気持ちの一部。S Iの破壊です」

ソラはわかっていた。

この戦争も、魔獣の登場も、詩音と両親の死も。

すべてS Iが関連していたことだ。

「僕は決めました。すべてのこの世のS Iを破壊することを」

そう言ってソラは桐谷に近づく。

「今はただ、一時破壊ですが」

桐谷はソラに向かい大量の土の盛り込みで対抗する。

「いつかは必ず果たして見せます」

ソラは右手に風球を作った。

その大きさは先ほどには無い物だ。

桐谷はその大きさに驚いた。

もう、終わりだ。

「みんなを守るために」

第94章 終わり

第95章 目標

桐谷はそのまま倒れた。

その瞬間、回りの人たちによってこの場所が歓声で広がった。しかし、それと対照的にソラは少し悲しそうな顔をしていた。

「ソラ君」

そんなソラをみて香奈は近づいた。

「香奈。僕は決めました」

香奈が近づいてきたのを知ってソラはつぶやいた。声は表情とは違い、決意のある声だった。

「僕は、S Iを封印しようと思います」

「封印？」

「ええ」

ソラの言葉にみんな集まってきた。

香奈はソラが言っている意味がわからなかった。

「今、僕の状態はある意味願いが叶う状態だと思います」

ソラのLv3は第二の【禁書目録】インデックス。

彼の思いに詩音が叶えてくれるものだ。

それを考えればS Iをどうにかするのもたやすいことではない。

「でも、何で封印？」

優菜が聞く。

確かに封印ではなくてもいいと思う。

「ですが、破壊はただのその場しのぎです。でしたらやはり、封印するしか方法がありません。これは一生ものですから」

封印。

それは破壊よりももっとも有効な手段だ。

「だが、今はそれは無理だ」

その時、一人の少年が話しかけてきた。

「海」

「いいかソラ。良く聞け」

海は冷静にソラに言ってくる。

どうやらすぐに話をしなければならぬことらしい。

「今ここで封印するのは無理だ。理由はわかるな」

「ええ。ここでは今ここにあるS.Iのみしか封印できないと言つてとでしょう」

海の言葉にソラはすぐに答える。

海はうなずいたあと、さらに話を続ける。

「すべて封印するには一番高い場所で封印するしかない」

「って、ことはやはりあの場所ですか」

「そういうことだ」

ソラと海が言っているのは科学都市で一番高い塔、エンペラータワーだ。

科学都市の中心で経っているこの塔はすべての科学都市を見ることが可能だ。

高さは350メートルを超える。

「ですが、その様子だと簡単にはいけないようですね」

「ああ。理由は簡単だ。あの塔の頂上でこの戦争をけしかけた人物がいる」

その言葉にソラは真剣な眼になった。

つまり、この男でこの戦争が、たくさんの人や居場所が失ったのだ。

「名は神山鳳凰^{かみやまほうおう}。俺がさっき倒したS I使いから名を聞いた。だが」
「だが？」

海の言葉から少し悲しそうな声が聞こえた。

しかし、ほかのS I使いとやはり戦っていたのか。

「そいつの能力がよくわからないのだ」

「つまり、その人も知らなかったと」

「うそかわからんがな」

「いいえ。逆に安心しました」

ソラの言葉は海を驚かせた。

知らないことが安心。

さっぱり意味がわからない。

「知らないというのが逆にリアルです。知っているほうがダミーの

可能性があります」

「なるほどな」

ソラの言葉に海は理解した。

つまり、知らないイコール可能性が生まれる。

その人がいる場所に行けば必ずこの戦いがわかる。

「話はおわりですか？」

香奈はソラの近くにより、聞いてきた。

ソラは振り向いてうなづく。

「だったら話は簡単だな」

こっちに合流してきたゆうが言うてくる。

この時みんなソラのある言葉を待ち望んでいた。

「ええ。そうだとしたら話は簡単です」

ソラの声がだんだん大きくなる」

「エンペラータワーに突撃です。これですべてを終わらせます！！
！！」

今までに無い大きさをソラは怒鳴った。

そのあと、回りにいる人が全員歓声を上げた。

その歓声はS I使いでない人の声も混じっていた。

「ねえ。ソラ君」

歓声が響いている中、あゆが一枚のパーカーを持ってきた。

「これを着てつてかえちゃんが」

「かえちゃん」

ソラは楓を見た。

楓は顔を赤くしていた。

その時、ソラは初めてあることを知った。

「ありがとうございます」

ソラはあゆに渡されたパーカーを着た。

パーカーの色は黒を主体としていて赤の線がかっこよく印されている。

「香奈」

「はい」

香奈は持っていた刀、春風をソラに渡した。
準備は万端だ。

「ソラ君。私も一緒に行きたいです」

「か、香奈」

その時、香奈がいきなりソラに言ってきた。
この言葉が香奈の初めての主張だった。

「けが人はすべて治しました。ですから」

「で、ですが」

「いいじゃないか兄ちゃん」

一人筋肉質の男が言ってきた。
ほかの人もうなずいている。

「あなたたちは」

「姉ちゃんに怪我を治してもらった人だ」

男の言葉にみんなうなずいていた。
どうやら本当のことらしい。
いや、こんなときにうそをつく人はいない。

「姉ちゃんが兄ちゃんについていきたいのはわかるだろ。俺たちも
そうだ。力があるうちに人の役にたきたいんだよ」

「香奈？」

ソラはまた香奈に視線を向ける。

香奈は顔を赤くしながらうなずく。

その顔を見てソラはわかったような顔をした。

「わかりました。いいですよ香奈」

「ソラ君」

ソラの言葉に香奈の顔が明るくなる。
ものすごくかわいい。

「ですから、必ず僕についてきてくださいね。それが条件です」
「はい。必ず」

香奈はうなずく。

ソラはそんな香奈を爽やかに見る。

香奈も笑顔でソラを見直す。

「なんか、いい雰囲気ですね」

その時、ソラの背中になにか上品な殺気を感じた。

「あ、朱里さん？」

振り向いた先には朱里がものすごい怒りのオーラを出しながらいた。そのほかにも後ろに何人にかソラに恋心を持つ少女たちがいた。

「ソン君」

「ソラ君」

「ソラさん」

何人かの声が重なる。

「大丈夫ですよ」

その時、ソラは朱里と優菜の肩を軽くポンツと叩いた。

「みんないなければいけません。みんな生きて帰ってきましょう」

その言葉にみんなの殺気が無くなった。

「どうやら、準備は出来たようね」

楓の言葉にソラはうなずく。

「ソラ」

「ええ」

海の言葉にソラは歩き出す。
そして、ある壁の前に立つ。
右から海、ソラ、ゆうの順番にいる。

「〽空間を破壊する剣よ、」

先にゆうが詠唱を唱えた。
同時に剣がの刃が大きくなった。

「その一太刀に思いをいれ一閃せよ」

ゆうの【空間ノ剣】スペシャル・ソードが今までに無い大きさとなった。

「くうかんせつだんせんけん【空間切断閃剣】！！」

ゆうは思いつきり剣を下に下ろして壁を壊し始めた。

「〽七つの満月よ我を囲め」

次に海が詠唱を唱え始めた。

その言葉のとおり海のまわりの満月の形の球が囲みだした。

「その力を一つにし切断せよ！！」

7つの満月は朧月夜の先につながり、さらに巨大化する。

「【一七月・連結満月剣〽ななつき・れんけつまんげつけん】！！」

ゆうと同じく海も朧月夜を壁へ叩き落した。

「風よ、僕の刀に集まれ」

ソラは詠唱せずにそのまま言葉を放った。
そして、赤い風がソラの刀、春風に集まった。

「一気に破壊します。【第五拔刀術・風集武装・」

ソラは例の拔刀術の構えをした。
さらに風が集まる。

「剛砲破剣」

拔刀した瞬間、刀は壁を襲う。

第95章終わり

第96章 向かう先の団結

壁が一気に壊されて、全員走る準備をしていた。

「突撃よ！！」

その瞬間、楓の一言により、周りにいるSⅠ使いが一気に走り出した。

今ここにはソラたち以外にもたくさんの人がいる。

その人たちは全員楓が動かしてくれた。

そこはソラではなく、年上の楓のほうに威厳がある。

「ソラ。これ持っていけ」

ソラも走ろうとしたとき、熊田が何かを投げ出した。

受け取ったとき、ずっしりと重くってなにかベルと見たいのが着いていた。

「これって、拳銃ですか？」

「長門ソラ専用に作ってもらったものだいざと言うときに使ってくれ」

その拳銃は黒と赤の色をしていてSORAと印されていた。
これで完全にソラ専用だとわかる。

「ありがとうございます。熊田さん！！」

ベルトを腰につけて熊田にお礼を言ってから走り出した。
香奈たちもソラについていく。

「やれ、ゾンビども」

その時、いきなり大きいゾンビがたくさん現れた。
これは例の人のS Iだ。

「比田井、瑞夫さん。あなたはなんでここに」

「俺の能力を忘れたかぎゃ、星空」

「やはりお前か」

そして、もう一人、【亡霊】^{ゴースト}の使い手の飯田がその場にいた。
彼の能力によりロープをすり抜けてきたのだ。

「お前は必ず俺が殺す！！」

「もう一回気絶させてやる」

「ゆう。僕が道を作ります」

ソラがそう言った後、2人でアイコンタクトをした。
そのあと、ソラは後ろを向いて女子たちともアイコンタクトをした。
そして、ゆうは横に避けてソラが前に来た。
今のソラは覚醒している。

「すべて破壊します。【Lv2・世界破壊】^{ワールドブレイク}」

ソラがそう言ったとき、周りに小さい円盤がたくさん飛んでいた。
これが【世界破壊】^{ワールドブレイク}の真の力。

確かにこの力は世界系のS Iを破壊するものである。

だが、Lv3の登場により、世界系以外のS Iも破壊可能になった。
しかも、形も自分で変えられるようになったのだ。

これは対多数のためのものだ。

「道を、空けてもらいます」

ソラの回りの小さい輪が一気に大量のゾンビを切り裂いた、
そしてそのゾンビどもは次々に消えていく。

まるで幻想世界を破壊する力である。

その名も、ワールド・ブレイク【世界破壊】そのものである。

「な、お前なんだその力は」

「なんなら僕が」

「お前は海と戦ったやつだな」

ソラの目の前に現れたのは海と戦った穂書というやつだ。

彼は海を覚醒まで追い込んだつわものだ。

「僕のペーパー・マジシャン【紙ノ魔術師】の前には敵は無い」

「邪魔です」

穂書が紙をばら撒いたとき、一気にその紙は空中へ舞い上がった。

「食われる第八抜刀術」

ソラは春風を逆手に構えた。

そして、この番号は始めてものだ。

「じゅうほうふうは【竜咆哮風破】」

ソラが抜刀した瞬間、龍の形をした風の咆哮が一気に穂書に向かって放たれた。

穂書はあわてて防御する。

だが、防御させるのがソラの作戦だ。

「ワールド・ブレイク
【世界破壊】」

その隙にソラは後ろを取ってそのまま拳で大きな輪を穂書に向けてぶん殴った。

その瞬間、穂書の周りのものがいきなり破壊された。

「やはり、S Iを使った鎧ですか」

その時、穂書の眼には龍のような殺気を放つソラだった。

「第三抜刀術【竜行破刀】りゅうぎんはやう」

そして、横に穂書を切り去った。

「ゆう。今です」

「待っていたぜ!!」

ソラの言葉のあと、ゆうが飛び、前線にたった。
同時にソラが拳を構える。

「へ我に従う空間の玉よ、黒を持って悪を征せ」
「Lv2」

ゆうは剣をさすように構え、ソラは自分の足元に輪リングを発生させた。
この状態はソラの回りの破壊となる。
これならば避けられる可能性は低くなる。

「逃がしはしません【世界破壊】ワールド・ブレイク」

「スベイシャル・デスボール
【黒球ノ青空間】！！」

ソラが地面を殴ったとき、回りのゾンビが破壊されたのと同時に飯田のS Iも破壊された。

ゆうは空中にいるために破壊されない。

ゆうの攻撃は見事に飯田に当たった。

そのまま飯田は気絶した。

そして、ソラは瑞夫に速攻で近づいた。

「あなたにはもう一回この攻撃が必要ですね。第四抜刀術」

ソラの攻撃はこの男に最後に当てたあの攻撃だ。

瑞夫にはあのときの恐怖がよみがえる。

「禁忌、くうらんとう【空乱刀】」

ソラの刀から無数の刃がゾンビごと瑞夫を切り去った。

「あいつらはどうする？」

「あの人たちは警察に任せましょう。僕たちは先に進みましょう。
優菜」

「準備は出来ているわよ」

ソラが優菜の名を呼んだとき、前にいた優菜が返事をした。

彼女は先に海たちとともに先に行っていたのだ。

もちろん目的はS Iの準備だ。

「そろそろくるぞ」

海が何かくるのを知っているように言った。

その瞬間、恐竜型の魔獣が一気に口から炎を吐いてきた。

「そうはさせないわよ【線ノ盾】ライン・シールド」

優菜はその炎にたいして巨大な透明な盾で防ぐ。

魔獣の攻撃はソラは破壊することが出来ない。

「任せてください。ソラさん」

「わかりました」

朱里に言われてソラは一気に朱里を風で空中に運ばせた。

そして朱里は近くの土台になるもの上に乗った。

そして、自分で持っていた電気をためていた機械を取り出す。

そしてその電気を使い、少しでかいビーム砲を作り出した。

「支えと強化は任せてください」

「はい。狙う待ちます」

朱里の後ろから風が押し出される、。

これはソラの風だ。

そしてそのまま引き金を引いた。

銃先からはいつもより強力なビームとその回りには赤い風が纏っていた。

これこそが朱里とソラの協力攻撃だ。

「『【雷電風激砲】らいでんふうげきほう」」

ビームが魔獣に直撃したとき、赤い風が一気に舞い上がりまわりに

いる魔獣を一掃した。

「まだまだいますね」

ソラはまだいる魔獣を左眼で確認した。
結構な数がある。

「それなら話は簡単だな」

その時、たくましい声が後ろに聞こえた。

「レンジさん」

「お前たちは先に行け、ここは俺たちが食い止める」
「ですが」

「友だちの話は聞こうよ」

その時、また知っている声が聞こえた。

「透」

「僕は君のためにここにきた。だから、行って」

彼もまたソラによってすくわれた人間である。

「及川海、星空ゆう、倉田朱里、窓辺雫、冬野雪、大木優菜。そして蒼希香奈と長門ソラはさっさと先に行け」

竜司は叫んだ。

まるでそれ以外のメンバーはここに残ると言っているみたいに。

「お供します。ソラさん」

「俺もついていくぜ」

そして、美穂と炎治も言っ て来た。

「みんな。……ありがとうございます!!」

ソラは心からお礼を言っ てダッシュした。
みんな無言で付いていった。
だが。前には魔獣がまだ先にいる。

「第八拔刀術、【竜咆哮風破】」

龍の風砲が魔獣を襲う。

そしてそのまま真っ直ぐ走り出す。

「だははは。長門ソラ。ここは俺がおさな」

男が自信満々に言っ てきた。

だが、ソラたちはもちろん聞く耳は無い。

男が言い終わる前にソラとゆうが顔面を思いっきり踏んだ。

「「邪魔^{です}!!」」

この10人でエンペラータワーに向かった。

第96章

第97章 それぞれの戦い・畏

ソラたちは進んでいた。

もう向かつてくるのはアンドロイド軍団のみだ。

そしてやっとエンペラータワーのふもとまで来た。

「これが入り口ですか。ゆう、お願いします」

「派手に壊していいんだな」

ゆうの言葉にソラはうなずいた。

それがわかったとき、ゆうはニヤリと笑った。

「それじゃあお構いなく」

ゆうはSⅠの剣、【空間ノ剣】スベイシャル・ソードを構えた。

そして一気に叫んで壁を切り裂いた。

剣から出てきた青い破壊の空間が壁を食うようになくなる。

前までのソラなら慎重になってこの塔に侵入するだろう。

だがそれは自分たちの正体を知らない相手にやるもの。

この状況でその手は使えない。

ならば正々堂々と正面突破だ。

「行きますよ」

ソラの一言により残りの8人は一斉に入った。

中に全員入ったときソラはなにを見たような顔をした。

「みんな、上です!!」

ソラがそう言った瞬間、いきなり上から壁が横に落ちてきた。みんな前と後ろに下がった。

壁は見事に出口と上に進む階段と分かれてしまった。

出口側にいるのはゆうと炎治だ。

男子は女子を優先して前に進んでいたので遅れてしまったのだ。

ソラは早く反応したのと足が速いのですぐに前にこれた。

海も結構足が速い。

「ゆう、炎治。近くに強力なS I反応が」

「ま、マジかよ」

その声に反応した炎治は驚くように答えた。

さらに最悪な状況がソラの左眼に映った。

「アンドロイド軍団も一緒にいます。どうやら大群で襲ってきたようですね」

ソラはさらに状況を説明する。

たった2人でどうかなるものなのか。

「ソラ。お前たちは先に行け。ここは俺たちが相手する」

「で、ですが」

「安心しろ。俺だって伝説の眼を持っているんだぜ」

そのことを言われたらソラは何も言えない。

みんなもなにもソラには言わなかった。

「では、お願いします」

ソラは思った。

今の自分は仲間を完全に信じてはいてなかったかも知れなかったことを。

「ソラ君」

「大丈夫です。信じましょう、ゆうと炎治を、仲間を」

その言葉にみんなうなずいた。
今はそれしか道が無いのだから。

ソラたちが階段を駆け上がり始めたとき、ゆうたちはアンドロイド軍団と一人のS.I.使いと遭遇した。

「炎治。回りのザコは頼んだぞ」

「ああ、そうさせてもらう」

そう言ってゆうは一步前を出す。

「お前が俺の相手か。ただの餓鬼じゃねえか」

「ただの餓鬼だと思ってるなよ」

そう言ってゆうは顔を上げる。

その両目には黒い瞳の変わりに青の瞳しか映らなかった。

ゆうはすでに覚醒を覚えていたのだ。

「後悔するぞ」

ソラたちは階段を駆け上がっていた。

だが、更なる恐怖がソラたちを襲った。

「おかしいですね。なんだか変な音がする」
「海」

海がいきなりそう言ってきたのでソラは左眼の天眼で確認した。

「か、階段が」

ソラが確認したのはものすごい勢いで崩れていく階段だった。
しかもものすごく早い。

「皆さん、走ってください」

ソラのこの一言により、みんな走り出した。
だが、逃げ切るのは難しいそうだ。

「無理やりですやってみますか」

ソラが決心したとき、回りから風が吹き出した。
だが、これはいまやるべきことではない。

ソラのS I、エアロ・プレイヤー【風ノ破壊者】は室内では特に密室ではものすごく不利なS Iだ。
基本、エアロ・プレイヤー【風ノ破壊者】はエアクトロマスター【風ノ達人】、風を操るS Iである。

しかも、その風は自然にあるのを利用するのだ。

そのおかげで人の体力、ソラは回数を節約できるのだ。

最近ソラのS Iの使用回数が増えたのはほんのちよつとだけだ。
実際にはこの自然の風を使用できることに気づいただけなのだ。

なので、実際には密室のここではソラ的能力は不利、しかもここで

何をするかと言えばあれしかない。

「みなさん、舌を嚙まないようにお願いします」

ソラの回りから大きな風が吹き荒れた。

そのことによつてみんなを風で押し出した。

しかもソラもその風を利用してさらに速く進む。

だが、その分、ソラのS Iの使用回数が減っていく。

しかし、この状況ではなりふり構つて入られない。

なんとか次の階の床を見つけた。

だが、ここで問題が発生した。

このままではみんなおろしたら大怪我をしてしまう。

普通の速さならいいのだが、この今はそんな速さではない。

ここで風を止めたら反動でみんなを吹っ飛ばしてしまう。

「ソラ君、任せて」

ソラが悩んだ顔をしていたとき、いきなり香奈がそう言ってきた。

だが、この状況。

香奈を信じるしかない。

「行きます」

香奈の手元からいきなり輝き出した。

そしてそのままその輝きは大きくなり、移動しはじめた。

さらにその輝きはみんなを包みこんだ。

「みなさんは、私が守ります」

そしてその輝きはゆっくりと地面を着いた。
そのあと、輝きは消えていった。

「香奈。この力は」

「最近ですけど、どうやら私は傷を治すだけでもなかったみたいで
す」

ソラはそのことに感心した。

やはりみんな一人一人強くなっている。
それは香奈だけではない。

「ソラさん。気をつけてください」

「美穂ちゃん？」

その時、いきなり美穂がソラに言ってきた。

「この回りに強力な電磁波を感じます。詳しい確認を」

「ええ」

美穂のS I、エレクトロマスター【電気ノ達人】は自ら電磁を放っているので同時に回
りの電磁を感じることが出来るのだ。

「いいえ。ここには誰もいませんが」

ソラがそう言ったとき、いきなりソラの左眼がS Iを反応した。
しかもこの部屋全体からだ。

「まさか、罠！！」

ソラはあることに反応した。

しかもこれは結構強力だ。

「美穂ちゃん、地面を使ってください。ほかの皆さんは飛んでください」

ソラに言われて美穂以外ジャンプした。

美穂はソラに言われたとおり地面を使って電気を流した。

「ギャアアアアン!!」

その瞬間、いきなり地面を泳いでいたみたいな鮫が苦しみながら出てきた。

どうやら予想は当たったみたいだ。

みんなが地面に着いたとき美穂も電気を止める。

「これって一体」

「どうやらSⅠ使いが近くにいますね」

「どうするソラ」

「早く行きましょう。長居は無用です」

「では、私は残らせてもらいます」

「み、美穂ちゃん!？」

美穂の言葉にソラは驚いた。

いきなり自ら残ると言い出したのだから。

「このまま逃げても同じだと思います。でしたら私は残ります」

「では、私も」

「朱里まで」

この会話をしていたら朱里も言うてきた。

「私と美穂さんのS Iは合性がいいですなので私も一緒に行きます」

その言葉を聴いたとき、ソラの顔に迷いが消えた。

「それならわかりました。僕は君たち2人を信じます」

この言葉を聴いて2人はうれしい顔をした。

そしてみんなわかっていたみたいすでに次の階段に向かっていた。
だが、その時、さつきとは違う鮫が出てきたのだ。
だが、出てきたのは一瞬だった。

「早く言ってください」

朱里が銃を持って叫んだ。

さつきの鮫は朱里の攻撃で倒れたのだ。

みんなは無言でうなずいて走り出した。

「さて、どこからでも」

「かかってきてください」

第97章続く

第97章 それぞれの戦い・2色の激突

そのころゆうたちはまだふもとで戦っていた。

「燃えろおおお！！」

フレイトロマスター

【炎ノ達人】の炎治は手から出てきた炎を一気に回りにばら撒いた。そして回りにいるアンドロイド軍団を一気に燃やした。だが、まだ減る様子は無い。

「ゆう、こっちにはまだまだいるぞ！！」

炎治が叫んだ相手はS I使いと戦っているゆうだった。

「死ね、侵入者！！」

男の周りからいきなり地面が針の形をなり現れた。ゆうは空間の球を作り上空へ逃げる。

「地面からの攻撃は俺には通じないぜ」

ゆうはソラほどではないが空中で戦うことが出来る。これで男の攻撃は通じないはずだ。

「空中にいただけが俺に勝てると思うのか！？」

男が叫んだとき、地面から出てくる針がさらにでかくなる。そしてそのままゆうを捕らえようとしている。だがゆうは次々に空間の球に乗り移り男の攻撃を避け続ける。

「くそ、俺のS I【グラウンド・コントロール地面を支配するもの】が軽くあしらわれるだど」
「お前では、俺には勝てない」

そう言つてゆうは自分の高さまで来て土の針を空間の刃を出して切り裂いた。

「へ我に従う空間の玉よ、黒を持って悪を征せ」

地面に落ちていく中、ゆうは詠唱を唱え始めた。
もちろん男はその瞬間を見逃さなかった。

「隙ありすぎだぜ餓鬼!!」

だが、ゆうはそのことを考えていたのか、土の針がゆうに当たる前に詠唱を唱え終わった。

次の瞬間、土の針が青と黒の空間球に破壊された。

「へ空間を従い、分身となる刃よ、」

そしてさらに詠唱を唱え始めた。

もちろんそのことを見逃す男はここにはいない。

だが、ゆうの回りにはさっきの技の空間球が残っている。

普通、詠唱を唱えたら前に放った詠唱術は消えるのだ。

だが、今のゆうの術は消えていない。

これこそがゆうの覚醒の能力、術の上書きだ。

詠唱術を消えることなく打ち続けることが出来るものだ。

これでゆうの得意の詠唱術が生かされる。

詠唱を唱えているとき、ゆうの剣がまるで2本増えてきたように見えてきた。

「相手を惑わし破壊せよ」――」

そして言い終わったとき、すでにゆうの剣の近くには浮いている更なる刃があった。

そして、空間球を踏み台にして一気に男に向かった。

「【幻剣・三双剣】さんそつけん」

だが、この攻撃は土から出てきた壁によって防ぎられた。

「貴様、これ以上の侮辱は許さんぞ」

「――」

ゆうは男のこの顔に何かの殺気をさらに強く感じて後ろに下がった。そしてなにか地面が震えている感じがした。そのことにゆうはあることを思い出した。

この男のSIは【グラウンド・コントロール地面を支配するもの】。

つまり地面で行われる自然現象も発生することも出来る。

――あいつ、地震を起こす気か――

ゆうは男の何をするかはつきりわかった。

地震、それは人類がもつとも恐怖している自然現象だ。そしてそのことによって地割れも起こすことが出来る。

「空間をゆがみ、わが意思に従え」

そんなことさせるかと言わんばかりにゆうは詠唱を唱える。

「ビジョンズホール【幻想空間】！！」

ゆうは剣をさして男と一緒にある空間を包みこんだ。

この空間、ビジョンズホール【幻想空間】はこの中にあるものの動きを遅らせるものだ。

それは人間だけではなく自然現象もそうだ。

いつもどおり動けるのは空間のみだ。

そしてゆうはその空間を操る。

「わが周りに有する空間よ、わが力を吸い取り、爆破せよ」

動きが遅れていることをいいことにゆうは詠唱を唱えた。

しかも、いつもと違い長い。

もちろんこの空間は消えない。

「くっかんたいげきはばく【空間大撃破爆】！！」

次の瞬間、この空間が更なる空間に包み込まれた。

そしてその新たな空間をどんどん縮みこんでいつて男をだけを包み込む。

さらにはそれだけではなく、男の周りに6個ぐらいの空間が球が現れた。

「さあ、爆発しろ！！」

ゆうのその一言により一気に男の周りと包みこんだ空間が一気に爆破した。

それと同時にゆうの技がすべて消えた。

「これで終わりだ」

煙を背にしてゆうは言った。

だが、これで終わりではない。

まだアンドロイド軍団がいる。

—ゴソッ

その時、煙元から何かの音が聞こえた。

まるで何かを取りだ音だ。

「終わるのはお前らも一緒だ」

煙の中から男はそう言った後、手元にあるボタンを押した。その瞬間、アンドロイドたちの体が光りだした。それが何の光なのかゆうはすぐに理解した。

「炎治！！今すぐにここから離れろ！！」

だが、もうすでに時は遅し。

次の瞬間、この場はアンドロイドたちの爆発が包みこんだ。

朱里と美穂はただいま地面から出てくる鮫を撃退していた。電気を発生する美穂と、その電気を使用する朱里。

この2人のコンビはものすごく合性がいい。
だが、この数は本当に答える。

「本当に使い手を見つけないければ意味がありませんね」

「朱里さん。でもソラさんみたいに探す能力は私たちにはありません」

「ですがこのままではなんにもできません。私が何とかします」

朱里の言葉に美穂はうなづく。

「では、任せます」

そついわれて朱里は急いでその場を調べる。

（この鮫を操るには私たちの姿を確認する必要があります）

——って、ことはこの場に必ず使い手がいる。

朱里はそのことを前提に回りの壁を調べることにした。

ソラたちはまた階段を上り始めた。

この階段はまったく崩れてこない。

そのことでソラは何かの違和感を感じていた。

「なにか、静か過ぎますね」

「はい。わざと静かにしている感じですね」

ソラの言葉に香奈はうなづくながら言った。

確かに侵入者がいるのにまったく敵が現れない。
まるでソラたちをおびき出そうとしているみたいに。

「だが、止まるわけには行かないな」
「そうですね」

だがソラたちはこのまま進まなければならない。
出なければこの戦いを終わらせることが出来ない。

「ん、止まれ」

海が先に着いたとき、いきなりみんなに言ってきた。
まるで何かがいるみたいだ。

「海？」
「ソラ。お前たちは先に行け」
「え？」

それを聞いてソラはその海の広いところをみる。
そこには一人の男がいた。

「あいつは俺が相手する」
「海」
「後は頼んだぞ」

ソラは無言でうなずいた。
もう、ソラには迷いが無かった。
信じることに、それは任せることにもあるのだとわかっているのだ。
香奈たちもソラについていく。
男はソラたちを完全に無視してその場に立っていた。

「おいおい、ずいぶん親切だなおっさん」

「なに、簡単なことだ。この俺、椎^{しいな}名^な勤^{とむ}は長門ソラを止めるなど言われている」

「そういうことが」

つまり、こいつらのボスはソラを誘い込んでいるのだ。

「だが、貴様はこれ以上進ませない」

「それは結構なことだ」

海は自分の両目を手で隠した。

「だが、お前では俺を」

そう言っ海は手を眼から離す。

そしてその眼は完全に緑となっていて覚醒していた。

「殺すどころかとめることも出来ない」

第97章続く

第97章 それぞれの戦い・緑の朧月夜

海は「ヴェイク・ムーン朧月夜」を発動した。

同時に男は壁際にある刀を取って鞘から抜く。
どうやら椎名も武器を扱うようだ。

「刀か。それで俺を殺すとしても」

「これはただの武器だ。お前を殺すのは俺のS.Iだ」
「そうか」

そう言つて海は椎名に向かってダッシュする。
覚醒している分、いつもより早い。

そのまま朧月夜をたくみに振り回して椎名を襲つ。

椎名は冷静に刀で受け止めて回避する。

どうやら刀を使うことは本気で出来るようだ。

海はそのことを知ったのか後ろに下がり先方を変える。

海は手を上げて朧月夜を回る。

回転が増すほどさらに緑色の光が大きくなる。

「行くぜ」

その瞬間、朧月夜から数個の刃が飛び出した。

しかもその速さはものすごく早く足で避けることは出来ない。

「なるほど、そういうことか」

椎名はわかったように刀を振る。

その瞬間、海の朧月夜の刃がいきなり氷の山に閉じ込められた。この氷の山は椎名が刀を降ったときに出てきた。つまり、椎名のS Iと考えてもいい。

「氷か。ならこれはどうだ」

海はさらに朧月夜をまわす。

そして朧月夜の先端にはさらに大きな刃が出来た。そしてまた椎名に向かってダッシュした。

次は接近戦に持ち込む気だ。

「さっき接近戦はあきらめたんじゃないのか？」

「方法の一つじゃない。そういうことだ」

椎名の刀と海の朧月夜がぶつかった。

その反動で同時に両者一步下がる。

だが、また両者ひるむことなくまたぶつかり合った。

しかし海は同じことをする気は無い。

ぶつかったときに朧月夜を滑らすように刀を利用して反対の刃で椎名の首を狙った。

椎名はそのことをあらかじめ知っていたのか顔を下げて避ける。

椎名は軽くなった刀を次は海の腹を狙って横に振りかぶった。

海は朧月夜を回して受け止める。

それが何回も繰り返される。

「ち、仕方ないな」

そう言って椎名は刀を朧月夜にわざとぶつける。

そして次の瞬間、朧月夜が刀が当たっているところから次々に凍っ

てきた。

「やっとか」

海はそう言ってまた一步後ろに下がった。
そして海は凍った朧月夜を触った。

「くっ!!」

その時、海は手になにかしびれた感覚が来た。
しかもこの痺れは凍っているものではない。

「これは電氣か」

「当たり前だ」

海は当たり前のことを聞く。
もちろんと椎名は答える。

「って、ことは【氷の落雷】アイス・ボルテックスか。実際は小さい氷がぶつかり合って
電氣が発生するものだな」アイス・トロマスター

「まあ、それだとただの【氷ノ達人】だ。俺の氷は電氣を発生する
ことが出来る」

「やはりか」

つまり、この男の攻撃は一瞬の死をもたらすことが出来る。

「では、知ったところで、死んでもらおうか!!」

椎名の周りからだんだん地面から凍っていった。
もちろんその氷も電氣が通っている。

「死ね！！」

「やはり、その程度の能力か」

そして海に大きな氷の針が放たれた。

その大きさは海を越える。

それに対して海は冷静に朧月夜を前に出してまわし始める。

「朧に醒めろ」

海がそう言ったとき目の前に来た氷はいきなり破壊された。
白い空気が海を隠す。

そして次の瞬間、緑色の小さい満月が4つ海の回りに浮いている。

「月夜に踊れ」

そして、朧月夜の先端が緑の刃だけではなく、鎌のようになってい
る。

その形は月そのものだ。

「これが、朧月夜の真の姿だ！！」

海は朧月夜を回して構える。

その姿は月夜の朧に隠れる死神だ。

「命を刈り取る」

+

そして次の瞬間、その場から一気に椎名に近づいた。

その速さはまるでソラの風進だ。

「くそ!!」

椎名は地面に凍った氷をすべって後ろに下がる。

そして自分がいる場所以外の氷を一気に電気を発生させた。
今の海の足元には氷が敷かれている。

「次こそ死ね」

さらには海の頭上には小さい氷がまさにぶつかろうとしている。
これはさっき海が言っていたことの実用化である。

「氷は小さいものどうし叩き合って電気を作り出す!!」

その破壊の電気と、速さの電気を組み合わせることによって超電磁
砲、つまりレールガンを作り出すことも出来る。

下の電気と頭上の超電磁砲。

さらには椎名が操作した氷。

まさに海の逃げ場はその場には無かった。

だが、海は負けたような眼はしていない。

「死ねええええええ!!」

一気に全方向から電気砲が発射された。

白と灰色の煙がこの部屋を包む、。

だが、次の瞬間。

煙の一部が何かのものによって消えていく。

「そんなものか」

煙がさらに消えたとき、海の回りにはさらに小さい満月が増えて海の周りにタワーとなっている。

中心には海が朧月夜を上に向けて回している。

「な、なに！？」

今の攻撃がすべて決まっただと思っていた椎名はものすごく驚いていた。

「満月の夜よ、我が包み込む一つの天に向かう柱となれ。」

海は詠唱を唱え始めた。

しかも今までで一番長い詠唱だ。

海言葉に反応するように満月は回り始める。

「月よ、我が力を与える武器となり更なる力を増幅せよ」

さらに海の詠唱は続く。

朧月夜の刃はさらにでかくなる。

その大きさは海と変わらない。

「夜ににじむ光とともに我にすべてを与える！！！！」

満月はさらにこの部屋をすべてに散らばった。

まるで椎名の逃げ道をふざぐように。

その瞬間、椎名は最後に海の姿を見た。

「まんげつらんつきかまや
【満月乱月鎌夜】！！」

次の瞬間、満月は破裂して無の空間が出来た。
その空間は完全なる緑一色だ。

「朧月夜に眠れ」

海は朧月夜を振るった。

とうとう5人になってしまったソラたちは立ち止らずに階段を駆け上がる。

「ソラ君。提案があるのだけど」
「なんですか？」

雫の言葉にソラは振り向くことなく聞き返す。
そのことに対しては雫はなにも言わずに言葉を続ける。

「次の階に敵がいれば、それは私と雪ちゃんに任せてほしいの」
「それはどういうことですか？」

ソラは問う。
いきなりのことだがまったく動揺していない。

「簡単な話だよソン君」
「私たちはね、あなたたちにすべてを託すだけよ」
「私たちに？」

雪と雫の言葉に優菜が問う。

香奈もその言葉に驚いている。

「最後は、ソラ君、香奈ちゃん、優菜ちゃんにすべてを任すことよ」「なに、私たちのコンビはさっきまでのコンビよりも最高のコンビだからね。それはS Iだけじゃなくって今までいた月日と出会いもね」

ソラは考えていた。

確かに雫と雪はソラとは同じ事件で出会った。

そして誰よりも一緒に戦っていた。

それは信用できるほどに。

ソラの顔にはまったく心配や迷いは無かった。

「では、よろしくお願いします」

「うん」

「任せて」

そしてソラたちはいまここで更なる思い荷物を持つことになる。だが、今のソラたちには翼当然のものだ。

第97章続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8221q/>

RAIF

2011年11月6日00時36分発行